一般国道９号（仁摩温泉津道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書５

庵寺古墳群Ⅱ　大迫ツリ遺跡　小釜野遺跡

庵寺古墳群Ⅱ
大迫ツリ遺跡
小釜野遺跡

一般国道９号(仁摩温泉津道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書５

二〇一四年三月

国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会

２０１４年3月
国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会

庵寺古墳群遠景（南東から）

庵寺古墳群遠景（北東から）

庵寺古墳群　９号墳第１主体部

庵寺古墳群　22 号墳第 1 主体部

庵寺古墳群　古墳出土遺物

大迫ツリ遺跡　1 号採掘坑

大迫ツリ遺跡　線刻画群

序

現在、一般国道９号線の大田市仁摩町～温泉津町間は、防災対策が必要な箇所が多数あり、交通の難所（急カーブ・狭小トンネル）となっています。そのため、中国地方整備局松江国道事務所では、仁摩温泉津道路の整備を平成 16 年度から事業化し整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、道路建設地内にある遺跡について島根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

本報告書は、平成 23 年度から同 24 年度に実施した大田市仁摩町大国地内に所在する庵寺古墳群と同市温泉津町福波地内に所在する大迫ツリ遺跡及び小釜野遺跡の発掘調査成果をとりまとめたものです。本報告書がふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後に、当所の道路整備事業にご理解、ご支援をいただき、本埋蔵文化財発掘調査及び調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深く感謝いたします。

平成２６年３月

国土交通省中国地方整備局

松江国道事務所長　新田恭士

序

島根県教育委員会では、国土交通省中国地方整備局から委託を受けて、平成 17 年度から一般国道９号仁摩温泉津道路予定地内の埋蔵文化財調査を実施しています。本報告書はこのうち平成 23 年度から平成 24 年度に実施した庵寺古墳群と大迫ツリ遺跡及び小釜野遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

これらの遺跡は大田市の西側、仁摩町から温泉津町にかけての海に程近い丘陵地に立地しています。庵寺古墳群では、丘陵斜面から弥生時代後期の集落跡を確認しました。また、丘陵尾根上からは石見地方東部では最大規模となる前期から中期を中心とする古墳群を検出しました。特に前期に築造された古墳の構造や出土遺物は、丹後から北九州にかけての地域との関連性を示唆し、日本海沿岸地域の交流を解明する上で貴重な発見として注目されます。

大迫ツリ遺跡並びに小釜野遺跡では、近世後期の石切場を調査した結果、石切場の規模や石切の手法が明らかになりました。江戸時代に温泉津周辺で盛んだった採石・石材加工業の歴史や文化を研究する上で貴重な資料となるものです。

本報告書が、この地域の歴史や文化を明らかにするための基礎資料として広く活用され、地域の文化財に対する理解や関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめ、大田市教育委員会、仁摩公民館、大国まちづくりセンター、仁摩まちづくりセンター、地元の方々並びに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成２６年３月

島根県教育委員会

教育長　今井康雄

例　言

1．本書は島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局から委託を受けて、平成 23・24 年に実施した一般国道 9 号 (仁摩温泉津道路) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2．本書で扱う遺跡は次のとおりである。

島根県大田市仁摩町大国 3150-2	庵寺古墳群
島根県大田市温泉津町福波大字福光ハ 1578	大迫ツリ遺跡
島根県大田市温泉津町福波大字福光ハ 608-6	小釜野遺跡

3．調査組織は次のとおりである。

（平成 23 年度）現地調査

事　務　局　川原和人（埋蔵文化財調査センター所長）、三島　伸（総務グループ課長）
丹羽野裕（管理グループ課長）

調査担当者　鳥谷芳雄（調査第 2 グループ課長）、深田　浩（企画員）、山根伸一（兼文化財保護主事）、藤原嘉弘（調査補助員）、松山智弘（調査補助員）

（平成 24 年度）現地調査

事　務　局　廣江耕史（埋蔵文化財調査センター所長）、三島　伸（総務グループ課長）、
熱田貴保（管理グループ課長）

調査担当者　林　健亮（調査第 2 グループ課長）、深田　浩（企画員）、山根伸一（兼文化財保護主任）、松山智弘（調査補助員）、糸川寿幸（調査補助員）

（平成 25 年度）報告書作成

事　務　局　廣江耕史（埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（総務課長）
熱田貴保（管理課長）

調査担当者　今岡一三（調査第 1 課長）、深田　浩（国事業第 1 係長）、山根伸一（兼文化財保護主任）

4．本調査に伴って行った自然科学的な分析は次の機関に委託して実施し、その成果は第 5 章にまとめて掲載した。

平成 23 年度～ 24 年度	庵寺古墳群	年代測定及び種実同定及びリン酸分析（文化財調査コンサルタント株式会社）
平成 25 年度		赤色顔料分析業務（近畿大学　南武志）
		ガラス製遺物分析業務（奈良文化財研究所　田村朋美）

5．発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については、島根県教育委員会から株式会社大畑建設へ委託した。

6．調査指導（五十音順）

岩本　崇（島根大学）、田中義昭（元島根県文化財保護審議会委員）、中村唯史（県立三瓶自然館）、長嶺康典（大田市石見銀山課）、渡邊貞幸（出雲弥生の森博物館）

7．挿図中の北は測量法に基づく平面直角第Ⅲ座標系による世界測地系の X 軸方向を指す。レベル高は海抜高を示す。

8．本書に掲載した遺物の写真図版のうち、巻頭カラー図版で掲載した庵寺古墳群出土遺物は西大寺フォト杉本和樹氏が撮影したものであり、そのほかの写真は深田が撮影した。

9．本書に掲載した遺物実測図の作成と浄書は、調査員・調査補助員のほか、遺物整理作業員が行った。

10. 本書の執筆編集は、第１章、第２章及び第３章第１節を山根が担当し、その他は深田が担当した。第５章については、第１～３節は文化財調査コンサルタントの渡辺正巳氏、第４節は奈良文化財研究所の田村朋美氏、第５節は近畿大学の南武志氏、第６・７節は島根県埋蔵文化財調査センターの上山晶子氏に執筆を依頼した。第６章４節については、文化財課世界遺産室の鳥谷芳雄氏に執筆を依頼した。

11. 本書の編集に当たってはDTP方式を採用し、アドビシステムズ株式会社製のAdobe InDesign CS5、Adobe Illustrator CS5、Adobe Photoshop CS5を用いて編集作業を行った。

12. 註、参考文献は各章あるいは各節ごとに連番を振り、各章末あるいは各節末にまとめて示した。

13. 本書掲載の図面、写真、出土遺物は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。

凡　例

１．弥生土器の様式については、本書の全編にわたり松本岩雄1992「石見地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編木耳社所収）を使用し、「石見Ⅳ－１様式」のように表記している。

２．土師器の編年については、松山智弘1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」（『島根考古学会誌』第８集所収）、松山智弘2000「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」（『島根考古学会誌』第17集所収）を使用し、「松山Ⅲ期」、「小谷３式」のように表記した。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　第１節　遺跡の位置と地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第３章　庵寺古墳群の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　第１節　調査の経過と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　第２節　弥生時代集落の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
　第３節　谷部の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
　第４節　古墳群の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
　第５節　遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・169
第４章　大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・171
　第１節　調査に至る経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・171
　第２節　大迫ツリ遺跡の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・173
　第３節　小釜野遺跡の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・187
第５章　自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・195
　第１節　庵寺古墳群発掘調査に係るＡＭＳ年代測定・・・・・・・・・・・・・・・・195
　第２節　庵寺古墳群５号加工段で検出された炭化種実片について・・・・・・・・・・199
　第３節　庵寺古墳群におけるリン、炭素及び窒素分析・・・・・・・・・・・・・・・201
　第４節　庵寺古墳群出土ガラス製遺物の自然科学的調査・・・・・・・・・・・・・・208
　第５節　大田市庵寺９号墳出土赤色顔料ー朱ーの硫黄同位体比分析・・・・・・・・・213
　第６節　庵寺 15 号墳石棺出土赤色顔料の蛍光Ｘ線分析について・・・・・・・・・・218
　第７節　庵寺 1-A 号墳出土耳環の蛍光Ｘ線分析について・・・・・・・・・・・・・・222
第６章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・225
　第１節　庵寺古墳群の弥生集落について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・225
　第２節　庵寺古墳群の変遷と位置付けについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・230
　第３節　大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡の石切場跡について・・・・・・・・・・・・・・239
　第４節　石見東部における近世石工についてー銀山代官の支配地との関連でー・・・・242

挿図目次

第 1 図　庵寺古墳群の位置と調査区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第 2 図　庵寺古墳群・大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第 3 図　庵寺古墳群・大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡の位置と周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・4
第 4 図　仁万平野と周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第 5 図　庵寺古墳群調査前測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
第 6 図　庵寺古墳群遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
第 7 図　庵寺古墳群 SI01・02、加工段 6 ・ 7 ・26、SK01 配置図・・・・・・・・・・・・・・15
第 8 図　庵寺古墳群 SI01 遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第 9 図　庵寺古墳群 SI01 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第 10 図　庵寺古墳群 SI01 出土遺物実測図 (1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
第 11 図　庵寺古墳群 SI01 出土遺物実測図 (2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
第 12 図　庵寺古墳群 SI02 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
第 13 図　庵寺古墳群 SI02 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第 14 図　庵寺古墳群加工段 12 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第 15 図　庵寺古墳群加工段 6 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第 16 図　庵寺古墳群加工段 6 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第 17 図　庵寺古墳群加工段 26 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第 18 図　庵寺古墳群加工段 7 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第 19 図　庵寺古墳群加工段 7 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
第 20 図　庵寺古墳群加工段 1 ～ 5・ 8 ～ 11・23 ～ 25・27、SD02、SK02 配置図・・・・・・ 28
第 21 図　庵寺古墳群加工段 1 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第 22 図　庵寺古墳群加工段 2 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
第 23 図　庵寺古墳群加工段 3 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
第 24 図　庵寺古墳群加工段 4 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第 25 図　庵寺古墳群加工段 1 ～ 4 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第 26 図　庵寺古墳群加工段 5 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
第 27 図　庵寺古墳群加工段 5 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
第 28 図　庵寺古墳群加工段 8・ 9・10 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第 29 図　庵寺古墳群加工段 11 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
第 30 図　庵寺古墳群加工段 10・11 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
第 31 図　庵寺古墳群加工段 21 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
第 32 図　庵寺古墳群加工段 23 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
第 33 図　庵寺古墳群加工段 24・25 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
第 34 図　庵寺古墳群加工段 27 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第 35 図　庵寺古墳群加工段 21・23・25・27 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・41
第 36 図　庵寺古墳群加工段 16 ～ 20・22・28、SK05 配置図・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

第 37 図　庵寺古墳群加工段 16 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第 38 図　庵寺古墳群加工段 17･18 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
第 39 図　庵寺古墳群加工段 16･17 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
第 40 図　庵寺古墳群加工段 19 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
第 41 図　庵寺古墳群加工段 20 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
第 42 図　庵寺古墳群加工段 22 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
第 43 図　庵寺古墳群加工段 19･22 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第 44 図　庵寺古墳群加工段 28 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
第 45 図　庵寺古墳群加工段 13 ～ 15、SD01、SK03･04･06 配置図・・・・・・・・・・・・・51
第 46 図　庵寺古墳群加工段 13 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
第 47 図　庵寺古墳群加工段 13 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
第 48 図　庵寺古墳群加工段 14 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第 49 図　庵寺古墳群加工段 14 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
第 50 図　庵寺古墳群加工段 15 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
第 51 図　庵寺古墳群加工段 15 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
第 52 図　庵寺古墳群 SD01 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
第 53 図　庵寺古墳群 SD02 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
第 54 図　庵寺古墳群 SK01 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
第 55 図　庵寺古墳群 SK02 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
第 56 図　庵寺古墳群 SK03 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
第 57 図　庵寺古墳群 SK04 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
第 58 図　庵寺古墳群 SK05 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
第 59 図　庵寺古墳群 SK06 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
第 60 図　庵寺古墳群遺構外出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
第 61 図　庵寺古墳群谷部遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
第 62 図　庵寺古墳群谷部土層図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
第 63 図　庵寺古墳群 SK07 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
第 64 図　庵寺古墳群 SK07 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
第 65 図　庵寺古墳群谷部出土遺物実測図 (1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
第 66 図　庵寺古墳群谷部出土遺物実測図 (2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
第 67 図　庵寺古墳群谷部出土遺物実測図 (3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
第 68 図　庵寺古墳群谷部出土遺物実測図 (4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
第 69 図　庵寺古墳群 15 号墳・ 5 号墳・ 6 号墳配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
第 70 図　庵寺古墳群 15 号墳、加工段 31 測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
第 71 図　庵寺古墳群 15 号墳石棺実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
第 72 図　庵寺古墳群 15 号墳主体部完掘状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
第 73 図　庵寺古墳群 5 号墳墳丘測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79
第 74 図　庵寺古墳群 5 号墳主体部実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 80

第 75 図　庵寺古墳群 5 号墳礫床実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
第 76 図　庵寺古墳群 5 号墳石棺実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82
第 77 図　庵寺古墳群 5 号墳主体部完掘状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
第 78 図　庵寺古墳群 15 号墳・ 5 号墳出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
第 79 図　庵寺古墳群 6 号墳主体部実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
第 80 図　庵寺古墳群 6 号墳墳丘測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
第 81 図　庵寺古墳群 7 号墳・ 8 号墳・ 9 号墳配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
第 82 図　庵寺古墳群 7 号墳墳丘測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88
第 83 図　庵寺古墳群 7 号墳主体部実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
第 84 図　庵寺古墳群 7 号墳出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
第 85 図　庵寺古墳群 8 号墳墳丘測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90
第 86 図　庵寺古墳群 8 号墳墳丘縦断土層図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
第 87 図　庵寺古墳群 8 号墳第 1 主体部木棺痕検出状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
第 88 図　庵寺古墳群 8 号墳第 1 主体部実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
第 89 図　庵寺古墳群 8 号墳第 2 主体部実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94
第 90 図　庵寺古墳群 8 号墳出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
第 91 図　庵寺古墳群 9 号墳墳丘測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
第 92 図　庵寺古墳群 9 号墳墳丘縦断面土層図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
第 93 図　庵寺古墳群 9 号墳第 1・ 2 主体部標石検出状況・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98
第 94 図　庵寺古墳群 9 号墳第 1 主体部実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100
第 95 図　庵寺古墳群 9 号墳第 1 主体部土層図土色・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
第 96 図　庵寺古墳群 9 号墳第 2 主体部実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102
第 97 図　庵寺古墳群 9 号墳第 3 主体部実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103
第 98 図　庵寺古墳群 9 号墳出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
第 99 図　庵寺古墳群 9 号墳第 3 主体部出土土器棺実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・105
第 100 図　庵寺古墳群 19 号墳周辺地形測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
第 101 図　庵寺古墳群 19 号墳実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
第 102 図　庵寺古墳群 SK08・SK09 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 107
第 103 図　庵寺古墳群 9 号墳・10 号墳・18 号墳配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・108
第 104 図　庵寺古墳群 10 号墳墳丘測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・109
第 105 図　庵寺古墳群 10 号墳第 1 主体部実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111
第 106 図　庵寺古墳群 10 号墳第 2 主体部実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・112
第 107 図　庵寺古墳群 10 号墳出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・112
第 108 図　庵寺古墳群 18 号墳墳丘測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
第 109 図　庵寺古墳群 18 号墳第 1 主体部実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
第 110 図　庵寺古墳群 18 号墳第 2 主体部実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115
第 111 図　庵寺古墳群 11 号墳・12 号墳配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 116
第 112 図　庵寺古墳群 11 号墳 SX01 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117

第 113 図　庵寺古墳群 12 号墳 SX02 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
第 114 図　庵寺古墳群 12 号墳出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
第 115 図　庵寺古墳群 13 号墳・14 号墳配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 119
第 116 図　庵寺古墳群 13 号墳周辺地形測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・120
第 117 図　庵寺古墳群 13 号墳石棺実測図 (1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 121
第 118 図　庵寺古墳群 13 号墳石棺実測図 (2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 122
第 119 図　庵寺古墳群 13 号墳出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122
第 120 図　庵寺古墳群 14 号墳周辺地形測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・123
第 121 図　庵寺古墳群 14 号墳石棺実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・124
第 122 図　庵寺古墳群 14 号墳主体部完掘状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125
第 123 図　庵寺古墳群 16 号墳・17 号墳配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
第 124 図　庵寺古墳群 16 号墳墳丘測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・127
第 125 図　庵寺古墳群 16 号墳石棺実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
第 126 図　庵寺古墳群 16 号墳主体部完掘状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・129
第 127 図　庵寺古墳群 17 号墳主体部実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・130
第 128 図　庵寺古墳群 17 号墳出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・130
第 129 図　庵寺古墳群 20 号墳・21 号墳配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・131
第 130 図　庵寺古墳群 20 号墳墳丘測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・132
第 131 図　庵寺古墳群 20 号墳盗掘坑・石棺材散乱状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・133
第 132 図　庵寺古墳群 20 号墳石棺・礫床検出状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・134
第 133 図　庵寺古墳群 20 号墳主体部完掘状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
第 134 図　庵寺古墳群 20 号墳出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・136
第 135 図　庵寺古墳群 21 号墳墳丘測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・137
第 136 図　庵寺古墳群 21 号墳主体部実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・138
第 137 図　庵寺古墳群 22 号墳・23 号墳配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・139
第 138 図　庵寺古墳群 22 号墳墳丘測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・140
第 139 図　庵寺古墳群 22 号墳縦断面土層図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・141
第 140 図　庵寺古墳群 22 号墳第 1 主体部検出状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・142
第 141 図　庵寺古墳群 22 号墳第 1 主体部実測図 (1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 143
第 142 図　庵寺古墳群 22 号墳第 1 主体部実測図 (2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 144
第 143 図　庵寺古墳群 22 号墳出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・145
第 144 図　庵寺古墳群 22 号墳第 2 主体部周辺地形測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・146
第 145 図　庵寺古墳群 22 号墳第 2 主体部実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・147
第 146 図　庵寺古墳群 22 号墳盛土除去後測量図及び加工段 29 検出状況・・・・・・・・・・ 148
第 147 図　庵寺古墳群加工段 29 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・149
第 148 図　庵寺古墳群加工段 29 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・149
第 149 図　庵寺古墳群 23 号墳墳丘測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・150
第 150 図　庵寺古墳群 23 号墳縦断面土層図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 151

第 151 図　庵寺古墳群 23 号墳石棺実測図 (1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 152
第 152 図　庵寺古墳群 23 号墳石棺実測図 (2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 153
第 153 図　庵寺古墳群 23 号墳主体部完掘状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・154
第 154 図　庵寺古墳群 23 号墳出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・155
第 155 図　庵寺古墳群 23 号墳盛土除去後測量図及び加工段 30 検出状況・・・・・・・・・・156
第 156 図　庵寺古墳群加工段 30 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・157
第 157 図　庵寺古墳群 24 号墳主体部実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・157
第 158 図　庵寺古墳群 25 号墳墳丘測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・158
第 159 図　庵寺古墳群 25 号墳石棺実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・159
第 160 図　庵寺古墳群 25 号墳主体部完掘状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・160
第 161 図　大迫ツリ遺跡と小釜野遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 171
第 162 図　大迫ツリ遺跡と小釜野遺跡の位置と調査区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 172
第 163 図　大迫ツリ遺跡調査区配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 174
第 164 図　大迫ツリ遺跡遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 175
第 165 図　大迫ツリ遺跡 1 ～ 3 号採掘坑実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 176
第 166 図　大迫ツリ遺跡 1 号採掘坑平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 177
第 167 図　大迫ツリ遺跡 1 号採掘坑奥壁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 178
第 168 図　大迫ツリ遺跡 1 号採掘坑左壁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 178
第 169 図　大迫ツリ遺跡 1 号採掘坑右壁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 178
第 170 図　大迫ツリ遺跡 1 号採掘坑出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 179
第 171 図　大迫ツリ遺跡 2 号採掘坑実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 180
第 172 図　大迫ツリ遺跡 3 号採掘坑実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 181
第 173 図　大迫ツリ遺跡線刻画群配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 182
第 174 図　大迫ツリ遺跡線刻画第 1 支群実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　183
第 175 図　大迫ツリ遺跡線刻画第 2 支群実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 183
第 176 図　大迫ツリ遺跡線刻画第 3 支群実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 183
第 177 図　大迫ツリ遺跡線刻画第 5 支群実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 183
第 178 図　大迫ツリ遺跡線刻画第 4 支群実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 184
第 179 図　大迫ツリ遺跡線刻画第 6 支群実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 184
第 180 図　大迫ツリ遺跡線刻画第 7 支群実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 185
第 181 図　大迫ツリ遺跡線刻画第 8 支群実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 185
第 182 図　大迫ツリ遺跡線刻画第 9 支群実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 186
第 183 図　大迫ツリ遺跡線刻画第 10 支群実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 186
第 184 図　小釜野遺跡調査区配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 188
第 185 図　小釜野遺跡 1 区遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 189
第 186 図　小釜野遺跡 1 号採掘坑平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 190
第 187 図　小釜野遺跡 1 号採掘坑奥壁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 191
第 188 図　小釜野遺跡 1 号採掘坑左壁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 191

第 189 図　小釜野遺跡 1 号採掘坑右壁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 191
第 190 図　小釜野遺跡 2 区遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 192
第 191 図　小釜野遺跡 2 号採掘坑実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 193
第 192 図　庵寺古墳群　弥生集落の構造復元・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 226
第 193 図　石見地域沿岸部の弥生時代後期集落分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 228
第 194 図　庵寺古墳群出土土器の時期と編年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 231
第 195 図　庵寺古墳群の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 232
第 196 図　福光および周辺地域の石切場跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 240

表目次

第 1 表　周辺の遺跡一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第 2 表　庵寺古墳群出土土器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・163
第 3 表　庵寺古墳群出土石器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・168
第 4 表　庵寺古墳群出土玉類観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・169
第 5 表　庵寺古墳群出土鉄器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・169
第 6 表　大迫ツリ遺跡出土土器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・169
第 7 表　大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡の採掘坑一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・194
第 8 表　庵寺古墳群　弥生集落検出加工段一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・226
第 9 表　石見地域沿岸部の弥生時代後期集落遺跡一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・228
第 10 表　庵寺古墳群の古墳一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 236
第 11 表　近世文献史料にみる石見銀山周辺地域の石工数・石工名・・・・・・・・・・・・ 248

図版目次

巻頭図版 1　庵寺古墳群遠景（南東から）
　庵寺古墳群遠景（北東から）
巻頭図版 2　庵寺古墳群　9 号墳第 1 主体部
巻頭図版 3　庵寺古墳群　22 号墳第 1 主体部
巻頭図版 4　庵寺古墳群　古墳出土遺物
巻頭図版 5　大迫ツリ遺跡　1 号採掘坑
巻頭図版 6　大迫ツリ遺跡　線刻画群

図版 1　庵寺古墳群遠景　空中撮影（北西から）
　庵寺古墳群遠景　空中撮影（南西から）
図版 2　庵寺古墳群　遠景（北西から）
　庵寺古墳群　調査前風景（南西から）
図版 3　庵寺古墳群　北側丘陵部遠景（南から）
　庵寺古墳群　南側丘陵部遠景　空中撮影（北から）
図版 4　庵寺古墳群　SI01 床面検出状況（北東から）
　庵寺古墳群　SI01 完掘状況（北東から）
図版 5　庵寺古墳群　SI02 セクション（北東から）
　庵寺古墳群　SI02 完掘状況（東から）
図版 6　庵寺古墳群　加工段 1（北西から）
　庵寺古墳群　加工段 2（北西から）
　庵寺古墳群　加工段 3（南西から）
図版 7　庵寺古墳群　加工段 4（南西から）
　庵寺古墳群　加工段 5 遺物出土状況（南西から）
　庵寺古墳群　加工段 5 完掘状況（北東から）
図版 8　庵寺古墳群　加工段 6（西から）
　庵寺古墳群　加工段 7（西から）
　庵寺古墳群　加工段 8（南西から）
図版 9　庵寺古墳群　加工段 9（南西から）
　庵寺古墳群　加工段 10（南西から）
　庵寺古墳群　加工段 11（南西から）
図版 10　庵寺古墳群　加工段 12 完掘状況（北から）
　庵寺古墳群　加工段 13（北西から）
　庵寺古墳群　加工段 14 セクション（西から）
図版 11　庵寺古墳群　加工段 14 完掘状況（東から）
　庵寺古墳群　加工段 15 完掘状況（南西から）
　庵寺古墳群　加工段 16 完掘状況（南西から）
図版 12　庵寺古墳群　加工段 17 遺物出土状況（西から）
　庵寺古墳群　加工段 17 完掘状況（北東から）
　庵寺古墳群　加工段 18（西から）
図版 13　庵寺古墳群　加工段 19（北東から）
　庵寺古墳群　加工段 20（北東から）
　庵寺古墳群　加工段 21（南西から）
図版 14　庵寺古墳群　加工段 22（北から）
　庵寺古墳群　加工段 23（北から）
　庵寺古墳群　加工段 24（北から）
図版 15　庵寺古墳群　加工段 25（北西から）
　庵寺古墳群　加工段 26（南西から）
　庵寺古墳群　加工段 27（北東から）
図版 16　庵寺古墳群　加工段 28（北から）
　庵寺古墳群　加工段 29（北から）
　庵寺古墳群　加工段 31（南西から）
図版 17　庵寺古墳群　南側丘陵加工段群遠景（南西から）
　庵寺古墳群　SK01 完掘状況（西から）
　庵寺古墳群　SK02 完掘状況（西から）
図版 18　庵寺古墳群　SK03 完掘状況（東から）
　庵寺古墳群　SK04 完掘状況（北東から）
　庵寺古墳群　SK06 セクション（北西から）
　庵寺古墳群　SK07 須恵器出土状況（南から）
　庵寺古墳群　SK08 セクション（南西から）
　庵寺古墳群　SK09 セクション（南から）
図版 19　庵寺古墳群　SD01 完掘状況（北西から）
　庵寺古墳群　SD02 完掘状況（北東から）
　庵寺古墳群　谷部調査後遠景（南西から）
図版 20　庵寺古墳群　15 号・5 号墳遠景（南西から）
図版 21　庵寺古墳群　15 号墳主体部検出状況（南西から）
　庵寺古墳群　15 号墳主体部内セクション（南西から）
　庵寺古墳群　15 号墳石棺検出状況

（南西から）
図版 22　庵寺古墳群　15 号墳蓋石検出状況（南西から）
庵寺古墳群　15 号墳石棺内完掘状況（北東から）
図版 23　庵寺古墳群　15 号墳石棺除去後(南西から）
庵寺古墳群　15 号墳主体部完掘状況（南西から）
図版 24　庵寺古墳群　5 号墳全景(北東から）
庵寺古墳群　5 号墳　主体部検出状況（北東から）
庵寺古墳群　5 号墳被覆粘土検出状況（南西から）
図版 25　庵寺古墳群　5 号墳石棺検出状況（北東から）
庵寺古墳群　5 号墳礫床検出状況（南西から）
図版 26　庵寺古墳群　5 号墳棺内完掘状況（南西から）
庵寺古墳群　5 号墳石棺除去後（南西から）
図版 27　庵寺古墳群　6 号墳主体部検出状況（北から）
庵寺古墳群　6 号墳主体部完掘状況（南から）
図版 28　庵寺古墳群　7 号墳主体部検出状況（北東から）
庵寺古墳群　7 号墳主体部横断セクション（北東から）
図版 29　庵寺古墳群　7 号墳主体部完掘状況（北東から）
庵寺古墳群　7 号墳遠景(南東から）
図版 30　庵寺古墳群　8 号墳第 1 主体部掘削時遠景（北東から）
庵寺古墳群　8 号墳第 1 主体部標石検出状況（北東から）
図版 31　庵寺古墳群　8 号墳第 1 主体部木棺痕検出状況（北東から）
庵寺古墳群　8 号墳第 1 主体部西側小口部セクション（北西から）
庵寺古墳群　8 号墳第 1 主体部完掘状況（南西から）
図版 32　庵寺古墳群　8 号墳第 2 主体部検出状況（南西から）
庵寺古墳群　8 号墳第 2 主体部木棺痕検出状況（南西から）
庵寺古墳群　8 号墳　第 2 主体部小口部礫検出状況（西から）
図版 33　庵寺古墳群　8 号墳第 2 主体部完掘状況（北東から）
庵寺古墳群　8 号墳第 2 主体部掘削後遠景（南西から）
図版 34　庵寺古墳群　9 号墳調査前（北東から）
庵寺古墳群　9 号墳第 1・2 主体部検出状況（南西から）
庵寺古墳群　9 号墳第 1 主体部横断セクション（北東から）
図版 35　庵寺古墳群　9 号墳第 1 主体部木棺痕検出状況（南西から）
図版 36　庵寺古墳群　9 号墳第 1 主体部鉄剣出土状況
庵寺古墳群　9 号墳第 2 主体部横断セクション（南西から）
庵寺古墳群　9 号墳第 1・2 主体部完掘状況（南西から）
図版 37　庵寺古墳群　9 号墳第 3 主体部検出状況（北東から）
庵寺古墳群　9 号墳第 3 主体部土器棺出土状況（北東から）
庵寺古墳群　9 号墳第 3 主体部完掘状況（北東から）
図版 38　庵寺古墳群　10 号墳調査前（南から）
庵寺古墳群　10 号墳全景（東から）
庵寺古墳群　10 号墳周溝セクション（南東から）
図版 39　庵寺古墳群　10 号墳第 1 主体部検出状況（南東から）
庵寺古墳群　10 号墳石片検出状況（南東から）
庵寺古墳群　10 号墳第 1 主体部セクション（南東から）
図版 40　庵寺古墳群　10 号墳第 1 主体部完掘状況（南東から）
庵寺古墳群　10 号墳第 2 主体部検出状況（北東から）
庵寺古墳群　10 号墳第 2 主体部完掘状況（北から）
図版 41　庵寺古墳群　18 号墳石棺検出状況（南西から）
庵寺古墳群　18 号墳第 1 主体部石棺検出状況（西から）
図版 42　庵寺古墳群　18 号墳第 1 主体部石棺内床面検出状況（西から）
庵寺古墳群　18 号墳第 1 主体部完掘状況（南東から）

図版 43　庵寺古墳群　18 号墳第 2 主体部石蓋検出状況（西から）
庵寺古墳群　18 号墳第 1・2 主体部完掘状況（西から）
図版 44　庵寺古墳群　18 号墳調査後遠景（東から）
庵寺古墳群　19 号墳（南西から）
図版 45　庵寺古墳群　11 号墳遠景（東から）
庵寺古墳群　11 号墳 SX01 検出状況（南東から）
庵寺古墳群　11 号墳 SX01 セクション（南東から）
図版 46　庵寺古墳群　11 号墳 SX01 完掘（南東から）
庵寺古墳群　12 号墳 SX02 検出状況（北西から）
庵寺古墳群　12 号墳　全景（北から）
図版 47　庵寺古墳群　13 号墳石棺検出状況（南から）
庵寺古墳群　13 号墳石棺検出状況（北東から）
庵寺古墳群　13 号墳蓋石除去後（北西から）
図版 48　庵寺古墳群　13 号墳石棺内完掘及び墓壙検出状況（北西から）
庵寺古墳群　13 号墳石棺除去後（北西から）
庵寺古墳群　14 号墳石棺検出状況（北西から）
図版 49　庵寺古墳群　14 号墳蓋石検出状況（北東から）
庵寺古墳群　14 号墳石棺内完掘状況（北東から）
庵寺古墳群　14 号墳石棺除去後（北東から）
図版 50　庵寺古墳群　16 号墳遠景（南東から）
庵寺古墳群　16 号墳石棺検出状況（東から）
庵寺古墳群　16 号墳石棺完掘状況（西から）
図版 51　庵寺古墳群　16 号墳石棺側板加工痕
庵寺古墳群　16 号墳周溝検出状況（北から）
庵寺古墳群　16 号墳石棺除去後（東から）
図版 52　庵寺古墳群　16 号・17 号墳遠景（北西から）
庵寺古墳群　17 号墳主体部完掘状況（西から）
図版 53　庵寺古墳群　20 号墳調査前（北東から）
庵寺古墳群　20 号墳主体部検出状況（北西から）
庵寺古墳群　20 号墳主体部石棺・礫床検出状況（南東から）
図版 54　庵寺古墳群　20 号墳主体部石片検出状況（北東から）
庵寺古墳群　20 号墳墓壙内完掘状況（南東から）
庵寺古墳群　20 号墳遠景（南西から）
図版 55　庵寺古墳群　21 号墳主体部検出状況（西から）
庵寺古墳群　21 号墳主体部完掘状況（南東から）
図版 56　庵寺古墳群　22･23 号墳調査前（北東から）
庵寺古墳群　22・23 号墳遠景（南西から）
図版 57　庵寺古墳群　22 号墳第 1 主体部検出状況（南西から）
庵寺古墳群　22 号墳第 1 主体部検出状況（北東から）
図版 58　庵寺古墳群　22 号墳第 1 主体部南西小口側縦断セクション（北西から）
庵寺古墳群　22 号墳第 1 主体部横断セクション（南西から）
図版 59　庵寺古墳群　22 号墳第 1 主体部粘土床検出状況（北東から）
庵寺古墳群　22 号墳第 1 主体部粘土床検出時 2（北東から）
図版 60　庵寺古墳群　22 号墳第 1 主体部粘土床除去時（北東から）
庵寺古墳群　22 号墳第 1 主体部完掘状況（北東から）
図版 61　庵寺古墳群　22 号墳主体部完掘後遠景（南西から）
庵寺古墳群　22 号墳墳丘盛土セクション（南東から）
庵寺古墳群　22 号墳墳丘盛土セクション（南西から）
図版 62　庵寺古墳群　22 号墳墳丘盛土除去後（北西から）
庵寺古墳群　22 号墳第 2 主体部石棺完掘状況（東から）

庵寺古墳群　22 号墳第 2 主体部完掘状況（東から）
図版 63　庵寺古墳群　23 号墳遠景（南西から）
庵寺古墳群　23 号墳遠景（北東から）
図版 64　庵寺古墳群　23 号墳石棺検出状況（南西から）
庵寺古墳群　23 号墳棺内完掘状況（南西から）
図版 65　庵寺古墳群　23 号墳墓壙内完掘状況（南西から）
庵寺古墳群　23 号墳墳丘盛土セクション（南西から）
庵寺古墳群　23 号墳墳丘盛土除去後遠景（南西から）
図版 66　庵寺古墳群　24 号墳主体部検出状況（北西から）
庵寺古墳群　24 号墳主体部完掘状況（北西から）
図版 67　庵寺古墳群　25 号墳石棺検出状況（北から）
庵寺古墳群　25 号墳蓋石検出状況（南東から）
図版 68　庵寺古墳群　25 号墳石棺内完掘状況（北西から）
庵寺古墳群　25 号墳主体部完掘後遠景（北西から）
図版 69　大迫ツリ遺跡　調査前風景（南東から）
大迫ツリ遺跡　調査後遠景（南西から）
図版 70　大迫ツリ遺跡　調査後遠景（北東から）
大迫ツリ遺跡　第 1 採掘坑左壁側（北東から）
図版 71　大迫ツリ遺跡　第 1 採掘坑右壁側（南西から）
大迫ツリ遺跡　第 1 採掘坑奥壁側（南東から）
図版 72　大迫ツリ遺跡　第 1 採掘坑奥壁右隅（南から）
図版 73　大迫ツリ遺跡　第 2 採掘坑完掘状況（北東から）
大迫ツリ遺跡　第 2 採掘坑完掘状況（南西から）
図版 74　大迫ツリ遺跡　第 3 採掘坑完掘状況（北東から）
大迫ツリ遺跡　第 3 採掘坑完掘状況（南西から）
図版 75　大迫ツリ遺跡　線刻画第 8 支群
大迫ツリ遺跡　線刻画第 9 支群
図版 76　大迫ツリ遺跡　線刻画第 10 支群
大迫ツリ遺跡　線刻画第 6 支群
図版 77　大迫ツリ遺跡　線刻画第 7 支群
大迫ツリ遺跡　線刻画第 1 支群
図版 78　小釜野遺跡　調査前（北から）
小釜野遺跡　第 1 採掘坑調査前（東から）
図版 79　小釜野遺跡　第 1 採掘坑左壁側（北西から）
小釜野遺跡　第 1 採掘坑右壁側（南東から）
図版 80　小釜野遺跡　第 1 採掘坑左奥壁側（北から）
小釜野遺跡　第 1 採掘坑床面（南東から）
小釜野遺跡　第 1 採掘坑調査後遠景（東から）
図版 81　小釜野遺跡　第 2 採掘坑調査前（南西から）
小釜野遺跡　第 2 採掘坑全景（西から）
図版 82　小釜野遺跡　第 2 採掘坑全景（南西から）
小釜野遺跡　第 2 採掘坑右壁側（北から）
図版 83　庵寺古墳群　SI01 出土遺物（1）
庵寺古墳群　SI01 出土遺物（2）
図版 84　庵寺古墳群　SI01 出土遺物（3）
庵寺古墳群　SI02 出土遺物
図版 85　庵寺古墳群　加工段 1・2・3・4 出土遺物
庵寺古墳群　加工段 5 出土遺物（1）
庵寺古墳群　加工段 5 出土遺物（2）
図版 86　庵寺古墳群　加工段 6・10 出土遺物
庵寺古墳群　加工段 7 出土遺物（1）
図版 87　庵寺古墳群　加工段 7 出土遺物（2）
庵寺古墳群　加工段 13 出土遺物
庵寺古墳群　加工段 14 出土遺物
図版 88　庵寺古墳群　加工段 15 出土遺物
庵寺古墳群　加工段 16・17 出土遺物（1）
庵寺古墳群　加工段 16・17 出土遺物（2）
図版 89　庵寺古墳群　加工段 19・22 出土遺物

庵寺古墳群　加工段 21・25・27・29・30 出土遺物
庵寺古墳群　遺構外出土遺物（1）
庵寺古墳群　遺構外出土遺物（2）
庵寺古墳群　加工段 23 出土遺物
庵寺古墳群　SK07 出土遺物
図版 90　庵寺古墳群　谷部出土遺物（1）
庵寺古墳群　谷部出土遺物（2）
図版 91　庵寺古墳群　谷部出土遺物（3）
庵寺古墳群　谷部出土遺物（4）
図版 92　庵寺古墳群　谷部出土遺物（5）
図版 93　庵寺古墳群　7・8・9・10・12 号墳出土遺物
図版 94　庵寺古墳群 20・22 号墳出土遺物
庵寺古墳群　20・22・23 号墳出土遺物
図版 95　庵寺古墳群　5・8・9・13・15 号墳出土鉄器
図版 96　庵寺古墳群　5・15 号墳出土ガラス小玉
庵寺古墳群　17 号墳出土滑石製臼玉
庵寺古墳群　20 号墳出土玉類
庵寺古墳群　23 号墳出土滑石製勾玉
庵寺古墳群　9 号墳第 3 主体部出土土器棺
図版 97　庵寺古墳群　9 号墳第 3 主体部出土土器棺
大迫ツリ遺跡　第 1 採掘坑出土遺物

第１章　調査に至る経緯と経過

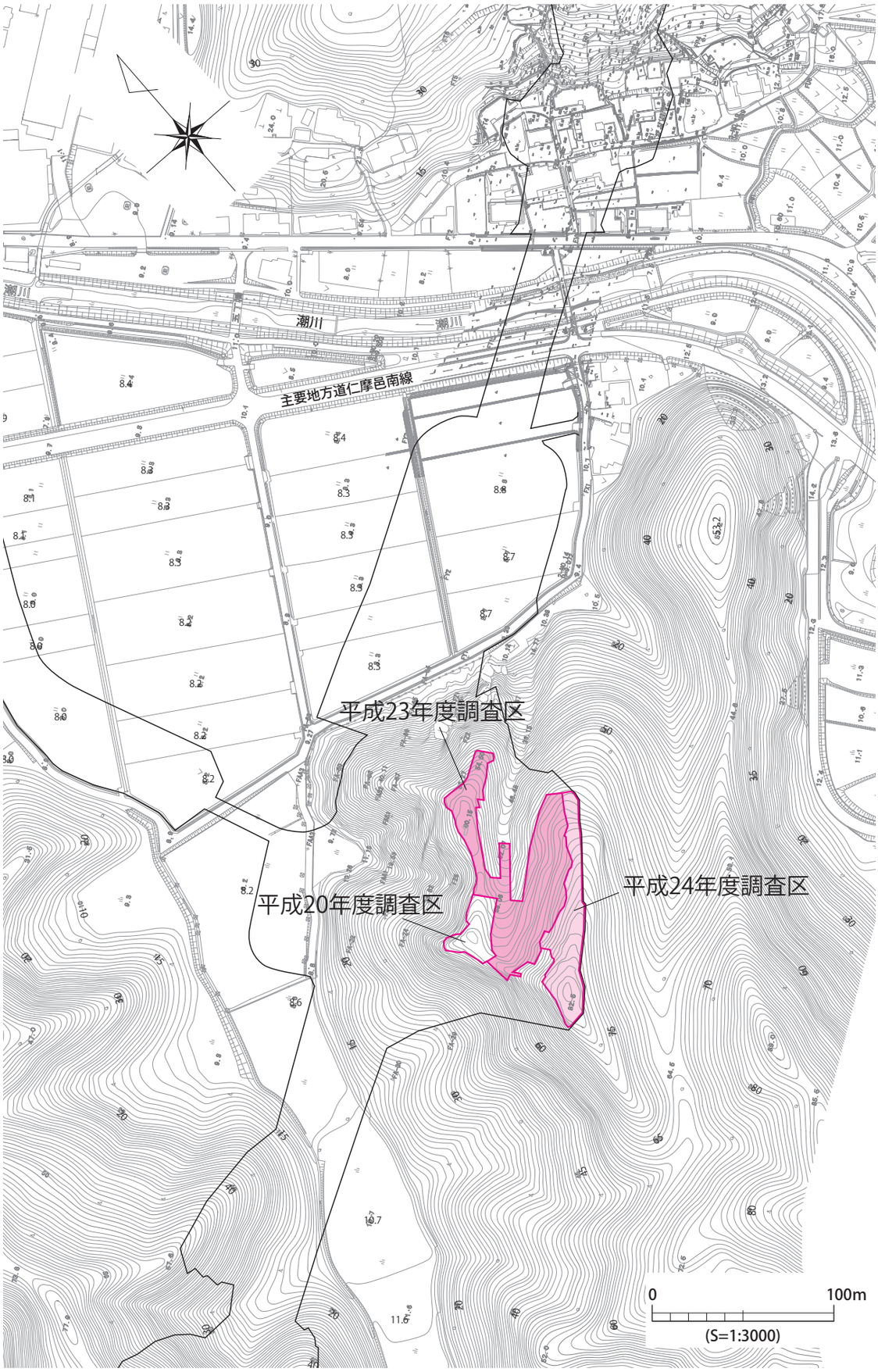
一般国道９号仁摩温泉津道路は島根県大田市仁摩町大国から同温泉津町福波 11.8km に計画されている高規格道路である。この事業地内に存在する埋蔵文化財については、国土交通省松江国道工事事務所（当時）より平成 15(2003) 年２月 19 日付けで島根県教育委員会に協議があり、県教育庁文化財課は、平成 15 年３月３日付けで事業実施前に遺跡の有無について確認調査が必要な旨を回答した。これにより、島根県教育委員会は松江国道工事事務所から平成 15 年３月 31 日付けで事業地内の遺跡について照会を受けたので、県教育庁埋蔵文化財調査センターでは、平成 15 年４月に事業地内の分布調査を実施した。その結果、事業地内で都合 17 カ所の遺跡が存在することを確認したが、この時点では一部に分布調査できない地点もあった。これを受け、島根県教育委員会は平成 15 年７月 28 日付けで松江国道工事事務所あてに分布調査の結果を報告、所在する遺跡については文化財保護法上の諸手続きをとるよう回答した。平成 17 年 (2005) 年３月には残る温泉津町福波地区で分布調査を行い、事業地周辺で遺物を採取した。

平成 17(2005) 年度からは仁摩温泉津道路改築工事が本格化し、これに伴う発掘調査を島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所より受託した。平成 17 ～ 22 年度については、以下の遺跡の本調査を実施し、発掘調査報告書を逐次刊行した。

平成 17(2005) 年度は、温泉津町の中祖遺跡・仁摩町の五丁遺跡、平成 18 年 (2006) 年度は、温泉津町の中祖遺跡・仁摩町の五丁遺跡、ナメラ迫遺跡で本調査を実施した。このうち、中祖遺跡では、石見地方では確認事例の少ない瓦を使用した奈良・平安時代の礎石建物が検出され、あわせて周辺部の遺跡の範囲確認調査を実施した。平成 19(2007) 年度は、仁摩町の庵寺遺跡・於才迫遺跡・ナメラ迫遺跡、温泉津町の梨ノ木坂遺跡の本調査を実施した。平成 20(2008) 年度は、仁摩町の牧原Ⅱ遺跡、庵寺遺跡、庵寺古墳群で本調査を実施した。当初庵寺古墳群は、庵寺城跡とされていたが、丘陵部の遺跡の実態が古墳群であることから「庵寺古墳群」として調査を行った。前漢鏡その他の副葬品を持つ、箱式石棺を主体部とする前期古墳２基と横穴式石室を主体部とする後期古墳１基を調査した。平成 21(2009) 年度は、温泉津町の湯里天神遺跡、仁摩町の宇福遺跡の本調査を実施した。

平成 23(2011) 年度は庵寺古墳群、平成 24 年度には庵寺古墳群と温泉津町の小釜野遺跡・大迫ツリ遺跡の本調査を実施した。このうち庵寺古墳群については、平成 20 年度に未調査地として残った丘陵部を調査し、丘陵尾根上から古墳時代前期から中期にかけて築造されたと考えられる古墳 21 基、丘陵斜面から弥生時代中期末から後期の竪穴建物跡や多数の加工段状遺構を検出した。また、大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡では、近世の石切り場跡を確認した。

平成 25 年度は仁摩町の古屋敷遺跡の本調査を実施し、平成 23 ～ 24 年度に発掘調査をした庵寺古墳群と大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡を『一般国道９号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書５庵寺古墳群Ⅱ・大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡』（本報告書）として刊行した。



第１図　庵寺古墳群の位置と調査区

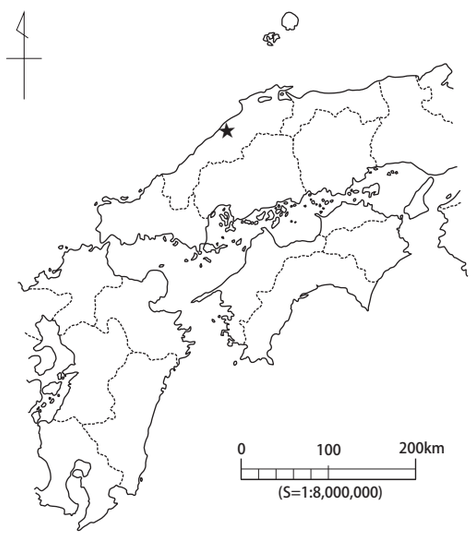
第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

島根県西部（旧石見国）の沿岸部は、日本海に山地が迫り深い入り江になったリアス式海岸と、その間に開けた砂丘が織りなす変化に富んだ景観をもつ。人々の生活の舞台となった集落や古墳は、そうした浦々に注ぐ河川沿いに形成された小平野と周辺の丘陵地に点在する。庵寺古墳群、小釜野遺跡、大迫ツリ遺跡はこのような石見沿岸部に形成された遺跡である。庵寺古墳群は大田市仁摩町大国、小釜野遺跡は大田市温泉津町福波大字福光、大迫ツリ遺跡は大田市温泉津町福波大字福光に所在する。

庵寺古墳群が所在する大国地区は、仁摩町の中央を流れる潮川の中流域から上流域の一帯にあり、東部は大田市五十猛町や世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」を構成する同市大森町に接し、西部は同市仁摩町天河内地区や同市温泉津町に接している。明治 22(1889) 年の町村制施行時には、邇摩郡明治村とされ、明治 24(1891) 年に邇摩郡大国村、昭和 29(1954) 年には邇摩郡仁摩町となり、平成 17(2005) 年に大田市と合併して現在に至っている。庵寺古墳群は、潮川河口から約 2.2㎞上流左岸の沖積平野の水田地帯に突き出す丘陵に位置し、水田地帯との比高差約 75 ～ 55 mを測る。庵寺古墳群は、その丘陵の眺望の開けた尾根上に展開する古墳群と斜面に造られた弥生時代の集落群からなる複合遺跡である。

大迫ツリ遺跡、小釜野遺跡が所在する福光地区は、大江高山（標高８０８m）から西へ流れる福光川の谷底氾濫原と日本海沿いに形成された砂丘が接する一帯にあり、北東部は大田市温泉津町温泉津に接し、南西部は、江津市黒松町に接している。明治 22(1889) 年の町村制施行時には、邇摩郡福光村、昭和 26(1951) 年に邇摩郡福波村、昭和 29(1954) 年には邇摩郡温泉津町になり、平成 17(2005) 年に大田市と合併して現在に至っている。日本列島の日本海側は、北海道から山陰地方にかけて日本列島形成に起因する凝灰岩が分布（日本海グリーンタフ地帯）しており、大田市周辺は分布地帯の西端地域とされている。両遺跡は、福光湾岸に面し急峻な丘陵に挟まれた同じ谷にある石切り場遺跡である。小釜野遺跡は、谷奥約 500 mの南側斜面に、大迫ツリ遺跡は、谷奥約１㎞の北側斜面に位置する。



第２図　庵寺古墳群・大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡の位置

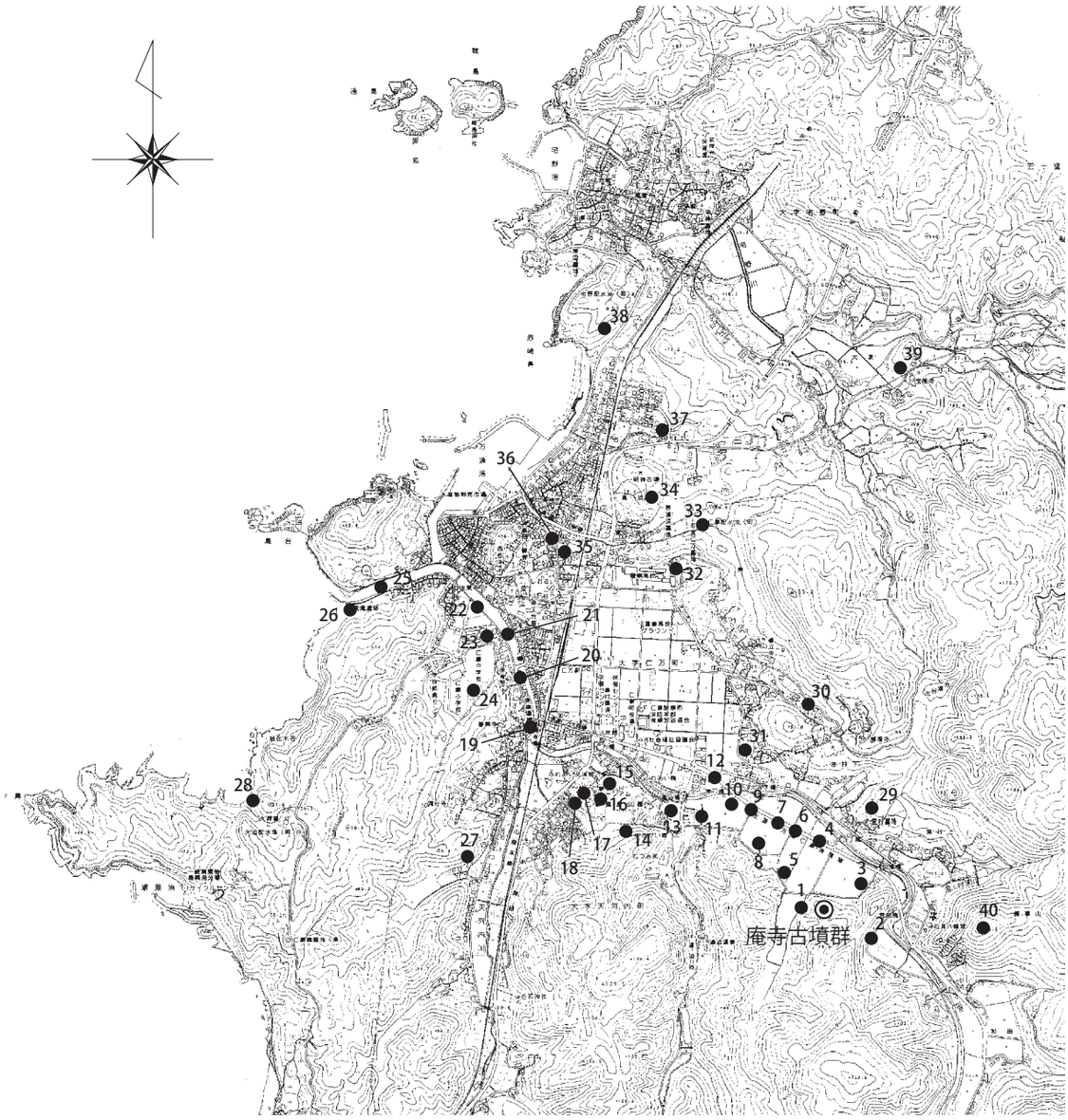
第２節　歴史的環境

仁摩町・温泉津町周辺地域における遺跡の初見は、久根ヶ曽根遺跡 (48) と鳥居原遺跡 (46) で縄文時代前期に遡る[(1)]。海岸砂丘とその周辺部に立地し、砂層下の黒灰色層または黒色砂層から縄文土器のほか石斧、石鏃などが出土している。中期・後期の遺跡はあまり多くはないが、やはり砂丘に立地する坂灘遺跡 (25)、湊遺跡 (55)[(2)]、中祖遺跡 (54) のほか善興寺橋遺跡 (19) が知られている。中

祖遺跡では縄文時代後期前葉の遺物が比較的まとまって出土した[3]。

縄文時代晩期から弥生時代前期の遺跡には坂灘遺跡、川向遺跡 (22)、五丁遺跡 (5)、古屋敷遺跡 (3) などが知られる。いずれの遺跡も沿岸部の砂丘地や少し内陸に入った地点で確認されている。古屋敷遺跡からは、縄文時代晩期の彩文土器が出土し、木棺墓の可能性がある埋葬施設や炉跡を検出するなど縄文時代の集落跡が確認された[4]。川向遺跡では矢板を円形または長楕円形状に打ち込み、

第 3 図　庵寺古墳群・大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡の位置と周辺の遺跡



第４図　仁万平野と周辺の遺跡

国道９号からみた庵寺古墳群

番号	遺跡名	種別	所在地	概要
1	庵寺遺跡	散布地ほか	仁摩町大国	弥生土器、土師器、須恵器、木製品、耳環
2	駒岩遺跡	散布地	仁摩町大国	ピット、土師器、須恵器、青白磁
3	古屋敷遺跡	集落遺跡	仁摩町大国	木棺墓、火処、縄文土器、弥生土器、掘立柱建物跡、石組遺構
4	孫四田遺跡	集落遺跡	仁摩町大国	掘立柱建物跡、土師質土器、陶磁器、土師器、弥生土器
5	五丁遺跡	散布地ほか	仁摩町大国	条里畦畔、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、木製品
6	大月遺跡	集落遺跡	仁摩町大国	掘立柱建物跡、土師質土器、須恵器、陶磁器
7	コヲスミ遺跡	集落遺跡	仁摩町大国	掘立柱建物跡、土師質土器、須恵器、陶磁器、石鉢
8	ヒヨトリヶ市遺跡	散布地	仁摩町大国	土師質土器、陶磁器、須恵器、土師器
9	京円原遺跡	集落遺跡	仁摩町大国	掘立柱建物跡、土師質土器、陶磁器
10	千後田遺跡	散布地	仁摩町大国	掘立柱建物跡、土師質土器、須恵器、青磁、白磁
11	入石遺跡	集落遺跡	仁摩町大国	掘立柱建物跡、土師質土器、須恵器、陶磁器
12	清石遺跡	集落遺跡	仁摩町仁万	掘立柱建物跡、土師質土器、青白磁、土師器、須恵器
13	白石遺跡	集落遺跡	仁摩町天河内	掘立柱建物跡、土師質土器、青磁、白磁、須恵器
14	千人塚遺跡	古墳	仁摩町天河内	横穴式石室、墳形不明
15	楡ノ木谷横穴群	横穴墓群	仁摩町天河内	３支群 12 穴、須恵器、土師器、耳環、玉類、Ｉ群保存
16	楡ノ木遺跡	散布地	仁摩町天河内	土壙、弥生土器、須恵器
17	安養寺古墳群	古墳ほか	仁摩町天河内	４基、土壙、土師器、須恵器、壺棺、弥生住居跡
18	飯田遺跡	散布地	仁摩町天河内	土師器
19	善興寺橋遺跡	散布地	仁摩町天河内	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石斧
20	仁万大橋遺跡	散布地	仁摩町仁万	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、陶磁器
21	中配前遺跡	散布地	仁摩町仁万	石斧
22	川向遺跡	散布地	仁摩町仁万	円形杭列遺構、弥生土器、石斧、木製品他
23	毘沙門塚古墳	古墳	仁摩町仁万	消滅
24	毘沙門遺跡	散布地	仁摩町仁万	横穴？、須恵器
25	坂灘遺跡	散布地	仁摩町仁万	中世墓、人骨、縄文土器、弥生土器他
26	坂灘古墳	古墳	仁摩町仁万	箱式石棺、人骨、鹿角装刀子、市指定史跡
27	矢迫屋横穴群	横穴墓群	仁摩町天河内	３穴
28	田尻遺跡	散布地	仁摩町仁万	石斧
29	松林寺遺跡	古墳ほか	仁摩町大国	古墳、須恵器、寺院跡
30	薮田遺跡	散布地	仁摩町仁万	土師器、須恵器、土師質土器、下駄、漆椀
31	大井手遺跡	散布地	仁摩町仁万	黒曜石
32	大寺遺跡	散布地	仁摩町仁万	弥生土器、土師器、須恵器、木製品
33	高浜遺跡	散布地	仁摩町仁万	古墳？、須恵器
34	明神古墳	古墳	仁摩町仁万	横穴式石室、家形石棺、金銅装円頭大刀、県指定史跡
35	墓原遺跡	散布地	仁摩町仁万	土師器
36	打落し遺跡	散布地	仁摩町仁万	弥生土器、土師質土器、古銭
37	立平浜遺跡	散布地	仁摩町仁万	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器
38	赤崎山横穴群	横穴墓群	仁摩町宅野	３支群約 25 穴
39	宝隆寺裏古墳群	古墳群	仁摩町宅野	約 11 基（８基消滅）、須恵器他
40	石見城跡	城跡	仁摩町大国	郭、土塁、堀切、国指定史跡
41	赤井穴ヶ迫古墳	古墳	五十猛町赤井	石棺式石室
42	猛鬼遺跡	散布地	仁摩町宅野	土師器、須恵器、土製支脚、砥石
43	ナメラ迫遺跡	集落遺跡	仁摩町天河内	掘立柱建物跡、溝、土師器、須恵器
44	宇福遺跡	古墳ほか	仁摩町馬路	横穴式石室、須恵器
45	牧原Ⅱ遺跡	製鉄遺跡	仁摩町馬路	13 世紀前後の製鉄遺跡、鉄滓、炉壁、陶磁器
46	鳥居原遺跡	散布地	仁摩町馬路	縄文土器、石斧、石鏃、石錘
47	鳥居原古墳	古墳	仁摩町馬路	双龍環頭大刀、馬具、玉類、須恵器、消滅
48	久根ヶ曽根遺跡	散布地	仁摩町馬路	縄文土器、石鏃、石匙
49	湯里天神遺跡	中世耕作地	温泉津町湯里	15 ～ 16 世紀の耕作地、石垣、土器、陶磁器
50	湯湊遺跡	散布地	温泉津町湯里	磨製石斧（弥生）　＊遺跡地図では川向遺跡と記載される
51	梨ノ木坂遺跡	街道	温泉津町小浜	石畳道路遺構、石切り場
52	ヅリ岩遺跡	古墳	温泉津町小浜	古墳？
53	仮屋遺跡	散布地	温泉津町小浜	須恵器
54	中祖遺跡	集落遺跡	温泉津町福光	礎石建物跡、縄文土器、土師器、須恵器、丸瓦、平瓦
55	湊遺跡	散布地	温泉津町福波	縄文土器、
56	白坏遺跡	散布地	水上町白坏	木簡、須恵器、土師器

第１表　周辺の遺跡一覧

内部に木製農具の未製品を入れた水浸け保管施設が検出されたほか、鍬、鋤、高杯、杓子など多数の木製品が出土している[5]。弥生時代後期になると安養寺古墳群 (17) からは竪穴建物跡が検出され[6]、大寺遺跡 (32) や孫四田遺跡 (4) など遺跡も多くなる。庵寺遺跡 (1) からは、弥生時代頃の流

路から田下駄などの木製品が出土している[7]。

古墳時代前期・中期には、石見地方東部の沿岸部で大形古墳の存在は知られていない。庵寺古墳群では、平成 20(2008) 年度の調査によって１Ｂ号墳と４号墳の２基の前期古墳が確認された。１Ｂ号墳第１主体部では凝灰岩製の板石を使用した精巧かつ堅牢な組合せ式の箱式石棺から、石見地方で初めての例となる中国前漢時代の八禽鏡が出土した。さらに１Ｂ号墳の南に近接して高さ約 90cm の巨大な土師器壺を使用した古墳時代前期（４世紀後半）の土器棺墓があり、１Ｂ号墳と関連があるものと思われる。４号墳では、１つの墓坑に並列する２つの凝灰岩製の組合せ式箱式石棺が発見され、２号箱式石棺からは鼓形器台を用いた土器枕が出土した。古墳時代前期の漢式鏡は日本海沿岸西部に緩やかな分布の集中域が認められ、鼓形器台を用いた土器枕は鳥取県東部に集中的に分布することから、日本海を経由した交易活動も権力基盤にもつ地域首長の存在が推定される[8]。また、同時期の古墳として仁万平野を望む位置に作られた安養寺１号墳があげられる。墳丘は長辺 12 ｍ・短辺８ｍほどの方墳とみられ、箱式石棺をはじめとする４基の埋葬施設が確認された[9]。箱式石棺の主体部と付近に土器棺墓があることから庵寺古墳群の構成と共通性がみられる。また、坂灘古墳 (26) では、石を２～３段に積み上げ床面に石を敷いた箱式石棺が明らかになっており、人骨とともに鹿角装刀子が出土している[10]。この時期の集落の実態については不明であるが、前期には坂灘遺跡、立平浜遺跡 (37)、大寺遺跡、中祖遺跡、中期には清石遺跡 (12)、坂灘遺跡、ナメラ迫遺跡 (43)、猛鬼遺跡 (42) などが営まれる。特に、庵寺古墳群に近い潮川右岸の清石遺跡では、古墳時代中期の土器溜を検出し、多量の土師器が出土した。ほとんどの土器がその場で壊れた状態で検出され、高杯、小型丸底壺の割合も高いので、単なる土器廃棄場ではなく、この場でなんらかの祭祀が行われた可能性が考えられる。古墳時代中期にこの付近で集落の存在を示唆する重要な遺跡である[11]。

古墳時代後期になると明神古墳 (34)、鳥居原古墳 (47)、赤井穴ケ迫古墳 (41) など、小平野ごとに有力な古墳が営まれる。明神古墳は径 20 ｍの円墳で、全長 10.1 ｍの横穴式石室に家形石棺を納めており、副葬品には金銅製円頭大刀、銅碗、鏡片、鉄斧、鉄鏃、鉄鎌などがある[12]。庵寺古墳群１Ａ号墳は、全長 5.5 ｍ、最大幅 3.5 ｍ、残存高 1.1 ｍを測る無袖型の石室をもち、玉類、大刀、鉄鏃、刀子が出土した。鳥居原古墳は横穴式石室をもち、双龍環頭大刀をはじめ、鞍金具、玉類、耳環などが出土した[13]。赤井穴ケ迫古墳は、出土品は知られていないが、石見地方では唯一の切石造りの横穴式石室を内蔵する。これらの中でも明神古墳が所在する仁万平野周辺は、楡ノ木谷横穴群 (15)、赤崎山横穴群 (38) など有力農民層の墳墓も確認されており、地域の中核となっていたことがうかがえる。

奈良・平安時代の遺跡の確認例は少ない。『和名類聚抄』によれば、邇摩郡には託農、大国、温泉、杵道、大家、群治の６郷が置かれ、『延喜式』には駅として波祢、託農、樟道、江東、江西などの名が見える。仁万平野の仁万田台には、条里制遺構が近年までその地割に残されていた。五丁遺跡でも奈良平安時代以降の条里制畦畔遺構が発見されている[14]。邇摩郡の郡家を大国の御門あたりに比定する説があるが、邇摩郡の郡家や駅などに関わる遺跡は不明といわざるを得ない。その中で注目されるのは白坏遺跡 (56) で、「延喜九 (909) 年」と書かれた木簡をはじめ、墨書土器、ヘラ書き土器が出土しており、集落ごとに置かれた倉庫の可能性が指摘されている[15]。また、古代瓦が出土した遺跡には、中祖遺跡、大寺遺跡などがあり、寺院、官衙などの公的施設の存在が考えられ

るが、実態は明らかではない。

中世の遺跡には、白石遺跡 (13) がある。掘立柱建物跡 11 棟が確認された他、白磁や龍泉系青磁など輸入陶磁器が出土しており、12 世紀後半～ 14 世紀頃の豪族居館の可能性が考えられている [(16)]。また、清石遺跡では 12 ～ 13 世紀の掘立柱建物跡 6 棟が確認された。14 ～ 16 世紀の集落跡としてコヲスミ遺跡 (7) では掘立柱建物跡 6 棟、大月遺跡 (6) では掘立柱建物跡 4 棟が確認された [(17)]。

中世・近世においては、大田市大森町から仁摩町・温泉津町にまたがる広い範囲に、世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」を構成する石見銀山遺跡と積み出し港、それらを結ぶ街道や中世城郭が存在する。庵寺古墳群の潮川を挟んだ対岸には石見銀山の北の守りの要となった石見城跡 (40) がある。また、江戸時代には温泉津湊は西廻り航路の寄港地として多くの北前船の出入りで賑わった。室町時代の末期に始まると伝えられる福光石の採掘加工も 1700 ～ 1800 年代に盛んになり、石工職人の「鑑札」制度が制定され、石工運上金が課せれた [(18)]。石切り場の実態は不明であるが、梨ノ木坂遺跡 (51) からは、18 世紀後半のものとみられる「オオハタ石」と呼ばれる凝灰岩の石切り場 2 基が確認されている [(19)]。

註

(1) 宍道正年 1974『島根県の縄文土器集成』 I
(2) 大国晴雄 1994「古代の社会」『温泉津町誌』上巻　温泉津町誌編さん委員会
(3) 島根県教育委員会 2007『中祖遺跡範囲確認調査報告書』
(4) 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013『年報』
(5) 仁摩町教育委員会 1993『川向遺跡発掘調査報告書』 I
(6) 仁摩町教育委員会 1989『仁摩健康公園造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
(7) 島根県教育委員会 2009『五丁遺跡・庵寺遺跡 I ・於才迫遺跡』
(8) 島根県教育委員会 2010『梨ノ木坂・庵寺古墳群・庵寺遺跡Ⅱ』
(9) 前掲註 (6) に同じ
(10) 島根県教育委員会 1987「坂灘遺跡」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第ⅩⅢ集
(11) 仁摩町教育委員会 1998『清石遺跡外発掘調査報告書』
(12) 島根県文化財愛護協会 1987「新指定文化財二件」『季刊文化財』第 57 号
(13) 山本　清 1972「原始・古代」『仁摩町史』仁摩町
(14) 前掲註 (7) に同じ
(15) 大田市教育委員会 1989『白坏遺跡発掘調査概報』
(16) 前掲註 (6) に同じ
(17) 前掲註 (11) に同じ
(18) 明楽文教 1995「近世編　商工業の発展」『温泉津町誌』中巻　温泉津町誌編さん委員会
(19) 前掲註 (8) に同じ

第 1・2 章　関連発掘調査報告書

島根県教育委員会 2007『平成 18 年度昭代分布調査に伴う遺跡範囲確認調査報告書中祖遺跡範囲確認調査報告書』

島根県教育委員会 2008『一般国道 9 号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 1 中祖遺跡・ナメラ迫遺跡』

島根県教育委員会 2009『一般国道 9 号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 2 五丁遺跡・庵寺遺跡 I ・於才迫遺跡』

島根県教育委員会 2010『一般国道 9 号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 3 梨ノ木坂遺跡・庵寺古墳群・庵寺遺跡Ⅱ』

島根県教育委員会 2011『一般国道 9 号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 4 湯里天神遺跡・牧原Ⅱ遺跡・宇福遺跡』

島根県教育委員会 2014『一般国道 9 号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 5 庵寺古墳群Ⅱ・大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡』（本報告）

第３章　庵寺古墳群の調査

第１節　調査の経過と概要

調査の概要

庵寺古墳群は、島根県大田市仁摩町大国に所在する。仁万平野を西流する潮川の河口から約2.2kmの距離にある。遺跡は潮川が形成した沖積地の水田耕作地帯（標高７～８m）に突き出た丘陵（標高 50 ～ 80m）の馬蹄状に伸びた尾根に立地する。仁万平野一帯を見下ろし、日本海を望む眺望の良い丘陵である。また遺跡の裾部の水田地帯では、縄文時代晩期の集落後や弥生時代の土坑、奈良平安時代の条里制畦畔の遺構等が検出されている。

庵寺古墳群は、平成 20(2008) 年度の調査により、箱式石棺を埋葬施設とする前期古墳２基と土器棺墓１基、横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳１基を検出した。その際、同一尾根上に更に古墳が７基あることが確認された。また、調査区に隣接する道路用地内で弥生時代中期～後期にかけての土器片と古墳時代以降の土師器、須恵器が出土する包含層が検出された。そのため、平成 23 ～ 24(2011 ～ 2012) 年度の２カ年で道路予定地内を更に調査することとなった。調査の結果、新たに丘陵尾根上で前期～中期を主体とする時期に築造された古墳 21 基（5 ～ 25 号墳）と、急峻な丘陵斜面で弥生時代中期末～後期の加工段状遺構 31 基、竪穴建物跡２棟などの遺構を検出した。これらの遺構は、その立地状況から弥生時代中期末～後期の高地性集落と考えられる。

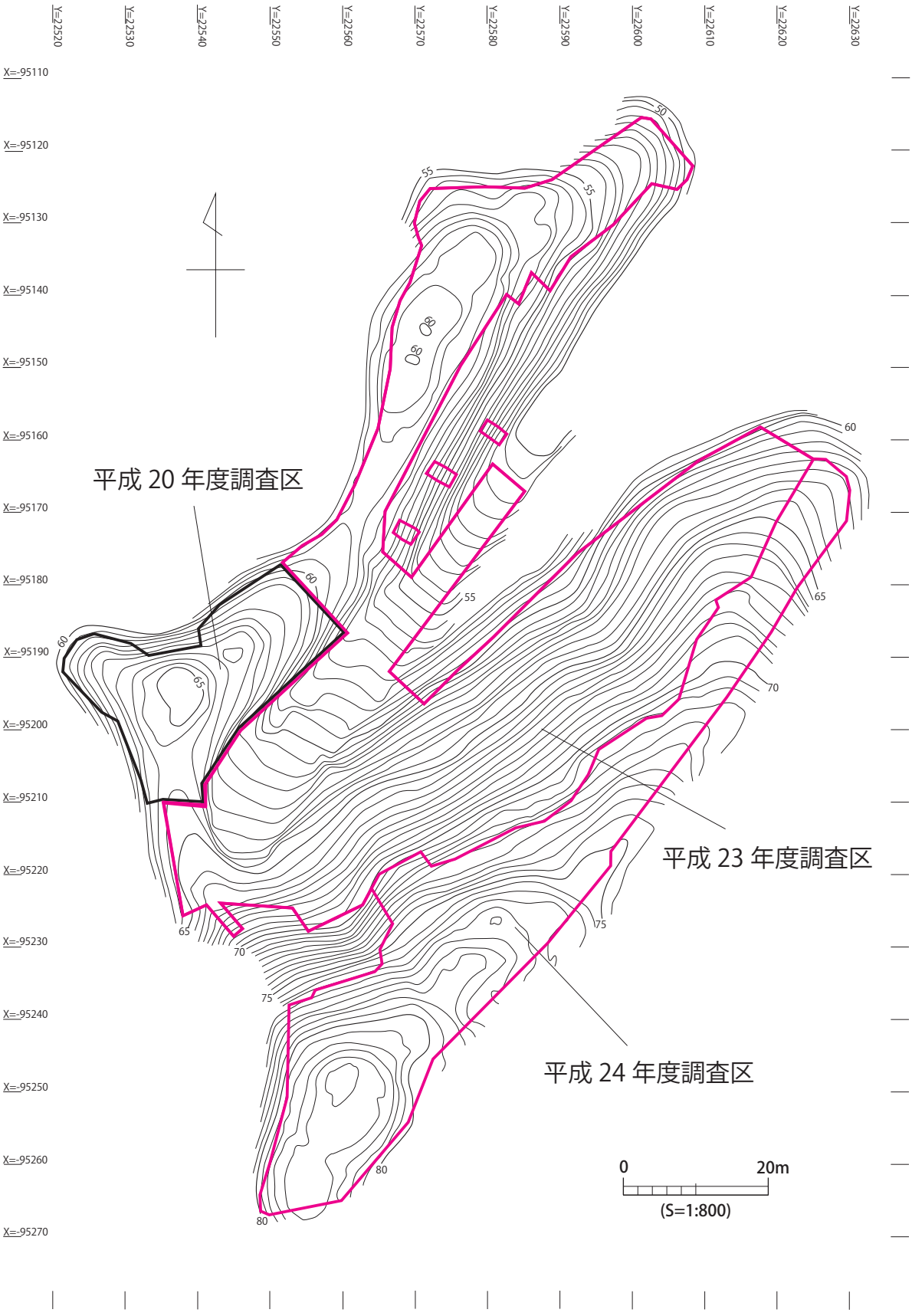
平成 23（2011）年度の調査経過

平成 23 年度は、北側丘陵部と谷部、南側丘陵部斜面について調査を実施した。調査区は標高約 60 mにあり、勾配が急な進入路を調査機材を携え歩いて登り降りしなければならない過酷な場所にある。調査対象範囲が広いため（4,500㎡）、調査区を２つに分け、尾根上の古墳群を１区、丘陵斜面部と谷部を２区とした。

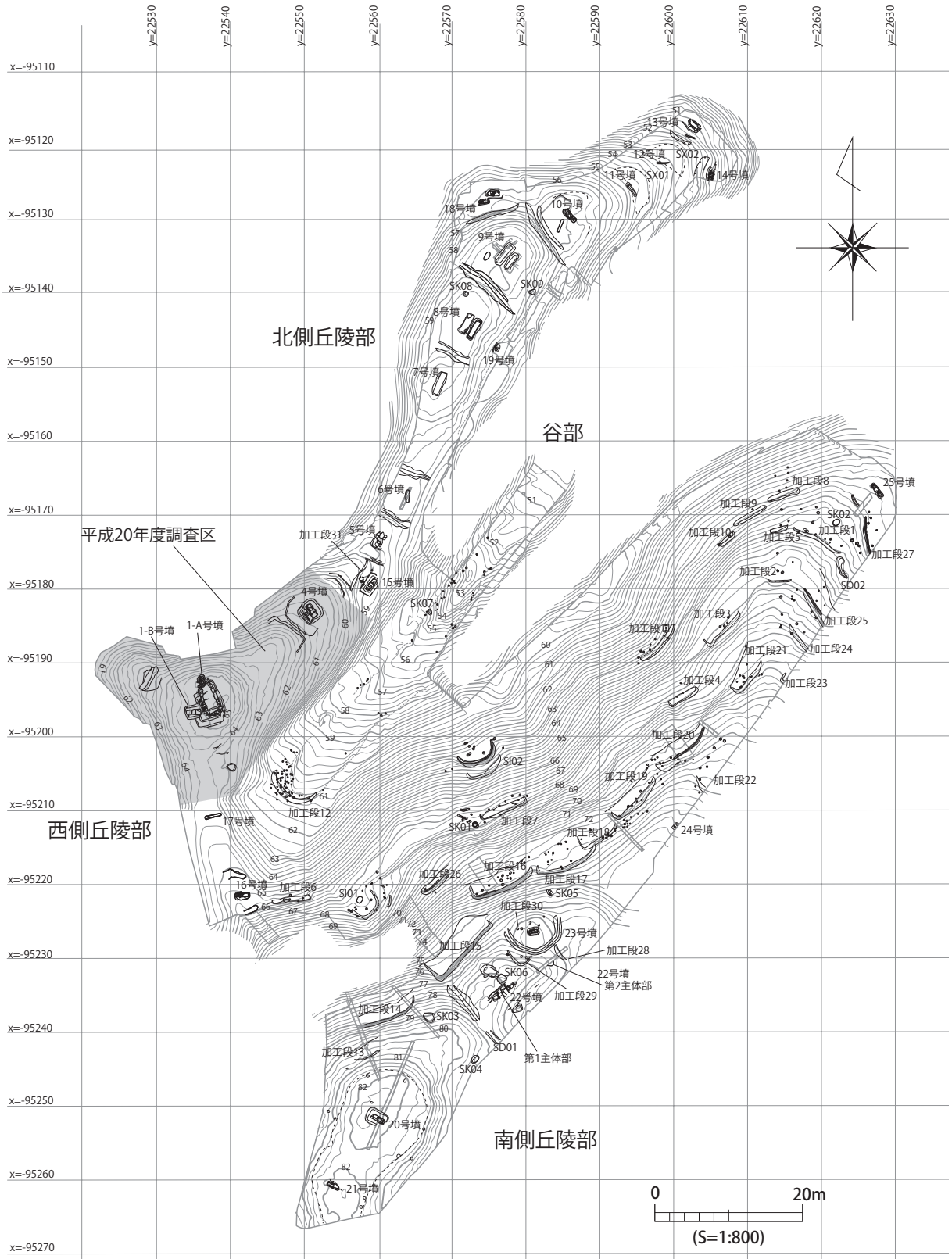
調査前の状況は、１区は墳丘とみられる高まりや平坦面、尾根に直交する溝が存在していた。そのため、尾根頂部から北東の尾根先端方向へ仮５～ 12 号墳として、グリッドを設置した。２区は、北側丘陵部と南側丘陵部に挟まれた谷部と広い斜面である。斜面は全体的に急峻で、調査が不可能と思われる切り立った斜面もあった。

調査は６月６日から開始、当初１区と２区を交互に進めることにし、まず２区から着手した。斜面にトレンチを 14 箇所設置し、遺構や遺物の有無を確認して調査範囲を絞り込んだ。そして、南側丘陵部斜面上部から谷部までを４段に分け、重機による斜面上部１段目の表土剥ぎから始めた。斜面１段目の包含層から弥生時代中期末～後期前葉の土器が出土し、加工段状遺構を検出した。次に、１区の調査に取りかかり、腐食土を除去し、尾根の北東先端部から表土掘削を始めた。尾根先端部から 13 号墳石棺の石組を検出し、7・8・10 号墳から古墳時代前期の土器が出

庵寺古墳群への進入の様子



第 5 図　庵寺古墳群調査前測量図



第 6 図　庵寺古墳群遺構配置図

土した。続いて２区斜面の２段目の調査に移り、西端部の包含層から弥生後期前葉の土器が大量に出土し、竪穴建物跡（ＳＩ01）を確認した。

そうした中、８月７日には埋蔵文化財調査センターの活用事業である「いにしえ倶楽部・親子で発掘体験」を開催し、約 50 人の親子連れで賑わった。真夏の暑い中、２区の谷部と SI01 で親子が汗を流しながら熱心に発掘作業を体験した。土器を見つけると「やった～」という喜びの声が上がり、黒曜石の石鏃を見つけた子どもは満面の笑みを浮かべていた。

８月８日からは、１区で遺構検出を進め、13 号墳の南側から 14 号墳の箱式石棺、10 号墳の周溝や墓壙を検出した。

８月下旬からは、１区と２区を並行して調査を進めることとなった。谷を挟んで離れた１区と２区との間で、調査員同士が連絡を取りあったり、行ったり来たりすることは一苦労だった。１区では遺構検出を続け、９号墳墳頂部から古墳時代前期の土器棺墓を検出した。２区では、次々と加工段状遺構を確認し、弥生後期前葉の土器片や柱穴を検出した。９月上旬、古墳の存在を全く想定していなかった２区西端の尾根で 16 号墳の箱式石棺を検出、その北側で 17 号墳の主体部も検出し、滑石製臼玉が出土した。１区では、９月中旬に５号墳の石棺を検出して以降、次々と主体部のプラン（６～９号墳）や 15 号墳の箱式石棺を検出した。たくさんの遺構の存在が明確になったため、調査補助員を１名増員することになった

調査が進むにつれて、主体部の埋葬施設に箱式石棺（5・10・13・14・15・16 号墳）、組合せ式木棺（7・8・9 号墳）を採用するものがあることが判った。箱式石棺でもそれぞれ特徴があり、13・14 号墳は流紋岩、他の箱式石棺は凝灰岩を石材とし、５号墳は棺底に礫敷きをもち、15 号墳は板石を並べている。このように１つ１つの古墳にそれぞれの特徴があり、特に９号墳は９×10 ｍの方墳で、厚さ 70cm の盛土によって構築され１区の中では最大の規模をもっている。並行する２つの組合式木棺と土器棺の３つの主体部があり、第１主体部の長さ約 2.7 ｍの木棺内部からは水銀朱が検出され、鉄剣が出土した。前期中葉に築造されたと考えられることから、当古墳群では最古の古墳である。

庵寺古墳群に対する地元住民の方々の関心は高く、11 月８日には仁摩公民館主催の「仁摩ふるさと講座」の受講者約 30 名が見学、11 月 12 日には大国まちづくりセンター主催の「庵寺古墳群説明発掘体験会」の参加者約 20 名が見学と発掘作業を体験するために現場を訪問された。12 月 10 日には現地説明会を開催した。前日から雨で現場は滑りやすく危険なため、作業員詰所で遺跡の説明と出土品展示を行うこととなった。約 100 名の参加者を得て賑わった。

12 月 12 日には空中写真撮影を実施。その後、墳丘を精査する過程で、８号墳の第２主体部、９号墳の墳裾を削平して築造された 18 号墳の石棺が検出された。調査期間終了間際になってこれらの遺構が検出されたため、急遽４名の調査員・調査補助員の応援を求めることになった。冷たい強風の下、雪や雨で非常に滑りやすくなった現場での調査は困難を極めたが、１月 14 日に現地調査を終了した。

調査の結果、最終的に計 15 基の古墳（5 ～ 19 号墳）と弥生時代中期末～後期前葉の竪穴建物跡２棟と加工段状遺構 13 基（1 ～ 12・31 号）を検出した。また、谷部の包含層からは、弥生土器のほか土師器や須恵器、石器類が出土した。

平成 24（2012）年度の調査経過

平成 24 年度は、平成 23 年度調査区に隣接する南側丘陵部の尾根上（標高約 80 ～ 60 m）について調査を実施した。前年度調査区より更に標高が高くなり、調査区への登り降りはますます大変なものになった。しかし、日本海を遠くに望みながら、眼下に古代の仁摩（昨年度調査した古墳群）、現代の仁摩（街並みと水田）、そして未来の仁摩（建設中の高速道路）を一度に見ることができる感慨深い風景が広がっていた。

調査前の状況は、尾根南西の最頂部とその北東に墳丘とみられる高まりが存在していた。調査は 6 月 19 日から開始。まず、掘削前の地形測を行い、仮 20 ～ 22 号墳としグリッドを設定した。6 月 29 日に尾根頂部から表土掘削を開始した。重機が進入できないこともあり、調査員と作業員が力と心を合わせ、人力でベルトコンベアを抱えて設置した。仮 20 号墳とした墳頂部から土師器片が出土したが、 8 月に入り日中の気温は高く、風も無く、直射日光の下での作業は暑さとの闘いであった。雨も殆ど降らず、地表は極度に乾燥し遺構検出は困難を極めた。仮 20 号墳の墳頂から 2 つの主体部を検出し、それぞれ 20・21 号墳とした。20 号墳北側の斜面からは、弥生中期末～後期前葉の土器片が集中して出土し、加工段 13 を確認した。また、23 号墳から箱式石棺を確認し、付近から滑石製勾玉が出土した。 9 月に入り、調査区北東方向へ包含層の掘削を進めると、斜面から次々と加工段状遺構が確認され、逐次精査を行った。並行して 20・21・23 号墳の主体部の調査を進めた。加工段状遺構は 10 月末までに 8 基が検出され、中でも加工段 14・15 は斜面を約 1 mも深く掘り込んだ長さ約 10 m、幅 3 mの大きなものである。土器は多数出土したにもかかわらず、柱穴は確認できなかったことから、住居とは異なる機能が想定される。20 号墳は盗掘を受けていたが、床面から石棺の石材の一部と礫敷きの広がりを検出したことから、埋葬施設は礫床の可能性をもつ箱式石棺と考えられた。また、23 号墳は周溝をもち箱式石棺を埋葬施設とする径約 7 mの円墳であることが分かった。そして 10 月末、22 号墳の主体部の埋葬施設をようやく検出することができた。長さ約 3.5 mの刳抜式木棺を直葬したもので、棺の合わせ目を粘土材で目張りをした痕跡を確認した。その後の調査で 22 号墳は古墳中期に築造され、現状で約 1 mの盛土によって構築された一辺約 11 mの方墳であることが分かった。

11 月 17 日には、現地説明会を開催した。あいにくの雨となり、現場は滑りやすく危険なため、またしても作業員詰所で遺跡の説明と出土品の展示となったが、約 50 名の参加者を得た。また、11 月 24 日には、大国まちづくりセンター主催の「庵寺古墳群説明会」が開催され、25 名の地元の住民の方々が現場を見学された。

11 月 28 日に空中写真撮影を実施。12 月に入り、調査区北東端で 25 号墳の石棺が確認され、調査範囲を拡大することになった。強風の下、雪も降り始め寒さがますます厳しくなる中、21・22 号墳の墳丘を掘削し、22・23 号墳の墳丘盛土下からそれぞれ加工段 29・30 号を検出した。

12 月 27 日、現地調査を終了した。調査の結果、最終的に尾根上から概ね前期末～中期前半に築造したと考えられる古墳 6 基（20 ～ 25 号墳）と、斜面から弥生時代中期末～後期の時期と考えられる加工段状遺構 18 基（13 ～ 30 号）を確認した。

翌年の 3 月 10 日には「新発見！あなたの街の発掘調査 in 大田」と題し、大田市の石見銀山世界遺産センターで調査成果の報告会を開催した。

調査の経過

平成 23(2011) 年度

6 月　6 日　現場作業開始
6 月 23 日　大国まちづくりセンター職員見学（3 名）
8 月　7 日　いにしえ倶楽部「親子で発掘体験」（参加者 50 名）
11 月　8 日　島根県立三瓶自然館サヒメル学芸員　中村唯史氏による石材の鑑定
仁摩公民館「仁摩ふるさと講座」受講者見学（参加者 30 名）
11 月　9 日　島根大学准教授　岩本　崇氏の調査指導会
11 月 12 日　大国まちづくりセンター「庵寺古墳群説明発掘体験会」（参加者 20 名）
11 月 24 日　出雲弥生の森館長　渡邊貞幸氏の調査指導会
12 月　2 日　島根県文化財保護審議会委員　田中義昭氏の調査指導会
12 月 10 日　現地説明会（参加者 100 名）
12 月 12 日　空中写真撮影
1 月 14 日　現場作業終了

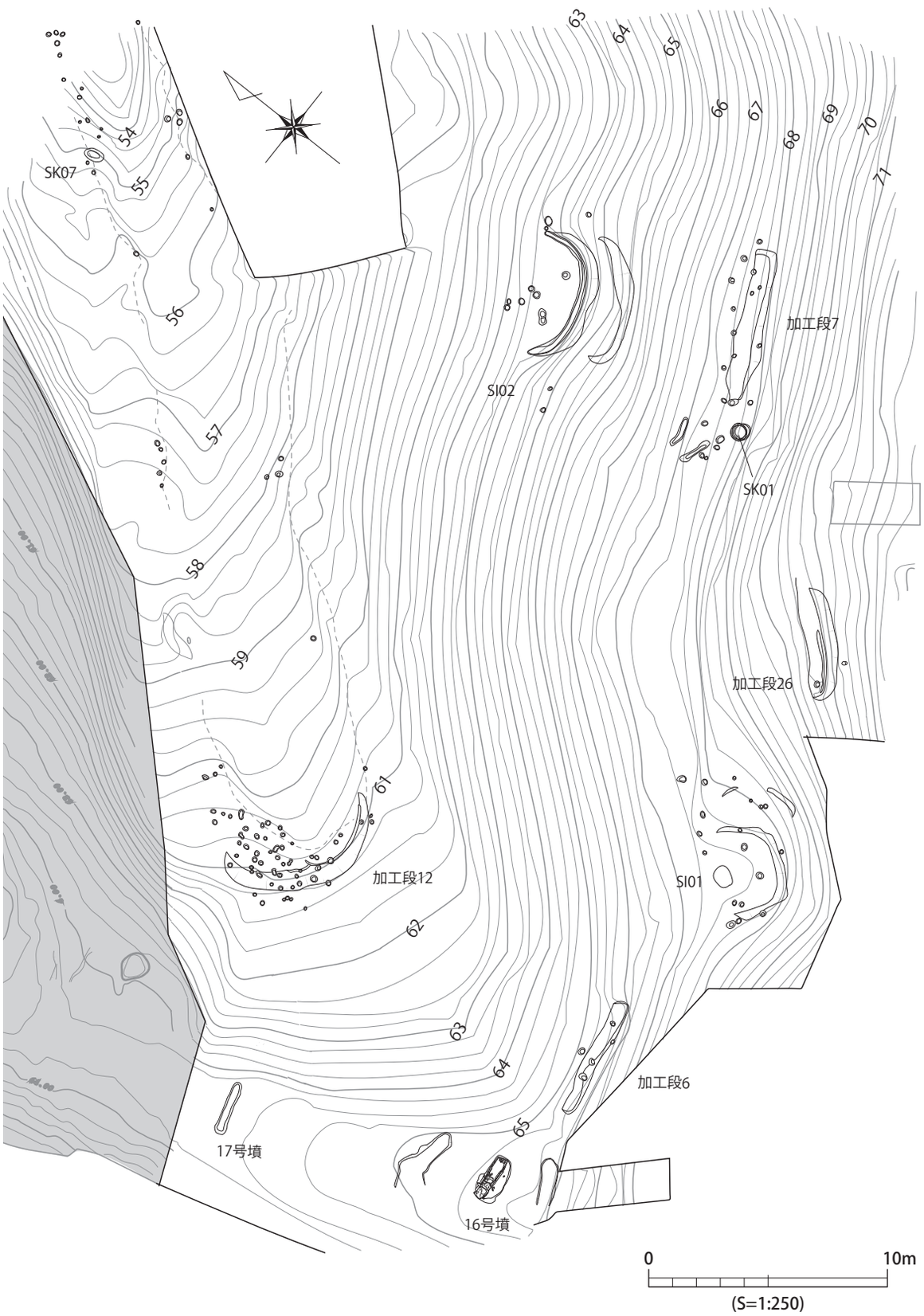
平成 24(2012) 年度

6 月 20 日　現場作業開始
11 月　7 日　出雲弥生の森館長　渡邊貞幸氏の調査指導会
11 月 16 日　島根大学准教授　岩本　崇氏の調査指導会
11 月 17 日　現地説明会（参加者 50 名）
11 月 24 日　大国まちづくりセンター「庵寺古墳群説明会」（参加者 25 名）
11 月 28 日　空中写真撮影
12 月 27 日　現場作業終了
3 月 10 日　大田市内発掘調査報告会「新発見！あなたの街の発掘調査 in 大田」（参加者 60 名）

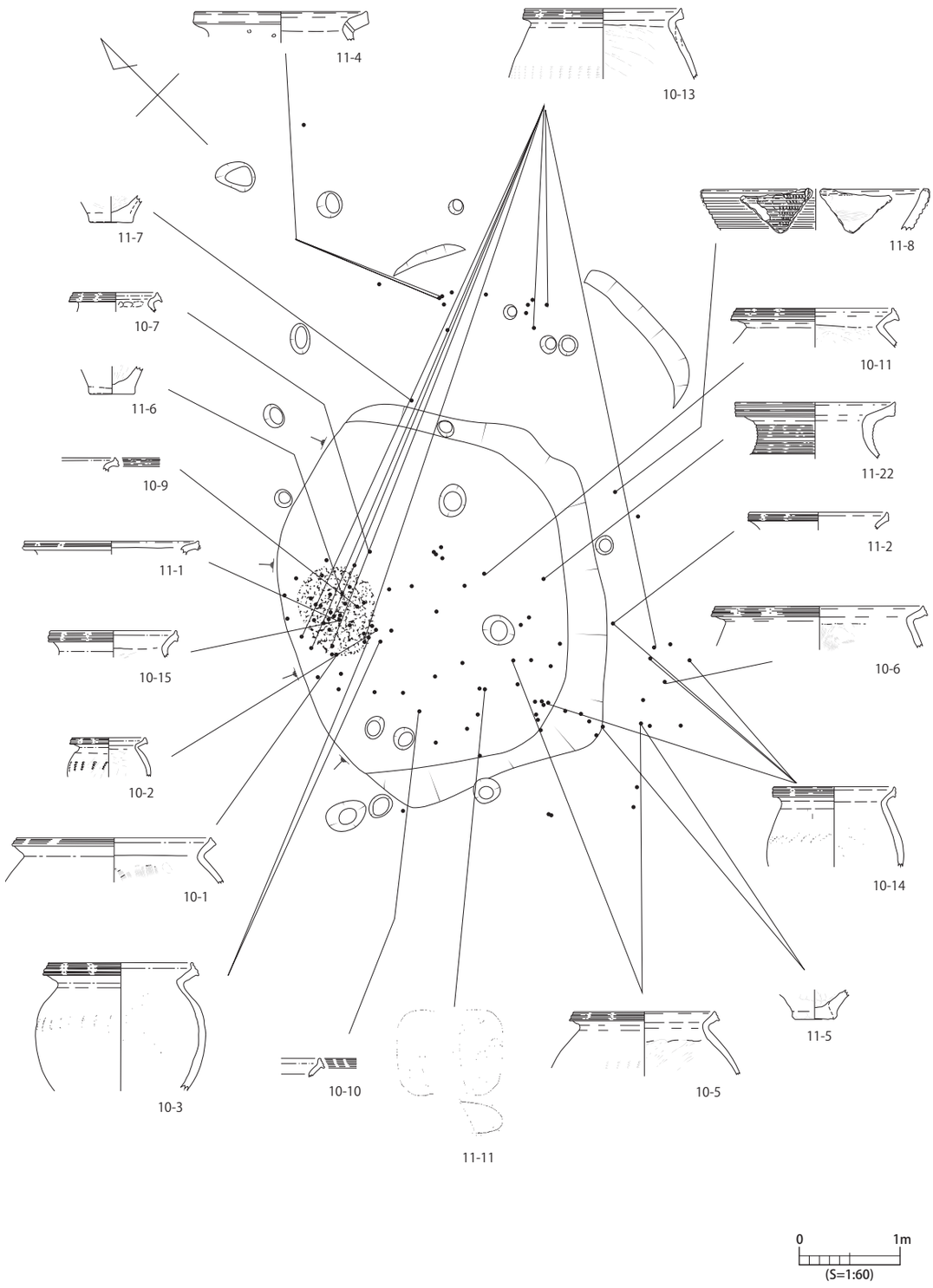
「いにしえ倶楽部　親子で発掘体験」の様子

第２節　弥生時代集落の調査

前節でも述べたように、今回の報告は２カ年分の調査成果を含んでいるが、検出された遺構の内容や性格はほぼ共通しており、一体のものと考えられることから年次ごとの概要を追うのではなく、



第７図　庵寺古墳群 SI01・02、加工段６・７・26、SK01 配置図



第 8 図　庵寺古墳群 SI01 遺物出土状況

合わせて報告を行っている。

当遺跡では遺跡名でもあるように尾根筋の古墳群の調査を主体としていたが、丘陵斜面部から弥生時代中期～後期の集落跡も検出されている。概略を述べると、竪穴建物跡２棟、加工段状遺構 31 基、溝状遺構２基、土坑９基を検出した。特に竪穴建物跡や加工段状遺構は谷部から南側丘陵

第 9 図　庵寺古墳群 SI01 実測図

部の斜面～尾根筋に渡って広く展開しており、加工段 31 のみが北側丘陵部に立地する。ここでは各遺構の配置から、谷部西端部から標高 63 ～ 71m 付近に位置する第 1 群、調査区東端部の斜面から尾根筋にかけて位置する第２群、尾根筋から斜面への傾斜変換地点の標高 71 ～ 73m 付近に位置する第３群、丘陵最頂部の尾根筋西端部に位置する第４群に分け、それぞれ竪穴建物跡、加工段状遺構、溝状遺構、土坑の順で概要を述べる。

また尾根筋では多くの遺構が調査区外に伸びていることから、本来の集落はさらに南東側に広がるものと思われる。

第１群の遺構（第７図）

１．竪穴建物跡の調査

南側丘陵部の尾根筋から斜面にかけて加工段状遺構は多数検出されているにかかわらず、明確な竪穴建物跡はわずかに２棟しか検出されていない。また２棟とも調査区西端部の谷部奥に面した斜面に立地することが、当遺跡の弥生集落の特徴を示しているといえる。

ＳＩ０１（第８・９図）

南側丘陵部の北向き斜面に立地する住居跡である。調査区のほぼ西端部に位置し、床面の標高は 67.5 mを測る。

急峻な斜面に立地するため全体の約半分は流出している。床面の形状は判別しづらく基本的には隅丸方形プランの建物跡と思われるが、北側の壁面がかなり湾曲していることと、主柱穴が明確な４本柱を示していないことから、不正な多角形の様相を呈している。掘り方の南北方向の規模は約 4.05 mで、床面では 3.47 mを測る。床面壁際で検出されたピットを主柱穴とすれば、柱間は約 1.4 ～ 1.7 mである。

壁際には壁帯溝が検出されていない。床面の斜面寄りでは炭が集中して広がる範囲があり、一部に焼土面も確認できることから地床炉の痕跡と考えられる。また住居跡の東外側には段差を確認することができるが、建物に付設する平坦面もしくは外周溝であった可能性もある。

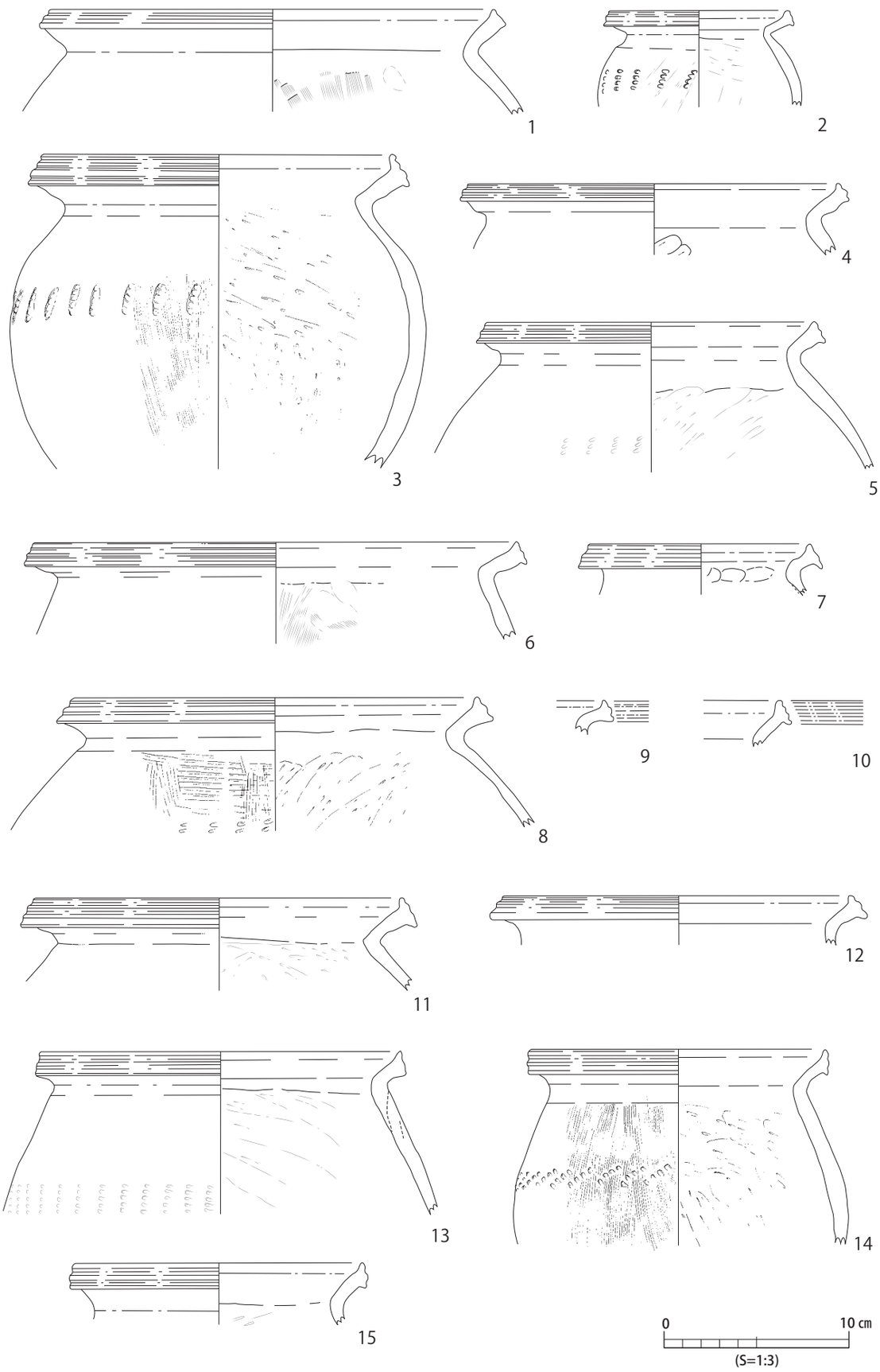
ＳＩ０１出土遺物（第 10・11 図）

遺物は建物内外から多量に出土しており、特に床面の地床炉付近で集中的に検出されている。

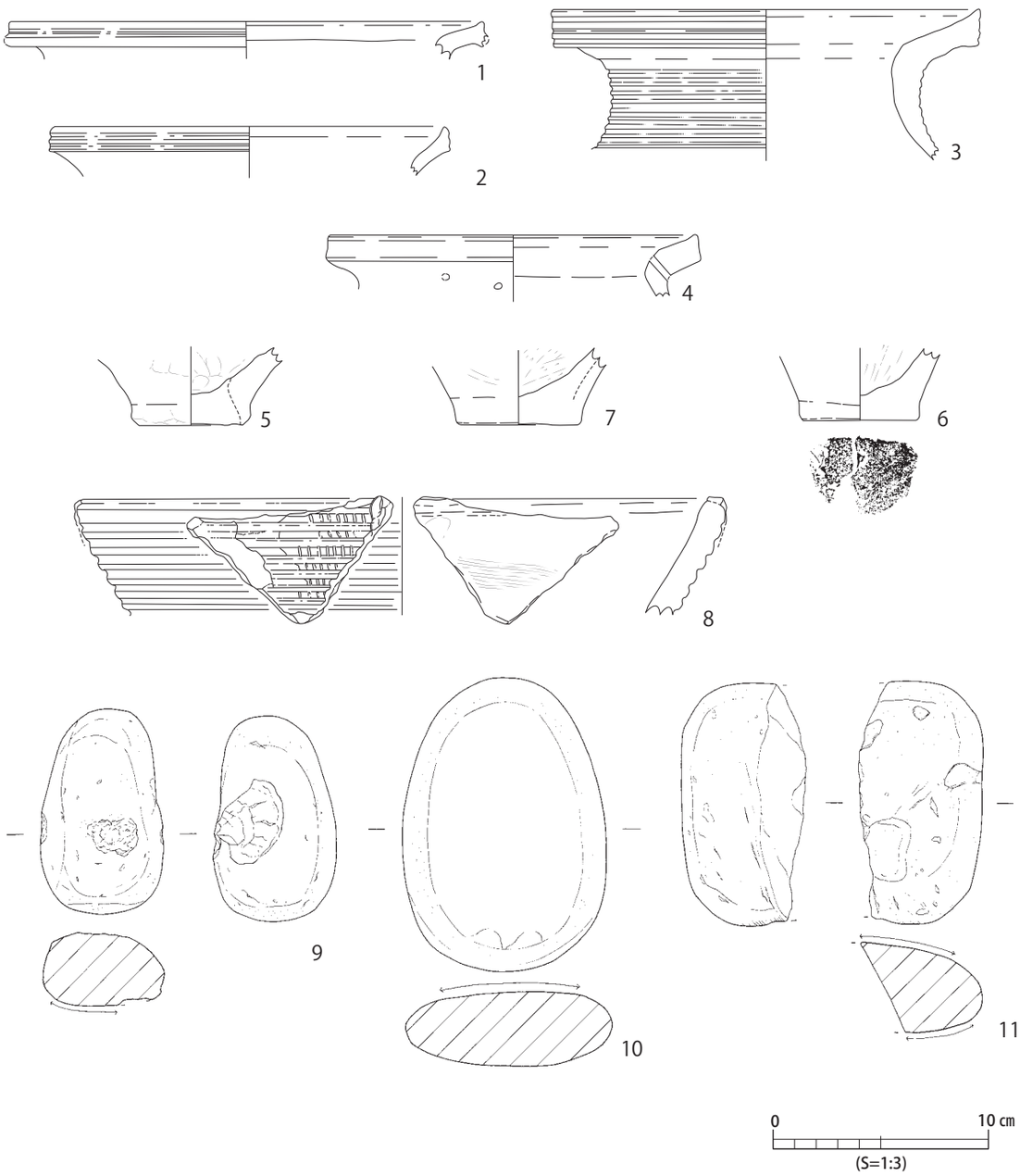
第 10 図 1 ～ 12 は甕であり、口縁が内傾して立ち上がり、外面に２～３条の凹線文を施すものである。 1 は口縁の上下端部があまり拡張せず、胴部内面にはハケ調整が施されている。２～ 12 は口縁の両端部が上下に拡張し平坦面をもつタイプである。２は復元口径 9.8cm の小型の甕で、胴部にはハケ状工具による連続刺突文が施される。３は復元口径 19cm の甕で、丸みを帯びた胴部に連続刺突文が施される。６は内傾気味の口縁を若干拡張させており、胴部内面はハケ調整が施される。８は復元口径 21.8cm の甕で、胴部外面にはタタキの後、ハケ調整や列点状の刺突文が施される。

第 10 図 13 ～ 15 は口縁が直立気味に立ち上がり両端部を拡張させ、外面に凹線を２～３条施すタイプの壺・甕類である。13・14 は肩部が張らずハの字上に胴部が垂下するタイプで、外面にハケ調整や列点状の連続刺突文が施される。

第 11 図 1 ～ 4 は口縁が直立気味に立ち上がり、端部がさほど拡張しないタイプの壺・甕類であ



第 10 図　庵寺古墳群 SI01 出土遺物実測図 (1)

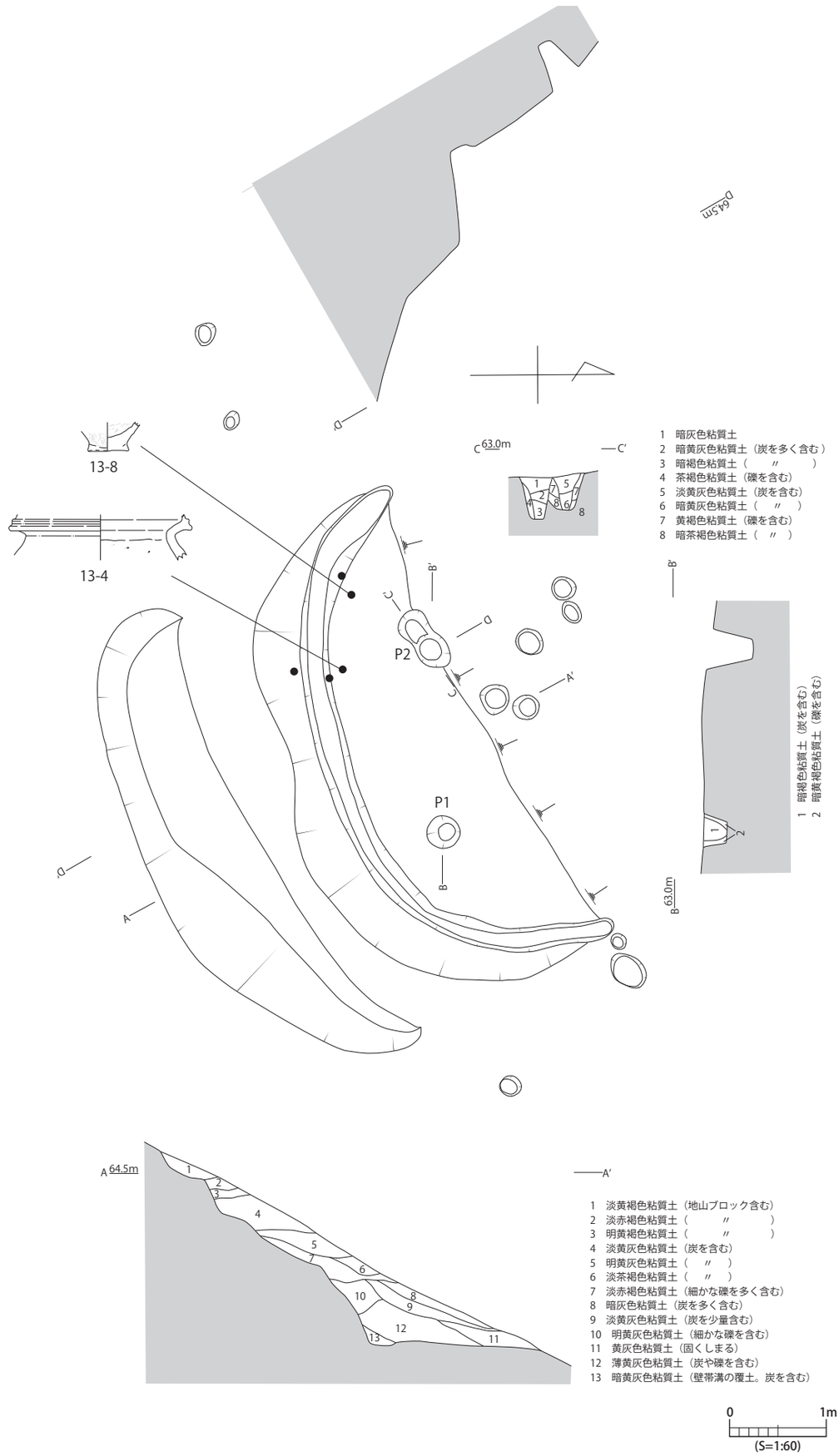


第 11 図　庵寺古墳群 SI01 出土遺物実測図 (2)

る。３は頸部がやや長く直立するタイプの壺で、復元口径は 20.0cm である。直立する口縁外面の他、頸部にも 10 条以上の凹線が施されている。４はやや厚手の甕で、口縁が拡張せず施文もみられない。頸部にはナナメ方向の貫通孔が２箇所で確認できる。

５～７は底部資料である。いずれも平底で、底部と胴部の境が明瞭である。６は底面に板目状のスタンプが確認できる。８は厚手の鉢である。外面に刻み目をもつ凹線文が７条以上施され、貼り付けられた棒状浮文もみられる。

９～ 11 は石器で、いずれも円礫を用いた敲石・磨石類である。９は表面と両側面に敲打痕があり、裏面には磨面も認められる。10 は長さ 13.6cm、幅 9.6cm を測り、表面に磨面が認められる。



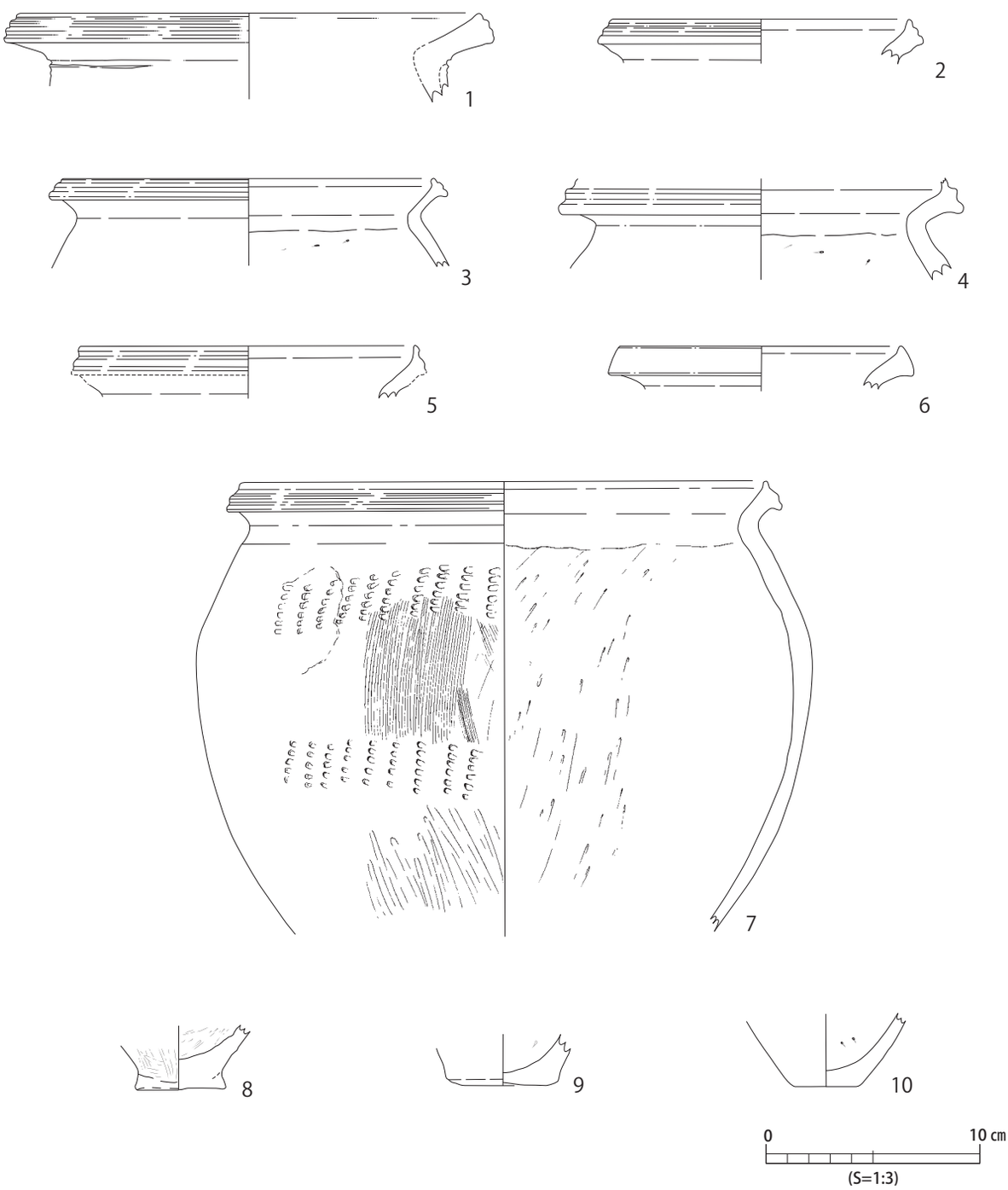
第 12 図　庵寺古墳群 SI02 実測図

11 は半分ほど欠損するが、表裏面に磨面が確認できる。

これらの土器は破片資料がほとんどで、覆土と床面出土品との区別が困難であったが、型式的に古い様相をもつ第 10 図 1 ・6、第 11 図 8 を除けば、概ね松本編年の石見Ⅴ－ 1 様式とみられることから、ＳＩ 01 の時期は後期前葉と考えられる。

ＳＩ０２（第 12 図）

南側丘陵部斜面の中央からやや西寄り、ＳＩ 01 から東へ約 20 mに位置で検出された。床面の標高は 62.5 mを測り、立地的には谷底部にほど近く、床面に立つと北側丘陵部に遮られ平野部を望むことができない。



第 13 図　庵寺古墳群 SI02 出土遺物実測図

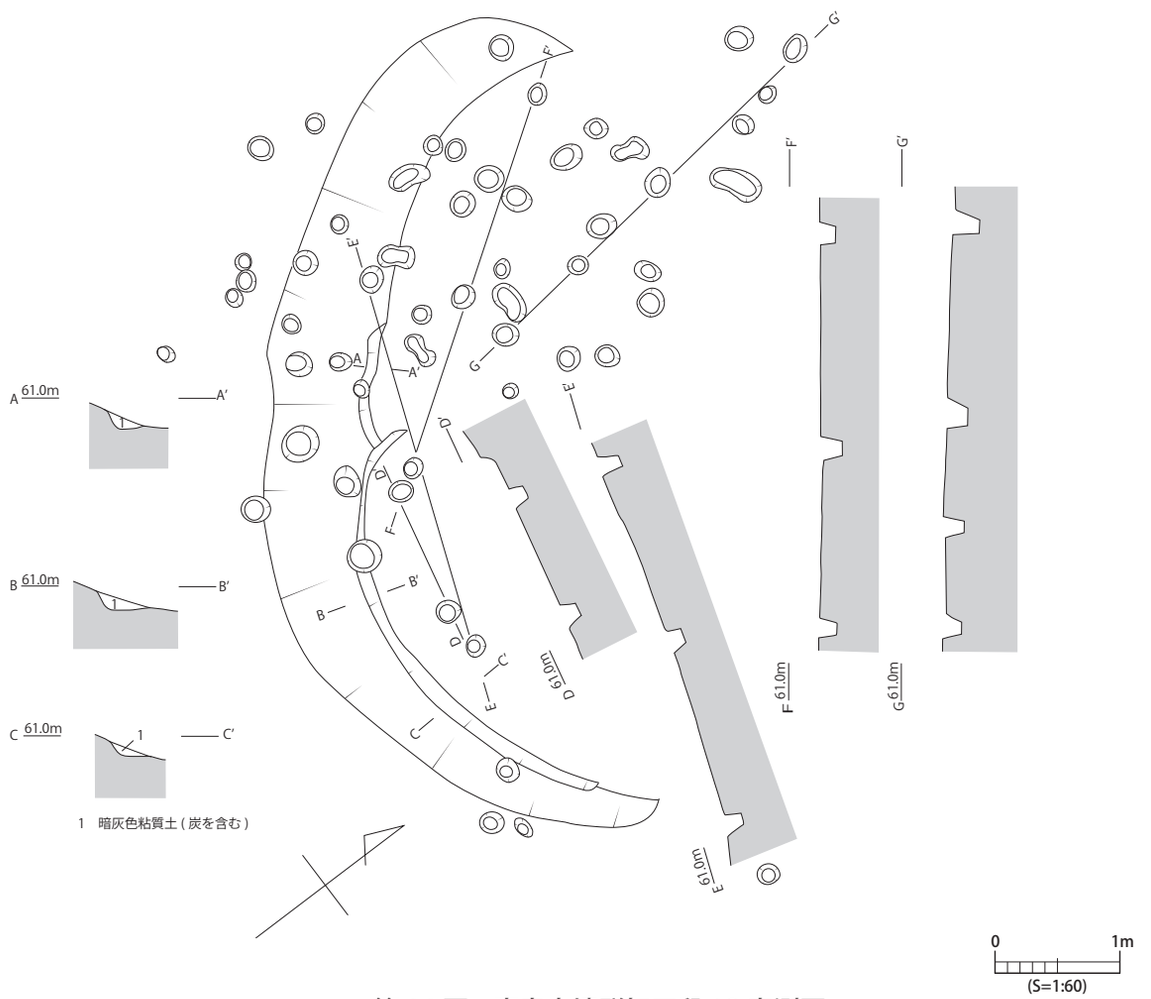
急峻な斜面に立地するため全体の約 2/3 は流出しているが、床面の形状は基本的には隅丸方形プランの建物跡と思われる。床面の規模は残りのよい南壁部分から一辺約 4.5 mを測る。Ｐ１とＰ２を主柱穴とし、流出した２本を加えた４本柱構造だったとみられる。Ｐ２は同じ場所で建て替えを行っており、Ｐ１とＰ２の柱間は約 1.4 ～ 1.7 mで 1.9m を測る。残りのよい南壁部分の掘り方の深さは約 80cm を測り、壁際には幅 30cm 前後の壁帯溝が廻る。また炉跡は流出のため検出することができなかった。

この他、南壁の掘り方の斜面上方からは、本建物跡と類似する形状の平坦面が検出されており、床面の幅は約 4.6m を測る。遺構を俯瞰すれば建て替えの痕跡とも見受けられるが、平坦面と建物跡床面との比高差は約 130cm を測り、層位的にも平坦面を掘り込んだ痕跡は認められないことから、建て替えとするには不自然な感が否めない。従って、この平坦面の機能は明確でないが、建物部分に附属する施設の可能性があり、斜面に造られた竪穴建物の構造を垣間見ることができる [(1)]。

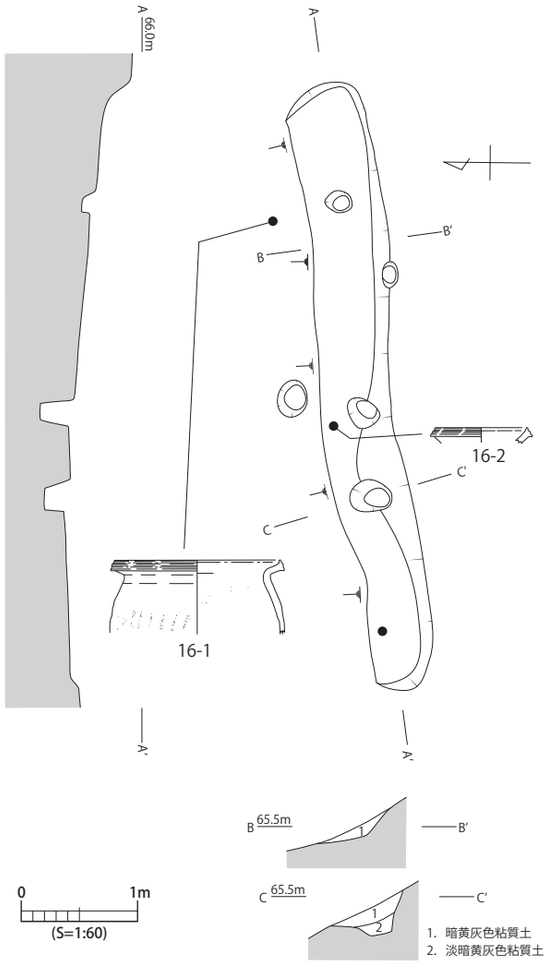
ＳＩ０２出土遺物（第 13 図）

出土遺物はさほど多くないが、４と８が床面出土資料である。またＳＩ 02 の斜面上方には加工段７が立地しており、上層出土資料は加工段７からの流出資料を含んでいる可能性がある。

１～６は壺・甕類の口縁部である。１・２は口縁端部の拡張がほとんどなく、外面に凹線を２～３条を施すものである。３～５は内傾するの端部が上下に拡張するタイプで、胴部内面にはヘラケズリの痕跡が認められる。６は口縁端部を若干拡張させるが、外面に施文はみられない。



第 14 図　庵寺古墳群加工段 12 実測図



第 15 図　庵寺古墳群加工段６実測図

７は口径 24.4cm を測る甕である。肩部が張り底部にかけてすぼまる形状である。口縁外面に２条の凹線文、胴部にはハケ調整やヘラミガキの後、列点状の連続刺突が２段に渡って施される。

８～９は底部資料である。いずれも平底で、底部と胴部の境が明瞭である。８は底面が台状に肥厚する。鉢形土器の底部であろうか。

これらの土器は石見Ｖ－１様式とみられ、ＳＩ 02 の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

２．加工段状遺構の調査

斜面を水平に加工し平坦面が形成された遺構を加工段状遺構としている（以下、加工段）。

加工段の残存状況は総じて良好ではないため、柱穴が並び掘立柱状建物が存在したとみられるものの他、現状でピットが明確な並びを示さないものやピットが検出されなかったものも含んでいる。

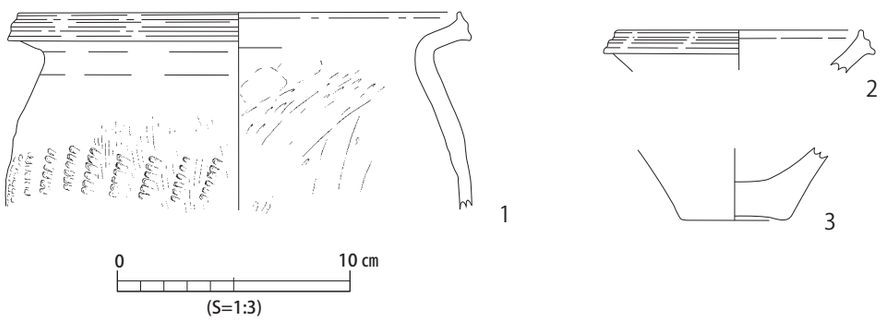
以下、検出順に通し番号を付けたため繁雑になるが、第１群から４群にかけて概要を述べる。

加工段 12（第 14 図）

丘陵斜面部でなく、谷部底面で検出された加工段である。幅 15m に満たない狭長な谷状地形の最奥部に立地しており、他の住居状遺構とは隔絶したような位置にあることが特徴的である（第７図参照）。標高は 61m であり、周囲の見通しは悪い。

大部分が流出しており、残存状況も良好とは言えないが、現状で幅約 6.5 mの浅い掘り方が認められ、掘り方の底面や周辺で多数のピットが検出された。

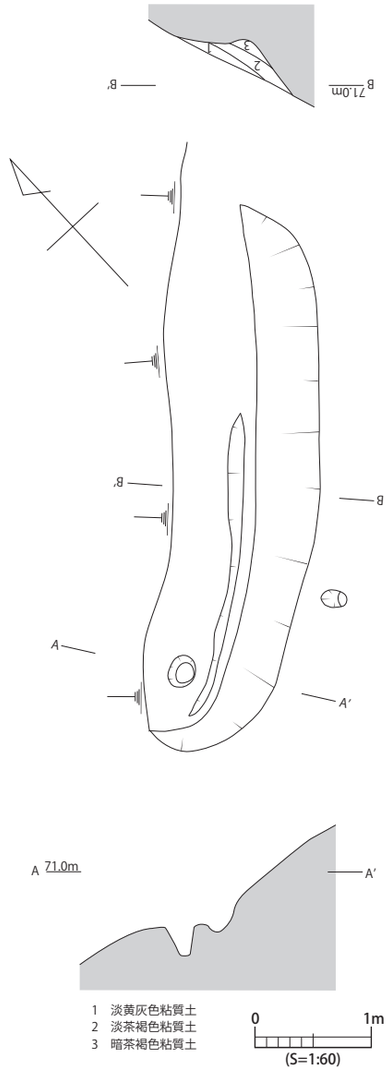
掘り方の形状はあたかも竪穴建物跡の隅丸方形プランを呈するが、プランの中央付近で掘り方が重なっていることが認められることから、多数のピット群と併せ、少なくとも２度以上は建て替え



第 16 図　庵寺古墳群加工段６出土遺物実測図

が行われた痕跡がうかがえる。いずれも明確な建物の並びを示さず、不確定な様相も多いが、現状では掘立柱状の建物が存在していたことを想定し 4 箇所ほど 2 間程度の柱列を復元してみた。柱間は 1 ～ 1.7m を測るが、柱穴の深さはいずれも 20cm 程度である。

出土遺物が無く、遺構の所属時期は不明であるが、あたかも意図的に見通しの悪い谷底部に配置されたような感もあり、他の弥生時代の遺構群との関連性は高いように思われる。



第 17 図　庵寺古墳群加工段 26 実測図

加工段 6（第 15 図）

加工段 12 から約 15m 南の斜面に位置する加工段である。床面の標高は 65.4m を測る。

遺構の残存状況は悪く、大部分が流出している状況である。残存する平坦面の長さは 5.2m、幅は 52cm を測る。平坦面や周辺で検出されたピットは明瞭な配列を示しておらず、建物が存在したかの判断は難しい。

加工段 6 出土遺物（第 16 図）

平坦面や斜面下方から土器が出土している。 1 は復元口径 18.8cm の甕である。内傾気味に立ち上がる口縁の端部は上下に拡張し、外面に 2 条の凹線が施される。胴部外面にはハケ調整の後、ハケ状工具による連続刺突文が施される。 2 は復元口径 14.4cm の小型の壺とみられ、内傾する口縁外面に 2 条の凹線が施される。 3 は壺・甕類の底部であり、底面は平底である。

出土遺物は多くないが、 1 の特徴は石見Ｖ－ 1 様式とみられ、加工段 6 の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

加工段 26（第 17 図）

加工段 6 から約 15m 東、ＳＩ 01 から約 5 m東の斜面に位置する加工段である。床面の標高は 70.5m を測る。

同様に遺構の大部分が流出している状況にある。残存する平坦面の長さは 5.2m、幅は 79cm を測る。壁面に沿って幅 14cm の壁帯溝が認められ、床面の西端から深さ 14cm のピットが 1 点検出されており、本来は建物が存在した可能性がある。

出土遺物は無く所属時期は不明だが、立地的に他の遺構と概ね同時期のものと推測される。

加工段 7（第 18 図）

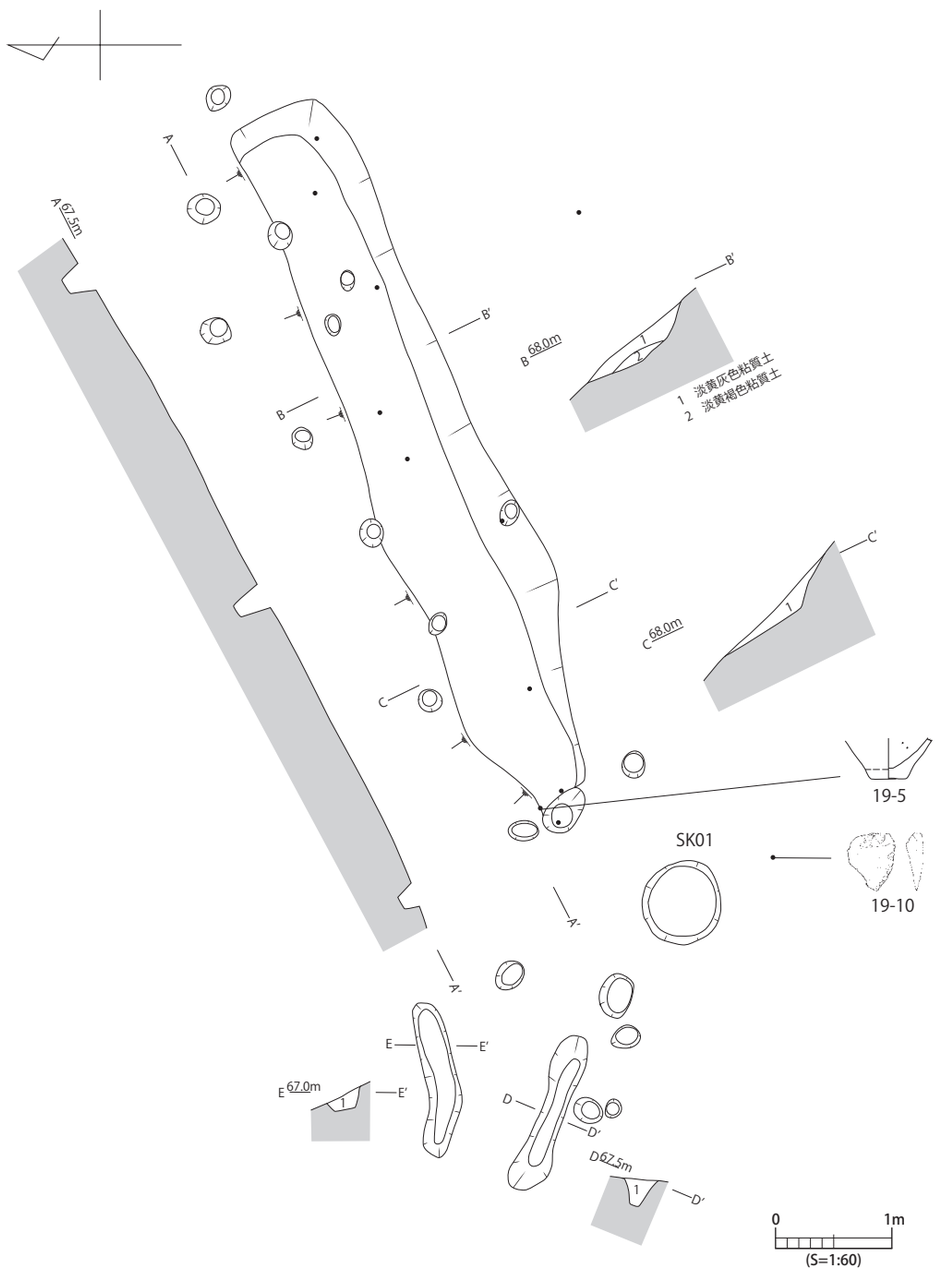
加工段 6 から約 10m 東、ＳＩ 02 のほぼ真上の斜面に位置する加工段である。床面の標高は

67.5m を測る。

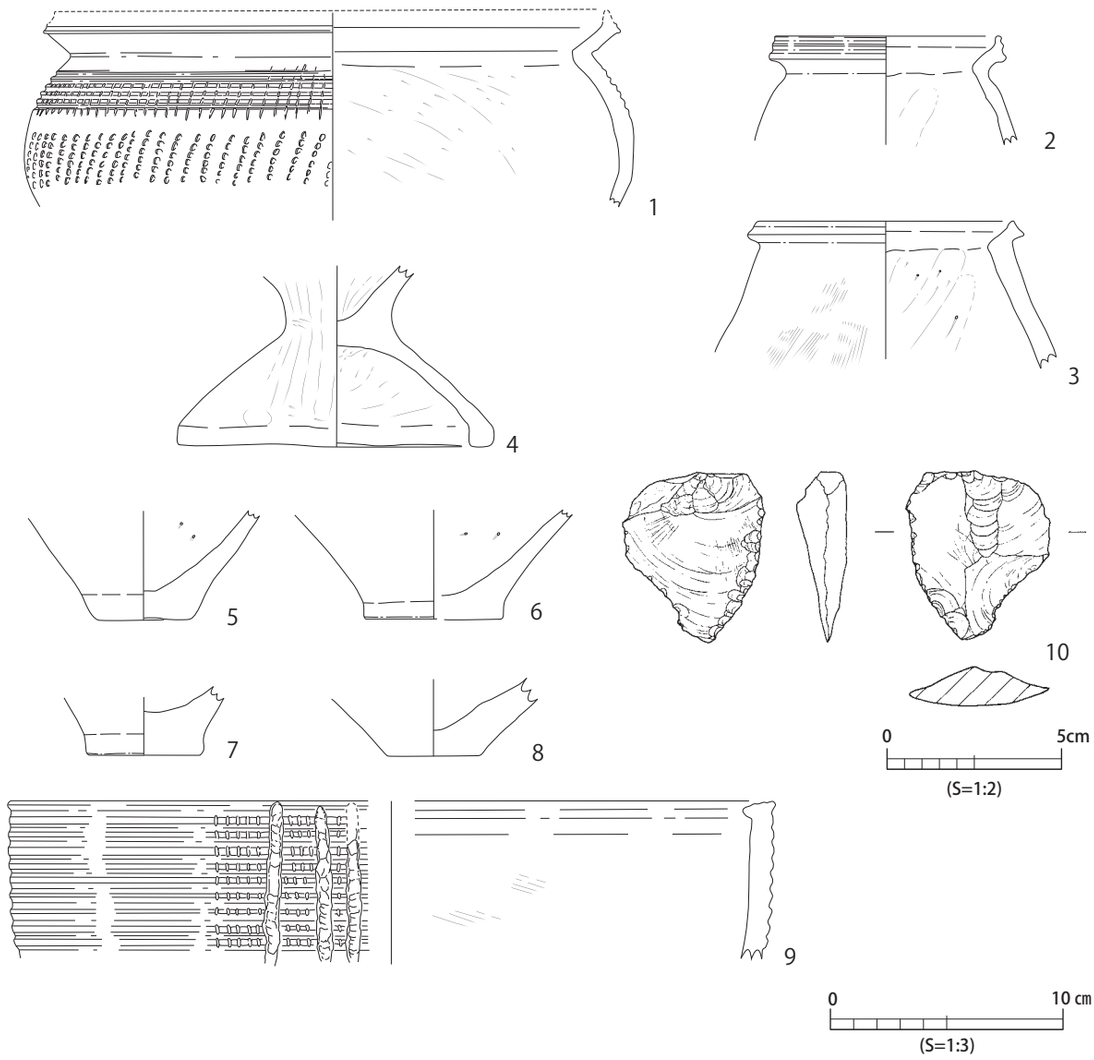
掘り方の大部分は流出しているが、南壁側の一辺は加工された本来の規模を留めているとみられる。残存する平坦面の長さは 6.2m、幅は 80cm を測る。床面や周囲から多数のピットが検出されており、直線状に並列する様子から建物が存在した可能性がある。

また、加工段の西側には、詳細は後述するが焼土土坑である S K 01 が存在し、その下方には長さ約 1.5m、幅 30cm 前後、深さ 25cm 前後の溝が 2 条みられる。遺構の残りが悪く、また S K 01 は AMS 年代測定（第 5 章参照）によれば 11 世紀代の測定値を示しており、これらが加工段に附設する機能をもつものかは不明である。

加工段 7 出土遺物（第 19 図）



第 18 図　庵寺古墳群加工段 7 実測図



第 19 図　庵寺古墳群加工段 7 出土遺物実測図

覆土や周辺から多数の遺物が出土しているが、大部分は小破片であるため、図化できるものを掲載した。1 は復元口径 23.8cm の鉢とみられ、肩部が大きく張り出し、上端部を欠くが口縁は内傾して立ち上がる。肩部には 5 条の刻み目凹線文が施され、胴部に列点状の連続刺突文が細かく施される。いわゆる塩町式土器 [2] の特徴を有するが、胎土は他の土器と類似するとみられる。2 は小型の甕であり、短く拡張する口縁外面に 2 条の凹線文が施される。3 は壺であり、内傾する口縁には施文がみられない。

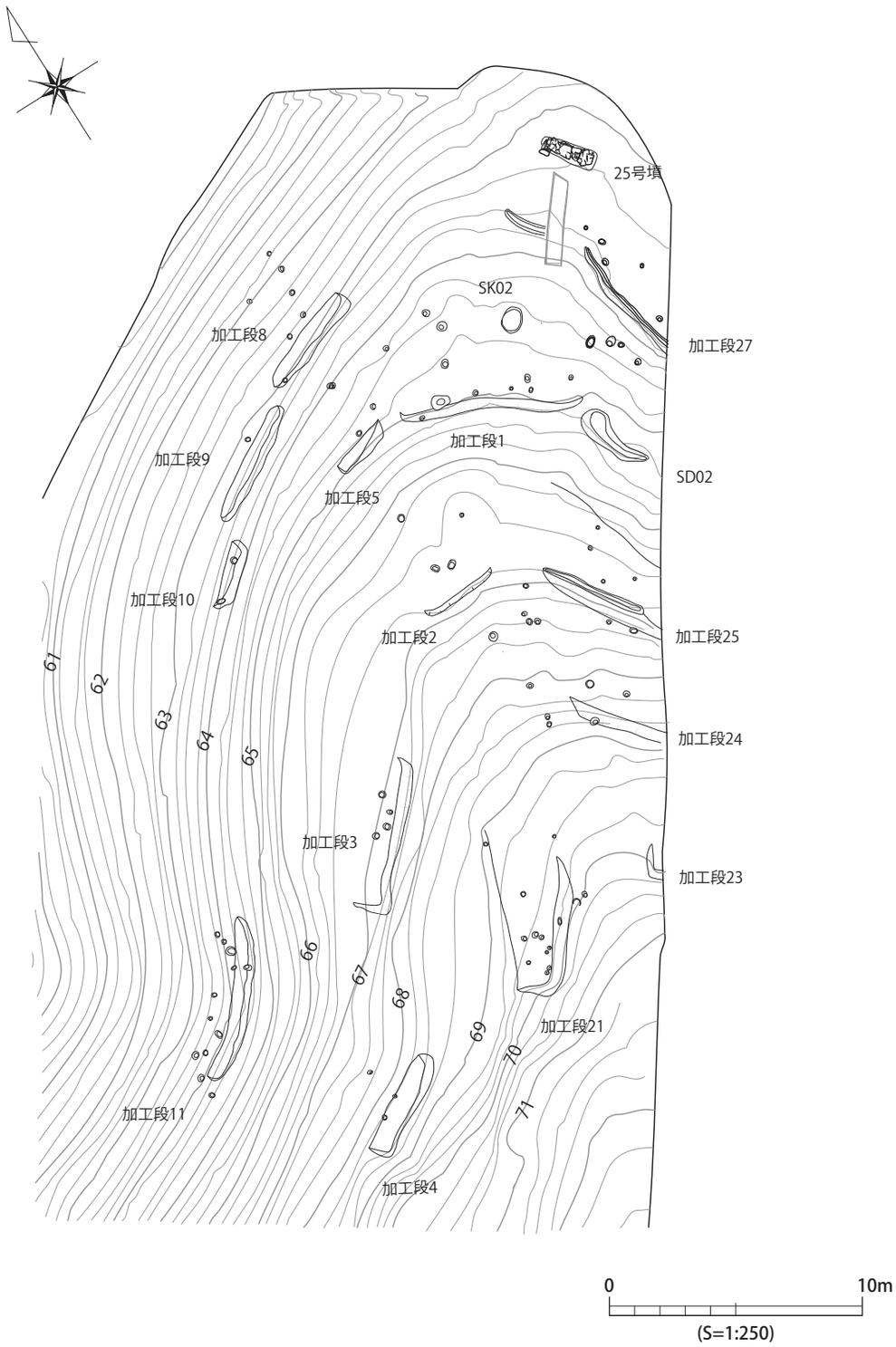
4 は当地域であまりみられない形状であるが、口縁端部が平坦に仕上げられていることから蓋として復元した。口径は 13.2cm を測り、上方がつまみ状に開く。調整は比較的雑に仕上げられており、外面をヘラ状工具によりナデて平滑に仕上げている。

5 ～ 8 は底部資料で、いずれも平底である。

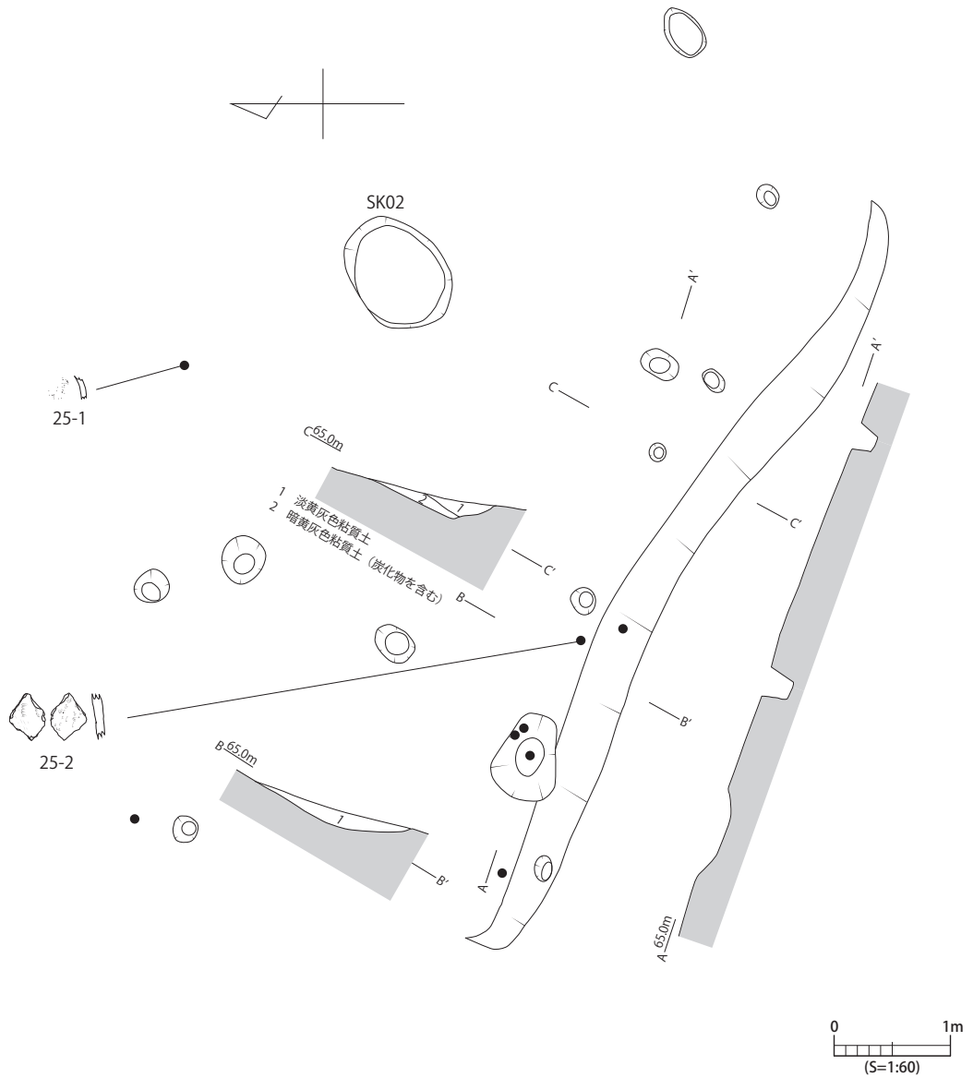
9 は復元口径 30.2cm の鉢であり、口縁端部を肥厚させ面をもつ。外面に数条の刻み目凹線文が施され、刻み目をもつ棒状浮文が垂下する。内面はハケ調整が認められる。

10 は黒曜石製のスクレイパーである。右側面に刃部がつき、長さ 4.7cm、幅 4.0cm を測る。

1と9はⅣ様式の特徴をもち、他の甕類は石見Ｖ－１様式に並行するものとみられ、10は縄文時代の所産とみられる。土器の時期幅が認められ、加工段７の時期は弥生時代中期末～後期前葉とするのが妥当とみられる。



第 20 図　庵寺古墳群加工段１～５・８～ 11･23 ～ 25･27、SD02、SK02 配置図



第 21 図　庵寺古墳群加工段 1 実測図

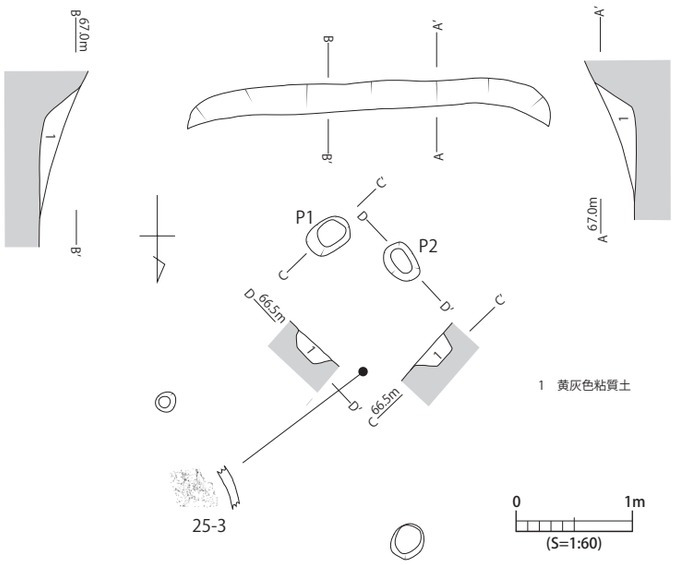
第 2 群の遺構（第 20 図）

第 2 群は南側丘陵部の先端に位置する遺構群である。尾根筋から斜面との傾斜変換地点にかけて 14 基の加工段の他、溝状遺構や土坑が検出された。

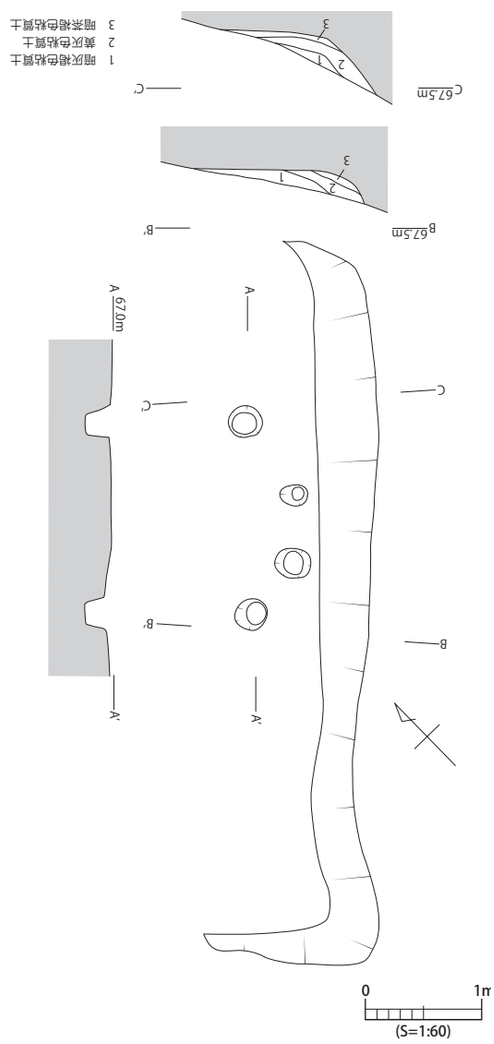
加工段 1（第 21 図）

丘陵尾根筋先端の比較的傾斜がなだらかな斜面に立地する加工段である。床面の標高は 65m である。

流出により掘り方の規模は不明だが、中央が張り出す形状の西壁側の一辺は 7.2m を測る。壁際には長さ 76㎝、幅 58㎝、深さ 15㎝の土坑が認められ、床面では明確な建物の配置を示さないが、ピットを多数検出した。また、西壁面から 2.5 mほど離れた位置で焼土土坑 S K 02（詳細後述）が検出された。加工段との関連が考えられたが、AMS 年代測定によれば、 7 世紀代の測定値が示されている（第 5 章参照）。



第 22 図　庵寺古墳群加工段 2 実測図



第 23 図　庵寺古墳群加工段 3 実測図

加工段１出土遺物（第 25 図１・２）

覆土や土坑内及び周辺から多数の遺物が出土しているが、大部分は小破片であるため、図化できるものを掲載した。１・２とも甕類の胴部片であり、外面には列点状の刺突文、内面にはヘラケズリ痕が認められる。

遺物の時期の特定は難しいか、他遺構出土遺物の状況から石見Ⅴ－１様式並行とみられ、遺構の時期は弥生時代後期前葉に比定される。

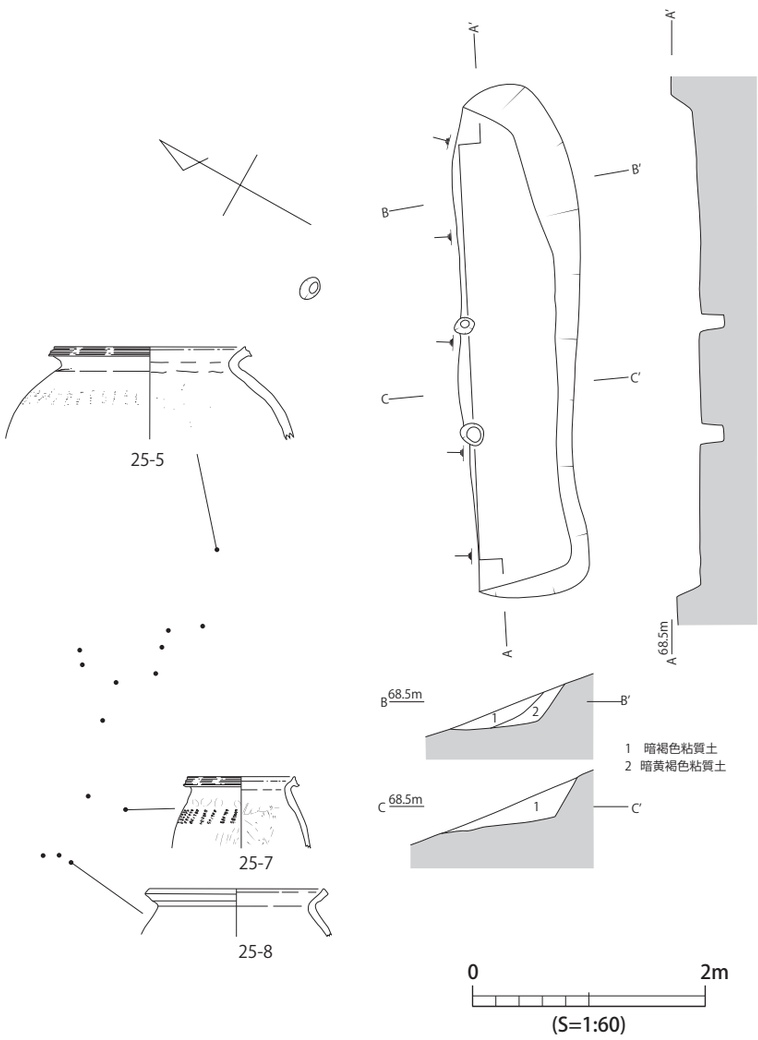
加工段２（第 22 図）

加工段１から丘陵尾根筋上方約７ｍの位置で検出された加工段である。周辺の地形は比較的傾斜がなだらかで、床面の標高は 67.5m である。

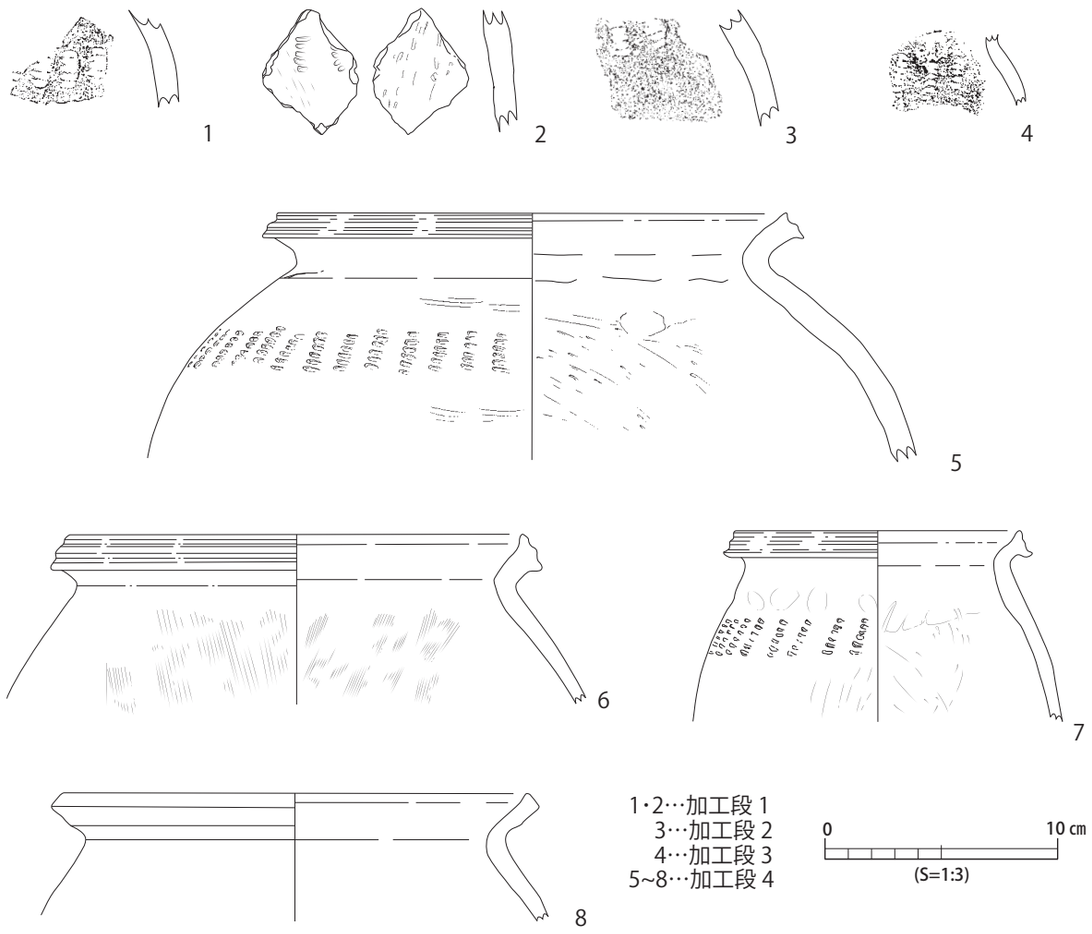
流出により掘り方の規模は不明だが、南壁側の一辺は現状で 3.1m を測る。床面から明確な並びを示す柱穴は検出されておらず、中央付近で深さ 15㎝に満たない浅いピットが２点認められる。

加工段２出土遺物（第 25 図３）

ピットにほど近い位置で甕類の胴部片が１点出土した。外面には列点状の連続刺突文が施され、内面にはヘラケズリの痕跡が認められる。



第 24 図　庵寺古墳群加工段４実測図



第 25 図　庵寺古墳群加工段１～４出土遺物実測図

遺物の時期の特定は難しいか、他遺構出土遺物の状況から石見Ⅴ－１様式並行とみられ、遺構の時期は弥生時代後期前葉に比定される。

加工段３（第 23 図）

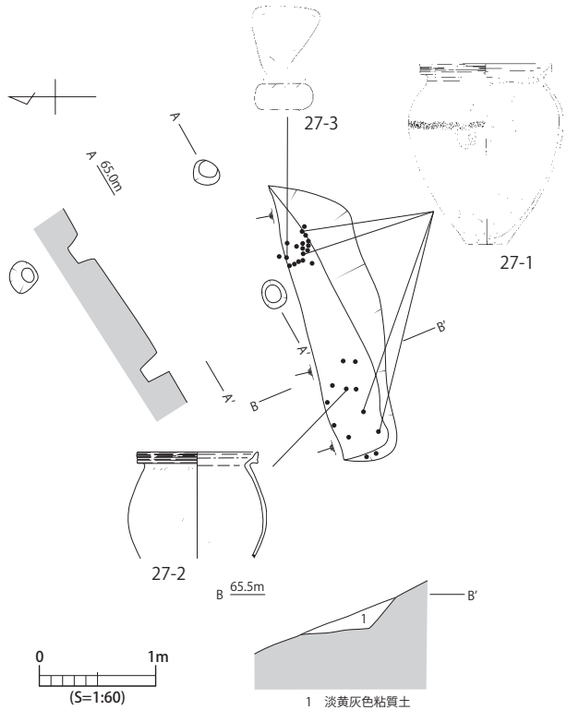
加工段２から南西方向約６ｍに位置し、尾根筋から斜面への傾斜変換地点に立地する加工段である。床面の標高は 67m である。

周囲の斜面が比較的なだらかであり、掘り方の残存状況も比較的良好とみられ、床面が南壁から西壁にかけて方形状に形成される様子がうかがえる。これを基にすると平坦面の規模は長さ 5.9 ｍ、幅 1.1 ｍとなる。床面の中央からやや東よりでピットが４点検出された。斜面側の２点が並列しているとみられ、柱間は 1.6 ｍを測る。

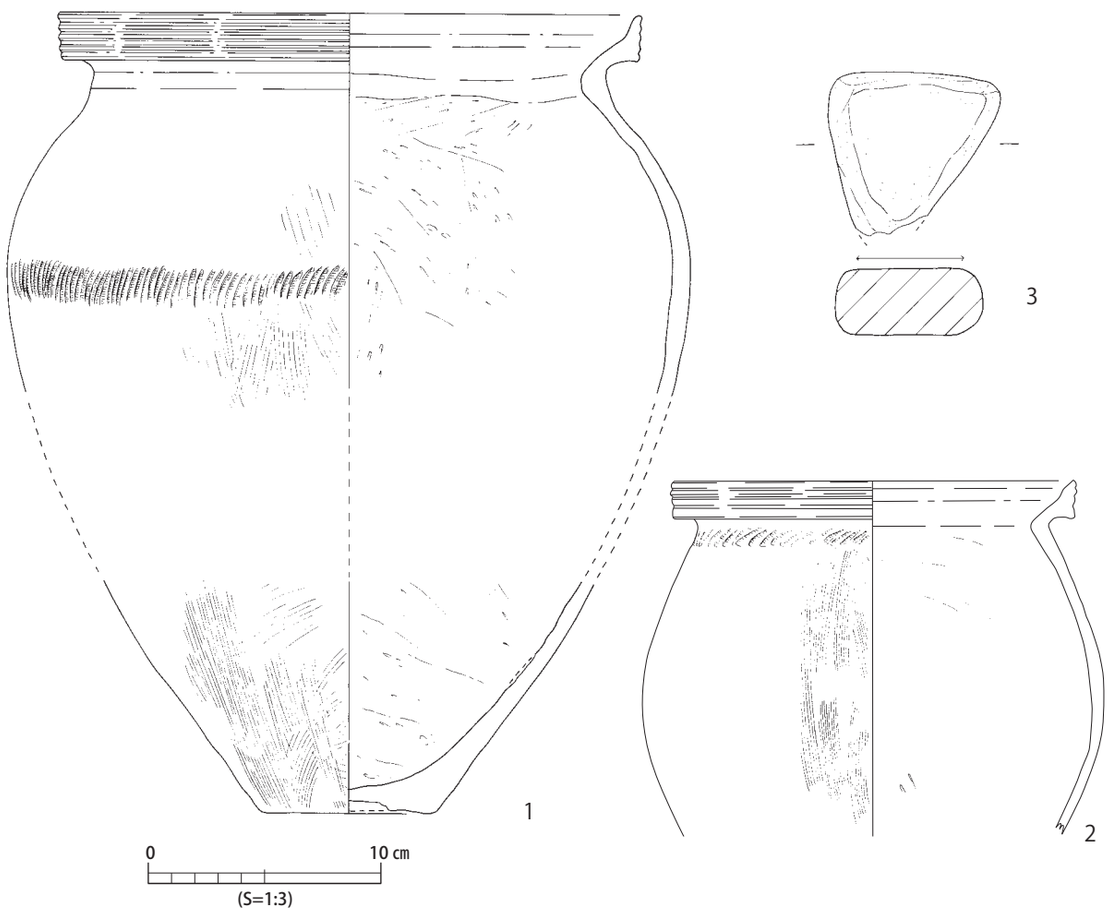
このように斜面で検出された加工段で、残存状況が比較的良好なものは掘り方が同様の形態、すなわち東側（谷の出口側）向かって開放され、西側（谷奥側）に壁面が形成される特徴をもつものが多い。

加工段３出土遺物（第 25 図４）

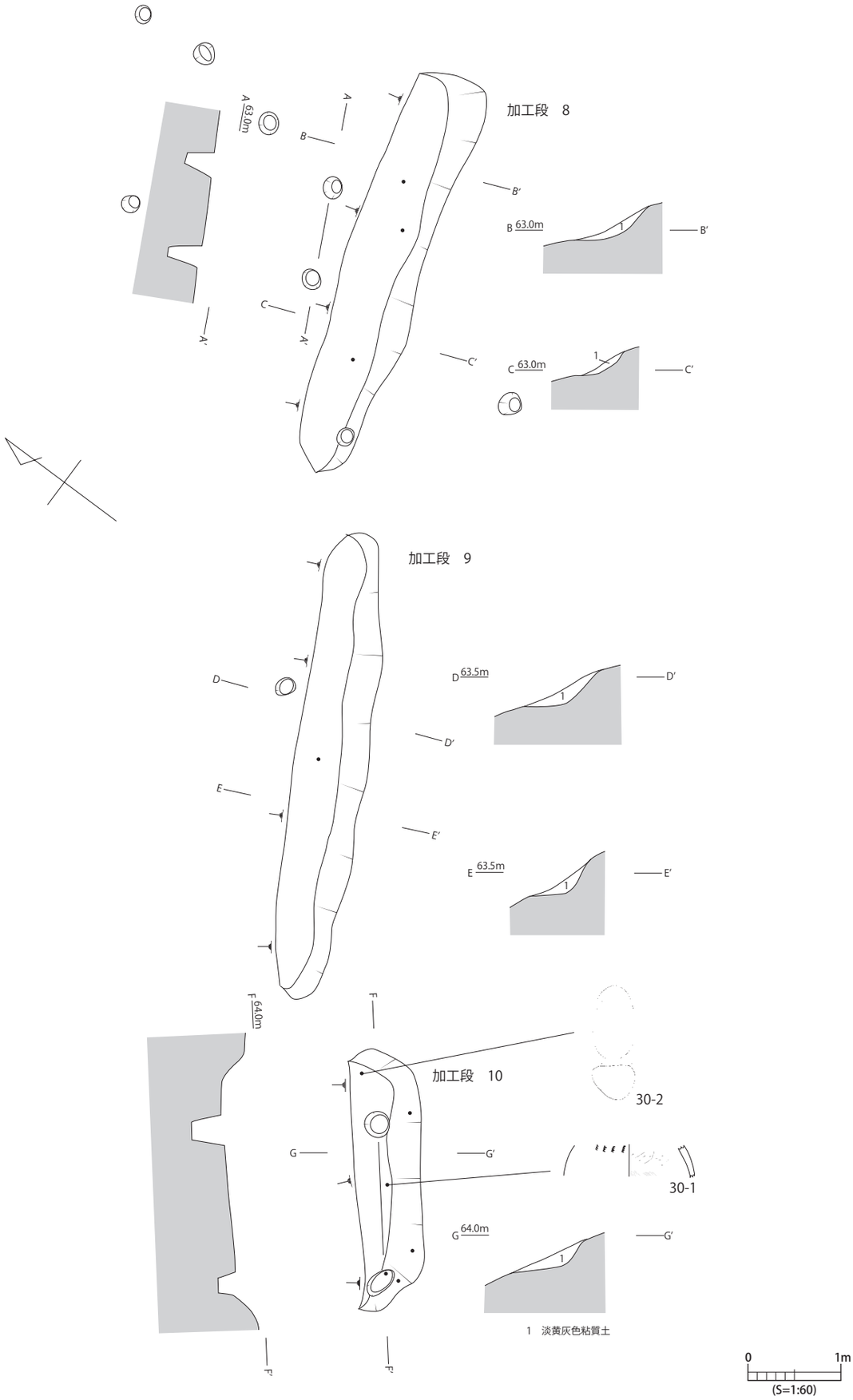
覆土から甕類の小片が１点出土した。肩部付近の破片とみられ、外面には列点状の連続刺突文が



第 26 図　庵寺古墳群加工段 5 実測図



第 27 図　庵寺古墳群加工段 5 出土遺物実測図



第 28 図　庵寺古墳群加工段８・９・10 実測図

施され、内面にはヘラケズリの痕跡が認められる。

遺物の時期の特定は難しいか、他遺構出土遺物の状況から石見Ⅴ－１様式の範疇とみられ、遺構の時期は弥生時代後期前葉に比定される。

加工段４（第 24 図）

加工段３から南西方向約 7.5 mに位置し、加工段３と同様、尾根筋から斜面への傾斜変換地点に立地する加工段である。床面の標高は 68.5m である。

掘り方の残存状況も比較的良好で、床面が南壁から西壁にかけて方形状に形成されており、平坦面の規模は長さ 4.1 m、幅 8.6 mとなる。床面の中央で２点のピットが長辺に沿って検出されており、柱間は 1.65 mを測る。

加工段４出土遺物（第 25 図５～８）

加工段覆土からの遺物は認められなかったが、遺構下方の斜面から遺物がまとまって検出されており、加工段４の流出品と判断した。

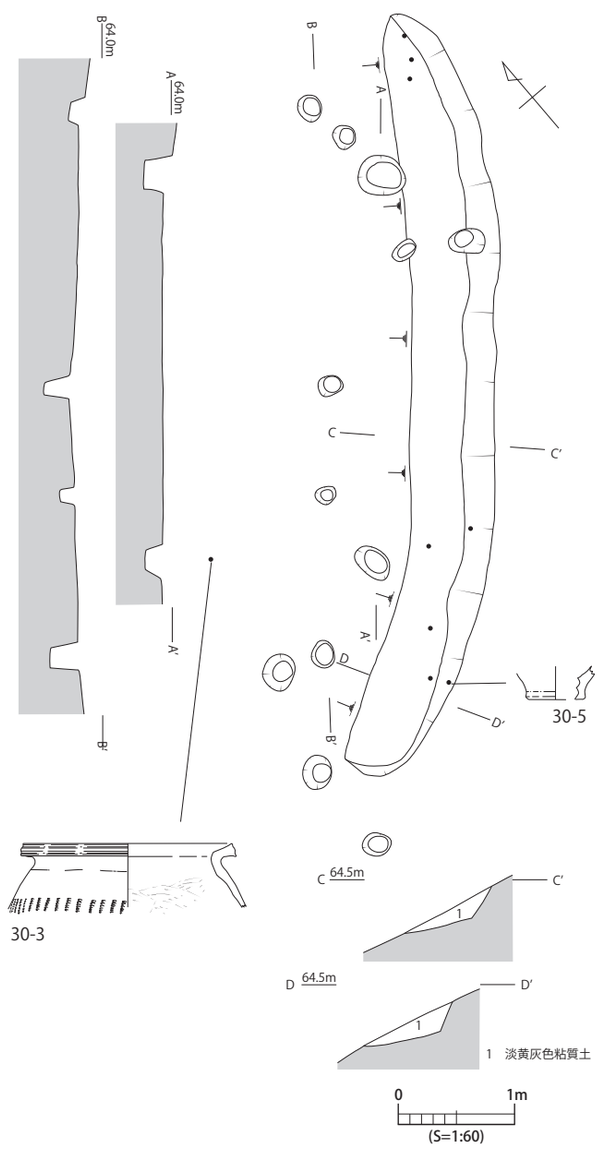
いずれも甕類である。５は肩部が張り、内傾する口縁の端部が短く拡張する。口縁外面には２条の凹線、肩部に列点状の連続刺突文が施される。復元口径は 22.0㎝を測る。６は復元口径 22.4㎝の甕であり、端部の拡張した口縁外面に２条の凹線文が施され、胴部内外面ともハケ調整が認められる。７は肩部が張り出さず、口縁外面に２条の凹線文、胴部には列点状の連続刺突文やヘラミガキの痕跡も認められる。８は風化が著しいが、口縁端部は拡張せず施文も施されていない。

遺物の時期は５・７が石見Ⅴ－１様式、６がⅣ様式に相当するとみられ、遺構の時期は弥生時代中期末～後期前葉に比定される。

加工段５（第 26 図）

加工段１の西側に隣接して検出された加工段である。加工段１とはほぼ同じレベルに立地し、床面の標高は 64.75 mである。

掘り方の残存状況は悪く、わずかに平坦面の南西隅部が検出されたにすぎ



第 29 図　庵寺古墳群加工段 11 実測図

ないが、方形状のプランは確認できる。平坦面の残存規模は長さ 2.45 m、幅 50㎝を測る。ピットは平坦面の長辺に沿って２点並列して検出されており、柱間は 1.2 mを測る。

加工段５出土遺物（第 27 図）

遺構の残存状況にかかわらず、覆土や床面から多数の土器片が出土しており、１のように完形に近い状態まで復元できたものもある。

１は口径 25.0cm、復元高 34cm の甕で、床面に押しつぶされた状態で出土した。口縁が直立して立ち上がり、長く拡張された外面に４条の凹線文が施される。胴部外面にはハケ調整痕や連続刺突文が施され、内面のヘラケズリは頸部まで及んでいる。２は復元口径 17.1cm の甕で、直立した口縁外面に３条の凹線文が施されている。肩部が張り出さず、外面の頸部付近に連続刺突文が施される。内面はナデによる最終調整が認められる。

３は床面から検出された磨石である。三角形状を呈する礫の表面に磨面が認められる。長さ 7.2㎝を測る。

遺物の時期は石見Ⅴ－１様式に相当するとみられ、遺構の時期は弥生時代後期前葉に比定される。

加工段８（第 28 図）

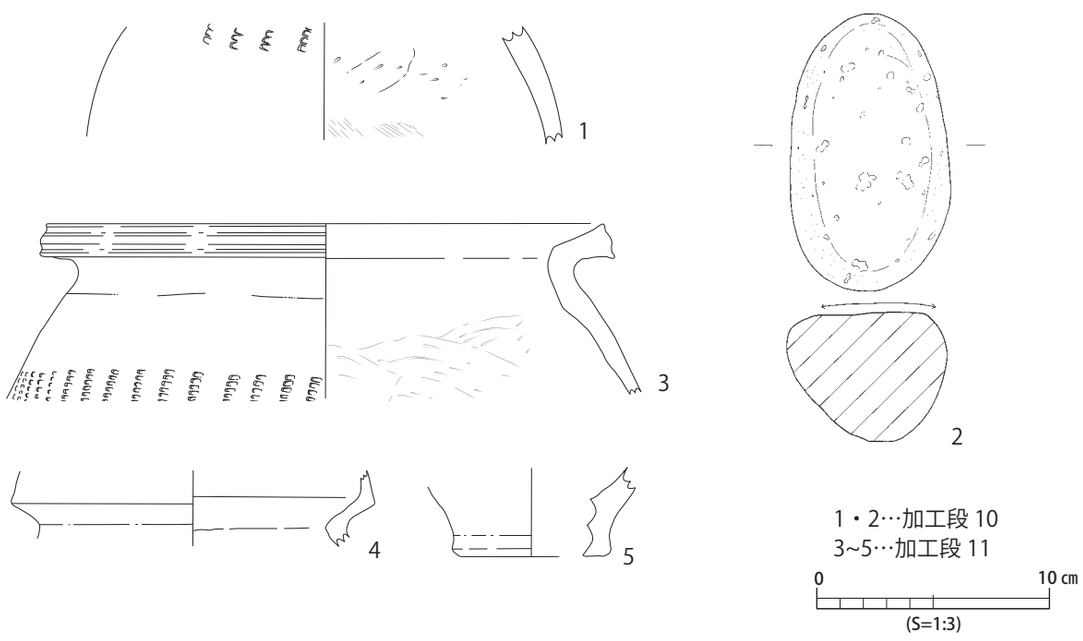
加工段５から斜面下方４mに位置する加工段である。床面の標高は 62.75m であり、ほぼ同じレベルで加工段９・10 が並列している。

掘り方の残存状況は悪く、現状で平坦面の規模は長さ 4.4 m、幅 70cm を測る。周辺から明確な建物の並びを示さないピットが検出され、長辺に並行するピット２点の距離は１mを測る。

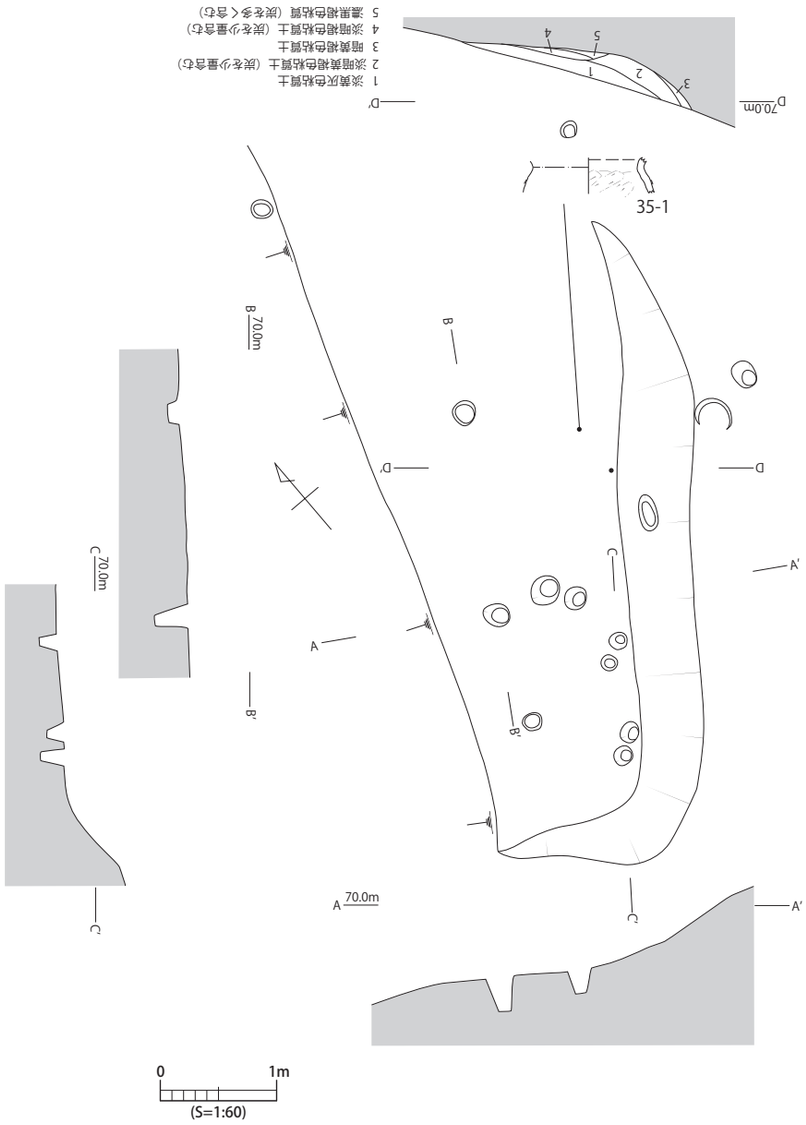
遺物は小破片が数点検出されているが、図化するには至っていない。

加工段９（第 28 図）

加工段８の南西側に隣接する加工段である。加工段８とは若干のレベル差があることから別の遺



第 30 図　庵寺古墳群加工段 10･11 出土遺物実測図



第 31 図　庵寺古墳群加工段 21 実測図

構と判断した。床面の標高は 63.25m である。

同様に掘り方の残存状況は悪く、現状で平坦面の規模は長さ 4.9 m、幅 50cm を測る。周辺からピットが 1 点のみ検出された。

遺物は覆土から小破片が数点検出されたが、図化するには至っていない。

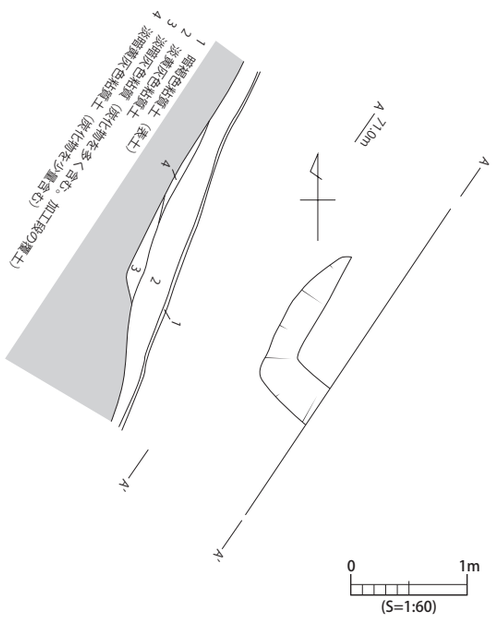
加工段 10（第 28 図）

加工段 9 の南西側に隣接する加工段である。床面の標高は 63.75 mである。

掘り方の残存状況は悪く、現状で平坦面の規模は長さ 2.6 m、幅 40cm を測る。床面の壁際でピットが 2 点検出され、柱間は 1.7 mを測る。

加工段 10 出土遺物（第 30 図 1 ・ 2）

床面から小片であるが遺物が出土し、うち 2 点を図化した。



第 32 図　庵寺古墳群加工段 23 実測図

1 は甕類の胴部片であり、外面に列点状の刺突文、内面にヘラケズリやハケ調整の痕跡が認められる。

2 は磨石である。長さ 11.9㎝、幅 6.9㎝の円礫が用いられ、使用により表面が平坦になっている。

遺物の時期は明確でないが、他遺構出土遺物の状況から石見Ⅴ－ 1 様式に相当するとみられ、遺構の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

加工段 11（第 29 図）

加工段 10 から南西方向約 12m の斜面で検出された加工段である。床面の標高は 64 mである。

周辺斜面の傾斜度は高く、遺構の残存状況は極めて悪い。掘り方が弓形状に残存し、現状の平坦面の規模は長さ 6.6m、幅 50㎝を測る。ピットは周辺から多数検出されており、床面長辺に並行する比較的大きい 2 点のピットの柱間は 3.3 m を測る。

加工段 11 出土遺物（第 30 図 3 ～ 5）

覆土や斜面下方から土器片が数点出土した。

3 は復元口径 24.0㎝の甕である。内傾して立ち上がり端部が若干拡張する口縁外面に 2 条の凹線文が施され、胴部外面には列点状の連続刺突が施されている。 4 は器壁が比較的薄手のもので、風化が著しく調整等が不明瞭な点が多いが、内傾気味に立ち上がる口縁は無文とみられる。 5 は底部資料で平底の底部が台状に肥厚する。

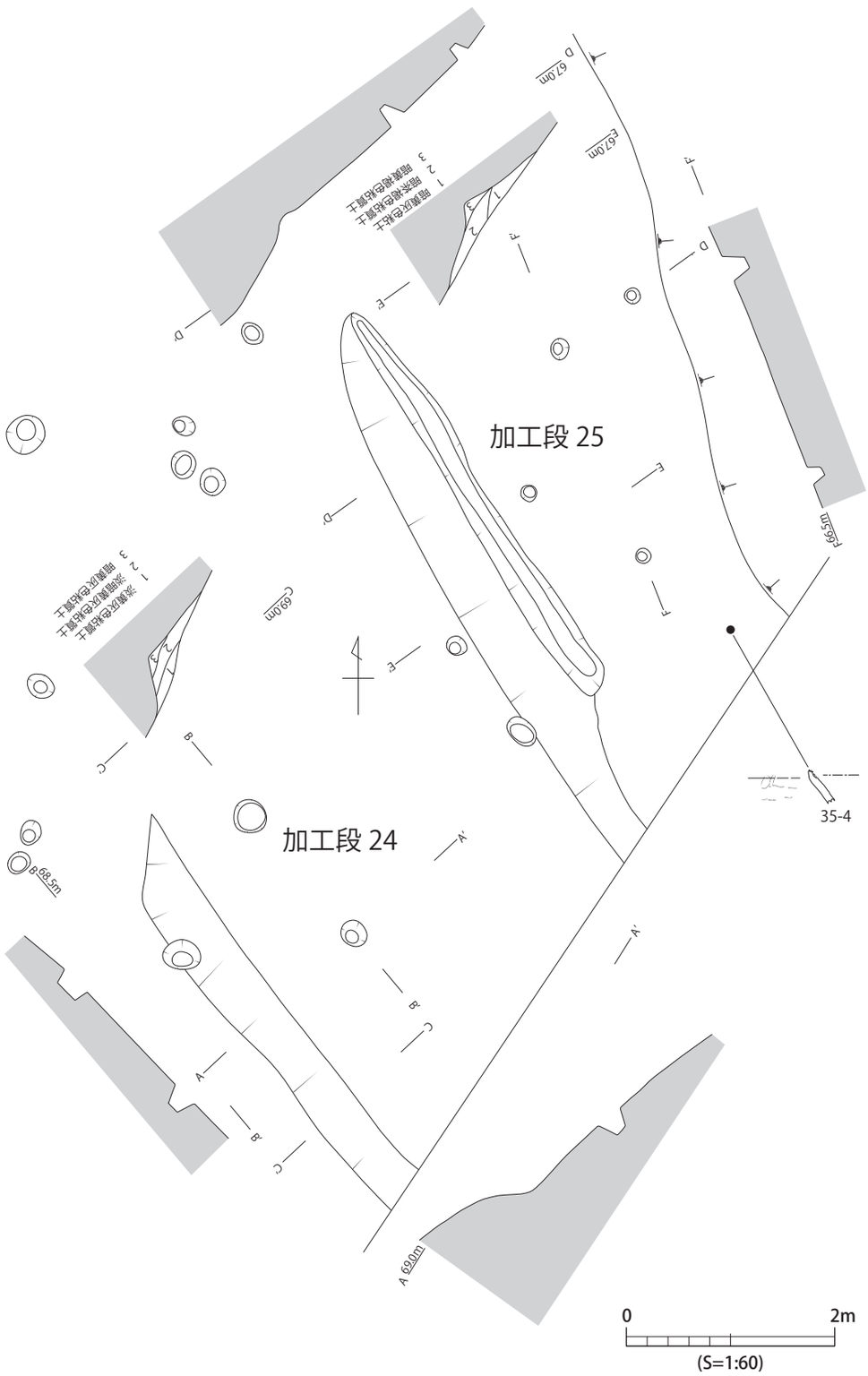
遺物の時期について、 4 は時期が下る感もあるが、 3 は石見Ⅴ－ 1 様式に相当することから、遺構の時期は弥生時代後期前葉に比定される。

加工段 21（第 31 図）

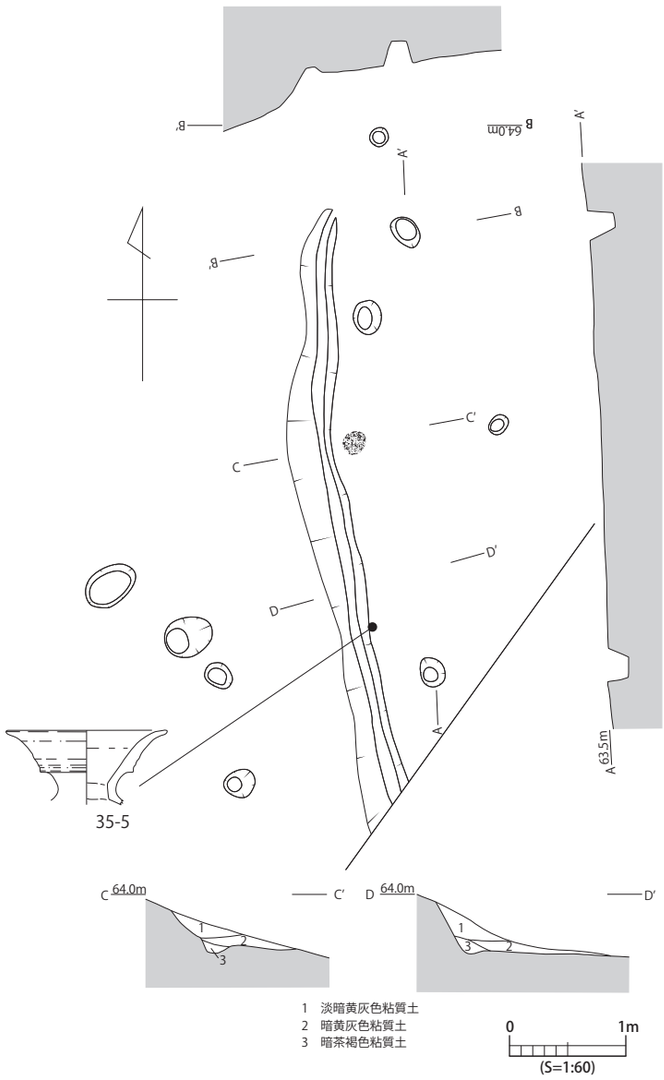
丘陵尾根筋の斜面寄りに位置し、 2 群の中では最高所に形成された加工段である。床面の標高は 69.5 mを測る。

遺構の残存状況も比較的良く、加工段 3 ・ 4 と同様、南壁から西壁にかけて掘り方が逆Ｌ字状に廻る様子がうかがえる。残存する平坦面の規模は長さ 5.1 m、最大幅 2.7 mを測る。ピットは床面の西側で集中して検出され、何らかの建物があったことを想定される。仮に建物が存在したするならば、東側にスペースが広く確保されることから、掘り方の形状と併せ東側が進入口と捉えることも可能だが、ピットは明確な並びを示しておらず定かでない。中央付近で検出された長辺に並行するピットの柱間は 1.8 mである。

加工段 21 出土遺物（第 35 図 1 ・ 2）



第 33 図　庵寺古墳群加工段 24･25 実測図



第 34 図　庵寺古墳群加工段 27 実測図

平坦面が広く検出された割には遺物は数点しか出土しなかった。

1 は甕類の頸部から肩部にかけての破片である。表面が大きく剥離しており調整が不明瞭だが、内面のヘラケズリは頸部まで及んでいる。

2 は底部の破片で、平底の底面が厚く肥厚する。

遺物の時期の判別するのは難しいが、周辺の他遺構出土遺物から弥生時代後期前葉と捉えて相違ないと思われる。

加工段 23（第 32 図）

加工段 21 から南東方向に約 3 m の位置に隣接し、加工段 21 とは方向を 90 度違えて東向きに掘り方が開放している。床面の標高は 70 m である。

尾根上に位置する遺構の大半は調査区外に伸びており、現状では遺構の北側端部が検出されたにすぎないが、掘り方がＬ字状に屈曲することから加工段と判断した。平坦面の規模は奥行き約 1 mを測る。

加工段 23 出土遺物（第 35 図３）

覆土から黒曜石製の小片が 1 点出土している。断面が三角形で長さ 2.27㎝、幅 0.83㎝、厚さ 0.7㎝を測る。縁辺部に２次的な加工の痕跡が認められるが、鋭利でなく器種は不明である。

加工段に伴うものではないとみられ、遺物から遺構の時期は特定できない。

加工段 24（第 33 図）

加工段 23 から尾根筋に沿って東へ約 5 m下って検出された加工段である。加工段 25 と縦列しており、加工段 25 とは切り合っているように見受けられるが層位から前後関係を確認することはできなかった。加工段 23 と同様に遺構の南側は調査区外に広がっている。床面の標高は 68.5 m である。

掘り方はほぼ直線状に検出され、現状の床面の規模は長さ 4.3 m、奥行きは加工段 25 の掘り方まで含めると 3.5 mを測る。掘り方に並行して２点のピットが検出されており、柱間は 1.5 mを測るがピットの深さは 20㎝程度である。

遺物は出土しておらず所属時期は不明だが、加工段 25 と切り合っているならば加工段 25 よりは古い遺構と捉えられる。

加工段 25（第 33 図）

加工段 24 の尾根筋下方で検出された遺構である。加工段 25 と同様、遺構の南側は調査区外に広がっている。床面の標高は 66.75 mである。

掘り方の形態は加工段 24 と類似しており、斜面に並行して直線状に壁面が伸びている。平坦面の規模は現状で長さ 5.6 m、奥行きが最大で 3.1 mを測る。床面の壁際からは幅 35cm の壁帯溝が検出され、床面からは掘り方に並行して 2 点のピットが検出された。柱間は 2.15m を測るが、深さは 20㎝程度である。

加工段 25 出土遺物（第 35 図 4 ）

床面が広く検出された割には、遺物は床面付近から土器の小片が 1 点出土したのみである。風化が著しいが、比較的薄手の土器で甕類の頸部から肩部の破片とみられる。内面にはヘラケズリ痕が認められる。

時期の特定は難しいが、その特徴から少なくとも弥生時代後期のものと推定される。

加工段 27（第 34 図）

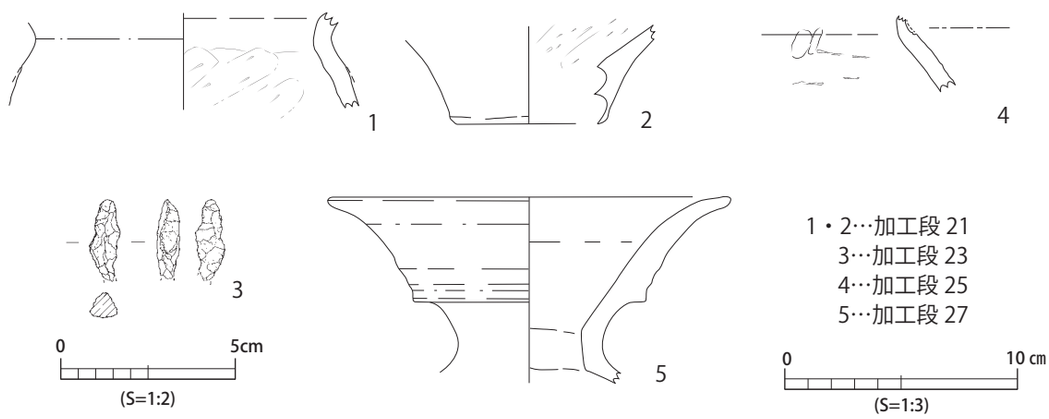
加工段 25 から尾根筋を約 10 m下った位置で検出された遺構である。調査区の中では最東部に立地し、床面の標高は 63.5m である。

遺構の南側は調査区外に広がっており、全体は明らかでないが掘り方は斜面に並行して直線状に伸びている。現状の床面の規模は長さ 4.9 m、奥行きは 2.5m を測る。壁面沿いには幅 20㎝の壁帯溝がみられる。

壁際には他の加工段群ではまれといっていい径 20㎝の焼土面も認められた。床面から掘り方に並行してピットが 2 点あり、柱間は 3.8 m、ピットの深さ 25㎝を測る。ピットは明確な建物の並びを示さないが、焼土面が検出されたことにより生活の痕跡を確認することができた。

加工段 27 出土遺物（第 35 図 5 ）

壁際の壁帯溝から遺物が 1 点出土した。鼓形器台の受部から筒部にかけてのものであり、筒部は短く、大きく外反する口縁外面には施文が施されていない。

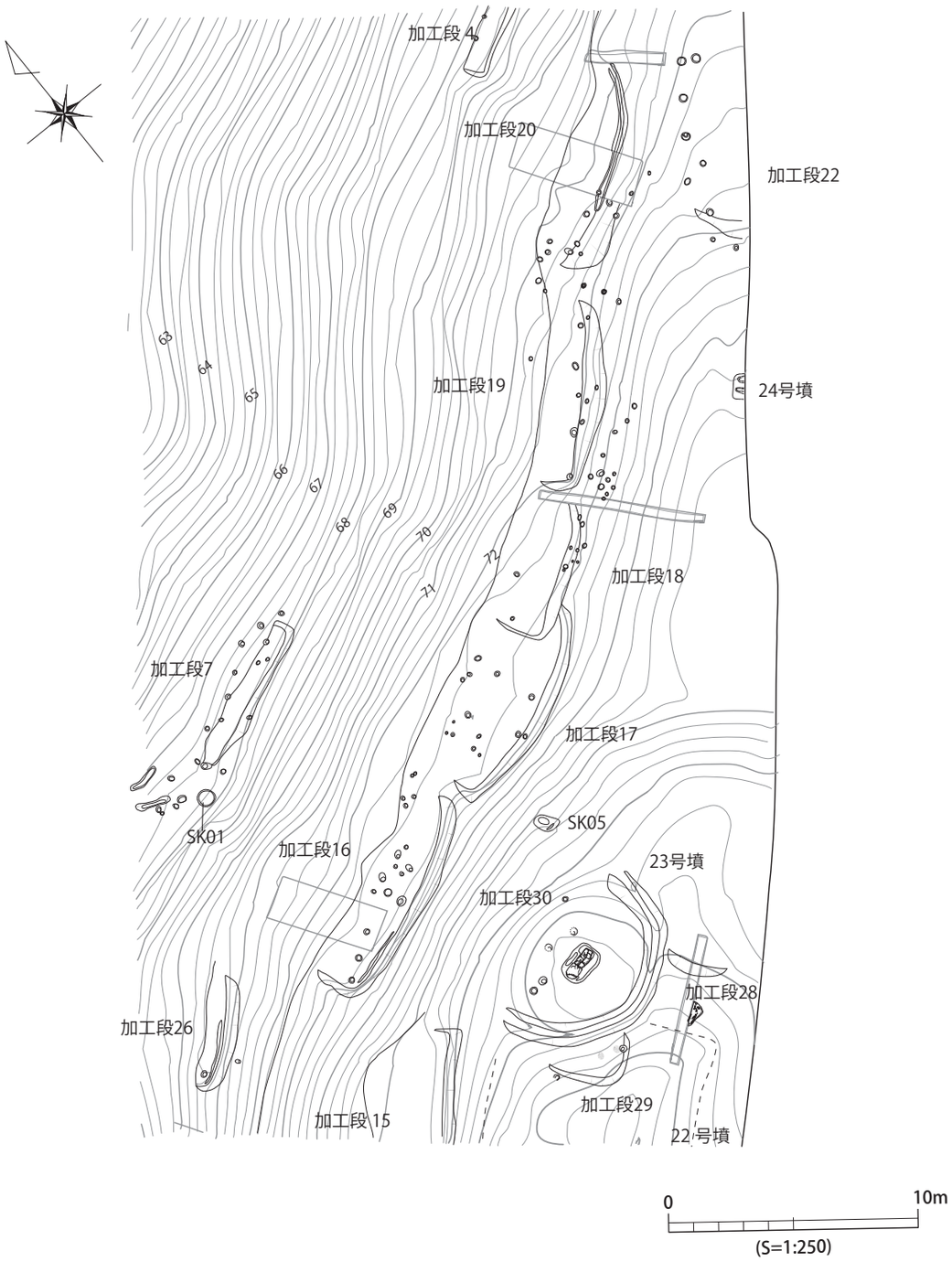


第 35 図　庵寺古墳群加工段 21･23･25･27 出土遺物実測図

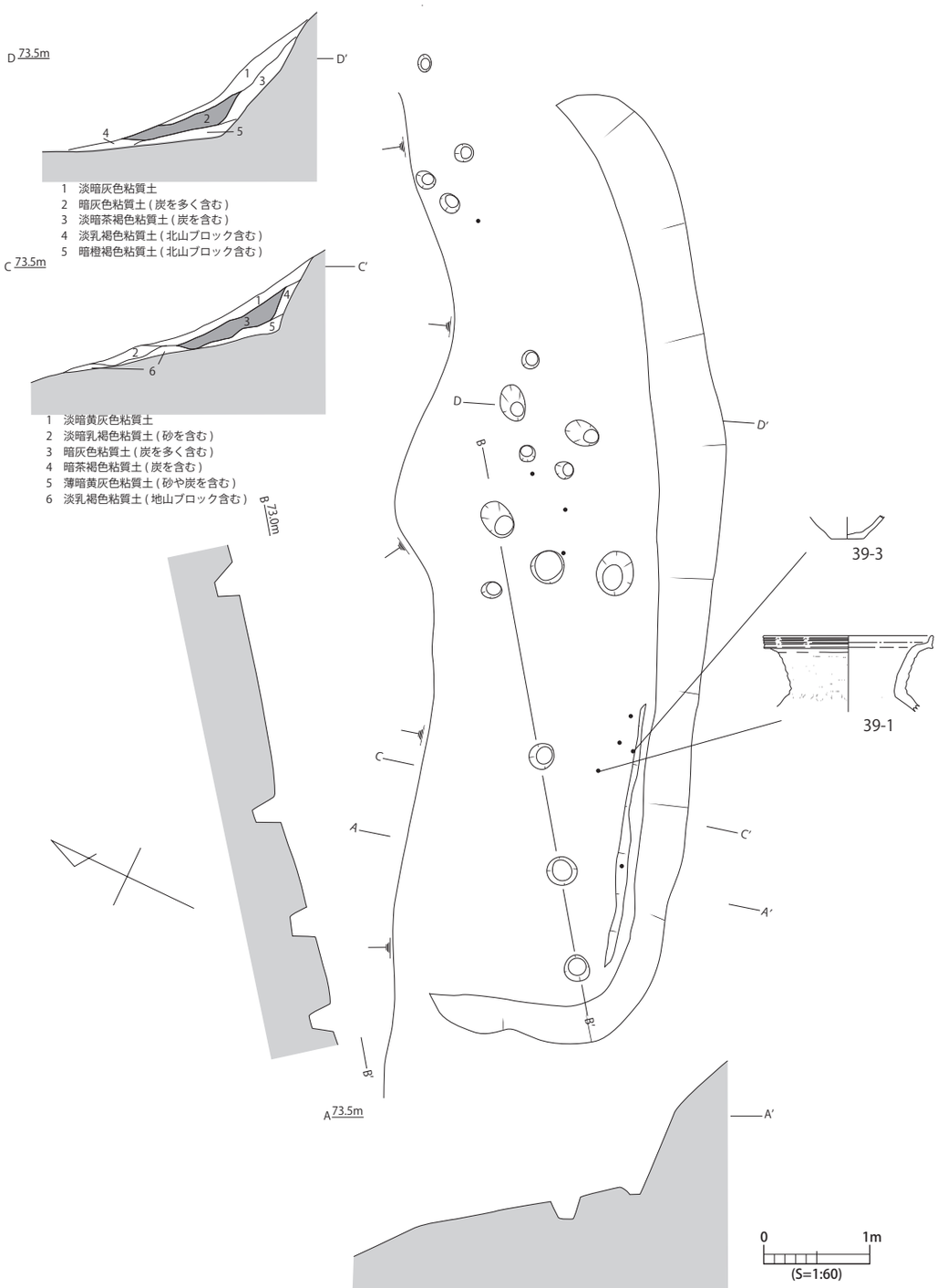
これらの特徴から、遺物は石見Ⅴ－４様式に相当するとみられ、加工段 27 の時期は弥生時代後期末に比定される。

第３群の遺構（第 36 図）

第３群は南側丘陵部尾根筋の中央付近に位置する遺構群である。尾根上平坦面の大半は調査区外に広がっており様相が不明瞭であるが、尾根筋から斜面への傾斜変換地点で多数の加工段が重なる



第 36 図　庵寺古墳群加工段 16 ～ 20･22･28、SK05 配置図



第 37 図　庵寺古墳群加工段 16 実測図

ように並列して分布している。

なお、尾根筋には古墳（22・23 号墳）が立地し、古墳の墳丘盛土の下からも加工段が検出されているが（加工段 29・30）、これらの加工段の概要は後節に譲りたい。

加工段 16（第 37 図）

23 号墳が立地する丘陵尾根筋と斜面の傾斜変換地点で検出された加工段である。床面の標高は 72.75 mで、この加工段を起点に 4 基の加工段がほぼ同じレベルで東方向に隣接して立地する。

掘り方の残存状況が比較的良好で、床面が南壁から西壁にかけてやや丸みを帯びた方形状に形成された様子がうかがえる。床面の規模は長さ 8.5 m、幅は最大で 2.5 mを測り、第 3 群で検出された加工段の中では最大規模を誇る。南壁の西側沿いには幅 20cm の壁帯溝が 2.5m の長さほど認められた。床面からはピットが十数点みられ、床面の中央から西側で、南壁の掘り方とは若干角度を違えているが直線状に並列する 4 点のピットが認められた。柱間は 0.9 ～ 2.2 mとまばらであるが、建物が建っていた痕跡と考えられる。この柱列群が床面の西半分側に寄っており、掘り方も逆Ｌ字状を呈することから、この加工段は斜面東側（谷の出口側）に進入口及び作業用等のスペースをもつ構造であったことがうかがえる。

また、遺構の土層観察では、床面上に炭を多く含む黒色の粘質土が厚さ 10 ～ 20cm に渡って堆積する様子が認められた。これに類似する土層は隣接する加工段 17 ～ 19 でも確認されており、加工段が廃棄された後、堆積土が一時的に表土面を形成したか、或いは崩壊した建物構造物の痕跡とも考えられる。

加工段 16 出土遺物（第 39 図 1 ～ 4 ）

出土遺物は土器の小片が多かったが、 3 点ほど図化することができた。 1 は復元口径 21.4cm の壺である。頸部が外反しながら長く直立し、幅広でシャープさに欠く凹線が 5 条施される。口縁は直立して拡張し、外面に 3 条の凹線が施される。頸部付け根には指でつまんだような圧痕がみられる。 2 は甕口縁部の破片で、直立する口縁外面に細い凹線が 3 条施されるとみられる。 3 は甕類の底部資料である。 4 は長さ 20.8cm、幅 13.4cm、厚さ 13.4cm を測る大型の礫である。目立った使用痕が認められず、作業台などとして機能したか不明瞭なものである。或いは、遺構の上方に立地する 23 号墳の標石が転落したものである可能性もある。

１・２の特徴から遺物は石見Ｖ－１様式に相当するとみられ、加工段 16 の時期は弥生時代後期前葉に比定される。

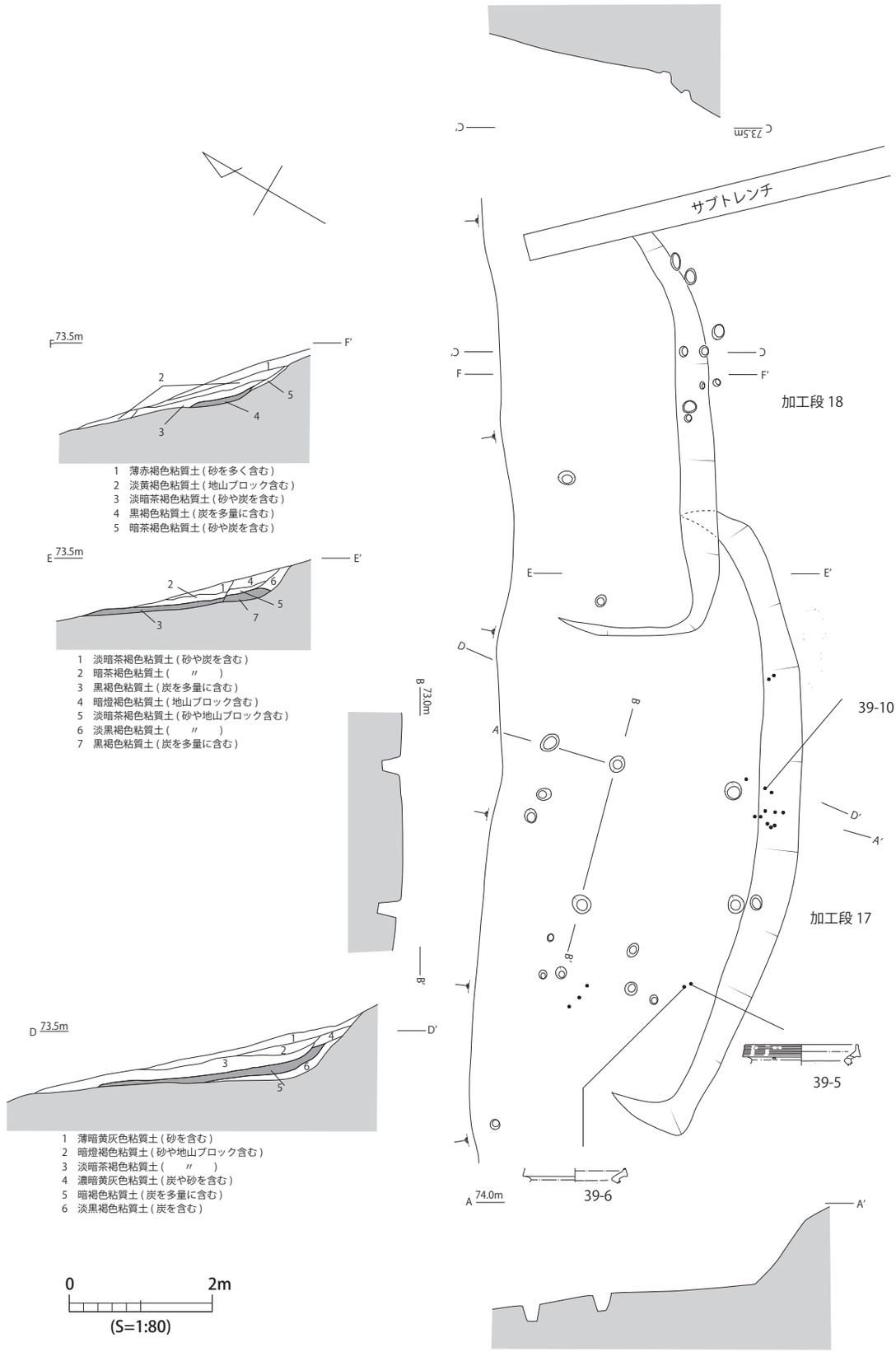
加工段 17（第 38 図）

加工段 16 の東側に隣接する加工段である。加工段 18 と重なっているが、切り合いから加工段 17 の方が古い。床面の標高は 72.75 mである。

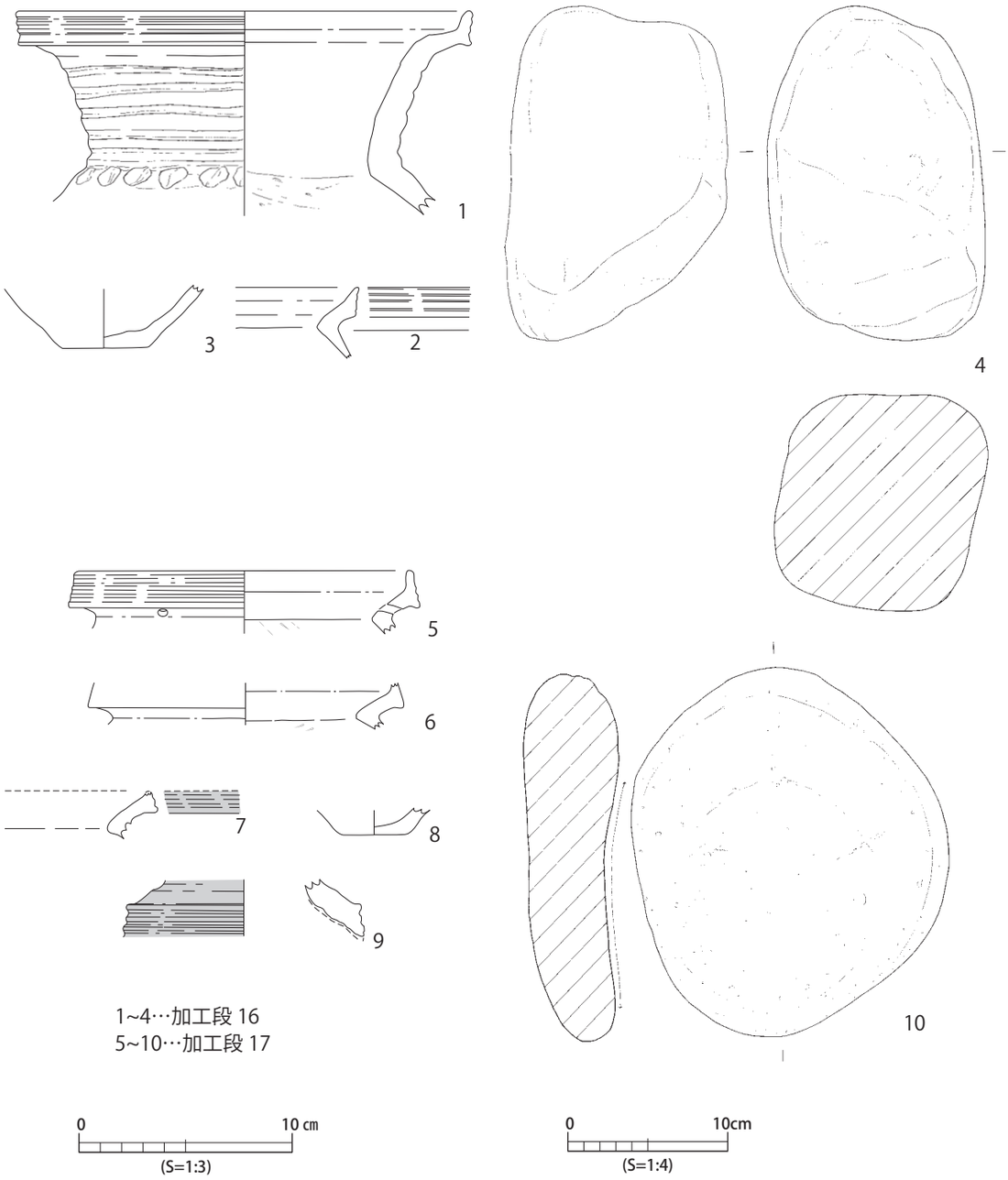
南壁がやや弧を描くように掘り込まれ、逆Ｌ字状に西壁と繋がっている。床面の規模は、掘り方の東端部を加工段 18 によって切られているが、長さおよそ 8.2 m、幅 3.7 mを測る。床面のピット群は中央からやや西側よりに分布しており、必ずしも明確な建物の並びを示さないが、加工段 16 と同じような構造の加工段であったことが推測される。

加工段 17 出土遺物（第 39 図 5 ～ 10）

壁際から床面にかけて土器片が多数出土したが図化が可能なものを掲載した。 5 は復元口径 15.6cm の甕で、やや内傾気味に短く立ち上がる口縁外面に 3 条の凹線文が施される。また頸部にはナナメ方向の貫通孔がみられる。 6 は口縁端部を欠くが、外面に凹線が施されないタイプの甕とみられる。 7 は口縁外面に 2 条の凹線文が施され、線内に赤色顔料が塗布された痕跡が認められた。



第 38 図　庵寺古墳群加工段 17･18 実測図



第 39 図　庵寺古墳群加工段 16･17 出土遺物実測図

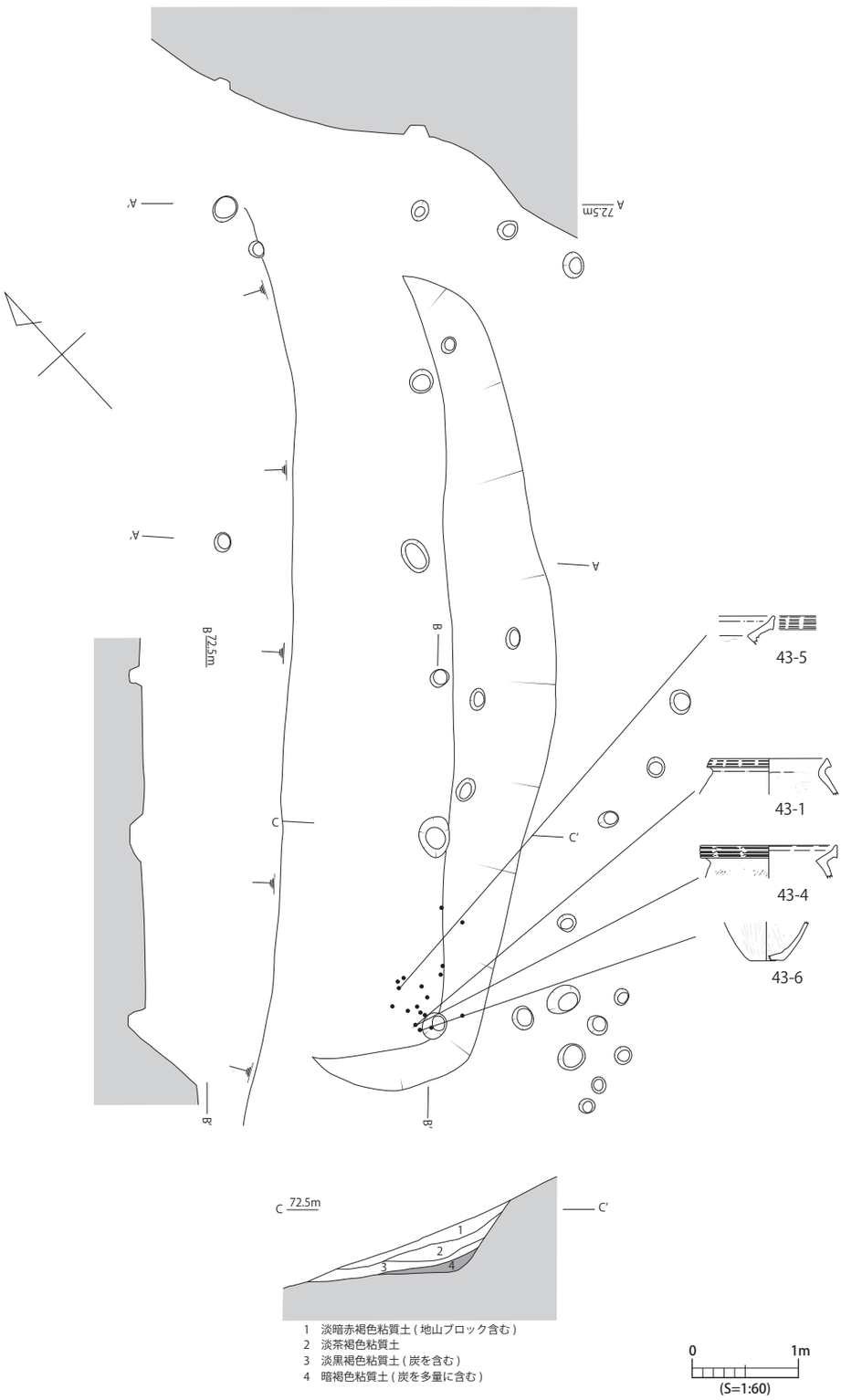
８は甕類の底部資料である。９は装飾壺の脚部とみられる資料で、外面に赤彩された痕跡が認められた。10 は石皿で、長さ 23.1cm、幅 19.7cm、厚さ 5.9cm を測る。表面に使用痕とみられる径 14cm の円形状の窪みがみられる。

甕類の特徴から遺物は石見Ⅴ－ 1 様式に相当するとみられ、加工段 17 の時期は弥生時代後期前葉に比定される。

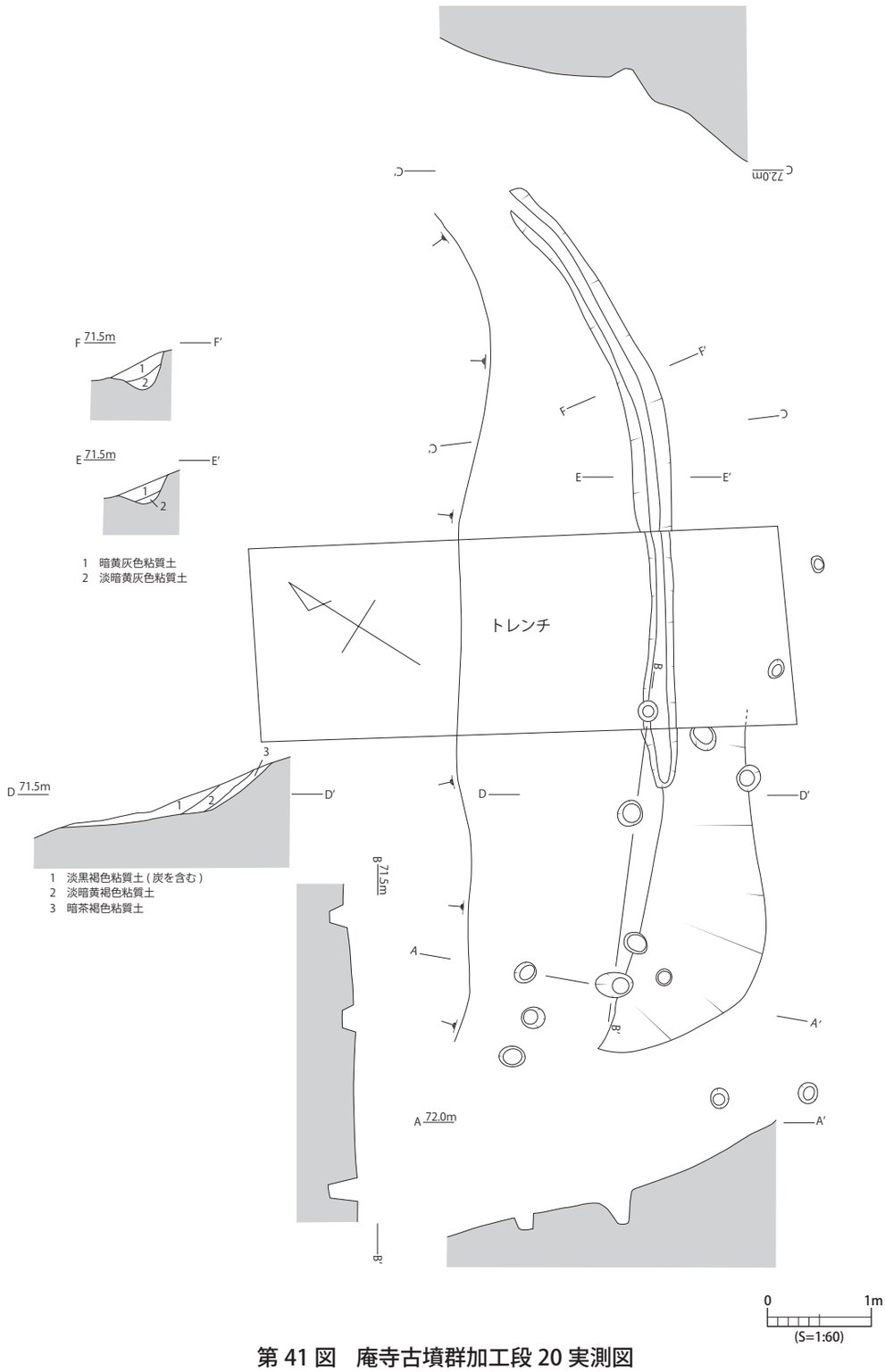
加工段 18（第 38 図）

加工段 17 の東端部を掘り込んで造られた加工段で、床面の標高は 72.5 mである。

掘り方の東端部は、事前に土層観察のため設置したサブトレンチで削平してしまったが、加工段 16・17 と同様に壁面を逆Ｌ字状に掘り込む構造であったと考えられる。床面の規模は現状で長さ 5.5 m、幅 2.5 mを測る。床面からはピットが２点しか検出されておらず、建物が存在していたか



第 40 図　庵寺古墳群加工段 19 実測図



第 41 図　庵寺古墳群加工段 20 実測図

どうか判別できない。また土層観察から炭を多く含む黒色粘質土層が床面を覆うように堆積する様子が認められた。

出土遺物が無く遺構の所属時期は判別できないが、切り合いから加工段 17 より新しいことはうかがえる。

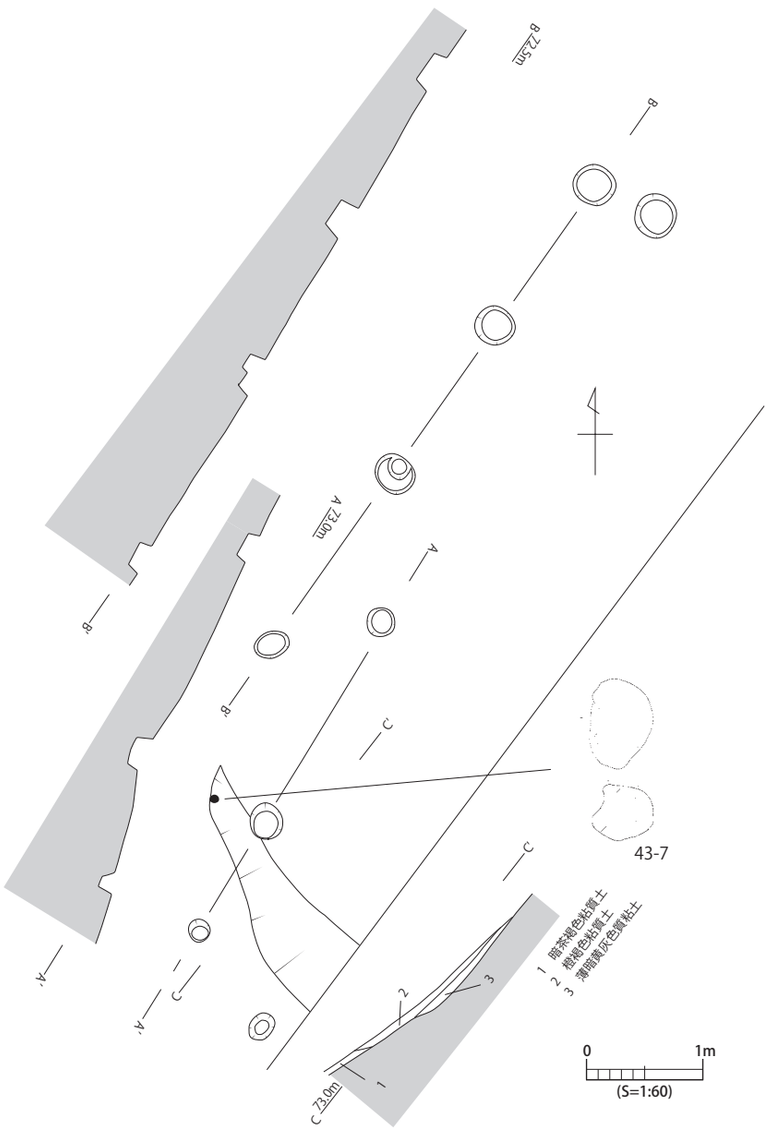
加工段 19（第 40 図）

加工段 18 の東側に隣接する加工段である。両遺構の間に設定したサブトレンチのため不確定ではあるが、加工段 18 の掘り方の東端部を掘り込んで造られた可能性もある。床面の標高は 71.75 mである。

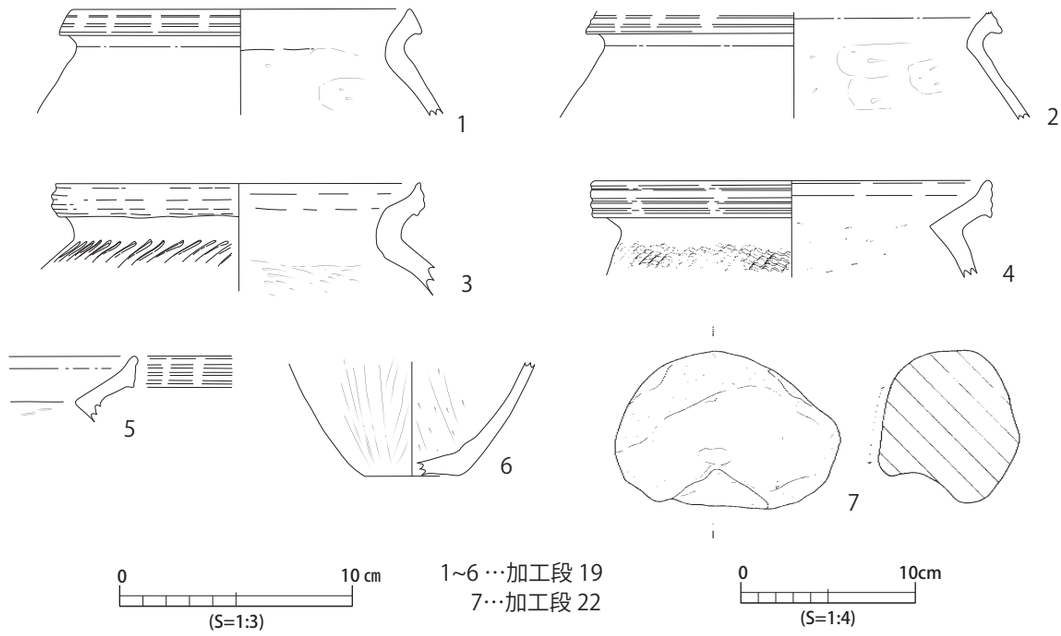
残存状況は比較的良好で、逆Ｌ字状に掘り込まれた壁面から、床面の規模は現状で長さ 7.3 m、幅 1.6 mを測る。床面で検出されたピットの深さは 10cm 前後と浅いが、これを建物跡と捉えるなら、建物は床面の西側寄りに建っていたこととなる。また床面を厚さ 10cm の黒色粘土層が覆うのも他の加工段と共通している。

加工段 19 出土遺物（第 43 図１～６）

遺物は床面の南西隅で集中的に検出された。１・２は口縁が内傾して立ち上がり端部が短く拡張する甕である。いずれも細い凹線文が２条施される。３は口縁が直立する甕で、風化が著しいが凹



第 42 図　庵寺古墳群加工段 22 実測図



第 43 図　庵寺古墳群加工段 19･22 出土遺物実測図

線文が施されているとみられ、肩部には刺突文がみられる。４は復元口径 17.2cm の甕で、肩部が張り出さない形状である。直立する口縁外面には３条の凹線が施され、肩部には貝殻復縁による連続刺突文が施される。５は口縁の小片で、外面に細い凹線文が３条施される。６は甕類の底部で、平底である。

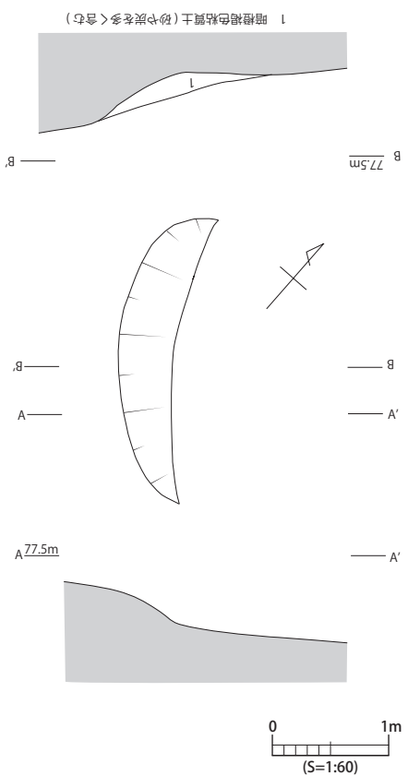
遺物の時期は石見Ⅴ－１様式に相当するとみられ、加工段 19 は弥生時代後期前葉に比定される。

加工段 20（第 41 図）

加工段 19 と１ｍほど離れて検出された加工段である。床面の標高は 71 ｍである。

表土掘削に先立つトレンチ調査により遺構の中央付近を抜いてしまったため、掘り方の規模や形状が判別できないが、若干弧を描きながら伸びる壁帯溝の存在から床面の規模は現状で長さ８ｍ、幅 2.05 ｍを測る。床面の西端部で、不確定ではあるが建物状の柱列がみられ、柱間は１～ 1.7 ｍを測る。また壁際には幅 30 ～ 40cm の壁帯溝がみられる。

遺物は出土しておらず、遺構の所属時期は出土品から特定することはできない。



第 44 図　庵寺古墳群加工段 28 実測図

加工段 22（第 42 図）

加工段 20 の上方３ｍの尾根筋で検出された加工段であ

る。床面の標高は 72.75m である。

遺構の大半は調査区外に広がっており、規模の特定は難しいが、掘り方は現状で長さ約２m を測る。床面や周辺に掘り方に直行して２つの柱列がみられ、特に外側の柱列はいずれも径 35cm 前後の規模で直線上に並び、柱間は 1.5 ～ 1.7 mを測る規則的なものである。ただし、深さは現状で 20cm に満たず、位置的にも加工段 22 と関連するかは不明瞭である。

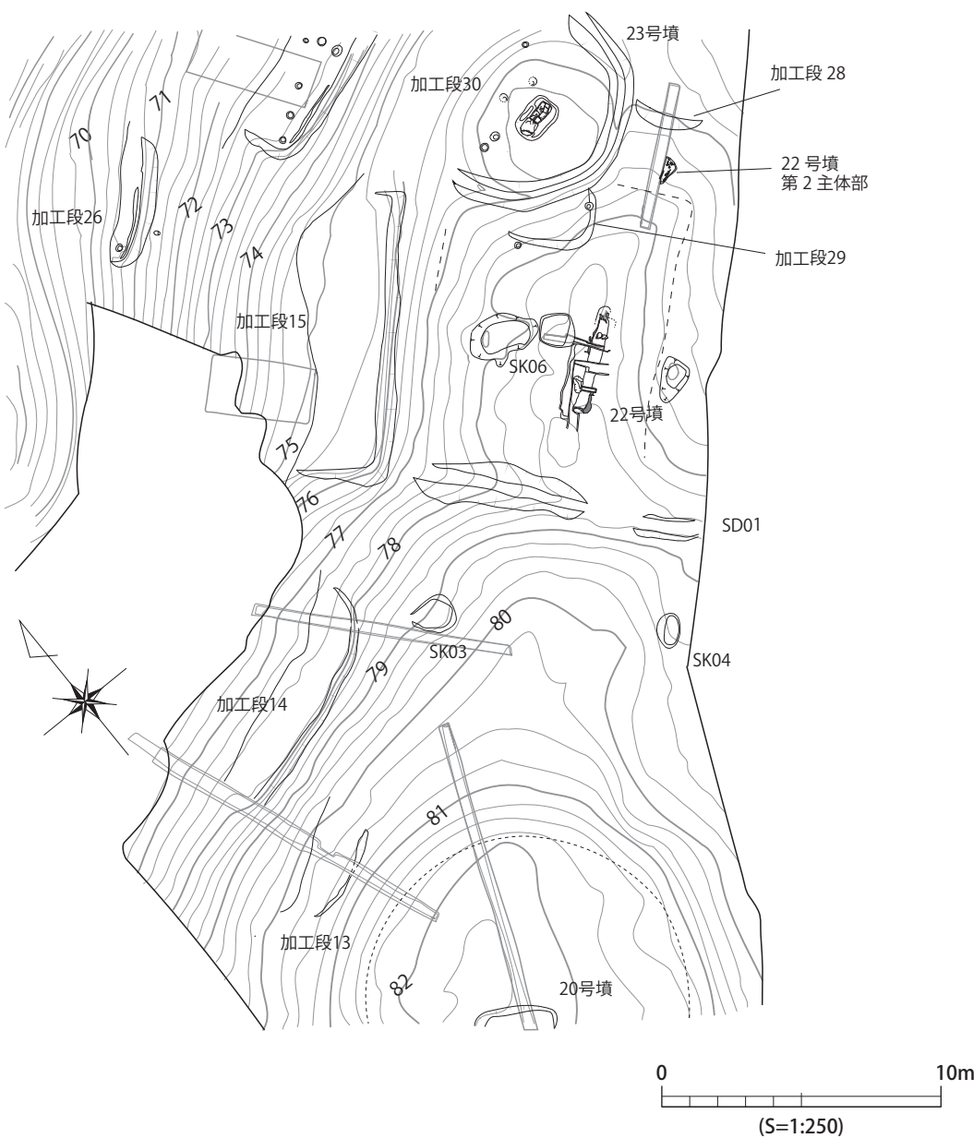
加工段 22 出土遺物（第 43 図７）

床面から磨石とみられる円礫が 1 点出土した。表面に磨面が認められる。

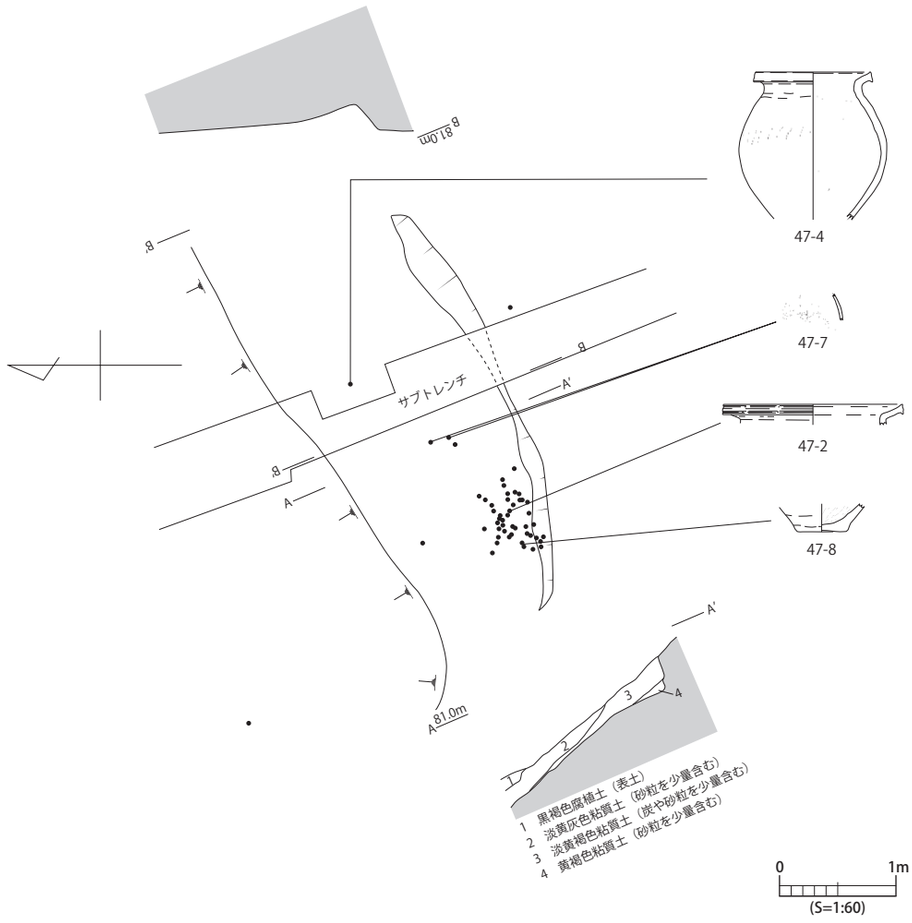
土器が出土しておらず、遺物から遺構の時期の特定はできない。

加工段 28（第 44 図）

尾根頂部から検出された加工段である。標高は 77m を測る。周辺には古墳群が密集しており、かなりの改変を受けているが、床面がほぼ水平に広がることから加工段と判断した。遺構は調査区



第 45 図　庵寺古墳群加工段 13 ～ 15、SD01、SK03･04･06 配置図



第 46 図　庵寺古墳群加工段 13 実測図

外に広がるとみられ、掘り方の規模は現状で長さ 2.5m、深さは約 40cm を測る。

遺物は出土していない。

第 4 群の遺構（第 45 図）

第 4 群は南側丘陵部尾根筋西寄りの尾根頂部付近に位置する遺構群である。古墳が立地する尾根筋から斜面への傾斜変換地点で 3 基の加工段が検出された（加工段 13 ～ 15）。また 3 基の加工段はいずれも床面に明確なピットが認められない特徴をもつ。

加工段 13（第 46 図）

20 号墳が立地する丘陵頂部の北向き斜面に位置する加工段である。床面の標高は 80.5m である。

周辺は急峻な斜面が広がっており、また古墳の土層を確認するため設置したサブトレンチで遺構の中央付近を抜いてしまったことから掘り方の残存状況は良好ではない。遺構の掘り方はやや湾曲気味に伸びており、掘り方の高さは約 50cm、床面の規模は現状で長さ 3.6 m、幅 1.1 mを測る。床面から壁帯溝やピットは検出されていない。

加工段 13 出土遺物（第 47 図）

遺構の残存状況が良好でない割には、床面の西端付近で多数の土器片が検出された。

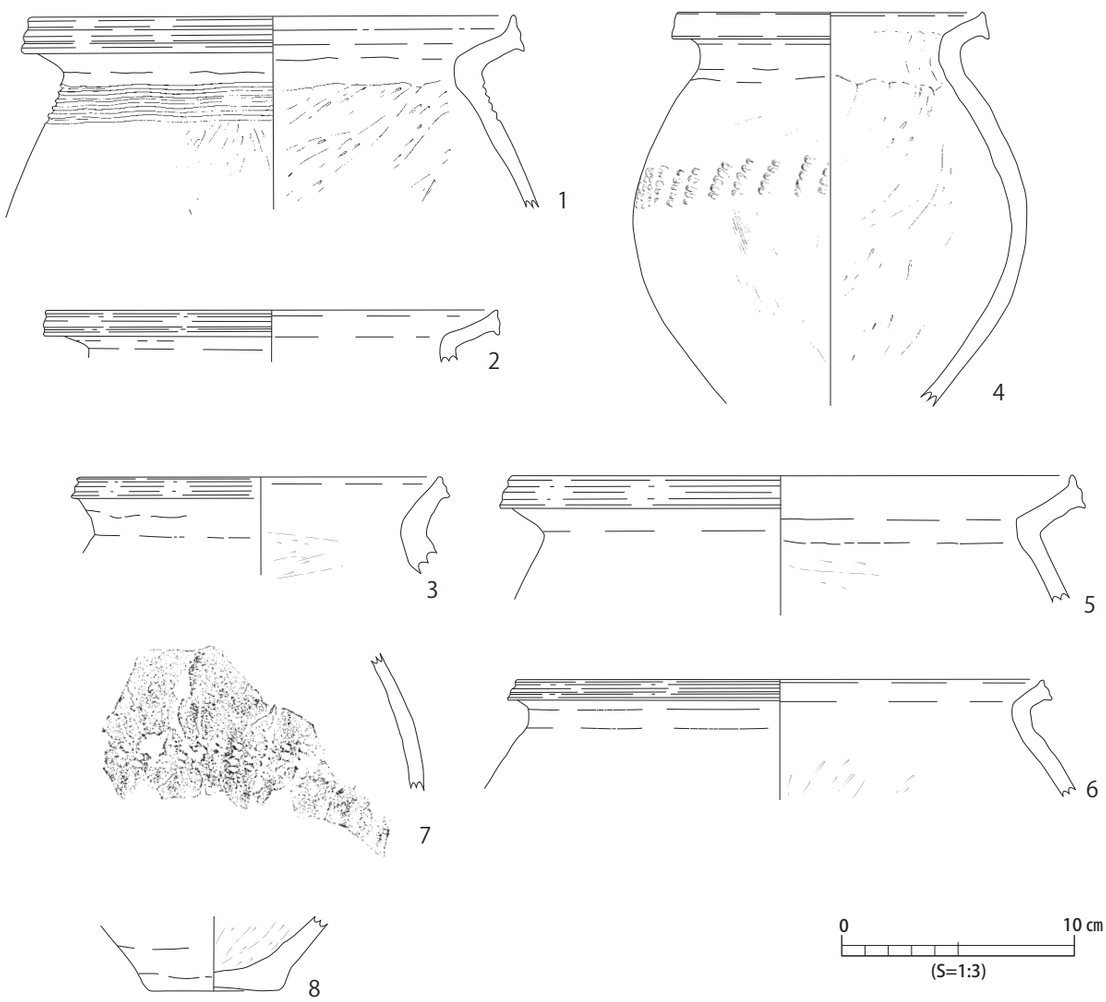
いずれも壺・甕類である。１は復元口径 21.0cm の甕で、口縁が内傾して立ち上がり端部が上下に拡張する。口縁外面に２条の凹線文が施され、肩部には櫛状工具による５条の沈線が施される。内面のヘラケズリは頸部付近まで及ぶ。２は口縁部の小片で、直立気味の口縁外面に２条の凹線文が施される。３は頸部がやや直立気味に外反する甕で、短く拡張する口縁外面に２条の凹線が施される。４は口径 13.2cm の甕で、内傾気味に立ち上がる口縁には施文が施されない。胴部は中央付近が張り出し、櫛状工具による連続刺突文が施される。５・６は内傾する口縁外面に２条の凹線文が施される。７は甕の胴部片で、櫛状工具による連続刺突文が施される。８は底部資料で平底を呈する。

甕の特徴は石見Ⅴ－１様式に相当するとみられ、遺構の時期は弥生時代後期前葉に比定される。

加工段 14（第 48 図）

加工段 13 の下方 2.5 mの位置で検出された加工段である。床面の標高は 77.5 mである。

古墳の土層確認のため設置したサブトレンチにより遺構の西端部を削平してしまったが、遺構の

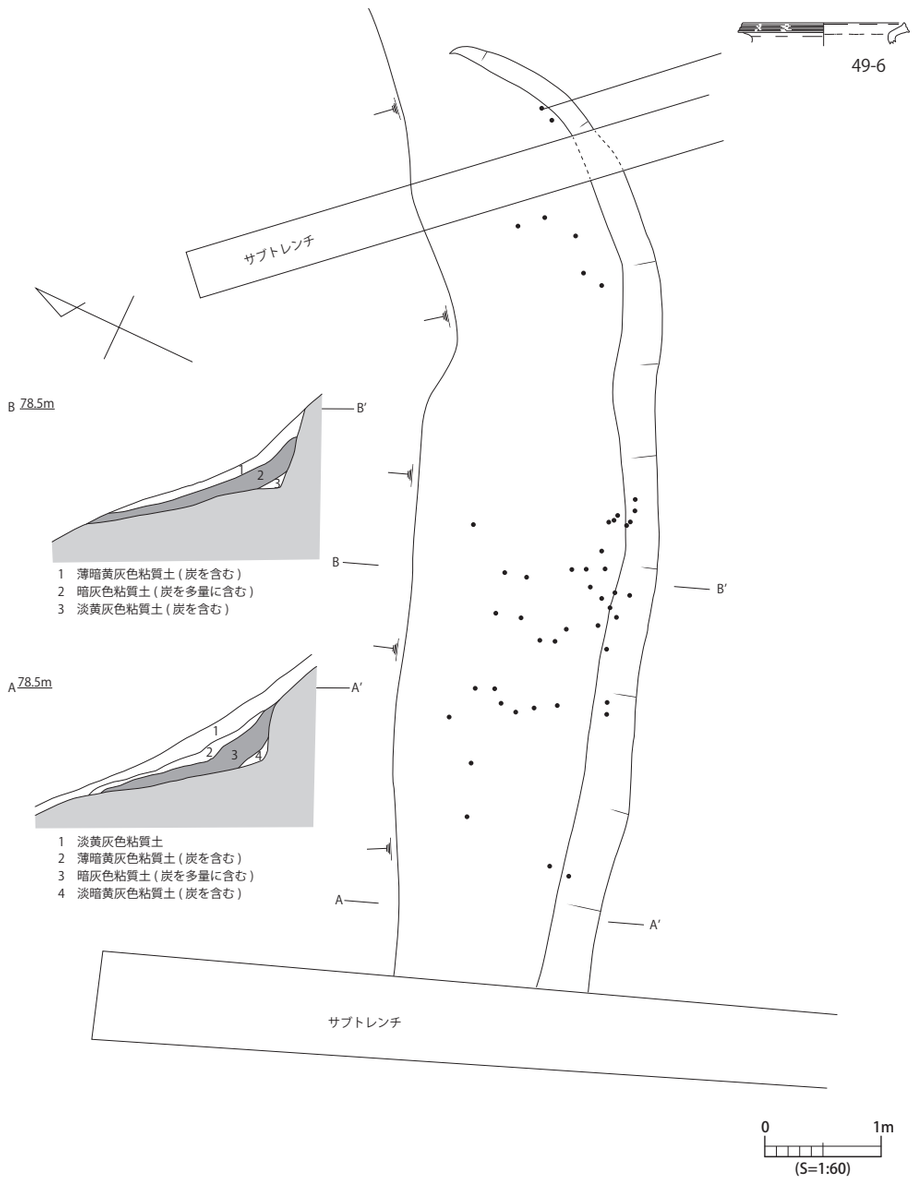


第 47 図　庵寺古墳群加工段 13 出土遺物実測図

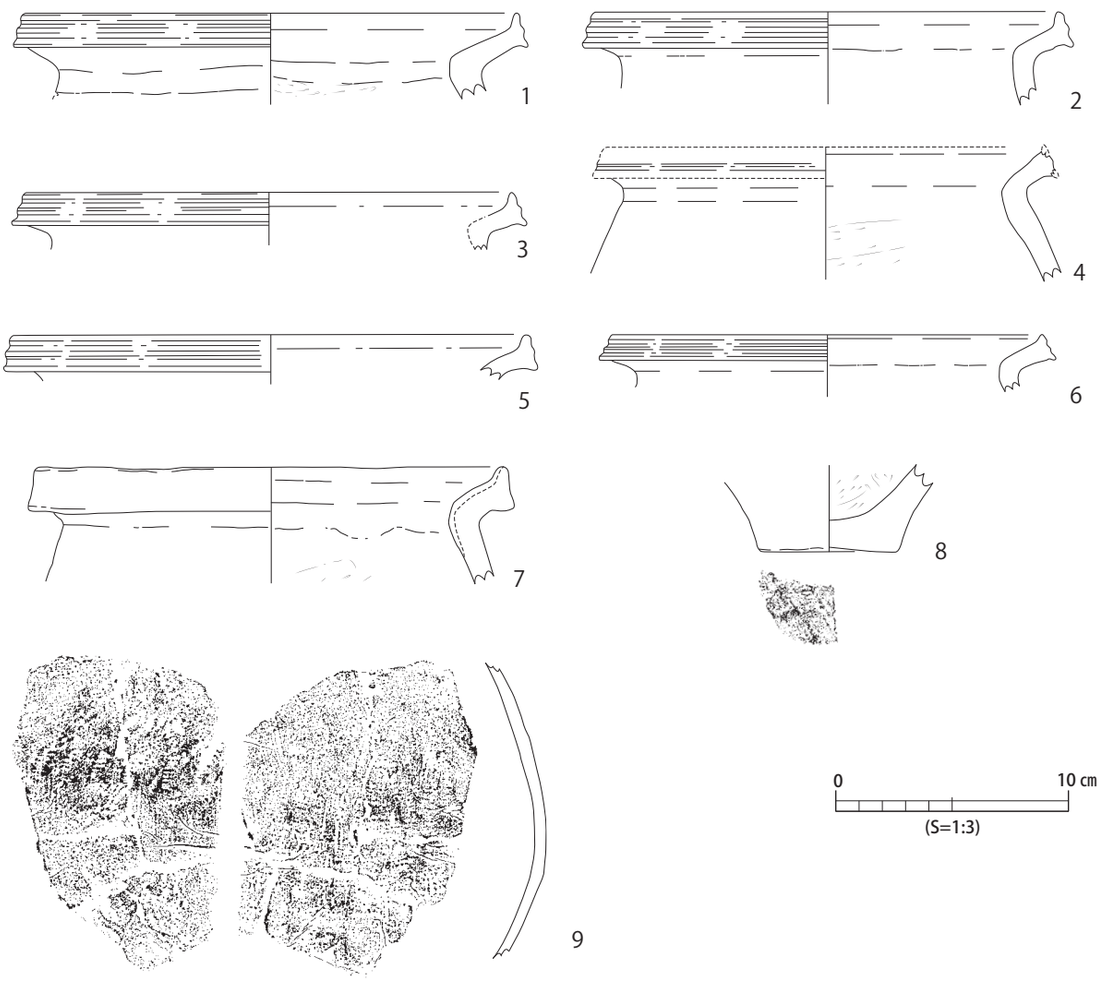
残存状況は良好である、弧状に検出された掘り方の深さは約 70cm を測る。掘り方がサブトレンチの外側に認められないことから、端部はトレンチ幅の中で収まると考えられ、床面の規模は現状で長さ 8.2 m、幅は 1.8 mを測る。

床面が長大に検出されたのにかかわらず､床面から明確なピットを検出することはできなかった。測量後に念のため床面にサブトレンチを入れ全面の精査を行ったが､貼り床構造も認められず､ピットの痕跡を明らかにすることはできなかった。従ってこの加工段がどのような機能を有するものなのか不明瞭と言わざるを得ないが、出雲部において丘陵に立地する弥生集落跡でも柱穴の無い加工段の検出例が知られているので、当加工段も建物の存在しなかった段状遺構である可能性は十分考えられる [(3)]。

また遺構内堆積土の土層観察では、炭を多量に含む黒色粘土層が床面を覆うように厚さ 10cm に渡って堆積する様子が認められた。これは第 2 群の加工段 16 ～ 19 で検出された黒色粘土層と



第 48 図　庵寺古墳群加工段 14 実測図



第 49 図　庵寺古墳群加工段 14 出土遺物実測図

と同様のものとみられる。

加工段 14 出土遺物（第 49 図）

遺物は小片が多く、床面の中央付近から東側にかけて広い範囲で出土した。

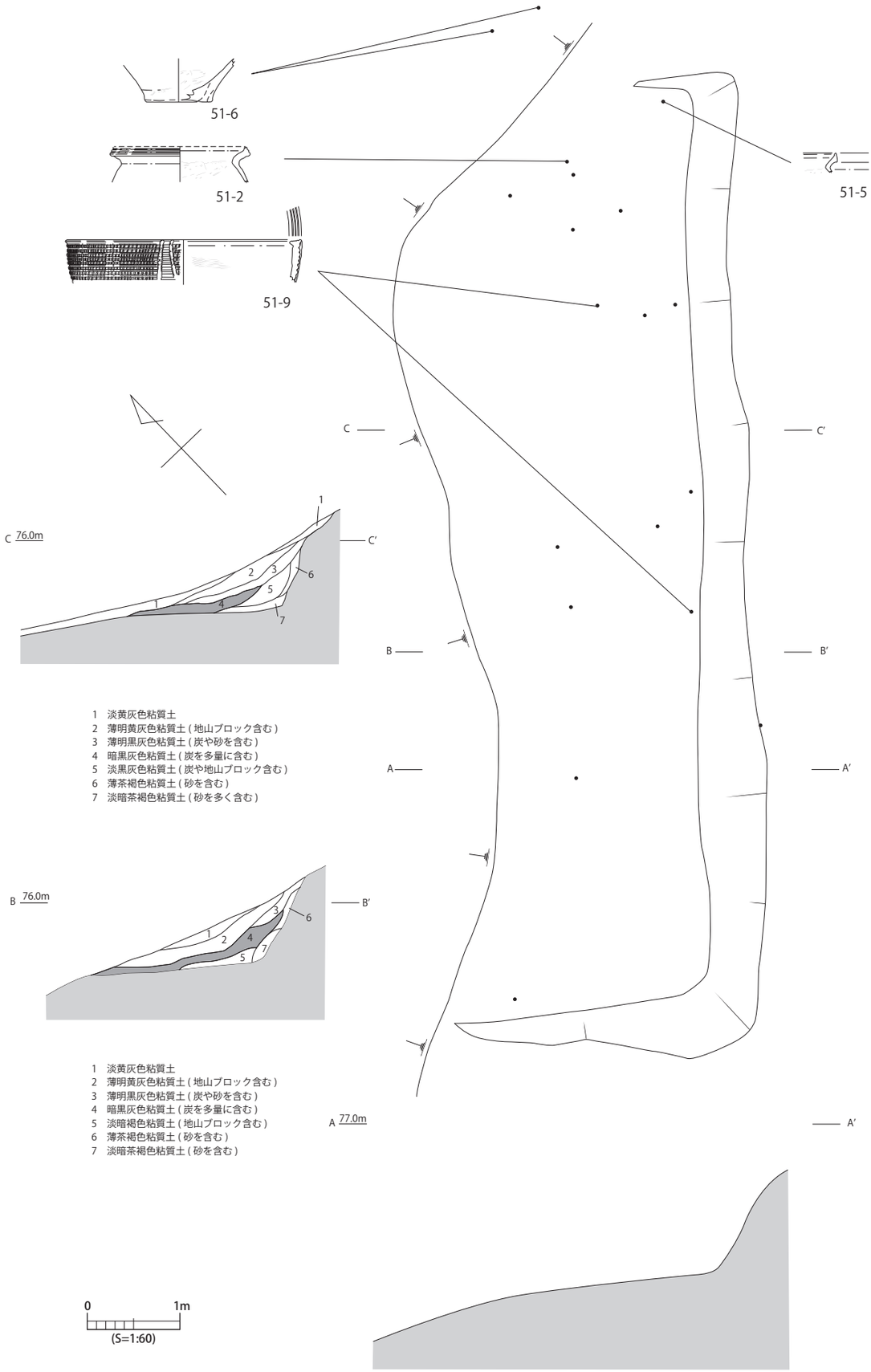
いずれも壺・甕類である。１は復元口径 21.2cm の甕である。口縁が内傾気味に立ち上がり、外面に２条の凹線文が施される。２～６も同様に口縁が内傾気味に直立し、外面に２条の凹線文が施されている。７は器壁がやや肉厚で、風化が著しいが口縁に施文が施されないタイプとみられる。８は平底を呈する底部資料である。底面に板の圧痕が認められる。９は胴部の破片で、風化が著しいが櫛状工具による連続刺突文が認められる。

遺物は口縁部の特徴から石見Ⅴ－１様式に相当するとみられ、遺構の時期は弥生時代後期前葉に比定される。

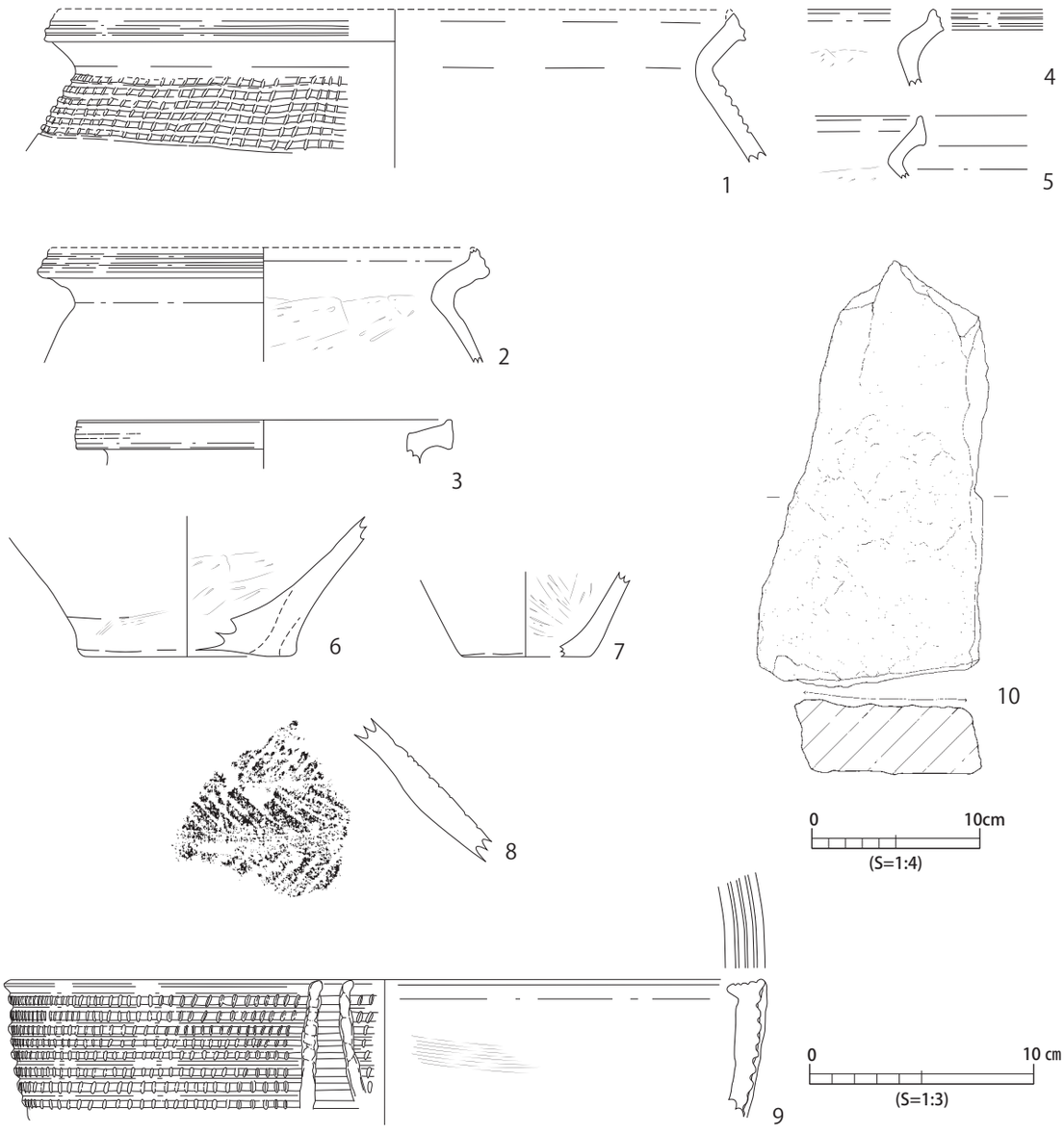
加工段 15（第 50 図）

加工段 14 の東側３ｍの位置で検出された加工段である。床面の標高は 75.5 ｍである。

遺構の残存状況は良好で、掘り方の深さは約１ｍを測る。掘り方の形状はコの字形を呈し、方形状の床面規模は長さ 10.4 ｍ、3.2 ｍを測る。これは、当遺跡で検出された加工段の中で最大規模



第 50 図　庵寺古墳群加工段 15 実測図



第 51 図　庵寺古墳群加工段 15 出土遺物実測図

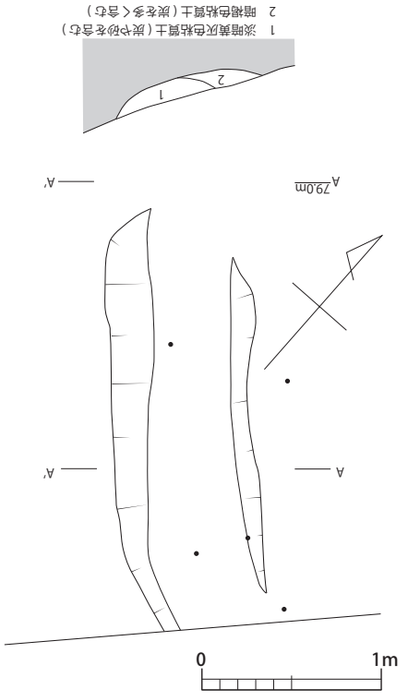
を誇るものである。長大なスペースをもつ床面からピットが検出されておらず、床面の再精査後も確認することはできなかったため、加工段 14 と同様に建物を伴わない段状遺構と考えられる。

また堆積土の土層観察で、厚さ 10cm の炭を多量に含む黒色粘質土が床面を覆うように堆積する様子が認められた。

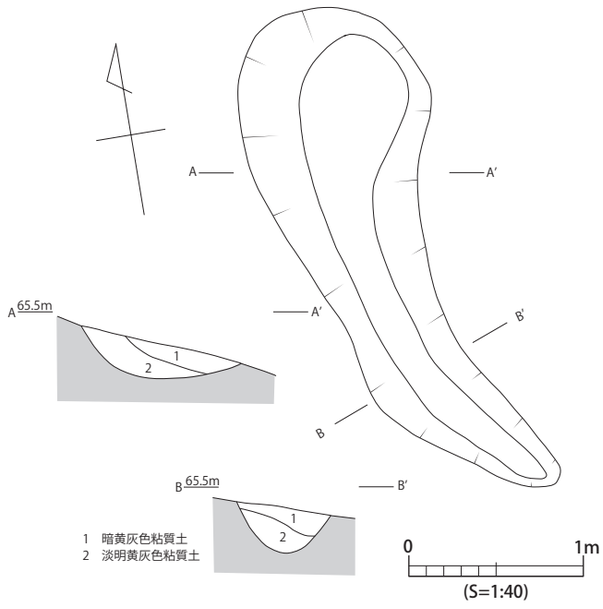
加工段 15 出土遺物（第 51 図）

遺物は黒色土から床面にかけて点在するように出土した。

１～８は壺・甕類である。１は口縁端部を欠くため口径が不明瞭であるが、内傾する口縁外面に凹線文、肩部に６段の重層刻目文がみられ、刻目の後に平行沈線が施されている。内面にはヘラケズリの痕跡が認められず、塩町式土器の影響がみられるものである。２～４は内傾もしくは直立する口縁外面に２～３条の凹線文が施され、５は口縁に施文がみられない。６・７は平底を呈する底



第 52 図　庵寺古墳群 SD01 実測図



第 53 図　庵寺古墳群 SD02 実測図

部資料である。８は大型の壺形土器の破片とみられ、肩部に沈線で区画された羽状文が施される。９は鉢であり、口縁端部を水平に肥厚させ端面に３条の凹線文、口縁外面に重層の刻目文及び棒状浮文が施され、内面にはハケ調整が認められる。

10 は床面直上で出土した台状の石製品で、表面に細かな敲打痕が認められる。長さ 25.3cm、幅 13.2cm、厚さ 4.3cm を測る。

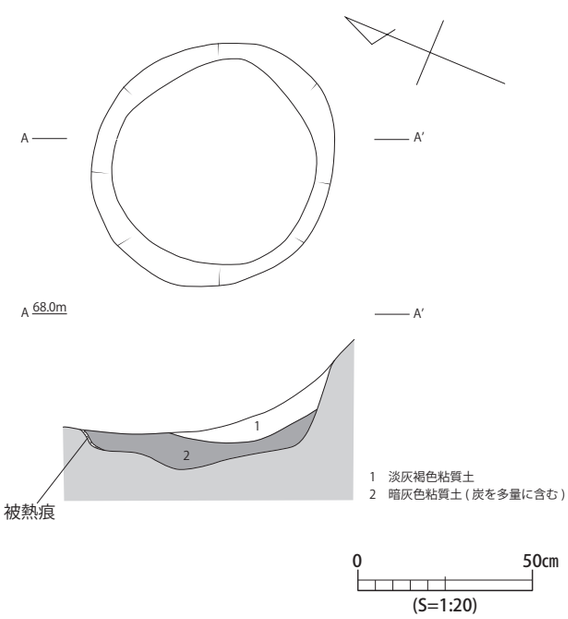
１や８・９は石見Ⅳ様式、他の甕類は石見Ｖ－１様式に相当するとみられ、遺構の時期は少なくとも弥生時代中期末～後期前葉と幅を持たせることが妥当とみられる。

３．溝状遺構の調査（第 20・45 図）

溝状遺構は南側丘陵部の尾根筋西側（第４群）と東端部（第２群）で１基ずつ検出された（ＳＤ 01･02）。以下、概要を述べる。

ＳＤ０１（第 52 図）

尾根筋の西端最頂部から数ｍ下がった平坦面で検出された。周辺に 22 号墳が隣接しており、墳丘西側の周溝と縦列して立地する。周溝とは若干角度を違えていることや、



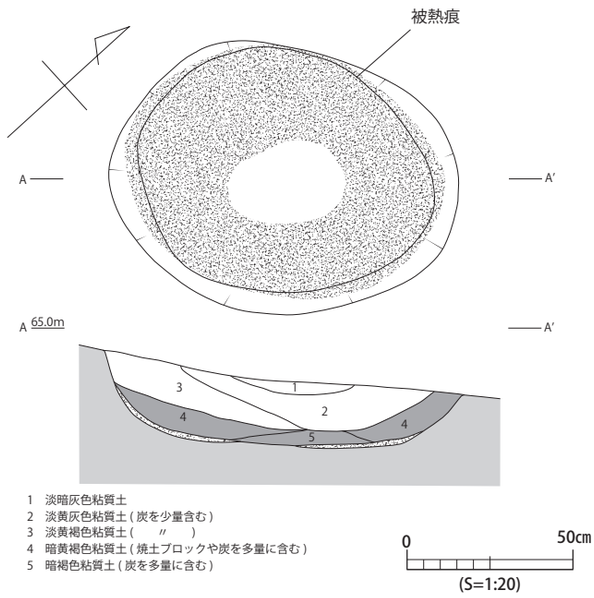
第 54 図　庵寺古墳群 SK01 実測図

覆土の状況が異なることから別の遺構と判断した。

尾根筋とは直交して直線状に掘り込まれるが、遺構は調査区外に伸びているものと思われる。規模は現状で長さ 2.4 m、幅 83cm、深さ 10cm を測る。

ＳＤ０１出土遺物

溝内覆土や周辺から弥生土器とみられる小破片が数点出土するが、図化には至らなかった。

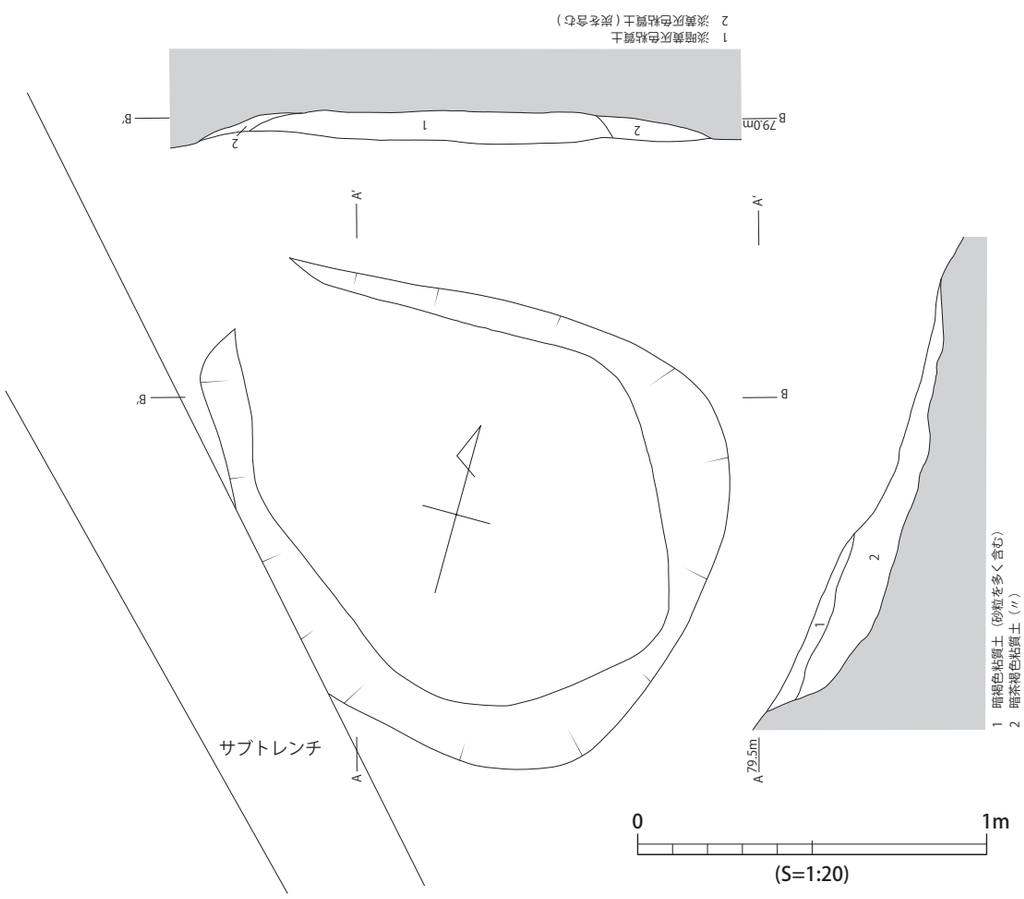


第 55 図　庵寺古墳群 SK02 実測図

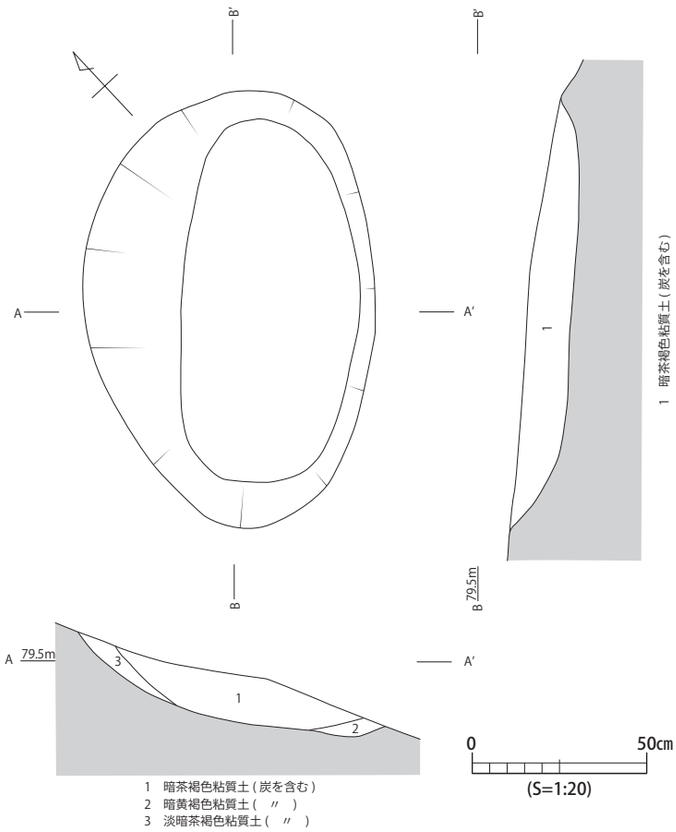
ＳＤ０２（第 53 図）

丘陵尾根筋の東端部で検出された。周辺には加工段が分布し、加工段 1 ・ 27 の上方に位置する。

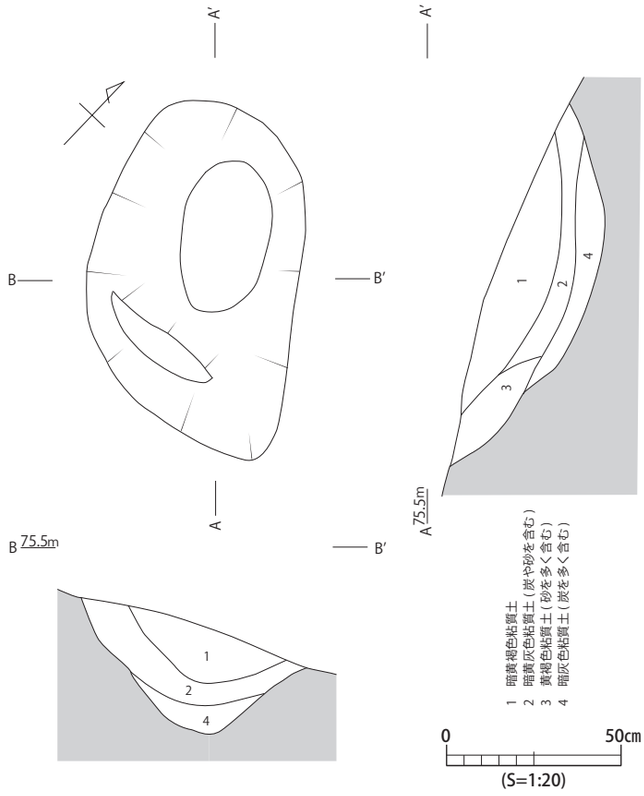
尾根筋とは直交して南北方向に弧状に伸びている。掘り方の南側は尖り気味で北側に向かって広がり、北端部は丸く収まる形状である。規模は長さ 3.1 m、最大幅 1.1 m、深さ 20 ～ 30cm を測る。



第 56 図　庵寺古墳群 SK03 実測図



第 57 図　庵寺古墳群 SK04 実測図



第 58 図　庵寺古墳群 SK05 実測図

遺物は出土しておらず、遺構の時期や性格は不明である。

4．土坑の調査

土坑は南側丘陵部から 6 基検出された（ＳＫ 01 ～ 06）。これらの土坑は出土遺物が無く所属時期は不明だが、分布状況から他の弥生期の遺構に伴う可能性が高いと判断し、ここに掲載した。

この他、谷部から 1 基（ＳＫ 07）、北側丘陵部から 2 基検出されるなど（ＳＫ 08・09）、調査区全域にみられるが、これらについては後述する。

ＳＫ０１（第 54 図）

加工段 7 の西側に隣接して検出された焼土土坑である。平面形状は円形で、規模は径 70cm、深さ 25cm を測る。

壁面には被熱痕や堆積土には炭が多量に含まれるなど火を焚いた痕跡が残る。出土遺物が無く所属時期は不明だが、炭化物の AMS 年代測定では 11 世紀代の測定値が示されている（第 5 章参照）。

ＳＫ０２（第 55 図）

尾根筋の東端部で検出された土坑である。加工段 1 の下方に隣接して立地する。平面形が楕円形状を呈する焼土土坑で、規模は長さ 1.05 m、幅 83cm、深さ 20cm を測る。

底面に被熱痕が認められ、覆土の下層には炭が多量に含まれてい

た。出土遺物が無く時期は不明だが、炭化物の AMS 年代測定では 7 世紀代の測定値が示されている（第 5 章参照）。

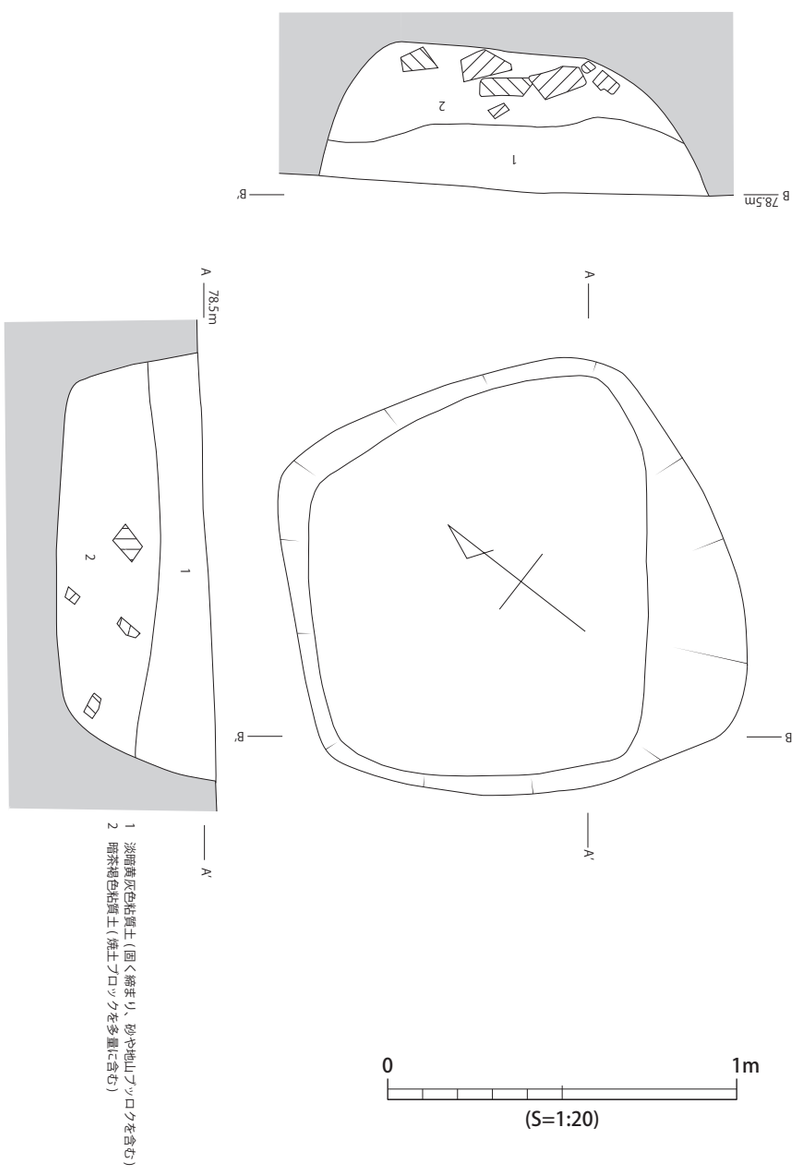
ＳＫ０３（第 56 図）

丘陵尾根筋西側の斜面で検出された土坑で、加工段 14 の上方 2 mに位置する。形状は楕円形を呈し、掘り方の西側は流出している。一部サブトレンチにより削平してしまったが、現状で規模は長さ 1.55 m、幅 1.35 m、深さ 20cm を測る。

遺物は出土しておらず、遺構の時期や性格は不明である。

ＳＫ０４（第 57 図）

ＳＫ０３の南側約 7 mの尾根上平坦部で検出された土坑である。平面形状は楕円形を呈し、規模



第 59 図　庵寺古墳群 SK06 実測図

は長さ 1.35 m、幅 85cm、深さ 15cm を測る。

遺物は出土しておらず、遺構の時期や性格は不明である。

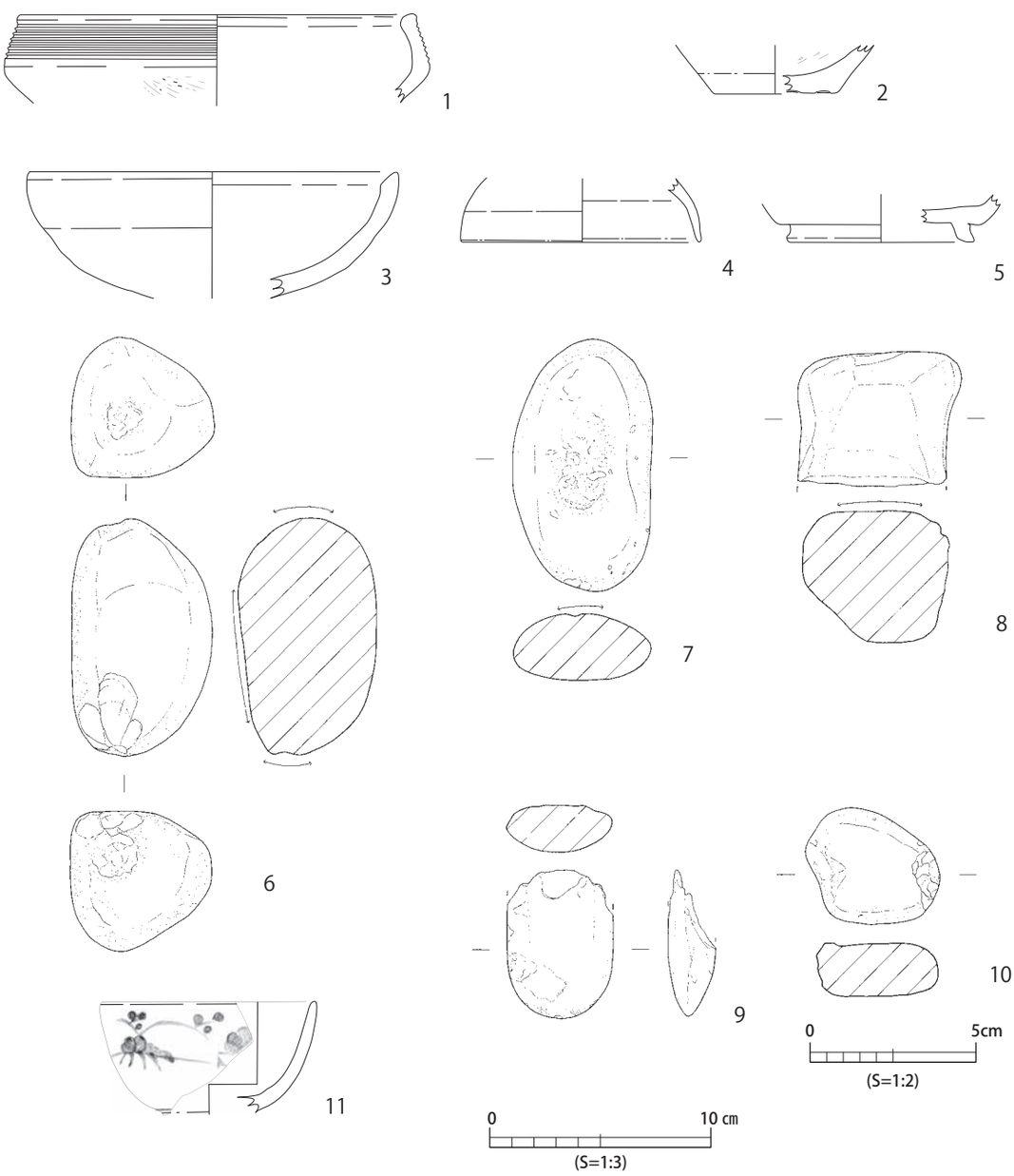
ＳＫ０５（第 58 図）

尾根筋中央付近に立地する 23 号墳の斜面下方で検出され、加工段 17 の上方 2.5 mに位置する。平面形状は楕円形を呈し、長さ 95cm、幅 60cm、深さ 30cm の小規模な土坑である。

遺物は出土しておらず、遺構の時期や性格は不明である。

ＳＫ０６（第 59 図）

尾根筋中央付近に立地する 22 号墳の墳丘盛土を掘り込んで造られた土坑であり、古墳の主体部



第 60 図　庵寺古墳群遺構外出土遺物実測図

を一部切り込んでいる。付近は盛土が幾層にも渡り堆積し、土層が繁雑であったことから精査で土坑のプランを検出することはできなかった。主体部の調査終了後に盛土観察のため墳丘をトレンチで断ち割ったところ、土層断面で土坑の逆台形状の掘り方を確認することができた。平面形は正方形状を呈し、規模は長さ・幅とも約 1.3 m、深さは 45cm を測る。

出土遺物はなく時期や性格は不明だが、下層からは長さ 10cm 前後の焼土ブロックが多数検出された。しかしながら土坑の壁面や底面には被熱の痕跡がみられないため、別の場所で生じた焼土礫を廃棄したものと考えられる。

5．遺構に伴わない遺物（第 60 図）

南側丘陵部では尾根筋や北向きの斜面から多数の遺構が検出されたが、遺構に伴わず出土した遺物も検出されている。図化できたものを掲載する。

1 は弥生土器の高坏の口縁部とみられる。復元口径は 18.0cm で、口縁はくの字状に屈曲して内傾気味に立ち上がる。外面には櫛状工具による凹線文が施される。2 は甕類の底部資料であり、平底を呈する。

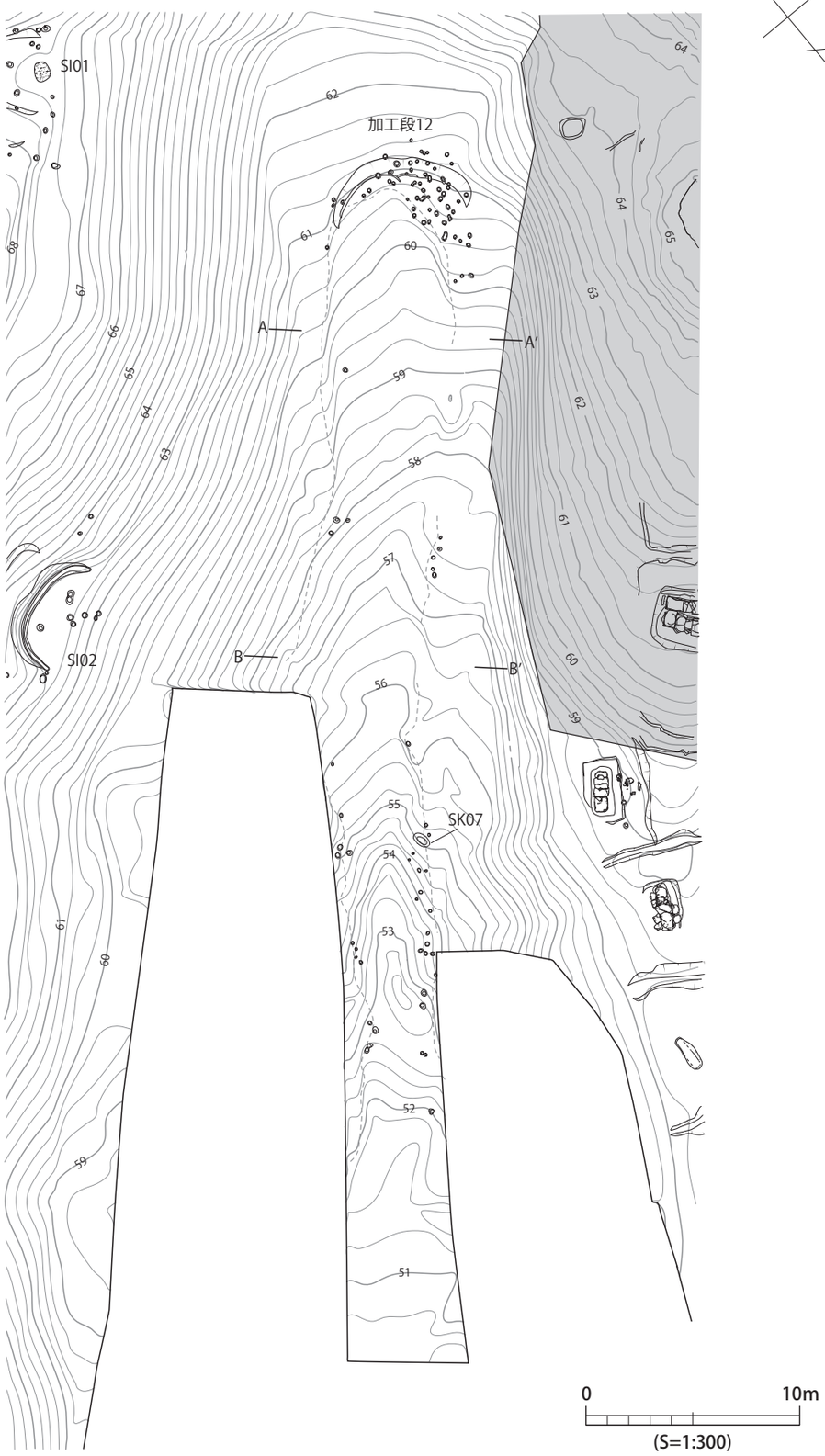
3 は土師器の坏とみられる。復元口径 16cm の口縁が丸みを帯びて立ち上がり、端部の内面に平坦面をもつ。風化が著しく調整は不明瞭である、

4 は須恵器の坏蓋で、復元口径は 10.8cm を測る小型のものである。5 は須恵器の坏の底部片で、高台が付く。

6 ～ 10 は石器類である。6 ・ 7 は敲石で、6 は乳棒状の円礫の両端面に敲打痕、表面には磨面が認められる。長さは 10.6cm、幅 6.3cm、厚さは 6.2cm を測る。7 は平たい楕円形の円礫で、表面中央付近に敲打痕がみられる。長さ 11.3cm、幅 6.2cm、厚さ 3.0cm を測る。8 は磨石で、表面に磨面が認められる。角張った形状で約半分は折損しているとみられるが、現状で長さ 6.1cm、幅 7.3cm、厚さ 6.3cm を測る。9 は石斧で、刃部は大きく湾曲する。基部側は折損するが、現状で長さ 6.7cm、幅 4.8cm、厚さ 2.15cm を測る。10 は石錘である。平たい円礫の両端部に加工痕がみられる。

遺物の時期は様々であり、概ね 1 が弥生時代中期末、3 が古墳時代中期後葉、4 が古墳時代後期後葉、5 が奈良時代頃とみられる。

なお、11 は南側丘陵部でなく、北側丘陵部に立地する 10 号墳東側斜面の表土掘削中に出土した資料である。磁器の丸形碗で、復元口径は 9.8cm を測る。表面に梅花文が描写され、見込みに蛇ノ目の釉ハギが施される。産地は胎土の様子から肥前系波佐見とみられ、年代は 18 世紀末～19 世紀初頭と推定される [(4)]。



第 61 図　庵寺古墳群谷部遺構配置図

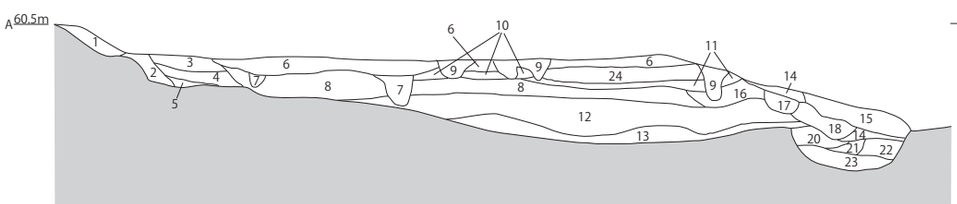
第３節　谷部の調査

１．谷部の地形と遺構の配置（第 61・62 図）

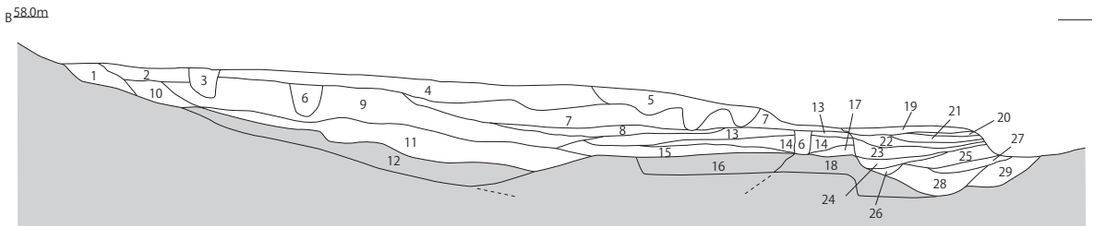
調査区の北側丘陵部と南側丘陵部に挟まれた谷間について、平成 20 年度調査でトレンチを設定した際に、弥生時代中～後期の土器片と古墳時代以降の土師器・須恵器が出土する包含層が検出された。これを受け、この狭長な谷間についても調査対象とし、谷間が開口する東側に向かって調査範囲を拡張し調査を行った。

この谷部は三方から丘陵が迫っており、断面Ｕ字状を呈する谷底部の規模は幅約 10 ｍで、あたかも樋のような緩やかな傾斜が東側開口部に向かって続いている。地形を観察すると、谷底部の両側には幅２ｍ程の段状平坦面が広がっており、この平坦面は丘陵斜面に沿って谷の出口まで続く様相を呈している。平野部からこの丘陵に出入りする際には急峻な斜面を直接上り下りするのではなく、この谷部から進入したものと思われるので、この段状平坦面は通路状に加工されたものであることがうかがえる。

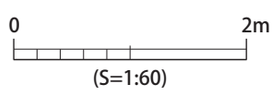
谷間からは加工段（加工段 12）の他、土坑やピット群が検出された。加工段の概要は第２節で既に述べたが、谷西端部の最高所に位置するものである。土坑は北側の平坦面沿いで１基検出された（ＳＫ 07）。多数のピットも平坦面に沿って検出されており、あるいは柵状の施設があったことが想定される。また谷間には厚さ 70cm の堆積土がみられ、多種多様の遺物が出土した。



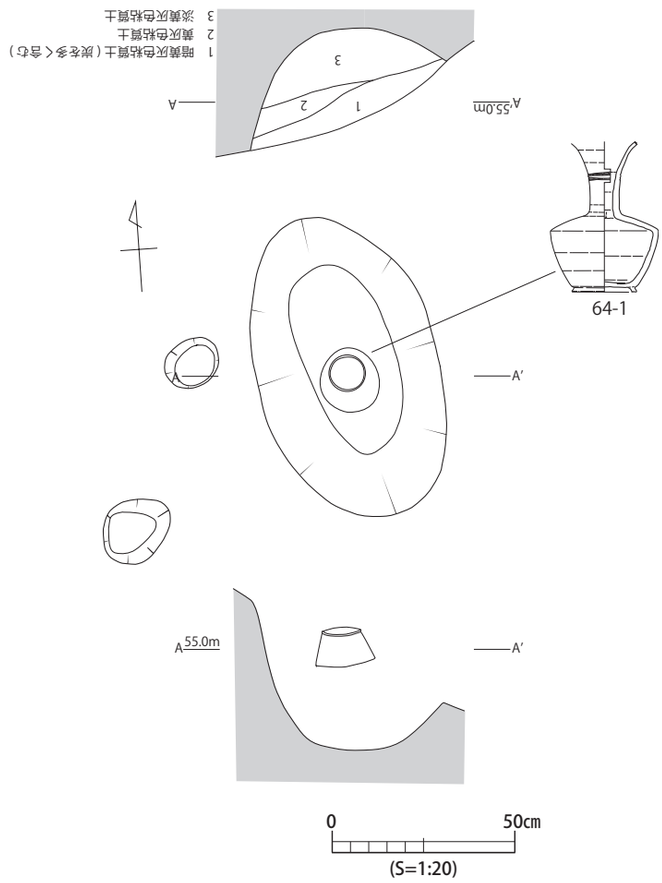
1　淡暗黄灰色粘質土（5 ㎜以下の炭を多く含む）
2　暗黄灰色粘質土（根の跡か）
3　淡黄灰色粘質土（５㎜以下の炭を少量含む）
4　黄灰色粘質土（3 と同質だが炭をあまり含まない）
5　明黄灰色粘質土（5 と同質だが炭をほとんど含まない）
6　暗灰色粘質土（炭や地山ブロック、礫を多く含む）
7　淡暗灰色粘質土（6 と同質、根の跡か、落ち込み）
8　薄暗灰色粘質土（炭や礫を多く含む）
9　淡暗灰色粘質土（7 と同質の落ち込み）
10　暗黄灰色粘質土（炭や礫を多く含む）
11　暗黄褐色粘質土（しまりややゆるい、炭を多く含む）
12　暗褐色粘質土（１㎝大の炭やマンガンを多く含む）
13　暗黄灰色粘質土（12 と同じ土質だが、マンガンを少量含む）
14　淡黄灰色粘質土（固くしまる）
15　明黄灰色粘質土（しまりゆるく、攪乱気味）
16　薄暗黄灰色粘質土（マンガン多く含む）
17　黄褐色粘質土（ゆるいしまり、１㎝以下の炭を含む）
18　薄暗灰色粘質土（ゆるいしまり）
19　薄黄灰色粘質土（18 と同質）
20　明黄褐色粘質土（粘質強い、攪乱気味）
21　暗灰色粘質土（ゆるいしまり）
22　暗黄灰色粘質土（21 と同質）
23　淡黄褐色粘質土（粘質が強い）
24　明黄灰色粘質土（固くしまる）



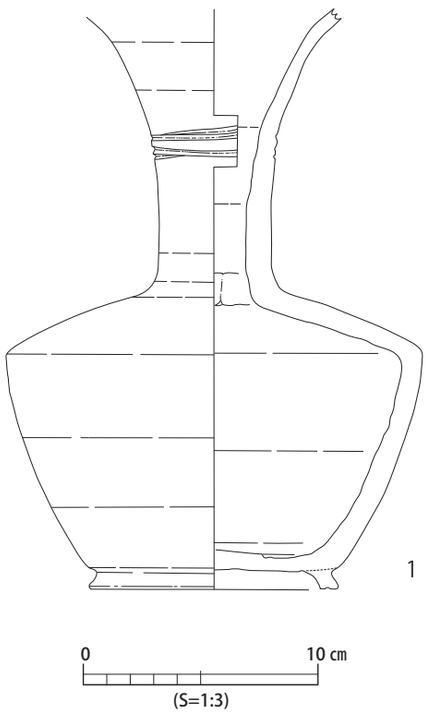
1　淡茶褐色粘質土（５㎝の礫を含む斜面の崩落土）
2　淡黄褐色粘質土（固くしまる、礫を少量含む）
3　暗灰色粘質土（落ち込み土、根の跡か）
4　淡暗灰色粘質土（炭やマンガンを含む）
5　暗灰色粘質土（炭やマンガンを多く含む）
6　暗灰色粘質土（3 と同じ）
7　薄暗灰色粘質土（炭、マンガンを含む）
8　淡暗黄灰色粘質土（炭、マンガンを含む）
9　暗黄灰色粘質土（　〃　）
10　明黄灰色粘質土（マンガン含まない）
11　暗灰色粘質土（9 と同じ土質だが、暗色濃い）
12　淡黄灰色粘質土（マンガン少量含む、地山か）
13　明黄灰色粘質土（固くしまり、炭やマンガン含まない）
14　淡茶灰色粘質土（ややゆるいしまり、炭を少量含む）
15　濃暗灰色粘質土（マンガン多く含む）
16　黒灰色粘質土（マンガン多く含む、地山）
17　淡黄灰色粘質土（マンガン少量含む）
18　明黄灰色粘質土（　〃　、地山）
19　淡暗黄灰色粘質土（ややゆるいしまり、礫を少量含む）
20　淡黄灰色粘質土（攪乱気味の土質）
21　淡暗黄灰色粘質土（炭や礫を少量含む）
22　薄暗灰色粘質土（礫を多く含む）
23　暗灰色粘質土（炭、礫を多く含む）
24　淡黄灰色粘質土（暗色土や礫をブロック状に含む）
25　暗灰色粘質土（1㎝以下の礫をブロック状に含む）
26　薄灰色粘質土（　〃　）
27　淡暗灰色粘質土（礫を多く含む）
28　濃暗灰色粘質土（ややゆるいしまり、炭を多く含む）
29　淡茶褐色粘質土（礫を多く含む、斜面の崩落土か）



第 62 図　庵寺古墳群谷部土層図



第 63 図　庵寺古墳群 SK07 実測図



第 64 図　庵寺古墳群 SK07 出土遺物実測図

2．土坑の調査

ＳＫ０７（第 63 図）

谷部中央付近の通路状平坦面の際で検出された。平面形が楕円形状を呈する小規模な土坑で、長さ 58.5cm、幅 50cm、深さ 35cm を測る。

土坑内から須恵器壺の下半分が伏せた状態で検出された。壺の上半分は谷底部から出土しており、両者を合わせるとほぼ完形となる。壺を割るような何らかの祭祀行為の後、土坑内に下半分が埋められたことも想定されるが、壺は土坑の上層から検出されており定かではない。

ＳＫ０７出土遺物（第 64 図）

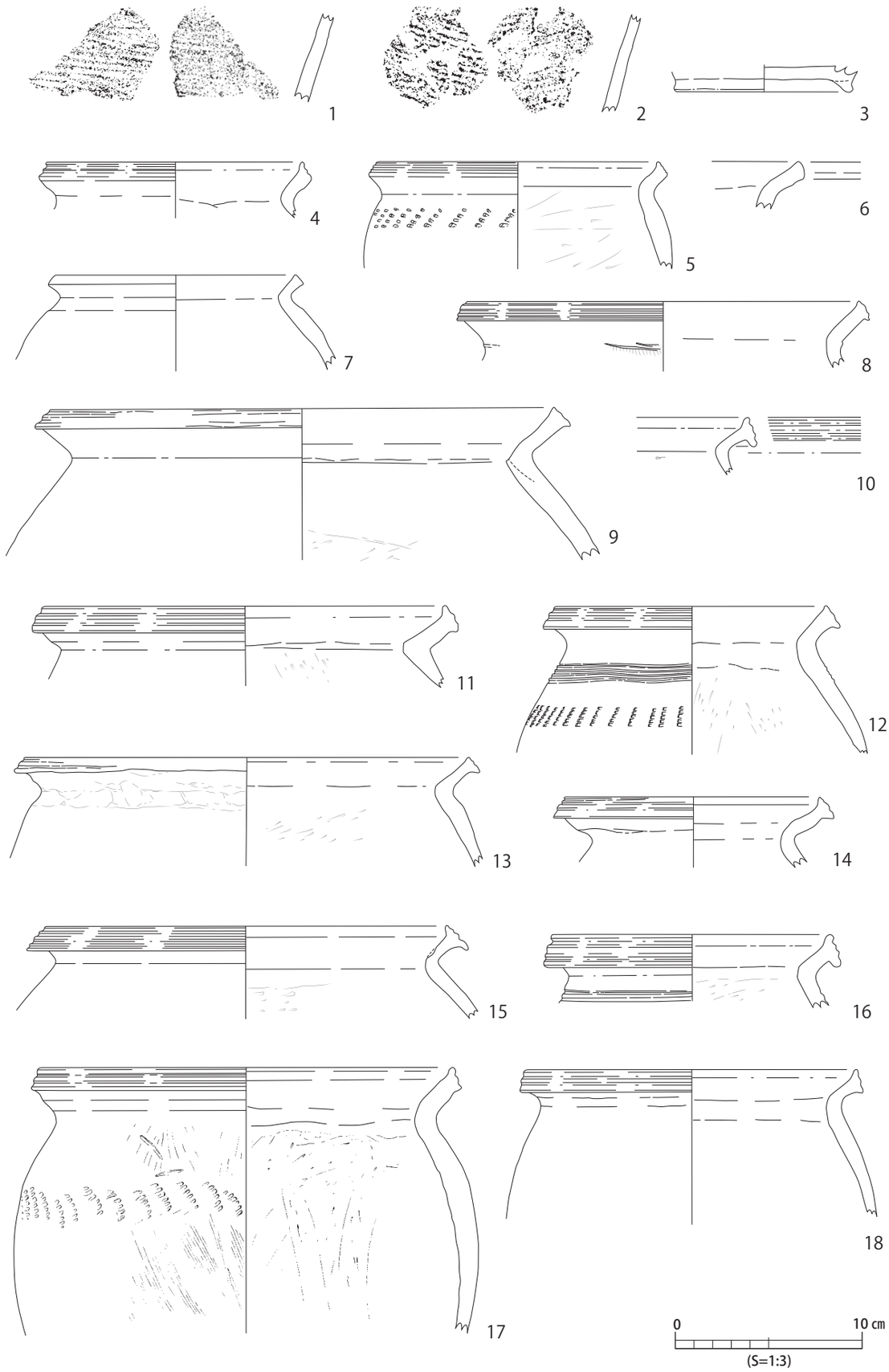
口縁端部を欠く須恵器の長頸壺である。明瞭に屈曲する肩部で２つに分かれており、土坑内からは胴部以下が出土した。底部には高台が付き、底面には回転糸切り痕をナデ消した痕跡が認められる。

壺の特徴は出雲須恵器編年 (5) の８期に併行するものとみられ、時期は古墳時代終末期～奈良時代に比定される。

3．谷部出土遺物（第 65 ～ 68 図）

谷部からは縄文時代から奈良期にかけて多種多様の遺物が出土している。

１～３は縄文土器である。１・２は粗製の深鉢の小片である。風化が著しいが、内外面とも貝殻等による条痕がみられる。３は深鉢の底部とみられるもので、高台状



第 65 図　庵寺古墳群谷部出土遺物実測図 (1)

を呈する。時期の特定は難しいが、いずれも縄文時代晩期頃のものとみられる。

第 65 図 4 ～ 18、第 66 図 1 ～ 5 は弥生土器で、口縁が内傾して立ち上がり、端部を短く拡張するタイプの壺・甕類である。 4 ・ 5 は復元口径 14 ～ 15cm の口縁上端部のみが短く拡張し、外面に 2 ～ 3 条の凹線文が施される。 5 は肩部に櫛状工具による列点状の連続刺突文が施される。 6 ・ 7 は口縁端部が拡張せず、凹線文も施されない。

8 ・ 9 ・ 11 は口縁の上下端部がわずかに拡張し、外面に 2 ～ 3 条の凹線文を施している。10 は器壁がやや薄手で口縁端部が上下に長めに拡張し、外面に 3 条の凹線文を施す。12 は復元口径 14.4cm を測り、上下に短く拡張した口縁外面に 2 条の凹線文を施す。ハの字状に垂下する肩部に櫛状工具による 5 条の平行沈線文や列点状の連続刺突文が施される。

13 は復元口径 23.6cm の甕で、口縁外面に 2 条の凹線文が施され、頸部には強くヨコナデを施した痕跡が認められる。14 は復元口径 13.6cm の小型の甕で、口縁はやや丸みをもちながら立ち上がる。15 は器壁がやや薄手で、口縁上下端部は長めに拡張する。外面に 3 条の凹線文が施される。16 は復元口径 14.8cm の甕で、器壁がやや厚手の口縁が上下に拡張し、 3 条の凹線文が施される。肩部にも単位は不明であるが平行沈線文が施されている。

17 は復元口径 22.2cm の甕で、短く拡張する口縁外面に 2 条の凹線文が施される。肩部には板でナデたような擦痕が認められ、その下方に左方向から施文したみられる列点状の連続刺突文がみられる。18 は復元口径 17.6cm の口縁が直立気味に内傾し、外面に 2 条の凹線文が施される。

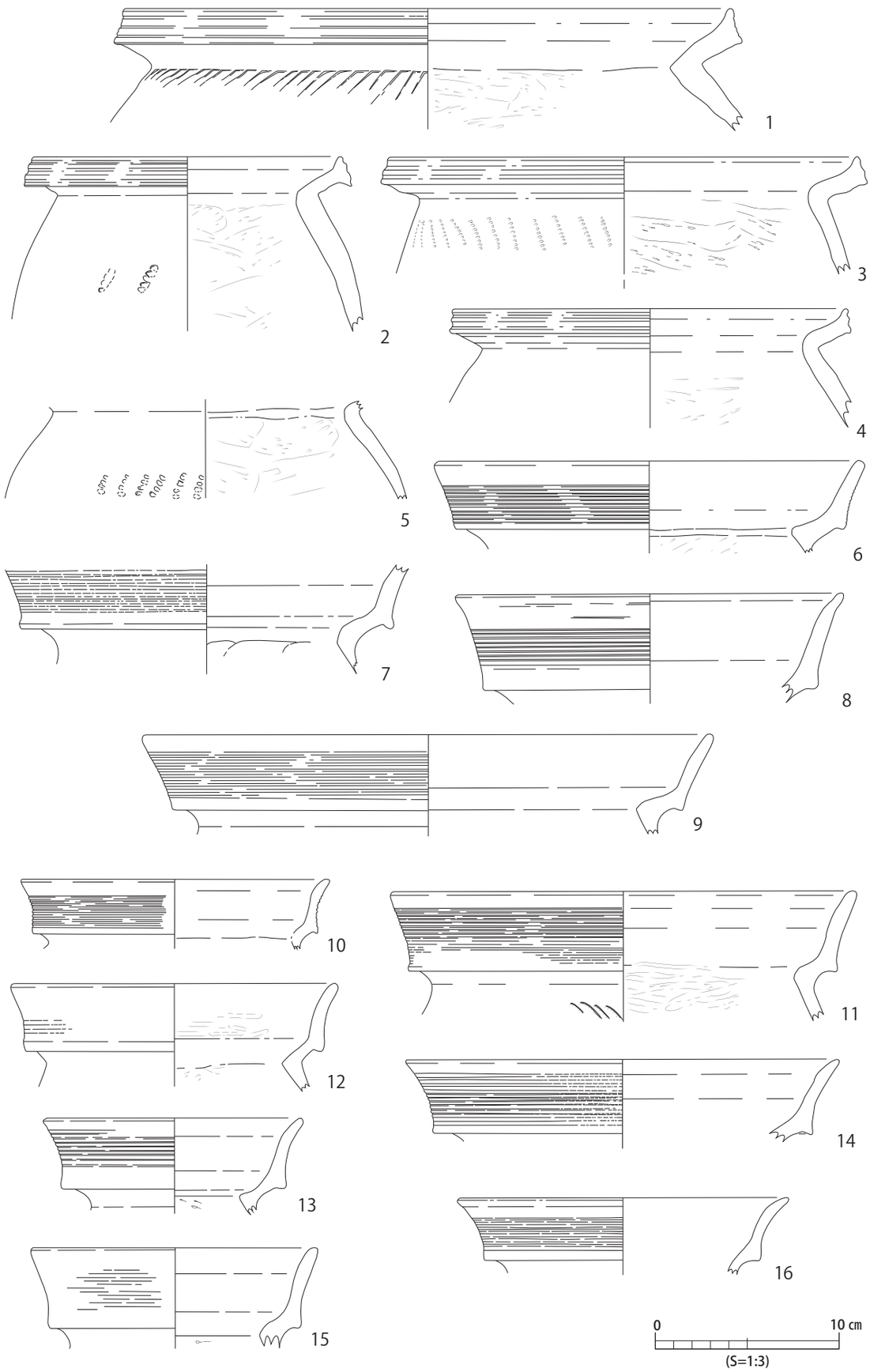
第 66 図 1 は復元口径 33.0cm を測る大型の甕で、直立気味に肥厚する口縁外面に 3 条の凹線文が施される。頸部には板状工具を連続して押さえつけたような刺突文がみられる。 2 は上下に幅広く拡張する口縁外面に 3 条の凹線文が施され、肩部は張らず列点状の刺突文がみられる。 3 は復元口径 25.8cm の甕で、直立気味に肥厚する口縁外面に 2 条の凹線文、肩部に左方向からの連続刺突文が施される。 4 は復元口径 21.4cm の甕で、口縁は直立気味に短く拡張する。外面に 2 条の凹線文が施されている。 5 は甕類の胴部片で、外面に列点状の連続刺突文が施され、内面はヘラケズリが及ぶ。

これらの土器は、石見Ⅴ－ 1 様式に相当するとみられる。

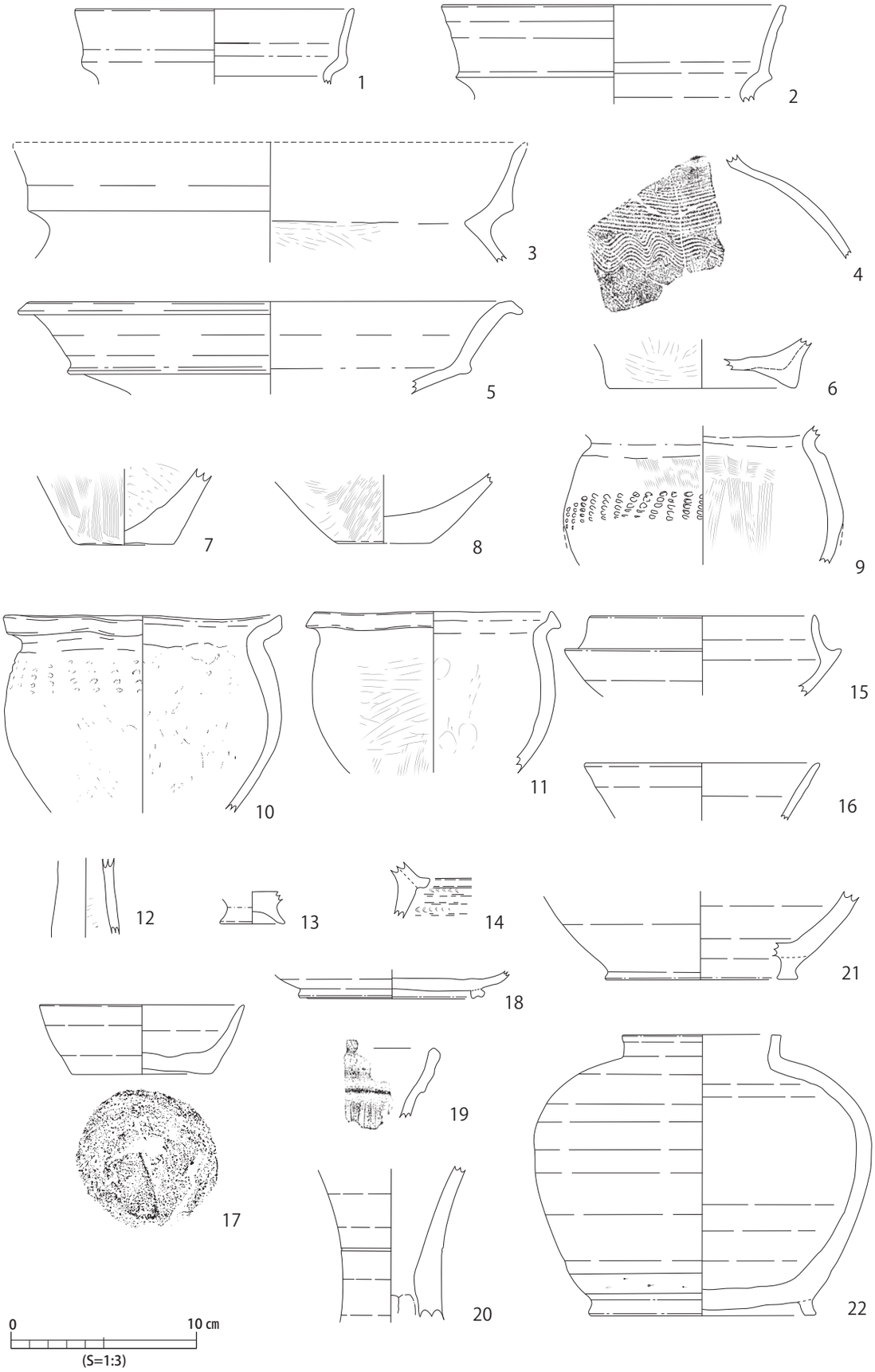
6 ～ 16 は口縁が外傾して幅広く立ち上がる複合口縁をもつ壺・甕類である。口縁外面への施文は貝殻復縁原体によるものと思われ、そのため口縁は外反カーブを描くものが多い。

6 は復元口径 22.8cm の甕で、口縁端部に面をもち外面に擬凹線が施される。 7 は口縁上端部を欠くが下端部が突出している。風化が著しいが、口縁外面に擬凹線が認められる。 8 は復元口径 16.2cm の甕で、口縁は長く拡張し、先端部が尖り気味に屈曲する。 9 は復元口径 30.8cm の甕で、口縁はやや直線的に外反する。10 は復元口径 16.8cm で、口縁先端部が大きく屈曲する。

11 は復元口径 25cm の甕で、口縁はやや直線的に外反する。肩部にはハケ状工具による連続刺突文が施され、胴部内面はヘラケズリ後にヘラミガキが施されている。12 は風化が著しい資料だが、口縁外面に擬凹線が、内面にヘラミガキ痕が認められる。13 は復元口径 13.7cm の小型の甕で、口縁が長く拡張して外反する。14 は復元口径 23.4cm の甕で、口縁の先端部が尖り気味に外反する。15 は風化が著しく、調整痕が不明瞭だが、口縁先端部は丸くおさまり、外面に擬凹線が認められる。16 は復元口径 17.8cm の甕で、器壁はやや薄手で口縁は大きく外反し先端部は尖り気味に丸くおさまる。



第 66 図　庵寺古墳群谷部出土遺物実測図 (2)



第 67 図　庵寺古墳群谷部出土遺物実測図（3）

これらの土器は、厳密に型式を細片するのは難しいが、概ね石見Ｖ－２～３様式に相当するとみられる。

第 67 図１～３は複合口縁を呈し、外面に施文が施されない甕である。１は復元口径 15cm の甕である。器壁は薄手で口縁は直立気味に外反し、端部は尖り気味に丸くおさまる。２は復元口径 18.6cm で、口縁は直線的に外傾して立ち上がり端部に面をもつ。３は口唇部を欠くが、器壁はやや厚手で口縁は湾曲しながら先端が尖り気味に外反する。内面の頸部以下にはヘラケズリ後ヘラミガキが施されている。これらは１・３が石見Ｖ－４様式、２は古墳時代前期とみられる。

４は装飾壺とみられる資料である。薄手の作りで算盤玉型を呈する胴部外面の上段に貝殻復縁による擬凹線、下段に波状文が施されている。

５は土師器の壺形土器の口縁部とみられ、復元口径は 26cm である。複合口縁を呈する口縁は水平気味に開いた後に屈曲部をもって大きく外反し、先端部は下方に折れ曲がり端部に平坦面をもつ。内外面とも風化が著しく屈曲部にシャープさがみられない。古墳時代前期の小谷２～３式に相当するとみられる。

６～８は壺・甕類の底部資料である。６は上げ底状、７・８は平底を呈する。

９～ 11 は小型の鉢形土器である。いずれも作りは精巧でなく、９は口縁部を欠き、胴部外面はハケ調整の後、列点状の連続刺突文が、内面にはハケ調整が施される。10・11 は復元口径 12 ～ 13cm で、口縁は端部が若干拡張するが施文は施されない。10 は外面に列点文が施されている。これらの時期は概ね弥生時代中期末～後期前葉とみられる。

12 は土師器の高坏の筒部とみられる。風化が著しいが、内面下半にはヘラケズリ痕が認められる。

13 は低脚坏の脚部である。風化が著しいが、先端部は尖り気味に丸くおさまる。

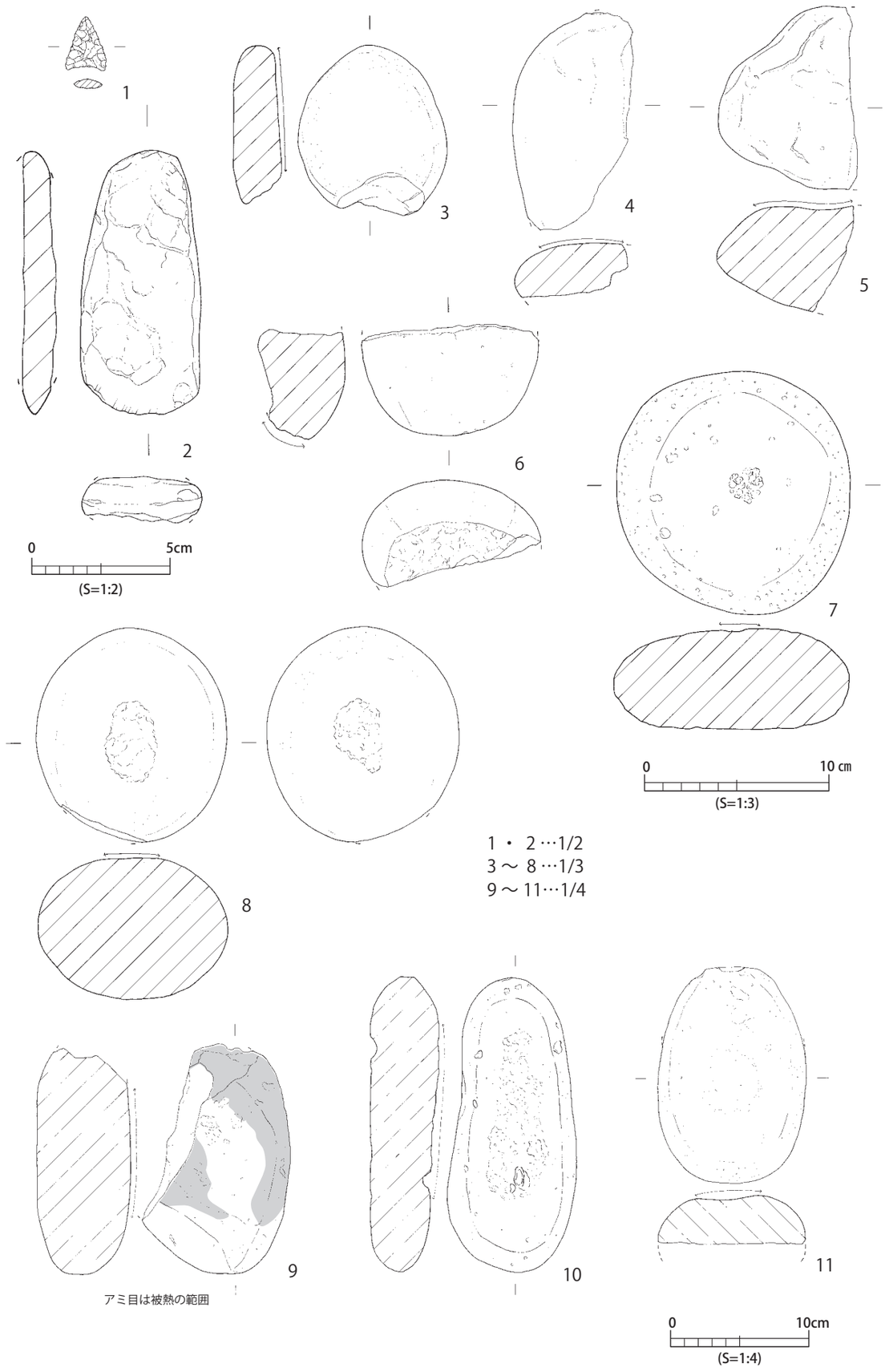
14 は装飾壺の胴部とみられ、屈曲部に突帯をもつ。小片であり天地の向きが判別し難いが、突帯の先端が尖る方を上として図化した。平行沈線の間にＣ字状の連続刺突文が施されている。

15 ～ 22 は須恵器である。15 ～ 17 は坏である。15 は復元口径は 14.0cm で、口縁が長く直立する。16 は口縁が逆ハの字状に立ち上がり、全面に自然釉が付着する。17 は口径 11cm で、底面にはヘラ切り後、ナデ調整された痕跡が認められ、「×」状のヘラ記号が刻まれる。18 は皿で、底径は 10.0cm で底面にはヘラケズリ痕が認められ、縁に高台が付く。

19 は小片であり、あまり類例が認められないが壺型土器の口縁部であろうか。口縁は肥厚して外反しながら立ち上がり、頸部には板状工具を押し当てたような連続刺突文が施される。

20 ～ 22 は壺である。20 は長頸壺の頸部とみられ、中央付近に浅い沈線文がみられる。21 は長頸壺の胴部下半部の破片である。高台が付き、胴部は丸みを帯びて立ち上がる。22 はほぼ完形の短頸壺で、口径は 8.4cm、器高 15.2 ｃｍ、底径 12.0cm を測る。口縁が短く垂直に立ち上がり、底部は高台が付き、ヘラ切り後、ナデ調整が施される。これらの須恵器は 15 が古墳時代後期後葉、他は概ね古墳時代終末期から奈良時代にかけてのものとみられる。

第 68 図は石器類である。１は長さ 1.9cm の黒曜石製の石鏃である。２は石斧である。表裏面が大きく剥離するが、長さ 9.6cm、幅 4.3cm を測る。３～５は磨石である。いずれも表面に磨面が認められる。６～ 11 は敲石である。６は側面端部に敲打痕が認められる。９は台石状のもので、側面から表面にかけて被熱痕が認められる。



第 68 図　庵寺古墳群谷部出土遺物実測図 (4)

第４節　古墳群の調査

１．古墳群の立地（第６図）

当遺跡で検出された古墳は、潮川が形成した沖積平野の最奥地、標高 50 ～ 80m の急峻な丘陵上に立地する。丘陵尾根筋は狭長な谷間を挟んで馬蹄形に東西方向に並列して伸びており、北側丘陵部には最頂部から順に１Ａ号・１Ｂ号・４号・15 号・５号～９号・19 号・18 号・10 号～ 14 号墳の 16 基の古墳が検出され、西側丘陵部では 17 号・16 号の２基、南側丘陵部では 21 号・20 号・22 号～ 25 号墳の６基の古墳が検出された。平成 20 年度の調査（１Ａ号・１Ｂ号・４号）と合わせ、総数 24 基の古墳を調査したことになる。また南側丘陵部では尾根筋が調査区外にも広がっており、地形的にみて古墳が尾根筋の上方や下方にまだ広がっている可能性が高い。

多数の古墳が密集して検出された例は石見東部の沿岸地域でほとんど確認されておらず、このように古墳が仁万平野を見下ろす急峻な丘陵尾根筋で階段状に密集して立地することが、当古墳群の大きな特徴としてあげることができる。

２．北側丘陵部の調査

西側の尾根頂部から北東方向の水田部に向かってやや蛇行しながら伸びる丘陵で、標高は最頂部が 65 m、最も低い先端部が 51 mであり、標高差は 14 mを測る。尾根筋の長さは調査区内で約 114 m、幅は５～ 14 mを測り、尾根筋はかなり狭長な平坦面が広がっている状況にある。

北側丘陵部の古墳は、このように細長い尾根上平坦面に１基ずつ縦列するかたちで 13 基が検出された。古墳は検出順に番号を振っているが、古墳の立地により特徴を同じくする数群のまとまりがみられるので、尾根筋頂部から群ごとに概要を追う。また平成 20 年度に調査された古墳（１Ａ号・１Ｂ号・４号墳）も概要を併せて紹介する。

Ａ群の様相（第 69 図）

丘陵最頂部から尾根筋を下って中央付近まで分布するグループである。順に１Ａ号墳から６号墳まで６基の古墳が縦列に並んでいる。１Ａ号墳を除き、埋葬施設に箱式石棺を採用する特徴がある。

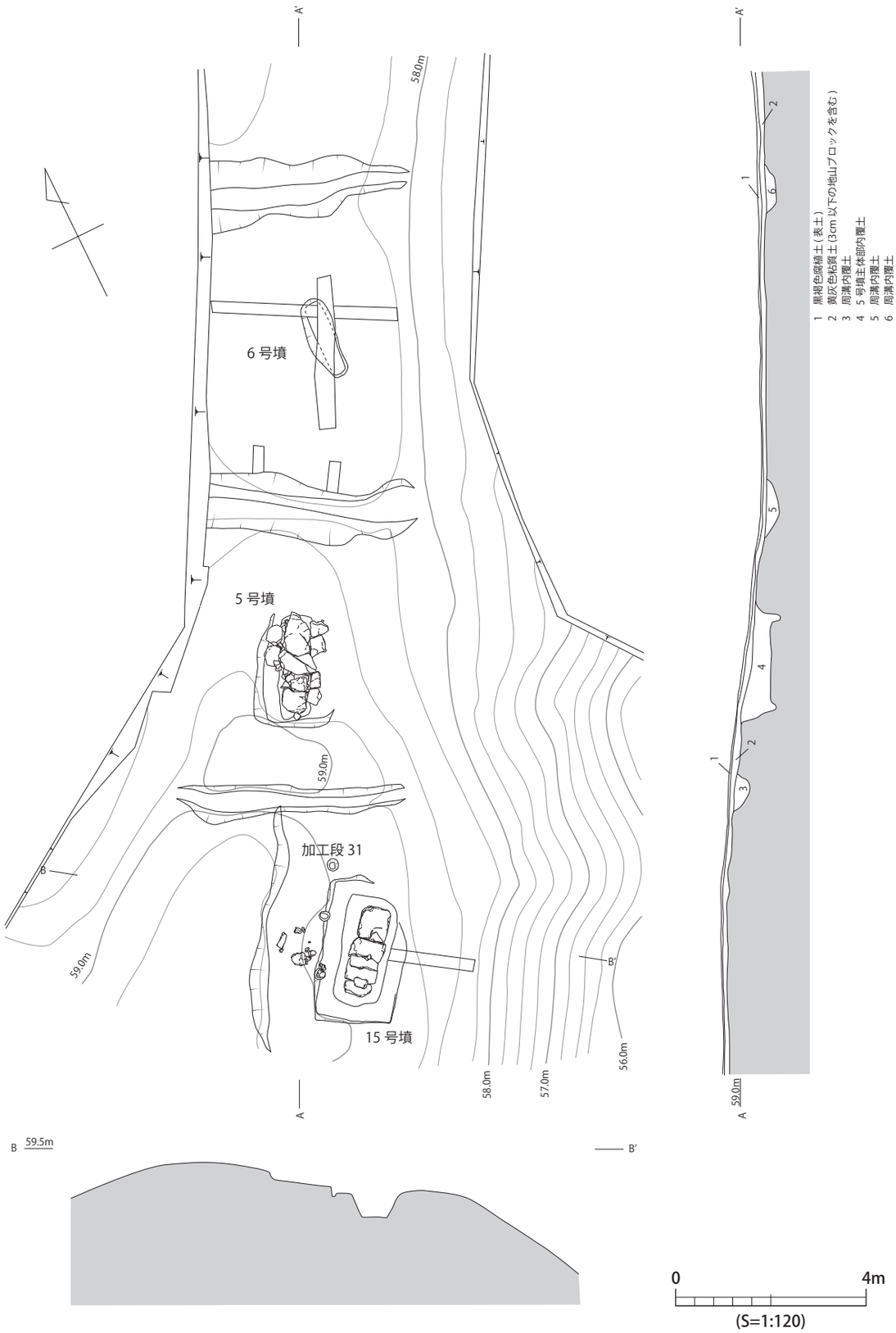
１Ａ号墳（詳細は『仁摩温泉津道路３』を参照）

尾根筋の最頂部に立地する直径 15 mの円墳で、全長 5.5 mの無袖式の横穴式石室を主体部とする。石室内から須恵器の他、玉類や耳環、大刀、鉄鏃など豊富な副葬品が出土した [(6)]。遺物の時期は６世紀後半から７世紀初頭（石見須恵器編年４期）[(7)] とみられ、古墳時代後期後葉に築造されたとみられる。

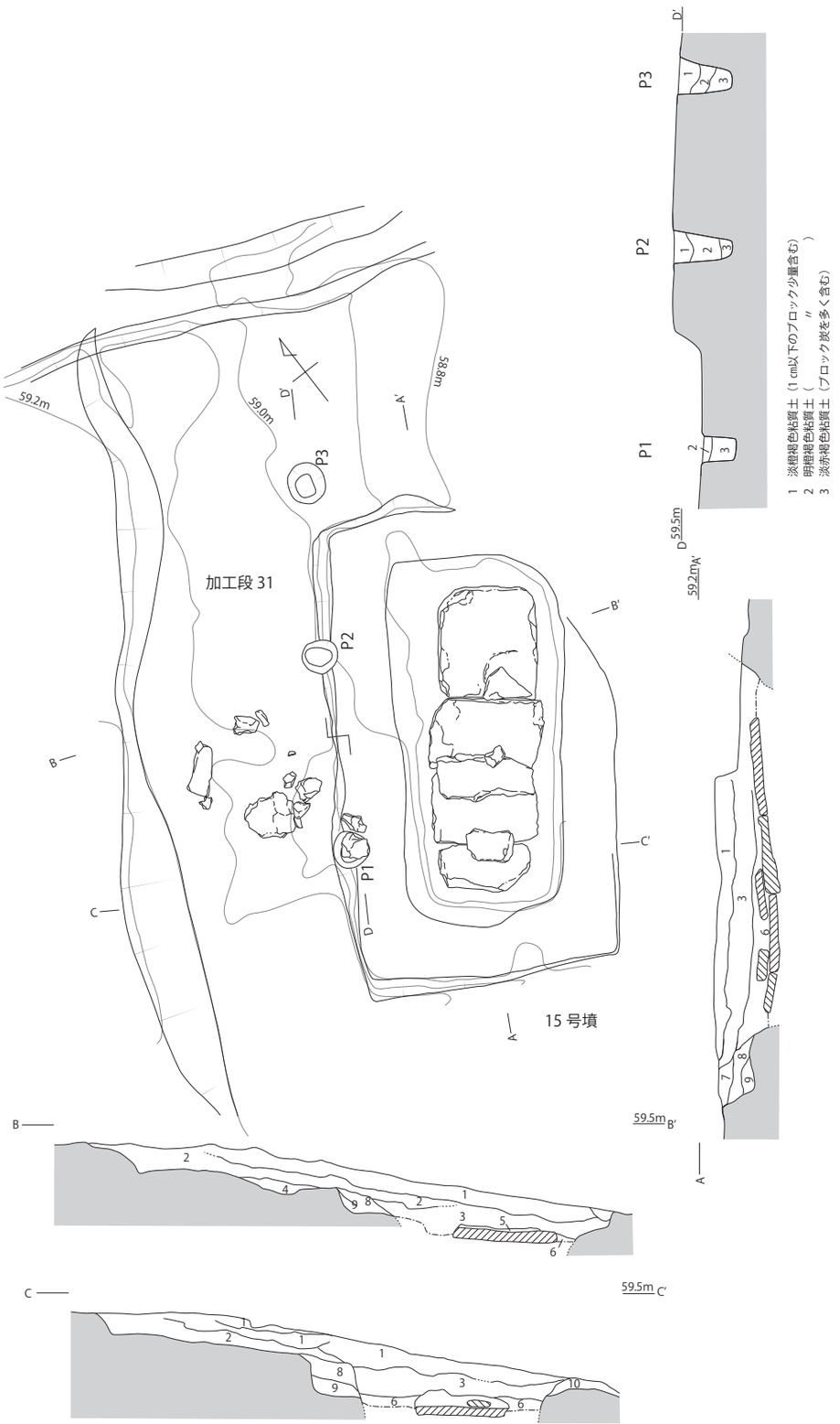
また、墳丘の周辺部で後代の土器溜まりが検出されており、奈良時代まで墓域祭祀が行われた痕跡がうかがえる。

１Ｂ号墳（詳細は『仁摩温泉津道路３』を参照）

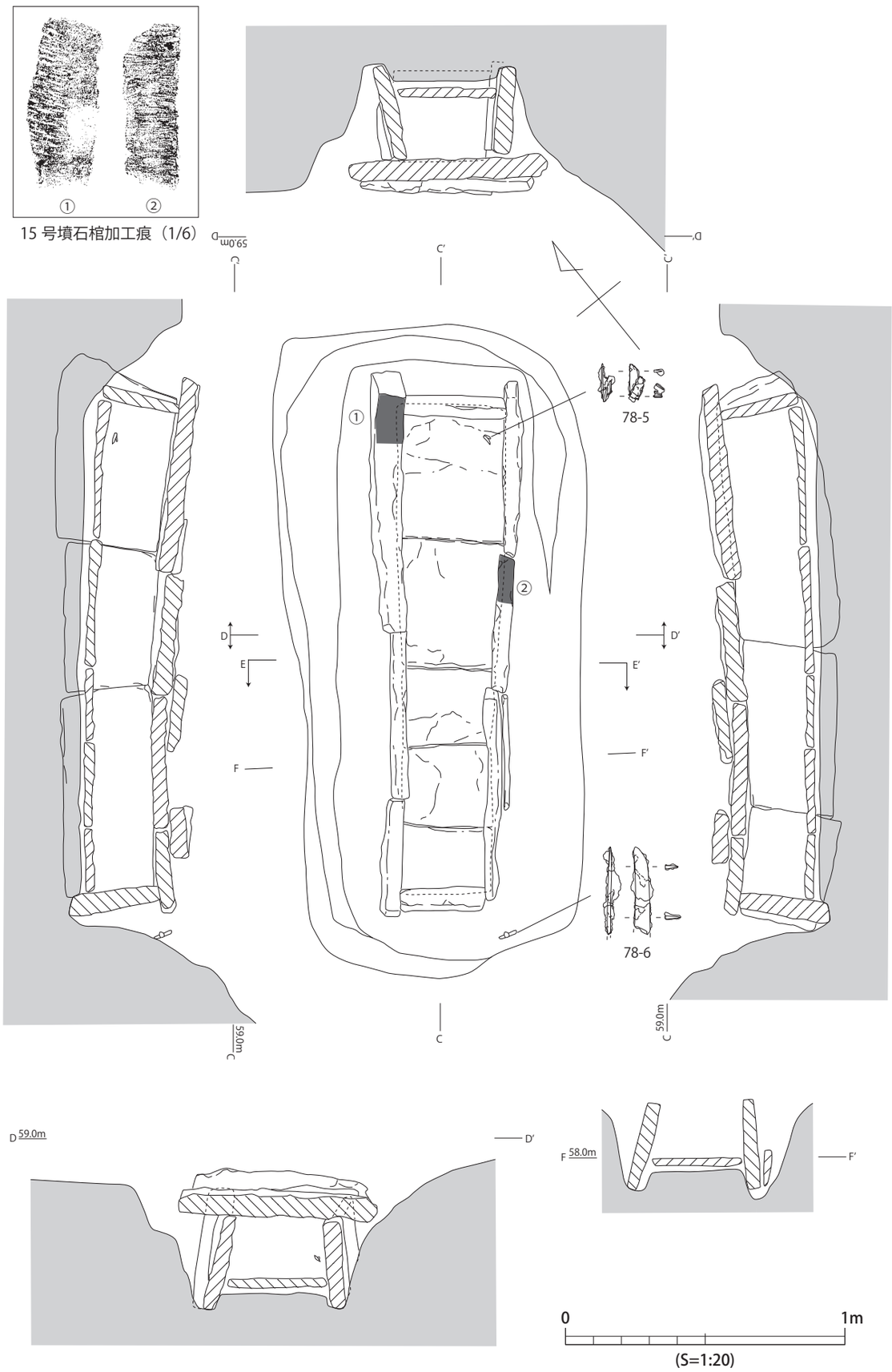
１Ａ号墳と同様に丘陵最頂部に立地する。墳丘は１Ａ号墳により破壊され、正確な墳形や規模は不明瞭であるが、一辺 12 mの方墳と考えられる。主体部は墳頂部で３基確認されたが、中心的な位置にある第２・３主体部は１Ａ号墳の造成により破壊されていた。第１主体部から凝灰岩製の板



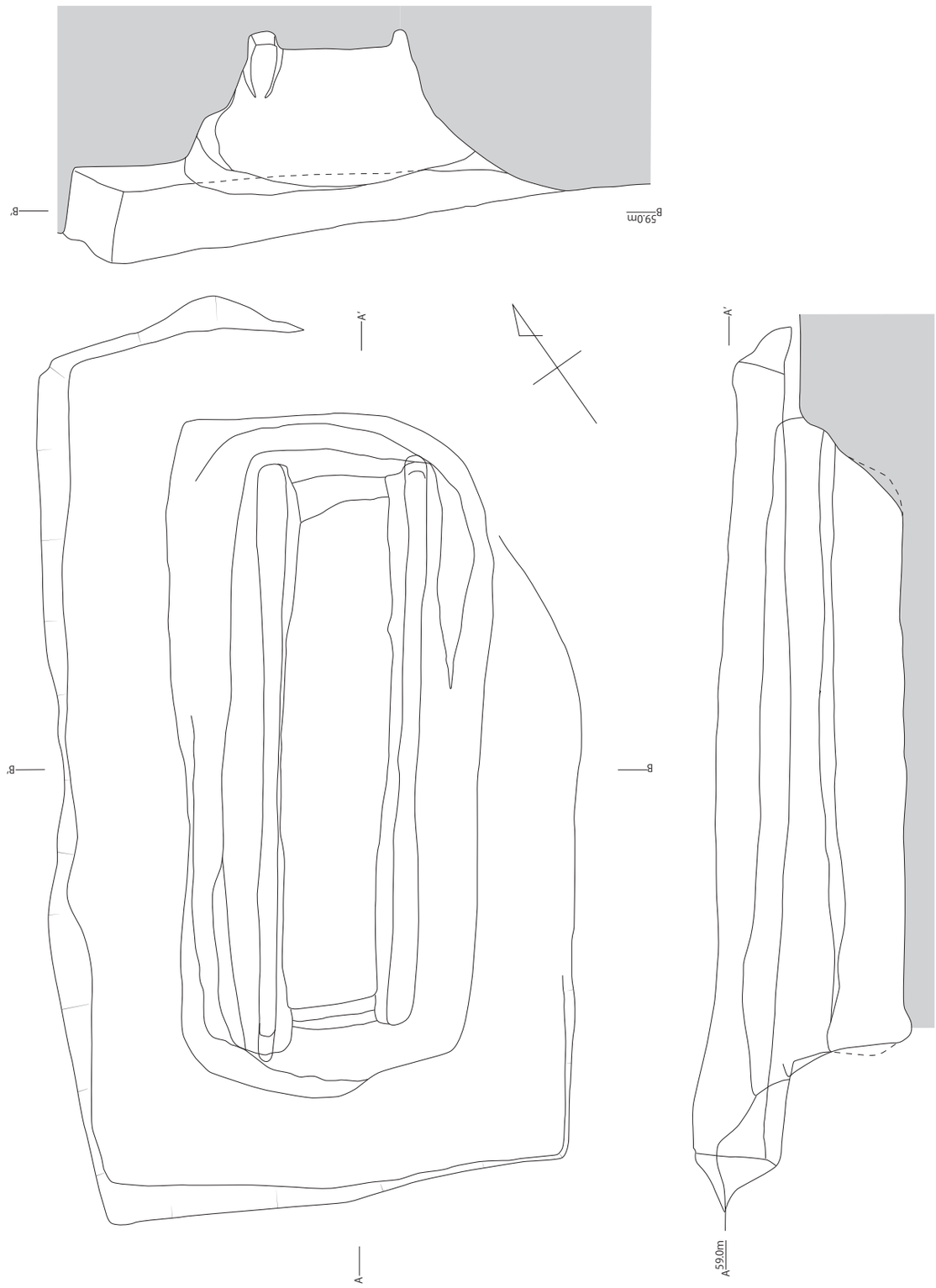
第 69 図　庵寺古墳群 15 号墳・5 号墳・6 号墳配置図



第 70 図　庵寺古墳群 15 号墳、加工段 31 測量図



第 71 図　庵寺古墳群 15 号墳石棺実測図



第 72 図　庵寺古墳群 15 号墳主体部完掘状況

石を組み合わせた箱式石棺が検出され、棺内から碧玉製管玉の他、中国前漢鏡の八禽鏡が出土し注目を集めた。

また墳裾部で土器棺が検出されており、１Ｂ号墳の追葬墓とみられる。土器棺に使用された壺形土器は小谷４式に相当するとみられ、１Ｂ号墳の時期は古墳時代前期後葉～末頃とみられる。

４号墳（詳細は『仁摩温泉津道路３』を参照）

１Ｂ号墳から尾根筋下方 20 mに位置する。平面形は長方形を呈し、規模は４× 8.5 mを測る。墓壙内には凝灰岩を板状に研磨し組み合わせた箱式石棺（1 号）が納められ、さらに墓壙を拡張して２号箱式石棺が納められていた。

２号石棺からは鼓形器台を転用した土器枕が出土し、土器の特徴から４号墳の時期は古墳時代前期後葉～末頃と考えられる。

15 号墳（第 70 ～ 72 図）

立地状況　４号墳の尾根筋下方に位置し、標高は 59 mである。尾根筋には 15 号墳を含め区画溝によって仕切られた３基の古墳が並んでおり（５号・６号）、１Ｂ号墳・４号墳と合わせ１つのグループを形成していたと思われる。進入路工事のため、調査時には既に４号墳が削平されていたが、４号墳から尾根筋に主軸を北東方向にずらした位置に築造されたとみられる。

墳丘規模と形態　周辺は表土を除去した時点で既に岩盤が露出する状況で、尾根の中央付近には尾根筋に沿った段状平坦面が認められた。この段状遺構は、詳細は後述するが後世の加工段とみられ、墳丘を大きく削平しているのが明らかである。従って周辺地形から墳形を想定するのは難しいが、尾根筋に直交する区画溝の存在から、概ね一辺５mの方墳と考えられる。また盛土らしき土層は斜面側でわずかに認められ、主体部の１段目の掘り方が浅いことも考慮して、本来はある程度の盛土があった可能性が高い。

主体部　尾根筋の平坦面中央からやや斜面よりに下がった位置で墓壙が検出された。墓壙は二段掘り構造で、平面プランは長方形を呈し、長軸を尾根筋に併行させている。墓壙の主軸はＮ－ 30°－Ｅである。掘り方の北東側が流出しているが、規模は長さ 3.02 m、幅 1.74 m、深さ 24cm を測る。

箱式石棺が据えられていた二段目掘り方はやや不整形な長方形状を呈し、規模は長さ 2.34 m、幅 1.12m、深さ 45cm を測る。底面には棺材を設置するため、両辺部や小口部に溝が掘り込まれている。

また墓壙内にはきめ細かいシルト質土が充填されていたが、土層観察では一段目掘り方の覆土を掘り込んで二段目掘り方が掘削された様子がうかがえた。一段目掘り方を掘削した後、それを一旦埋め戻して二段目掘り方を掘削するという埋葬行為が行われたことになるが、そのような行為が行われた例は見当たらず、特異な印象を受ける。或いは根拠に乏しいが、一度石棺を埋納した後、追葬が行われた可能性も考えられる[(8)]。詳細は５章に譲るが、石棺内堆積土の土壌分析を行った結果、遺骸の頭部を示す高いＰ濃度が石棺の中央付近から足位にかけて検出された。これは追葬の際に石棺内の遺骸を動かした痕跡とも想定され、いずれにせよ興味深い事例といえる。

箱式石棺　墓壙の二段目掘り方から、凝灰岩を板状に加工し組み合わせた箱式石棺が検出された[(9)]。石棺の主軸はＮ－ 39°－Ｅである。規模は蓋石の長さ２m、最大幅 70cm、棺内の長さ 1.55m、幅

第 73 図　庵寺古墳群 5 号墳墳丘測量図

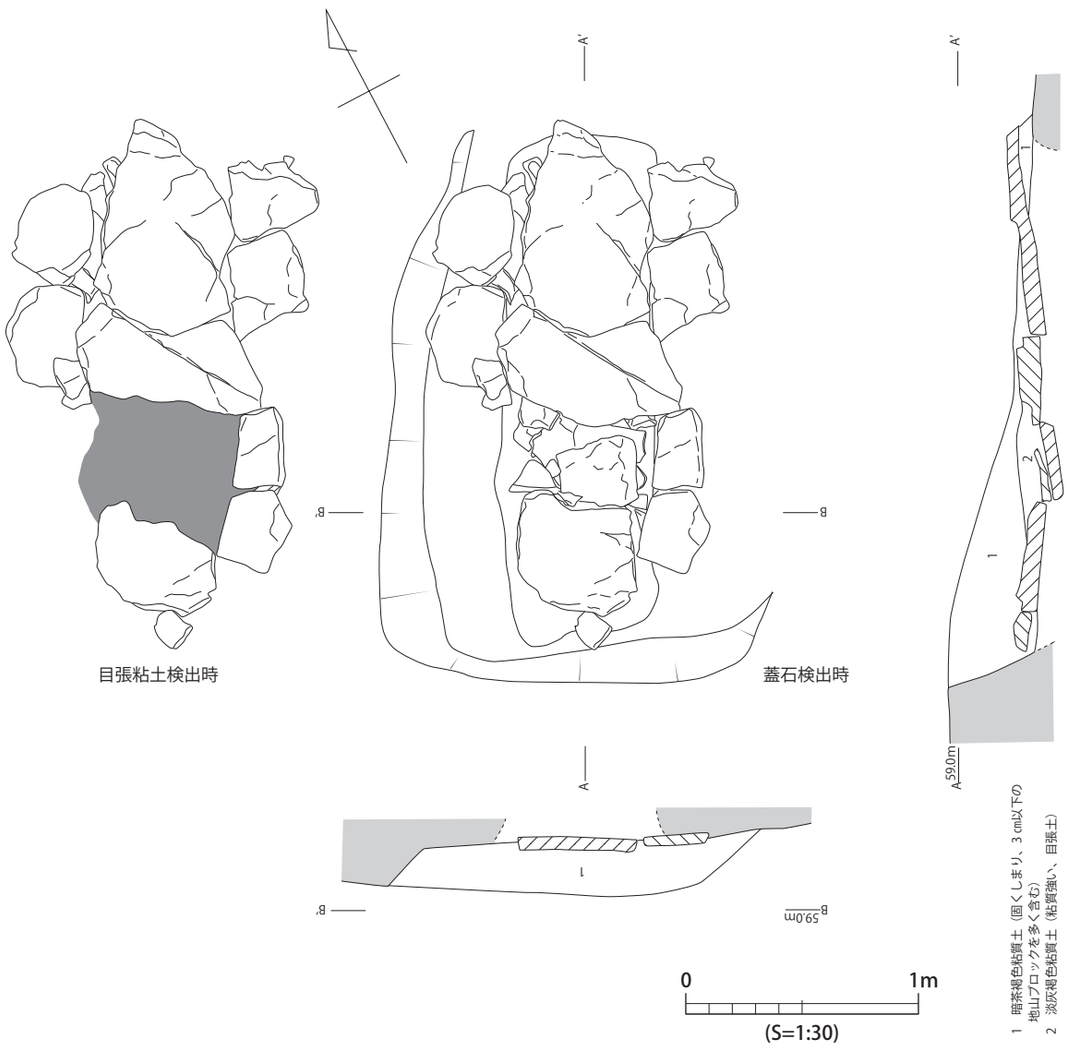
30～40cm、床面から蓋石までの高さは20～25cmを測り、北東側が幅広く作られており、頭位だったことをうかがわせる。

棺の構造は側板で小口板を挟むH型で、蓋石は4枚の厚手の板石が使用され、頭位の石が長さ70cm、幅60cmと最も大きい。また蓋石の繋ぎ目には小型の板材が配置されている。側板は両側とも3枚の板材が使用され、特に北側の頭位付近の板材は仕上げ調整が行われず幅10cmの厚手の石が使用されている。また板材の上面にはノミ状工具による加工痕も認められる。床板は厚さ5cm未満の薄手の板材が使用され、頭位に行くにしたがい大きい石材が配置される。また頭位付近の床板や側板内面には赤色顔料の付着が認められ、分析の結果、水銀朱と判明した（第5章参照）。

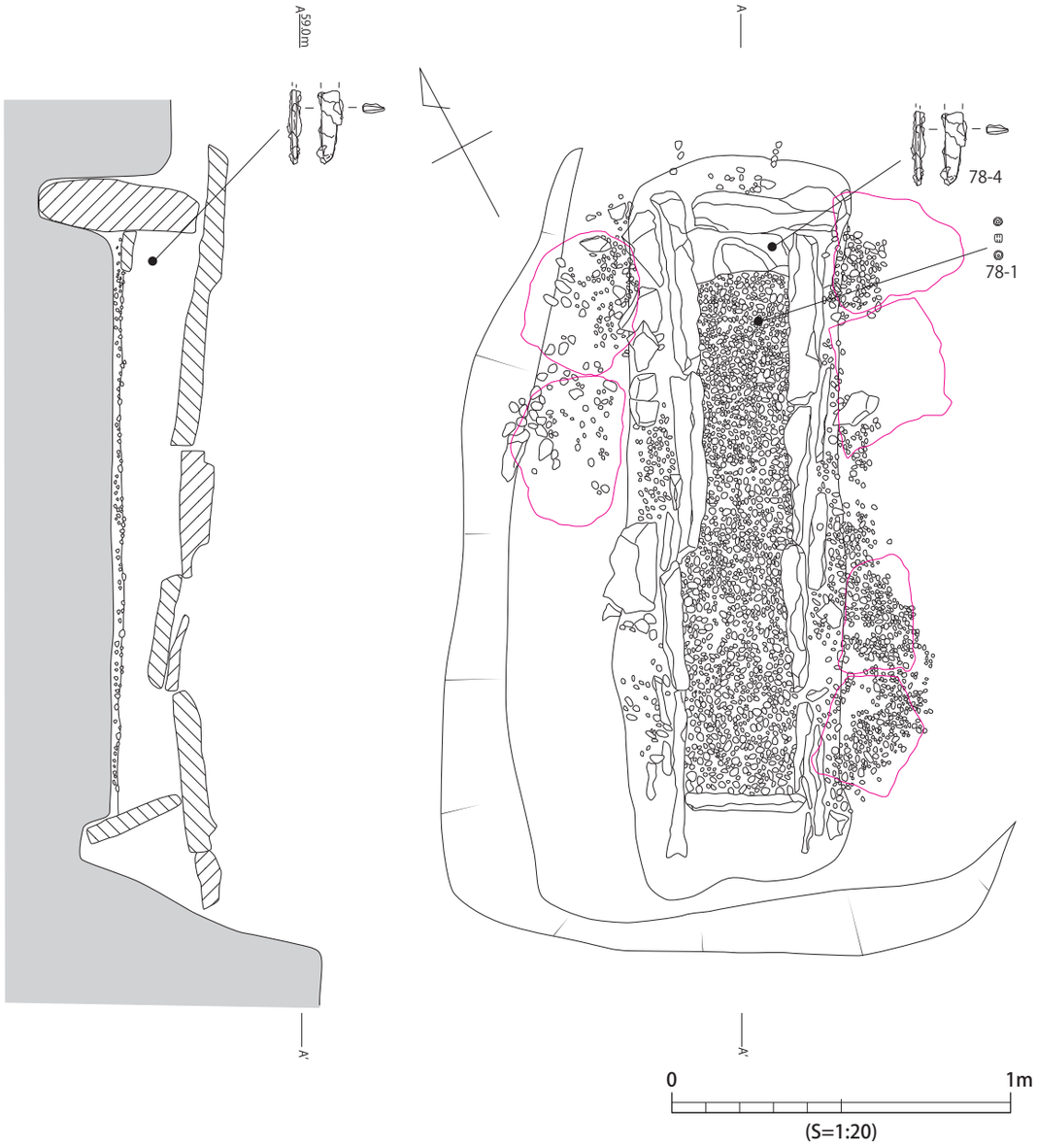
出土遺物（第78図2・5・6）

棺内の頭位付近と、棺外の二段目掘り方内で刀子が1点ずつ出土した。また、棺内覆土を水洗いした結果、ガラス小玉を1点検出することができた。2は淡青色のガラス小玉である。長さ3.2mm、幅4.7 mmを測る。分析の結果、材質はカリガラスであることが判明した（第5章参照）。5・6は刀子で、5は意図的に折り曲げた状態で出土した。6は長さは現状で9.3cm、幅1.9cmを測る。

墓壙内や棺内で土器が出土しておらず、時期を比定するのは難しいが、石棺の構造や板材加工の



第74図　庵寺古墳群5号墳主体部実測図



第 75 図　庵寺古墳群 5 号墳礫床実測図

様子は 1 B 号墳や 4 号墳の石棺に後続するものと考えられる。

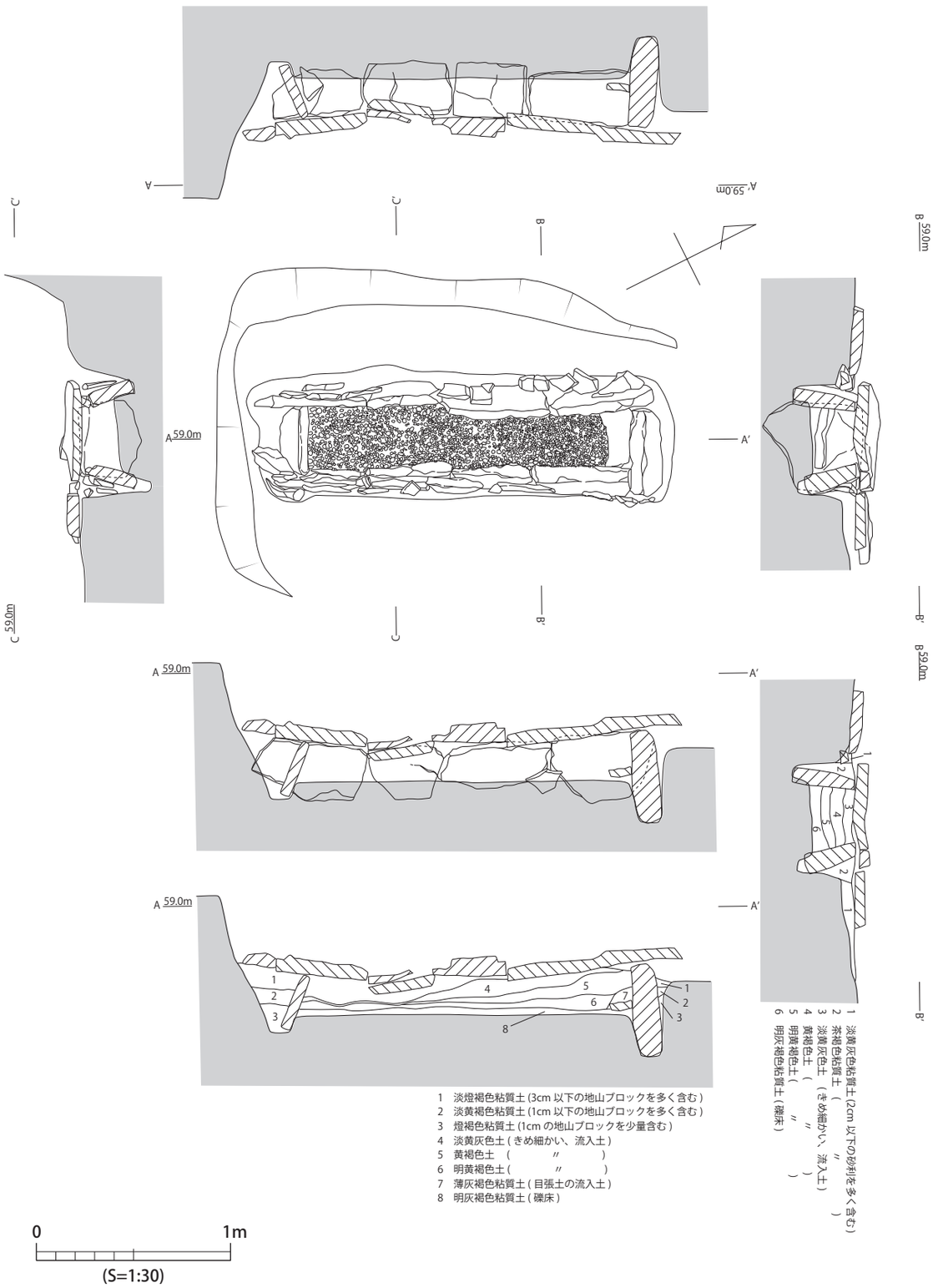
加工段 31（第 70 図）

前述したように、15 号墳の墳丘を削平して造られた加工段である。尾根筋に沿って掘り込まれており、掘り方の規模は長さ 5.2 m、床面の幅は 3 mを測る。床面には直列する 3 点の柱列がみられ、柱間は 1.1m ～ 1.2m、ピットの深さは約 30 ～ 40cm を測る。覆土には多数の礫がみられた。

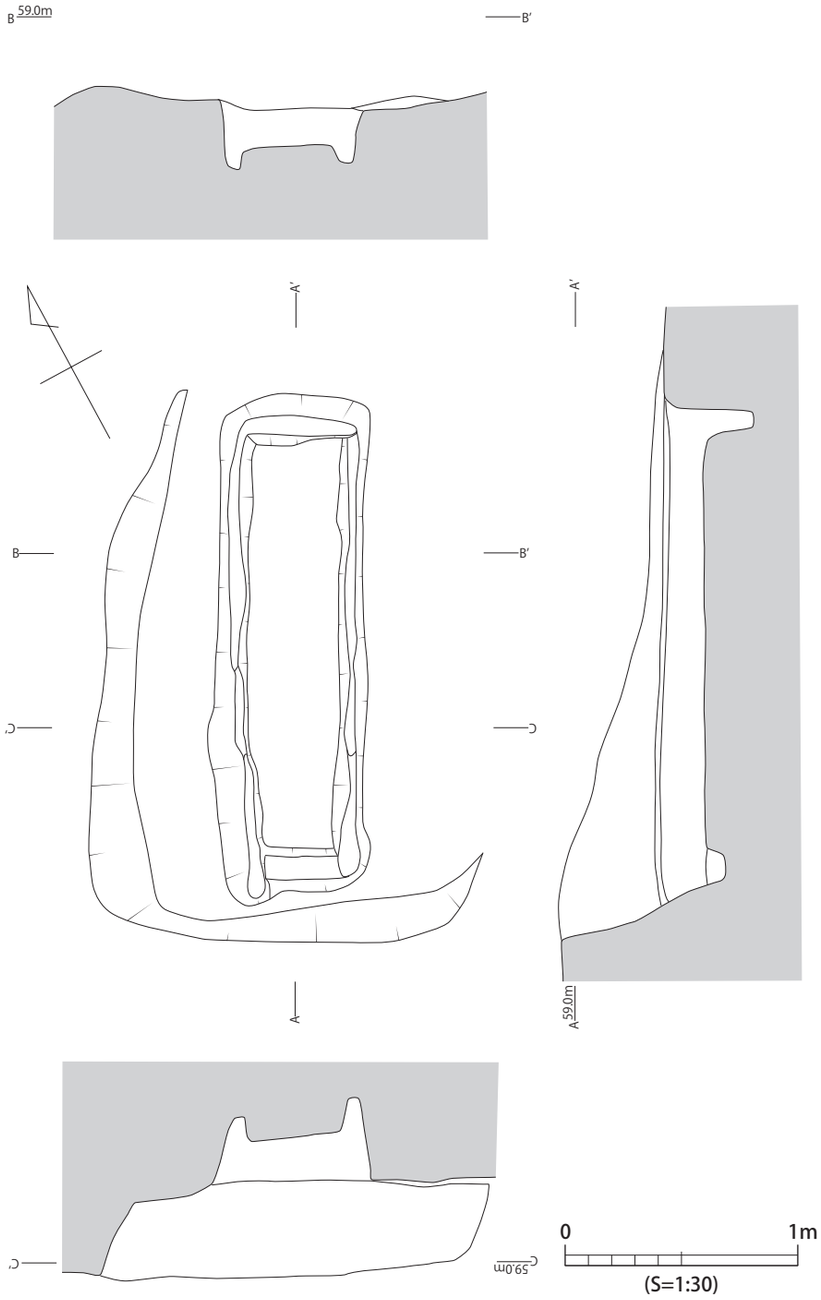
遺物が出土しておらず時期は不明である。北側丘陵部で検出された唯一の加工段であり、南側に向かって開口し、柱穴も深く掘り込まれるなど、他の加工段とは相違点が多いことから時期が異なる可能性が高い。

5号墳（第 73 ～ 77 図）

立地状況　15 号墳の尾根筋下方に隣接し、標高は 58.75 mである。15 号墳とは尾根筋に直交する区画溝によって仕切られているが、主体部は 15 号墳と異なり尾根上平坦面のほぼ中央に配置されている。



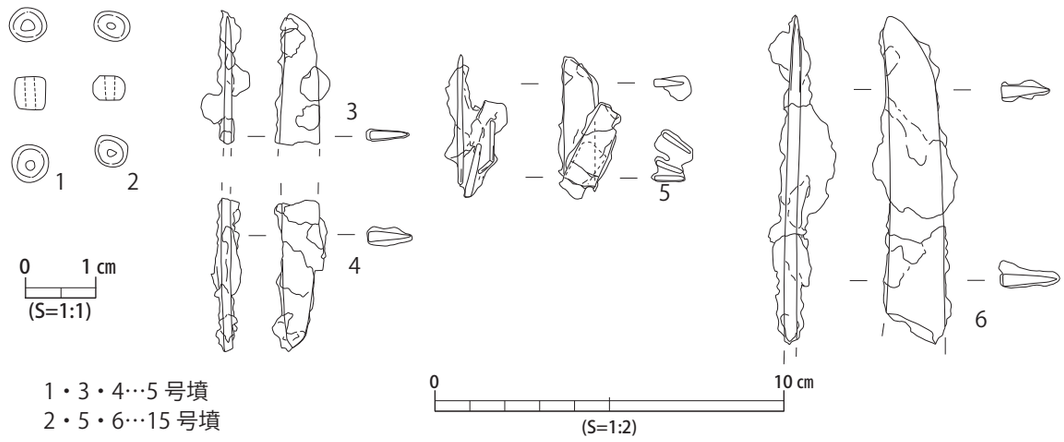
第 76 図　庵寺古墳群 5 号墳石棺実測図



第 77 図　庵寺古墳群 5 号墳主体部完掘状況

墳丘規模と形態　15 号墳と同様に周辺は岩盤が露出する状況で、盛土の痕跡を検出することはできなかった。墳形は、尾根筋に直交して掘られた区画溝の存在や平坦面の規模から、概ね一辺 5 m ほどの方墳と考えられる。

区画溝　古墳の南西側と北東側には尾根筋に直交し直線状に伸びる溝が掘られている。南西側のものは現状で長さ 4.8m、幅 40 ～ 80cm、深さ 30cm、北東側のものは全体を検出するに至らなかったが、長さ 4.5m、最大幅 1.3m、深さ 30cm を測る。いずれも古墳に伴う区画溝とみられるが、３基の古墳が築造されるにあたり、どの段階で２条の溝が掘られたかは厳密には判別できていない。

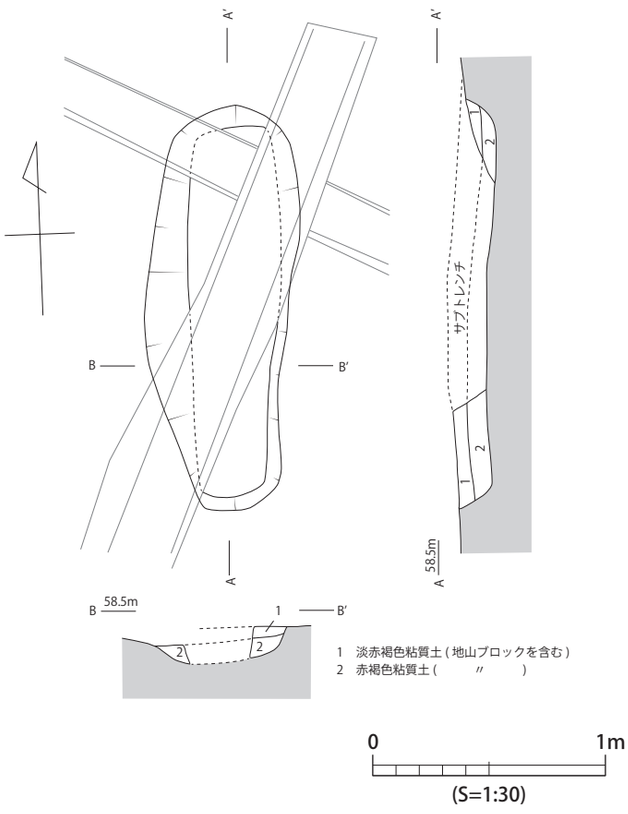


第 78 図　庵寺古墳群 15 号墳・５号墳出土遺物実測図

主体部　尾根上平坦面のほぼ中央から墓壙が検出された。墓壙の北東側は流出して本来の形状を留めていないが、平面プランが長方形を呈する二段掘り構造とみられる。一段目は長軸を尾根筋に併行に掘り込まれ、掘り方の規模は現状で長さ 2.4 m、幅 1.7 m、深さ 38cm を測る。

箱式石棺が据えられていた二段目掘り方は細長い長方形状を呈し、規模は長さ 2.2 m、幅 68cm、深さ 20cm を測る。底面の縁辺には小口板や側板を設置するための溝が掘り込まれている。

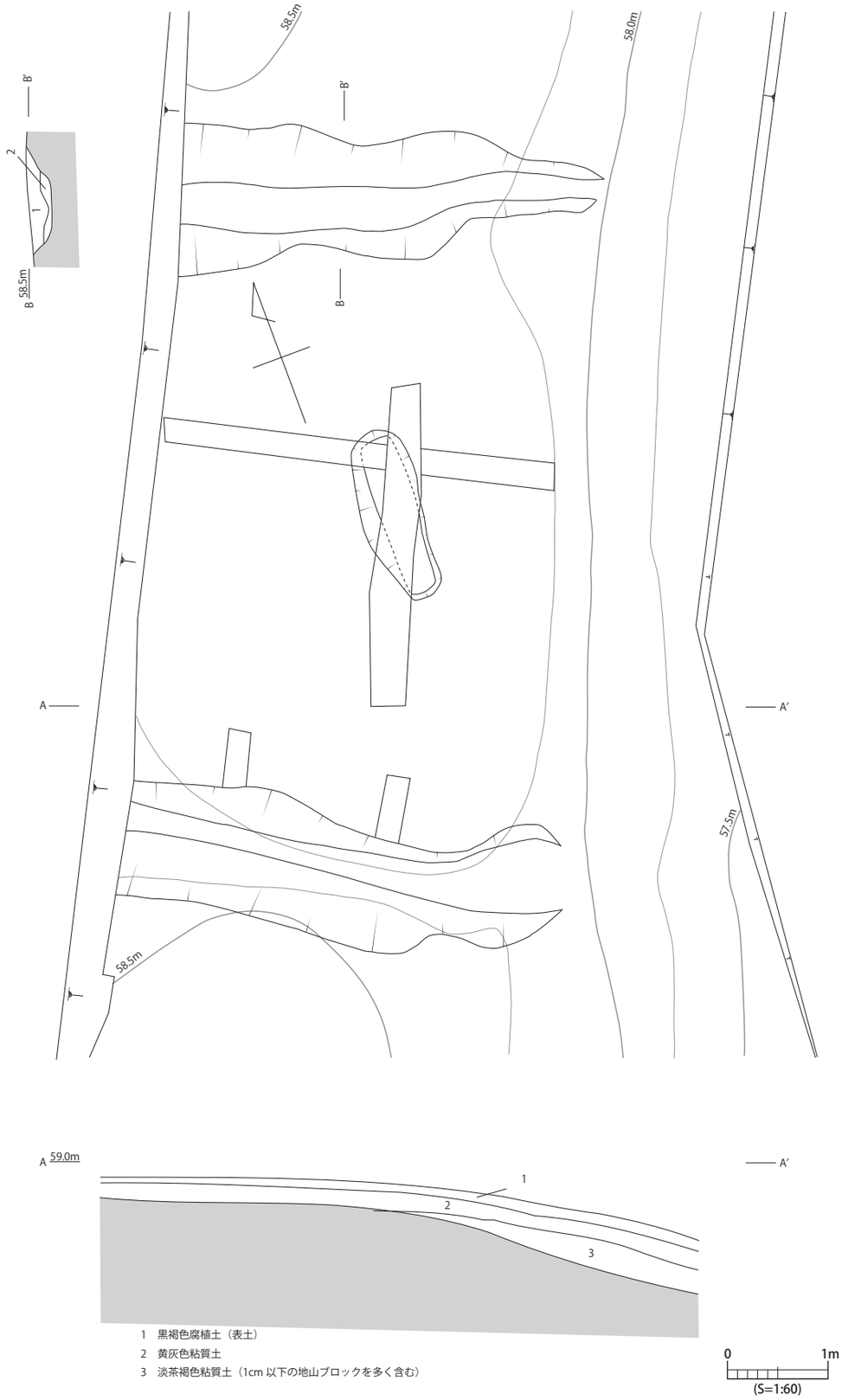
箱式石棺　墓壙の二段目掘り方の規模に合わせ石棺が納められおり、規模は、蓋石の長さ 2.1 m、最大幅 80cm、棺内の長さ 1.7m、幅 35cm、床面から蓋石までの高さは約 20cm を測る。石棺の主軸はＮ－ 28°－Ｅである。



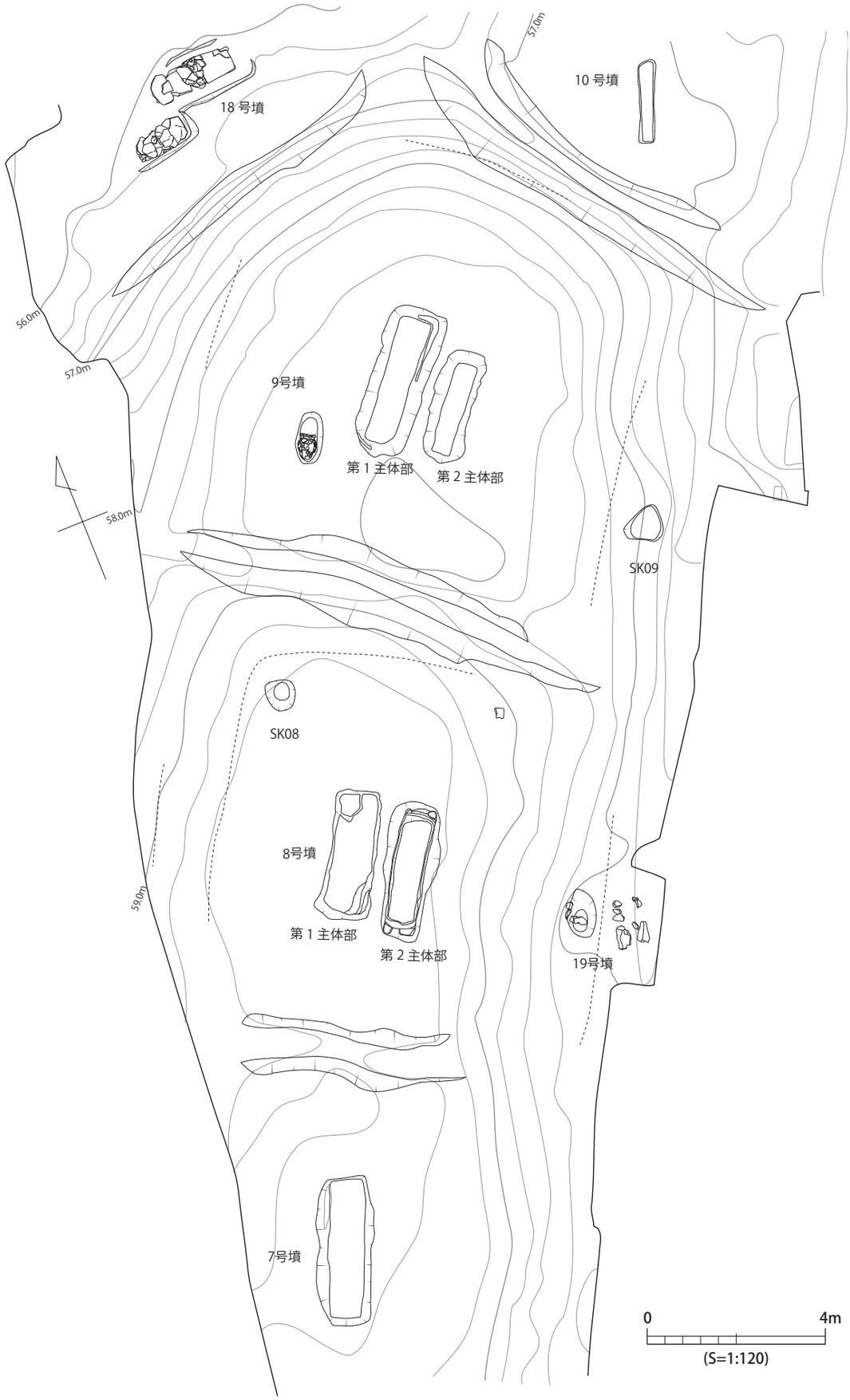
第 79 図　庵寺古墳群　６号墳主体部実測図

蓋石は掘り方の幅より大きいものが被せられ、板材はいずれも凝灰岩を板状に加工し組み合わせたものだが、蓋石の２枚目と４枚目の間には粘土による目張りが検出された。また蓋石の両側にも伏せられた板状石が配置されている。石棺の南側小口面は小口板を側板が挟むＨ型の構造だが、北側は東側板を小口板がおさえこんでおり、あたかもＨ型とⅡ型の折衷構造となっている。また蓋石や側板はいずれも板材の規格が揃っておらず不整形で、側板と掘り方の間の隙間には小型の板材がいくつもはめ込まれている。

棺床には底板石が無く、円礫状の凝灰岩を利用した礫敷きがみられた[(10)]。床面の北端部には平坦な石片の中央を窪ませた石枕も配置されている。また



第 80 図　庵寺古墳群 6 号墳墳丘測量図



第 81 図　庵寺古墳群７号墳・８号墳・９号墳配置図

礫敷きは棺内だけでなく蓋石両側に伏せられた板石の下にもみられた。

出土遺物（第 78 図１・３・４）

棺内の石枕上方で刀子片（４）、胸部付近でガラス小玉が出土した。また棺内覆土の水洗いでも刀子（３）が検出された。１は淡青色のガラス小玉である。長さ 4.8mm、幅 5.1mm を測る。分析の結果、材質はソーダ石灰ガラスであることが判明した（第５章参照）。３・４は刀子で同一個体とみられ、片関で刃部が直線状に伸びる。

墓壙内や棺内で土器が出土しておらず、時期を比定するのは難しいが、副葬品の組み合わせは 15 号墳と全く同じである。15 号墳と比較して石棺の板材加工や組み合わせ方が著しく形骸化していることから、15 号墳に後続して築造されたと考えられる [11]。

６号墳（第 79・８０図）

立地状況　５号墳の尾根筋北東側に隣接し、標高は 58.25 ｍである。15 号墳とは尾根筋に直交する区画溝によって仕切られている。

墳丘規模と形態　周辺は岩盤が露出する状況で、盛土の痕跡を検出することはできなかった。墳形は、区画溝や平坦面の規模から、概ね一辺５ｍほどの方墳と考えられる。

区画溝　古墳の北東側には尾根筋に直交し直線状に伸びる区画溝が存在する。現状で長さ 4.2m、最大幅 1.5 ｍ、深さ 25cm を測る。

主体部　当初の遺構面精査では主体部を検出することができず、平坦面に十字形に設置したサブトレンチにより、中央付近から浅い土坑状の落ち込みを検出することができた。位置的に古墳の主体部と思われるが、残りが悪く石棺や木棺を納めた痕跡は認められなかった。平面プランが楕円形を呈する墓壙であり、墓壙の主軸はほぼ北向きでＮ－２°－Ｗを指向する。大部分が流出しているが、規模は現状で長さ 1.75m、幅 64cm、深さ 18cm を測る。

遺物は出土しておらず、古墳の時期は不明であるが、立地的に 15 号墳に後続するものと考えられる。

Ｂ群の様相（第 81 図）

丘陵最頂部から尾根筋を下ると、尾根筋中央の標高 59 ｍ付近で地形がフラット状を呈するようになる。この位置で３基（７号・８号・９号墳）の古墳が並んでおり、さらに８号墳の南東側斜面からも１基（19 号墳）検出された。19 号墳を除き、主体部に組み合わせ式の木棺を採用する特徴がある。

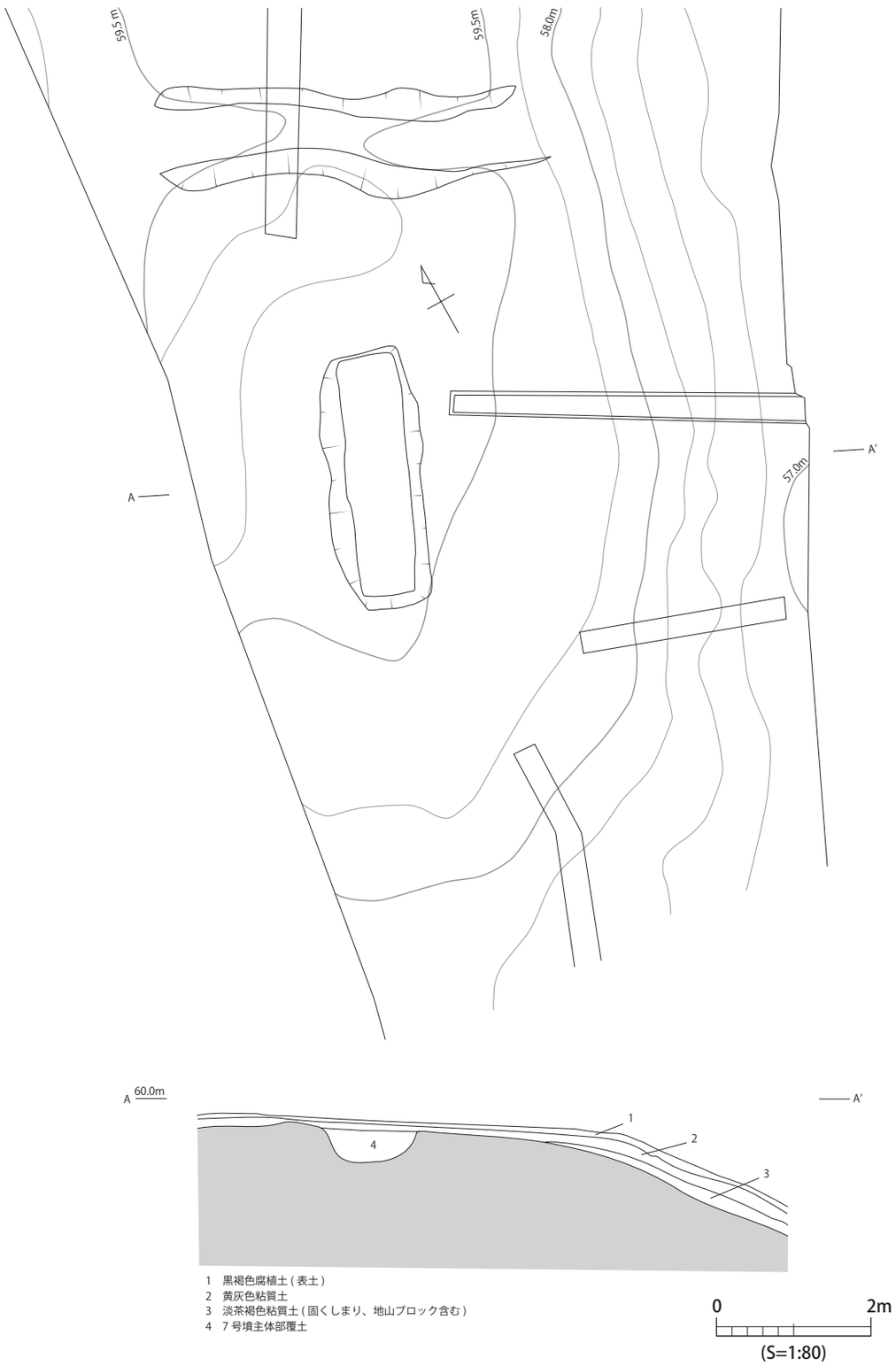
７号墳（第 82・83 図）

立地状況　６号墳から尾根筋に約 10 ｍ離れた位置に立地する。両古墳の間からは区画溝が検出されておらず、空白地帯となっている。標高は 59.5 ｍを測り、周辺は地形の流出が著しく、尾根上平坦面の幅は約 10 ｍと北側丘陵部では最も狭い。

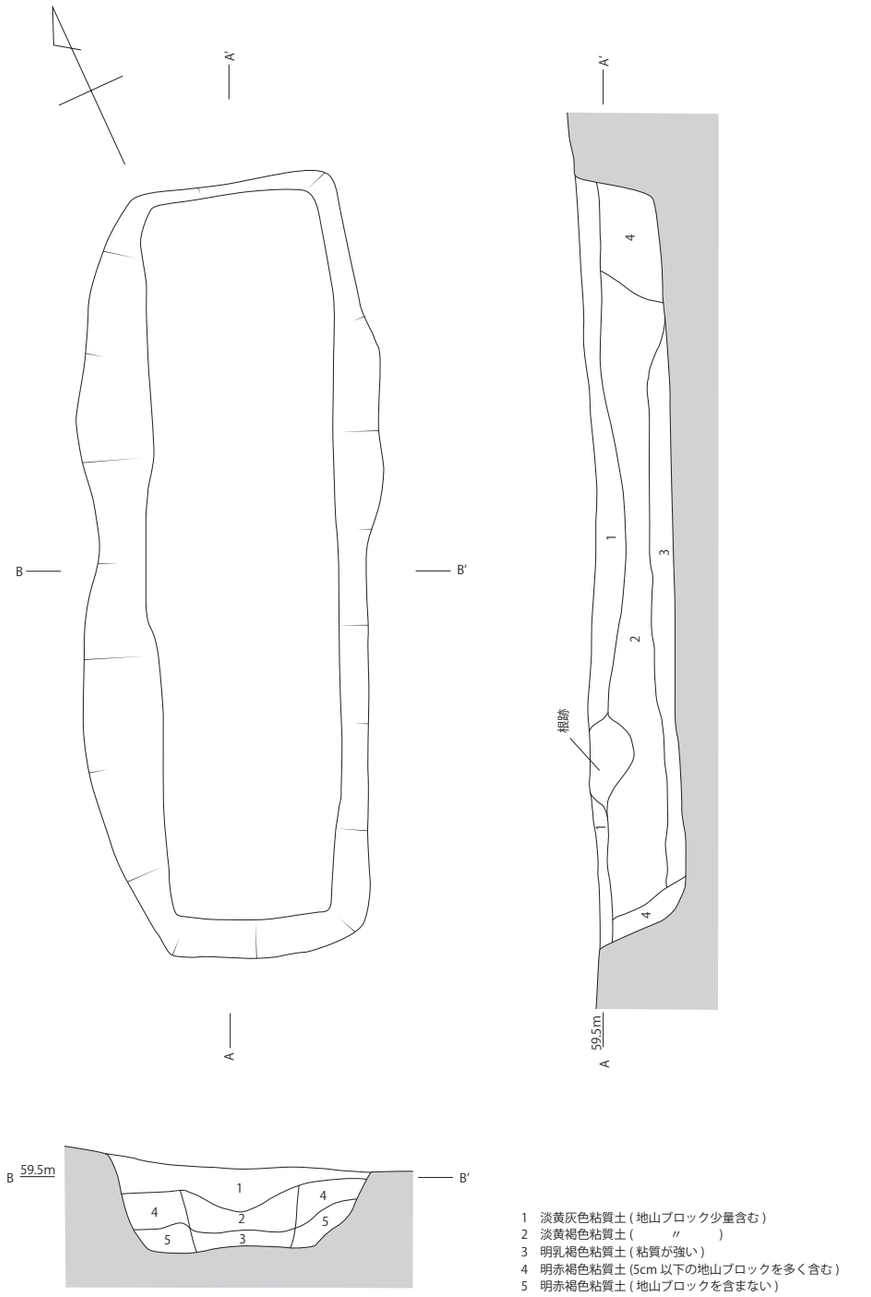
墳丘規模と形態　周辺は表土掘削後には岩盤が露出する状況で、盛土の痕跡を確認することはできなかった。周辺地形から墳形や規模を復元するのは難しいが、北側に８号墳との区画溝があり、それを基に主体部の中心で反転すると、一辺約８ｍの方墳となる。

主体部　尾根上平坦面のほぼ中央で墓壙が１基検出された。平面プランは長方形を呈し、長軸を尾

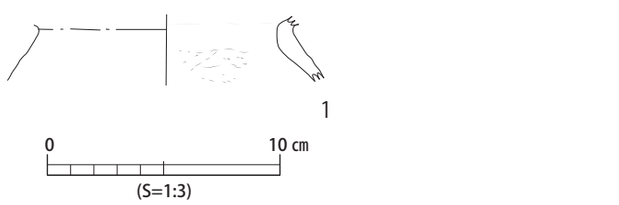
根筋に併行させており、墓壙の主軸はＮ－ 24°－ Ｅである。掘り方の形状はやや不整形であるが、逆台形状に掘り込まれ、規模は上面で長さ 3.34 m、最大幅 1.23 m、深さ 44cm を測り、床面は長さ 3.13 m、幅 82cm を測る。床面はほぼ水平で、棺を据えた痕跡を確認することはできなかった。



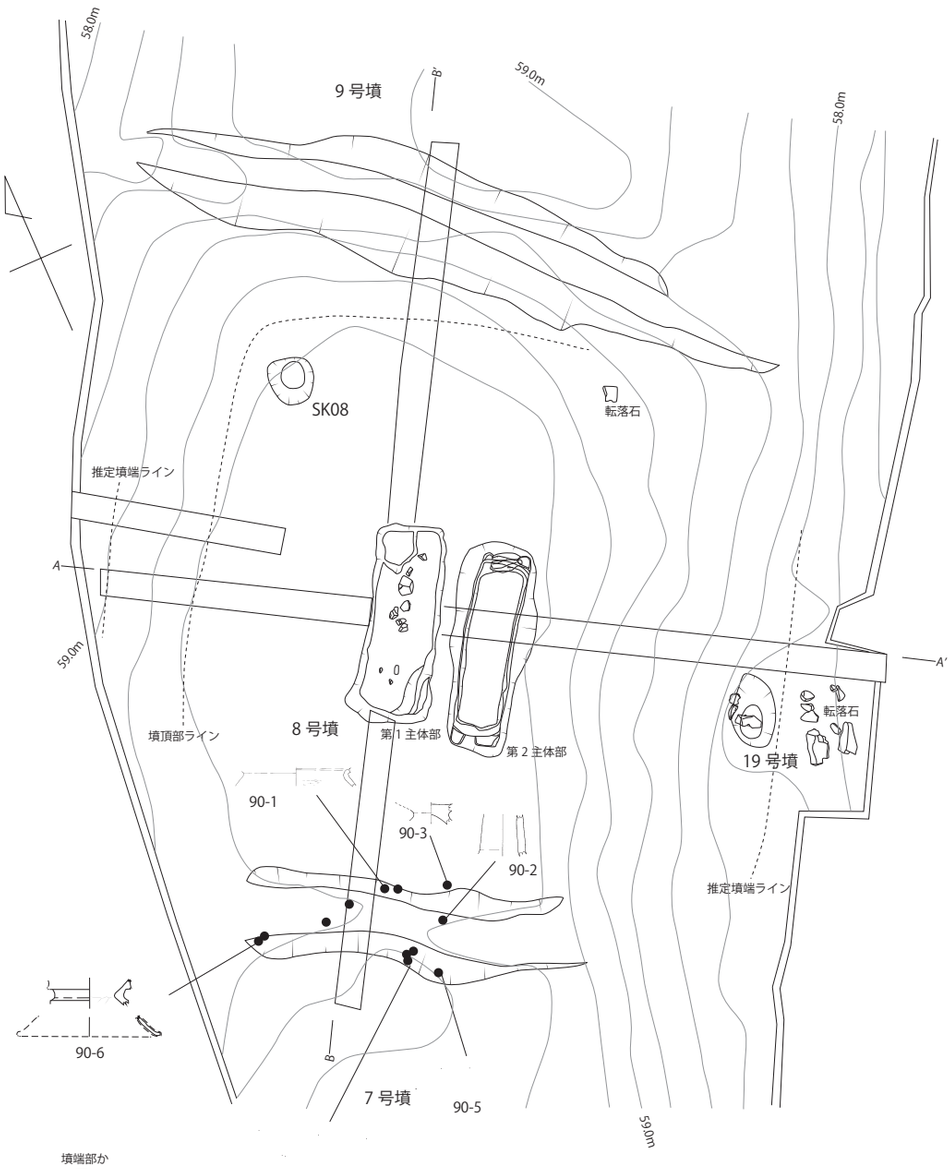
第 82 図　庵寺古墳群 7 号墳墳丘測量図



第 83 図　庵寺古墳群 7 号墳主体部実測図



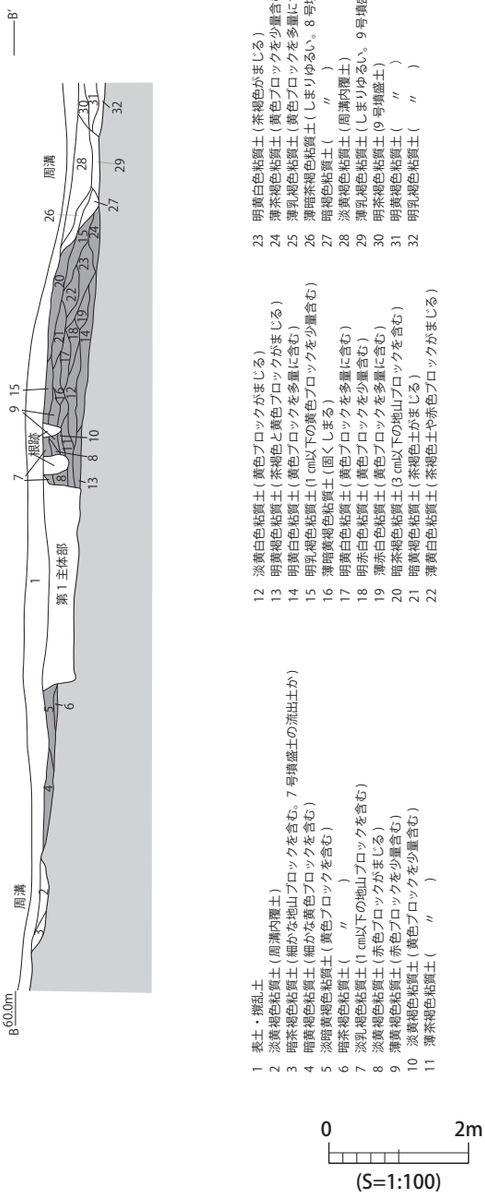
第 84 図　庵寺古墳群 7 号墳出土遺物実測図



1 表土・攪乱土
2 淡茶褐色粘質土（3 ㎝以下の地山ブロックを多く含む。盛土の流出度か）
3 黄褐色粘質土（地山ブロックを多く含む）
4 薄茶褐色粘質土（1 ㎝以下の黄色ブロックを少量含む）
5 明黄褐色粘質土（茶褐色土が混じる）
6 淡黄褐色粘質土（茶褐色土と地山ブロックが混じる）
7 薄赤褐色粘質土（　〃　）
8 暗茶褐色粘質土（　〃　）
9 暗黄褐色粘質土（茶褐色土と地山ブロックを多く含む）
10 濃黄褐色土（地山ブロックを多量に含む）
11 明茶褐色粘質土（黄色ブロック・赤色ブロックが混じる）
12 暗黄褐色粘質土（茶褐色土と黄色ブロックが混じる）
13 薄茶褐色粘質土（炭化物や細かな黄色ブロックを含む）
14 暗褐色粘質土（細かな地山ブロックを含む）
15 明茶褐色粘質土（黄色ブロックを多く含む）
16 暗黄褐色粘質土（固くしまり、黄色ブロックを含む）
17 暗赤褐色粘質土（粘性強く、赤色ブロックを多く含む）
18 薄暗黄褐色粘質土（黄色ブロックを多く含む）
19 明褐色粘質土（固くしまる）
20 明黄褐色粘質土（砂質気味、細かな地山ブロックを含む）
21 茶褐色粘質土（地山ブロックを多く含む）
22 淡乳褐色粘質土（固くしまる。ブロックを含まない）
23 淡黄褐色粘質土（　〃　）
24 薄黄褐色粘質土（　〃　）
25 明茶褐色粘質土（　〃　）
26 明黄褐色粘質土（地山ブロックを多く含む）
27 薄赤褐色粘質土（地山ブロックを多く含む）
28 暗赤褐色粘質土（地山ブロックを多く含む。盛土の流出土か）

0　2m
(S=1:100)

第 85 図　庵寺古墳群 8 号墳墳丘測量図



第 86 図　庵寺古墳群８号墳墳丘縦断土層図

覆土横断面の土層観察で、中央付近に逆台形状の礫を含まない均質な粘質土が堆積し、その両側には礫を含む赤褐色の粘質土が堆積する状況はうかがえたことから、中央に箱型の木棺を据え、外側に裏込め土を充填した痕跡と考えられた。縦断面でも同様の状況が見て取れることから、木棺は長さ 2.5 m、幅 45cm の規格であったと推測される。

出土遺物（第 84 図）

墓壙内から遺物は検出されていないが、墳丘東側のサブトレンチ掘削中に土器片が 1 点出土した。頸部～肩部付近の小破片である。土師器の甕とみられるが、小片であり時期の特定は難しい。

８号墳（第 85 ～ 89 図）

立地状況　７号墳から尾根筋を直交する区画溝を越えて隣接する古墳である。標高は 59.5 mである。周辺には幅８mの平坦面が台形状の高まりを見せており、調査前の時点で墳丘の存在がうかがえる状況であった。

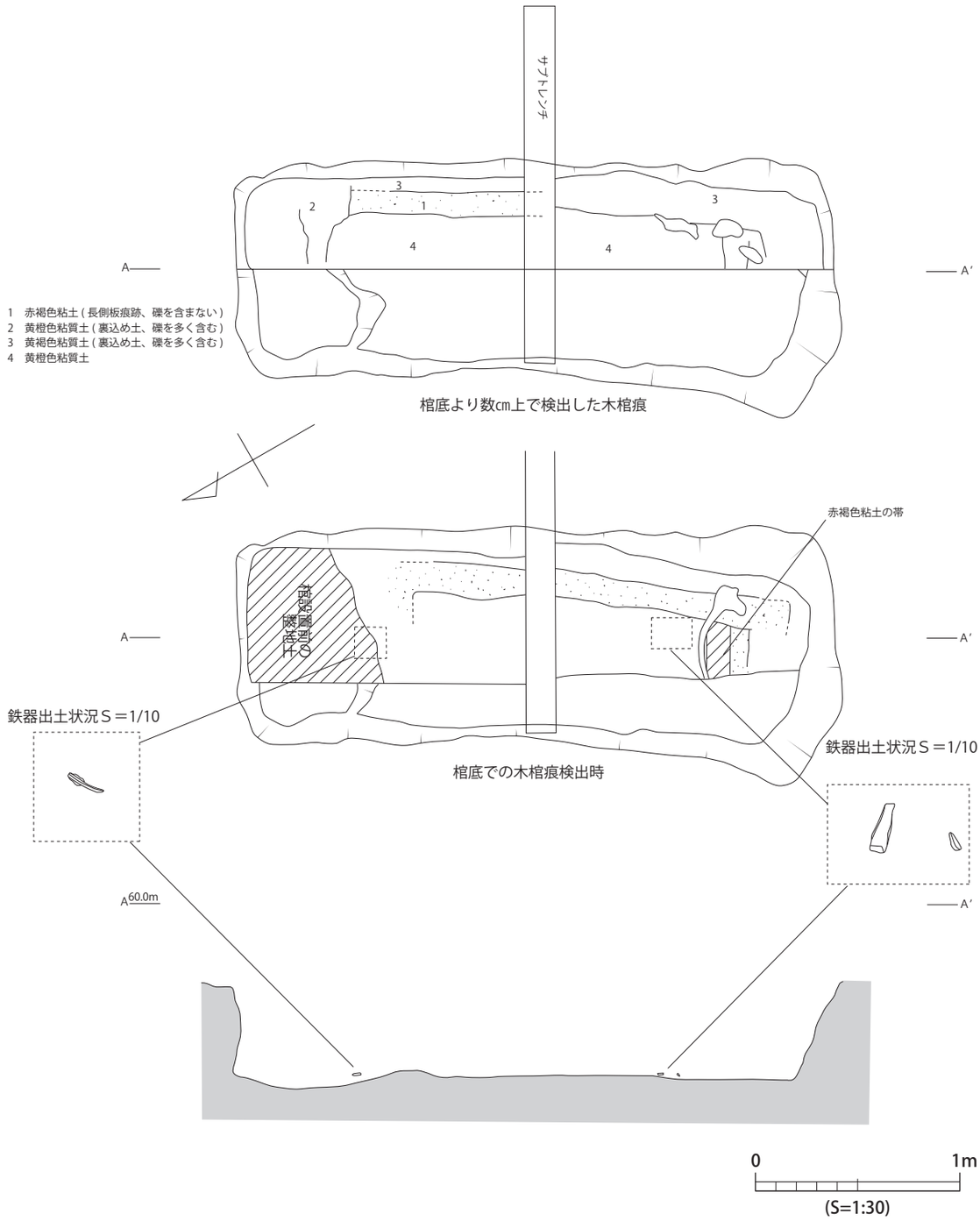
墳丘規模と形態　墳丘東側の崩落が著しいが、西側は形状を比較的留めていた。また尾根筋の両端には区画溝が存在することから、墳丘規模は南北９m×東西 10m の方墳と考えられる。墳頂平坦面は現状で６m × ８ mの広さをもつ。

墳丘は岩盤を水平に削平した後、盛土により構築されており、墳丘の西側では約 70cm の厚さで盛土が残存している。墳丘断ち割り後の土層観察では、まず盛土を外堤状にドーナツ形に構築し、その後主体部を配置する中央部を充填、併せて墳丘縁辺部も細かく成形した様子がうかがえる。

この他、墳丘頂部の東隅には主体部から転落したとみられる瓦礫が検出された。また北隅には焼土土坑ＳＫ 08 が存在するが、炭化物の AMS 年代測定では７世紀代の測定値が示されている（第５章参照）。

区画溝　尾根筋の両端部で検出された。北側の溝は主軸が墳丘と合っておらず、９号墳に伴うものと考えられる。南側の溝は不整形ながら軸が墳丘に揃っており、長さ５m、最大幅 1.5m、深さ 20cm を測る。南側溝の覆土から多数の土器片が出土している。

主体部　墳丘中央部で主軸を尾根筋に併行させた２基の主体部が検出された。２基は距離 20cm で並列しているが、上層の土層観察では前後関係を明らかにすることはできなかった。また墳丘の

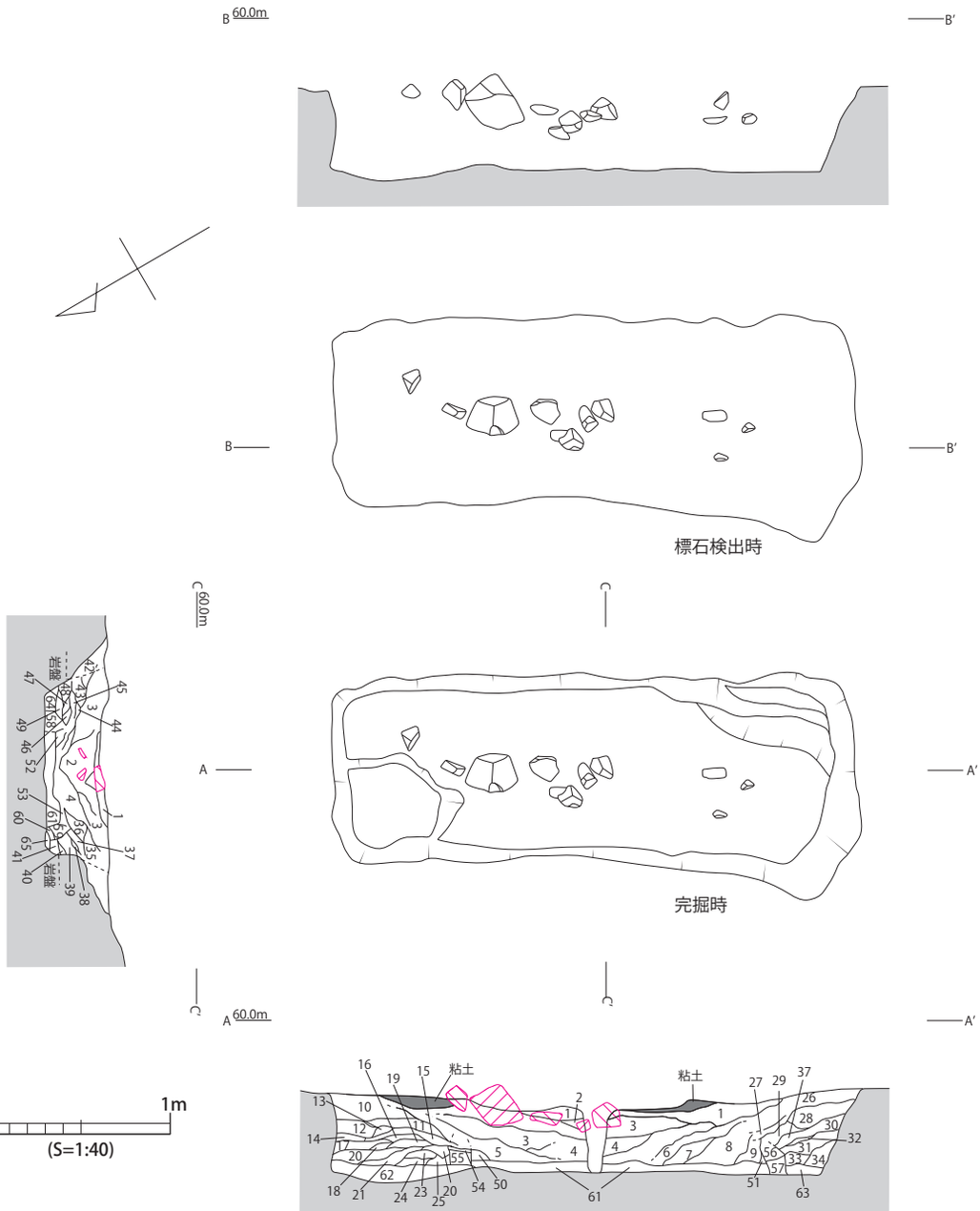


第 87 図　庵寺古墳群 8 号墳第 1 主体部木棺痕検出状況

東側が崩落していることもあり、どちらが中心主体であったかも判別できていない。

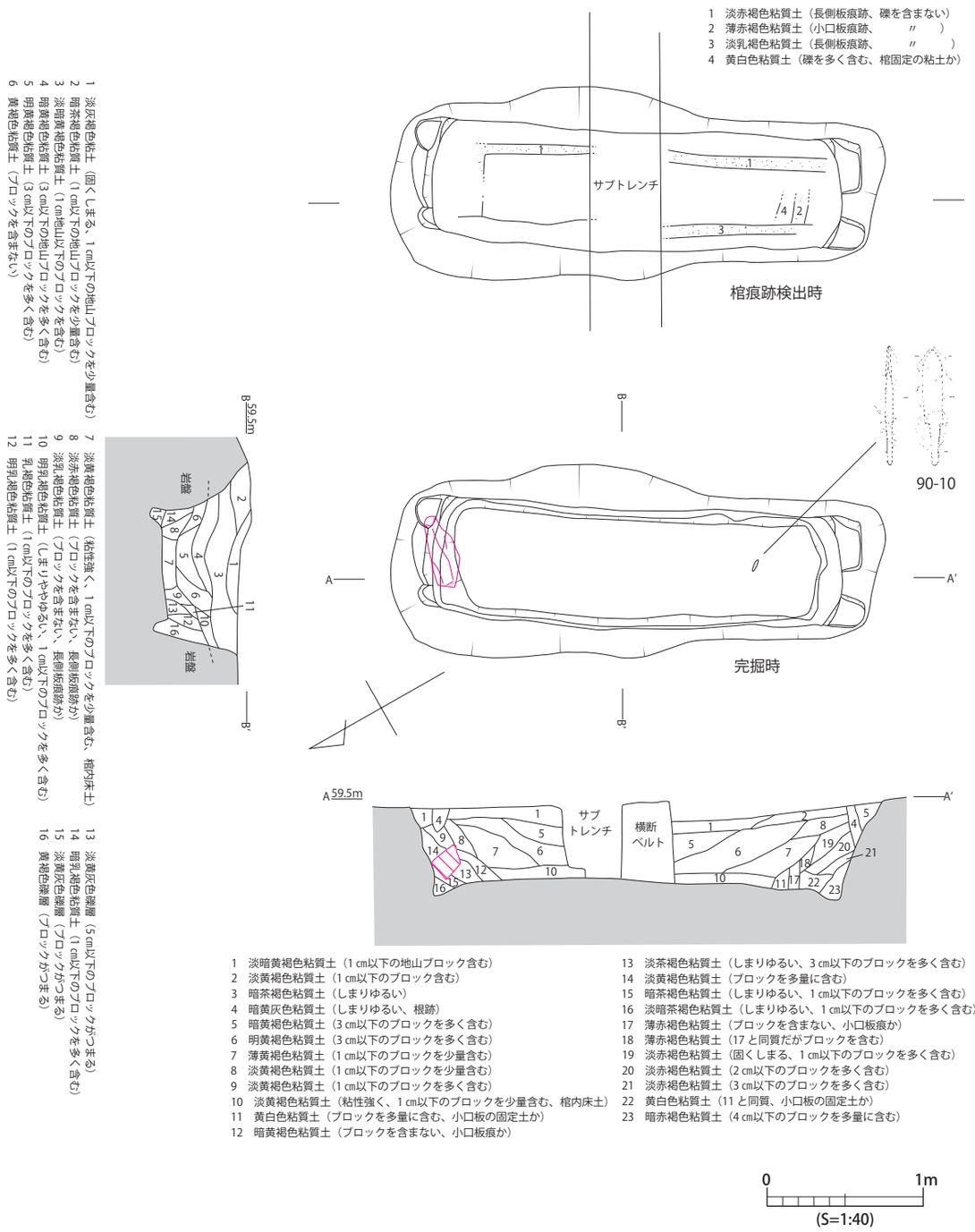
①第 1 主体部（第 87・88 図）　西側の墓壙である。平面プランは方形を呈し、掘り方の規模は上面で長さ 3 m、幅 110cm、深さ 45cm を測る。床面は長さ 2.75m、幅 90cm を測る。主軸の向きはＮ－ 30°－Ｅである。

墓壙の上方には最大で長さ 30cm の角礫が壙内に落ち込んだ状態で検出された。また礫の周囲に粘土層の広がりが認められるので、墓壙を埋め戻した後、上面に粘土を敷いて標石を固定したも



1　淡灰褐色土
2　にぶい淡黄色 (砂質シルト、礫あまり含まずサラッとした感じ)
3　淡黄橙土 (礫含むが多くはない。色調やしまり具合は均質性欠く)
4　明黄褐色土 (礫含むが多くはない。色調やしまり具合は均質性欠く)
5　にぶい黄褐色シルト粘質土 (礫含むが多くはない。色調やしまり具合は均質性欠く)
6　淡黄褐色土 (礫含むが多くはない。色調やしまり具合は均質性欠く)
7　橙褐色土
8　淡黄褐色砂質シルト (粘性はあまりない)
9　淡橙褐色シルト質粘土 (流入土の中では赤色味が強い)
10　黄橙色土
11　橙褐色土
12　赤褐色粘土 (礫は含むが少ない)
13　暗橙色シルト質土
14　淡橙褐色土 (礫少ない)
15　にぶい黄褐色土 (やや色黒ずんだ色調)
16　赤褐色シルト質粘土
17　淡黄橙色土
18　橙褐色土
19　黄褐色砂質土
20　明黄褐色粘土 (礫少ない)
21　淡橙色土 (やや色調にぶい)
22　淡黄褐色粘質土 (礫わずかに含む)
23　黄橙色粘土
24　暗橙色粘土
25　赤橙色土
26　黄褐色土
27　黄褐色土シルト質粘土
28　淡黄褐色土 (3 ㎝以内の礫を多く含む)
29　淡茶褐色土 (礫やや少ない)
30　黄褐色土 (礫多い)
31　淡橙色土
32　黄褐色土 (礫は少ない)
33　黄褐色土 (礫は少ない)
34　黄褐色土 (礫は少ない)
35　黄褐色土 (礫多い)
36　黄褐色土 (シルト質土)
37　黄橙色土
38　橙色粘土
39　黄橙色土
40　明黄褐色土
41　にぶい黄橙色粘土
42　暗橙褐色土
43　淡黄橙色 (礫含む)
44　明黄褐色土
45　黄褐色土
46　淡赤褐色粘質土
47　淡赤褐色粘質土 (粘性強い)
48　淡橙褐色土
49　明黄褐色土 (礫含む)
50　淡黄褐色粘質土
51　黄橙色粘土 (よくしまっている)
52　橙褐色粘土 (粘性強く均一な層)
53　明黄褐色粘土
54　黄橙色土 (小口痕跡)
55　明茶褐色粘土 (あまり硬質だはない、小口痕跡)
56　淡赤橙色粘土 (よくしまっている、小口痕跡 ?)
57　淡黄橙色粘土 (よくしまっている、小口痕跡 ?)
58　赤橙色粘土
59　淡黄橙色シルト質粘土 (均一性やや欠く礫含む)
60　黄褐色粘土粘性強い
61　明黄橙色土 (粘性の強いよくしまった層、棺内床上)
62　淡黄橙色粘土 (固くしまった土層地山の礫含む、木棺設置前の墓壙床面整地土)
63　黄褐色土 (礫は少ない)
64　にぶい黄茶色粘土 (粘性強い、礫を含む)
65　茶褐色粘土 (粘性強い、礫含む)

第 88 図　庵寺古墳群 8 号墳第 1 主体部実測図



第 89 図　庵寺古墳群 8 号墳第 2 主体部実測図

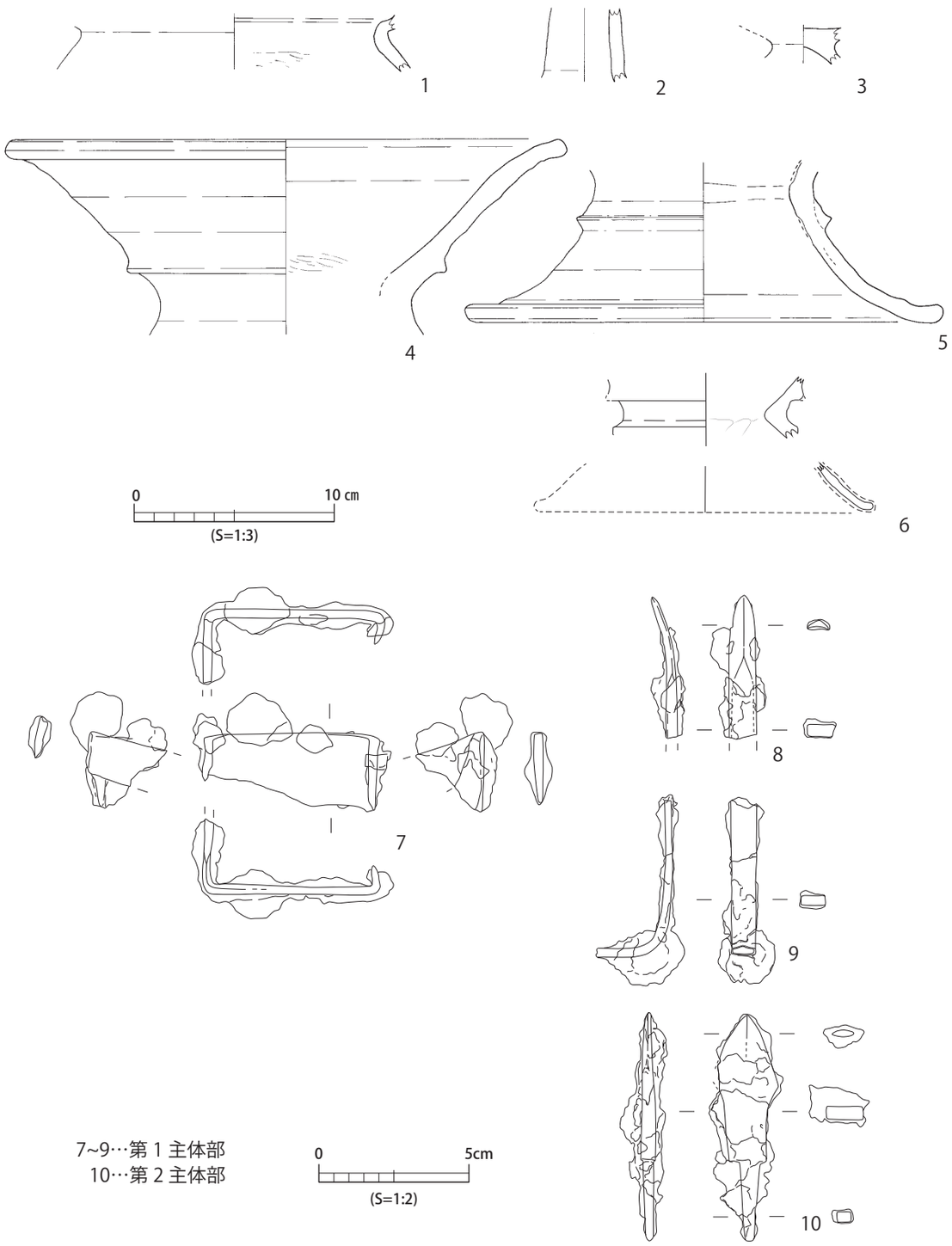
のと考えられる。

床面に棺を設置した痕跡はみられなかったが、棺内覆土の土層観察では、木棺の小口板や長側板が据えられた痕跡が認められ、また棺内の掘削を床面から数 cm 程度上方で止めて精査したところ、西壁付近で幅 15cm の礫を含まない赤褐色土の帯が検出され、帯は小口側で屈曲して伸びることから、組み合わせ式木棺を据えた痕跡と考えられる。

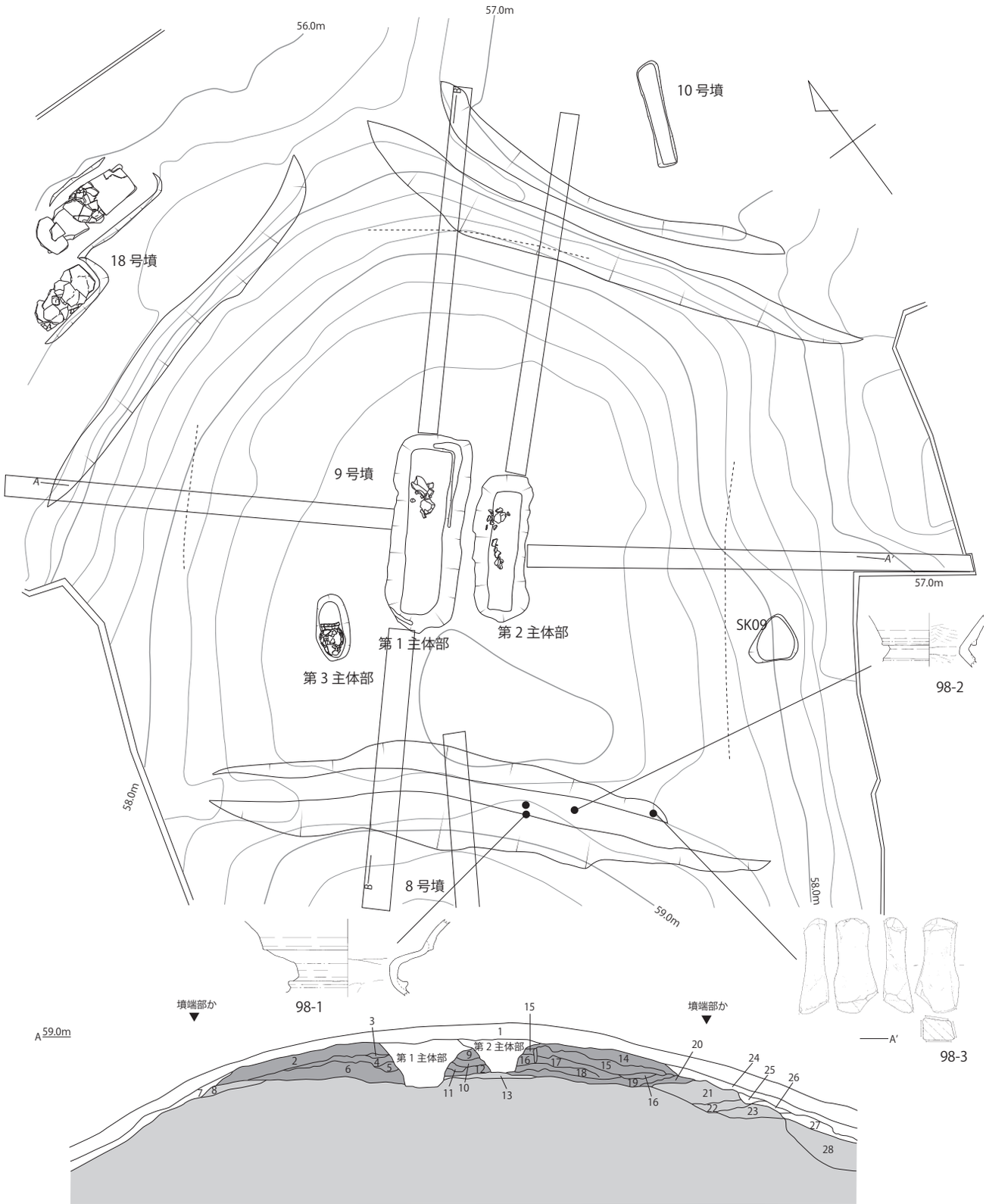
棺内の床面南側で鉄鎌、北側の棺外とみられる位置でヤリガンナが出土した。

②第２主体部（第 89 図） 東側の墓壙である。平面プランはやや楕円形状の方形を呈し、掘り方の規模は上面で長さ 3.2 m、幅 1.2 m、深さ 50cm を測る。床面は長さ 2.35m、幅 64cm を測る。主軸の向きはＮ－ 28°－ Ｅである。第１主体部とほぼ同じ規模だが、第２主体部の方がやや深く掘り込まれている。

墓壙の床面の縁には幅 10cm の溝がみられ、当初は木棺の小口板や長側板を据える溝と思われたが、溝は部分的にナナメに掘り込まれ、また壁に沿って一周することから、床面を棺台状に成形



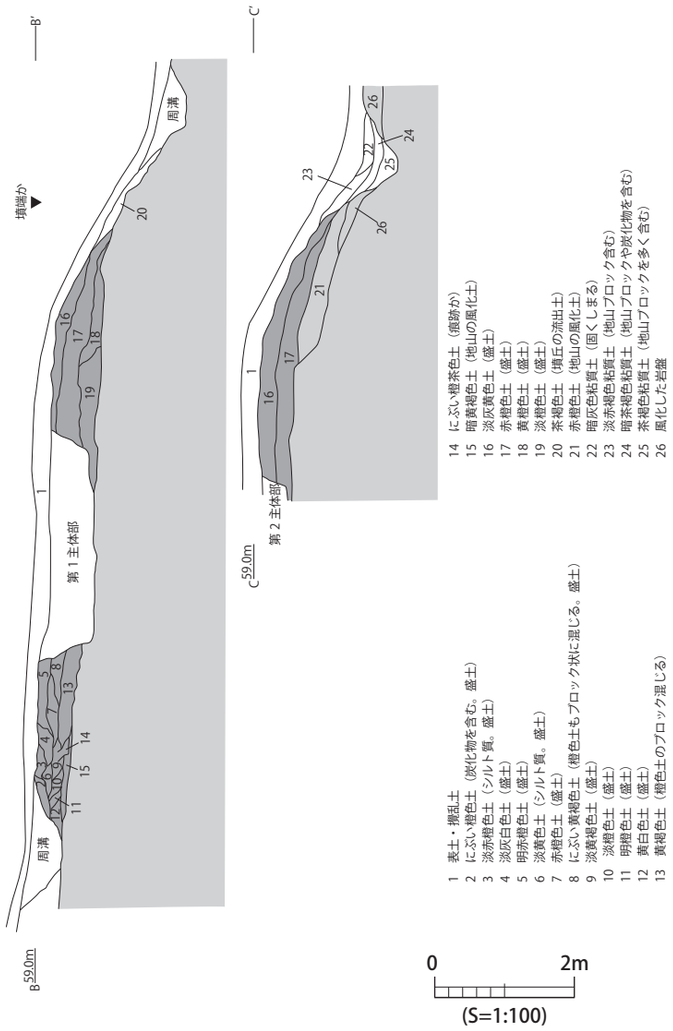
第 90 図　庵寺古墳群８号墳出土遺物実測図



1 表土・攪乱土
2 にぶい橙褐色土（盛土）
3 にぶい赤褐色土（均質でなく黄色・橙色の礫を含む土層が重なる。盛土）
4 黄白色土赤橙色の混在層（　〃　）
5 明赤橙色土（　〃　）
6 にぶい黄褐色土（　〃　）
7 茶褐色土（墳丘の流出土）
8 淡黄色土（赤橙色土が混じる。地山の風化土）
9 暗茶褐色土（盛土）
10 暗黄褐色土（盛土）
11 暗黄褐色土（盛土）
12 淡黄褐色土（盛土）
13 にぶい黄褐色土（地山の風化土）
14 淡灰色土（非常に均質で礫等をほとんど含まない粘土層。盛土か）
15 淡黄灰色土（　〃　）
16 暗茶褐色土（硬質で岩状を呈する。盛土か）
17 淡赤橙色土（非常に均質・硬質で礫等混じらない。盛土か）
18 赤橙褐色土（　〃　）
19 黄橙色土（白色の硬質粘土ブロックを多量に含む。盛土か）
20 暗橙色土（礫が多く、礫の間粘土を含む。盛土か）
21 黄色の岩盤
22 黄灰色の礫層（茶褐色の粘土を含む）
23 橙色～黄色の岩盤
24 茶褐色土
26 淡茶褐色土（５㎜程の礫を含む）
27 にぶい黄褐色土
28 風化した岩盤（間に粘土が入り込む）

0　2m
(S=1:100)

第 91 図　庵寺古墳群９号墳墳丘測量図



第 92 図　庵寺古墳群９号墳墳丘縦断面土層図

したものと考えられる。両小口側の壁面には長辺に沿った刳り抜きが４箇所で認められた。これは、位置的に長側板を設置するための掘り込みとみられる。また、北側の小口側では長さ 45cm の角礫が落ち込んだ状態で検出された。上面に置かれた標石か、もしくは小口板を押さえるためのものと考えられる。

棺内覆土の土層観察でも小口板や長側板が据えられた痕跡がうかがえ、また床面直上の精査でも礫を含まない赤褐色粘質土の帯が検出され、組み合わせ式木棺を据えた痕跡と考えられる。

棺内の床面南側で鉄鏃が出土した。

出土遺物（第 90 図）

１～６は南側の区画溝から出土した土器片である。１は頸部から肩部にかけての小片で、土師器の甕とみられるが、頸部の長さが複合口縁にしてはやや短い。２は風化が著しいが高坏の筒部とみられる。３は低脚坏の脚部である。

４は鼓形器台の受部であり、残存状況が良好でないが、復元口径は 27.2cm の大型のものである。器壁は厚手で、口縁端部は丸みをもち、屈曲部の稜線もシャープさがみられない。５は鼓形器台の脚部とみられ、復元底径 23cm を測る大型のものである。６も鼓形器台の破片であるが、薄手で風化が著しく調整は不明である。

７～９は第１主体部の床面で出土した鉄器類である。７は直刃の鎌で、刃部の先端が離れた位置で出土したが、接合したところ、刃部先端を直角に折り曲げて副葬されたものであることがわかった。８・９はヤリガンナである。同一個体とみられるが、基部が直角に折り曲げられている。

10 は第２主体部の床面で出土した鉄鏃である。定角式の鏃であり、長さ 7.6cm、幅 1.6cm を測る。鏃身は平造りで刃部は圭頭形を呈し、関は直角に切り込まれている。定角式鉄鏃の出土例は県内では珍しく、類似例は雲南市神原神社古墳出土例が知られるのみである [12]。

これらの出土土器について、破片資料が多く時期を特定するのは難しい。ただ４・５の鼓形器台は厚手の大型品であり、その特徴は４号墳で土器枕に転用されたものと類似する。また出雲部では同型の鼓形器台が松江市釜代１号墳から出土していることから [13]、器台は小谷４式に相当する可

能性があり、古墳の築造時期は古墳時代前期後葉に比定される。

９号墳（第 91 ～ 97 図）

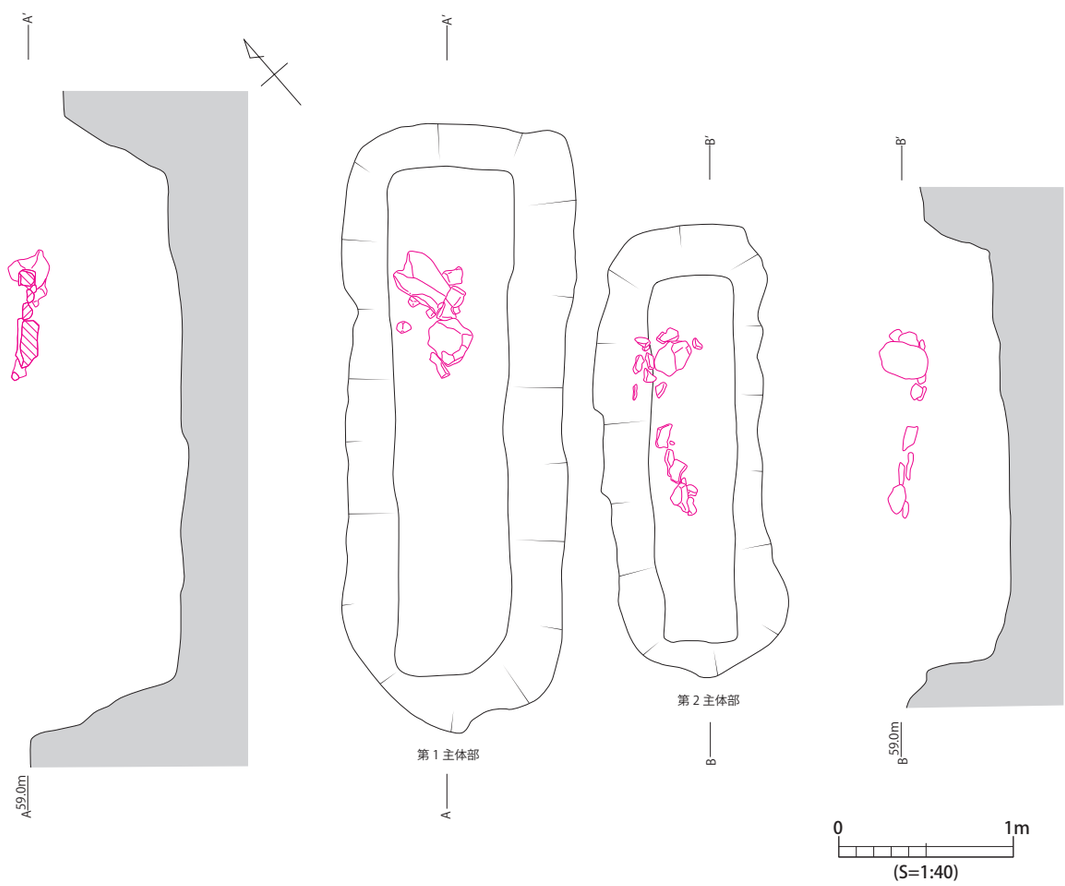
立地状況　８号墳の北東側の区画溝を越えて隣接する古墳である。標高は 58.75 ｍである。地形的に水平に伸びる尾根筋の先端部に立地し、周辺には幅９ｍの平坦面が台形状の高まりをみせており、調査前の時点で墳丘の様子がうかがえる状況であった。

墳丘規模と形態　Ｂ群の中では当初の形態を最も良く残していると思われ、墳丘の南西側には区画溝が存在することから、墳丘規模は南北９ｍ×東西 10m の方墳と考えられる。墳頂平坦面は現状で７ｍ×７ｍの広さをもつ。

墳丘は８号墳と同様に、盛土により構築されており、墳丘の西側では約 70cm の厚さで盛土が残存する。墳丘断ち割り後の土層観察では、尾根筋の岩盤を水平に広く削平した後、礫を含まない均質な粘質土と礫を含む粘質土を互層状に構築した様子がうかがえる。特に墳丘南側の縁辺部は粘質土を細かく積み上げより丁寧に成形していることも判明した。また墳丘の北側と西側の墳丘縁辺部は、10 号墳と 18 号墳の築造時に削平を受けている。

この他、墳丘の東側斜面下方には焼土土坑ＳＫ 09 が存在する。炭の AMS 年代測定では縄文時代前期の測定値が示されている（第５章参照）。

区画溝　墳丘の南側で検出された。尾根筋に直交してやや湾曲気味に伸びている。長さ 10 ｍ、最大幅 1.8m、深さ 50cm を測る。覆土から土器片が数点出土している。



第 93 図　庵寺古墳群９号墳第１・２主体部標石検出状況

主体部　墳頂の中央付近で主軸を尾根筋に併行させた２基の主体部と、やや離れた位置で土器棺を納めた主体部が１基が検出された。中央の主体部２基は距離 20cm で並列しているが、土層観察により第２主体部が新しいことが明らかである。その規模からも、第１主体部が中心主体であったと考えられる。

①第１主体部（第 94・95 図）　３基ある主体部の中心に位置する墓壙である。平面プランはやや隅丸の方形を呈し、逆台形状に掘り込まれる。掘り方の規模は上面で長さ 3.5 m、幅 1.35 m、深さ 80cm を測り、床面は長さ 2.92 m、幅 72cm を測る。当古墳群でも最大規模の墓壙であり、主軸の向きはＮ－ 40°－Ｅである。

墓壙の上方北側には最大で長さ 30cm の角礫が集石しており、墓壙内には落ち込んでいない状況にあった。このことから標石とするには否定的な点もあったが、礫の周囲には灰白色の粘土が充填されており､土層観察では粘土が墓壙内に大きく落ち込んでいる様子がうかがえた。これにより、主体部が埋め戻された後、その上に粘土を大きく盛り、標石を粘土に埋め込むように配置したことが推測される。

床面に棺を設置した痕跡はみられなかったが、墓壙内覆土の土層観察では、底部に粘土層を敷き、その上に木棺の小口板や長側板を据えた痕跡が認められ、棺外には細かく互層状に裏込め土を充填した様子がうかがえる。また棺内の掘削を床面から数 cm 程度上方で止めて精査したところ、木棺痕が帯状に検出され、板材をＨ型に組み合わせて箱式木棺を納めた状況が明瞭に確認できた。これによれば、木棺の寸法は長側板の長さ 2.7 m、棺内長 2.04 m、棺内幅が北小口で 44cm、南小口で 38cm を測る。北側が幅広に作られていることから、北側が頭位と推測される。

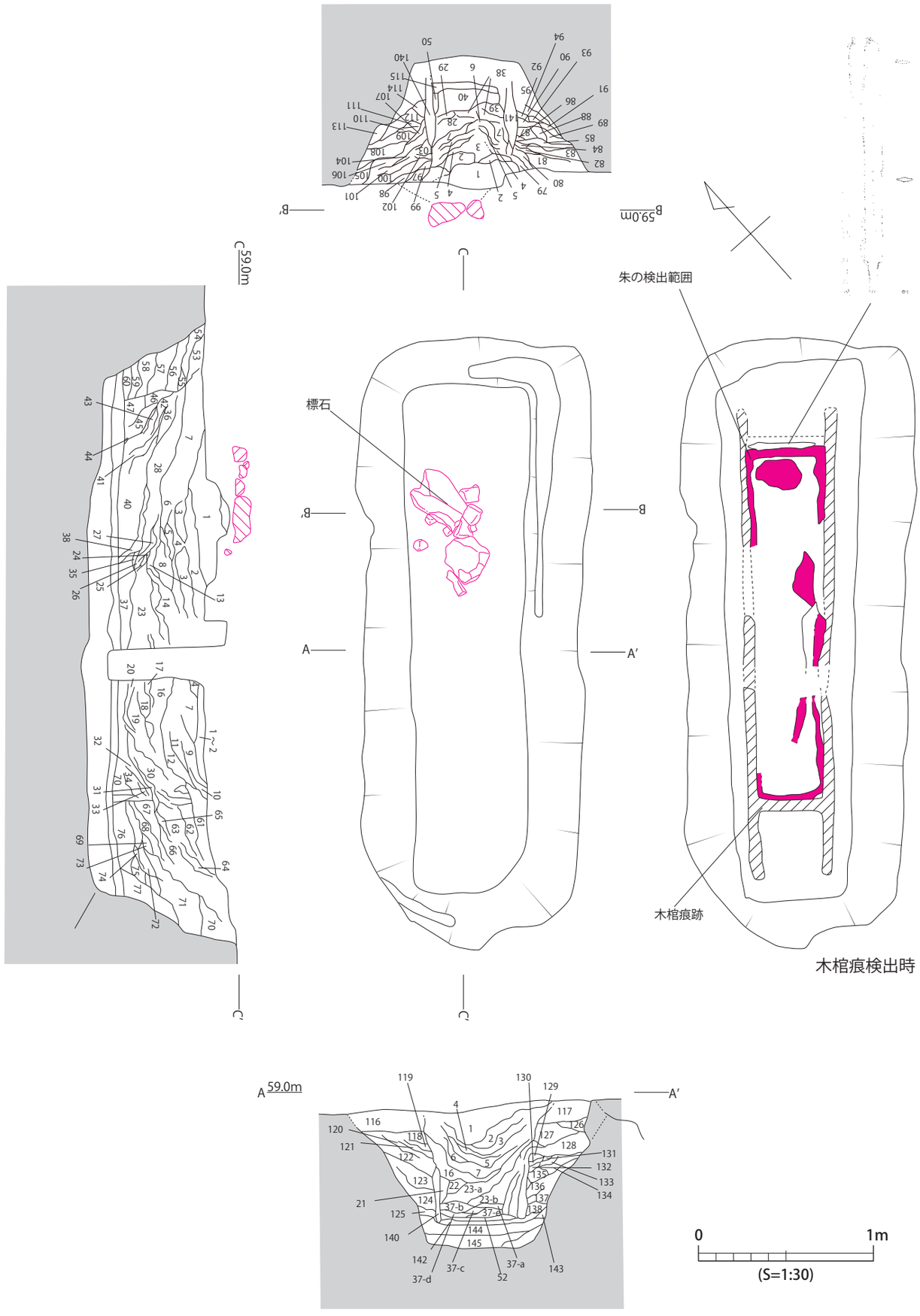
また棺内部を掘り下げると、朱が混じる粘質土が側板に沿って頭位から足位にかけて帯状に検出された。分析の結果、水銀朱であることが判明し、さらに中国産の水銀朱が使用されている結果も示された（第５章参照)。状況から、棺内の側板や小口板に水銀朱が塗布されていた痕跡と考えられる。

この他、棺内の北側小口板に沿って長さ 38cm の鉄剣が出土した。棺内の頭位付近に副葬されたものとみられる。

②第２主体部（第 96 図）　第１主体部に並列して配置された墓壙である。切り合いから、第２主体部の方が新しい。平面プランはやや不整形な方形を呈し、逆台形状に掘り込まれる。掘り方の規模は上面で長さ 2.6 m、最大幅 98cm、深さ 60cm を測り、床面は長さ 2.05 m、幅 50cm を測る。第１主体部の墓壙を一回り小さくしたような規模の墓壙であり、主軸の向きは第１主体部と同様にＮ－ 40°－Ｅを指向する。

墓壙の上方には、第１主体部と同様に最大で長さ 30cm の角礫が中央付近から北側にかけて集石しており、墓壙内には落ち込んでいない状況にあった。礫の周囲には灰白色の粘土が充填され、土層観察では粘土が墓壙内に大きく落ち込んでいることから、主体部を埋め戻した後、その上に粘土を盛り、標石を半分埋め込むように配置したと考えられる。

床面に棺を設置した痕跡はみられなかったが、墓壙内覆土の土層観察では、底部に粘土を 10cm の厚さで敷き、その上に木棺の小口板や長側板を箱型に据えた痕跡が明瞭に認められた。これによれば、棺の寸法は長さ 1.5m、幅 35cm となる。また棺外には互層状に裏込め土を細かく充填した様子がうかがえる。なお、棺内覆土を床面直上で精査したが、木棺の痕跡を明確には検出すること



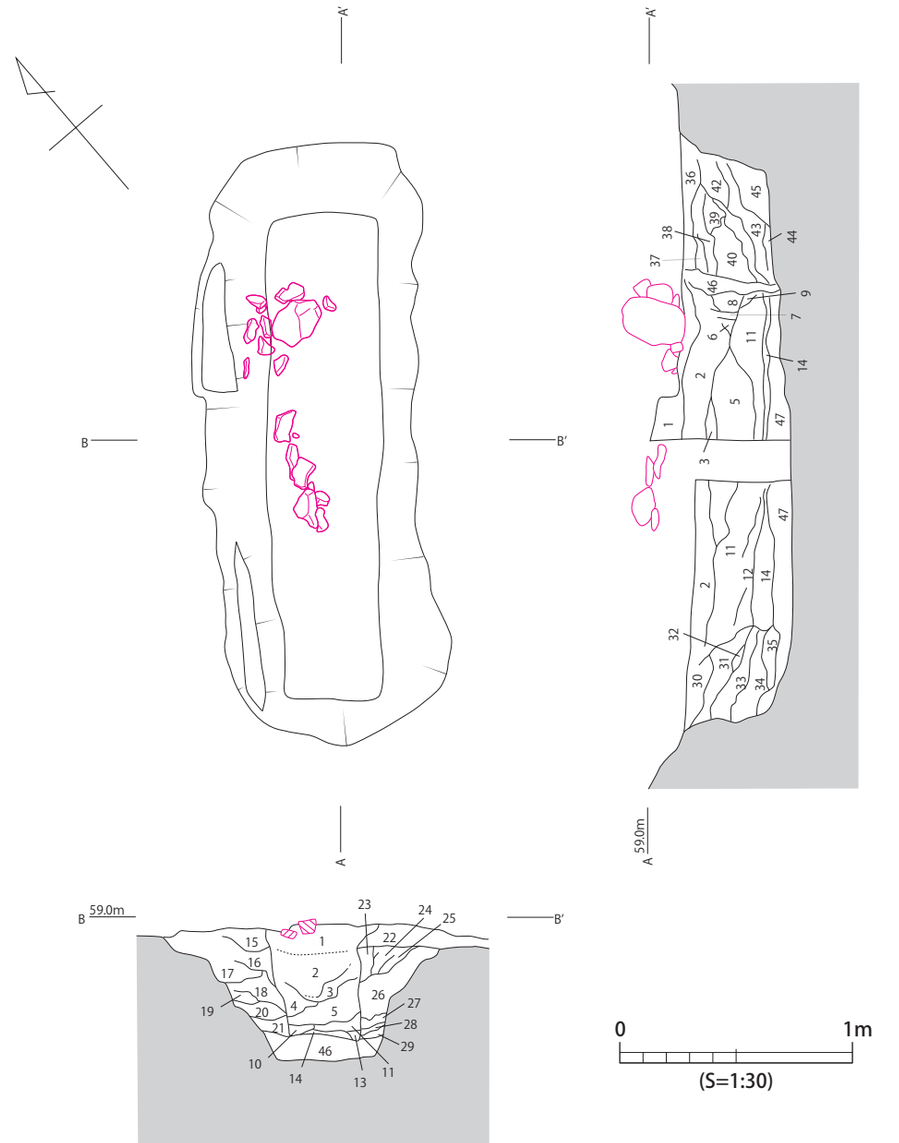
第 94 図　庵寺古墳群 9 号墳第 1 主体部実測図

1　灰白色粘土　（標石はこの層の上にのっている。石の下半は粘土に
　埋め込まれていた可能性もある。この層は礫を含まない）
2　橙灰色土（灰白色の粘土と橙色の粘土がブロック状に混じり合う層。
　2 層の方が橙色系の粘土が多い）
3　全体として灰白色だが橙色粘土のブロックも多くみられる。
4　橙灰色土
5　黄橙褐色粘土
6　淡橙色粘土層（15 層とよく似ている）
7　粘土がブロック状に混じり合った黄橙色
8　黄橙色
9　にぶい黄褐、灰白色粘土（右側には炭化物の層）
10　灰白色粘土
11　にぶい橙壌土
12　淡橙色粘土（非常に均質な粘土）
13　黄橙色（地山ブロック多い）
14　橙褐色土
15　にぶい赤褐色土
16　にぶい橙褐色土（パサパサ）
17　灰白色粘土
18　灰褐色土（粘土ブロックが多い）
19　橙色ベースの灰色粘土ブロック混じり層
20　灰白色粘土
21　赤橙褐色粘土（細かいブロック土含む）
22　赤褐色土（地山の黄色ブロックを多く含む）
23　灰褐色土（粘土ブロックが多い）
23a　淡橙色粘土（灰色・黄色の 1 ㎝ほどのブロック含む）
23b　灰白色粘土ブロック・地山黄色ブロック・橙色粘土の混在層
24　橙色
25　黄色
26　淡橙色
27　黄色
28　橙褐色粘質土（地山礫含む）
29　黄橙色
30　にぶい橙褐色（灰白色粘土・黄色礫のブロック混じる）
31　灰白色粘土（粘土のブロック）
32　淡橙褐色土（地山礫や灰色粘土ブロックで含む）
33　橙褐色土　（灰色粘土・地山ブロック含む）
34　淡橙褐色土（地山礫や灰色粘土ブロックで含む）
35　黄褐色土
36　赤橙色粘質土（灰色ブロック粘土を含む）
37　黄褐色土（あまりしまりなし）
37a　橙色土・灰色土の混在層
37b　淡橙色粘土層
37c　淡橙色粘土層
37d　灰白色粘土層（蓋板目張り粘土）
37e　淡橙色粘土（黄色地山ブロック含む）
38　灰白色粘土（棺の蓋板上の目張り粘土か）
39　にぶい橙褐色粘質土
40　橙褐色粘土（地山のブロックわずかに含む）
41　灰白色粘土
42　黄褐色土（地山礫多い）
43　明橙色土
44　黄橙褐色粘土（5 ㎝ほどの地山礫あり）
45　赤褐色土　（116 と共通か？南側裏込め土）
46　淡橙色土
47　橙色土
48　暗赤橙色粘土
49　黄褐色土（灰色・黄色のブロック含み均一性欠く、しまりはあまりない）
50　明橙色粘土
51　灰白色粘土
52　黄橙色粘土
53　橙褐色粘土
54　明橙色粘土（灰白色粘土混じり）
55　橙褐色ん粘土（地山礫と灰白色粘土のブロックが多くふくまれる）
56　淡黄橙色粘土（均一で可塑性の強い粘土）
57　赤橙色粘土（5 ㎝ほどの地山礫 1 個含む）
58　赤褐色粘土
59　淡橙色粘土
60　暗橙褐色土
61　明橙色粘土
62　橙色粘土と灰色粘土がブロック状に混在する層
63　62 と同様
64　灰白色粘土がブロック状に帯になる
65　灰白色粘土
66　黄褐色粘土（黄色地山ブロック含む）
67　淡橙色粘土
68　淡橙色粘土（地山ブロック含む）
69　灰褐色粘土
70　にぶい橙色粘土（2 ㎝内の礫含む）
71　明黄褐色粘土（礫・灰色粘土ブロック多く含む）
72　明赤褐色土（均一な層、しまりはなくボソボソした感じ）
73　暗赤橙色粘土（硬質な粘土のブロック）
74　暗赤橙色粘土
75　黄橙色粘土
76　赤橙色粘土層に地山礫（3 ㎝程）が多く混じる
77　にぶい橙褐色土
78　灰白色粘土（38 とよく似ている）
79　暗橙褐色土
80　暗橙褐色土（黄色土ブロックを含む）
81　黄橙褐色土（パサパサした感じ）
82　暗灰褐色土
83　黄橙褐色土（色調が均一でなく、黄色・灰色のブロックが混在する。パサパサ）
84　灰色粘土
85　淡橙色粘土
86　黄橙色土
87　黄褐色土（パサパサ）
88　黄褐色土
89　淡黄色土
90　橙色粘土（地山礫多い）
91　橙色粘土（礫はない）
92　赤橙色粘土（パサパサ）
93　黄橙色粘土（パサパサ）
94　灰白色粘土（黄橙色土が混じる）
95　黄褐色粘土
96　淡橙色土
97　灰白色粘土
98　暗褐色土（橙色粘土のブロック含む）
99　橙色粘土
100　暗橙褐色土（黄色ブロック・地山含む）
101　橙色粘土
102　橙色粘土
103　淡黄色土・にぶい橙色土
104　淡橙色粘土
105　にぶい橙褐色土
106　淡橙色粘土
107　淡黄褐色土
108　にぶい橙褐色粘質土
109　108 と同じ色
110　赤橙色粘土
111　淡黄褐色土
112　にぶい橙褐色粘土（黄色土ブロックが混じる）
113　にぶい橙褐色粘土（黄色土若干混じる）
114　淡橙色粘土（地山礫あり、かなりしっかりしている。しまった土）
115　赤橙色粘土（パサパサした感じ）
116　赤褐色土
117　赤褐色土
118　赤褐色土
119　赤橙色土（均一な層）
120　にぶい橙色（黄色ブロック含む）
121　赤橙色粘土（均一な層）
122　黄橙褐色粘土（5 ㎝ほどの地山礫あり）
123　黄橙褐色土（地山礫多い）
124　明橙色土
125　黄色土
126　淡橙色土
127　橙色土
128　にぶい橙褐色土（灰色粘土含む）
129　灰白粘土
130　黄橙色土
131　橙色土
132　橙色粘土ブロック
133　黄橙色土
134　にぶい橙色粘土
135　にぶい橙色粘土（黄色土混じり）
136　橙色粘土
137　明橙色粘土
138　淡橙色粘土
139　淡黄色粘土ブロック
140　にぶい橙色土
141　黄褐色土（部分的に橙色土混じる）
142　橙色粘土（均一で細かい粒子の粘土）
143　淡黄色土
144　淡黄橙色粘土（地山礫をかなり多く含む）
145　淡赤橙色粘土（地山礫少ない）
146　赤橙色粘土（地山礫を含む）

第 95 図　庵寺古墳群９号墳第１主体部土層図土色

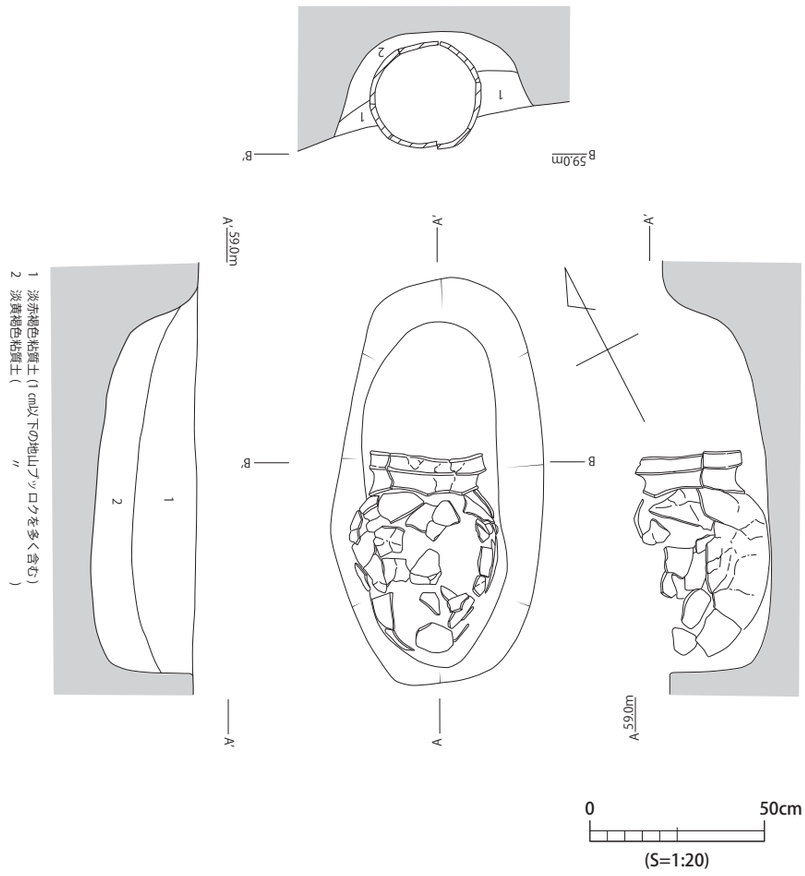
はできなかった。また墓壙内から遺物は検出されていない。

③第３主体部（第 97 図） 第１主体部から西側に約 80cm 離れた位置で検出された墓壙である。平面プランは楕円形状を呈し、方形状に掘り込まれる。掘り方の規模は長さ 1.15 m、幅 60cm、深さ 30cm を測る。長軸の向きが第１・２主体部とは若干ずれており、主軸はＮ－ 29°－Ｅを指向する。



1　淡灰白色土
2　淡橙褐色粘土
3　灰色土ベース橙色土混じり（目張り？）
4　橙褐色土
5　橙色粘土（灰白色粘土ブロック混じる）
6　にぶい橙色粘土
7　灰白色粘土
8　灰白色粘土・橙色粘土（ブロック混在層）
9　橙色粘土
10　にぶい橙色土
11　灰白色粘土ベースの橙色粘土混じり
12　橙色粘土ベース（灰白色粘土ブロック混じり）
13　淡灰白色粘土
14　にぶい橙褐色土
15　淡橙褐色土（14 とよく似る）
16　橙色粘土
17　橙色粘土
18　にぶい橙色
19　橙色粘土
20　橙色粘土（灰白色粘土混じり）
21　橙色粘土
22　淡灰白色土
23　橙色粘土
24　灰白色粘土
25　橙色粘土
26　灰褐色粘土
27　橙色粘土
28　橙色粘土
29　灰褐色土
30　にぶい黄褐色土
31　にぶい橙色粘土ベースの灰色粘土（地山ブロック混じり層）
32　橙色粘土
33　2 と共通だがブロックの比率少ない
34　灰白色粘土ベースの橙色粘土混じり
35　橙色粘土
36　淡橙色粘土
37　赤橙色粘土
38　灰白色粘土
39　灰白色粘土
40　灰褐色粘土
41　橙色粘土
42　灰褐色土
43　灰褐色土（橙色粘土ブロック混じり）
44　灰白色粘土
45　灰白色粘土・橙色粘土ブロック混在層
46　灰褐色土
47　赤橙色粘土（灰白色粘土ブロックわずかに含む）

第 96 図　庵寺古墳群９号墳第２主体部実測図



第 97 図　庵寺古墳群９号墳第３主体部実測図

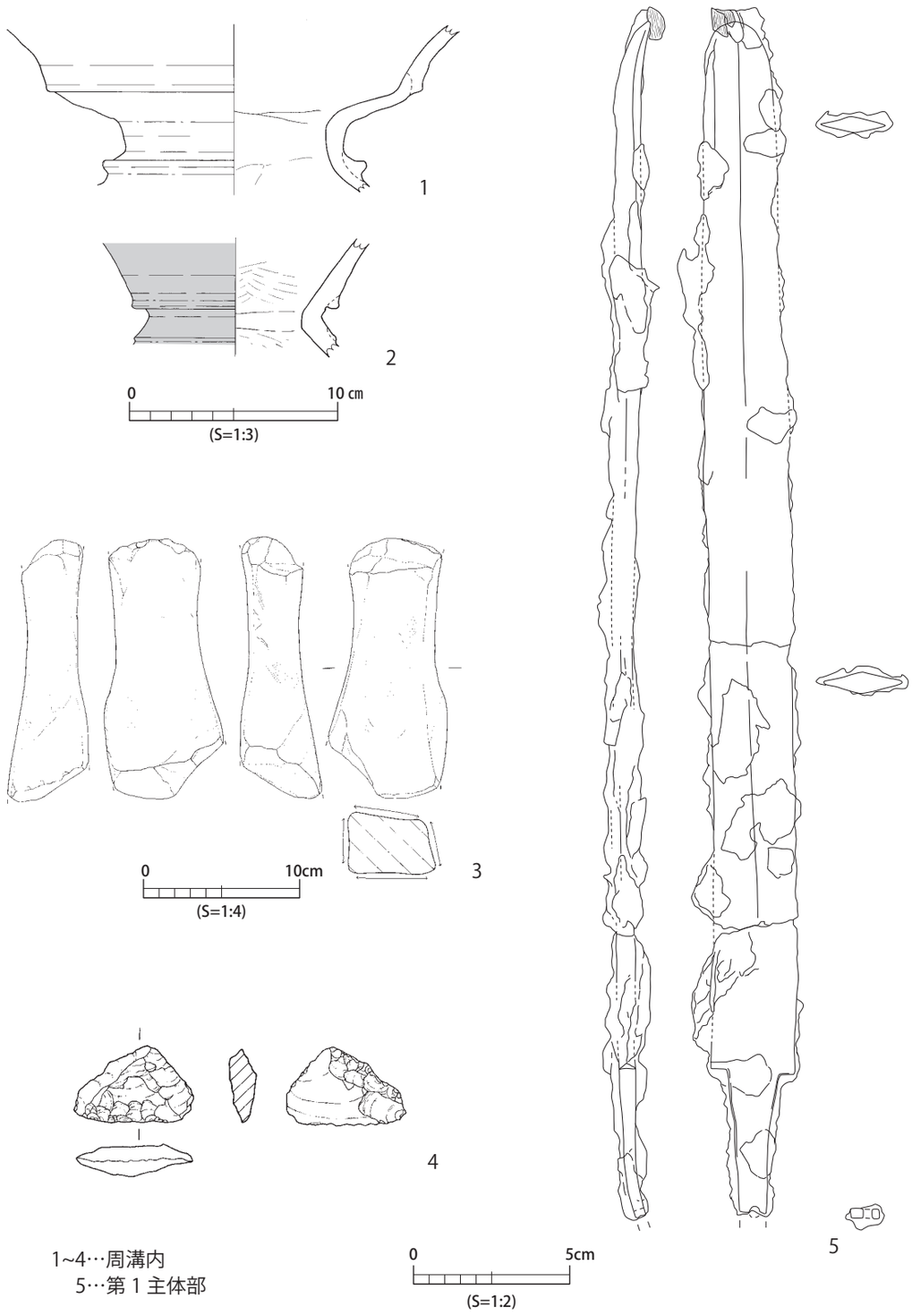
墓壙内からは、土師器の壺形土器が口縁を北側に横倒しにした状態で検出された。土器棺とみられ、土器を墓壙内の南側によせて埋葬したと思われる。口縁側に広いスペースがあるので、或いは有機物による蓋状のものが存在していたのかもしれない。墓壙内から土器棺以外は何も出土していない。また土器棺内堆積土の土壌分析を行っており、遺骸の存在を示す測定値が得られている（第５章参照）。

出土遺物（第 98・99 図）

第 98 図１～４は南側区画溝の出土遺物である。１は複合口縁を呈する土師器の壺である。風化が著しく口縁端部を欠く、頸部が短く直立し、肩部との境にタガ状の突帯を巡らす。口縁は水平方向に長く開いた後、屈曲部をもって大きく外反する。２は鼓形器台の筒部付近の小片である。筒部は短く、受部と脚部は立ち上がりが高い。受部と筒部の境に突帯をもつ。また外面には赤彩された痕跡が認められる。

３は砥石である。長さ 16.5cm、幅 7.5cm を測る。断面が方形を呈し、表裏両側面に研面が認められ４面とも湾曲している。４は黒曜石製のスクレイパーである。三角形状を呈し、長さ 2.5cm、幅 3.8cm、厚さ 0.8cm を測る。２辺に刃部がみられる。

５は第１主体部棺内の頭位とみられる小口部に沿って副葬された鉄剣である。短剣に相当し、茎部の目釘穴から先を欠くが、全長 38.2cm、幅 2.8cm、厚さ 0.6cm を測る。断面は菱形を呈し、切先が折り曲げられている。関は直角に切り込まれ、茎は茎尻に向かって内湾気味に細くなり、端部



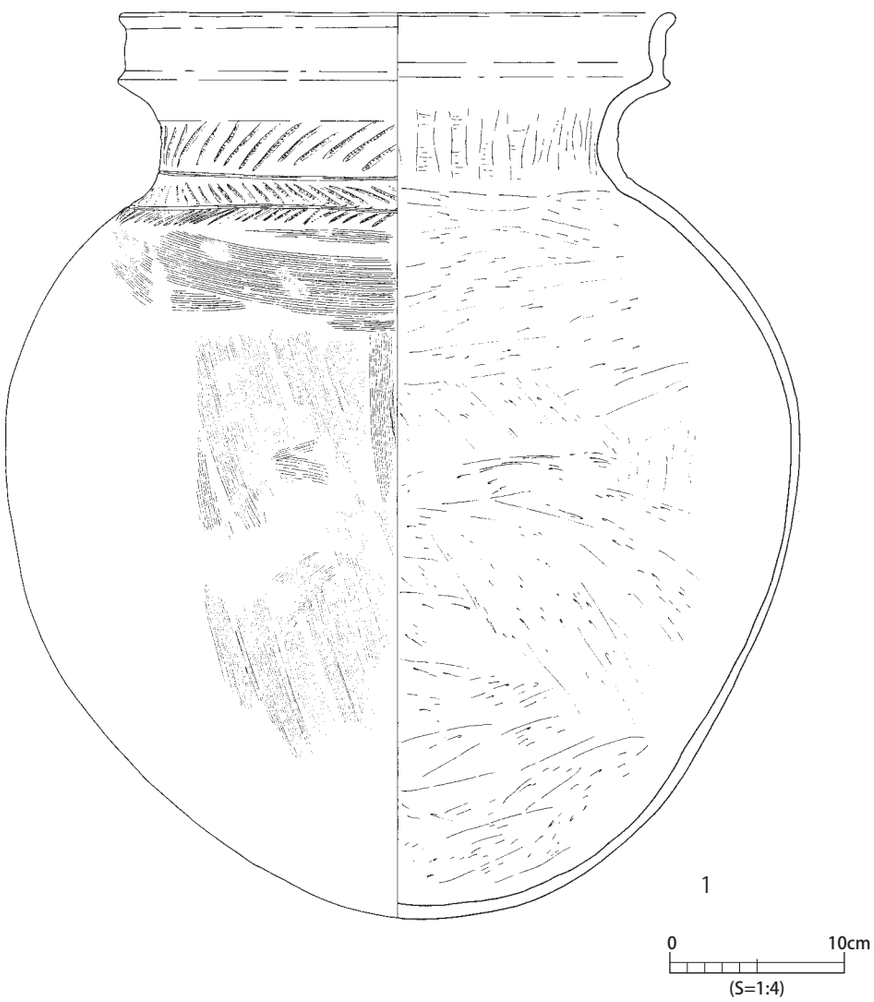
第 98 図　庵寺古墳群 9 号墳出土遺物実測図

側は曲がっている。また部分的に木質が固着しており、小口板に接していたとことにより棺材が付着したものと考えられる。

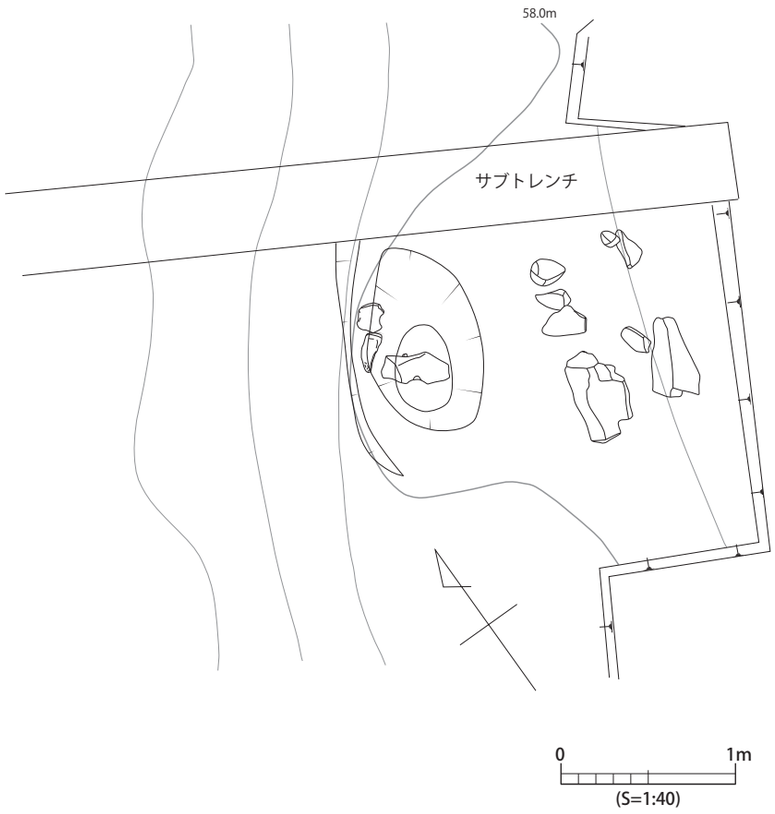
これらの遺物について明確に時期をおさえることは難しいが、壺や鼓形器台の特徴から、小谷２～３式以降のものであることはうかがえる。

第 99 図は、第３主体部に埋納された壺形土器であり、口径 31.8cm、器高 52cm を測る大型のものである。口縁が垂直に立ち上がり、端部は外反して丸くおさめており、屈曲部の稜は丸みをもちながら突出する。肩部はあまり張り出さず、胴部は倒卵形を呈し底部は丸底である。頸部から肩部にかけては沈線文により区画された羽状文が施され、肩部にはヨコハケ、胴部以下はタテハケを巡らす。内面はヘラケズリが底面から頸部にかけてジグザグに施され、頸部にはヨコハケ後、ユビナデがみられる。

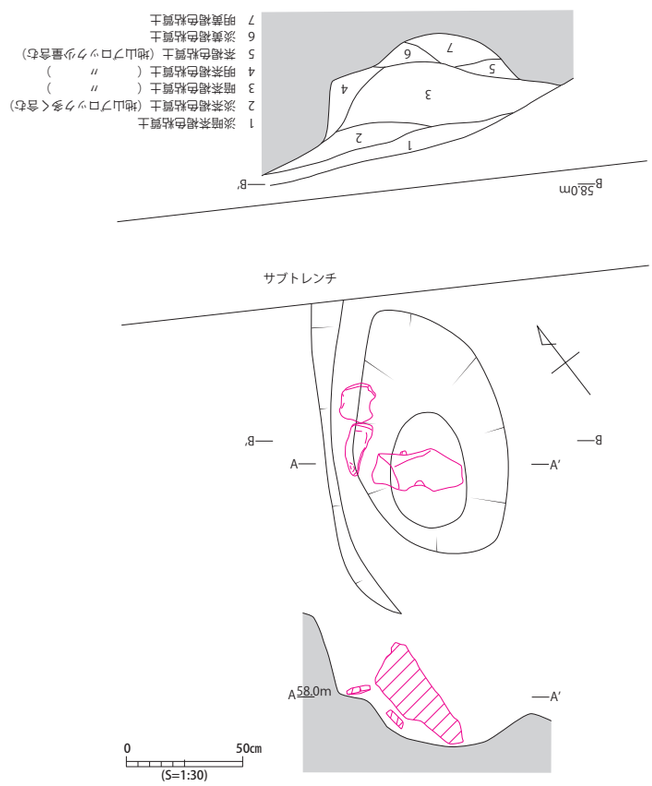
以上の特徴から壺は小谷３式に相当するとみられ、他の遺物の時期と矛盾しないことから、９号墳が築造された時期は古墳時代前期中葉に比定される。従って、９号墳は当古墳群の中で最古の古墳と位置付けることができる。



第 99 図　庵寺古墳群９号墳第３主体部出土土器棺実測図



第 100 図　庵寺古墳群 19 号墳周辺地形測量図

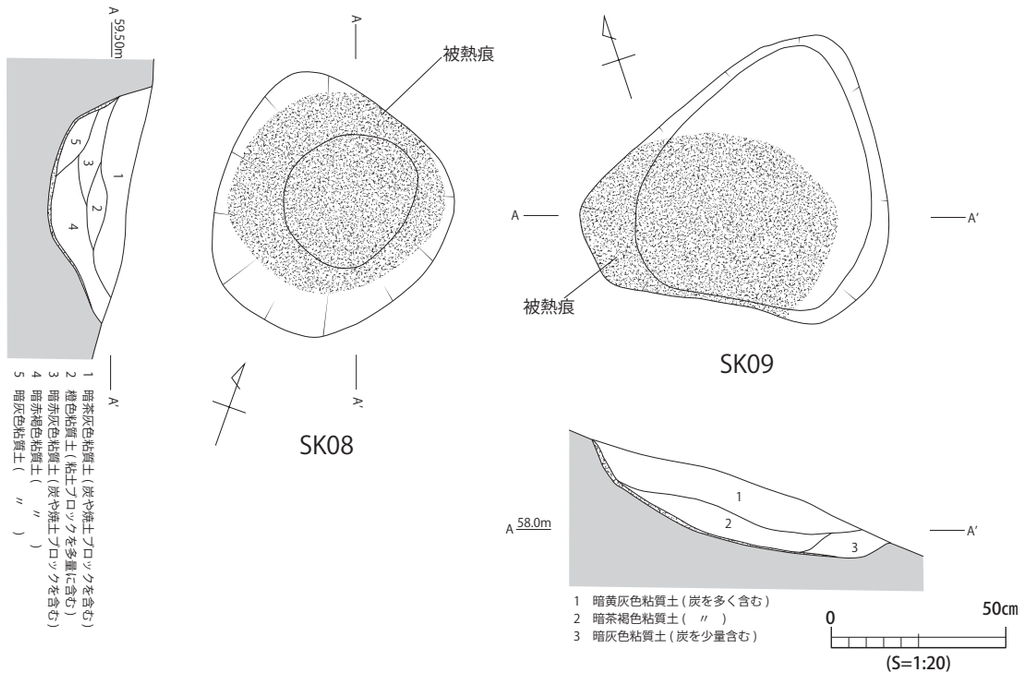


第 101 図　庵寺古墳群 19 号墳実測図

19 号墳（第 100・101 図）

立地状況　8 号墳の西側斜面下方で検出された古墳である。8 号墳の墳丘盛土観察のため設定したサブトレンチにより掘り方を一部抜いている。墳裾部の掘削中に長さ 50cm を超える大型の礫が多数検出され、周辺を精査したところ斜面の際で垂直な掘り込みと土坑状の落ち込みを検出することができた。土坑を覆うような板状の礫も検出されたため、石蓋土壙と判断した。西側に点在する瓦礫群も、石蓋上に積み上げられていたものが転落したものと考えられる。標高は 58.0m である。

構造と規模　斜面を段状に加工して平坦面を構築し、そこに墓壙を掘り込み平坦な角礫で蓋をしたものと推



第 102 図　庵寺古墳群 SK08･SK09 実測図

測される。

平坦面の規模は現状で長さ 1.4m、1.7m、墓壙は平面プランが不整な楕円形を呈し、長さ 1.1m、幅 58cm、深さ 20cm を測る小型のものである。主軸はＮ－ 35°－Ｅを指向する。

古墳とするには躊躇する点もあるが、尾根筋の先端部には 19 号墳と同様に流紋岩質の礫を割って構築した箱式石棺が 2 基検出されている（13・14 号墳）。立地的に平坦面と急斜面の変換地点に築造されていることや、蓋石の上に同じ角礫を大量に集石するなどの共通点が認められることから、当遺構も類似した構造の古墳と判断した。

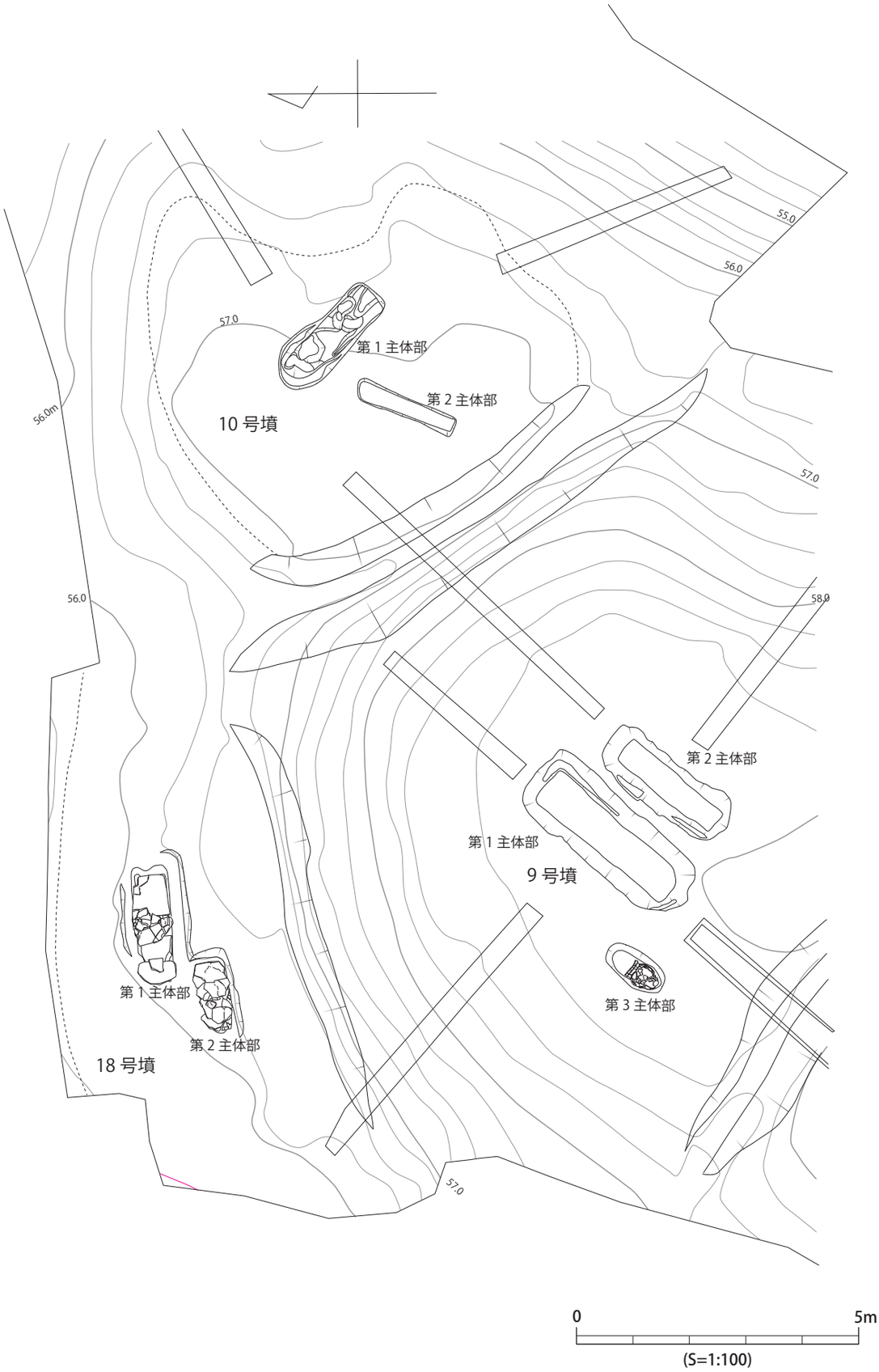
墓壙内から遺物は検出されなかったため、古墳の時期は不明である。

土坑ＳＫ０８・０９（第 102 図）

ＳＫ 08 は 8 号墳の墳頂部北隅で検出された焼土土坑である。平面形が不整な円形を呈し、規模は長さ 70cm、幅 67cm、深さ 24cm を測る。底面から側面にかけて被熱痕が広がり、覆土には炭や焼土ブロックが大量に含まれていた。

位置的に 8 号墳を築造する際に何らかの火を使う作業が行われた痕跡とも考えられたが、炭の AMS 年代測定では 7 世紀代の測定値が示されており、分析結果をみた限りでは古墳の年代とは合わない。また土壌分析も試みたが、顔料や朱は検出されなかった。

ＳＫ 09 は 9 号墳の東側墳裾部で検出された焼土土坑である。平面形は不整な台形状を呈し、規模は長さ 75cm、幅 93cm、深さ 18cm を測る。ＳＫ 08 と同様に底面から側面にかけて被熱痕がみられ、覆土に炭や焼土ブロックが大量に含まれていた。炭の AMS 年代測定では 5930 ± 20yr. BP との測定値が示されており、縄文時代前期頃に相当する。分析結果をみた限りでは古墳の年代とは合わないが、両土坑とも同規模で焼土面が広がることも共通しており、位置的に古墳と関連す

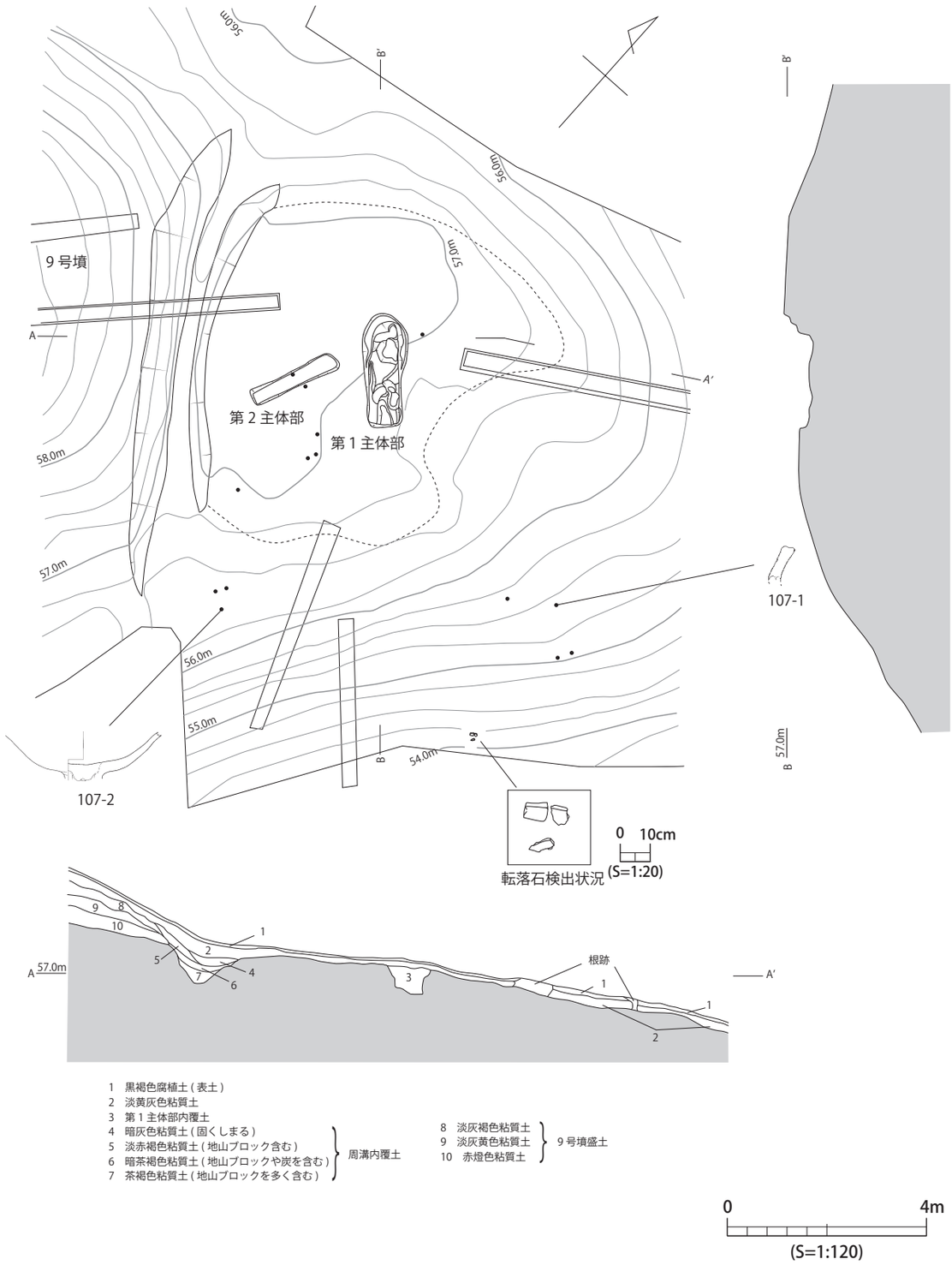


第 103 図　庵寺古墳群 9 号墳・10 号墳・18 号墳配置図

る遺構である可能性も排除できない。

C群の様相（第 103 図）

北側丘陵部の尾根筋は、前述した 9 号墳が存在する地点を結節点として、北東方向と北西方向の二股状に分かれて伸びている。両尾根とも地形的に 9 号墳から先は一段下がった様相を呈し、若干



第 104 図　庵寺古墳群 10 号墳墳丘測量図

の平坦面を形成する。その平坦面から２基の古墳（10 号・18 号墳）が検出されており、両古墳とも９号墳の墳丘を削って築造される特徴がある。

10 号墳（第 104 ～ 105 図）

立地状況　９号墳から北東方向に伸びる尾根に位置し、地形的には９号墳から階段状に一段下がった尾根上平坦面に立地する。標高は 57.0 ｍである。調査前から９号墳直下の区画溝が明瞭に認められ、墳丘の様子がうかがえる状況にあった。

墳丘規模と形態　古墳が立地する尾根幅は約７ｍと狭く、周辺は地形の流出が著しいとみられ、中央付近を刳り抜くように凹状に平坦面が残存する状況であった。墳丘の西側には区画溝が存在することから、溝から第１主体部を中心に折り返すと、墳丘規模は南北７ｍ×東西７ｍの方墳とみられる。また表土掘削後には地山や岩盤が露出する状況にあり、盛土の痕跡を確認することはできなかった。遺物は墳頂部から南側の急峻な斜面にかけて点在しており、斜面下方からは長さ 20cm ほどの角礫が３点まとまって検出された。或いは古墳の標石が転落したものである可能性も考えられる。

区画溝　墳丘の西側で検出され、９号墳の墳丘を削平して構築されている。尾根筋に直交してやや湾曲気味に伸びており、北側では屈曲する気配もみられる。逆台形状に掘り込まれ、長さ 10 ｍ、最大幅２ｍ、深さ 60cm を測る。覆土には地山ブロックを含む茶褐色系の粘質土が堆積していた。

主体部　墳丘中央付近で尾根筋に直交する第１主体部と、第１主体部と主軸の向きを違えた第２主体部の２基が検出された。

①第１主体部（第 105 図）　中心主体とみられる墓壙である。長軸はＢ群の古墳と異なり尾根筋に直交しており、主軸の向きはＮ－ 48°－Ｗである。

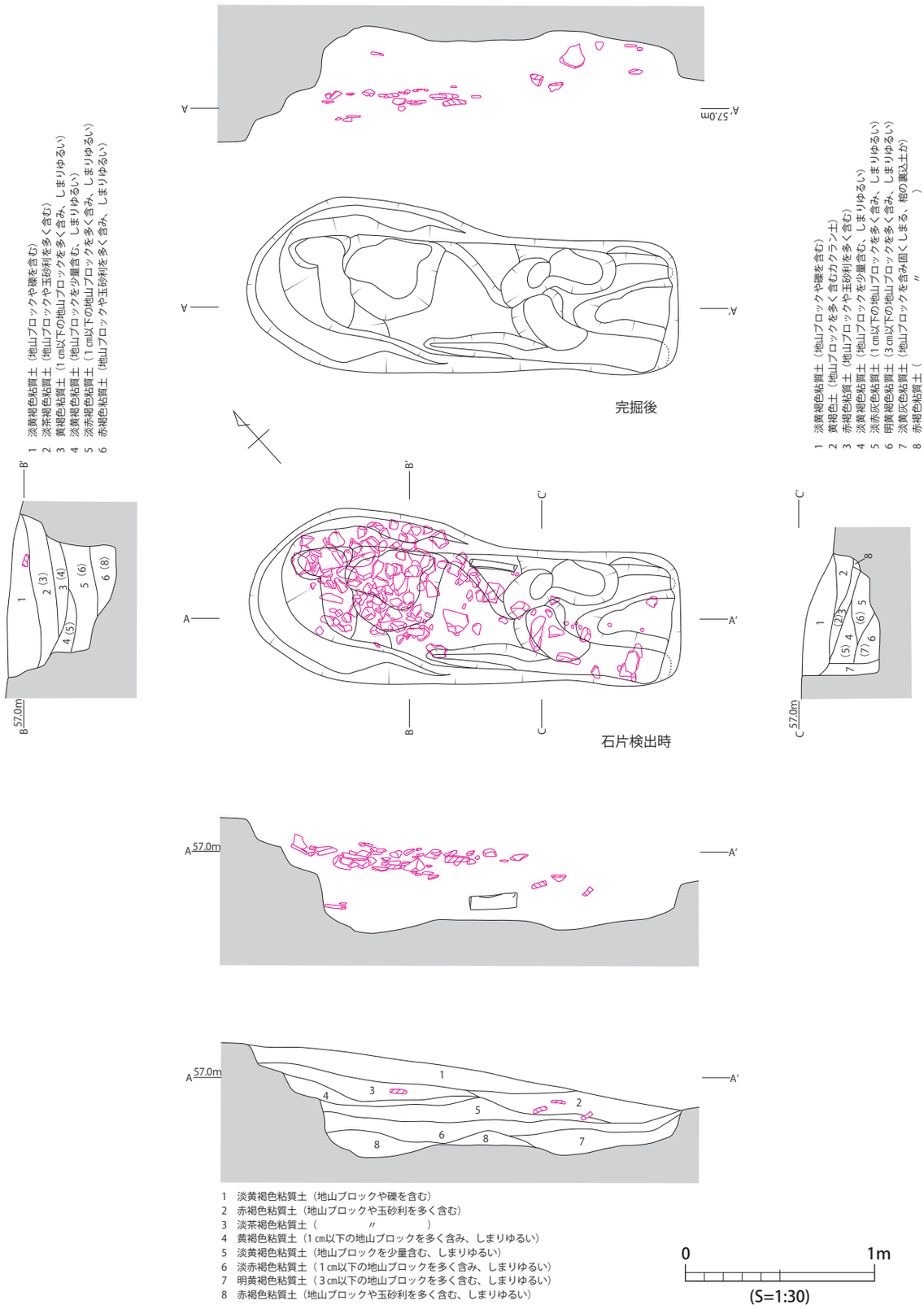
平面プランは不整な長方形状を呈するが、盗掘を受けているとみられ、北側が楕円形状に大きく改変されている。また掘り方も壁面が２～３段状に掘り込まれ、底面は不整形で特に北側が大きく窪み、南側も小さな掘り込みがいくつも重なり合っている。これらはいずれも盗掘時の掘削痕と考えられる。現状の掘り方の規模は 2.3 ｍ、最大幅 93cm、最大深さ 60cm を測るが、本来の掘り方は方形状で長さ約２ｍ、幅 70cm の規模だったと推測される。また上方は流出しているとみられ、墓壙が二段掘構造であったかは定かでない。

掘り始めた当初、墓壙上面から多数の凝灰岩製石材の破片が墓壙を覆うように検出され、特殊な埋葬行為によるものかと思われたが、状況からこれらは盗掘時に破壊された棺材が埋め戻されたものと考えられる。また覆土には凝灰岩質の玉砂利が多数含まれていた。このことから、墓壙内には凝灰岩製の板材を組み合わせた箱式石棺が納められ、棺内底面には礫が敷かれていた可能性が高い。これを示すように、底面の東壁沿いには原位置を保っているとみられる側板片が１枚残存しており、また西壁沿いや南側小口部には棺材を設置したとみられる溝跡も認められた。

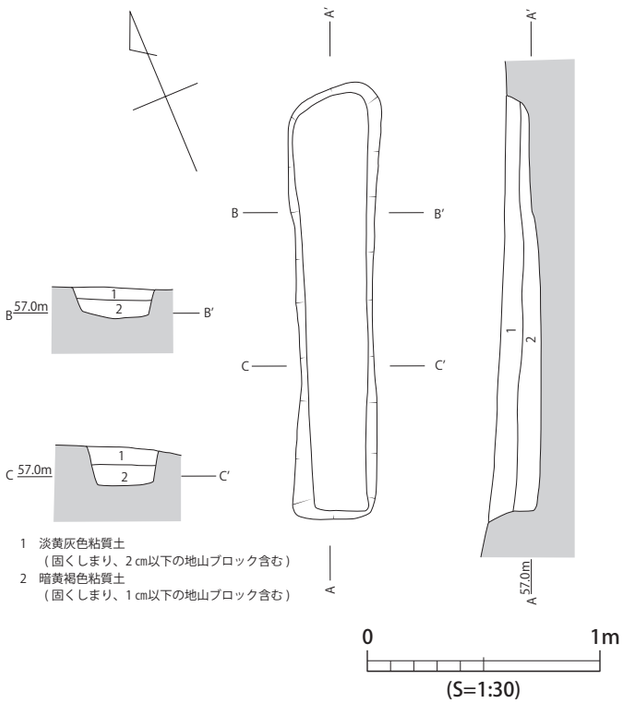
棺内の覆土はすべて水洗いを行ったが、遺物を検出することはできなかった。

②第２主体部（第 106 図）　第１主体部の西側に位置し、第１主体部とは長軸を 68°違えて直交するように配置される。主軸の向きはＮ－ 22°－Ｅである。

平面プランは細長い長方形状を呈し、北側の小口がやや斜行する。検出された掘り方は浅いが、断面は逆台形状に掘り込まれ、規模は上面で長さ 1.87 ｍ、幅 32 ～ 40cm、深さ 18cm を測り、床面で長さ 1.8 ｍ、幅 24 ～ 33cm を測る。南側から北側にかけて緩やかに広がっていることから、



第 105 図　庵寺古墳群 10 号墳第 1 主体部実測図



第 106 図　庵寺古墳群 10 号墳第２主体部実測図

北側が頭位と推測される。どのような埋葬施設があったかは、墓壙の上方が流出しており土層観察でも確認できなかった。しかしながら壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、床面もほぼ水平であることから、組み合わせ式の木棺が納められていた可能性が考えられる。

棺内や周辺から土器片が出土したが、細片であるため図化するには至っていない。

出土遺物（第 107 図）

周辺から出土した遺物は細片が多く、２点ほど図化することができた。１は土師器壺の口縁端部とみられる資料であるが、風化が著しく詳細は不明である。器壁は厚手で、口縁先端部に面をもち、凹線状の窪みがみられる。

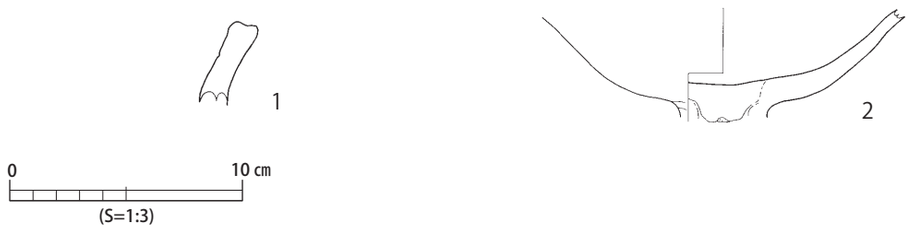
２は高坏である。口縁端部を欠くが、口縁は底部から緩やかに立ち上がり外反する。坏部底面には凸状の円盤が充填され、中心に軸痕がみられる。

遺物の時期について、高坏の特徴は松山Ⅱ期に相当するものであり、古墳の時期は古墳時代中期前葉に比定される。

18 号墳（第 108 ～ 110 図）

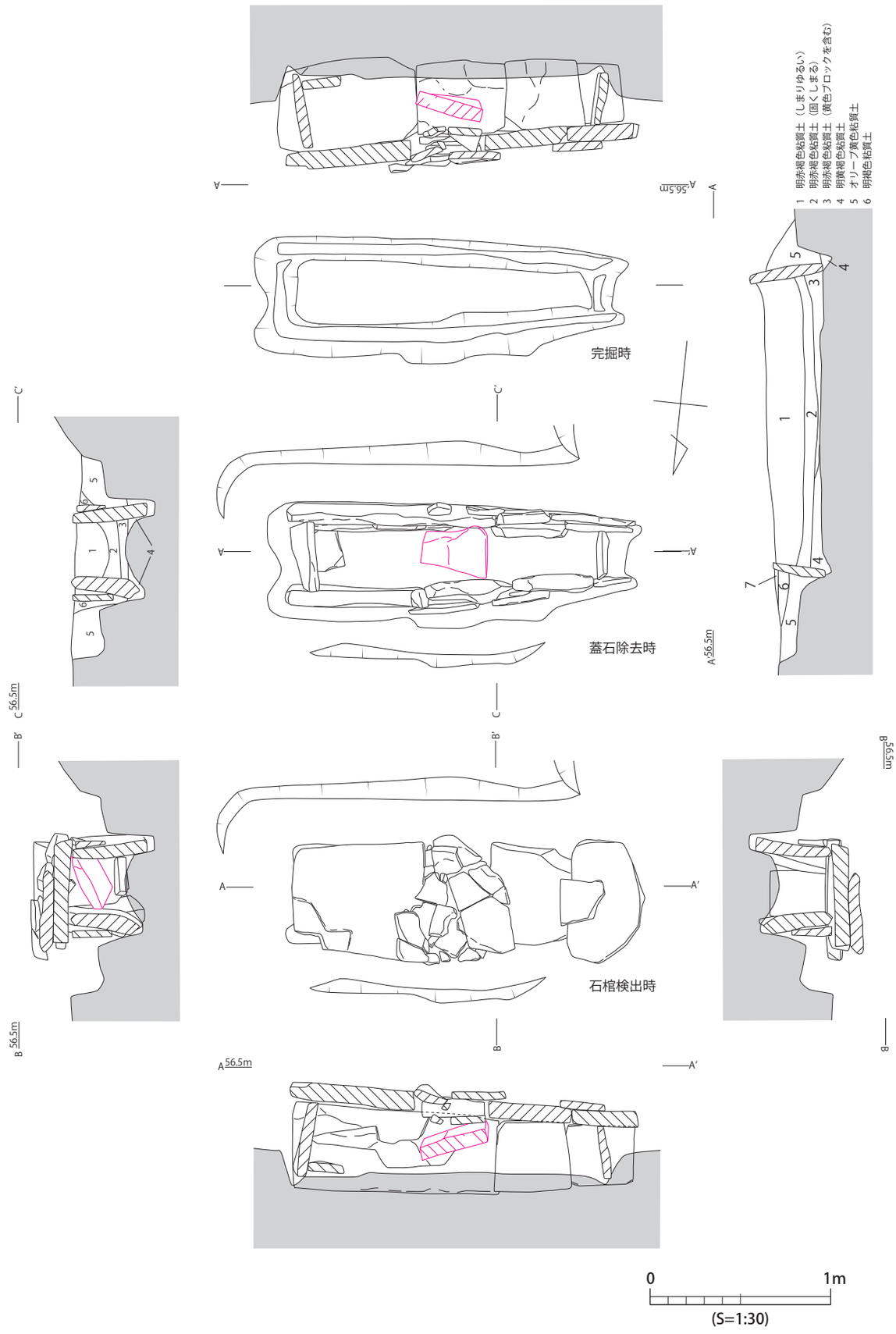
立地状況　９号墳から北西方向に伸びる尾根の付け根に位置し、地形的には９号墳から階段状に一段下がった尾根上平坦面に立地する。標高は 56.0 ｍである。９号墳に接して築造されているが、９号墳の北側斜面をＬ字状に加工して平坦面を構築しており、墳丘も一部削平しているものとみられる。

調査前の地形観察では９号墳の墳裾のような緩斜面が広がっていたが、９号墳の墳丘盛土観察のため断ち割ったサブトレンチを延長させたところ、下方で段状平坦面が認められた。このため調査区を拡張し、平坦面を精査した結果、２基の主体部を検出することができた。



第 107 図　庵寺古墳群 10 号墳出土遺物実測図

第 108 図　庵寺古墳群 18 号墳墳丘測量図



第 109 図　庵寺古墳群 18 号墳第 1 主体部実測図

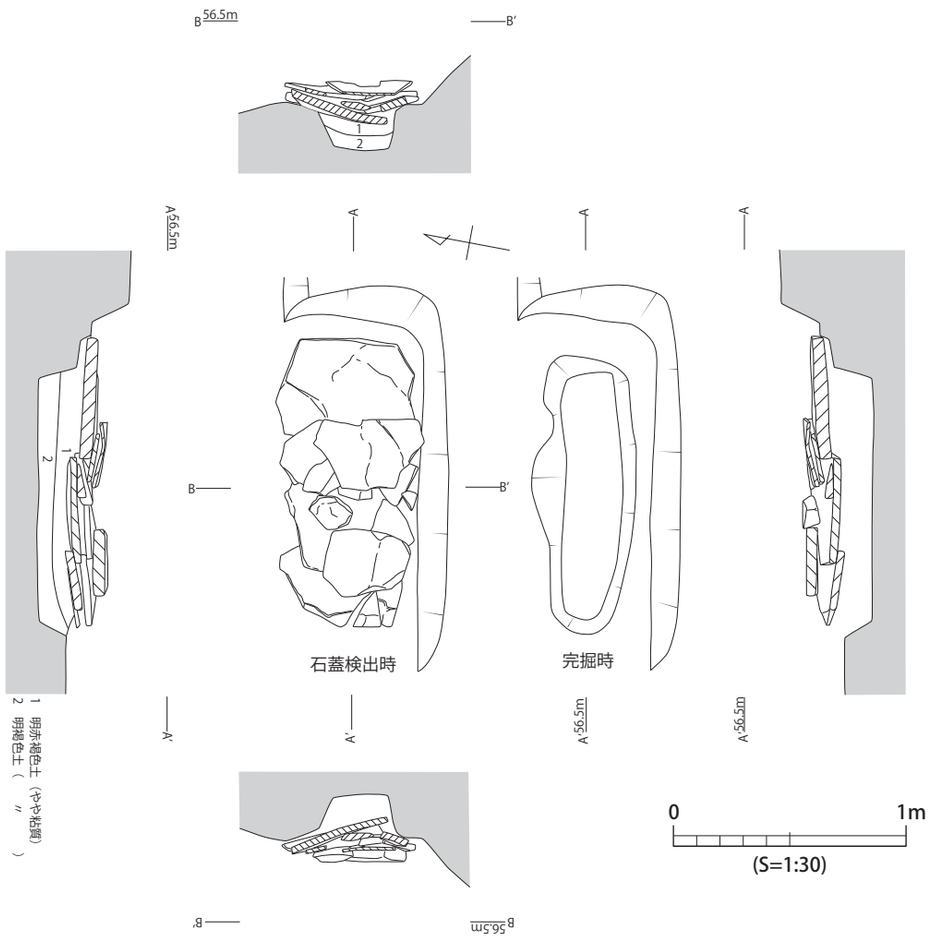
墳丘規模と形態　周辺は岩盤が露出する状況で、地形も流出が著しく墳丘状の高まりや盛土があった痕跡は確認できていない。斜面の掘り方は直線状を呈することから、平坦面の規格は方形とみられ、規模は長さ 7.5 m、幅 4.1 mを測る。

主体部　平坦部の中央付近で東西方向に長軸を合わせた主体部が２基並列して検出された。２基の主体部は墓壙がそれぞれ異なるが、前後関係を明らかにすることはできなかった。

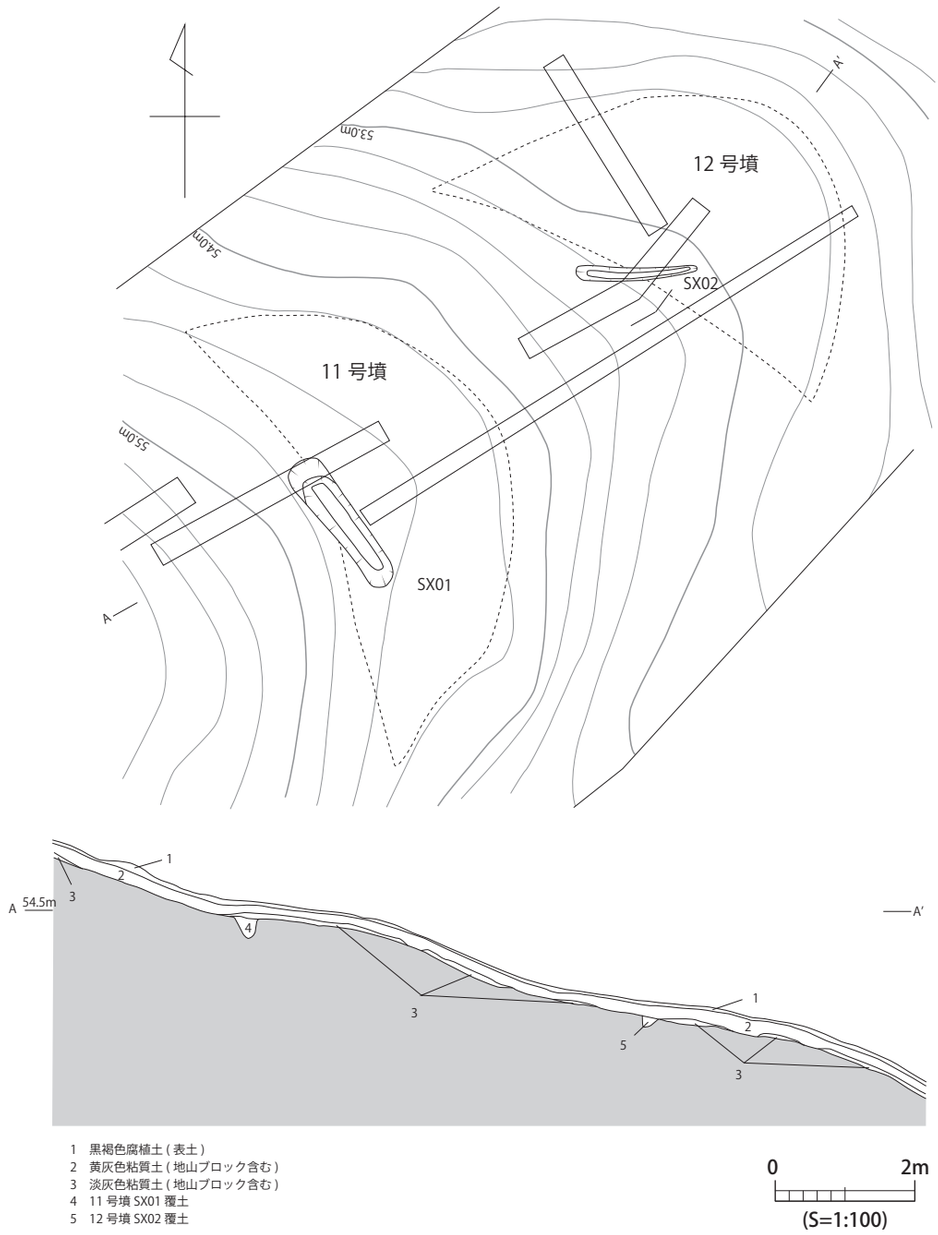
①第１主体部　壁面から北側に 1.7 m離れた位置で墓壙が検出された。墓壙は二段掘り構造で、平面プランは長方形を呈し、長軸を東西方向に合わせている。掘り方の北側は大きく流出しており、また西側は第２主体部と切り合っている。墓壙の規模は現状で長さ２m以上、幅 1.2 m、深さ 20cm を測る。二段目掘り方の規模は、長さ 2.08 m、深さ 10cm を測り、床面縁辺には石棺の側板や小口板をはめ込む溝が掘り込まれている。

箱式石棺　墓壙の二段目掘り方に、凝灰岩を板状に加工し組み合わせた箱式石棺が据えられていた。石棺の主軸はＮ－ 83°－Ｅである。規模は蓋石の長さ 1.98 m、最大幅 70cm、棺内の長さ 1.62m、幅 30 ～ 35cm、床面から蓋石までの高さは 28 ～ 35cm を測る。床面は東側が幅広く、頭位だったと考えられる。

棺の構造は側板で小口板を挟むＨ型で、蓋石は４枚の厚手の板石が使用されるが、頭位の石が長さ 72cm、幅 68cm と最も大きく、２枚目の蓋石は棺内に落ち込んだ状態で検出された。また蓋石の繋ぎ目にも小型の板材が配置され、特に２枚目の蓋石の周囲に多数の板材が積み上げられている。



第 110 図　庵寺古墳群 18 号墳第２主体部実測図



第 111 図　庵寺古墳群 11 号墳・12 号墳配置図

側板は北側に 4 枚、南側に 3 枚の板材を溝にはめ込んで設置される。頭位側のものほど大きい板材が使用され、特に北側の頭位付近の板材は長さ 115cm、幅 45cm を測る大型のものである。

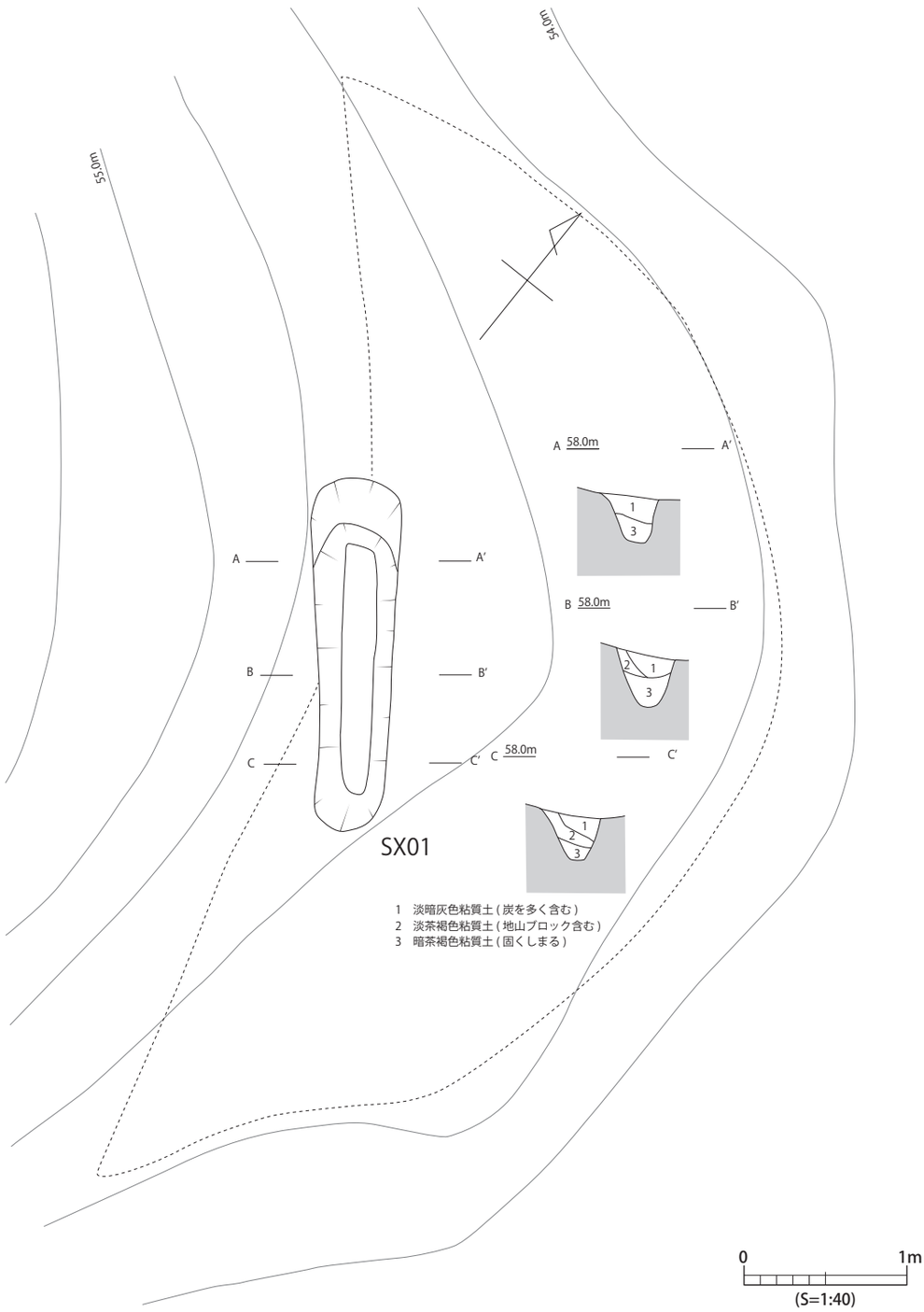
床面には板材や礫敷きは認められず、東側小口付近に石枕状の扁平な板材が設置されていた。また棺内から遺物は検出されなかった。

②第 2 主体部(第 110 図)　第 1 主体部の南西側で検出された。壁面からは北側 1.2m の距離にある。墓壙が第 1 主体部と切り合っており、前後関係は不明瞭だが、状況から第 1 主体部の墓壙を拡張するようにして構築されたように見受けられる。

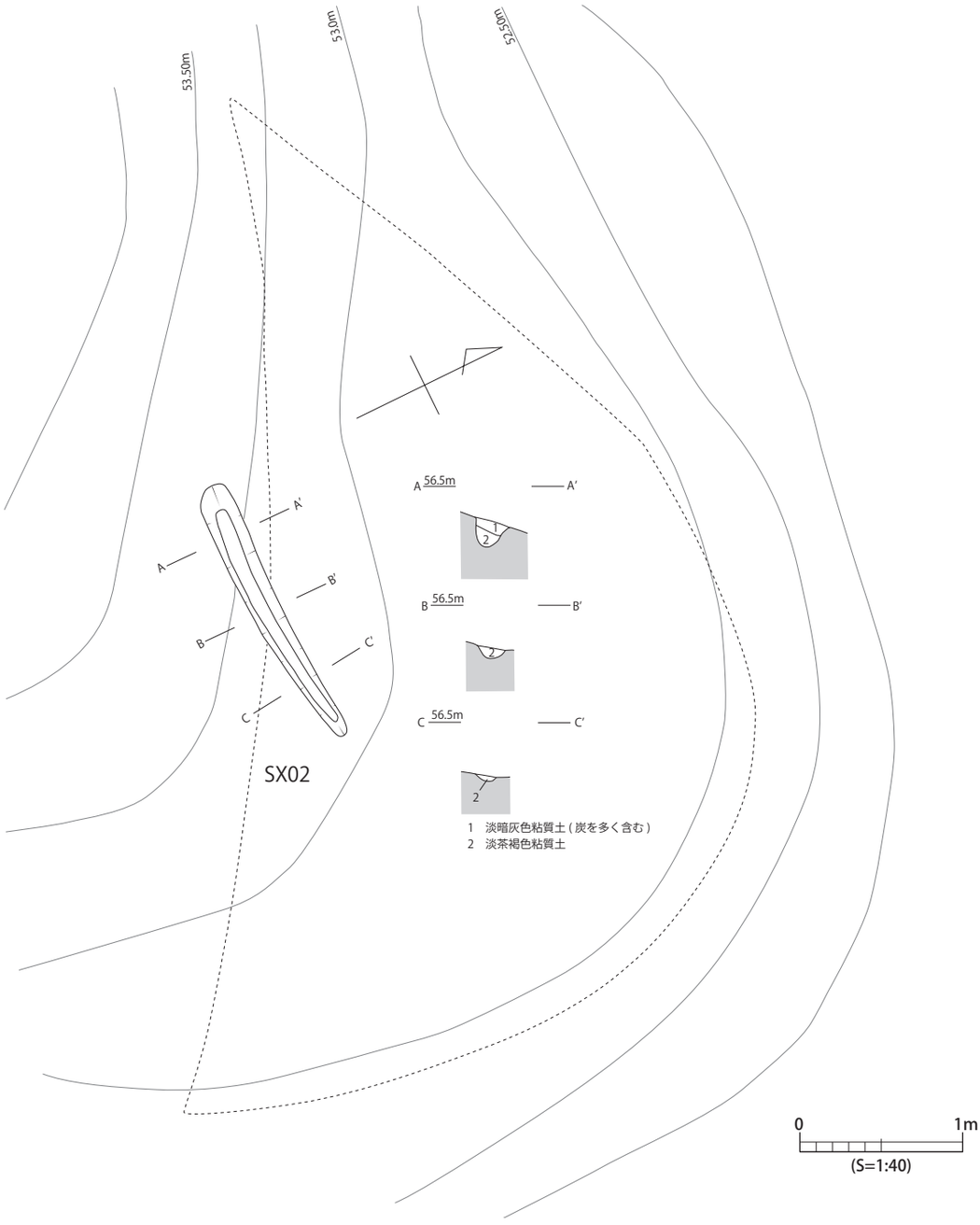
墓壙は二段掘り構造で、凝灰岩製の蓋石が検出されたことから箱式石棺と思われたが、石蓋土壙であった。墓壙の平面プランは長方形を呈し、長軸を東西方向に合わせている。掘り方の規模は推

定で長さ 1.7 m以上、幅 80cm、深さ 25cm を測る。

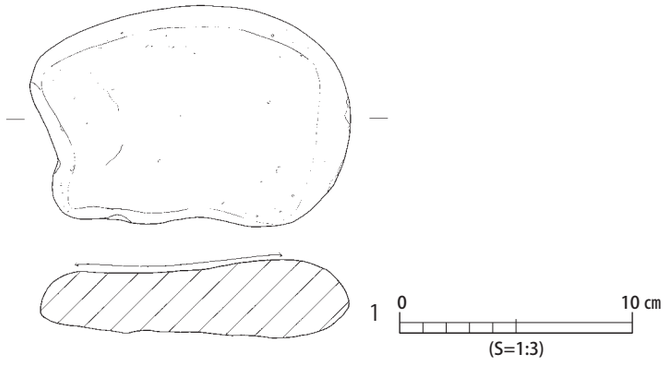
二段目掘り方は、平面形が不整な長方形を呈し、規模は長さ 1.2m、幅 46cm、深さ 20cm、床面は長さ 1.06m、幅 20 ～ 24cm を測る。東側が幅広く、頭位だったことがうかがえる。二段目掘り方の上方は凝灰岩を板状に加工した蓋石によって覆われ、最大のものは長さ 50cm、幅 60cm を測り石棺で使用されるものと大差ない。また蓋石の上方にも板状石材が多数重ねられていた。蓋石の主軸はＮ－ 78°－Ｅである。墓壙から遺物は検出されなかった。



第 112 図　庵寺古墳群 11 号墳 SX01 実測図



第 113 図　庵寺古墳群 12 号墳 SX02 実測図



第 114 図　庵寺古墳群 12 号墳出土遺物実測図

D群の様相（第 111 図）

10 号墳から尾根筋下方の斜面に立地する古墳である。周辺は緩やかな傾斜面が広がるが、平坦面が２箇所で認められ（11 号・12 号墳）、それぞれ土坑状の掘り込みが検出されたことから古墳と判断した。

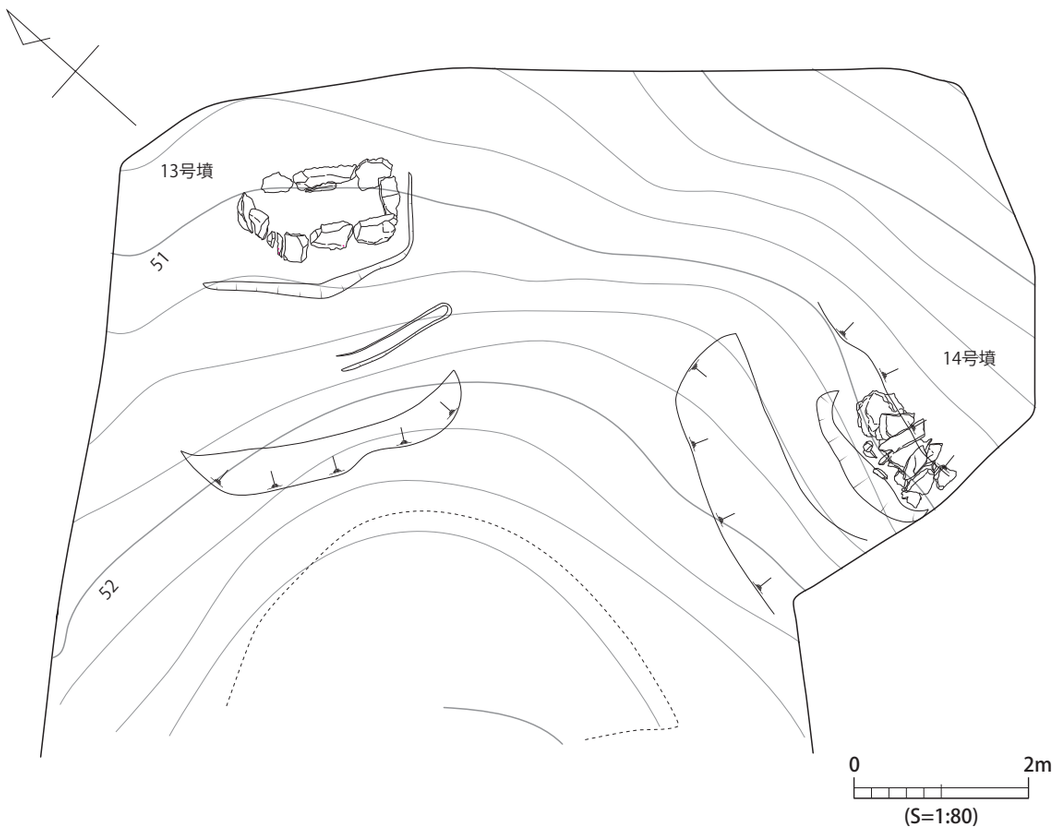
11 号墳（第 112 図）

立地状況　10 号墳から尾根筋に下方８mに位置する。尾根筋の幅は 9.5m と狭いが、郭状の平坦面が検出された。標高は 54.5m である。

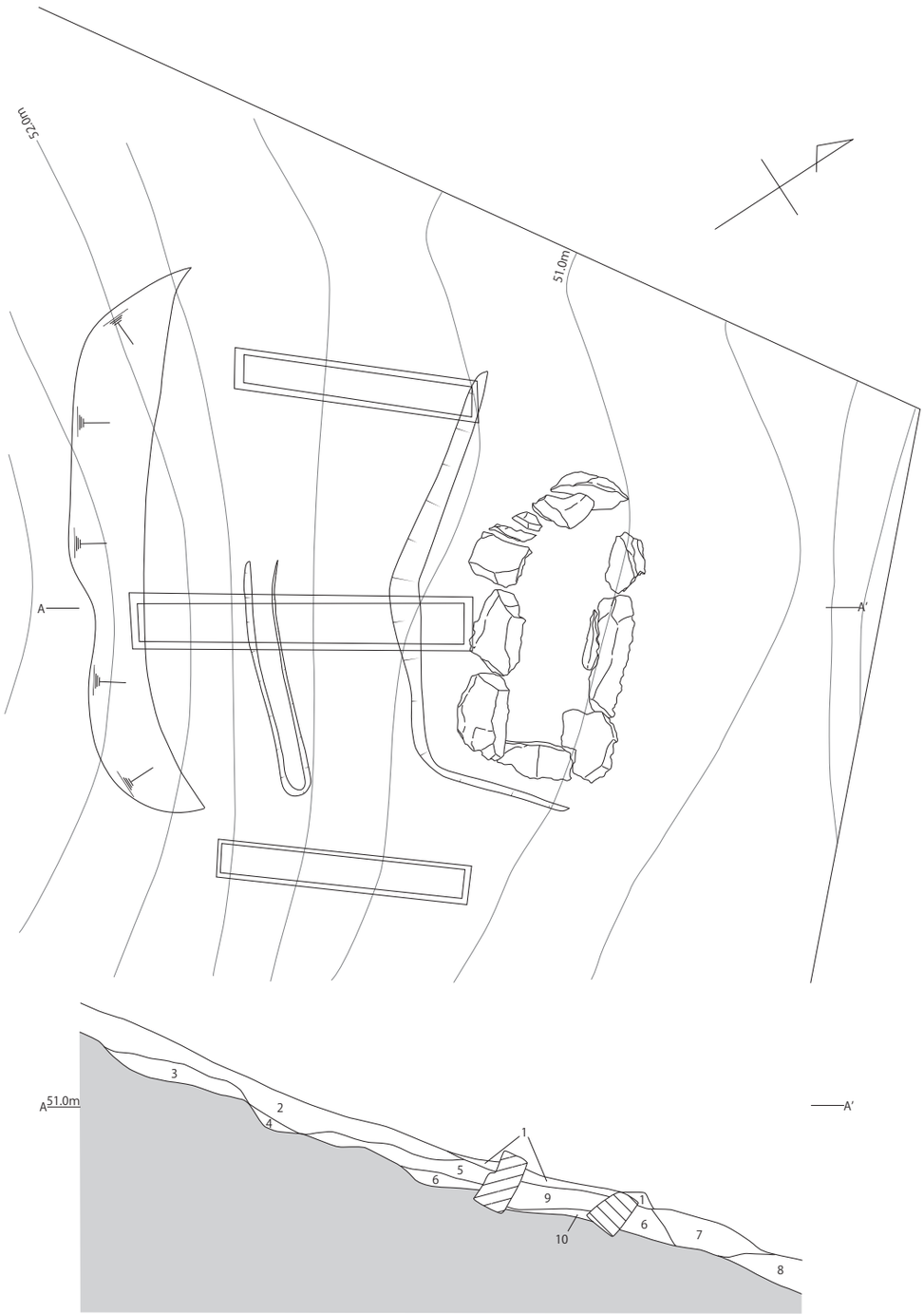
規模と形態　地形はかなり流出しているものと思われるが、平坦面は尾根筋に沿って三日月状に広がっており、規模は南北方向に７m、東西方向に３mを測る。平坦面中央付近の西側で土坑状の掘り込みが検出された。

ＳＸ０１　土坑状の掘り込みをＳＸ 01 とした。尾根筋に直交して配置され、主軸の向きはＮ－37°－Ｗである。平面形は細長い長方形状を呈し、北側の幅が広がっている。規模は長さ 2.15 m、幅 42 ～ 56cm、深さ 30cm を測る。断面は底面に向かってすぼまる形状で、覆土には茶褐色系粘質土が堆積する。この土坑の性格であるが、他の古墳の主体部とは規模や構造が明らかに異なっており、墓壙とするには躊躇する感もあるが、位置的に丘陵裾部につくられた土壙墓と考えられる。

坑内からや平坦面から遺物は出土していない。



第 115 図　庵寺古墳群 13 号墳・14 号墳配置図



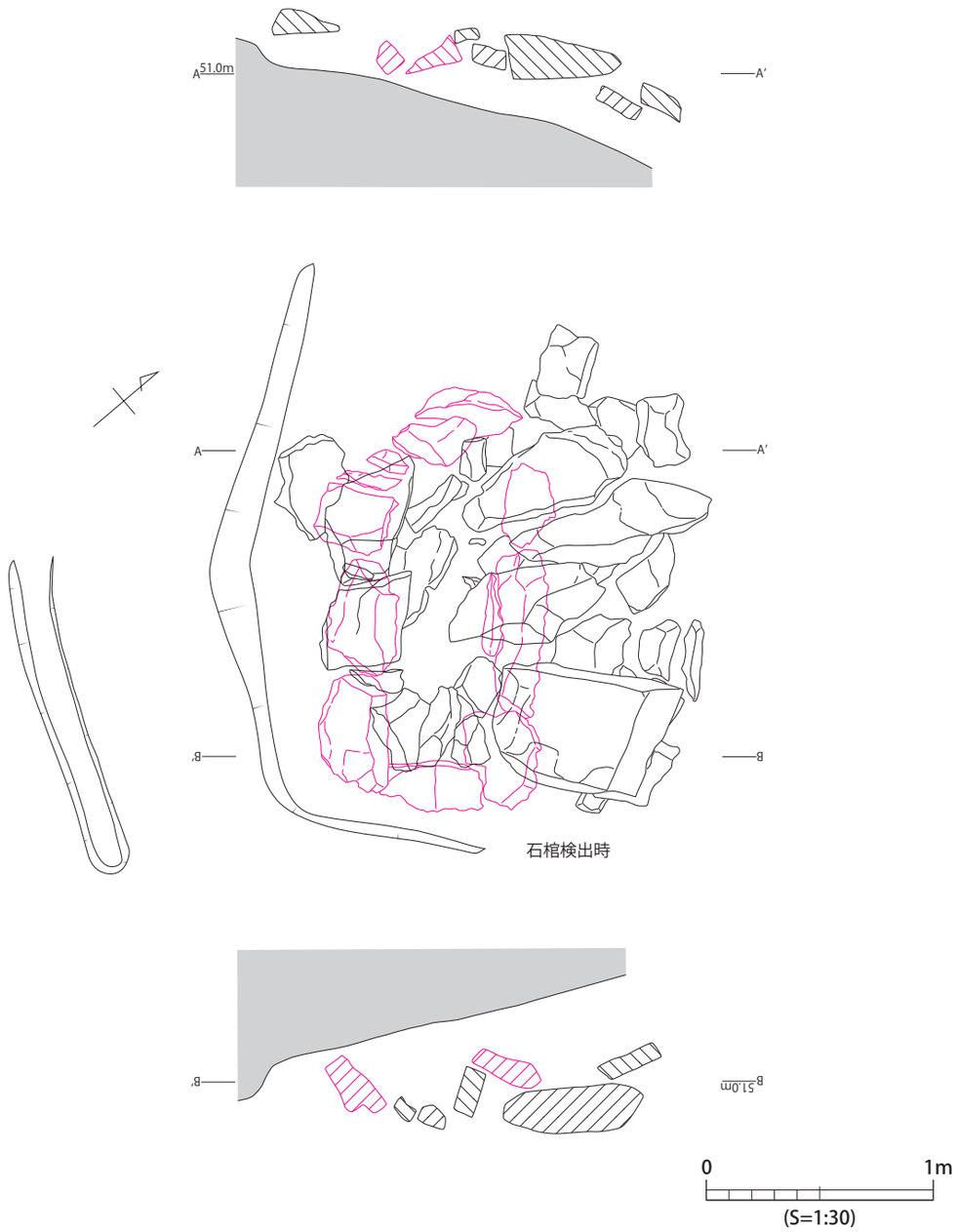
第 116 図　庵寺古墳群 13 号墳周辺地形測量図

12 号墳（第 113 図）

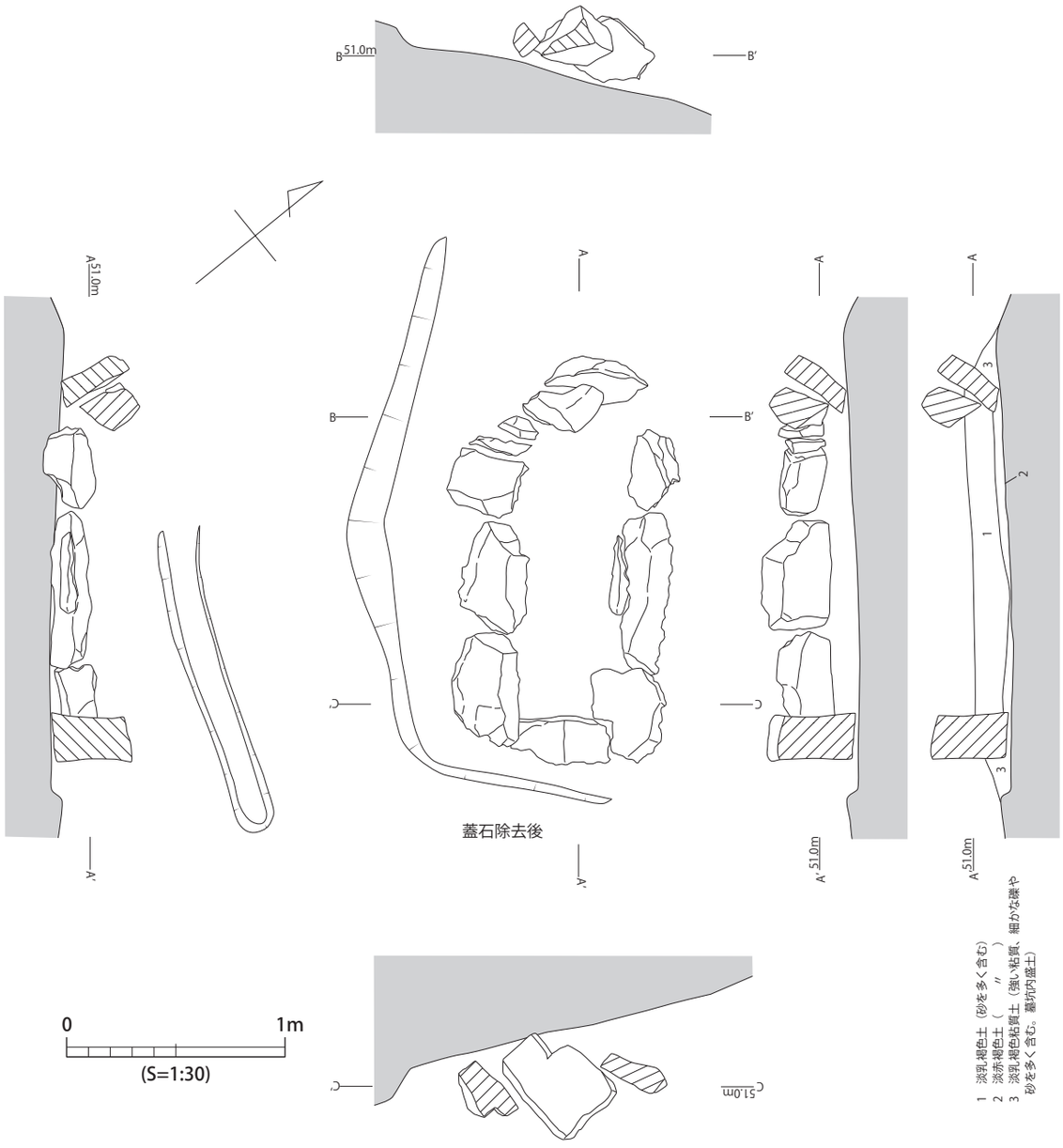
立地状況　11 号墳から尾根筋下方 2.5 mに位置する。11 号墳と同様に郭状の平坦面が検出された。標高は 53m である。

規模と形態　地形はかなり流出しているものと思われるが、平坦面は尾根筋に沿って半円形状に広がっており、規模は南北方向に 4.5 m、東西方向に 9 mを測る。平坦面中央付近の南側で溝状の掘り込みが検出された。

ＳＸ０２　溝状の掘り込みをＳＸ 02 とした。東西方向に平行して伸びており、主軸はＷ－３°－Ｓを指向する。検出された掘り方は湾曲気味に伸びる細長い溝状を呈し、規模は長さ 1.72 m、幅 12 ～ 22cm、深さ 20cm を測る。この遺構の性格であるが、平坦面の規模や形状はＳＸ 01 に類



第 117 図　庵寺古墳群 13 号墳石棺実測図 (1)

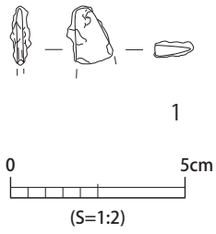


第 118 図　庵寺古墳群 13 号墳石棺実測図 (2)

似しており、また掘り方の位置も同様なことから、土壙墓の痕跡と考えられる。

出土遺物（第 114 図）

平坦面から磨石が 1 点出土した。表面に磨面が認められ、湾曲している。長さ 9.4cm、幅 13.6cm を測る。



第 119 図　庵寺古墳群 13 号墳出土遺物実測図

E 群の様相（第 115 図）

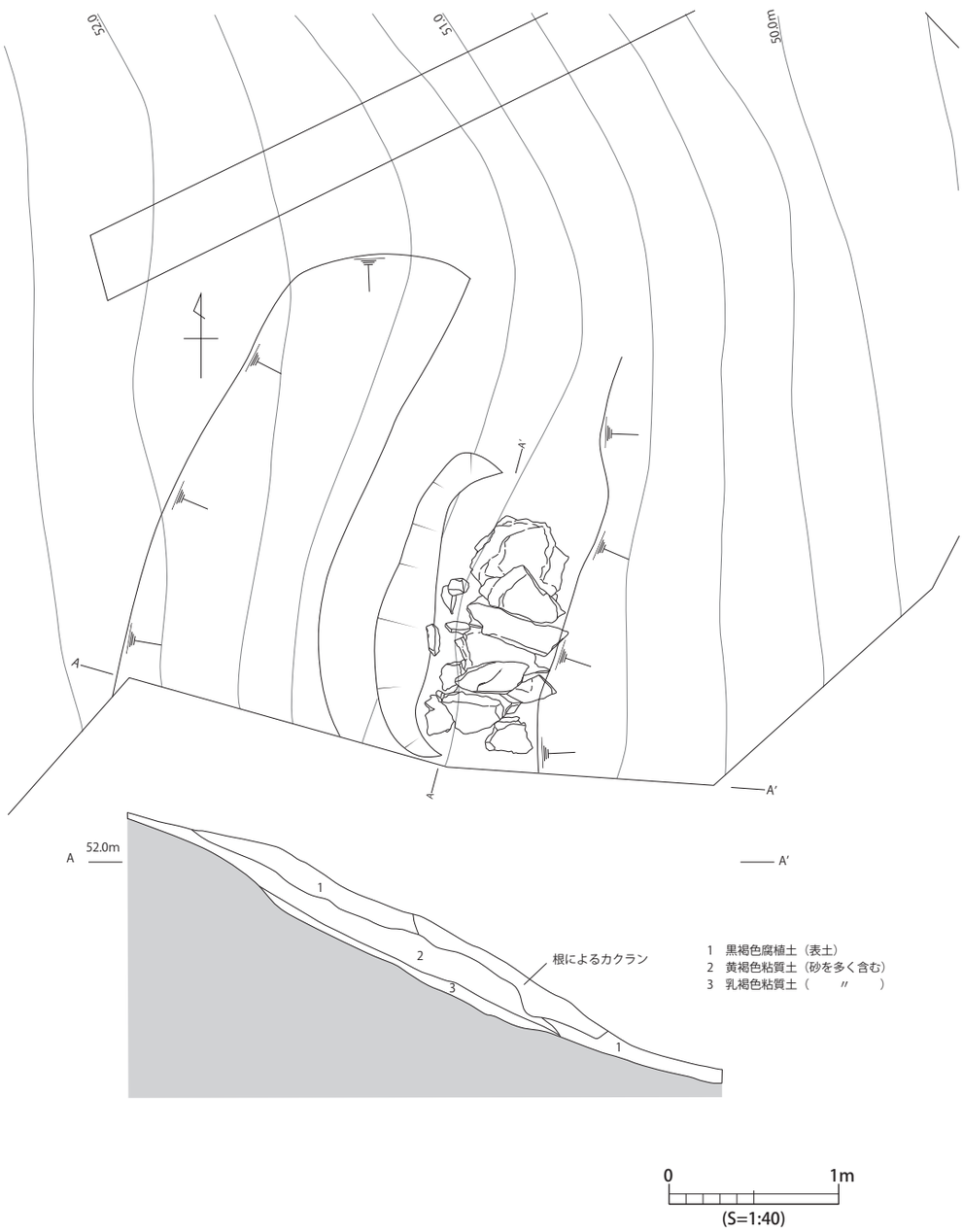
尾根筋の先端部に位置する古墳である（13 号・14 号）。調査区の際で検出され、調査区外は地形の崩落により断崖絶壁になって

おり、これ以上調査範囲を広げることはできなかったが石棺を２基検出した。

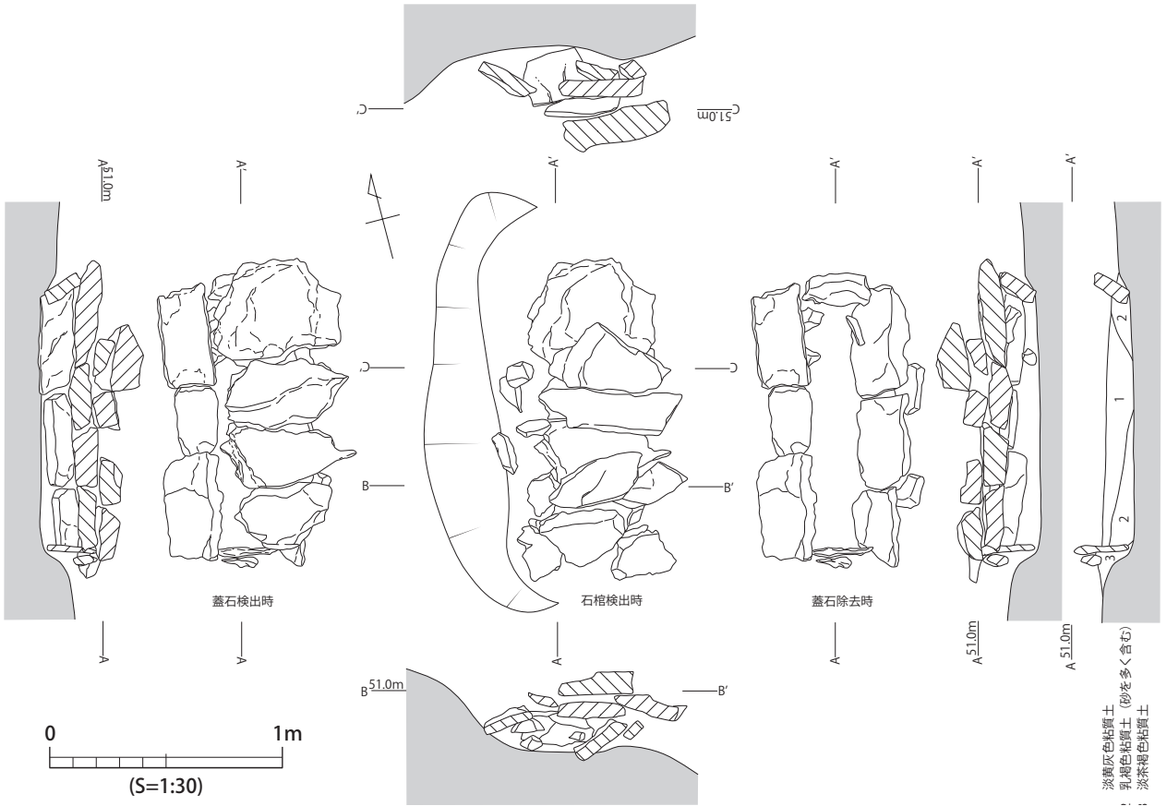
13 号墳（第 116 ～ 118 図）

立地状況　前述したように尾根筋先端部の急斜面に立地する。標高は 51 ～ 52m である。急斜面が調査区境の手前で若干緩やかな傾斜となり、その緩斜面で大型瓦礫の集石が調査前から認められていた。

規模と形態　集石の中心に土層観察ベルトを残し周辺を掘削したところ、斜面南側は自然崩落による崖面が認められたが、地形が緩やかになる変換点付近で斜面に直交する溝状遺構が検出され、さらに集石の周囲からは墓壙状の落ち込みを確認することができた。溝状遺構は西側が途切れているが、長さ 1.45 m、幅 20cm、深さ 6cm を測る。弧を描くように伸びていることから、本来は墓壙



第 120 図　庵寺古墳群 14 号墳周辺地形測量図



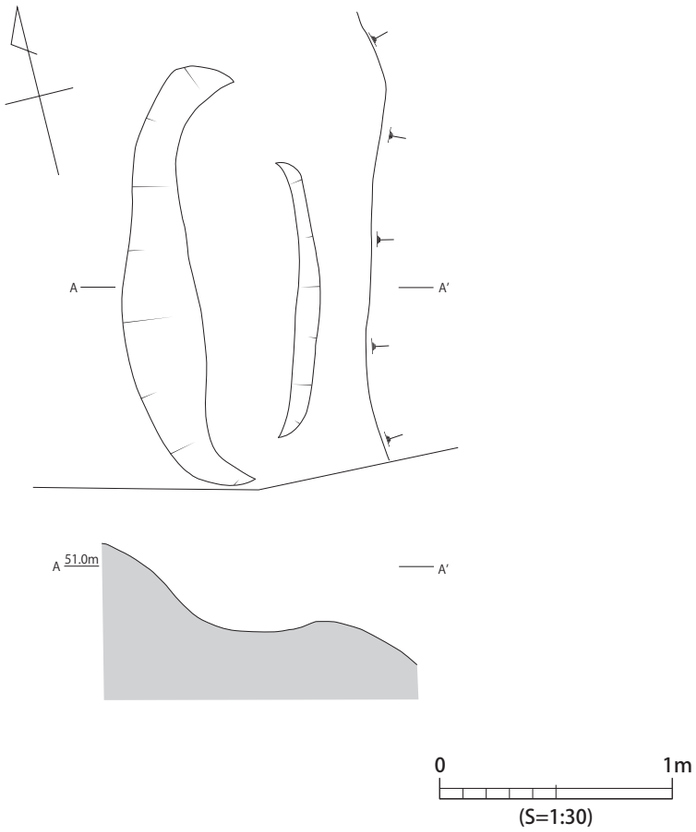
第 121 図　庵寺古墳群 14 号墳石棺実測図

の外周を巡るように掘り込まれたと考えられる。墓壙も北側が流出しているが、尾根筋に直交して長方形状に掘り込まれており、規模は現状で長さ 2.4m、幅 1.5m、深さ 15cm を測る。また墓壙の周囲には盛土とみられる乳褐色系の粘質土が水平に堆積しており、かつては盛土に覆われた墳丘が存在したと推測される。

箱式石棺　墓壙内には大型の角礫を使用した箱式石棺が設置されていた。石棺は流紋岩製の割石が大量に用いられており [(14)]、検出当初は石を積み上げた集石遺構かと思われた。しかしながら浮いている石を解体しながら精査したところ、集石と思われたものは石棺の蓋石が崖方向に崩れたものであることが判明した。さらにその下からは、方形状に組まれた小口石と側壁がいずれも崖方向に倒れた状態で検出された。石棺の主軸はＮ－ 50°－Ｗを指向している。

蓋石には非常に大型の石が用いられており、最大で長さ 55cm、幅 80cm、厚さ 20cm の割石もみられる。また蓋に使われたもの以上の数の石も多量にみられることから、多くは蓋石の上に積み上げられていたと考えられる。最終的には検出された石棺の規模は、内寸で長さ 1.4m、幅 55cm を測る。

築造状況　以上の状況から古墳の築造状況の復元を大胆に試みると、まず石棺を設置するため、斜面の傾斜変換地点を選んで地山面を平坦に成形する。続いて平坦面に墓壙を掘り込み、石棺の側板や小口を据え置き、盛土を充填しながら石棺を構築する。最終的に盛土を重ねて石棺を埋納、円形状の墳丘を造成し南側の際に周溝を掘る、という築造過程が推測される。



第 122 図　庵寺古墳群 14 号墳主体部完掘状況

出土遺物（第 119 図）

棺内堆積土をすべて水洗いした結果、刀子の切先片が検出された。現状で長さ 1.6cm、幅 1.1cm を測る。

古墳の性格と時期　遺物から古墳の時期を特定するのは難しいが、このようにいわゆる山寄せに墳丘を構えた古墳は出雲部でもいくつか類例があり、割石で構築した箱式石棺を埋納する点で共通している [(15)]。これらは古墳時代終末期の単葬墓の一種と考えられており、13 号墳もこれに関連するものと考えられる。

14 号墳（第 120 ～ 122 図）

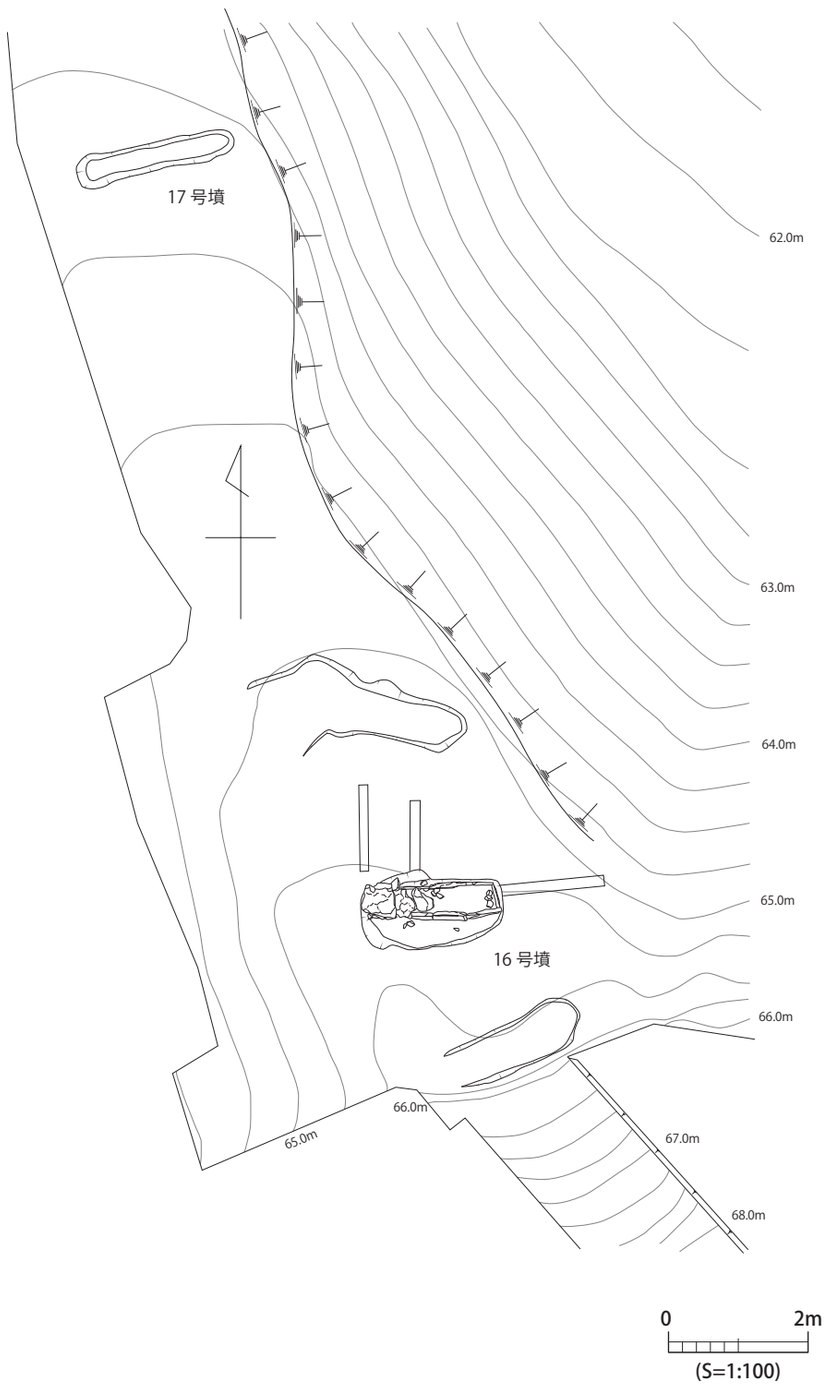
立地状況　13 号墳から斜面沿いに南側に約 5 m離れた位置に立地する。標高は 51 mである。13 号墳と同様に、崖面と緩斜面との傾斜変換地点に立地し、積み上げられた石棺が確認された。石棺の東側は崩落により地形が流出している。

規模と形態　崖面の際に若干の平坦面が広がっており、楕円形状の墓壙が南北方向に掘り込まれ、内部に小型の箱式石棺が納められていた。墓壙は楕円形状を呈し、東側が流出しているが規模は長さ 1.84 m、幅 86cm、深さ 30cm を測る。

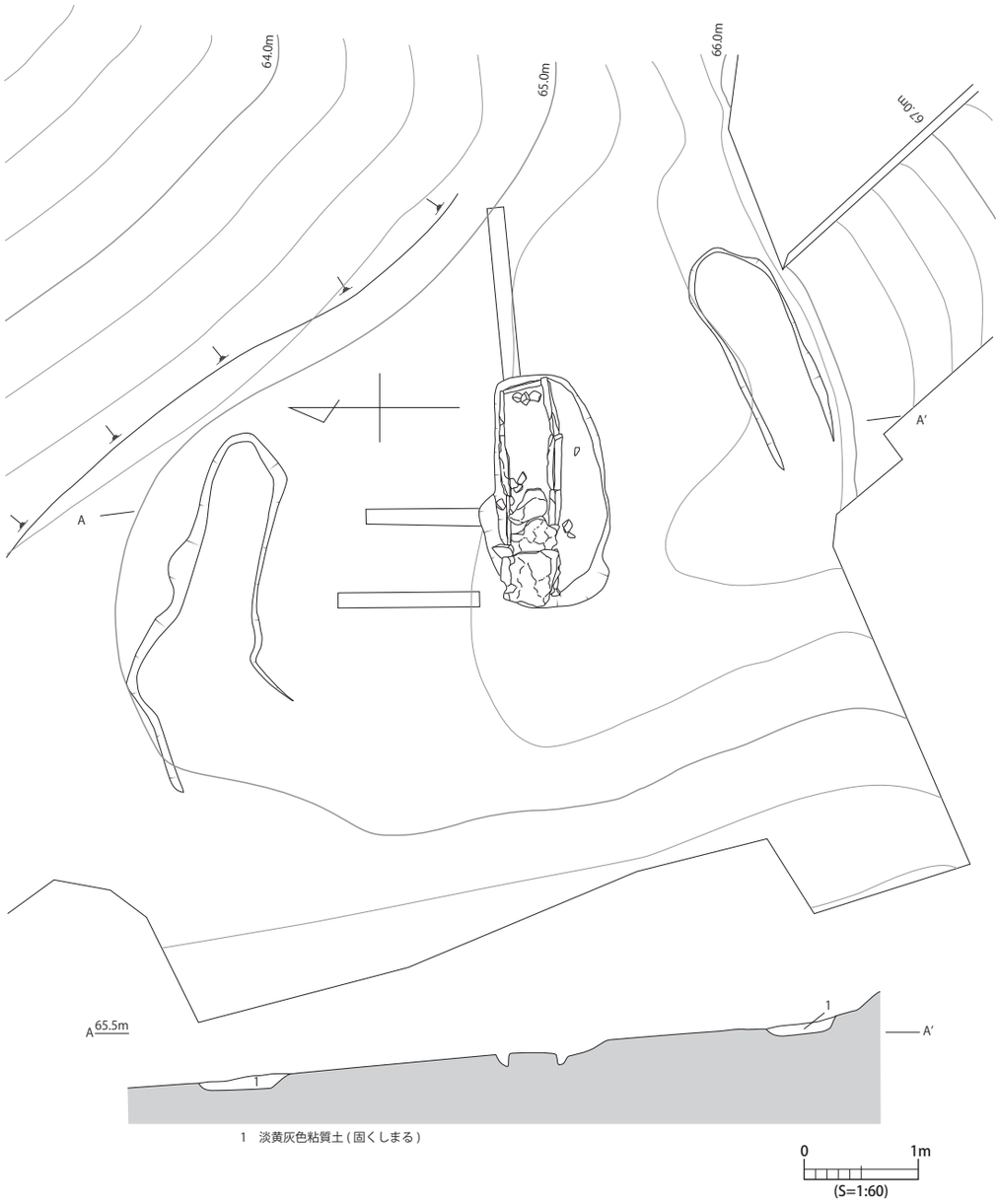
箱式石棺　流紋岩質の割石を組み合わせた石棺で、主軸はＮ－ 14°－Ｅを向く。蓋石の長さは 133cm、幅は最大で 56cmを測る。北側の石が最も大きく、北側が頭位であったことをうかがわせる。

また蓋石の上にも割石が多数積み上げられているが、このように蓋石の上に石を多数積み上げることが、当古墳群の割石を用いた箱式石棺の共通の特徴といえる。蓋石を除去すると側板が東側に倒れた状態で検出された。側板には薄く成形された板材が両側に３枚ずつ用いられているが、床面に溝を掘り側板や小口板を設置した様子はうかがえないことから、側板や小口板を直接立てて石棺を構築したものと思われる。

棺内堆積土の水洗いを行ったが、遺物は検出されなかった。これらの特徴から、規模は異なるが13 号墳と同様に山寄せの単葬墓の一種とみられ、同じように割石の蓋石が検出されたＢ群の 19



第 123 図　庵寺古墳群 16 号墳・17 号墳配置図



第 124 図　庵寺古墳群 16 号墳墳丘測量図

号墳も同様の性格をもつものと推測される。

3．西側丘陵部の調査

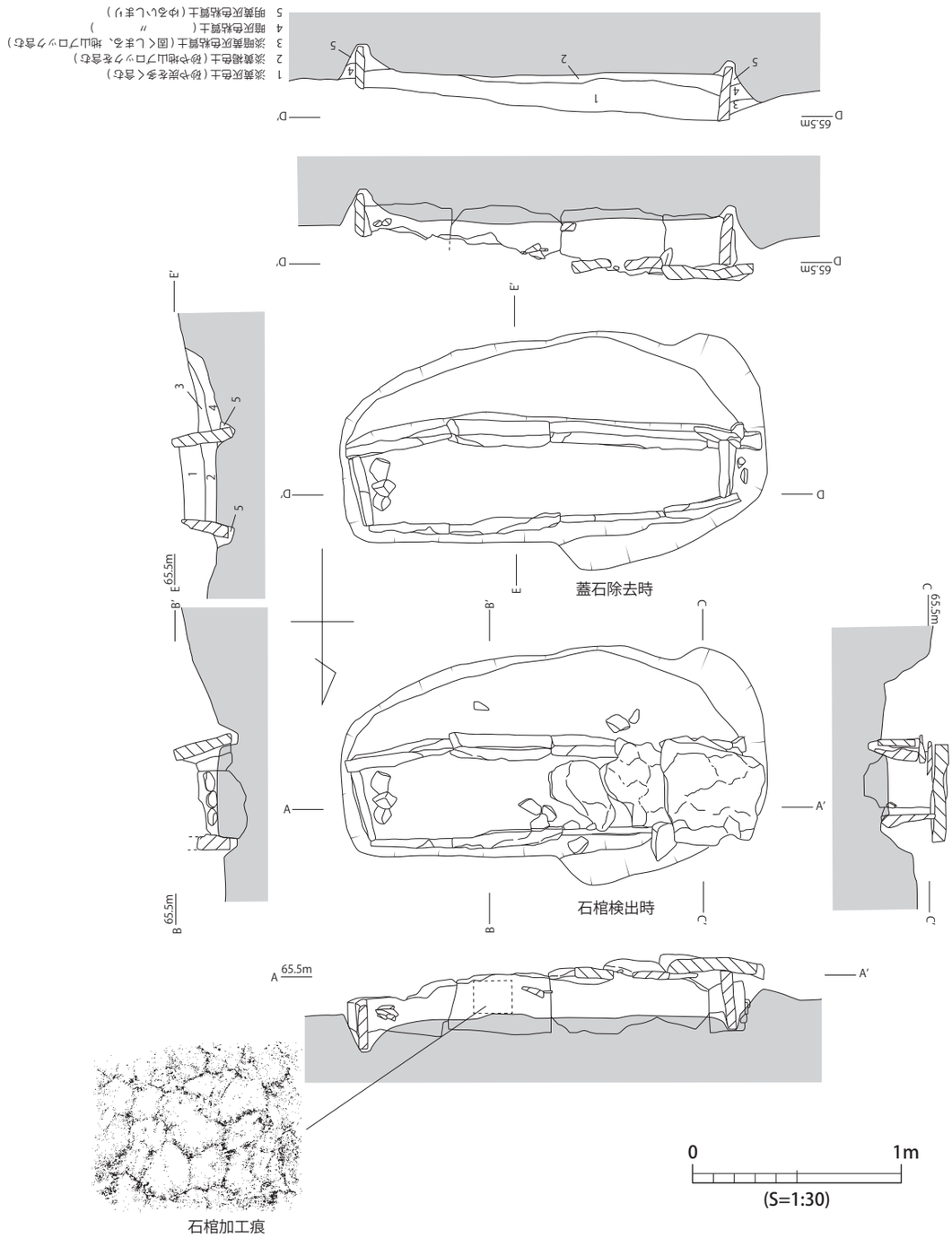
1 A号墳が立地する北側丘陵部の尾根頂部を結節点とし、そこから南西側に向かって延びる丘陵を西側丘陵部とした。南側丘陵部へと繋がる馬蹄形尾根筋の要となる位置であり、谷部の背後に控える丘陵である。尾根筋は長さ約 20 m、幅約 4 mと細長い平坦面が南方に向かって伸びており、尾根筋の西側斜面は崩落により断崖絶壁となっている。南側に向かって高くなっており、最高所の標高は 65 mで、これは 1 A号墳の標高とほぼ同じである。

Ｆ群の様相（第 123 図）

この痩せた尾根筋から古墳が２基並列して検出された（16 号・17 号墳）。これをＦ群として概要を追う。

16 号墳（第 124 ～ 126 図）

立地状況　尾根筋の南側最頂部に位置する古墳で、標高は 65 ～ 66 ｍである。尾根筋南端には丘陵斜面が崖面のように存在しており、古墳は南側丘陵部の斜面際に接して築造されている。この尾根筋は、調査前の地形観察では墳丘上の高まりが認められず、古墳が立地することを想定していな



第 125 図　庵寺古墳群 16 号墳石棺実測図

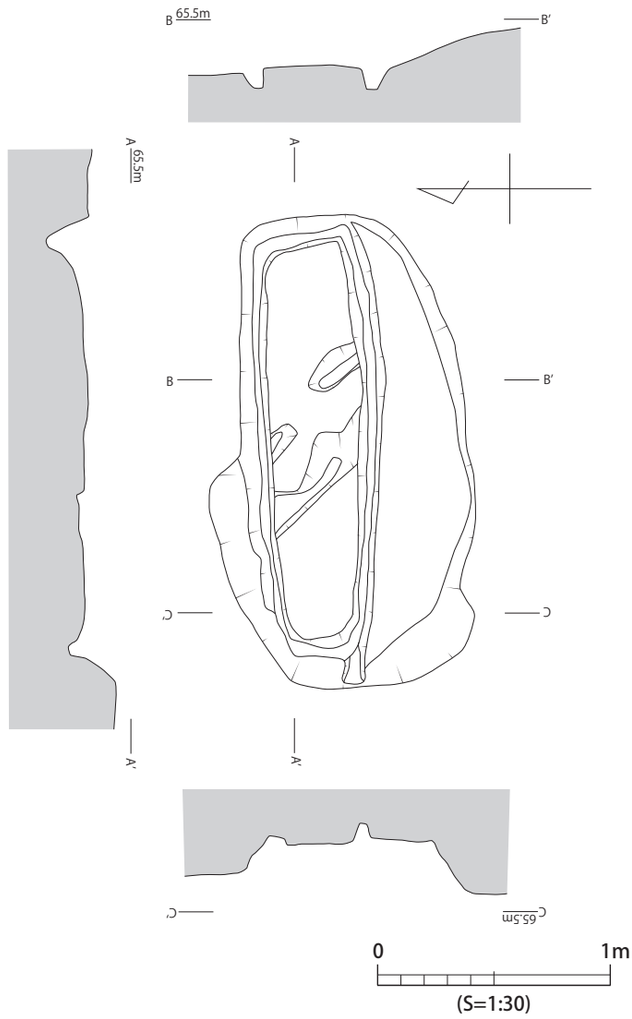
かったが、表土掘削中に石棺の蓋石が検出され、古墳が存在することを認識した。

墳丘規模と形態　古墳が立地する尾根上平坦面の幅は約７ｍと狭い。周辺は斜面側の流出が著しいとみられるが、主体部の南北側に周溝が検出されたことから、墳丘規模は概ね南北４ｍ×東西４ｍの方墳とみられる。また表土掘削後には地山や岩盤が露出する状況にあり、盛土の痕跡を確認することはできなかった。

周溝　墳丘の南北側で検出された。北側のものは東西方向に沿って掘り込まれ、西側が「く」の字に屈曲して伸びる様相を呈する。長さ 3.2 m、幅 70 ～ 1.2 m、深さ 12cm を測る。

南側のものは南側丘陵の斜面際に沿って掘り込まれ、長さ２ｍ、幅 70cm、深さ 10cm を測る。

主体部　墳丘中央付近で尾根筋に直交する墓壙が検出された。上方は流出しているが、平面プランは不整な楕円形状を呈する。長軸を東西方向に合わせており、主軸はＥ－８°－Ｎである。規模は長さ 2.05 m、最大幅 1.04 m、深さ 20cm を測る。



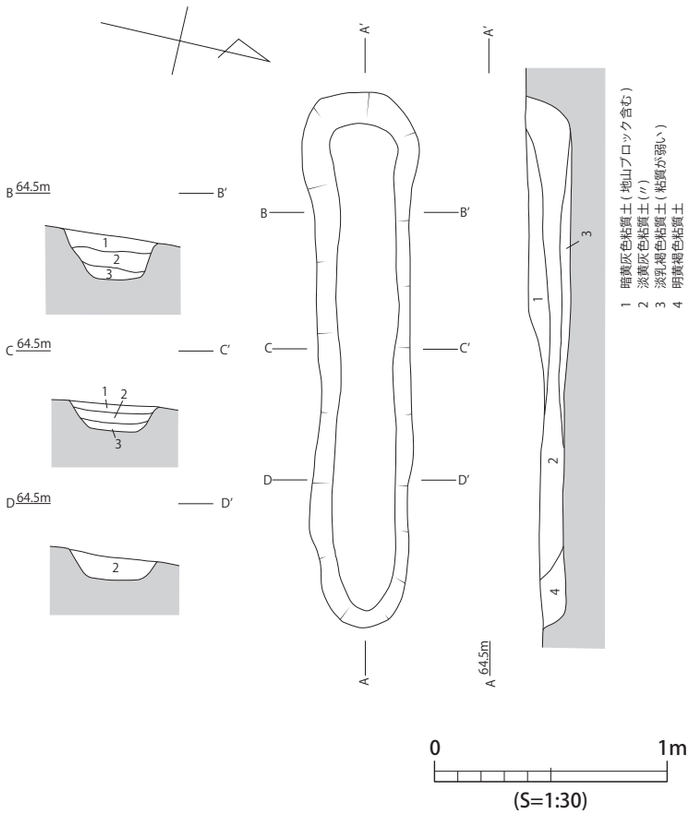
第 126 図　庵寺古墳群 16 号墳主体部完掘状況

箱式石棺　墓壙内には中央でなく北壁に沿って箱式石棺が納められていた。凝灰岩を板状に加工し組み合わせたもので、石棺の主軸はＥ－６°－Ｎである。東側の蓋石は重機で削平してしまったが、石棺の規模は蓋石の長さ推定約２ｍ、幅 50cm、棺内の長さ 1.72m、幅 24 ～ 42cm、床面から蓋石までの高さは 20cm を測る。床面は東側が幅広く、頭位だったと考えられる。

棺の構造は側板で小口板を挟むＨ型で、小口板や側板は床面の溝にはめ込んで設置されている。側板は両側とも４枚の板材が使用され、厚さ 6cm に削り込んでおり、特に内面には工具による加工痕が明瞭に残っている。

床面には板材や礫敷きは認められず、東側小口付近には３点の小礫が石枕状にかたまって設置されていた。また石棺を設置するための溝が壁沿いに巡っている。

棺内や周辺部から遺物は検出されなかった。また他の古墳の箱式石棺が埋納される墓壙は基本的に二段掘構造であったが、墓壙の状況から石棺は一段掘土坑の床面に溝を掘って設置されたと思われる。



第 127 図　庵寺古墳群 17 号墳主体部実測図

17 号墳（第 127 図）

立地状況　尾根筋のほぼ中央に位置する古墳である。16 号墳から 7 mの距離にあり、標高は 64.25 mである。尾根筋の両斜面側は流出しており、尾根筋の幅 3.5 mであたかも陸橋状に平坦面が広がっている。

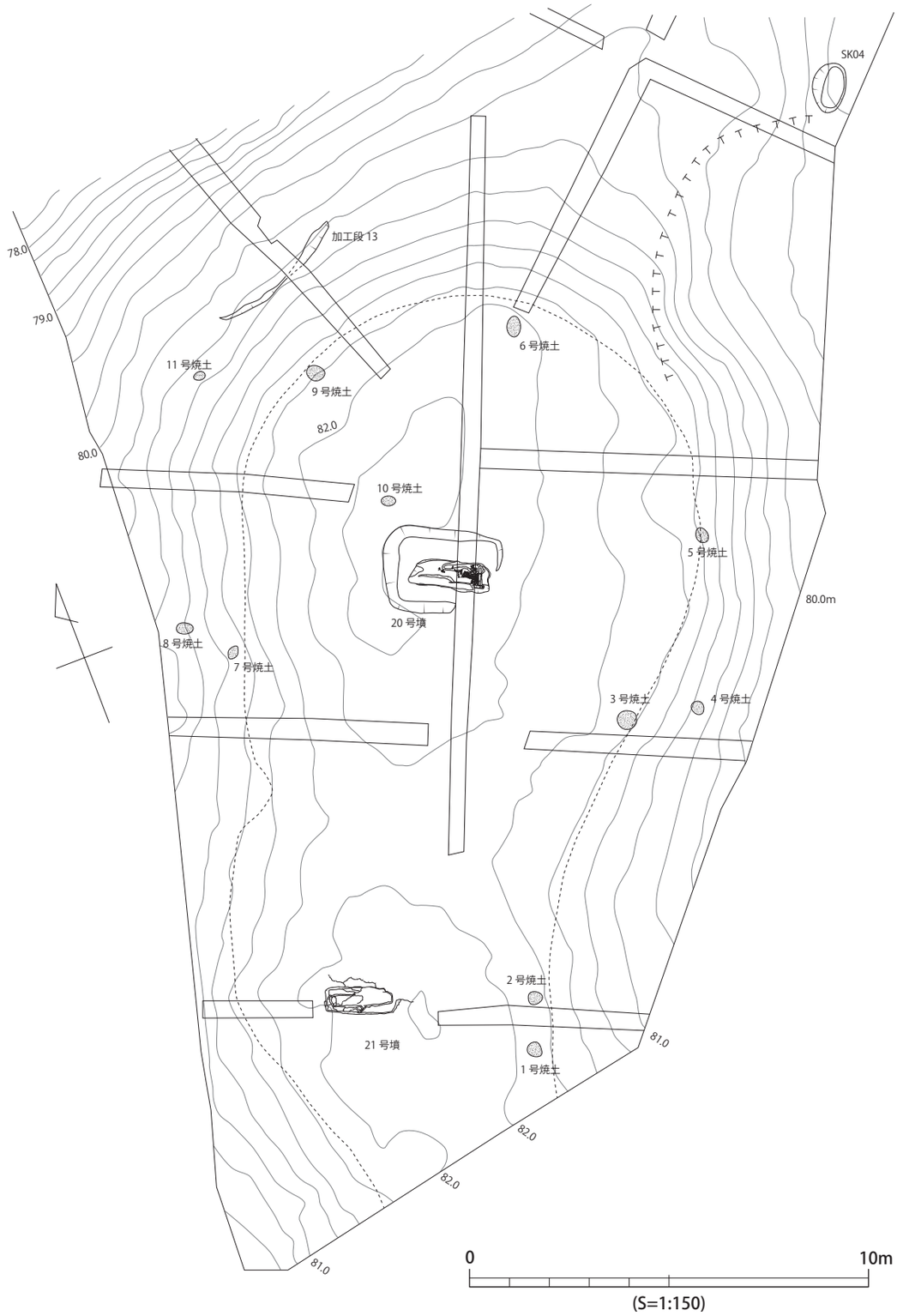
表土掘削後には地山や岩盤が露出する状況にあり、墳丘や盛土の痕跡を確認することはできなかった。また周溝などの外表施設も検出されておらず、古墳の規模や形態は不明と言わざるを得ない。

主体部　平坦面の中央付近で尾根筋に直交する溝状の落ち込みが 1 基検出された。当初はその形態から古墳の区画溝かと思われたが、覆土から滑石製臼玉が多数検出されたため、古墳の主体部と判断した。平面プランは細長い長方形状を呈し、形態は西側が丸く広がり、東側は尖り気味に掘り込まれている。長軸を東西方向に合わせており、主軸はＮ－ 72°－Ｅである。規模は長さ 2.3 m、幅

第 128 図　庵寺古墳群 17 号墳出土遺物実測図

36 ～ 50cm、深さ 20cm を測る。

残りが悪く、覆土の土層観察でもどのような埋葬施設が納められていたかは不明瞭である。しかしながら、推測の域を出ないが、墓壙が細長く、西側が丸く広がり東側が尖る形態は船底形の木棺



第 129 図　庵寺古墳群 20 号墳・21 号墳配置図

第 130 図　庵寺古墳群 20 号墳墳丘測量図

を埋納した痕跡とも考えられる。南側丘陵部では刳抜式木棺を直葬した古墳（22 号墳）が確認されており、その可能性は残ると言えよう。

出土遺物（第 128 図）

墓壙内の覆土を水洗いしたところ、滑石製臼玉が 12 点検出された。形態は台形状、中央に稜を

もつ算盤型、扁平なものがみられ、規格は概ね長さ２～３mm、幅５mm 前後を測る。肉眼的には、材質的に出雲部の玉作遺跡で用いられる粘板岩質のものとは異なるように見受けられる。時期的には古墳時代前期末～中期前半の範疇におさまるものと考えられる [16]。

４．南側丘陵部の調査

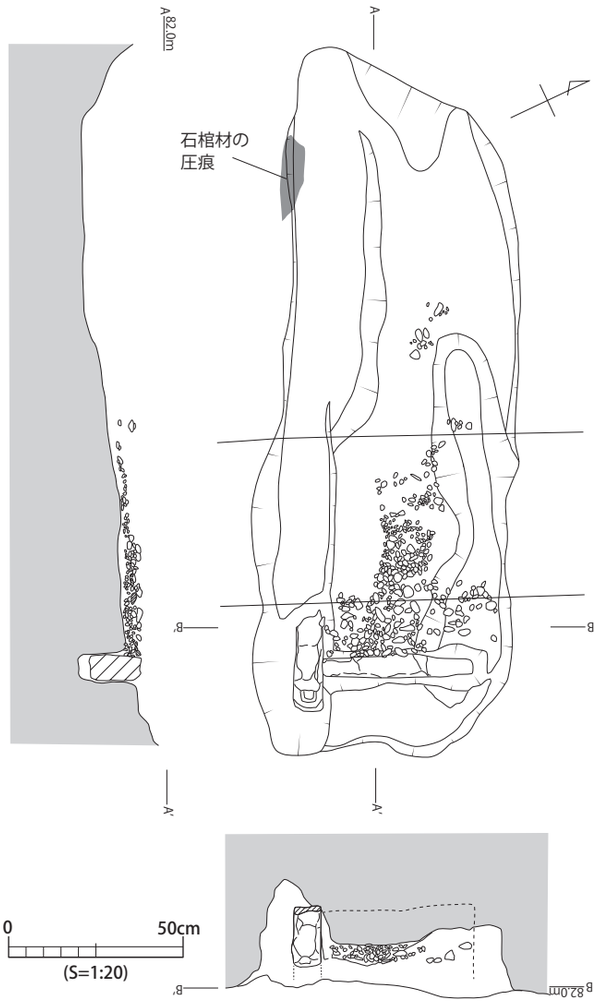
北側丘陵部の谷間を挟んだ反対側の丘陵を南側丘陵部と称した。丘陵の尾根筋南西端を最頂部とし、北東方向に直線状に尾根筋が伸びている。標高は最高所が 82m で、これは北側丘陵部より 17m ほど高い。最も低い先端部が標高 62m であり、比高差は 20m を測る。尾根筋の長さは調査区内で約 130 m、幅は５～ 12 mを測り、尾根筋に狭長な平坦面が広がっている状況である。

このような尾根筋の最頂部から先端部にかけて６基の古墳が検出された。なお尾根筋は調査区外にも広がっており、本丘陵部に未発見の古墳がまだ眠っている可能性は高い。以下、尾根頂部からグループごとに概要を述べる。

G群の様相（第 129 図）

尾根筋南西側の最頂部に立地する古墳である。この尾根頂部には調査前から自然地形としては不自然な、長さ 23m、幅 12 mの楕円形状平坦面が広がっていた。大規模な古墳が立地することも想

第 131 図　庵寺古墳群 20 号墳盗掘坑・石棺材散乱状況



第 132 図　庵寺古墳群 20 号墳石棺・礫床検出状況

定されたが、結果的には平坦面の南北側に高まりがみられ、それぞれの高まりで古墳の主体部が検出された（20 号・21 号墳）。

この平坦面と古墳との関連は不明瞭だが、古墳の周辺からは焼土面が 11 基検出されている。平坦面や古墳が構築された時期の手がかりになるものと思われ炭の AMS 年代測定を試みた結果、6 号焼土が縄文時代前期、10 号焼土が 4 ～ 5 世紀代の測定値が示された（第 5 章参照）。

20 号墳（第 130 ～ 133 図）

立地状況　尾根筋最頂部に広がる平坦面北側のほぼ中央に位置する。標高は 82.25m である。

墳丘規模と形態　表土掘削後には岩盤が露出する状況にあり、盛土の痕跡を確認することはできなかった。周溝など外表施設も検出されず、墳丘の規模や形態は不明と言わざるを得ない。しかしながら、この平坦面が墳丘を築造するために造成されたと仮定し、平坦面と斜面との傾斜変換線が円形状を呈すること、主体部が平坦面の中央に配置されていることを積極的に考慮するならば、径 12m 規模の円墳ということになる。

また、平坦面や周辺斜面から多数の土器片が出土しており、主体部の西側からは標石が転落したものとみられる円礫も 2 点検出された。

主体部　平坦面の中央で尾根筋に直交する墓壙が検出された。南東側が流出しているが、平面プランは長方形状を呈する。長軸は東西方向を向いており、墓壙の主軸はW－ 25°－Nを指向する。掘り方の規模は上面で長さ 3 m、幅 2.16 m、深さ 40cm、床面で長さ 2.46m、幅 1.58 mを測り、当古墳で石棺が検出された墓壙の中では比較的大型のものである。

ただ、当初は 131 図で示したように地山面で楕円形状の掘り方が検出され、これを墓壙と認識していた。坑内を掘り始めたところ、凝灰岩製の石片が墓壙を覆うように多数検出され、状況が 10 号墳第 1 主体部と酷似することから、盗掘を受けていることが判明した。

以上のように、盗掘により主体部はかなりの改変を受けており、特に西側が大きく掘り込まれているが、墓壙内に箱式石棺が埋納されていた痕跡を確認することができた。

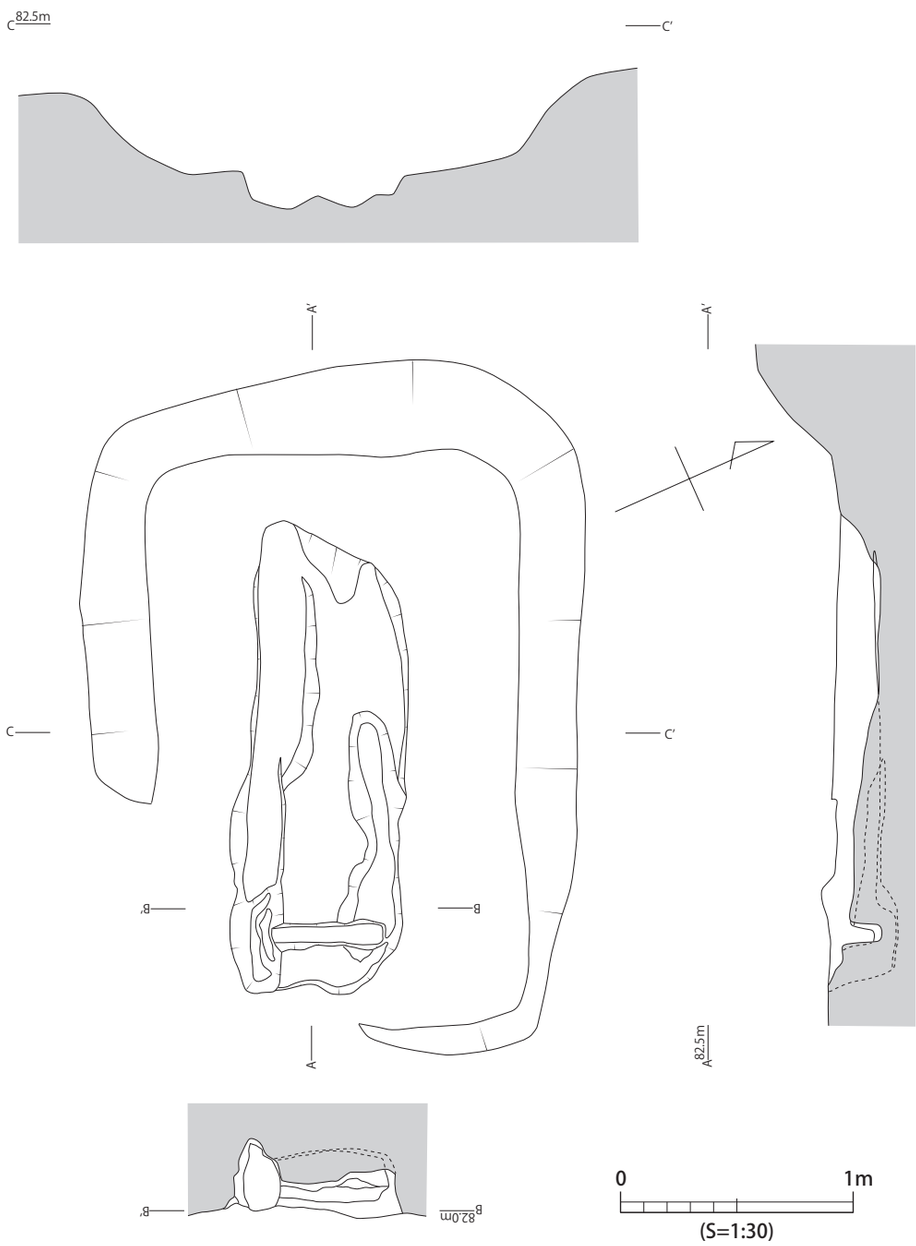
箱式石棺　墓壙の東側は墳丘確認のためのサブトレンチで抜いてしまったが、先端付近で破壊を免

れた石棺の小口板と側板が原位置で残存しており、凝灰岩を板状に加工しH型に組み合わせた状況が明らかである。棺内床面からは凝灰岩製の円礫を敷き詰めた痕跡がみられ、棺材を設置するため溝が掘り込まれていることも認められた。この溝を基に石棺の規模を復元すると、概ね長さ 1.7 m、幅 50cm となる。溝の幅は西側に向かって狭くなっており、東側が頭位だった可能性もある。

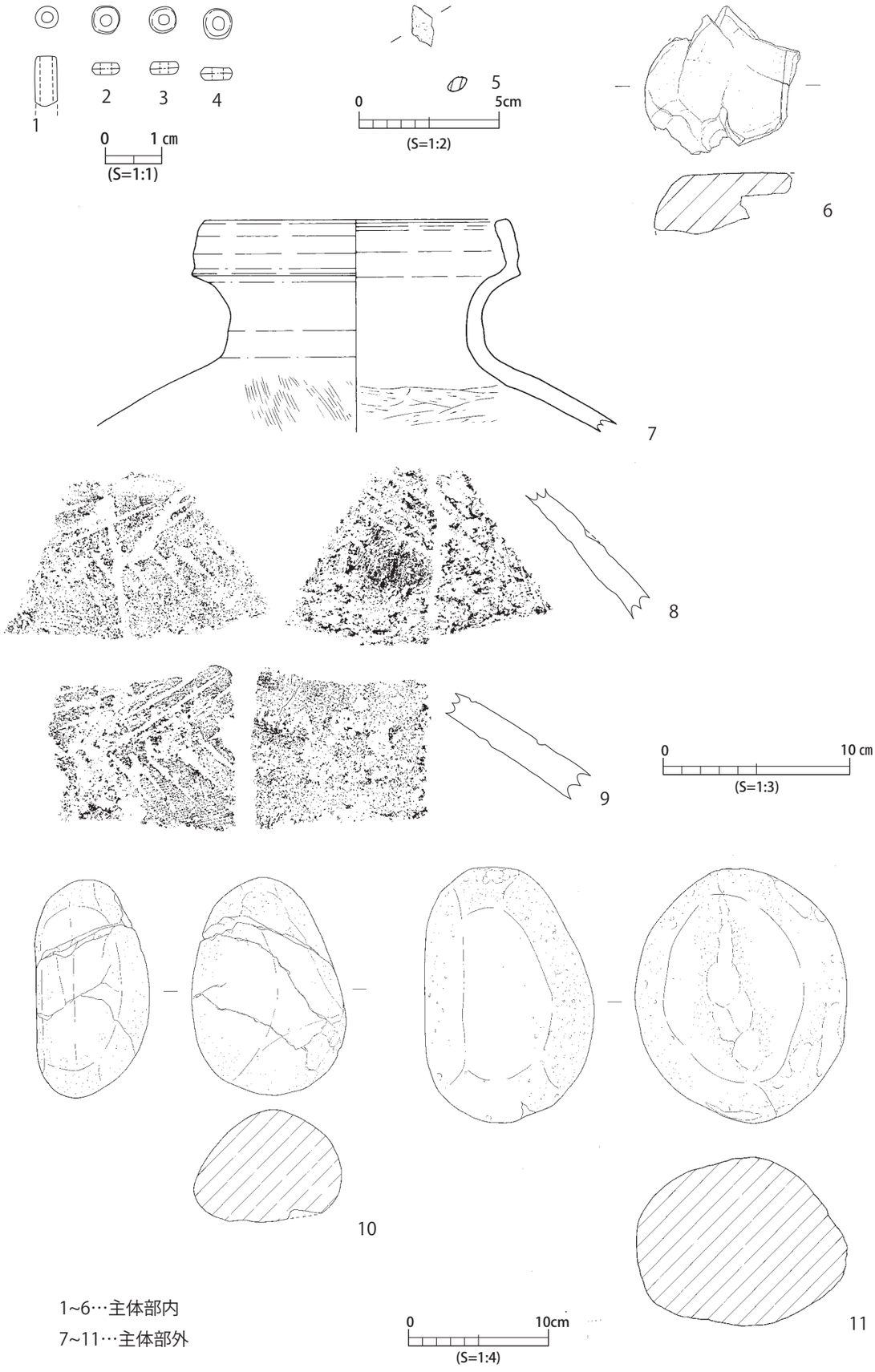
また、溝は 30cm の深さで掘り込まれているが、棺内床面と墓壙の床面の高低差は 10cm 程度である。墓壙は平面規模は大きいが、墓壙を二段に深く掘り込み、二段目に石棺を埋納するという構造ではなかったようである。

出土遺物（第 134 図）

1 ～ 5 は墓壙内の石棺設置付近の覆土を水洗いして検出された遺物である。1 は緑色凝灰岩製の管玉である。欠損しているが、現状で長さ 8.5mm、幅 3.5mm を測る。2 ～ 4 は滑石製の臼玉で、



第 133 図　庵寺古墳群 20 号墳主体部完掘状況



1~6…主体部内
7~11…主体部外

第 134 図　庵寺古墳群 20 号墳出土遺物実測図

第 135 図　庵寺古墳群 21 号墳墳丘測量図

長さ約 2mm、幅 5mm を測る。いずれも扁平な算盤型を呈し、中央に稜が認められる。材質は出雲部の玉作遺跡で使用される粘板岩質のものとは異なる印象がある。５は菱形を呈する鉄製品の破片で、器種の特定は難しい。長さ 1.4cm、幅 0.8cm を測る。

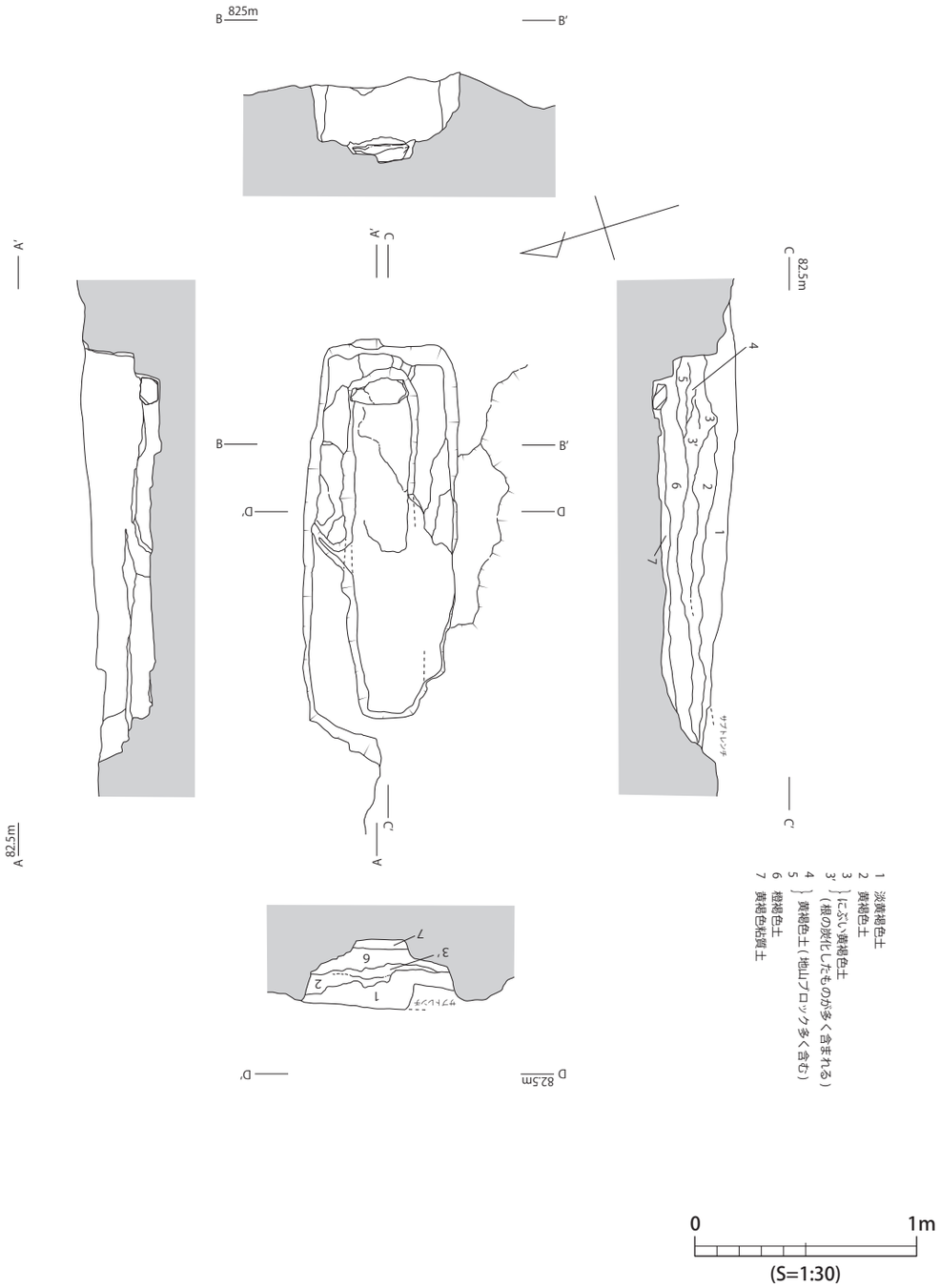
６は石棺床面付近でバラバラに出土した石片で、接合できたものを図化した。表面に平坦面をもち、現状で長さ 8.1cm、幅 8.7cm、厚さ 3.1cm を測る。器種は不明だが、或いは石枕の可能性も考慮し掲載した。

７～ 11 は主体部周辺や平坦面、斜面部で出土した遺物である。７は複合口縁の壺で、復元口径は 16.2cm である。口縁は屈曲部をもち内傾して立ち上がる。端部は丸みがあり面をもたない。器壁は厚手で、肩部外面にはハケ調整、胴部内面にはヘラケズリが施される。口縁は丸みをもっており、複合口縁の退化傾向と捉えると小谷式末期もしくはそれ以降のものと考えられる。８・９は厚手の土器片で、大型壺形土器の破片とみられる。類似する破片は多数出土しており、文様がみられるものを図化した。風化が著しいが、いずれも表面に羽状文が認められる。周辺に土器棺墓が存在

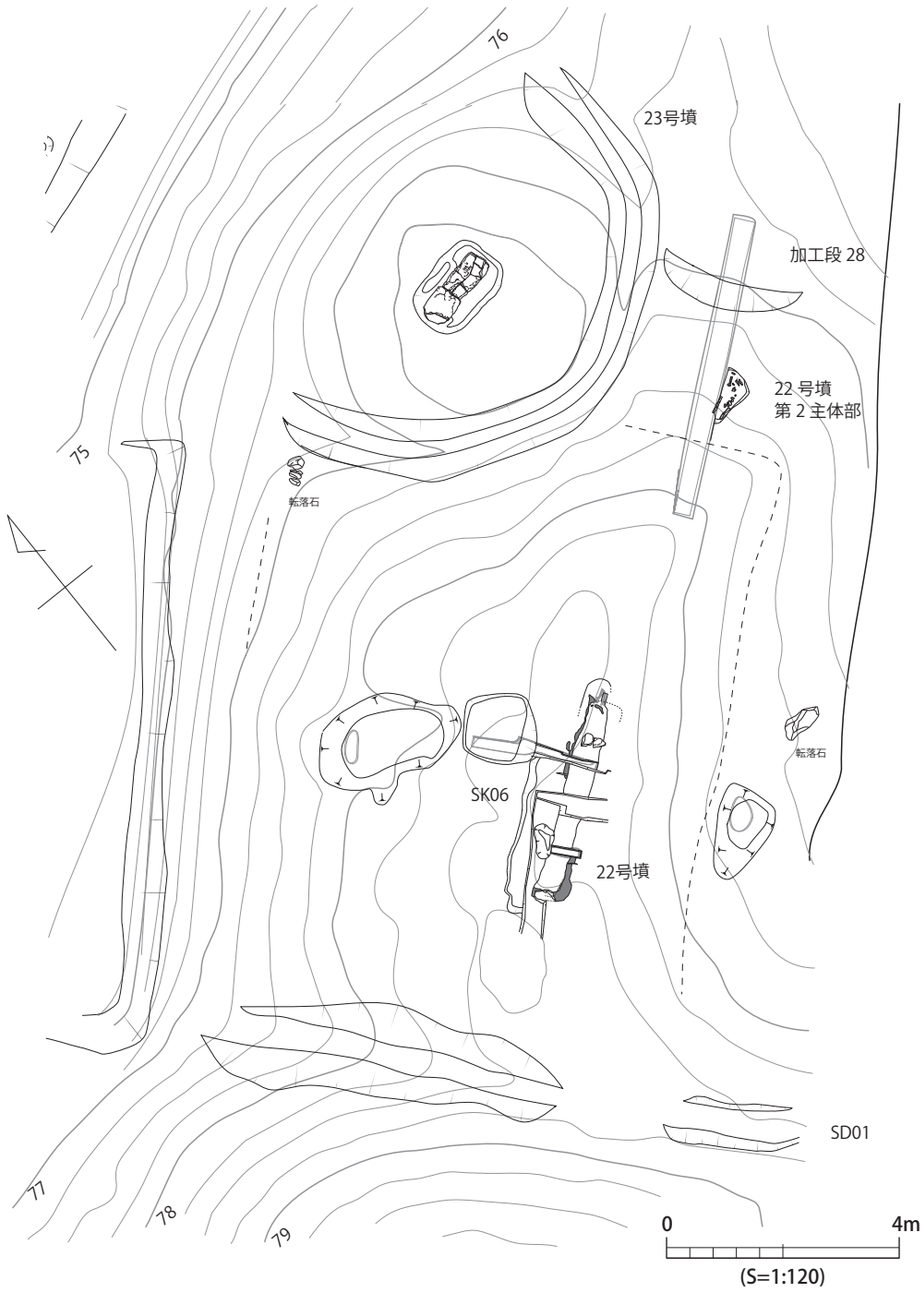
した可能性も示唆される。

10・11 は主体部西側で検出された円礫である。10 は長さ 15.5cm、幅 10.9cm、厚さ 8 ～ 10cm を測る。11 は長さ 18.1cm、幅 15.1cm、厚さ 12.0cm を測る。明瞭な加工痕・使用痕は認められないが、自然に存在する石ではないので、古墳の標石が転落したものである可能性がある。

これらの遺物の時期であるが、棺内出土の玉類について、管玉は畿内系の細長型管玉と考えられる [17]。滑石製臼玉も 17 号墳出土品と類似しており、玉類の盛行時期は古墳時代前期末から中期前半に比定される。周辺から出土した土器類は明確に古墳に伴うものとは断定できないが、玉類の時期とは大きく矛盾しないものと考えられる。従って古墳の築造時期は古墳時代前期末～中期前半



第 136 図　庵寺古墳群 21 号墳主体部実測図



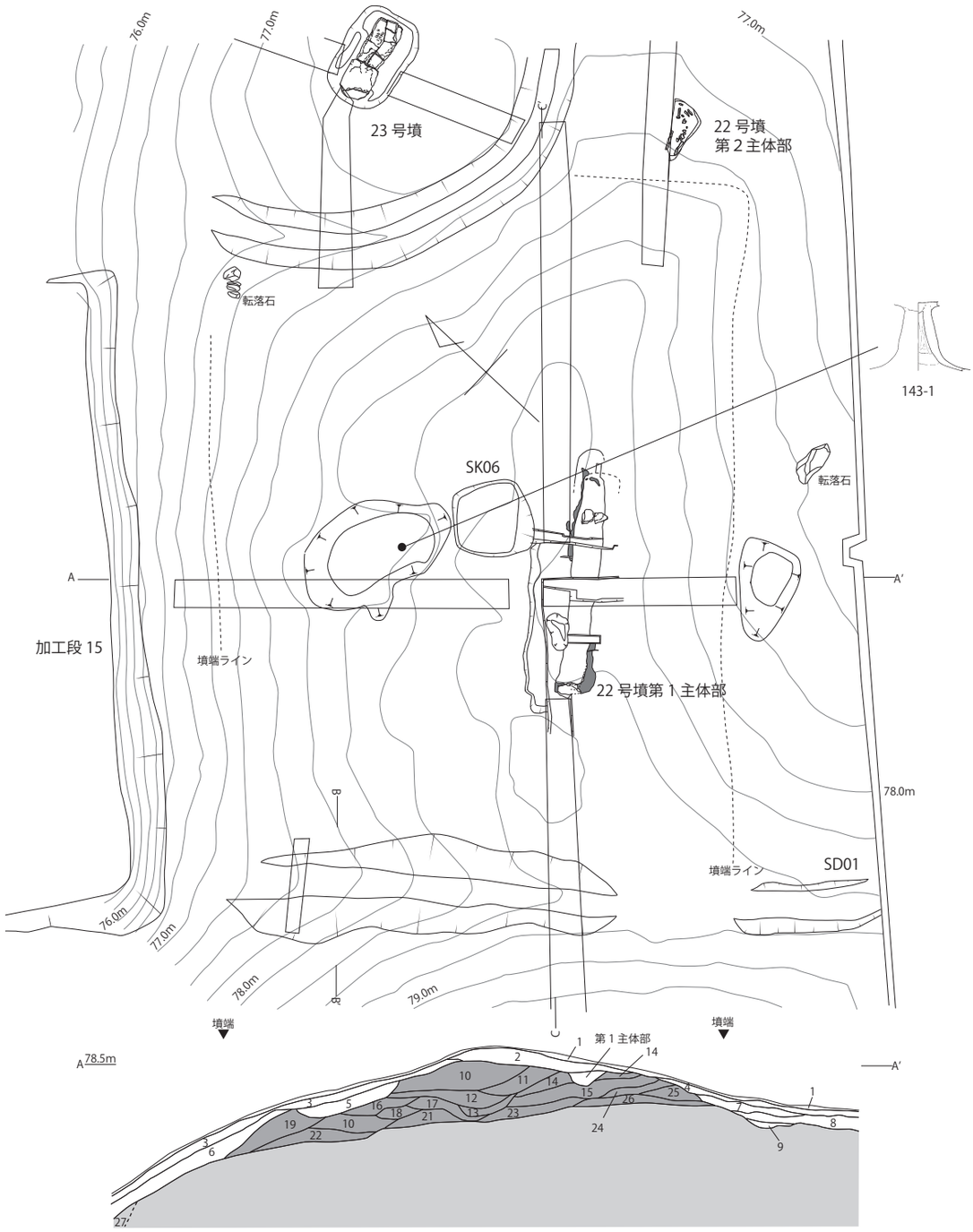
第 137 図　庵寺古墳群 22 号墳・23 号墳配置図

と推測される。

21 号墳（第 135・136 図）

立地状況　尾根筋最頂部に広がる平坦面南側のほぼ中央に位置し、20 号墳とは 8 mほど離れて立地する。標高は 82m である。また、西側の平坦面の際では、20 号墳の周囲でもみられたような焼土面が 2 基検出されている。

墳丘規模と形態　表土掘削後には岩盤が露出する状況にあり、盛土の痕跡を確認することはできなかった。周溝など外表施設も検出されず、墳丘の規模や形態は不明と言わざるを得ない。ただ 20

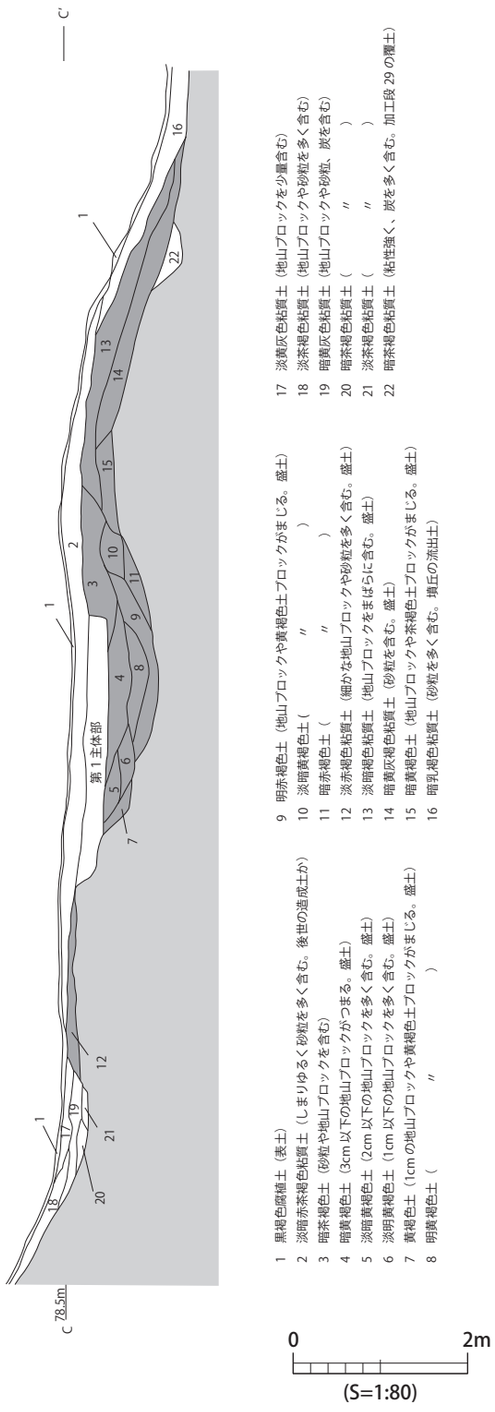


1 黒褐色腐植土（表土）
2 淡暗赤茶褐色粘質土（しまりゆるく砂粒を多く含む。後世の造成土か）
3 淡赤褐色粘質土（砂粒や地山ブロックを多く含む。墳丘の流出土）
4 淡茶褐色粘質土（　〃　）
5 黄褐色粘質土（しまりゆるく地山ブロックを多く含む。攪乱土）
6 淡黄灰色粘質土（砂粒を含む）
7 暗黄褐色粘質土（砂粒や地山ブロックを多く含む。墳丘の流出土）
8 暗乳褐色粘質土（砂粒や地山ブロックを含む）
9 橙褐色粘質土（地山ブロックを多く含む）
10 淡灰褐色粘質土（固くしまる。地山ブロックをまばらに含む。盛土）
11 薄暗黄褐色土（地山ブロックを含む。盛土）
12 暗灰褐色粘質土（固くしまり地山ブロックを含む。盛土）
13 淡暗灰褐色粘質土（　〃　）
14 暗黄褐色土（3 ㎝以下の地山ブロックを多量に含む。盛土）
15 明黄褐色土（1 ㎝以下の地山ブロックを多量に含む。地山）
16 明灰褐色粘質土（固くしまる。盛土）
17 暗黄褐色土（地山ブロックや灰褐色ブロックが混じる。盛土）
18 暗赤褐色土（地山ブロックや黄褐色ブロックを多量に含む。盛土）
19 淡暗茶褐色粘質土（砂粒や地山ブロックを含む。盛土）
20 淡赤褐色土（地山ブロックや黄褐色・灰褐色ブロックが混じる。盛土）
21 淡赤褐色土（地山ブロックや黄褐色ブロックが混じる。盛土）
22 淡暗赤褐色土（地山ブロックや黄褐色ブロックが混じる。盛土）
23 明茶褐色土（　〃　）
24 淡黄褐色土（細かな地山ブロックを含む。盛土）
25 薄黄褐色土（地山ブロックや赤褐色ブロックが混じる。盛土）
26 薄赤褐色土（地山ブロックや黄褐色ブロックが混じる。盛土）
27 暗褐色粘質土（加工段 15 の覆土）

1 淡暗黄灰色粘質土（炭や砂粒を少量含む）
2 淡暗褐色粘質土（炭や砂粒を多く含む）
3 淡暗乳褐色粘質土（砂粒や地山ブロックを含む）

0　2m
(S=1:100)

第 138 図　庵寺古墳群 22 号墳墳丘測量図



第 139 図　庵寺古墳群 22 号墳縦断面土層図

号墳と同様に、尾根筋の中央付近には円形状の地形の高まりがあり、主体部もその範囲におさまることを積極的に考慮するならば、径５～６m 規模の円墳ということになる。

主体部　平坦面の中心からやや西側に寄った位置で尾根筋に直交する墓壙が 1 基検出された。南西側が流出しているが、平面プランは長方形状を呈する。長軸は東西方向を向いており、墓壙の主軸はＷ－17°－Ｎを指向する。

墓壙は二段掘構造になっており、箱型に掘り込まれている。一段目の掘り方の規模は上面で長さ 1.9 m、幅 70cm、深さ 25cm、床面で長さ 1.68m、幅 62cm を測る。二段目の掘り方は、長さ 1.57 m、幅 32cm、深さ 10cm と比較的浅く掘り込まれている。２段目の掘り方の東端部に長さ 26cm、幅 12cm の角礫が配置されており、東側を頭位とした石枕と考えられる。

墓壙内覆土の土層観察では、黄褐色系の粘質土がほぼ水平に堆積しており、木棺等が埋納された痕跡を認めることができなかった。或いは、固い岩盤をほぼ垂直に掘り込んでいることから、箱型の墓壙自体を棺に見立てた土坑墓であった可能性もある。

また、墓壙内や周囲から遺物は検出されていない。

Ｈ群の様相（第 137 図）

尾根頂部から尾根筋を階段状に１～２段下がった位置に立地する古墳である。周辺の尾根上平坦面は調査区外にも広がっており、検出された古墳は平坦面と斜面の際に築造されていると思われる。

調査前から墳丘状の高まりが明瞭で、調査の結果、古墳が 2 基切り合った状態で検出された（22 号・23 号墳）。この他、23 号墳から北東方向に約 20m 離れた位置で検出された 24 号墳もこのグループに含めたい。

また斜面下方からは弥生時代の加工段が多数検出されたが、古墳の墳丘盛土下からも加工段が検出されている。

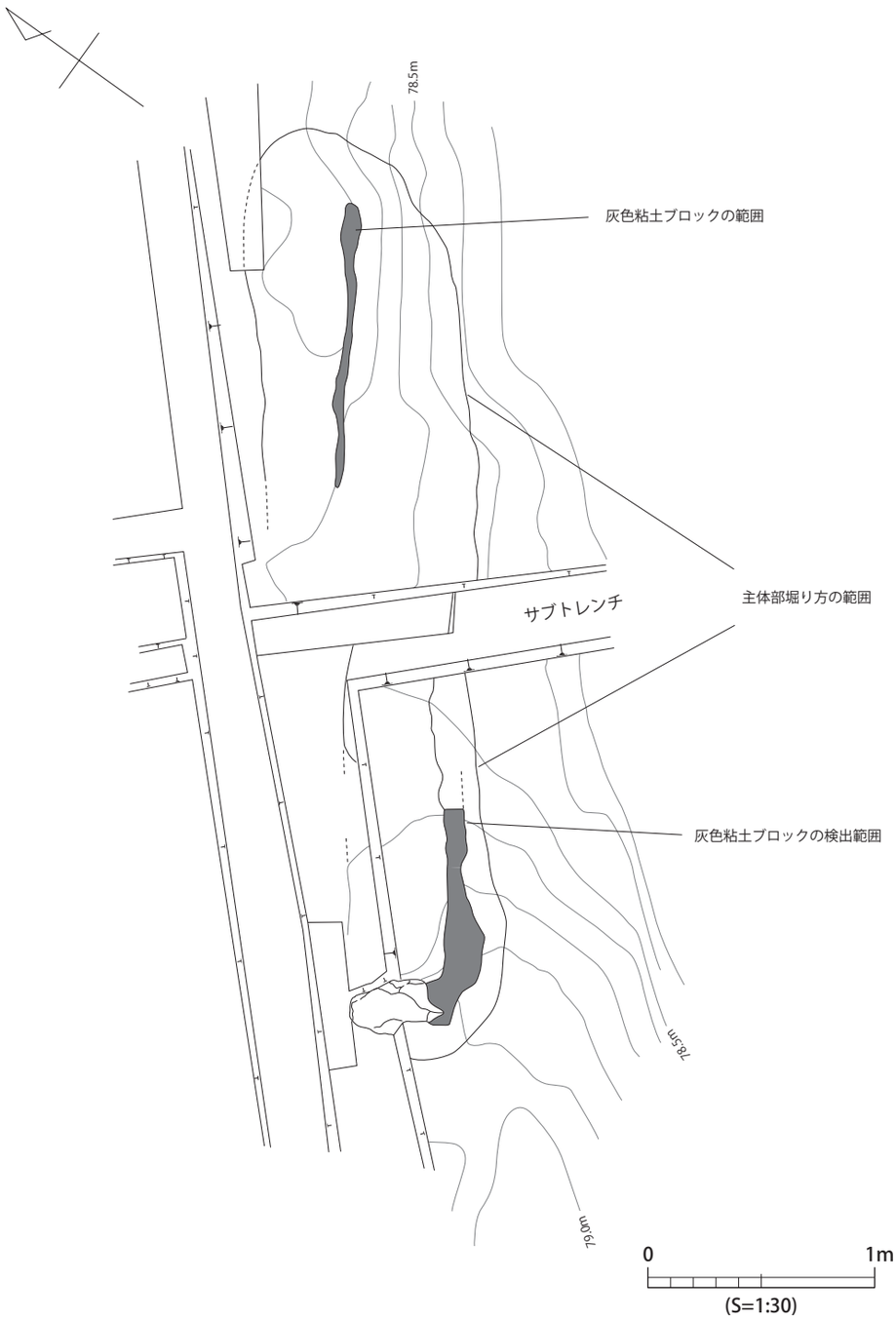
22 号墳（第 138 ～ 142 図）

立地状況　尾根頂部から尾根筋が北東方向へ階段状に伸びており、地形的に一段下がった位置で検

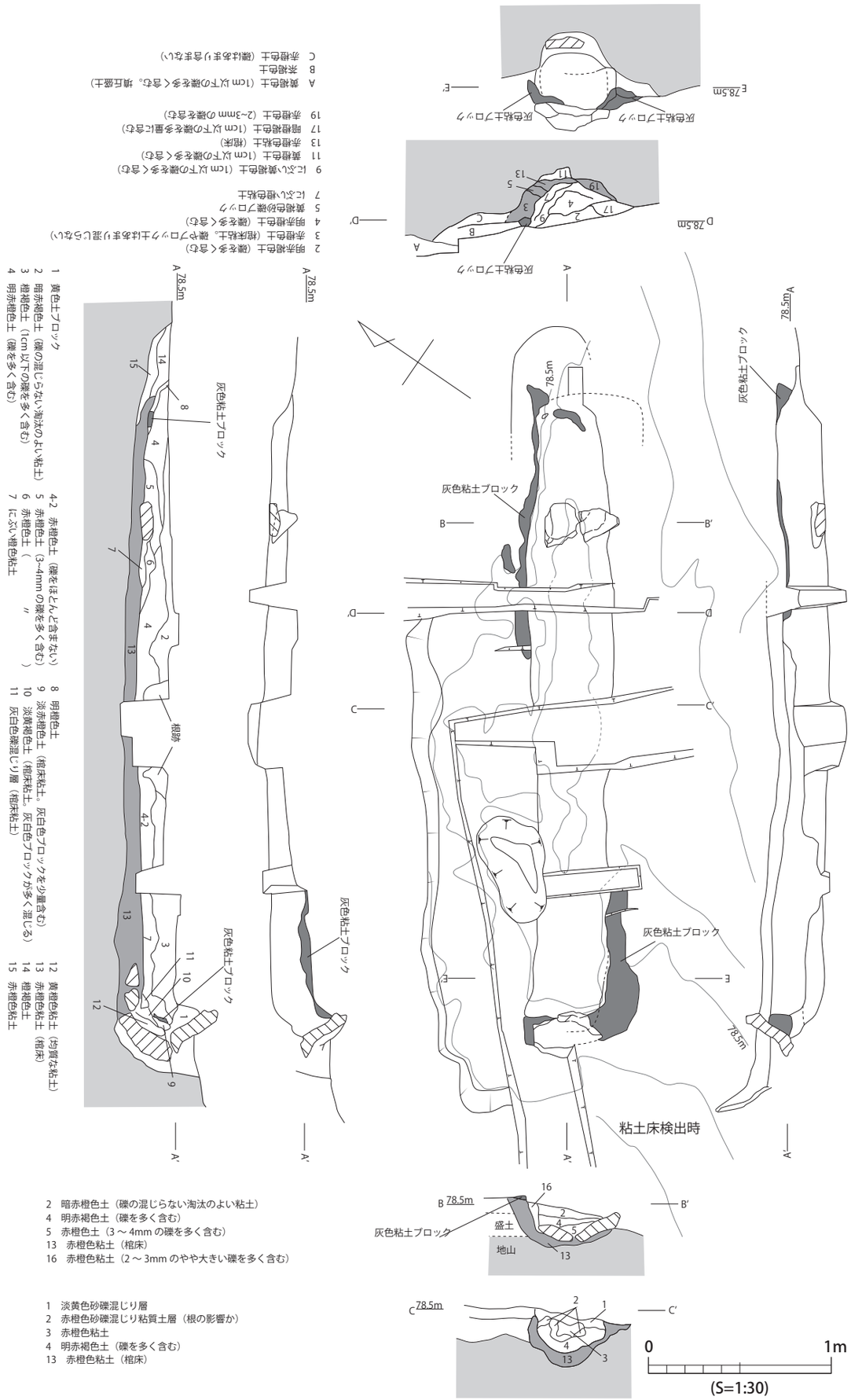
出された。墳丘状の高まりが明瞭で、標高は 77 ～ 78.5m である。

墳丘規模と形態　墳丘西側は流出しているが、全体的に形状を比較的留めていた。また墳丘の西側には区画溝が存在することから、墳丘規模は南北 8 m×東西 11m の方墳と考えられる。また墳丘の東側は 23 号墳の周溝により大きく削平されており、墳頂部には後世の造成土とみられる厚さ 30cm の赤褐色粘質土が堆積する状況であった。

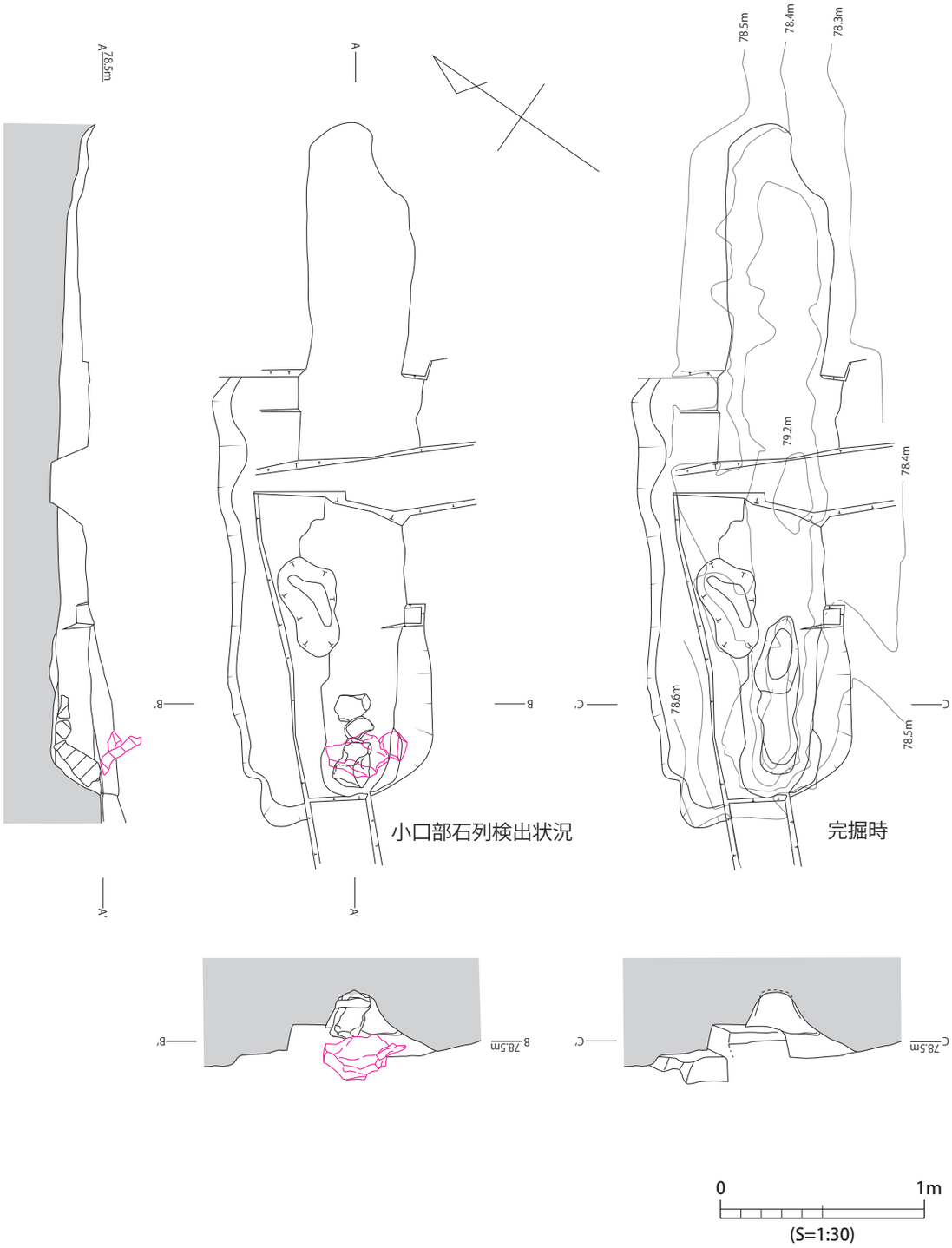
墳丘は現状で厚さ最大 1 mの盛土により構築されていた。ただ墳丘を斜面との際に立地させていることもあり、墳丘を造成する基盤面は南北方向に傾斜をもって平坦に成形されている。また尾根



第 140 図　庵寺古墳群 22 号墳第 1 主体部検出状況



第 141 図　庵寺古墳群 22 号墳第 1 主体部実測図 (1)



第 142 図　庵寺古墳群 22 号墳第 1 主体部実測図 (2)

筋の斜面を利用して墳丘が造成されていることも明らかで、墳丘の西側は盛土の厚さが現状で約 15cm と薄い。以上のような地形と盛土の土層観察から築造過程復元を試みると、まず岩盤を成形した後、主体部の下方にあたる中央付近を掘り窪め、その東側と南側に盛土を外堤状に積み上げる。この際、盛土高を西側の斜面の高さと揃えたようである。続いて主体部を設置する中央部を充填、さらに墳丘北側に細かく盛土を積み重ねて成形したと推測される。また墳頂の平坦面は意図的に墳

丘の中央から南側に寄せた位置に造成したとみられ、北側の墳丘傾斜面を幅広く緩やかに面取りすることで、おそらくは平野部からの視覚的効果を狙ったものと考えられる。このように斜面地形を利用して盛土を構築する労力を多少なりとも省略し、さらに北側からの墳丘の見栄えを良くするなどの工夫を凝らした様子がうかがえるといえる。

この他、墳丘頂部には後世の土坑ＳＫ 06 が掘り込まれ、その北側と南側の墳裾部には地形の落ち込みがみられた。内部は攪乱しており、風倒木等の痕跡と思われるが、墳頂部の落ち込みの上面から土師器の高坏片が出土した。また、墳丘の北側隅と南側墳裾部からは古墳の標石だったとみられる角礫状の転落石が検出された。

区画溝　墳丘の西側で検出された。尾根筋に直交して直線状に掘り込まれており、長さ 6.3 m、最大幅 1.6 m、深さ 30cm を測る。

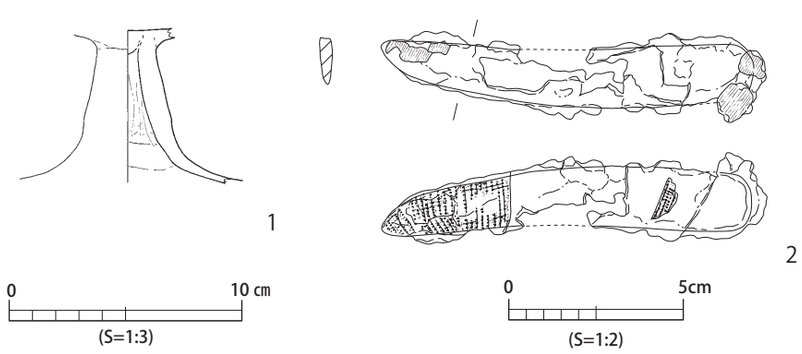
主体部　主体部は墳頂部で 1 基検出され（第 1 主体部）、墳丘外の東側墳裾部で追葬墓とみられる石棺墓（第 2 主体部）が 1 基検出された。

①第 1 主体部（第 140 ～ 142 図）　墳頂平坦面の中心から南側に寄った位置で検出された。周辺は盛土が幾層にも重なり合っており、墓壙の検出は容易ではなかった。やむなく縦横にいくつかのサブトレンチを入れ、表面精査を繰り返した結果、サブトレンチ内で長さ 40cm の礫が検出された。さらに灰色で胎土に砂粒を混ぜ、セメント状に凝固した粘土ブロックの帯を 2 箇所で確認。併せて横断トレンチの土層断面で、盛土を弧状に掘り込み底部に粘土を貼った様子がうかがえたことで、主体部の形状を認識することができた。

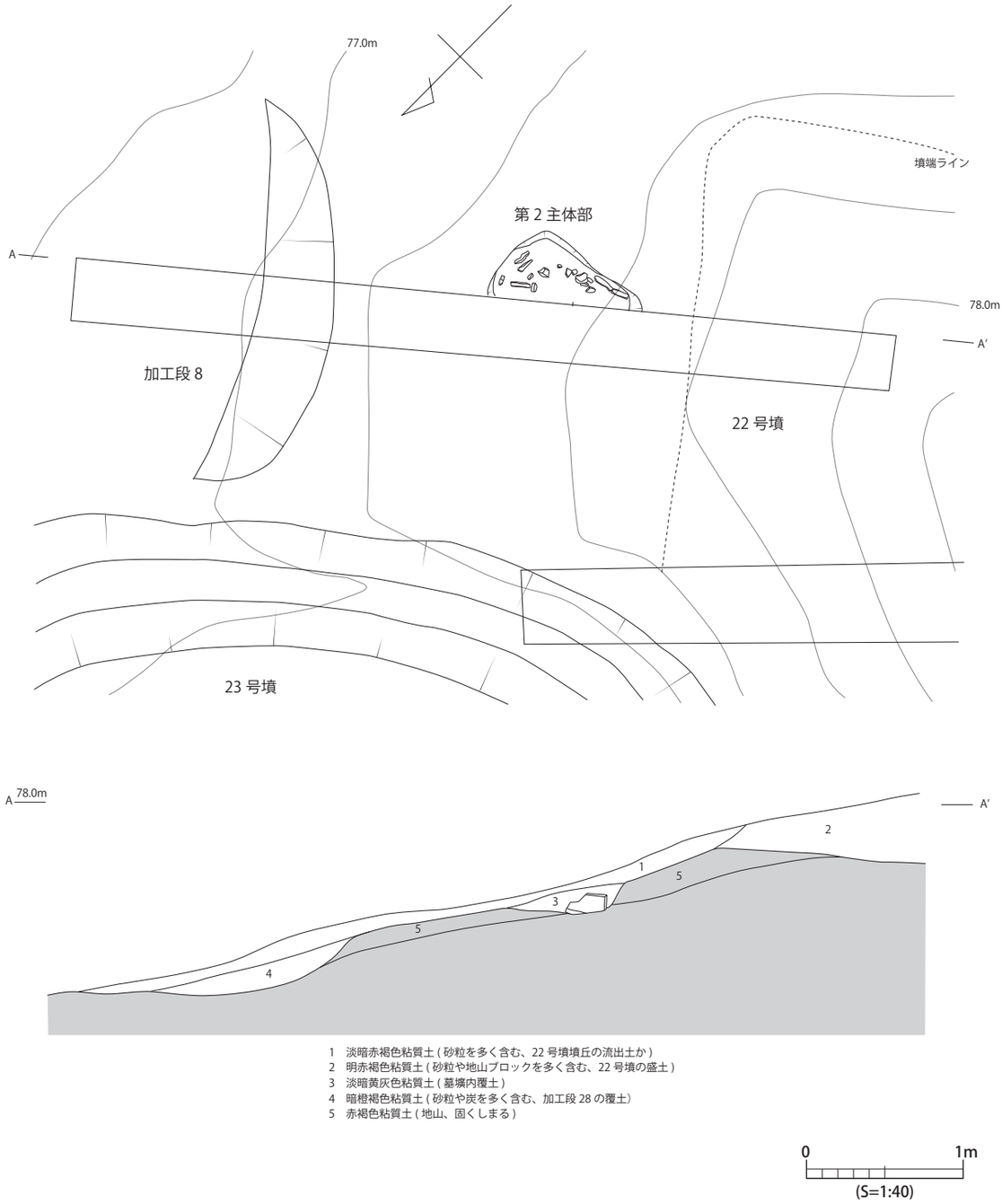
主体部の上方は大きく流出しており全体が明らかでないが、長辺を尾根筋に平行させた長方形状の墓壙であったと考えられる。墓壙は二段掘構造で一段目は推定長 4.5m、幅 2 m、現状で 20cm を測る。墓壙の中央には木棺を設置するための細長い長方形状の掘り込みがあり、掘り方の規模は上面で長さ 4.1 m、幅 60 ～ 70cm、深さ 12 ～ 44cm を測る。主軸はＮ－ 55°－Ｅを指向する。

掘り方の断面は半円形状を呈し、棺床には 10cm 前後の赤橙色系粘土が貼られていた。西側の小口部には底面に石列がみられ、東側には粘土上面に平坦な角礫が 2 点配置されている。また灰色粘土ブロック帯は棺床粘土両端部の上面に敷かれている状況も認められた。また掘り方の形状は、西側の小口部は幅広く垂直気味に深く掘り込まれているのに対し、東側の小口部は尖り気味に狭くなっており、深さも先端部に向けて浅くナナメに掘り込まれていることがうかがえる。

これらのことから木棺の埋納工程や構造を復元すると、まず墓壙を長方形状に掘り、木棺設置部を半円形状に掘り込む。西側小口部底面には石列を配し、棺床に赤橙色粘土を貼る。そして船底状



第 143 図　庵寺古墳群 22 号墳出土遺物実測図



第 144 図　庵寺古墳群 22 号墳第 2 主体部周辺地形測量図

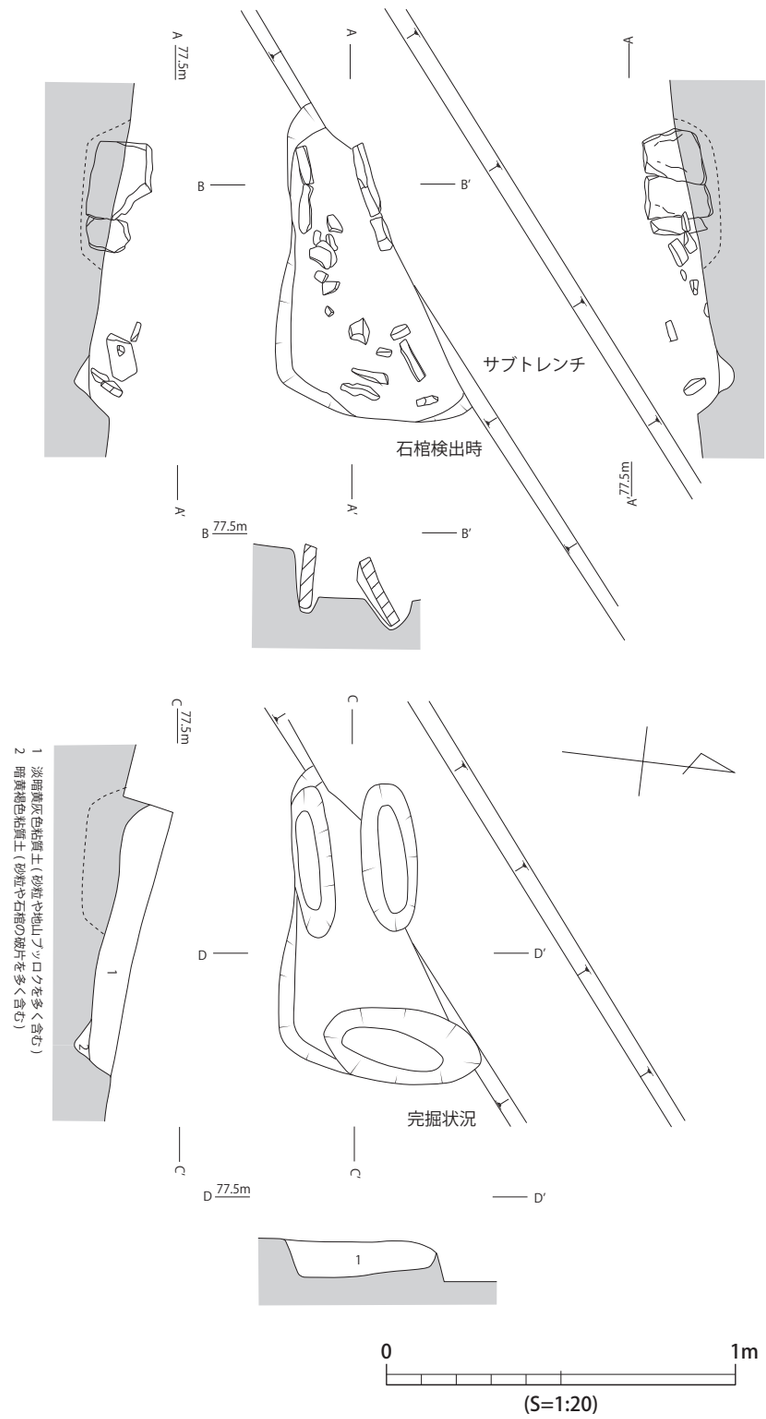
の刳抜式木棺の身部を納め、棺内の東側に石枕を置く。遺骸を埋葬し木棺の蓋部を設置した後、棺材の合わせ目を灰色粘土で塞ぎ、西側小口部に石を被せ棺材を固定、さらに赤橙色粘土を被覆して棺を密封したものと推測される。また木棺の大きさを粘土帯や粘土床、小口部をおさえた礫からうかがうことができ、概ね長さ 3.3 m、幅 50cm、高さ 40cm の規格が復元できる。

以上のように、本主体部は石見部では検出例の少ない刳抜式木棺を直葬した粘土槨構造の埋葬施設であることが判明した [18]。また粘土床上方の覆土を水洗いした結果、刀子片を検出することができた。

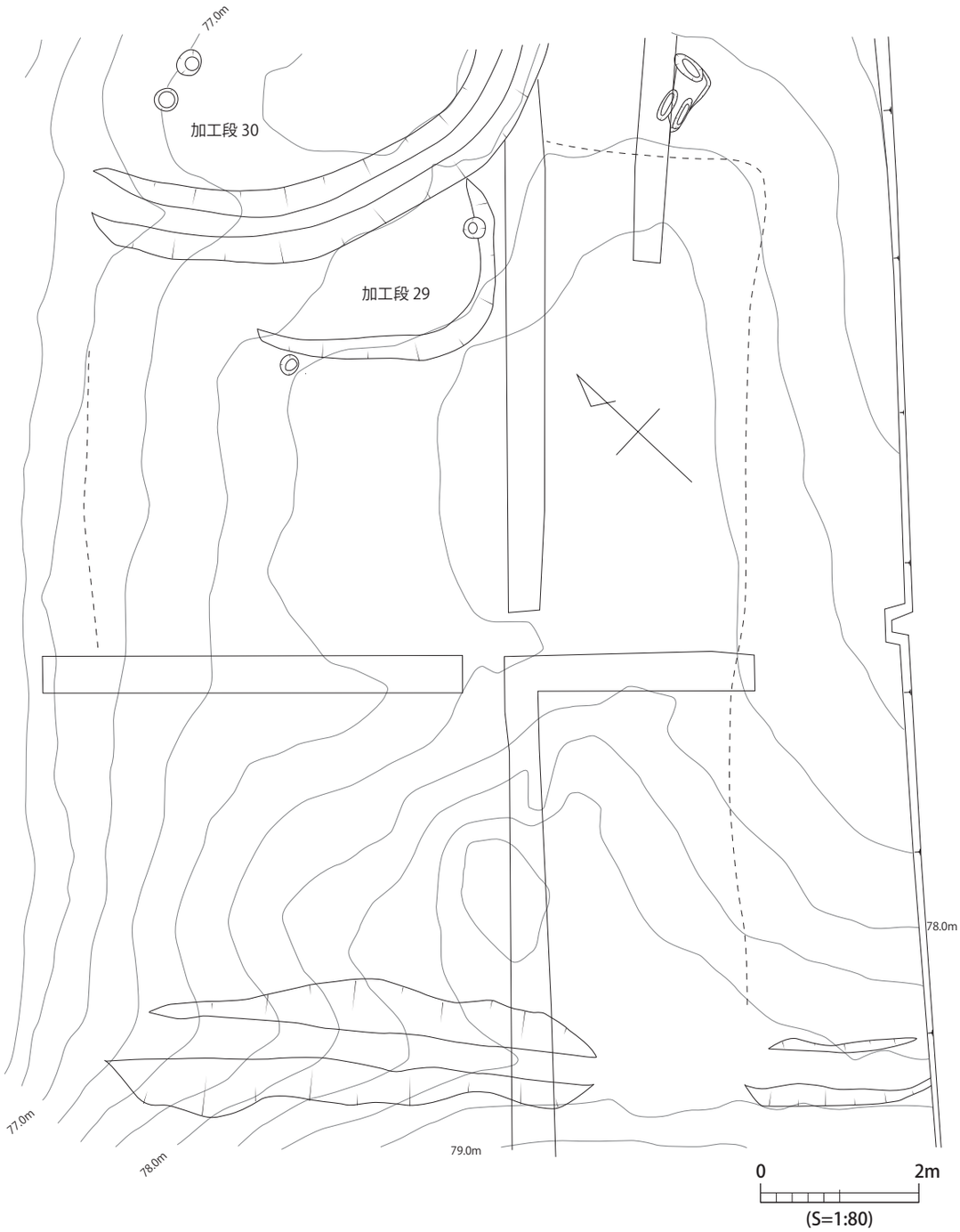
②**第２主体部**（第 144 ～ 145 図） 前述したように、22 号墳の墳丘外の東側墳裾部に単独で検出された石棺墓である。位置的に 22 号墳の追葬施設とみられ、第２主体部とした。

墓壙の北側を 22 号墳の墳丘土層確認のために設置したサブトレンチにより削平してしまったが、平面プランが長方形状を呈し、規模は概ね長さ 95cm、幅 60cm、深さ 12cm を測る小型なものである。長軸を東西方向に合わせており、主軸はＷ－７°－Ｓを指向する。

墓壙の上方は流出しているが、墓壙内には箱式石棺が埋納されていたとみられる。覆土には凝灰



第 145 図　庵寺古墳群 22 号墳第２主体部実測図



第 146 図　庵寺古墳群 22 号墳盛土除去後測量図及び加工段 29 検出状況

岩製の板状に加工された石材片が多数散在しており、墓壙底面の西側からは両側板の一部が原位置を保った状態で検出された。また床面には、石棺の側板や小口板を設置するために掘り込まれた溝が 3 箇所で残存する。墓壙内から遺物は出土していない。

出土遺物（第 143 図）

1 は墳頂部から出土した土師器の高坏脚部である。坏部底面には凸状の円盤が充填されているが、先端に刺突痕は認められない。 2 は第 1 主体部の粘土床の堆積土を水洗いして検出した刀子片で、

破片を可能な限り接合し図化した。残存状況は悪いが現状で長さ 11cm、幅 2.3cm を測り、刃部に布を巻いた痕跡が認められた。また片面に木質が固着しており、これは棺材由来のものと思われる。

これらの遺物の時期について、高坏 1 は出土状況から確実に古墳に伴うものであるか断定できない資料ではあるが、脚部の高さは比較的低く、脚柱部が細いといった特徴から、松山Ⅲ期～Ⅳ期に相当すると思われる。従って、古墳の築造時期は少なくとも古墳時代中期中葉～後葉が下限と捉えられる。

加工段 29（第 146・147 図）

22 号墳の墳丘盛土を除去した際に、下方の地山面で検出された加工段である。墳丘下方の北端部に位置し、床面の標高は 77.5 mである。

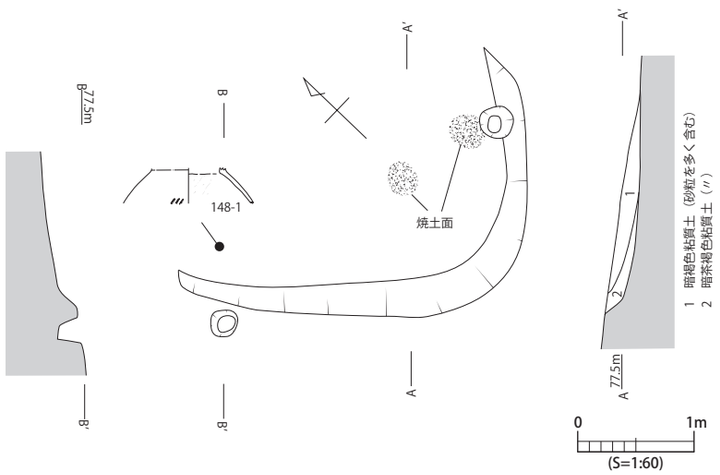
掘り方の北西側は 22 号墳築造時、及び 23 号墳の周溝によって削平されているが、尾根平面プランは隅丸の長方形を呈する。掘り方は長辺を尾根筋に直交させており、掘り方の規模は現状で長さ 3 m、幅 2.4 m、深さ 20cm を測る。

ピットは床面の南壁沿いと東側の掘り方の外で検出されたが、明確な柱列を示してはいない。また、床面の南側では焼土面も 2 基検出された。

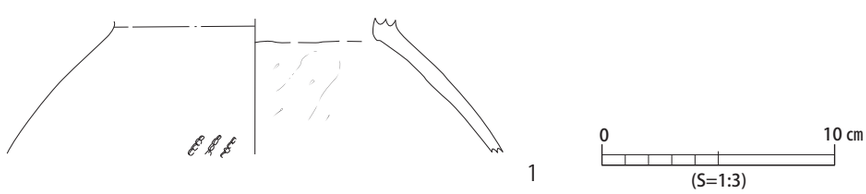
出土遺物（第 148 図）

覆土から甕類の小片が 1 点出土した。頸部から胴部にかけての破片であり、肩部は張り出さず外面に櫛状工具による連続刺突文が施され、内面のヘラケズリは頸部上方まで及んでいる。

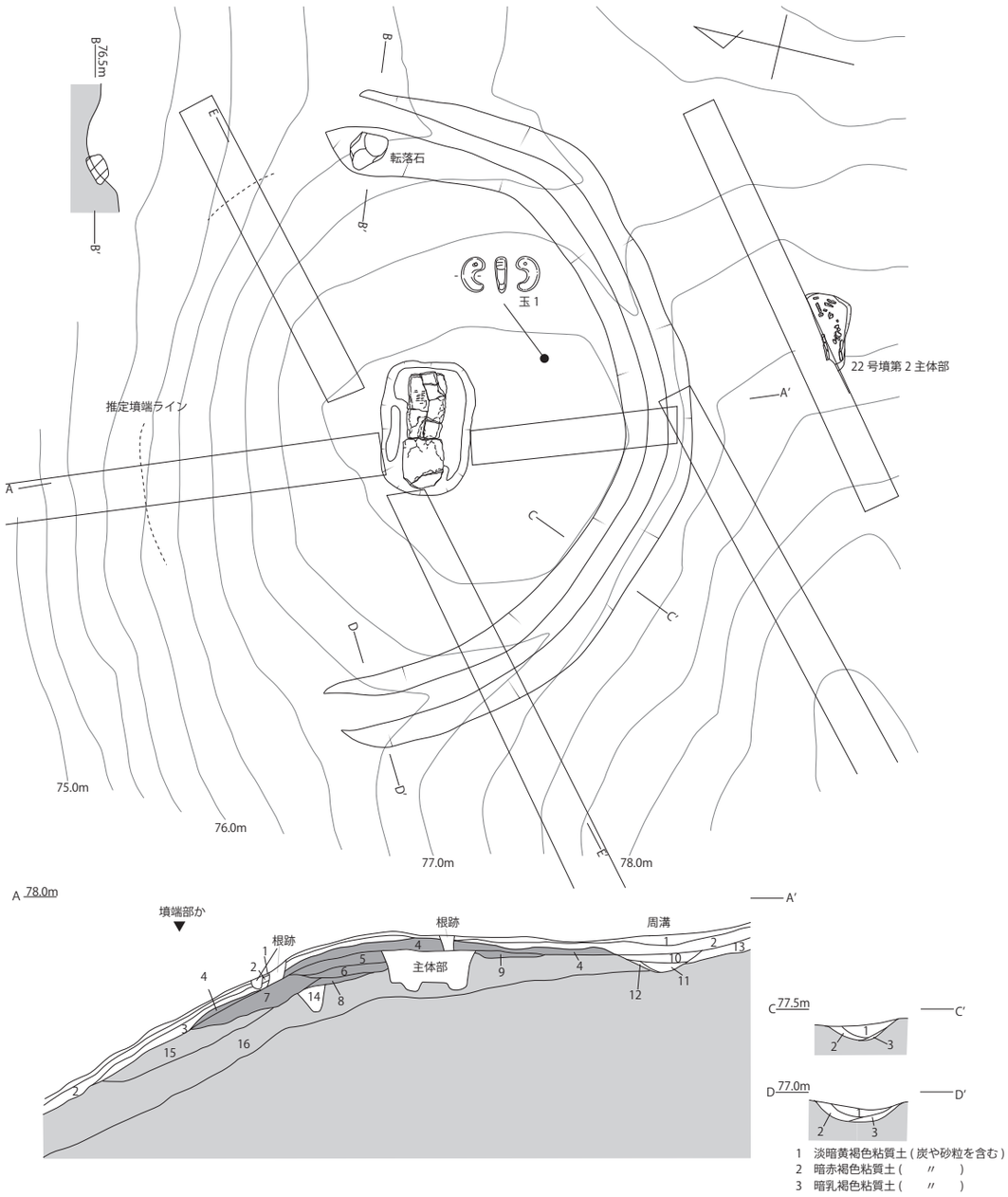
時期の特定は難しいが、施文や調整の特徴から石見Ⅴ－ 1 様式に属するものと思われ、遺構の時



第 147 図　庵寺古墳群加工段 29 実測図



第 148 図　庵寺古墳群加工段 29 出土遺物実測図

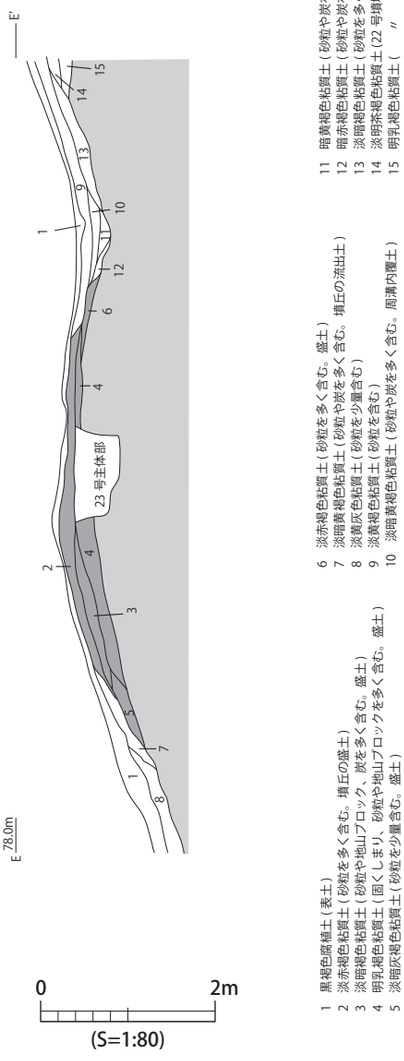


1 淡暗黄褐色粘質土 (炭や砂粒を含む)
2 暗赤褐色粘質土 (〃)
3 暗乳褐色粘質土 (〃)

1 黒褐色腐植土 (表土)
2 淡黄褐色粘質土 (砂粒を含む)
3 薄黄褐色粘質土 (砂粒を多く含む。墳丘の流出土)
4 淡赤褐色粘質土 (黄色土ブロックを含む。盛土)
5 暗茶褐色粘質土 (黄色土ブロックを含む。盛土)
6 淡暗褐色粘質土 (炭や地山ブロックを多く含む)
7 淡明橙色粘質土 (砂粒や地山ブロックを多く含む。盛土)
8 明乳褐色粘質土 (〃)
9 暗茶褐色粘質土 (〃)
10 淡暗黄褐色粘質土 (炭や砂粒を少量含む・周溝内覆土)
11 暗褐色粘質土 (炭を多く含む。周溝内覆土)
12 暗赤褐色粘質土 (砂粒を多く含む。周溝内覆土)
13 暗乳褐色粘質土 (砂粒や地山ブロックを多く含む。22 号墳の流出土か)
14 暗茶褐色粘質土 (炭を多く含む。加工段 30 ピット内覆土)
15 赤褐色粘質土 (固くしまる。地山)
16 明灰褐色粘質土 (〃)

0 2m
(S=1:80)

第 149 図　庵寺古墳群 23 号墳墳丘測量図



第 150 図　庵寺古墳群 23 号墳
縦断面土層図

期は弥生時代後期前葉と考えられる。

23 号墳（第 149 ～ 153 図）

立地状況　尾根上平坦面と斜面との際に立地し、22 号墳の墳丘の北側隅を削平して築造されている。調査前から墳丘状の高まりが明瞭で、標高は 76.5 ～ 77.25m である。

立地的に尾根筋の中央でなく、あえて斜面際に築造されたのか検討の余地があるが、22 号墳第 2 主体部を避けてのことなのか、或いは 22 号墳と同様に北側からの視覚的効果を意識してのこととも考えられる。

墳丘規模と形態　墳丘北側は流出しているが、全体的に比較的形状を留めており、また南側は周溝が巡ることから墳丘規模は径 5 ～ 6 m の円墳と考えられる。

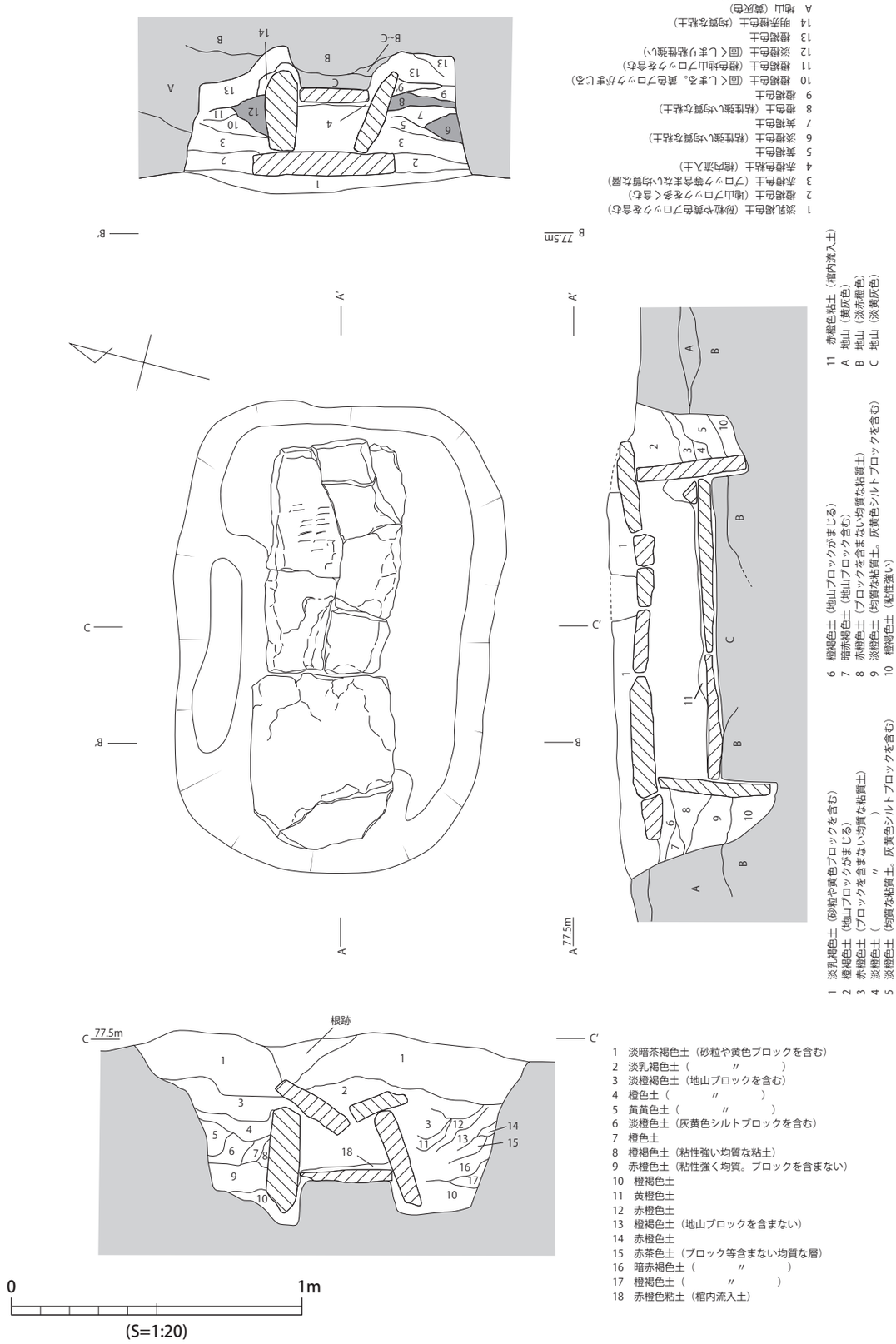
墳丘は現状で最大厚 40cm の盛土により構築されていた。ただ墳丘が斜面際に立地することもあり、墳丘を造成する基盤面は南北方向に傾斜をもって平坦に成形されている。従って築造工程としては、基盤面を成形した後、まず斜面側に盛土を充填して墳丘の高さを尾根筋側と水平に揃える。その後墓壙を掘り込み石棺を設置し、遺骸を埋葬して埋め戻した後、上方に再度盛土をして墳丘を構築したと推測される。また 22 号墳と同様に北側の墳丘傾斜面を幅広く緩やかに面取りすることで、平野部からの視覚的効果を狙ったとも考えられる。

この他、墳丘頂部の南側を精査中に滑石製勾玉が出土した。また、東側の周溝内からは古墳の標石だったとみられる円礫状の転落石が検出された。

周溝　墳丘の東側から南側、西側にかけて半円形状に巡っており、北側は流出のためか途切れている。断面は緩やかなＵ字状を呈し、長さは約 12 m、幅 0.8 ～ 1 m、最大深 30cm を測る。東端部では長さ 80cm の円礫が溝側部に埋まり込んだ状態で検出されたが、墳頂部から転落した標石状の礫と考えられる。

主体部　主体部は墳頂部中央付近で 1 基検出された。平面プランは隅丸長方形状を呈し、長軸は東西方向に合わせている。

墓壙は一段掘構造とみられ、箱型に掘り込まれている。掘り方の規模は上面で長さ 1.6 m、幅 113cm、深さ 45cm、床面で長さ 1.35m、幅 90cm を測る。床面の中央には長方形状の高まりが地山層を垂直に削り出して造成されており、そのため墓壙の断面はあたかも逆凹状を呈している。この箱形の高まりは石棺の台座といえるもので、その規格は長さ 104cm、幅 25 ～ 34cm、高さ 13cm を測る。

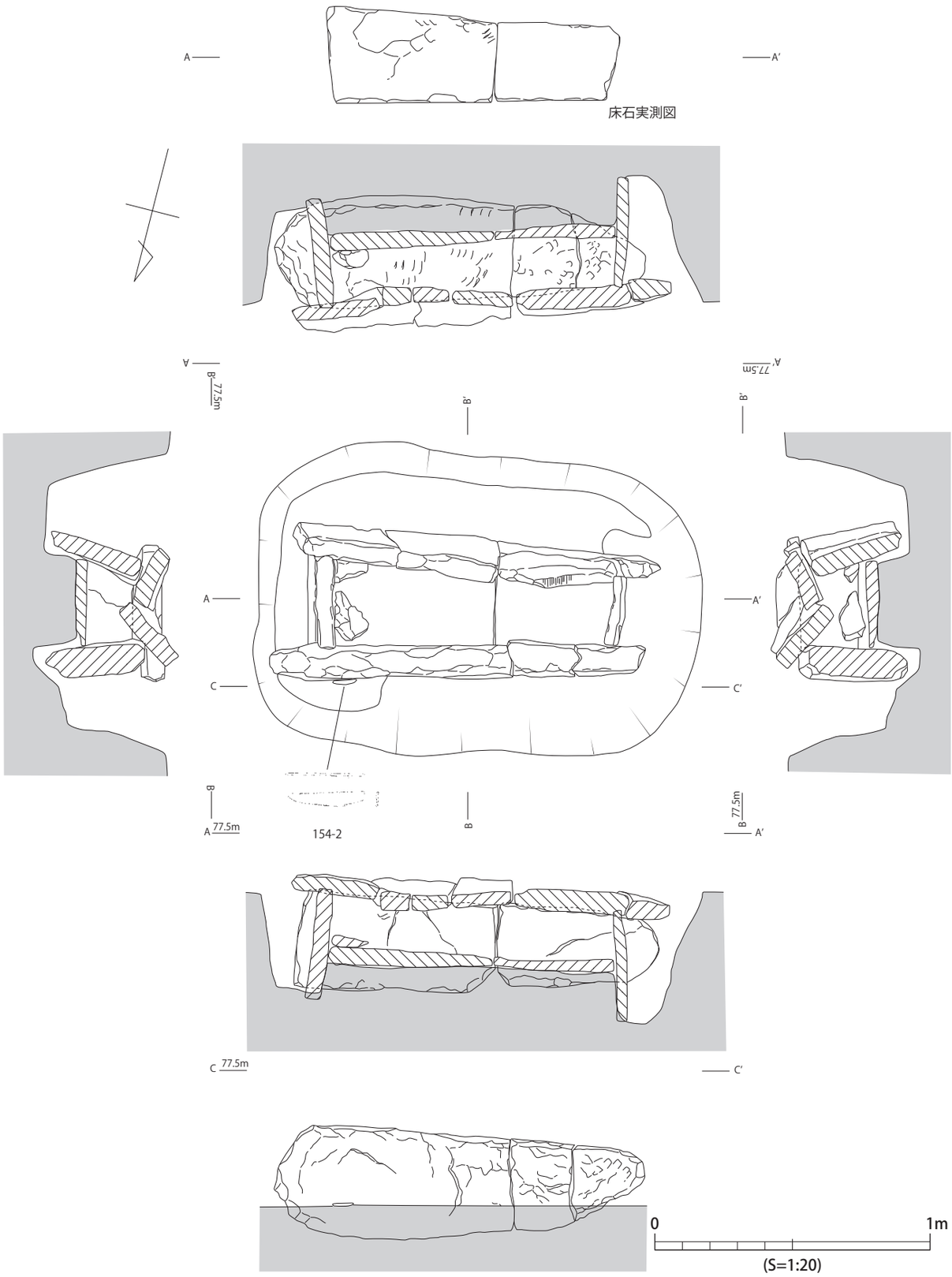


1 淡暗茶褐色土（砂粒や黄色ブロックを含む）
2 淡乳褐色土（ 〃 ）
3 淡橙褐色土（地山ブロックを含む）
4 橙色土（ 〃 ）
5 黄黄色土（ 〃 ）
6 淡橙色土（灰黄色シルトブロックを含む）
7 橙色土
8 橙褐色土（粘性強い均質な粘土）
9 赤橙色土（粘性強く均質。ブロックを含まない）
10 橙褐色土
11 黄橙色土
12 赤橙色土
13 橙褐色土（地山ブロックを含まない）
14 赤橙色土
15 赤茶色土（ブロック等含まない均質な層）
16 暗赤褐色土（ 〃 ）
17 橙褐色土（ 〃 ）
18 赤橙色粘土（棺内流入土）

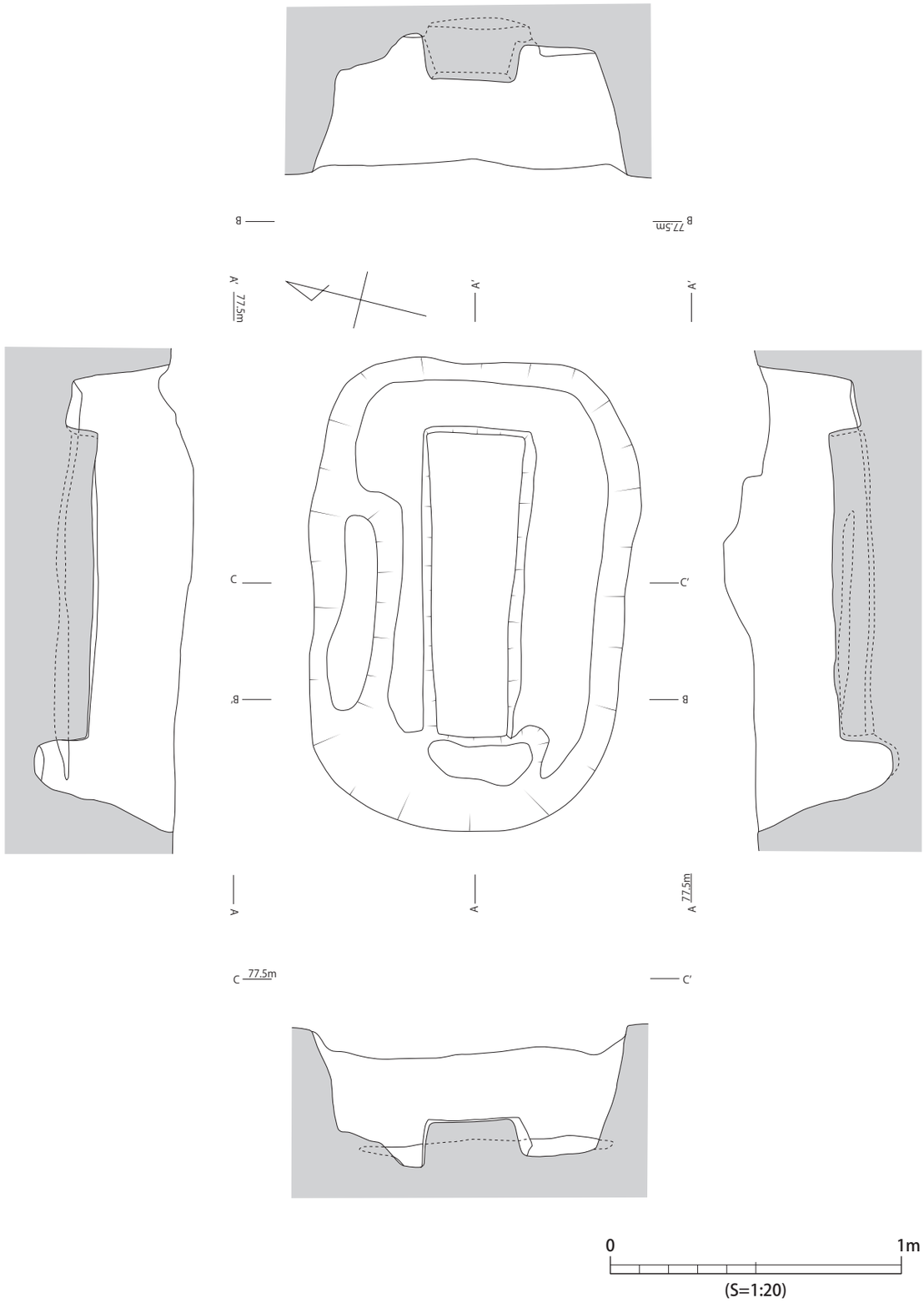
1 淡乳褐色土（砂粒や黄色ブロックを含む）
2 橙褐色土（地山ブロックがまじる）
3 赤橙色土（ブロックを含まない均質な粘質土）
4 淡橙色土（ 〃 ）
5 淡橙色土（均質な粘質土。灰黄色シルトブロックを含む）
6 橙褐色土（地山ブロックがまじる）
7 暗赤褐色土（地山ブロック含む）
8 赤橙色土（ブロックを含まない均質な粘質土）
9 淡橙色土（均質な粘質土。灰黄色シルトブロックを含む）
10 橙褐色土（粘性強い）
11 赤橙色粘土（棺内流入土）
A 地山（黄灰色）
B 地山（淡赤橙色）
C 地山（淡黄灰色）

1 淡乳褐色土（砂粒や黄色ブロックを含む）
2 橙褐色土（地山ブロックを多く含む）
3 赤橙色土（ブロックを含まない均質な層）
4 赤橙色粘土（棺内流入土）
5 黄褐色土
6 淡橙色土（粘性強い均質な粘土）
7 黄褐色土
8 橙色土（粘性強い均質な粘土）
9 橙褐色土
10 橙褐色土（固くしまる。黄色ブロックが少ない）
11 橙褐色土（橙色地山ブロックを含む）
12 淡橙色土（固くしまり粘性強い）
13 橙褐色土
14 明赤橙色土（均質な粘土）
A 地山（黄灰色）
B 地山（淡赤橙色）
C 地山（淡黄灰色）
6~8、10~13はブロックまじりの層と均質な粘土層を交互に積んでいる

第 151 図　庵寺古墳群 23 号墳石棺実測図 (1)



第 152 図　庵寺古墳群 23 号墳石棺実測図 (2)



第 153 図　庵寺古墳群 23 号墳主体部完掘状況

この台座の上面には、石棺の底板石が台座の平面規模に合わせた状態で設置されていた。この様子から石棺の設置工程を復元すると、まず墓壙を掘り込み床面を平坦に成形する。床面に石棺の底板材を敷き、続いて底板の周りの床面を掘り下げ方形状の台座を造り出す。その後、小口板と側板を台座に沿ってH型に組み合わせ、石棺を構築したと推測される。なお、床面の北側が台座に沿って溝状に深く掘り込まれているが、おそらく用意した小口板が長かったため、溝を掘って板材をはめ込むことで石棺の高さを揃えたのであろう。また墓壙内覆土の土層観察では、小口板と側板を設置した後、裏込めに均質な粘土層とブロック混じりの層を交互に充填して棺材を固定した痕跡も認められた。墓壙内からは床面で刀子が検出されている。

箱式石棺（第 151・152 図） 前述したように、墓壙内床面に造り出された台座状の高まりに沿って箱式石棺が組み合わされていた。凝灰岩を板状に加工し組み合わせたもので、石棺の主軸はＥ－12°－Ｎである。石棺は東側の蓋石が割れて棺内に落ち込んでいるが、規模は蓋石の長さ 1.42m、幅 45 ～ 50cm、棺内の長さ 104cm、幅 28 ～ 35cm、床面から蓋石までの高さは 20cm を測る。床面は東側が幅広く、頭位だったと考えられる。

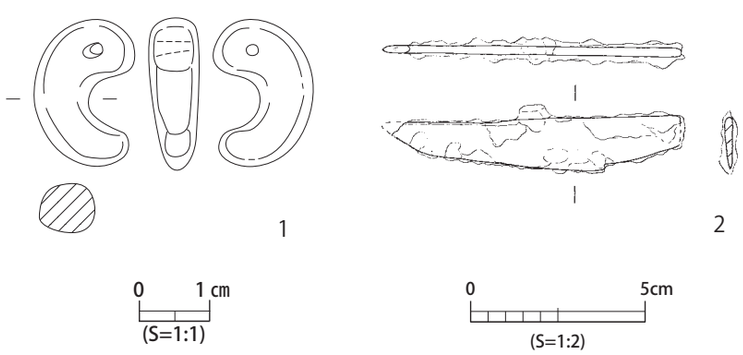
棺の構造は側板で小口板を挟むH型で、蓋石に２枚、側板は両側とも２枚の板材が使用される。側板は両側で仕様が大きく異なり、北側板は厚さ 11cm と荒削り段階とみられ内外面に工具による加工痕が明瞭に残っている。南側板は厚さ 7cm と薄く仕上げの研磨痕が認められる。底板は２枚で厚さ３～４cm と薄く仕上げられている。また東側小口付近には２点の小礫が石枕状にかたまって設置されていた。

棺内から遺物は検出されなかった。

出土遺物（第 154 図）

１は主体部の南西側 80cm の位置で検出された滑石製の勾玉である。長さ 2.1cm、幅 1.4cm、厚さ 1.7cm を測る。穿孔方向は片面である。２は刀子である。ほぼ完形品で、墓壙内の棺外で北側側板に沿って副葬されていたとみられる。片関で棟が直線状に伸び、断面は扁平である。全長は 8.3cm、刃部幅 1.6cm、茎の長さ 2.2cm、幅 1.3cm を測る。

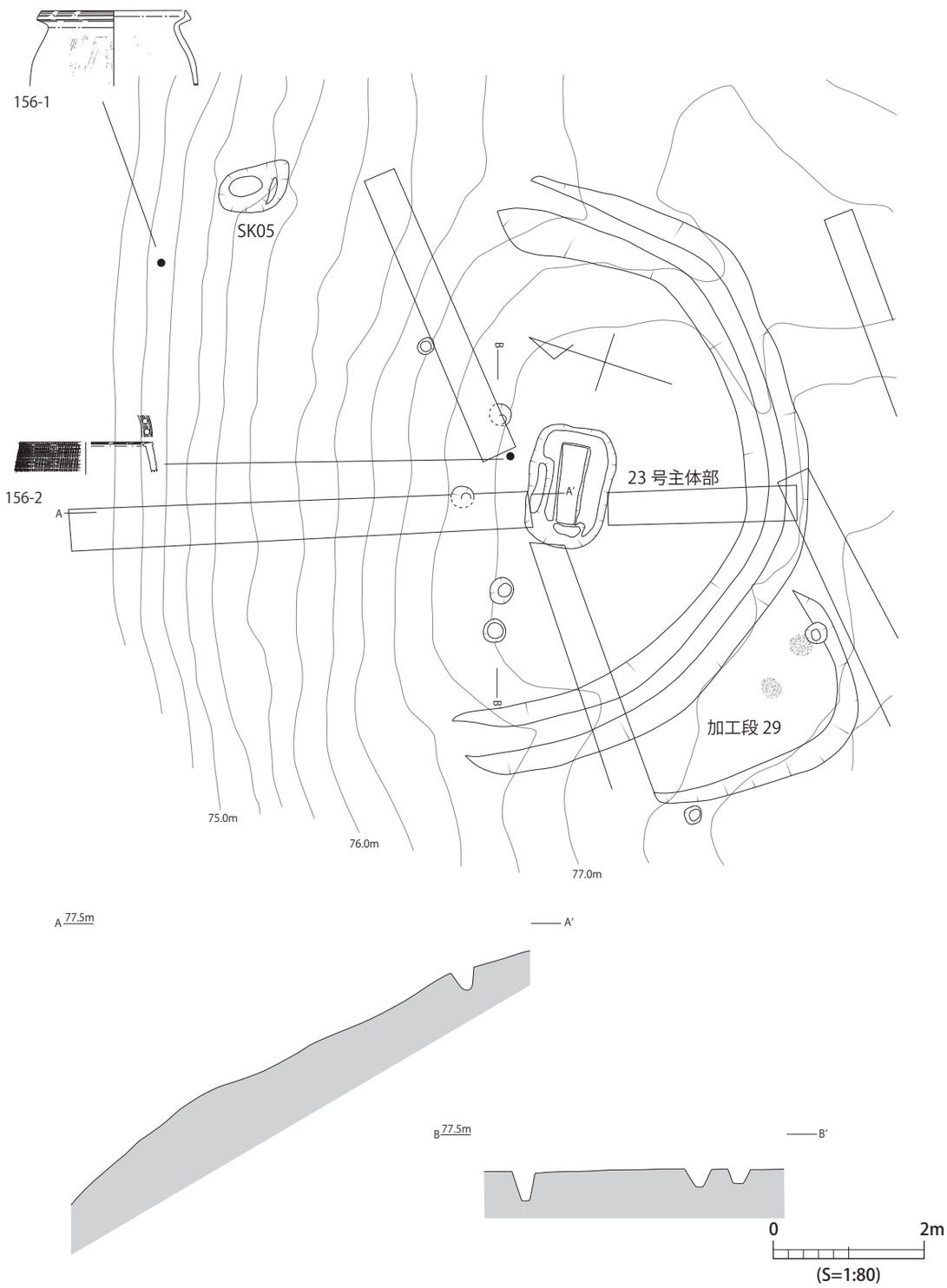
土器が出土しておらず遺物の時期を特定することは難しいが、滑石製勾玉は小型の定形勾玉で、その盛行時期は古墳時代前期末～中期前半代とされている[19]。また刀子も時期の下限は中期前半代といえる特徴をもつことから[20]、両者は時期的に矛盾しないといえる。従って 23 号墳の築造時期も概ね中期中葉段階が下限とされる。



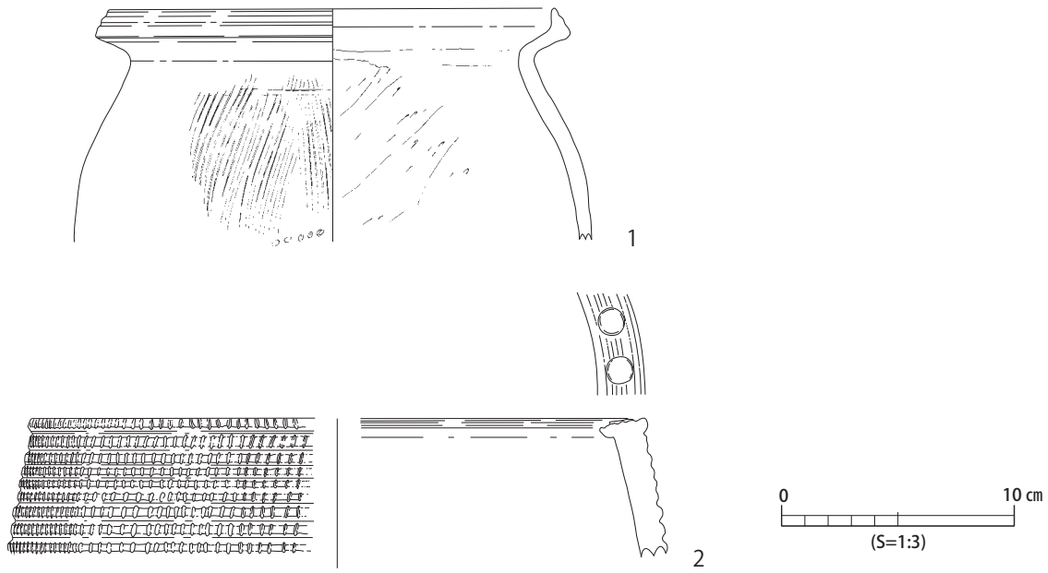
第 154 図　庵寺古墳群 23 号墳出土遺物実測図

加工段 30（第 155 図）

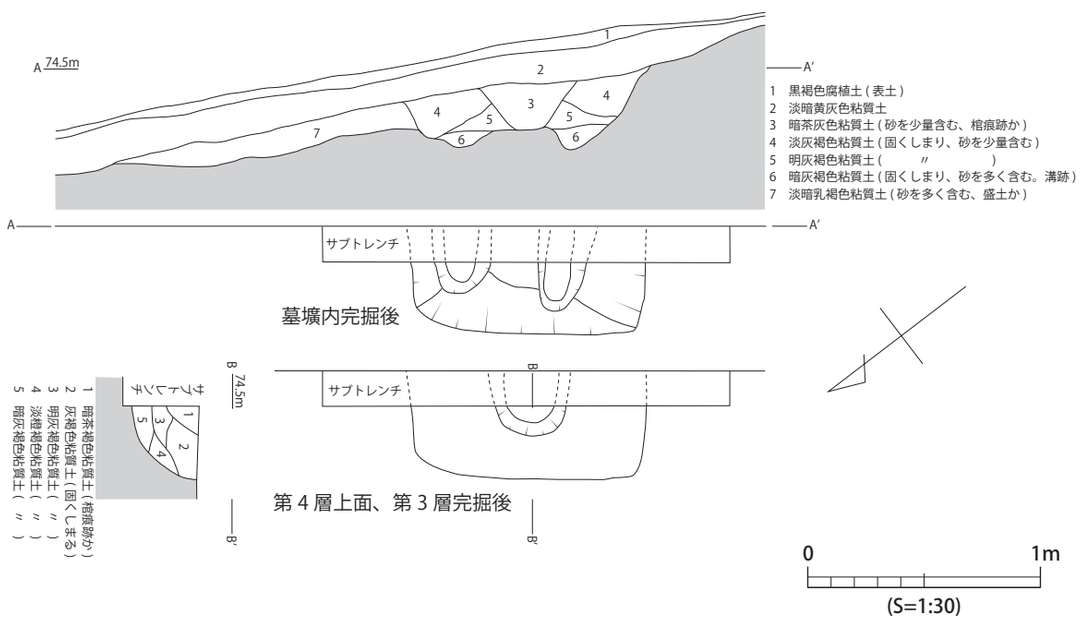
23 号墳の墳丘盛土を除去した際に、下方の地山面で検出された加工段である。北側は流出しており、また 23 号墳築造の際に地山面が大きく成形されたためか、段状の掘り方は検出されなかった。ただ地山面で斜面に沿って並ぶピットが検出され、周辺から土器片も出土したことから加工段が存



第 155 図　庵寺古墳群 23 号墳盛土除去後測量図及び加工段 30 検出状況



第 156 図　庵寺古墳群加工段 30 出土遺物実測図



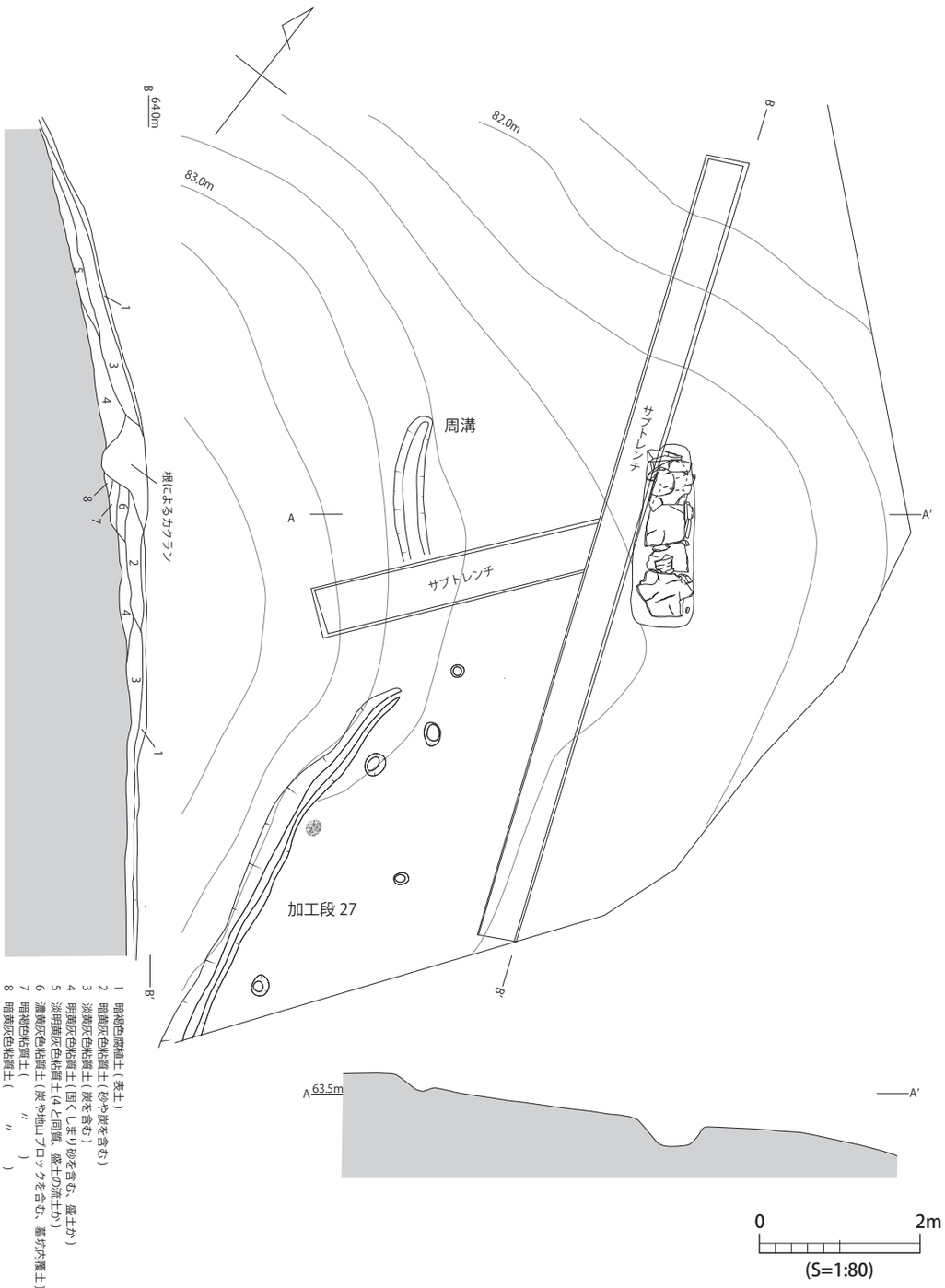
第 157 図　庵寺古墳群 24 号墳主体部実測図

在していた可能性が高いと判断した。

ピットは平坦面の際から斜面にかけて 5 点検出された。3 点が崖面に沿って直線状に並んでおり、建物が存在していたことも想定される。柱間は 2.2 ～ 2.8 m、柱穴の深さは 20 ～ 40cm を測る。

出土遺物（第 156 図）

1 は平坦面から 4 m下方の斜面で出土した土器片である。加工段の流出品であることも考えられ掲載した。復元口径 19cm の甕で、口縁は内傾して短く立ち上が外面に 2 条の凹線が施される。胴部外面にはタテ方向のハケ調整及び列点状の刺突文、内面にはヘラケズリが施される。2 は地山面直上の盛土内から出土した鉢の口縁部である。口縁端部を水平に肥厚させ、端部に凹線文と円形浮文が施され、外面に重層の刻目文が施される。



第 158 図　庵寺古墳群 25 号墳墳丘測量図

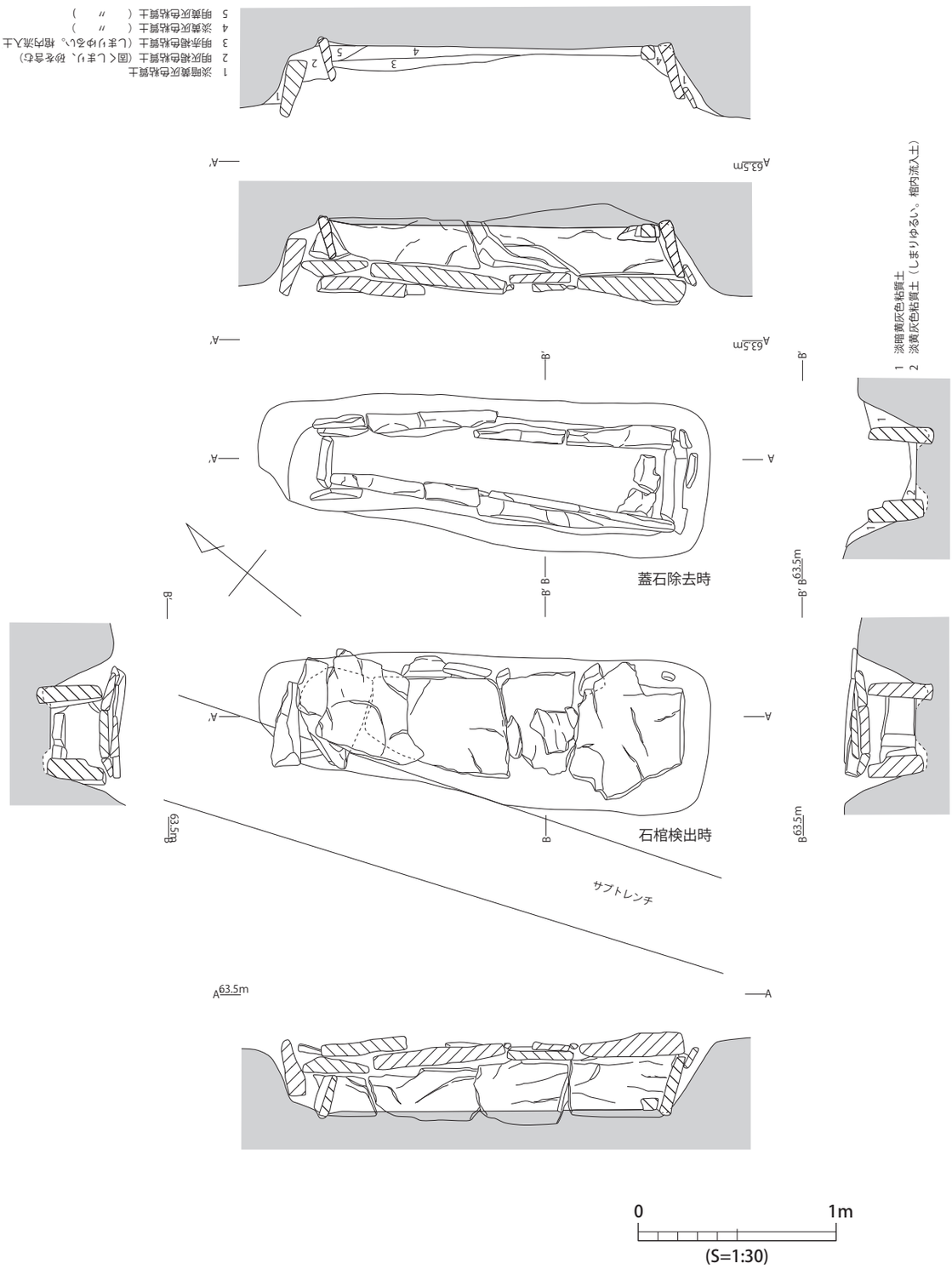
遺物の時期は、1 が石見Ⅴ－1 様式、2 はⅣ様式に相当するとみられる。いずれも加工段に直接伴う資料ではなく遺構の時期の特定は難しいが、概ね弥生時代中期末～後期前葉と推定されよう。

24 号墳（第 157 図）

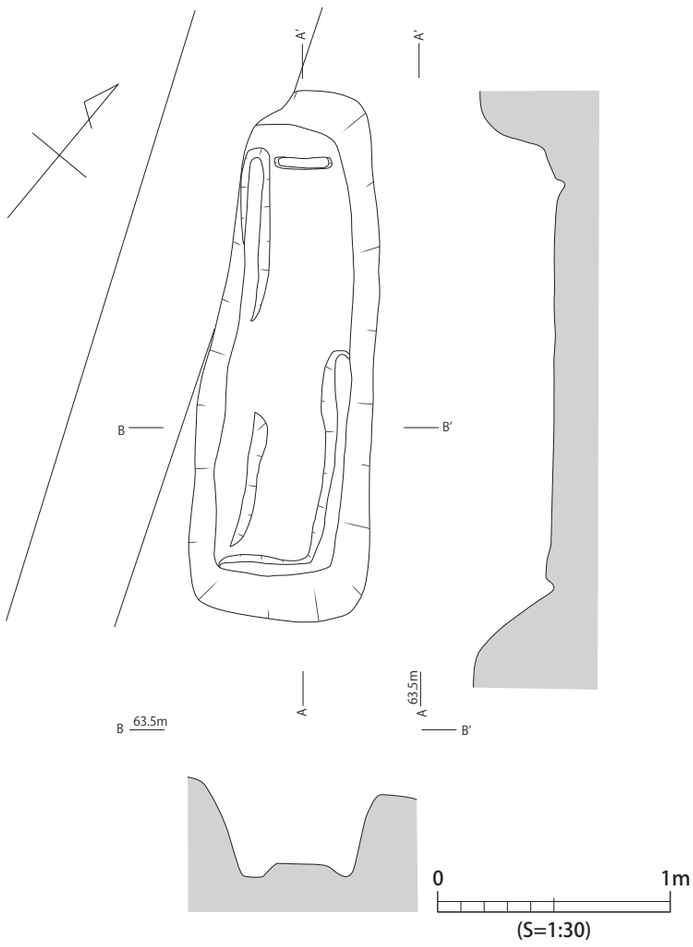
立地状況　南側丘陵部の尾根筋ほぼ中央部で検出された古墳である。標高は 74.25m である。周辺の尾根上平坦面は大部分が調査区外に広がっており、23 号墳から尾根筋下方約 20m の範囲で古

墳の空白地帯となっていたが、調査区との境で主体部の一部を確認した。また土層断面で盛土の痕跡が認められたが、墳丘の規模や形態は不明である。

主体部　尾根筋に沿った調査区の壁面にサブトレンチを入れたところ、土坑状の落ち込みの小口部分を検出することができた。大部分は調査区外に伸びているとみられ、またサブトレンチにより一部を抜いてしまったが、長方形状の墓壙が尾根筋に直交して掘り込まれていると考えられる。墓



第 159 図　庵寺古墳群 25 号墳石棺実測図



第 160 図　庵寺古墳群 25 号墳主体部完掘状況

壙の規模は現状で幅 1 m、深さ 20cm を測る。

墓壙内を掘削したところ、床面の両辺で溝状の掘り込みが検出されたことから、組み合わせ式木棺の側板を埋め込んだ痕跡と思われた。しかしながら土層断面の観察では、箱形の木棺を設置した痕跡は認められず、中央には逆台形状に暗灰色系粘質土（3 層）が堆積し、その両側には固くしまった灰褐色系粘質土（5 層）がナナメに堆積する様子がうかがえた。これを積極的に肯定すれば、3 層は底面 U 字型の木棺を据えた痕跡で、5 層は木棺を固定し支えるための棺床粘土であったと推測される。そう解釈すれば、当主体部は刳抜式木棺を直葬した埋葬施設であり、床面両辺の溝は「棺台」を造り出すためのものと考えられる。

調査可能範囲が狭く、これ以上のことは言及できない。また墓壙内から遺物は検出されておらず、古墳の所属時期も不明である。

Ⅰ群の様相

尾根筋の先端部に位置する古墳である（25 号墳）。調査区の壁面で石棺が検出され、調査区を北東側に拡張して古墳の主体部を確認した。これより先は地形が崖状に下がっており、これ以上調査範囲を広げることはできなかった。

25 号墳（第 158 ～ 160 図）

立地状況　当初は古墳の存在を認識していなかったが、駄目押しで調査区先端部の壁面に沿ってサブトレンチを十字状に入れたところ、断面から石棺材とみられる礫片が検出された。そのため調査区を拡張した結果、尾根筋の平坦面が舌状に突出する様子がうかがえ、その中心付近で主体部を明らかにすることができた。付近の標高は 63.5 mである。

墳丘規模と形態　尾根筋の先端に位置することから地形は大きく流出しているとみられ、墳形や規模の特定は難しい。しかしながら、主体部を切ったサブトレンチ断面では盛土らしき黄灰色系のし

まった粘質土層が残存しており、南西側には周溝状の溝が検出された。これらを基に反転復元すると、概ね径６ｍの円墳と推測される。

周　溝　尾根筋の地形がやや緩やかな平坦面を形成する地点で、尾根筋に直交して伸びる溝状遺構が検出された。主体部の周りを巡るように弧状に伸びることから、古墳の周溝と判断される。南東側をサブトレンチにより掘り込んでしまったが、現状で長さ 1.9 m、幅 40cm、深さ 20cm を測る。

主体部　尾根上平坦面の中央付近で尾根筋に直交する墓壙が検出された。一段掘の墓壙で、掘り方の北西側をサブトレンチで削平してしまったが、平面プランは長方形状を呈し、長軸は南北方向に沿っている。規模は上面で長さ 2.3m、幅 78cm、深さ 36cm、床面で長さ 1.94cm、幅 46 ～ 52cm を測り、床面は南側が幅広くなっている。墓壙内には箱式石棺が埋納されており、床面の両辺や小口部には棺材を設置するための溝が掘り込まれている。

箱式石棺　流紋岩質の礫を板状に割って組み合わせており、石棺の主軸はＮ－ 34°－Ｗを指向する。蓋石の長さは 1.94 m、幅 52 ～ 69cm、棺内の長さ 1.66 m、幅 20 ～ 36cm、蓋石までの高さ 20 ～ 26cm を測る。床面は南側に向かって大きく広がっており、南側が頭位だったと考えられる。床面に底板は無く、南側小口付近には礫が２点ほど石枕状に配置されていた。

小口と側板の組み方は、北側がＨ型構造を呈するのに対し、南側は小口板が側板を押さえるⅡ型構造となっている。蓋石の上にも繋ぎ目を覆うように板材が配置され、墓壙と石棺の隙間にも板材の小片がはめ込まれている。また墓壙の北側は壁面と小口板との間が大きく開いており、そこに板材を立て蓋石を押さえている。そのため、あたかも副室構造となっているが、遺物は検出されず意図的なものか定かでない。

古墳の時期や性格　棺内から遺物は検出されず、古墳の時期を特定することは難しい。しかしながら、立地条件が北側丘陵の先端部で検出された 13 号・14 号墳と類似しており、石棺の使用石材や蓋石の上にさらに石を積み上げる構造が共通すると指摘できる。従って、25 号墳は南側丘陵先端部に築造された古墳時代終末期の山寄せの単葬墓と考えられる。

註

(1)　同じ構造の竪穴建物跡としては、出雲部の安来市岩屋口北遺跡 SI04（弥生時代後期末）、柳遺跡 SI08（後期末）などが知られる。

島根県教育委員会 1997『一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 13 岩屋口北遺跡・臼コクリ遺跡（Ｆ区）』

島根県教育委員会 1998『一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅸ 13 塩津丘陵遺跡群』

(2)　出雲市教育委員会 2002『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第 12 集下古志遺跡－考察編－』

(3)　安来市塩津山遺跡では、丘陵斜面から長さ 37 m、幅７ｍにおよぶ広大な加工段（弥生時代後期末）が検出されているが、床面からはピットが１点認められたのみであった。また同一丘陵に存在する前掲の柳遺跡や竹ヶ崎遺跡と合わせ合計 70 基を超える加工段が検出されているが、柱穴の認められないものも 30 基あまり含まれている（Ⅲ類）。これらの性格について、通路や広場、物置といった機能の他、急勾配な斜面を利用する簡便な上屋が存在した可能性も示唆されている（文献は註 (1) と同じ）

(4)　陶磁器の特徴や産地、時期については、島根県埋蔵文化財調査センター阿部賢治氏のご教示を得た。

(5)　大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集　島根考古学会

(6)　１Ａ号墳出土品のうち、２点出土した耳環について報告では金銅製とされているが、鳥取県立博物館・東方仁史氏から１点は錫製の可能性がある旨のご指摘を得た。これを受け資料の蛍光Ｘ線分析を試みた結果、錫製の可能性が高い測定値が示された（第５章参照）

(7)　島根県立風土記の丘資料館 1998『八雲立つ風土記の丘』№ 147・148・149 合併号

(8)　一つの箱式石棺に二体を埋葬する同棺複数埋葬は、県内では類例が認められないが、山陰東部の鳥取県では 24 例が知られている。このうち人骨が遺存するものは 14 例あり、人骨が遺存しないものでも棺内に置かれた石枕や土器枕の配置から追葬による複数埋葬が想定されている。

財団法人鳥取県教育文化財団 2000『鳥取県教育文化財団調査報告書 64　一般国道 313 号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書　鳥取県東伯郡北条町　島古墳群・米里三ノ嵜遺跡・北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）』

(9)　石材については、中村唯史氏の鑑定を受けた。大田市は日本海グリーンタフ地帯の西限にあたり、古くから石材の採掘・加工が行われている。当古墳群で石棺に使用された凝灰岩も、遺跡の周辺で採取されたものとみられる。

(10)　棺底や墓壙内床面に敷かれていた小円礫について、すべて回収し計測を行った。全データを掲示することはできないが、総個数は 10,067 点、総重量は 49,865.4 g、平均重量 117.1 g、平均長 15.5mm、平均幅 11.4mm の計測値 が示された。

なお石材は、中村唯史氏により凝灰岩との鑑定を受けた。石棺に使用された凝灰岩とは同質のもので、このような凝灰岩の小円礫は、遺跡下方の平野部を流れる 潮川の川底にも堆積している。

(11)　なお、15 号墳と 5 号墳から出土した淡青色のガラス小玉について、田村朋美氏の分析に寄れば、15 号墳はカリガラス、5 号墳はソーダ石灰ガラスと異なる結果が示された。銅着色のカリガラス製小玉は弥生時代中期後葉から流入が開始し、古墳時代前期後葉に同色の高アルミナソーダ石灰ガラス製小玉と入れ替わるように流通が途絶えると考えられている。それぞれ 1 点のみの出土ではあるが、ガラス小玉の分析でも 5 号墳の方が新しい様相を示唆している。

大賀克彦 2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ小羽山古墳群』

(12)　神原神社古墳からは 36 点の鉄鏃が出土しており、そのうち 3 点が定角式で、他は鏃頭式のものが多数を占める。

加茂町教育委員会 2002『神原神社古墳』

(13)　松江市教育委員会・(財) 松江市教育文化振興事業団 1994『(財) 松江市教育文化振興事業団文化財調査報告書第 1 集　釜代 1 号墳外発掘調査報告書Ⅰ』

(14)　中村唯史氏の鑑定による。流紋岩は古墳群が立地する丘陵の潮川を挟んだ対岸に連なる丘陵で豊富に露出している。石見城が立地する竜嵜山も流紋岩の岩山である。

(15)　角礫を用いた箱式石棺を埋葬施設とした山寄せの墳墓は、安来市石田遺跡 SX01、平ラⅡ遺跡 SX01 などが知られる。これらは立地や規模、主体部の構造において共通点が多い。

島根県教育委員会 1998『一般国道 9 号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 15 石田遺跡Ⅲ』

島根県教育委員会 1995『一般国道 9 号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 10 平ラⅡ遺跡・佐山根 1 号墳・穴神横穴墓群』

(16)　大賀克彦 2008「成塚向山 1 号墳の玉類」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 426 集』

(17)　大賀克彦 2013「2 玉と石製品の型式学的研究 ①玉類」『古墳時代の考古学 4 副葬品の型式と編年』同成社

(18)　石見部では、他に邑南町の下川原 1 号墳例がある。径 17m の円墳で、箱式石棺と木棺墓が検出されているが、木棺墓の墓壙内で黄色粘土が木棺の縁を覆うように検出され、棺材の合わせ口を密封したものと推定されている。

石見町教育委員会 1994『石見町文化財調査報告書第 7 集　中山古墳群－平成 5 年度実態調査概要報告書－』

寺脇隆彦・中田健一・大谷晃二 1995「石見町下川原墳墓群の調査」『島根考古だより』第 48 号　島根考古学会

(19)　註 (11)・(12) と同じ

(20)　三宅博士 1986「山陰地方出土刀子に関する覚書」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会

参考文献

青木敬 2013「古墳の墳丘構造」『月刊考古学ジャーナル 7』№ 644　ニューサイエンス社

島根県教育委員会 2010『一般国道 9 号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 3 梨ノ木坂遺跡・庵寺古墳群・庵寺遺跡Ⅱ』

松山智弘 2010「最後の四隅突出型墳丘墓」『古代文化研究』第 18 号　島根県古代文化センター

第５節　遺物観察表

第２表　庵寺古墳群出土土器観察表

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	調整及び文様等	胎土(砂粒)	色調	備考(形式、時期等)
10 - 1	83	SI01		弥生土器	甕	(23.8)		(外) ２条の凹線、ヨコナデ (内) ハケ、指頭圧痕	密 0.1 ～ 1㎜	(外) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) にぶい黄橙 (10YR6/4)	Ⅳ -2
10 - 2	83	SI01		弥生土器	甕	(9.8)		(外) ２条の凹線、刺突文、ヨコナデ (内) ヘラケズリ	やや粗 0.5 ～ 2㎜	(外) 明黄褐 (10YR7/6) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	Ⅴ -1
10 - 3	83	SI01		弥生土器	甕	(19.0)		(外) 凹線、刺突文、ヨコナデ、ハケ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	1 ～ 2㎜多い 石英	(外) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	Ⅴ -1
10 - 4	83	SI01	上層	弥生土器	甕	(18.2)		(外) 凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	密 0.5㎜以下	(外) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	Ⅴ -1
10 - 5	83	SI01		弥生土器	甕	(17.8)		(外) 凹線、ナデか (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	2㎜多い 石英	(外) 黄 (2.5Y8/6) (内) 黄 (2.5Y8/6)	Ⅴ -1
10 - 6	83	SI01		弥生土器	甕	(26.1)		(外) ２条の凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、指頭圧痕、ハケ	1㎜	(外) 黄橙 (10YR8/6) (内) 黄橙 (10YR8/6)	Ⅳ -2
10 - 7	83	SI01		弥生土器	甕	(11.9)		(外) ２条の凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、指頭圧痕	密 0.1 ～ 1㎜	(外) 黄灰 (2.5Y5/1) (内) 黄灰 (2.5Y5/1)	Ⅴ -1 か
10 - 8	83	SI01		弥生土器	甕	(21.8)		(外) ２条の凹線、刺突文、 ナデ、タタキ後ハケ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	微砂粒 石英、 赤茶色粒子	(外) 浅黄橙 (10YR8/4) (内) 浅黄橙 (10YR8/4)	Ⅴ -1
10 - 9	83	SI01		弥生土器	甕			(外) ２条の凹線 (内) ヨコナデ	密 0.1 ～ 1㎜わずか	(外) 褐灰 (10YR6/1) (内) 褐灰 (10YR5/1)	Ⅴ -1 か
10 - 10	83	SI01		弥生土器	甕			(外) ３条の凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ	密	(外) 褐灰 (10YR6/1) (内) 褐灰 (10YR4/1)	Ⅴ -1 か
10 - 11	83	SI01		弥生土器	甕	(19.8)		(外) ３条の凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	1㎜多い 石英	(外) 明黄褐 (10YR7/6) (内) 明黄褐 (10YR7/6)	Ⅴ -1
10 - 12	83	SI01		弥生土器	甕	(18.6)		(外) ２条の凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ	密 0.2 ～ 1㎜	(外) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	Ⅴ -1 か
10 - 13	83	SI01		弥生土器	甕	(19.6)		(外) 刺突文 (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	1㎜多い 石英	(外) 黄橙 (10YR8/6) (内) 黄橙 (10YR8/6)	Ⅴ -1
10 - 14	83	SI01		弥生土器	甕	(15.9)		(外) ２条の凹線、ヨコナデ、 ハケ、刺突文 (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	1 ～ 2㎜ 多い 石英	(外) 浅黄橙 (10YR8/4) (内) 浅黄橙 (10YR8/4)	Ⅴ -1
10 - 15	83	SI01		弥生土器	甕	(15.5)		(外) ２条の凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	密 0.2 ～ 1㎜わずか	(外) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) 褐灰 (10YR6/1)	Ⅴ -1
11 - 1	84	SI01		弥生土器	甕	(21.8)		(外) １条の凹線 (内) ヨコナデ	やや粗 0.2 ～ 2㎜	(外) にぶい黄橙 (10YR6/4) (内) にぶい黄橙 (10YR6/4)	Ⅴ -1 か
11 - 2	84	SI01		弥生土器	甕	(18.2)		(外) ２条の凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ	密	(外) にぶい黄橙 (10YR7/2) (内) にぶい黄橙 (10YR6/4)	Ⅴ -1 か
11 - 3	84	SI01		弥生土器	壺	(20.0)		(外) 口縁３条の凹線、 頚部 10 条の凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ	1㎜以下少ない	(外) 黄橙 (10YR8/8) (内) 黄橙 (7.5YR7/8)	Ⅴ -1
11 - 4	84	SI01		弥生土器	甕	(17.2)		(外) ヨコナデ (内) ヨコナデ	砂粒少ない	(外) 明黄褐 (10YR7/6) (内) 明黄褐 (10YR7/6)	Ⅴ -1 か 頚部２か所に穿孔
11 - 5	84	SI01		弥生土器	甕		4.8	(外) ナデかミガキ (内) 指押えか	2㎜ 多い 石英 長石	(外) 黄橙 (10YR8/6) 橙 (5YR7/8) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	
11 - 6	84	SI01		弥生土器	甕		5.3	(外) ナデか (内) ヘラケズリ	1㎜ 石英	(外) 黄橙 (10YR8/6) (内) 黒	底面に枝状スタンプ
11 - 7	84	SI01		弥生土器	甕		(5.8)	(外) ナデ？ (内) ヘラケズリ	砂粒少ない	(外) 浅黄橙 (10YR8/4) (内) 黒	
11 - 8	84	SI01		弥生土器	鉢			(外) 貼付突帯、刻目凹線７条以上 (内) ハケ、ナデ	砂粒少ない 石英	(外) 黄 (2.5Y8/6) (内) 黄 (2.5Y8/6)	
13 - 1	84	SI02	上層	弥生土器	甕	21.4		(外) ３条の凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ	微砂粒少ない 石英	(外) 淡黄 (2.5Y8/4) (内) 淡黄 (2.5Y8/4)	Ⅴ -1 か
13 - 2	84	SI02	上層	弥生土器	甕	(17.4)		(外) ２条の凹線、ナデ (内) ナデ	密 1㎜以下	(外) にぶい黄橙 (10YR7/3) (内) にぶい黄橙 (10YR7/3)	Ⅴ -1 か
13 - 3	84	SI02	上層	弥生土器	甕	(17.6)		(外) ２条の凹線、ヨコナデ (内) ヘラケズリ、ヨコナデ	密 2㎜以下	(外) にぶい黄橙 (10YR7/3) (内) にぶい黄橙 (10YR7/2)	Ⅴ -1
13 - 4	84	SI02		弥生土器	甕	(17.2)		(外) ２条の凹線 , ヨコナデ (内) ヘラケズリ 、ヨコナデ	1㎜以下	(外) 浅黄橙 (10YR8/3) (内) 浅黄橙 (10YR8/3)	Ⅴ -1
13 - 5	84	SI02	上層	弥生土器	甕	(18.2)		(外) ２条の凹線、ヨコナデ (内) ナデ、ヨコナデ	密	(外) にぶい黄橙 (10YR7/2) (内) にぶい黄橙 (10YR7/3)	Ⅴ -1 か
13 - 6	84	SI02	上層	弥生土器	甕	(13.0)		(外) ヨコナデ (内) ヨコナデ	密	(外) にぶい黄橙 (10YR7/3) (内) にぶい黄橙 (10YR7/3)	
13 - 7	84	SI02		弥生土器	甕	24.4		(外) ２条の凹線、ヨコナデ、 ハケ、刺突文、ヘラミガキ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	2 ～ 3㎜多い	(外) 浅黄橙 (10YR8/4) (内) 浅黄橙 (10YR8/4)	Ⅴ -1
13 - 8	84	SI02		弥生土器	鉢か		4.1	(外) ヘラミガキ、ナデ (内) ヘラケズリ	1㎜多い	(外) 灰白 (2.5Y8/2) (内、底部) 黒	
13 - 9	84	SI02	上層	弥生土器	甕		(4.0)	(外) ナデ (内) ヘラケズリ	1㎜以下多い	(外) にぶい橙 (5YR7/3) (内) 黒褐 (5YR2/2)	
13 - 10	84	SI02	上層	弥生土器	甕		(3.0)	(外) ナデ (内) ヘラケズリ	1㎜以下	(外) にぶい橙 (5YR7/3) (内) 淡橙 (5YR8/3)	

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	調整及び文様等	胎土(砂粒)	色調	備考(形式、時期等)
16 - 1	86	加工段6		弥生土器	甕	(18.8)		(外)2条の凹線、刺突文、ナデ、ハケ (内)ヘラケズリ、ナデ	粗 2～3㎜多い 石英	(外)にぶい黄褐(10YR5/3) (内)にぶい黄褐(10YR5/3)	V -1
16 - 2	86	加工段6		弥生土器	甕	(14.4)		(外)2条の凹線、ヨコナデ (内)ヨコナデ	密	(外)にぶい黄橙(10YR7/3) (内)黒褐(10YR2/2)	V -1 か
16 - 3	86	加工段6		弥生土器	甕		(4.6)	(外)ナデ (内)ナデ	粗	(外)にぶい黄褐(10YR7/3) (内)にぶい黄褐(10YR7/3)	
19 - 1	86	加工段7		弥生土器	鉢	(23.8)		(外)刻目凹線、凹線文、刺突文、ナデ (内)ナデ、ケズリ	粗 1㎜以下多い	(外)にぶい黄褐(10YR5/3)黒(10YR2/1) (内)にぶい黄褐(10YR5/3)	Ⅳ様式、塩町式
19 - 2	86	加工段7		弥生土器	甕	(10.0)		(外)2条の凹線、ナデ (内)ヨコナデ、ヘラケズリ	密 1㎜以下少ない	(外)にぶい黄褐(10YR5/4) (内)にぶい黄橙(10YR6/3)	V -1
19 - 3	86	加工段7		弥生土器	壺	(11.0)		(外)ヨコナデ、ハケ (内)ヨコナデ、ヘラケズリ	1㎜以下少ない	(外)明黄褐(10YR6/6) (内)にぶい黄橙(10YR6/3)	V -1 か
19 - 4	87	加工段7		弥生土器	蓋	13.2		(外)ナデ (内)ヘラケズリ、ナデ	1㎜以下多い	(外)にぶい黄橙(10YR7/3) (内)にぶい黄橙(10YR7/3)	V -1 か
19 - 5	86	加工段7		弥生土器	甕		(4.0)	(外)ナデ (内)ヘラケズリ	密 2㎜以下	(外)にぶい黄橙(10YR6/4) (内)灰黄褐(10YR4/2)	
19 - 6	86	加工段7		弥生土器	甕		(5.8)	(外)ナデ (内)ヘラケズリ	密 2㎜以下	(外)暗灰黄(2.5Y4/2) (内)にぶい黄橙(10YR6/4)黒(N1.5/)	
19 - 7	86	加工段7		弥生土器	甕		(4.8)	(外)ナデ (内)ナデか	粗 1㎜以下多い	(外)にぶい黄橙(10YR7/4) (内)暗灰(N3/)	
19 - 8	86	加工段7		弥生土器	甕		(4.0)	(外)ナデ (内)ナデ	1㎜以下多い	(外)にぶい橙(7.5YR7/4) (内)褐灰(7.5YR6/1)黒(7.5YR2/)	
19 - 9	86	加工段7		弥生土器	鉢	(30.2)		(外)貼り付突帯文、刻目凹線10条以上 (内)ハケ、ナデ	微砂粒	(外)明黄褐(10YR7/6) (内)明黄褐(10YR7/6)	Ⅳ -2 か
25 - 1	85	加工段1		弥生土器	甕			(外)刺突文 (内)ヘラケズリ	密 0.5～1.0㎜	(外)オリーブ黒(5Y3/1) (内)灰(5Y4/1)	V -1 か
25 - 2	85	加工段1		弥生土器	甕			(外)刺突文、ミガキか (内)ヘラケズリ	1㎜	(外)浅黄橙(10YR8/4) (内)明黄褐(10YR7/6)	V -1 か
25 - 3	85	加工段2		弥生土器	甕			(外)刺突文 (内)ヘラケズリ	やや粗 0.5～2.5㎜	(外)にぶい黄橙(10YR7/4) (内)にぶい黄橙(10YR7/4)	V -1 か
25 - 4	85	加工段3		弥生土器	甕			(外)刺突文 (内)ヘラケズリ	密 0.5㎜わずか	(外)明黄褐(10YR7/6) (内)灰褐(10YR5/1)	V -1 か
25 - 5	85	加工段4		弥生土器	甕	(22.0)		(外)2条の凹線、刺突文、タタキ後ナデ、ミガキ (内)ナデ、ヘラケズリ	1～2㎜	(外)にぶい黄橙(10YR6/4) (内)にぶい黄橙(10YR6/3)	V -1
25 - 6	85	加工段4		弥生土器	甕	(22.4)		(外)2条の凹線、ヨコナデ、ハケ (内)ナデ、ヨコナデ、ハケ	1㎜以下	(外)にぶい黄橙(10YR7/4) (内)にぶい黄橙(10YR7/4)黒褐(10YR3/1)	Ⅳ -2
25 - 7	85	加工段4		弥生土器	甕	12.2		(外)2条の凹線、刺突文 (内)ヨコナデ、ヘラケズリ	密 0.5㎜	(外)にぶい黄橙(10YR6/4) (内)にぶい黄橙(10YR7/3)	V -1
25 - 8	85	加工段4		弥生土器	甕	20.0		(外)ヨコナデか (内)	密 1～2㎜	(外)にぶい黄橙(10YR6/4)黒(10YR2/1) (内)にぶい黄橙(10YR6/4)	
27 - 1	85	加工段5		弥生土器	甕	25.0	7.4	(外)4条の凹線、ナデ、ハケ (内)ナデ、ヘラケズリ	1～2㎜多い 石英	(外)橙(7.5YR6/6) (内)橙(7.5YR6/6)	V -1
27 - 2	85	加工段5		弥生土器	甕	17.1		(外)3条の凹線、刺突文、ハケ (内)ヨコナデ、不定ナデ、ヘラケズリ	1㎜ 微砂粒は少ない	(外)黄褐(10YR5/6) (内)灰白(2.5Y8/1)	V -1 か
30 - 1	86	加工段10		弥生土器	甕			(外)刺突文、ナデ (内)ヘラケズリ、ハケ	1㎜以下	(外)灰黄褐(10YR6/2) (内)灰黄褐(10YR6/2)	V -1 か
30 - 3	86	加工段11		弥生土器	甕	(24.0)		(外)2条の凹線、ヨコナデ、刺突文 (内)ヨコナデ、ヘラケズリ	密 1㎜以下	(外)にぶい黄橙(10YR7/4) (内)にぶい黄橙(10YR7/4)	V -1
30 - 4	86	加工段11		弥生土器	甕			(外)ナデ (内)ナデ、ヘラケズリ	1㎜以下少ない	(外)明黄褐(10YR7/6) (内)明黄褐(10YR7/6)	
30 - 5	86	加工段11		弥生土器	甕		(6.2)	(外)ナデ (内)ナデか	密 0.5～2㎜	(外)にぶい橙(5YR6/3) (内)オリーブ黒(5Y3/1)	
35 - 1	89	加工段21	床上	弥生土器	甕			(外)ナデ (内)ナデ、ヘラケズリ	1㎜以下	(外)黄灰(2.5Y5/1) (内)黄灰(2.5Y5/1)	
35 - 2	89	加工段21	黒色土	弥生土器	甕		(6.2)	(外)ナデ (内)ヘラケズリ	やや粗 1～1.5㎜	(外)にぶい黄橙(10YR6/4) (内)褐灰(10YR4/1)	
35 - 4	89	加工段25		弥生土器	甕			(外) (内)指圧痕、ヘラケズリ	密 1㎜以下の白色砂粒多い	(外)浅黄橙(10YR8/3)～明黄褐(10YR6/6) (内)浅黄橙(10YR8/3)～明黄褐(10YR6/6)	
35 - 5	89	加工段27	黒色土	弥生土器	鼓型器台	17.4		(外)ナデ (内)ナデ	砂粒少 石英	(外)黄橙(10YR8/8) (内)黄橙(10YR8/8)	V -4
39 - 1	88	加工段16	黒色土	弥生土器	壺	(21.4)		(外)凹線、指頭圧痕文帯、ナデ (内)ナデ、ケズリ	2㎜ 石英	(外)明黄褐(10YR7/6) (内)明黄褐(10YR7/6)	V -1 か
39 - 2	88	加工段16	床上	弥生土器	甕			(外)3条の凹線か、ヨコナデ (内)ヨコナデ、ヘラケズリ	やや粗 0.2～2㎜	(外)明黄褐(10YR6/6) (内)明黄褐(10YR6/6)	V -1

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	調整及び文様等	胎土(砂粒)	色調	備考(形式、時期等)
39 - 3	88	加工段16	黒色土	弥生土器	甕		4.2	(外) (内)	やや粗 0.2 ～ 1.5㎜多い	(外) 明黄褐 (10YR7/6) (内) 灰白 (10YR8/1)	
39 - 5	88	加工段17	黒色土	弥生土器	甕	(15.6)		(外) 3 条の凹線、 (内) ヘラケズリ、ヨコナデ	密 0.2 ～ 1㎜	(外) 橙 (7.5YR7/6) (内) 明黄褐 (10YR6/6)	V -1 頚部に穿孔
39 - 6	88	加工段17	黒色土	弥生土器	甕			(外) ナデ (内) ヘラケズリ、ナデ	密	(外) 明黄褐 (10YR6/6) (内) 明黄褐 (10YR6/6)	V -1
39 - 7	88	加工段17	黒色土	弥生土器	甕			(外) 口縁部に 2 条の凹線 赤色顔料残存 (内)	密 0.5㎜わずか	(外) 浅黄橙 (10YR8/4) (内) 明黄褐 (10YR6/6)	V -1
39 - 8	88	加工段17	黒色土	弥生土器	甕		(3.3)	(外) (内)	やや粗 0.5 ～ 1.5㎜	(外) 橙 (7.5YR7/6) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	
39 - 9	88	加工段17		弥生土器	装飾壺		11.2	(外) 3 条の凹線 (内)	密 0.2 ～ 2㎜	(外) 橙 (5YR6/8) (内) 灰白 (7.5YR8/2)	V -1 か 外面に赤彩
43 - 1	89	加工段19	床上	弥生土器	甕	14.4		(外) 凹線、ナデ (内) ナデ、ヘラケズリ	1㎜以下少ない	(外) 橙 (7.5YR6/8) (内) 橙 (7.5YR6/8)	V -1
43 - 2	89	加工段19	黒色土	弥生土器	甕	16.6		(外) 凹線、ナデ (内) ナデ、ヘラケズリ	1㎜以下	(外) 明橙 (7.5YR5/8) (内) 明橙 (7.5YR5/8)	V -1
43 - 3	89	加工段19	上層	弥生土器	甕	15.6		(外) 凹線、刺突文 (内) ナデ、ケズリ	2㎜多い	(外) 浅黄橙 (10YR8/3) (内) 浅黄橙 (10YR8/3)	V -1
43 - 4	89	加工段19	床上	弥生土器	甕	(17.2)		(外) 3 条の凹線、 貝殻による連続刺突、ナデ (内) ナデ、ケズリ	1㎜ 石英	(外) 明黄褐 (10YR7/6) (内) 明黄褐 (10YR7/6)	V -1
43 - 5	89	加工段19	黒色土	弥生土器	甕			(外) 3 条の凹線 (内) ケズリ	密 0.5 ～ 1㎜	(外) 浅黄 (2.5Y7/4) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	V -1
43 - 6	89	加工段19	床上	弥生土器	甕		(4.2)	(外) ナデか (内) ナデか	密 0.3 ～ 1㎜	(外) 黄橙 (7.5YR7/8) (内) 橙 (7.5YR6/6)	
47 - 1	87	加工段13	下層	弥生土器	甕	(21.0)		(外) 2 条の凹線、5 条の クシ描枕線、ナデ、ミガキ (内) ナデ、ヘラケズリ	1㎜	(外) 灰白 (2.5Y8/2) (内) 灰白 (2.5Y8/2)	V -1
47 - 2	87	加工段13	下層	弥生土器	甕	(19.4)		(外) 2 条の凹線、ナデ (内) ナデ	1 ～ 2㎜ 金雲母	(外) 灰白 (2.5Y8/2) (内) 黄灰 (2.5Y5/1)	V -1 か
47 - 3	87	加工段13	下層	弥生土器	甕	(15.6)		(外) 2 条の凹線、ナデ (内) ナデ、ケズリ	1 ～ 2㎜多い 石英	(外) 褐灰 (10YR5/1) (内) 褐灰 (10YR5/1)	V -1 か
47 - 4	87	加工段13	床直上	弥生土器	甕	13.2		(外) 刺突文、ナデ、ハケ か (内) ナデ、ケズリ	2㎜多い	(外) 黄橙 (10YR8/6) (内) 黄橙 (10YR8/6)	V -1
47 - 5	87	加工段13	下層	弥生土器	甕	(25.2)		(外) 2 条の凹線、ナデ (内) ナデ、ケズリ	1 ～ 2㎜ 石英 長石	(外) 浅黄橙 (10YR8/4) (内) 浅黄橙 (10YR8/4)	V -1
47 - 6	87	加工段13	床上	弥生土器	甕	(22.4)		(外) ナデ (内) ナデ、ケズリ	1㎜ 石英	(外) 淡黄 (2.5Y8/4) (内) 淡黄 (2.5Y8/4)	V -1 か
47 - 7	87	加工段13	床直上	弥生土器	甕			(外) 刺突文 (内) ヘラケズリ	やや密 01 ～ 1㎜	(外) 黄灰 (2.5Y5/1) にぶい黄 (2.5Y6/3) (内) 黄灰 (2.5Y4/1)	
47 - 8	87	加工段13	下層	弥生土器	甕		(5.6)	(外) ナデか (内) ケズリ、煤付着	1 ～ 2㎜ 石英 長石	(外) 淡黄 (2.5Y8/4) (内) 黒	
49 - 1	87	加工段14	下層	弥生土器	甕	(21.2)		(外) 2 条の凹線、ナデ (内) ナデ、ケズリ	1 ～ 2㎜ 石英	(外) にぶい黄橙 (10YR7/3) (内) にぶい黄橙 (10YR7/3)	V -1
49 - 2	87	加工段14	黒色土	弥生土器	甕	(20.0)		(外) 2 条の凹線、ナデ (内) ナデ	1㎜ 石英	(外) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	V -1
49 - 3	87	加工段14	黒色土	弥生土器	甕	(21.0)		(外) 2 条の凹線、ナデ (内) ナデ	微砂粒わずか 石英	(外) 浅黄橙 (10YR8/3) (内) 浅黄橙 (10YR8/3)	V -1 か
49 - 4	87	加工段14	黒色土	弥生土器	甕	18.8		(外) ナデ (内) ナデ、ケズリ	砂粒少ない 金雲母	(外) 黄 (2.5YR8/6) (内) 黄 (2.5YR8/6)	V -1
49 - 5	87	加工段14	黒色土	弥生土器	甕	(22.2)		(外) 2 条の凹線、ナデ (内) ナデ	砂粒少ない	(外) 淡黄 (2.5Y8/4) (内) 淡黄 (2.5Y8/4)	
49 - 6	87	加工段14	黒色土	弥生土器	甕	(18.6)		(外) 2 条の凹線、ナデ (内) ナデ	砂粒少ない 赤茶色粒子	(外) 褐灰 (7.5YR) (内) 褐灰 (7.5YR)	V -1 か
49 - 7	87	加工段14	黒色土	弥生土器	甕	(20.0)		(外) ナデ (内) ナデ、ケズリ	砂粒少ない	(外) 灰白 (2.5Y8/2) (内) 灰白 (2.5Y8/2)	V -1 か
49 - 8	87	加工段14	黒色土	弥生土器	甕		(6.0)	(外) 底面に板の圧痕 (内) ケズリ	1㎜	(外) 淡黄 (2.5Y8/4) (内) 淡黄 (2.5Y8/4)	
49 - 9	87	加工段14		弥生土器	甕			(外) 刺突文 (内) ハケ、ケズリ	やや粗 1㎜多い	(外) 灰白 (10YR8/2) (内) 黒褐 (2.5Y3/1)	
51 - 1	88	加工段15	床上	弥生土器	甕			(外) 2 条の凹線、 6 段の重層刻目文、ナデ (内) ナデ	微砂粒少ない	(外) 明黄褐 (10YR7/6) (内) 明黄褐 (10YR7/6)	Ⅳ -1 ～ 2 塩町式
51 - 2	88	加工段15	床上	弥生土器	甕			(外) 2 条の凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	密 0.2 ～ 2㎜	(外) 明黄褐 (10YR7/6) (内) 黒褐 (10YR3/1)	V -1
51 - 3	88	加工段15	下層	弥生土器	甕	(16.6)		(外) 2 条の凹線、ナデ (内) ヨコナデ	密 0.5㎜わずか	(外) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) にぶい黄橙 (10YR6/4)	V -1 か
51 - 4	88	加工段15	黒色土	弥生土器	甕			(外) 3 条？の凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	やや粗 0.2 ～ 1.5㎜	(外) 明黄褐 (10YR7/6) (内) 橙 (7.5YR7/6)	
51 - 5	88	加工段15	黒色土	弥生土器	甕			(外) ナデ (内) ナデ、ヘラケズリ	密 0.5 ～ 2㎜	(外) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) 橙 (7.5YR7/6)	V -1 か
51 - 6	88	加工段15	包含層	弥生土器	甕		(9.0)	(外) ナデか (内) ケズリ	やや粗 0.5 ～ 3㎜	(外) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) 褐灰 (10YR4/1)	
51 - 7	88	加工段15	上層	弥生土器	甕		(5.8)	(外) ナデか (内) ケズリ	密 0.2 ～ 2㎜	(外) にぶい黄橙 (10YR7/3) (内) 灰 (5Y4/1)	

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	調整及び文様等	胎土(砂粒)	色調	備考(形式、時期等)
51 - 8	88	加工段15	上層	弥生土器	壺			(外) 羽状文 、沈線 (内) 指頭圧痕 ナデ	1㎜以下多い	(外) にぶい黄橙 (10YR6/4) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	Ⅳか
51 - 9	88	加工段15	包含層	弥生土器	鉢			(外) 貼付突帯文、3条の凹線文、 重層刻目文 (内) ハケ	微砂粒多い	(外) 黄橙 (10YR8/6) (内) 黄燈 (10YR8/6)	Ⅳ -1 ～ 2
60 - 1	89	遺構外		弥生土器	高坏	(18.0)		(外) 擬凹線、ミガキ (内) ナデ	微砂粒わずか	(外) 黄橙 (10YR8/6) (内) 黄橙 (10YR8/6)	Ⅳ -2
60 - 2	89	遺構外	表土	弥生土器	甕		(5.6)	(外) ナデ (内) ケズリ	やや粗 0.5 ～ 2.5㎜	(外) 灰 (5Y4/1) (内) 灰 (5Y4/1)	
60 - 3	89	遺構外		土師器	坏か	(16.0)		(外) (内)	1 ～ 2㎜	(外) 橙 (7.5YR7/6) (内) 橙 (7.5YR7/6)	松山Ⅳ
60 - 4	89	遺構外		須恵器	坏蓋	(10.8)		(外) 回転ナデ、ナデ (内) 回転ナデ	密 2㎜以下	(外) 褐灰 (10YR5/1) (内) 灰黄褐 (10YR5/2)	
60 - 5	89	遺構外	表土	須恵器	坏身		(8.4)	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	密	(外) 灰 (5Y4/1) (内) 灰 (5Y4/1)	
60 - 11	89	遺構外		磁器	碗	(9.8)		ロクロ成形、見込み蛇ノ目釉ハギ、 透明釉、呉須、染付	密	(外) 灰白 (7.5Y7/1) (内) 灰白 (7.5Y7/1)	肥前系波佐見か 1780-1802 年頃か
64 - 1	89	SK07		須恵器	長頸壺		10.6	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	密 1 ～ 2㎜ 少ない	(外) 灰 (N4/) (内) 灰 (N4/)	大谷８期
65 - 1	90	谷部		縄文土器	深鉢			(外) 条痕 (内) 条痕	やや粗 2㎜	(外) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	
65 - 2	90	谷部		縄文土器	深鉢			(外) 条痕 (内) 条痕	やや粗 2㎜	(外) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	
65 - 3	90	谷部		縄文土器	深鉢		9.4	(外) ナデか (内) ナデか	やや粗 0.2 ～ 2.5㎜	(外) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	
65 - 4	90	谷部		弥生土器	甕	(13.7)		(外) 2条の凹線 (内) ヘラケズリ、ヨコナデ	密 1㎜わずか	(外) 浅黄 (2.5 Y 7/4) (内) 浅黄 (2.5Y7/4)	Ⅴ -1
65 - 5	90	谷部		弥生土器	甕	(15.0)		(外) 凹線、刺突文 (内) ケズリ、ヨコナデ	やや粗 0.5 ～ 1.5㎜	(外) にぶい黄橙 (10YR7/3) (内) オリーブ黒 (5Y3/1)	Ⅴ -1
65 - 6	90	谷部		弥生土器	甕			(外) ヨコナデ (内) ヨコナデ	密 0.5㎜わずか	(外) 黄灰 (2.5Y4/1) (内) 黄灰 (2.5Y5/1)	Ⅴ -1 か
65 - 7	90	谷部		弥生土器	甕	(12.8)		(外) ヨコナデ (内) ヨコナデ	密 0.5㎜	(外) にぶい黄橙 (10YR6/3) (内) にぶい黄橙 (10YR6/3)	Ⅳ -1 ～ 2
65 - 8	90	谷部		弥生土器	甕			(外) 3条の凹線、ヨコナデ、ハケ (内) ヨコナデ	やや粗 0.2 ～ 1㎜	(外) にぶい黄橙 (10YR6/4) (内) 浅黄 (2.5YR7/4)	Ⅴ -1 か
65 - 9	90	谷部		弥生土器	甕	(27.0)		(外) 凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	密 0.2 ～ 2㎜	(外) 浅黄橙 (10YR8/4) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	Ⅳ -2
65 - 10	90	谷部		弥生土器	甕			(外) 3条の凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	やや粗 0.3 ～ 1㎜わずか	(外) にぶい黄橙 (10YR7/3) (内) にぶい黄橙 (10YR7/3)	Ⅴ -1
65 - 11	90	谷部		弥生土器	甕	(21.4)		(外) 2条の凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	やや粗 0.2 ～ 1.5㎜	(外) 明黄褐 (10YR7/6) (内) 明黄褐 (10YR7/6)	Ⅴ -1
65 - 12	90	谷部		弥生土器	壺	(14.4)		(外) 2条の凹線、5条のクシ描沈線、 刺突文 (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	やや粗 0.5 ～ 2.5㎜ 多い	(外) 黒褐 (10YR3/1) (内) 褐灰 (10YR4/1)	Ⅴ -1
65 - 13	90	谷部		弥生土器	甕	(23.6)		(外) 凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ケズリ	密 0.5㎜以下	(外) にぶい黄橙 (10YR6/4) (内) にぶい黄橙 (10YR 6/4)	Ⅴ -1
65 - 14	90	谷部		弥生土器	甕	(13.6)		(外) 凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ	密 0.5㎜以下	(外) 浅黄 (2.5Y7/4) (内) 浅黄 (2.5Y7/4)	Ⅴ -1 か
65 - 15	90	谷部		弥生土器	甕	(21.4)		(外) 3条の凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	密 1 ～ 2㎜	(外) にぶい黄橙 (10YR7/3) (内) にぶい黄橙 (10YR7/3)	Ⅴ -1
65 - 16	90	谷部		弥生土器	甕	(14.8)		(外) 3条の凹線、沈線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	やや粗 0.2 ～ 2㎜	(外) 灰黄 (2.5Y6/2) (内) 浅黄 (2.5Y7/3)	Ⅴ -1
65 - 17	90	谷部		弥生土器	甕	(22.2)		(外) 凹線、刺突文、ナデ、ハケ (内) ナデ、ケズリ	1㎜ 石英	(外) 淡黄 (2.5Y8/4) (内) 淡黄 (2.5Y8/4)	Ⅴ -1
65 - 18	90	谷部		弥生土器	甕	(17.6)		(外) 凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ヘラケズリか	密 0.5㎜以下	(外) 明黄褐 (10YR7/6) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4) 灰黄褐 (10YR4/2)	Ⅴ -1
66 - 1	90	谷部		弥生土器	甕	(33.0)		(外) 凹線、刺突文、ナデ (内) ヨコナデ、ケズリ	1 ～ 2㎜	(外) 浅黄 (2.5Y7/3) (内) 浅黄 (2.5Y7/3)	Ⅴ -1
66 - 2	90	谷部		弥生土器	甕	(16.6)		(外) 凹線、刺突文、ナデ (内) ヨコナデ、ケズリ	密 1㎜	(外) にぶい黄橙 (10YR6/4) (内) にぶい黄橙 (10YR6/3)	Ⅴ -1
66 - 3	90	谷部		弥生土器	甕	(25.8)		(外) 凹線、刺突文、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ケズリ	密 1㎜	(外) 浅黄橙 (10YR8/4) (内) 灰黄褐 (10YR4/2)	Ⅴ -1
66 - 4	90	谷部		弥生土器	甕	(21.4)		(外) 凹線、ヨコナデ (内) ケズリ、ヨコナデ	密 0.5 ～ 1㎜	(外) 浅黄橙 (10YR8/4) (内) 浅黄橙 (10YR8/4)	Ⅴ -1
66 - 5	90	谷部		弥生土器	甕			(外) 刺突文、ヨコナデ (内) ケズリ、ヨコナデ	やや粗 0.5 ～ 2㎜	(外) 淡黄 (2.5Y8/3) (内) 浅黄 (2.5Y7/3)	Ⅴ -1 か
66 - 6	91	谷部		弥生土器	甕	(22.7)		(外) 擬凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ケズリ	やや粗 0.5 ～ 2㎜	(外) 黄橙 (10YR8/6) (内) 明黄褐 (10YR7/6)	Ⅴ -2
66 - 7	91	谷部	包含層	弥生土器	甕			(外) 擬凹線 (内) ヘラケズリ、ヨコナデ	やや粗 1 ～ 3㎜多い	(外) 黄橙 (10YR8/6) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	Ⅴ -2
66 - 8	91	谷部		弥生土器	甕	(16.2)		(外) 擬凹線 (内) ナデ、ケズリ	やや粗 0.5 ～ 2.5㎜多い	(外) にぶい橙 (7.5YR7/3) (内) にぶい黄橙 (10YR7/3)	
66 - 9	91	谷部		弥生土器	甕	(30.8)		(外) 擬凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ	2㎜	(外) 浅黄橙 (10YR8/4) (内) 浅黄橙 (10YR8/4)	Ⅴ -2

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	調整及び文様等	胎土(砂粒)	色調	備考(形式、時期等)
66 - 10	91	谷部		弥生土器	甕	(16.8)		(外) 擬凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	密 0.2 ～ 1㎜	(外) 浅黄橙 (7.5YR8/4) (内) 浅黄橙 (10YR8/3)	Ⅴ -2
66 - 11	91	谷部		弥生土器	甕	(25.0)		(外) 擬凹線、刺突文、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ、 ヘラミガキ	密 0.5㎜	(外) 浅黄橙 (10YR8/4) (内) 浅黄橙 (10YR8/4)	Ⅴ -2
66 - 12	91	谷部		弥生土器	甕	(17.5)		(外) 擬凹線、ヨコナデ (内) ミガキ、ヘラケズリ	やや粗 0.5 ～ 2㎜	(外) 淡黄 (2.5Y8/3) (内) 淡黄 (2.5Y8/3)	Ⅴ -2
66 - 13	91	谷部		弥生土器	甕	(13.7)		(外) 擬凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	やや粗 0.5 ～ 2.5㎜	(外) 淡黄 (2.5Y8/4) (内) 淡黄 (2.5Y8/4)	Ⅴ -3
66 - 14	91	谷部		弥生土器	甕	(23.4)		(外) 15 条の擬凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ	密 1.5㎜	(外) 浅黄橙 (10YR8/4) (内) 浅黄橙 (10YR8/4)	Ⅴ -3
66 - 15	91	谷部		弥生土器	甕	(15.4)		(外) 擬凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	密 0.4 ～ 2㎜ やや多い	(外) 浅黄橙 (10YR8/4) (内) 浅黄橙 (10YR8/3)	Ⅴ -2
66 - 16	91	谷部		弥生土器	甕	(17.8)		(外) 擬凹線、ヨコナデ (内) ヨコナデ	1㎜	(外) 浅黄橙 (10YR8/3) (内) 浅黄橙 (10YR8/3)	Ⅴ -3
67 - 1	91	谷部		弥生土器	甕	(15.0)		(外) ナデか (内) ナデか	密	(外) 黄橙 (10YR8/6) (内) 黄橙 (10YR8/6)	Ⅴ -4
67 - 2	91	谷部		土師器	甕	18.6		(外) ヨコナデ (内) ヨコナデ	密 0.5㎜以下	(外) にぶい黄橙 (10YR7/3) (内) にぶい黄橙 (10YR7/3)	小谷式
67 - 3	91	谷部		弥生土器	甕			(外) ヨコナデ (内) ナデ、ヘラミガキ、ケズリ	やや粗 0.2 ～ 2.5㎜多い	(外) 明黄褐 (10YR7/6) (内) 黄橙 (10YR8/6)	Ⅴ -4
67 - 4	91	谷部		弥生土器	装飾壺			(外) 直線文、波状文 (内) ケズリ	密	(外) 明黄褐 (10YR7/6) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	
67 - 5	91	谷部		土師器	壺	(26.0)		(外) ヨコナデ (内) ヨコナデ	0.5㎜	(外) 橙 (7.5YR6/6) (内) 橙 (7.5YR6/6)	小谷２～３式前半
67 - 6	91	谷部		弥生土器	甕		(10.0)	(外) ナデ (内) ナデ、ケズリ	密 1㎜多い	(外) 淡黄 (2.5Y8/3) (内) 灰白 (2.5Y7/1)	
67 - 7	91	谷部		弥生土器	壺か甕		5.2	(外) ハケ (内) ケズリ	密 0.5㎜	(外) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) 褐灰 (10YR4/7)	
67 - 8	91	谷部		弥生土器	壺か甕		5.0	(外) ナデ、ハケ (内) ヘラケズリ、ナデ	密 1㎜以下	(外) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	
67 - 9	91	谷部		弥生土器	鉢			(外) ハケ、刺突文 (内) ハケ	やや粗 0.5 ～ 2㎜	(外) 黄橙 (10YR8/6) (内) 褐灰 (10YR4/1)	Ⅳ様式か
67 - 10	91	谷部		弥生土器	鉢	(14.8)		(外) ヨコナデ、刺突文、ヘラミガキ (内) ヨコナデ、ケズリ	密 0.5㎜以下	(外) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) にぶい黄橙 (10YR 7/4)	Ⅴ -1
67 - 11	91	谷部		弥生土器	鉢	(12.6)		(外) ミガキか、ハケ (内) 指頭圧痕、ヘラケズリ	密 0.2 ～ 1.5㎜	(外) にぶい黄 (2.5Y6/3) 黒褐 (2.5Y3/1) (内) 浅黄 (2.5Y7/4)	Ⅴ -1 か
67 - 12	92	谷部		土師器	高坏			(外) (内) ヘラケズリ	砂粒少ない	(外) 橙 (5YR7/8) (内) 橙 (5YR7/8)	古墳中期か
67 - 13	92	谷部		土師器	低脚杯		3.5	(外) (内)	密	(外) 明黄褐 (10YR7/6) (内) 明黄褐 (10YR7/6)	古墳前期か
67 - 14	92	谷部		弥生土器	装飾壺			(外) 突帯有りＣ字刺突文 (内)	密 0.2 ～ 1㎜	(外) 橙 (7.5YR6/6) (内) 明褐 (7.5YR5/6)	
67 - 15	92	谷部	包含層	須恵器	坏身	(14.0)		(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	密 2㎜以下	(外) 灰 (N5/) (内) 灰 (N5/)	
67 - 16	92	谷部	包含層	須恵器	坏	(12.6)		(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	密 0.5㎜以下	(外) オリーブ黒 (5Y3/2) (内) 灰オリーブ (5Y5/3)	
67 - 17	92	谷部	包含層	須恵器	碗	(11.0)	7.5	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ、ヘラ切り、ヘラ記号	密 2㎜以下	(外) 灰 (N6/) (内) 暗灰黄 (2.5Y5/2)	
67 - 18	92	谷部		須恵器	高台付皿		(10.0)	(外) 回転ナデ、 ヘラ切後回転ヘラケズリ (内) 回転ナデ	密	(外) オリーブ灰 (2.5GY6/1) (内) オリーブ灰 (2.5GY5/1)	
67 - 19	92	谷部	包含層	須恵器	壺か			(外) 回転ナデ、 タテ方向の連続刺突文 (内) 回転ナデ	密 0.5 ～ 1.5㎜わずか	(外) 灰 (5Y6/1) (内) 灰 (10Y6/1)	
67 - 20	92	谷部		須恵器	長頸壺			(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	密 3㎜以下	(外) 灰 (N5/) (内) 灰 (N5/)	
67 - 21	92	谷部		須恵器	長頸壺		(16.0)	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	密 2㎜以下	(外) 灰 (N4/) (内) 灰 (N5/)	
67 - 22	92	谷部		須恵器	短頸壺	(8.4)	(12.0)	(外) 回転ナデ、回転ヘラケズリ (内) 回転ナデ、ナデ	密 5㎜以下少ない	(外) 灰 (N4/) (内) 灰 (N5/)	
84 - 1	93	7 号墳		土師器	甕か			(外) ナデか (内) ヘラケズリ	微砂粒含む	(外) 橙 (5YR6/8) (内) 橙 (5YR6/8)	
90 - 1	93	8 号墳		土師器	甕			(外) ナデ (内) ヘラケズリ	微砂粒 石英	(外) 橙 (5YR 6/6) (内) 橙 (5YR6/6)	
90 - 2	93	8 号墳		土師器	高坏			(外) (内)	砂粒少 石英	(外) 淡黄 (2.5Y8/4) (内) 淡黄 (2.5Y8/4)	
90 - 3	93	8 号墳		土師器	低脚杯			(外) ナデか (内) ナデか	微砂粒多い 石英	(外) 黄橙 (10YR8/6) (内) 黄橙 (10YR8/4)	
90 - 4	93	8 号墳		土師器	鼓型器台	(27.2)		(外) ヨコナデ (内) ナデ、ヘラミガキ	微砂粒多い２ ～ 3㎜の長石	(外) 橙 (2.5Y6/8) (内) 橙 (2.5 Y 6/8)	小谷 4 式か
90 - 5	93	8 号墳		土師器	鼓型器台		(23.0)	(外) ナデ (内) ヨコナデ、ヘラケズリ	微砂粒やや少ない 石英 赤茶色粒子	(外) 橙 (5YR7/8) (内) 橙 (5YR7/8)	小谷 4 式か

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	調整及び文様等	胎土(砂粒)	色調	備考(形式、時期等)
90 - 6	93	8 号墳		土師器	鼓型器台			(外) (内) ヘラケズリ	微砂粒多い	(外) 黄橙 (10YR8/6) 明褐灰 (5YR7/2) (内) 黄橙 (10YR8/6) 明褐灰 (5YR7/2)	
98 - 1	93	9 号墳		土師器	壺			(外) ナデか (内) ナデか、ヘラケズリ	密	(外) 淡黄 (2.5Y8/4) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) 淡黄 (2.5Y8/4) にぶい黄橙 (10YR7/4)	小谷２～４式
98 - 2	93	9 号墳		土師器	鼓型器台			(外) ヨコナデ (内) ヘラミガキ、ヘラケズリ	砂粒少 石英	(外) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	小谷３式 外面赤彩
99 - 1	96 97	9 号墳		土師器	壺棺	31.8		(外) 羽状文、ハケ、ヨコナデ (内) ヨコナデ、ハケ後指ナデ、 ヘラケズリ	微砂粒多い 石英 雲母	(外) 浅黄橙 (10YR8/3) (内) 浅黄橙 (10YR8/3)	小谷３式
107 - 1	93	10 号墳		土師器	壺か			(外) ナデか (内) ナデか	微砂粒多い 黒雲母、石英	(外) 浅黄橙 (10YR8/4) (内) 浅黄橙 (10YR8/4)	
107 - 2	93	10 号墳		土師器	高坏			(外) ナデ (内) ナデ	微砂粒少ない 金雲母、石英	(外) にぶい黄橙 (10YR7/4) (内) にぶい黄橙 (10YR7/4)	松山Ⅱ期
134 - 7	94	20 号墳	包含層	土師器	壺	(16.2)		(外) ナデ、ハケ (内) ナデ、ケズリ	微砂粒 石英	(外) 明黄褐 (10YR7/6) (内) 明黄褐 (10YR7/6)	小谷式末期？
134 - 8	94	20 号墳		土師器	甕			(外) 羽状文 (内) ナデか	密 0.5 ～ 1㎜	(外) にぶい褐 (7.5YR5/4) (内) にぶい褐 (7.5YR5/4)	
134 - 9	94	20 号墳	包含層	土師器	甕			(外) 羽状文、ハケ (内) ナデか	密 0.5 ～ 1㎜	(外) 黄橙 (7.5YR7/8) (内) 黄橙 (7.5YR7/8)	
143 - 1	94	22 号墳	表土下	土師器	高坏			(外) ナデか (内) ケズリ、ナデか	砂粒少ない	(外) 明赤褐 (5YR5/6) (内) 明赤褐 (5YR5/6)	松山Ⅲ～Ⅳ期
148 - 1	89	加工段 29	黒色土	弥生土器	甕			(外) 列点文、ナデ (内) ナデ、ヘラケズリ	1㎜以下	(外) 明黄褐 (10YR7/6) (内) 明黄褐 (10YR7/6)	Ⅴ -1 か
156 - 1	89	加工段 30	包含層	弥生土器	甕	(19.1)		(外) ２条の凹線、刺突文、ハケ (内) ケズリ	やや粗 0.3 ～ 1.5㎜	(外) にぶい褐 (7.5YR5/4) (内) 黒褐 (7.5YR3/1)	Ⅴ -1
156 - 2	89	加工段 30		弥生土器	鉢	(28.4)		(外) 重層刻目文、凹線、円形浮文 (内) ナデ	微砂粒多い 石英	(外) 淡黄 (2.5Y8/3) (内) 黄灰 (2.5Y5/1)	Ⅳ -1 ～ 2

第３表　庵寺古墳群出土石器観察表

Fig	図版番号	出土地点	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
11 - 9	84	SI01(2)	石器	敲石	9.5	5.8	3.4	300.0		表面・両側面に敲打痕、裏面に磨面
11 - 10	84	SI01(2)	石器	磨石	13.6	9.6	3.4	800.0		表面に磨面
11 - 11	84	SI01(2)	石器	磨石	11.5	(5.7)	4.2	390.2		一部欠損、表裏面に磨面
19 - 10	87	加工段７	石器	スクレイパー	4.7	4.0	1.3	19.13	黒曜石	
27 - 3	85	加工段５	石器	磨石	(6.8)	7.2	2.8	193.8		一部欠損、表面に磨面
30 - 2	86	加工段 10	石器	磨石	11.9	6.9	5.5	551.6		表面に磨面
35 - 3	89	加工段 23	石器	２次加工剥片	2.27	0.83	0.7	1.02	黒曜石	
39 - 4	88	加工段 16	石器	礫 台石	20.8	13.4	13.4	5200.0		
39 - 10	88	加工段 17	石器	石皿	23.1	19.7	5.9	3838.2		中央に使用痕
43 - 7	89	加工段 22	石器	磨石	9.6	6.6	6.0	524.4		表面に磨面
51 - 10	88	加工段 15	石器	台石	25.3	13.2	4.3	1792.0		
60 - 6	89	遺構外	石器	敲石	10.6	6.3	6.2	657.2		両端面に敲打痕、表面に磨面
60 - 7	89	遺構外	石器	敲石	11.3	6.2	3.0	298.6		表面中央に敲打痕
60 - 8	89	遺構外	石器	磨石		7.3	6.3	440.4		一部欠損、表面に磨面
60 - 9	89	遺構外	石器	磨製石斧		4.8	2.15	69.2		一部欠損
60 - 10	89	遺構外	石器	石錘	6.0	5.2	2.3	89.6		
68 - 1	92	谷部	石器	石鏃	1.9	1.5	0.35	0.76	黒曜石	
68 - 2	92	谷部	石器	磨製石斧	9.6	4.3	(1.2)	84.4		表裏面剥離
68 - 3	92	谷部	石器	磨石	(9.7)	8.0	2.5	269.4		一部欠損、表面に磨面
68 - 4	92	谷部	石器	磨石	(11.3)	(6.3)	(2.6)	291.4		半分を欠損、表面に磨面
68 - 5	92	谷部	石器	砥石か	7.3	(9.9)	(5.5)	525.0		大半を欠損、表面に磨面
68 - 6	92	谷部	石器	敲石	(6.0)	9.5	(4.7)	399.0		大半を欠損、側面に敲打痕
68 - 7	92	谷部	石器	敲石	13.0	12.5	5.4	1356.7		
68 - 8	92	谷部	石器	敲石	11.6	10.4	7.1	1368.7		
68 - 9	92	谷部	石器	台石	(16.6)	(10.6)	6.7	1602.6		一部欠損、側面から表面に被熱痕
68 - 10	92	谷部	石器	敲石	21.2	9.3	4.9	1314.8		
68 - 11	92	谷部	石器	敲石	15.5	10.5	(3.5)	777.4		半分を欠損
98 - 3	93	9 号墳	石器	砥石	(16.5)	7.5	4.9	658.8		一部欠損、表裏面側面に研面
98 - 4	93	9 号墳	石器	スクレイパー	2.47	3.80	0.8	6.14	黒曜石	

Fig	図版番号	出土地点	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
114 - 1	93	12 号墳	石器	磨石	9.4	13.6	3.3	558.6		表面に磨面
134 - 6	94	20 号墳	石器	石枕か	(8.1)	(8.7)	(3.1)	244.8		大半を欠損
134 - 10	94	20 号墳	石器	標石	15.5	10.9	8.0	1351.6		
134 - 11	94	20 号墳	石器	標石	18.1	15.1	12.0	3779.4		

第 4 表　庵寺古墳群出土玉類観察表

Fig	図版番号	出土地点	種別	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	色調	備考
78 - 1	96	5 号墳	玉類	小玉	ガラス	0.48	0.51		0.16	淡青 (透明感乏しい)	アルミに富む、ソーダ石灰ガラス BD Ⅱ型
78 - 2	96	15 号墳	玉類	小玉	ガラス	0.32	0.47		0.09	淡青 (透明感乏しい)	カリガラス BD Ⅰ型
128 - 1	96	17 号墳	玉類	臼玉	滑石	0.28	0.40		0.05	暗灰	台形
128 - 2	96	17 号墳	玉類	臼玉	滑石	0.28	0.45		0.06	暗灰	稜有り
128 - 3	96	17 号墳	玉類	臼玉	滑石	0.19	0.32		0.04	暗灰	台形
128 - 4	96	17 号墳	玉類	臼玉	滑石	0.27	0.43		0.07	暗灰	台形
128 - 5	96	17 号墳	玉類	臼玉	滑石	0.30	0.42		0.07	暗灰	台形
128 - 6	96	17 号墳	玉類	臼玉	滑石	0.28	0.46		0.07	暗灰	稜有り
128 - 7	96	17 号墳	玉類	臼玉	滑石	0.31	0.42		0.05	暗灰	台形
128 - 8	96	17 号墳	玉類	臼玉	滑石	0.27	0.40		0.05	暗灰	台形
128 - 9	96	17 号墳	玉類	臼玉	滑石	0.23	0.45		0.06	暗灰	稜有り
128 - 10	96	17 号墳	玉類	臼玉	滑石	0.27	0.42		0.05	暗灰	台形
128 - 11	96	17 号墳	玉類	臼玉	滑石	0.29	0.39		0.05	暗灰	台形
128 - 12	96	17 号墳	玉類	臼玉	滑石	0.18	0.42		0.04	暗灰	稜有り
134 - 1	96	20 号墳	玉類	管玉	緑色凝灰岩	(0.85)	0.35		0.11	淡緑灰	一部欠損
134 - 2	96	20 号墳	玉類	臼玉	滑石	0.20	0.49		0.08	灰白 (やや緑強い)	稜有り
134 - 3	96	20 号墳	玉類	臼玉	滑石	0.22	0.48		0.07	灰白	稜有り
134 - 4	96	20 号墳	玉類	臼玉	滑石	0.21	0.54		0.08	灰白	稜有り
154 - 1	96	23 号墳	玉類	勾玉	滑石	2.1	1.4	1.7	2.81	灰	全面研磨

第 5 表　庵寺古墳群出土鉄器観察表

Fig	図版番号	出土地点	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
78 - 3	95	5 号墳	鉄器	刀子	(3.8)	1.2	0.3	4 と同一個体
78 - 4	95	5 号墳	鉄器	刀子	(4.1)	1.2	0.3	3 と同一個体
78 - 5	95	15 号墳	鉄器	刀子	3.4	0.9		折り曲げ
78 - 6	95	15 号墳	鉄器	刀子	(9.3)	1.9	0.4	
90 - 7	95	8 号墳	鉄器	鉄鏃	6.1	(2.4)	0.35	折り曲げ
90 - 8	95	8 号墳	鉄器	ヤリガンナ	(4.8)	0.9	0.4	
90 - 9	95	8 号墳	鉄器	ヤリガンナ	5.2	0.9	0.35	折り曲げ
90 - 10	95	8 号墳	鉄器	鉄鏃	7.6	1.6	0.45	定角式
98 - 5	95	9 号墳	鉄器	鉄剣	(38.2)	2.8	0.6	短剣、切先を折り曲げ
119 - 1	95	13 号墳	鉄器	刀子	(1.6)	1.1	0.2	
134 - 5	94	20 号墳	鉄器	不明	1.4	0.8	0.45	
143 - 2	94	22 号墳	鉄器	刀子	11.0	2.3	0.35	刃部に布巻き痕
154 - 2	94	23 号墳	鉄器	刀子	8.3	1.6	0.3	

第 6 表　大迫ツリ遺跡出土土器観察表

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	調整及び文様等	胎土 (砂粒)	色調	備考 (形式、時期等)
170 - 1	97	1 号採掘坑内		磁器	碗	(11.2)	(6.0)	ロクロ成形、透明釉、呉須、染付	密	(外) 灰白 (2.5GY8/1) (内) 灰白 (2.5GY8/1)	肥前系波佐見か 1800 － 1820 年代

第４章　大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡の調査

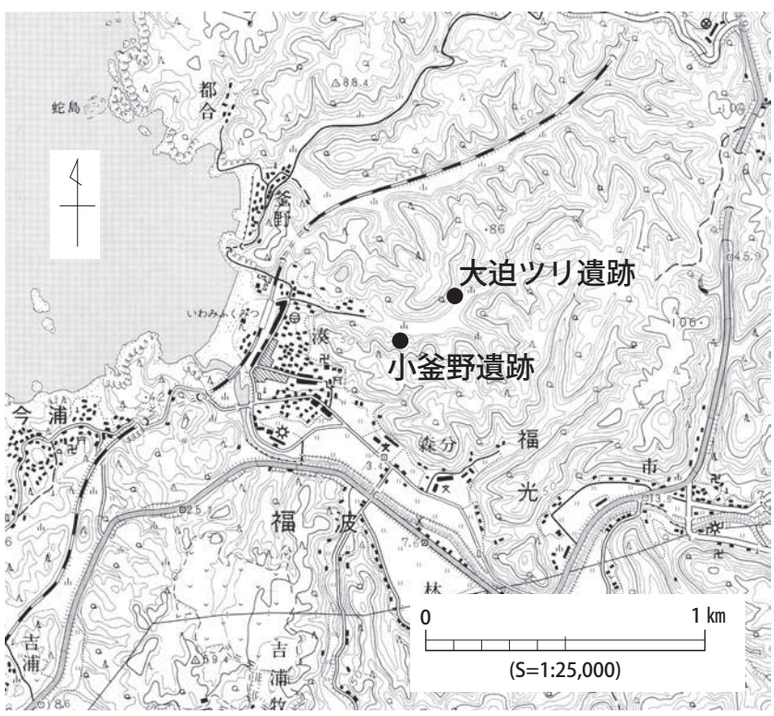
第１節　調査に至る経緯と経過

大迫ツリ遺跡と小釜野遺跡は島根県大田市温泉津町福波に所在する。両遺跡とも通称「福光石」の石切場跡であり、福光湾岸に面した同じ谷筋の急峻な斜面に立地する。大迫ツリ遺跡は湾岸から谷奥へ約１ｋｍ入った南向きの丘陵斜面に、小釜野遺跡は約 500 ｍ入った北向きの丘陵斜面に位置し、双方間の距離は約 220 ｍを測る。

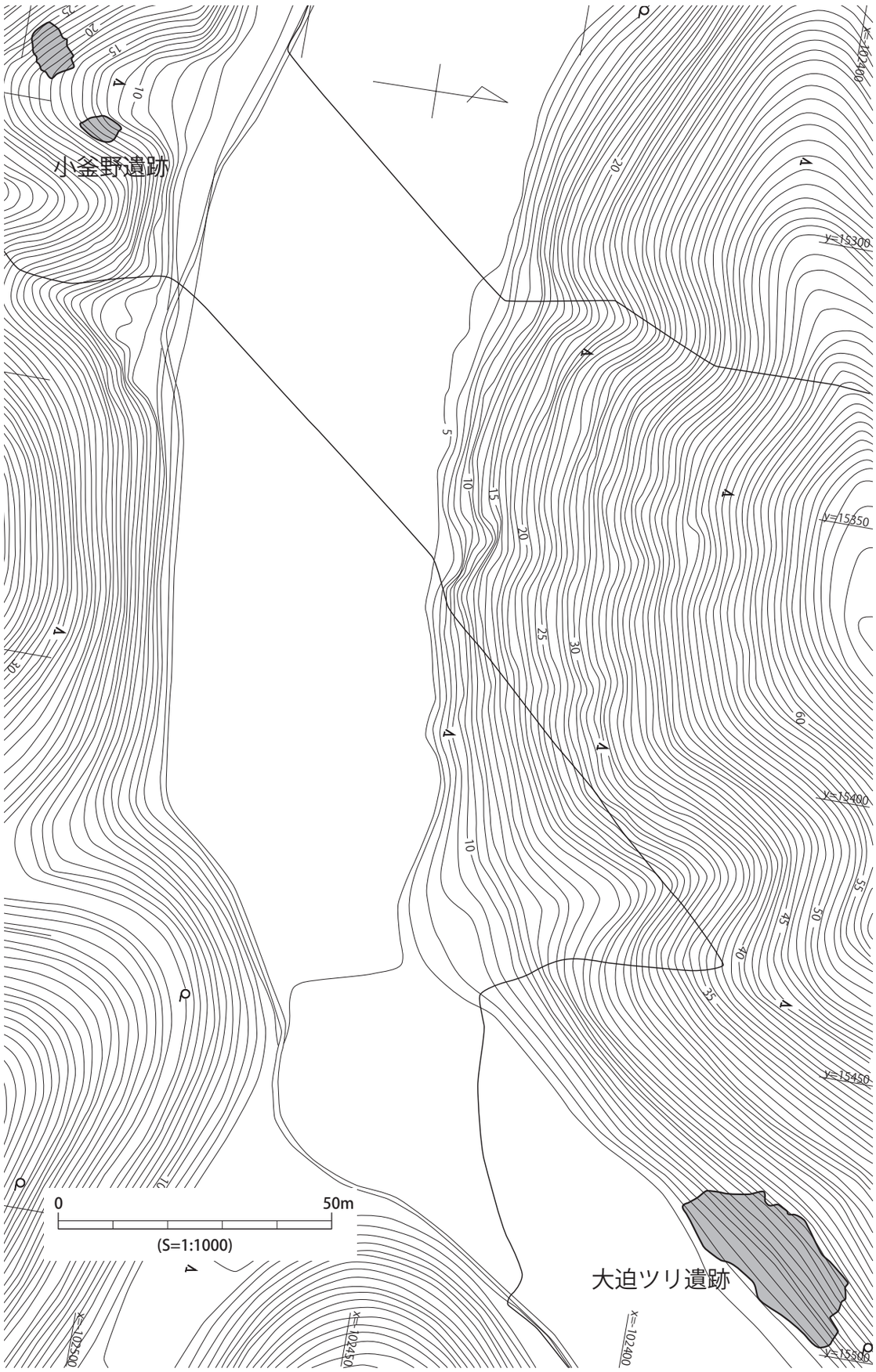
遺跡発見の経緯は、平成 24 年４月１日、島根県教育庁文化財課世界遺産室の職員が石見銀山遺跡石造物調査の一環として行っていた福光石石切場跡の分布調査中、仁摩温泉津道路予定地内において石切場跡と岩盤に刻まれた線刻画群を偶然確認したことによる（大迫ツリ遺跡）。遺跡の立地する谷筋は既に道路工事が発注されており、採掘坑が存在する丘陵の周辺や頂部は工事用道路の施工により開削されていたが、緊急な対応が必要と思われた。これを受け４月３日、国土交通省松江国道事務所と文化財課で対策を協議、５日には松江国道事務所担当者と現地工事施工業者、及び島根県埋蔵文化財調査センターの担当者による現地立会を行った。これにより、文化財保護法に基づく遺跡発見の手続きと工事の休止、そして工事中の発見で工程上も差し迫っていることを踏まえ、約２週間で発掘調査を実施することが決定。作業は緊急を要することから埋蔵文化財調査センターで実施することとなった（調査員１名、調査補助員１名による２名体制）。

調査は４月９日から開始、松江国道事務所と工事施工業者である（株）竹中土木の全面的な協力により、線刻画の広がりを確認するため丘陵斜面の表土と採掘坑内に溜まった土砂の掘削を重機で行った。また重機のアームが届かない斜面上方は人力による表土掘削とコンプレッサーによる精査作業を行った。これにより凝灰岩が露出した岩盤から採掘坑を３基確認し、線刻画群も当初の確認範囲から斜面の上方にも広がることがわかった。また精査作業中に採掘坑から肥前系磁器碗の破片が出土し、遺構の時期が江戸時代後期頃であることも判明した。

遺構の測量はすべて光波トランシットを用いた遺跡調査システムで実施したが、精査作業により岩盤が露出した傾斜角度 36°の斜面は足掛かりを失っており、丘陵上方から垂らしたロープを安全帯付きベルトを体に固定しながらの移動・測量



第 161 図　大迫ツリ遺跡と小釜野遺跡の位置



第 162 図　大迫ツリ遺跡と小釜野遺跡の位置と調査区

作業は困難を極めた。加えて壁面の高さ約３ｍを測る大型採掘坑の測量作業は危険が伴い、さらに坑内は湧水や雨水がみるみる溜まる始末で、人力で排水しながらの作業も調査員を悩ませた。また工事中発見という経緯や周辺が工事中で危険なこともあって現地説明会を実施することはできなかったが、16 日には大田市教育委員会の職員や石見銀山世界遺産センター職員から現地指導を受けた。そして 18 日に調査の完了検査を受け、最終日の 19 日に補足測量と写真撮影を実施していた矢先、松江国道事務所から大迫ツリ遺跡と同じ谷筋のトンネル工事現場で新たな石切場が発見された旨の連絡が入った（小釜野遺跡）。これを受け同日夕方、急遽松江国道事務所担当者と工事施工業者（（株）西松建設）と現地協議を実施、トンネル坑口下の丘陵斜面に採掘坑が２基確認できたため、周辺の工事を休止、調査期間をさらに３週間延期して調査を実施することとなった。

小釜野遺跡の調査は文化財保護法の手続きや諸準備を済ませた後、24 日から開始した。大迫ツリ遺跡と同様に重機やコンプレッサーで表土掘削や精査作業を行い、岩盤を露出させた後は遺跡調査システムによる測量作業を実施した。やはり傾斜角度 43°の斜面でロープと安全帯を駆使しながらの移動･測量作業は困難を極めたが、調査は４月下旬～５月初旬の大型連休を挟みながら実施し、５月 11 日には大田市教育委員会の職員による調査指導、15 日には完了検査を受け、同日夕方には今回の緊急調査におけるすべての現地調査を終了した。

今回の調査は、両遺跡とも工事が進行している中での発見だったにもかかわらず、機器類の調達や調査期間の確保等で国土交通省松江国道事務所、及び（株）竹中土木、（株）西松建設の多大な協力を得たことにより遂行できたことを改めて報告しておきたい。

第２節　大迫ツリ遺跡の調査

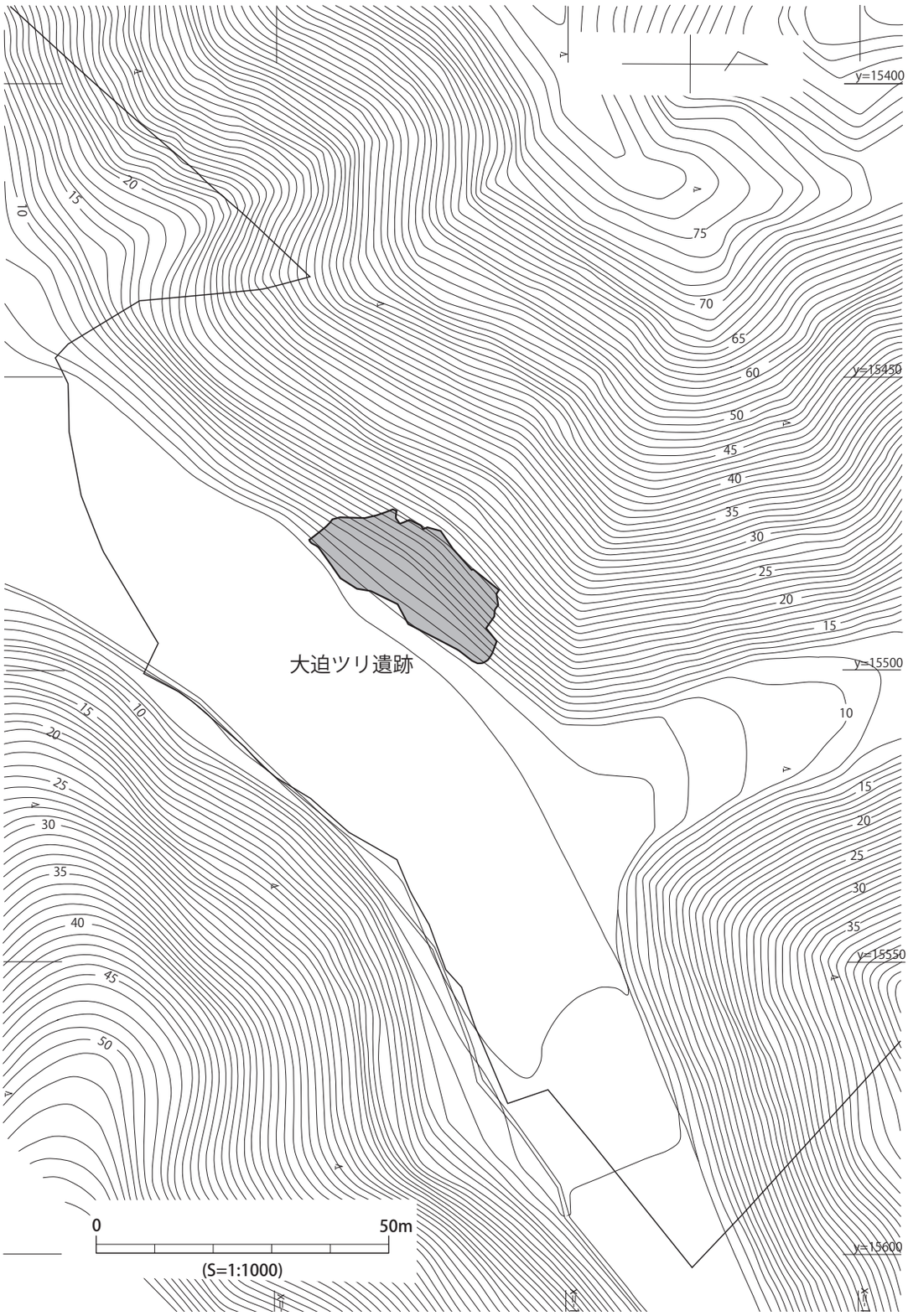
調査の概要（第 163 ～ 165 図）

大迫ツリ遺跡は、福光湾に面した狭長な谷筋の南向き斜面に立地する凝灰岩の石切場である。第１節でも述べたように限られた期間内での緊急調査であったが、調査前の状況では道路工事のため周辺は既に樹木伐採が行われ、急峻な斜面の一部で凝灰岩の岩盤が露出していた。斜面の中程には採掘坑の落ち込みや壁面が明瞭に確認できる状況にあり、坑内には流入土が厚く堆積する状況にあった。また丘陵下のかつて水田だった谷底部も土地改良工事により嵩上げが行われた状況にあった。

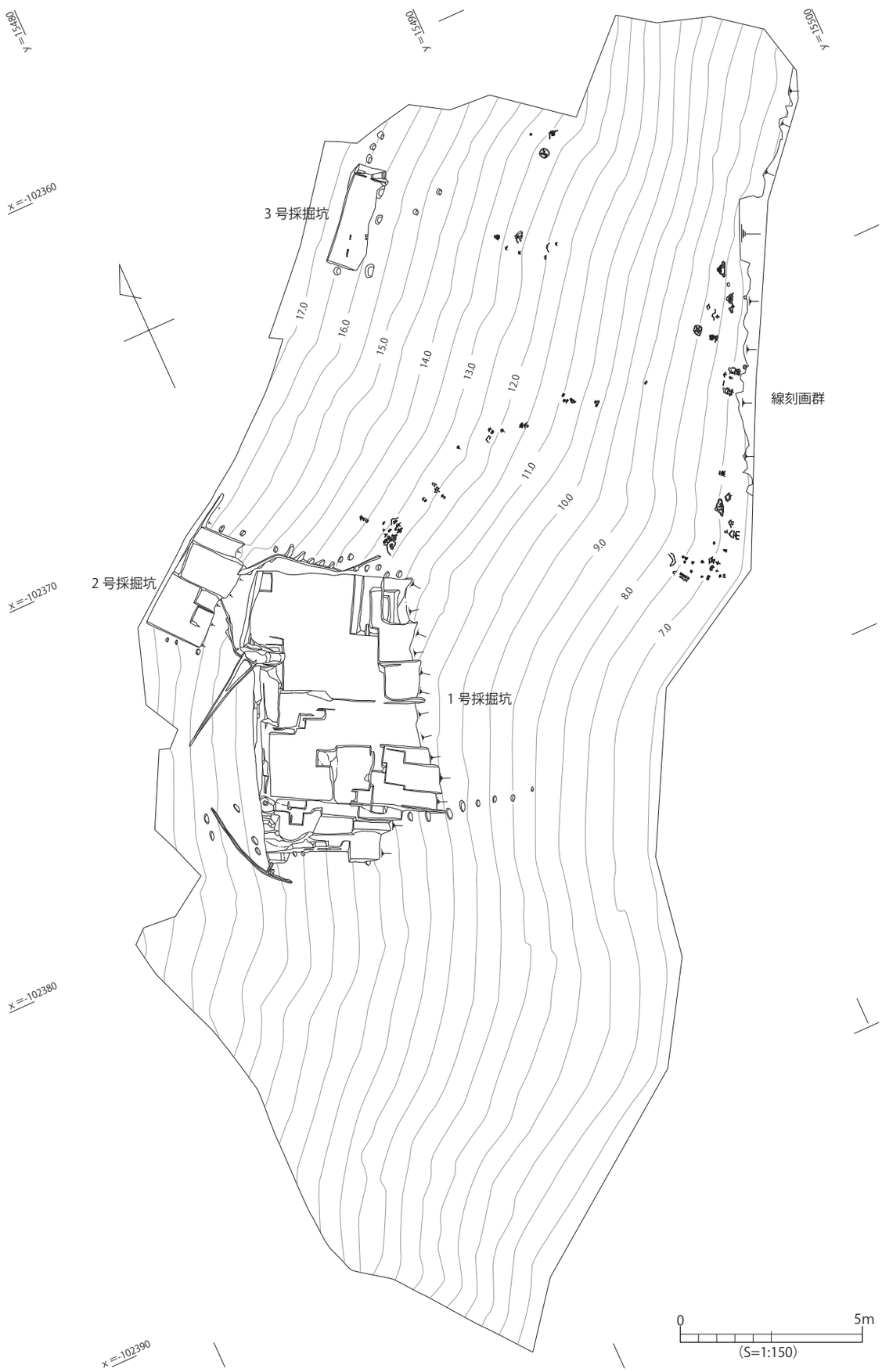
大迫ツリ遺跡発見時の様子

調査は作業効率と高所での危険度及び緊急性を考慮して、まず重機による掘削作業を行った。その後はコンプレッサーによる風圧や人力による精査作業を実施し、遺構の範囲を特定した。

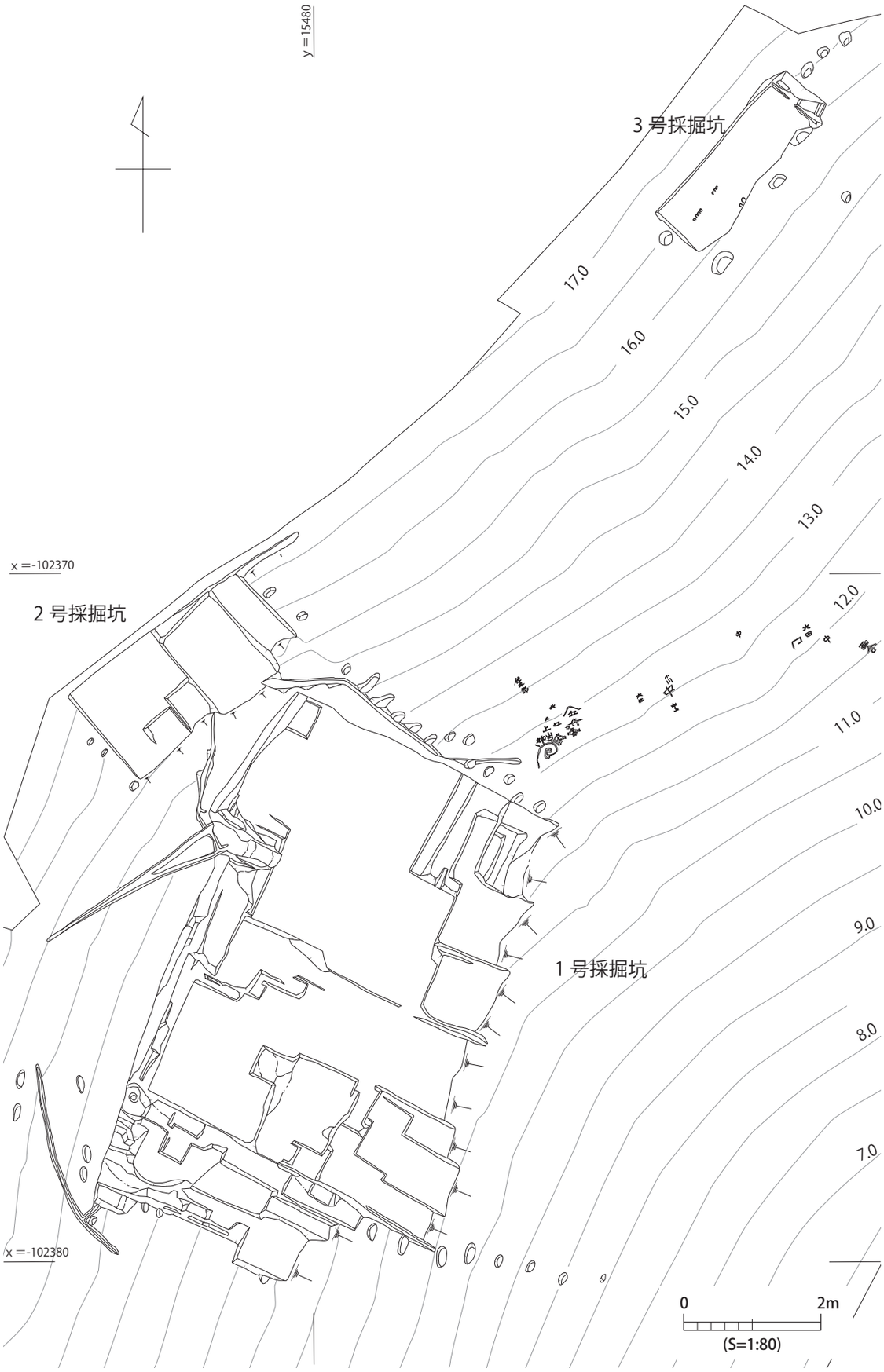
その結果、露天掘りの採掘坑を３基確認し、斜面下方からは多数の線刻画群を検出することができた。出



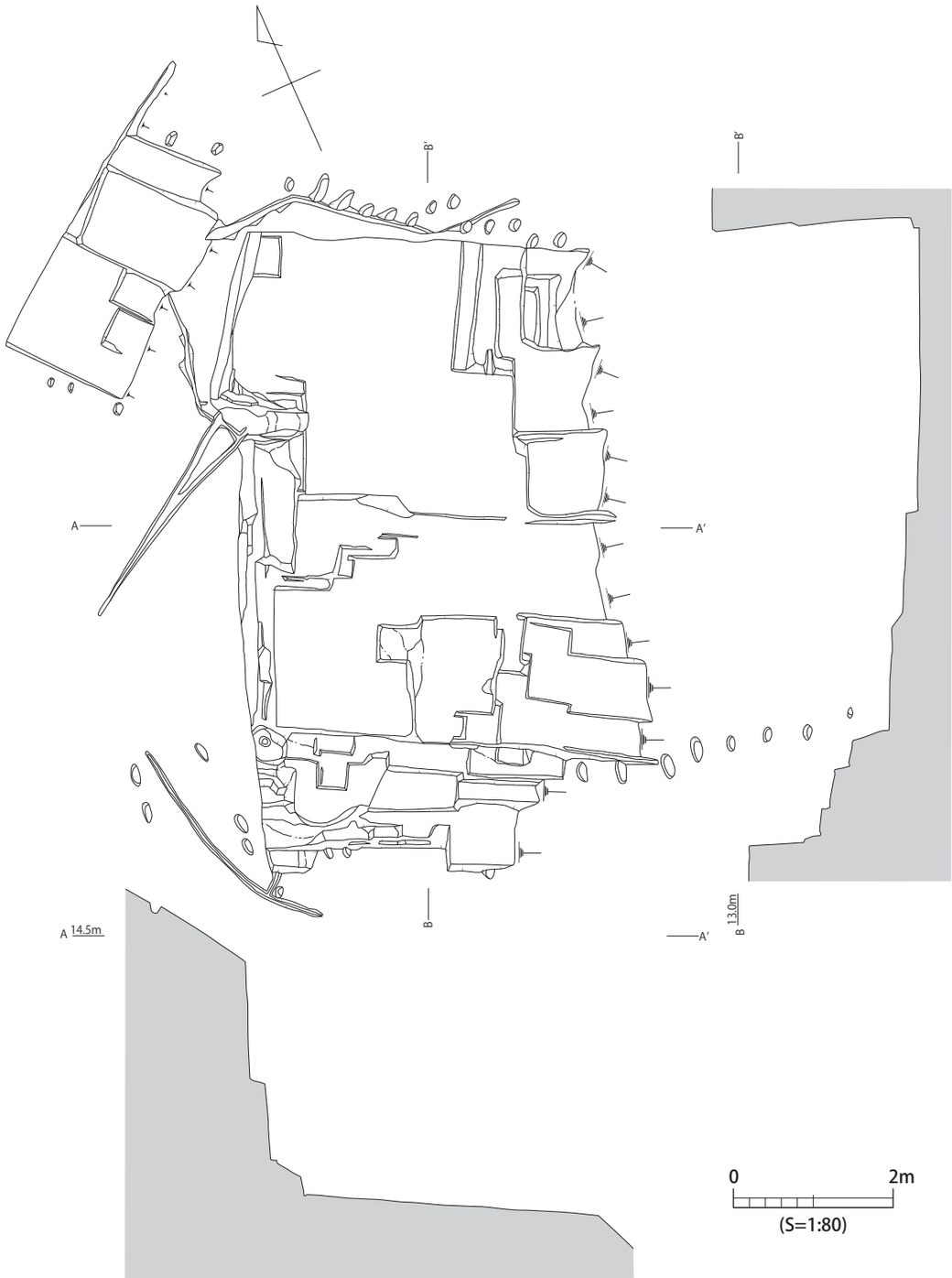
第 163 図　大迫ツリ遺跡調査区配置図



第 164 図　大迫ツリ遺跡遺構配置図



第 165 図　大迫ツリ遺跡 1 ～ 3 号採掘坑実測図

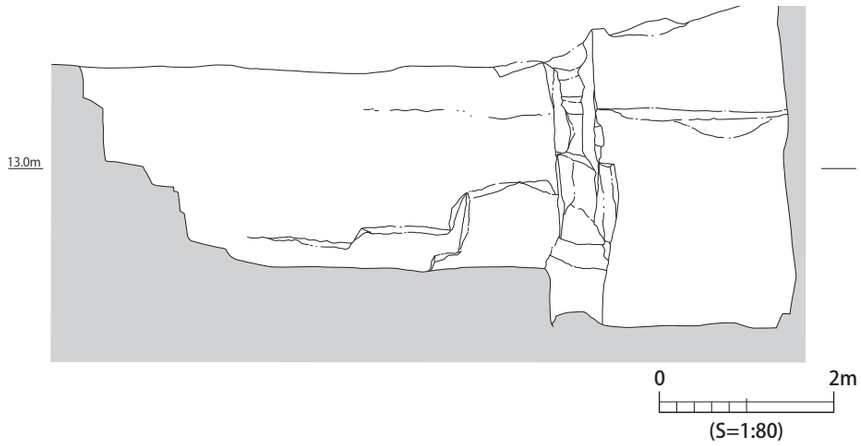


第 166 図　大迫ツリ遺跡 1 号採掘坑平面図

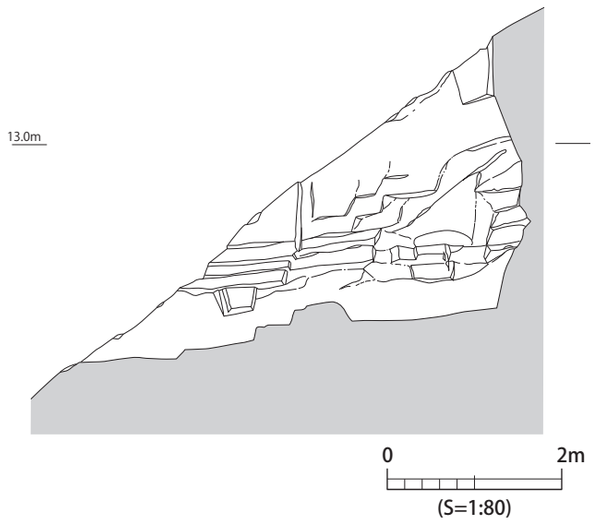
土遺物は 1 点のみであったが、1 号採掘坑内から肥前系の陶磁器碗片が出土した。最終的な調査面積は 429㎡である。

1 号採掘坑の調査（第 166 ～ 169 図）

1 号採掘坑は、標高約 76m の丘陵下方に露出した凝灰岩の岩盤層に露天掘りされた採掘坑跡で



第 167 図　大迫ツリ遺跡 1 号採掘坑奥壁



第 168 図　大迫ツリ遺跡 1 号採掘坑左壁

第 169 図　大迫ツリ遺跡 1 号採掘坑右壁

ある。調査前から一部に切り出したとわかる岩盤が露出しており、直下の谷底部からは約 4.5m を測る位置にある。標高は下端部で約 12m、上端部で約 15m である。規模は、幅が最大値で 7.72m、奥行きが 5.04m、高さが 3.64m を測り、底面は幅約 6.4m、奥行き 3.7m を測る。小釜野遺跡で検出されたものも含め、今回確認した５基の採掘坑の中では最大規模を誇る。

採掘坑が立地する斜面の傾斜度は 36°で、採掘坑の両側には作業の際の足掛かりとみられる幅 20 ～ 30cm、深さ 5cm 程度の円形の窪みが斜面下方から連続してみられる。また採掘坑の斜面上方から側面にかけては、断面Ｖ字上の溝が採掘坑を挟むかたちで「ハ」の字状に２箇所配置されており、これは坑内への湧水・雨水の浸入を防ぐものと考えられる。

全体的に幅約 7.5 m、深さ約 3.5 mに渡って岩盤を掘り込んでおり、垂直に掘り込まれた奥壁や右壁には工具を連続して打ち込んだ痕跡が綾杉状にみられ、左壁は階段状に大小様々な切り出し痕が認められる。また右壁の東側隅には切り出し痕が奥壁に向かって階段状に残されている。

すべての切り出しの前後関係を復元することは容易ではないが、中央から北側寄りで壁が垂直に張り出しており、その壁に沿った状況で右壁にかけて奥壁が約 50cm 掘り込まれている。また底面もその範囲で一段深くなっていることから、元々２箇所で切り出されていた採掘坑が、長期・数次に渡る石切りの結果、１つに合わさったと推測することができる。上方の排水溝も２箇所あることがそのことを裏付けるといえる。

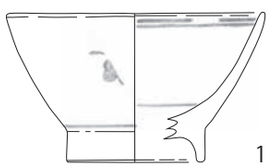
石切りの状況は、基本的に箱型の石切りが行われたとみられる。切り出し痕の縁には溝があり、各壁面には工具を打ち込んだ痕跡が綾杉状に明瞭にみられることから、まず岩盤にツルハシ状工具で「コ」の字状に必要な深さほど溝を入れる。続いて、風化により痕跡は必ずしも明瞭でなく注意を要するが、その状況から底面にクサビ状工具である矢を打ち込んで切り離す技法がとられていたと考えられる（「溝切り技法」）(1)。切り出しの痕跡の規模は様々であり、やや大雑把であるが、少なくとも幅 40cm ×奥行 40cm ×高さ 30cm 前後の立方形に近いものと幅 100cm ×奥行 40cm ×高さ 30cm 前後の直方形状のものが認められ、何らかの規格の存在を垣間見ることができる。

また方形の切り出し痕に混じって、円形の切り出し痕もいくつか確認できた。左壁の奥壁側隅に２箇所、奥壁の右壁寄りで垂直に張り出した壁の下方に１箇所あり、径は 50 ～ 70cm を測る。壁面に工具痕が残ることから、方形の切り出しと同様の技法で切り離されたものと考えられる。

出土遺物（第 170 図）

採掘坑内から陶磁器碗の破片が 1 点出土した。推定口径 11.2cm、器高 6.4cm、推定底径 6.0cm を測る広東形碗である。外面に虫文と蝙蝠文が描かれている。肥前系のいわゆる外山雑器諸窯で生産されものとみられ、胎土から波佐見で焼かれたと考えられる。底部は厚みを持ちつつせり出し気味で、器形は小形化しており、時期は 19 世紀前半とみられる (2)。

これにより、採掘坑の年代は江戸時代後期に属すると推測される。



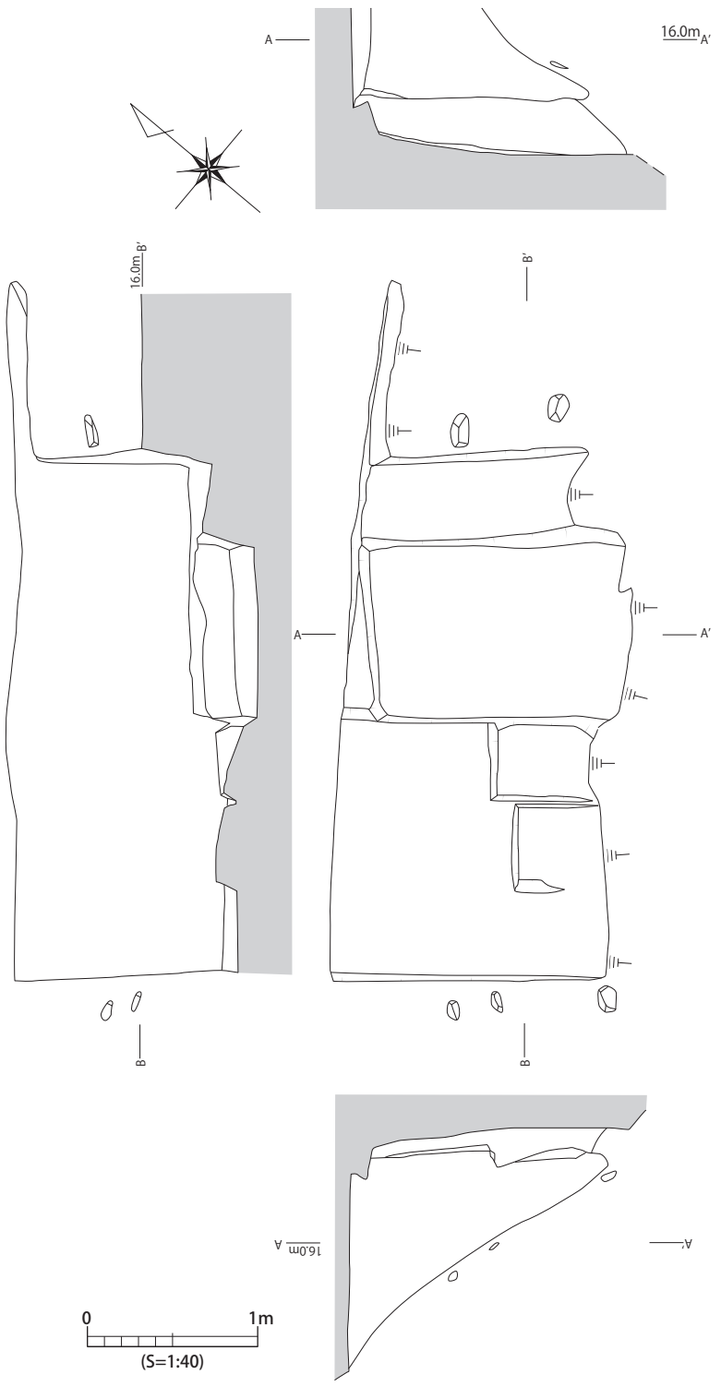
第 170 図　大迫ツリ遺跡１号採掘坑出土遺物実測図

２号採掘坑の調査（第 171 図）

２号採掘坑は、１号採掘坑の北側隅の上方に立地する比較的小規模な露天掘りの採掘坑である。谷底部からは約 9.5m を測る位置にあり、標高は下端部で約 15m、上端部で約 16.7m である。

規模は、幅が最大値で 3.14m、奥行きが 1.67m、高さが 1.44m を測り、底面は幅約 3 m、奥行き 1.5m を測る。

1 号採掘坑と同様に採掘坑の両側面には作業の足掛かりとみられる連続した窪みが認められ、

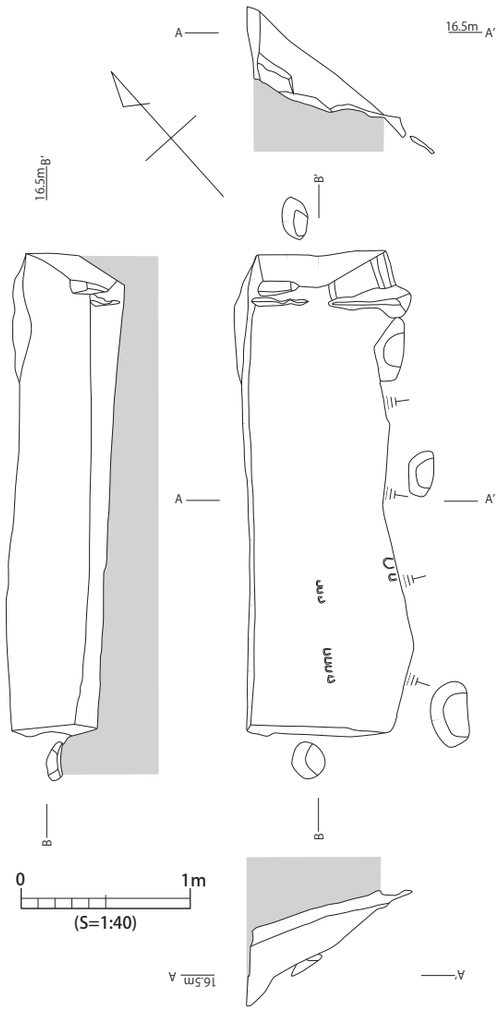


第 171 図　大迫ツリ遺跡 2 号採掘坑実測図

採掘坑の右隅上部には奥壁に沿って長さ約 1.1 m、幅約 10cm の細長い平坦面がみられる。平坦面には加工された痕跡が認められるので、操業初期の切り出し痕もしくは足場を整えるための成形痕と考えられる。近接する 1 号採掘坑との前後関係は不明瞭であるが、作業効率や足場の確保から 2 号採掘坑が先に放棄されたとみるのが妥当であろう。

奥壁・両側壁とも垂直に掘り込まれており、壁面には工具を連続して打ち込んだ痕跡が綾杉状に認められる。底面に残る切り出しの痕跡から、箱型の石材が切り出されたと考えられ、溝が掘られていることから、 1 号採掘坑と同様、溝切りによる切り出しが行われたとみられる。また切り出された石の寸法は、幅 40cm 前後の立方形状のものと、幅 100cm・高さ 20cm 前後の直方形状の規格があったことがうかがえる。

出土遺物は無く、詳細な時期は特定できないが、技法や加工の状況は 1 号採掘坑に類似しており、ほぼ同時期のものと推測される。



第 172 図　大迫ツリ遺跡 3 号採掘坑実測図

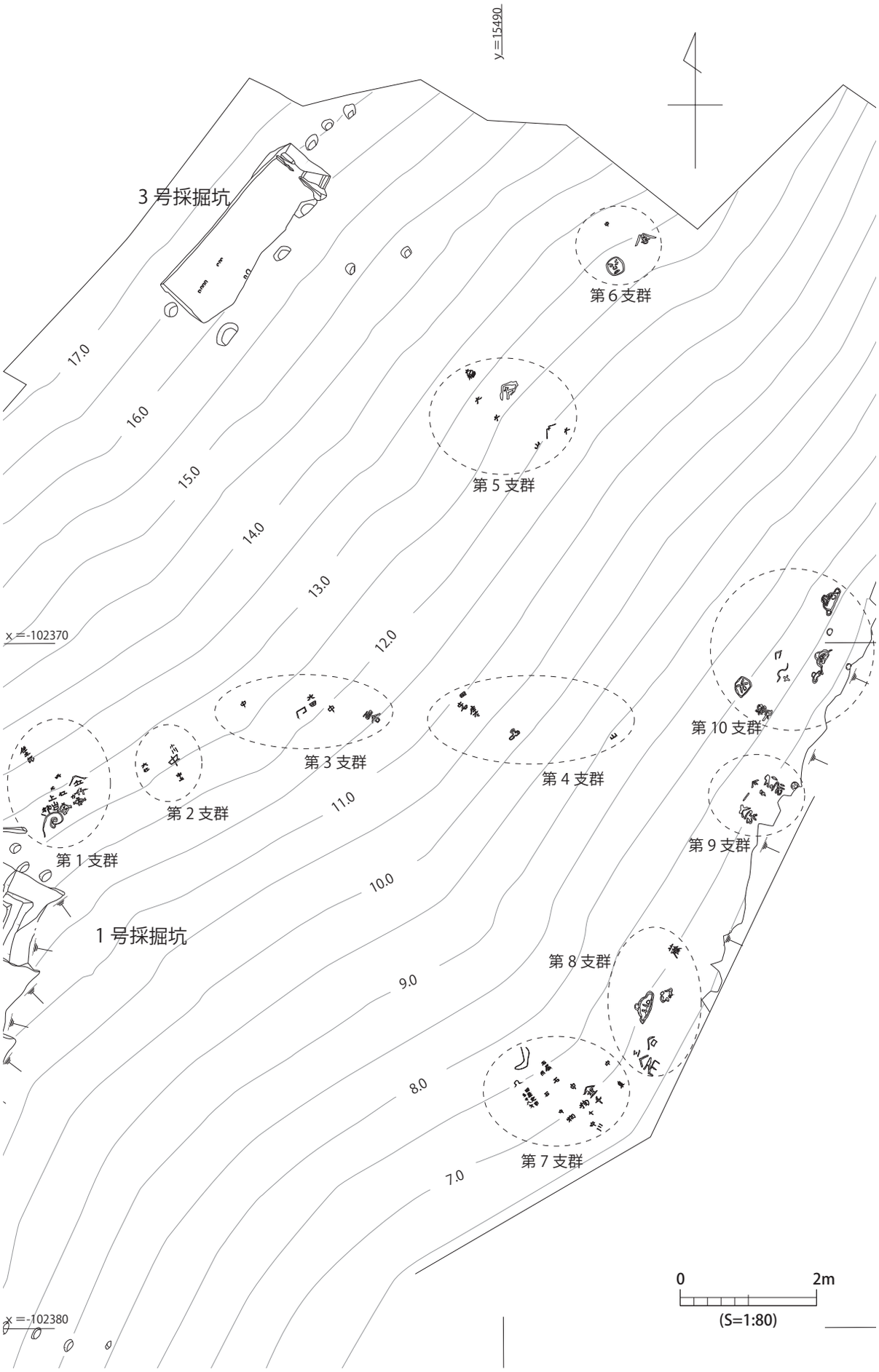
3 号採掘坑の調査（第 172 図）

3 号採掘坑は、調査区北東端の最上部に立地する小規模な露天掘りの採掘坑である。谷底部からは約 9.5m を測る位置にあり、標高は下端部で約 16m、上端部で約 16.7m である。規模は幅が最大値で 2.88m、奥行きが 0.95m、高さが 0.58m を測り、底面は幅約 2.6m、奥行き 0.8m を測る。採掘坑の両側面と下方には作業の足掛かりとみられる連続した窪みが存在し、坑内右壁沿いの底面には溝が数条確認できる。 1 ・ 2 号と比較して加工痕は明瞭ではないが、底面には手前側から打ち込まれたとみられる幅 4cm 前後の工具痕が認められ、これが石を岩盤から切り離す矢（クサビ）の痕跡と考えられる。

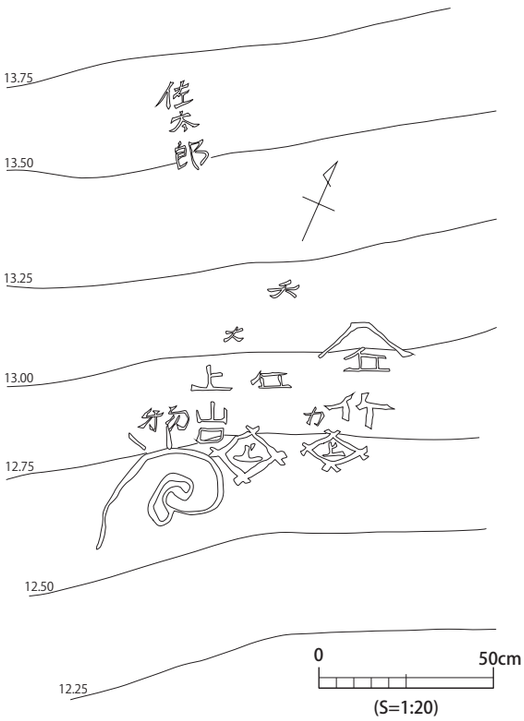
出土遺物は無く、詳細な時期は特定できないが、 1 ・ 2 号採掘坑とほぼ同時期のものと推測される。

線刻画群の調査（第 173 図）

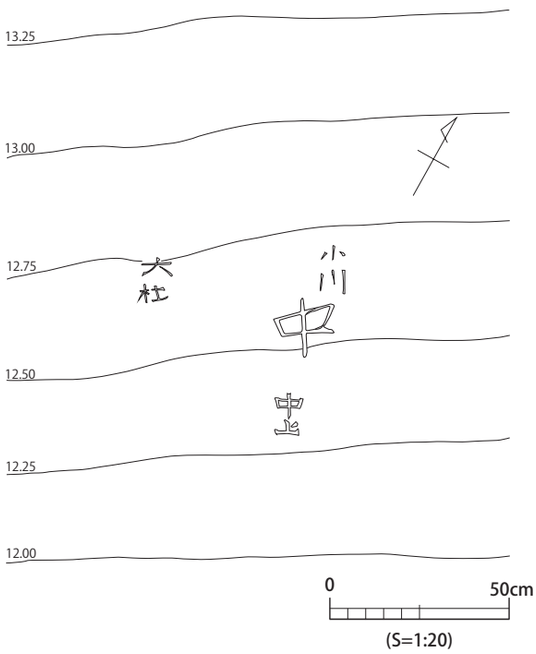
大迫ツリ遺跡では、採掘坑の周辺の岩盤にノミ状工具によって刻まれた多数の線刻画が存在する。遺跡発見の当初は谷底部沿いの斜面で確認されたのみであったが、斜面の精査の結果、採掘坑が存在する高さまで広がることが判明した。また 1 号採掘坑の下方から南西側には一切確認できないこともあげられる。時間の都合ですべての線刻画が図化できたわけではないが、約 80 点



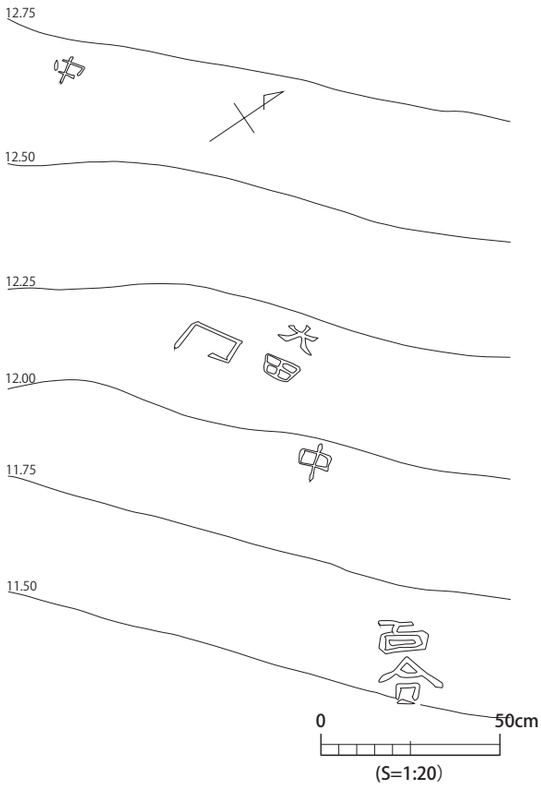
第 173 図　大迫ツリ遺跡線刻画群配置図



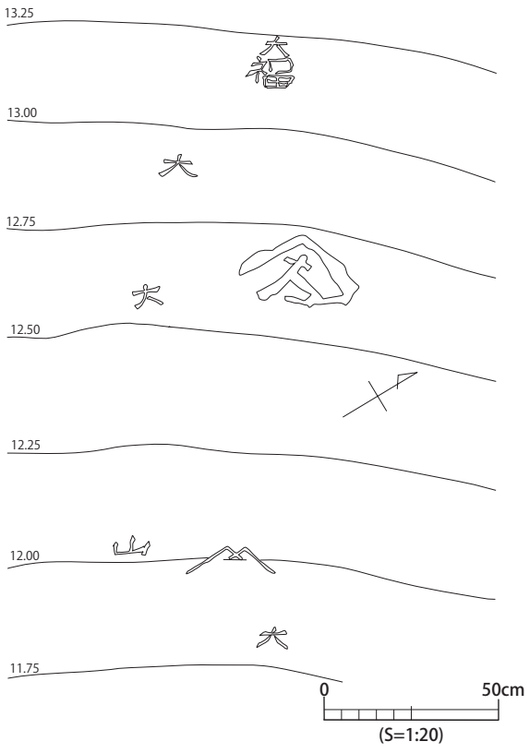
第 174 図　大迫ツリ遺跡線刻画第 1 支群実測図



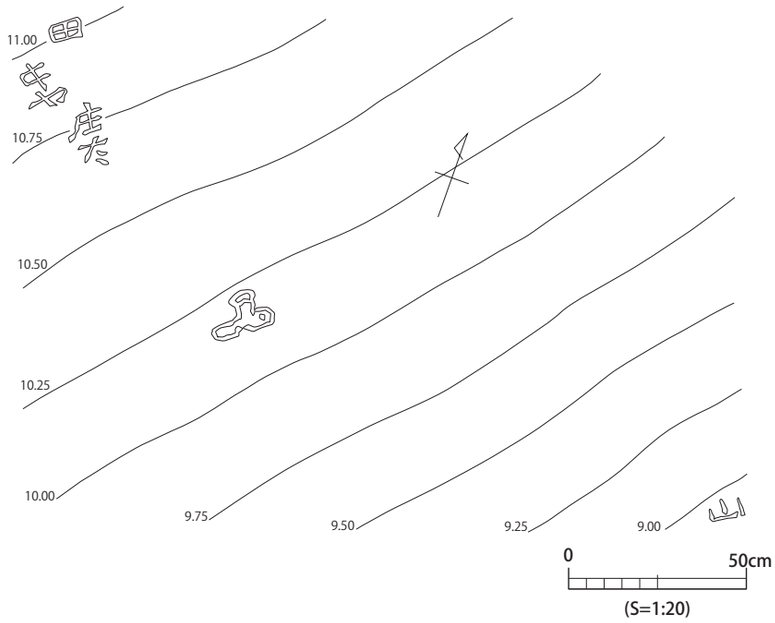
第 175 図　大迫ツリ遺跡線刻画第 2 支群実測図



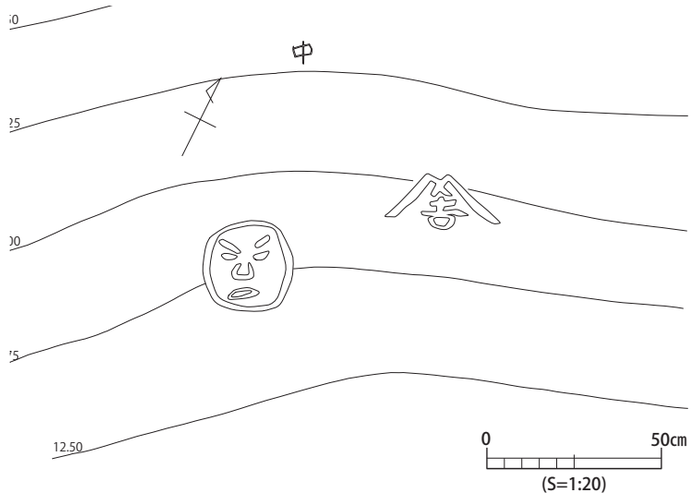
第 176 図　大迫ツリ遺跡線刻画第 3 支群実測図



第 177 図　大迫ツリ遺跡線刻画第 5 支群実測図



第 178 図　大迫ツリ遺跡線刻画第４支群実測図



第 179 図　大迫ツリ遺跡線刻画第６支群実測図

を測量することができた。しかし岩盤の風化や剥落、もしくは工事による削平により確認できなかったものを含め、本来の線刻画はかなりの数にのぼるとみられる。

線刻画にはいくつか種類があり、すべて判読できたわけではないが、少なくとも記号や文字、人物名、屋号とみられる略号、座仏像等が確認できる。これらは特に意図的な規則をもって配置されてはいないと思われるが、谷底部に沿った低い位置と斜面上方の標高 12 ～ 13m の位置に集中して検出されている。これらを便宜的に 10 支群に分類し、以下順に概要を述べたい。

第１・２支群（第 174・175 図）

1 号採掘坑の北東側で検出された線刻画群である。標高は 12 ～ 13m を測り、谷底部からは約 6.5 mの位置にある。判読できた刻字には「佐太郎」「大」「上」「物」「山口」「大社」「小川」「中」

「中川」があり、他に屋号とみられる略号や渦巻き状の幾何学的な記号がかたまって刻まれている。

第３支群（第 176 図）

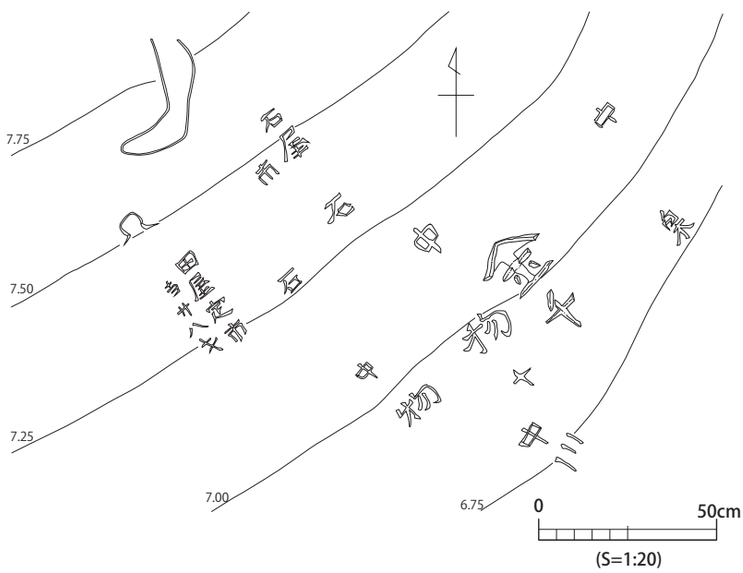
第２支群の北東側で斜めに並んで検出された。標高は 11.5 ～ 12.75m を測る。判読できた刻字には「中」「大田」「百合」がある。

第４支群（第 178 図）

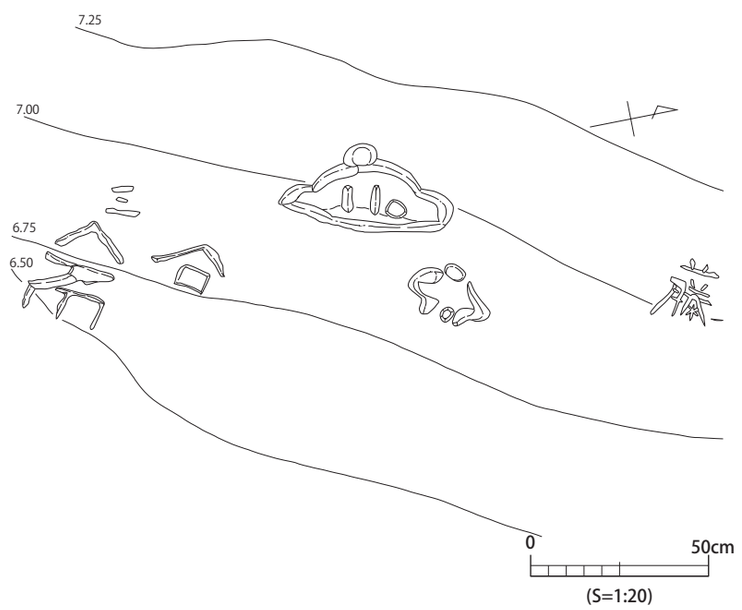
第３支群の南東側下方で斜めに並んで検出された。標高は 9.0 ～ 11.0m を測る。判読できた刻字には「田」「キヤ（中ヤか）」「庄た」「山」がある。また男根状の記号があるが、これは座仏像を省略化したものであろう。

第５支群（第 177 図）

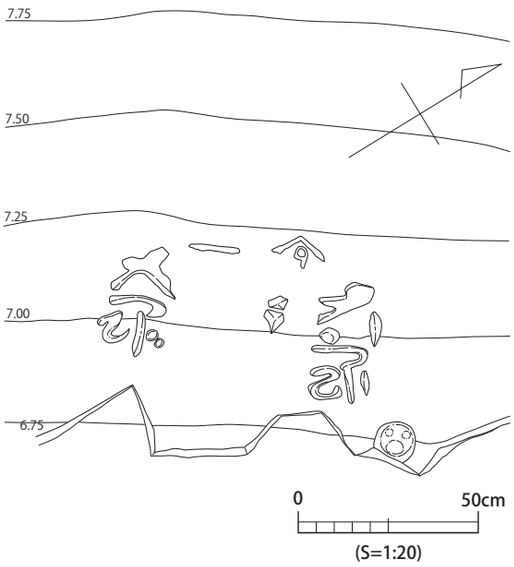
３号採掘坑の斜面下約３ｍの位置で検出された。標高は 12 ～ 13.5m を測る。判読できた刻



第 180 図　大迫ツリ遺跡線刻画第７支群実測図



第 181 図　大迫ツリ遺跡線刻画第８支群実測図



第 182 図　大迫ツリ遺跡線刻画第９支群実測図

字には「大」が３点、「大福」「山」があり、屋号とみられる略号も２点存在する。

第６支群（第 179 図）

第５支群の北東側の調査区東端部で検出された。標高は 12.5 ～ 13.5m を測り、第１・２・３・５支群とはほぼ同じ高さにある。判読できた刻字には「中」があり、他に屋号と顔が存在する。すべての線刻画中、明確な顔の表現が刻まれた例は珍しい。

第７支群（第 180 図）

第７支群から第 10 支群にかけては谷底部に沿った低い位置に配置されている。

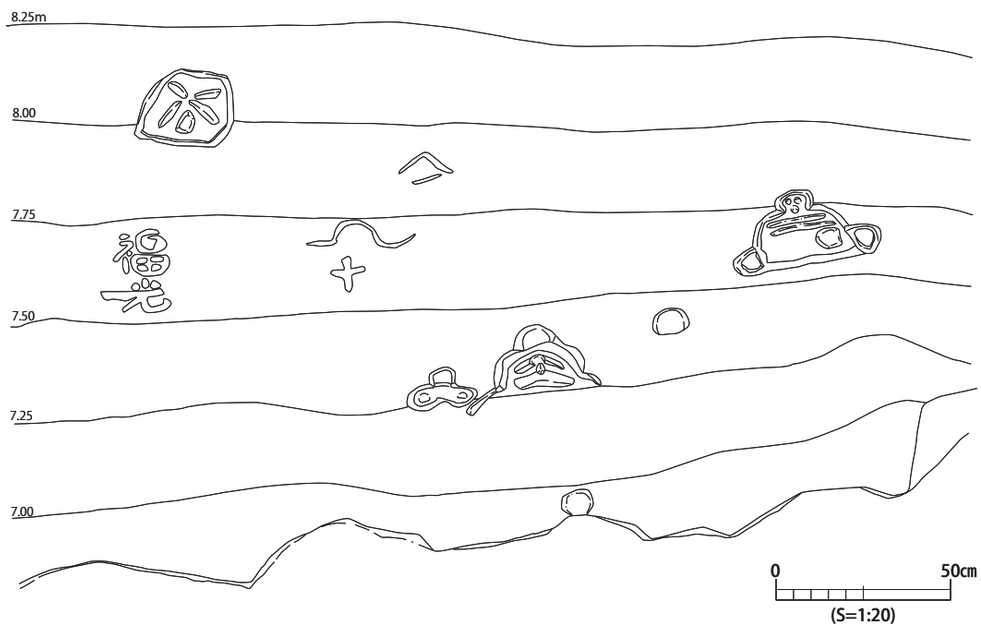
第７支群は谷底部沿いの西端に位置し、縦方向に多数の線刻がみられる。標高は 6.5 ～８m を測る。判読できた刻字には明らかな人名の他、「石屋」「石」「中」「物」「金」「千」「中川」「泉」「而」がある。また十字や座仏像の顔とみられる円形の刻み、足をかたどったような形状の線刻もある。

第８支群（第 181 図）

第７支群の北東側に隣接し横方向に並んで検出された。標高は 6.5 ～ 7.25m を測る。判読できた刻字には「三」「而」の他、「藤」のような複雑な文字もある。また屋号や座仏像が２体存在する。

第９支群（第 182 図）

第８支群から北東方向に約 1.8m の間隔を空けて検出された。標高は 6.75 ～ 7.25m を測る。判読できた刻字は無いが、梵字のような記号と屋号、他に工事により胴部以下を削平されたとみられる座仏像の顔が存在する。



第 183 図　大迫ツリ遺跡線刻画第 10 支群実測図

第 10 支群（第 183 図）

第９支群の北東側に隣接して検出された。標高は 6.75 ～ 8.25m を測る。判読できた刻字には「福光」があり、他に顔や十字、屋号（？）、３体の座仏像と座仏像の顔とみられる円形の彫り込みが２点存在する。顔は第６支群のものと比較すると簡略化が進んでいるとみられる。座仏像は様々な表現のものがあり、省略化が進んだものは第４支群のものと共通しており興味深い。

以上のように、多種多様の線刻が確認できた。注目されるのは石切り場遺構との関連だが、両者が同時期のものであることを示す直接的な根拠は乏しいと言わざるを得ない。しかしながら、採掘坑に囲まれるように集中して分布する状況から、両者の関係性は十分考慮される。

第３節　小釜野遺跡の調査

調査の概要（第 184 図）

小釜野遺跡は、福光湾に面する狭長な谷筋を挟む南側丘陵の北向き斜面に立地する。大迫ツリ遺跡とは向かい合った位置にあり、同様に凝灰岩の石切場跡が検出された。大迫ツリ遺跡に続いて行った緊急調査であったが、調査前の状況では道路工事のため周辺は既に樹木伐採が行われ、トンネル坑口下の急峻な斜面の一部で凝灰岩の岩盤が露出している状況にあった。また斜面は谷状に入り組んでおり、その谷状地形の両側で採掘坑の落ち込みや壁面を確認することができた。

調査は大迫ツリ遺跡と同様に、２箇所の採掘坑の周辺を重機によって掘削作業を行い、その後はコンプレッサーによる風圧や人力による精査作業を実施し、遺構の範囲を特定した。その結果、露天掘りの採掘坑を２基検出。それぞれ１・２区と調査区を設定し、併せて採掘坑の斜面下方の精査作業も行ったが、大迫ツリ遺跡で検出されたような線刻画群は確認されず、遺物も出土しなかった。最終的な調査面積は 73㎡である。

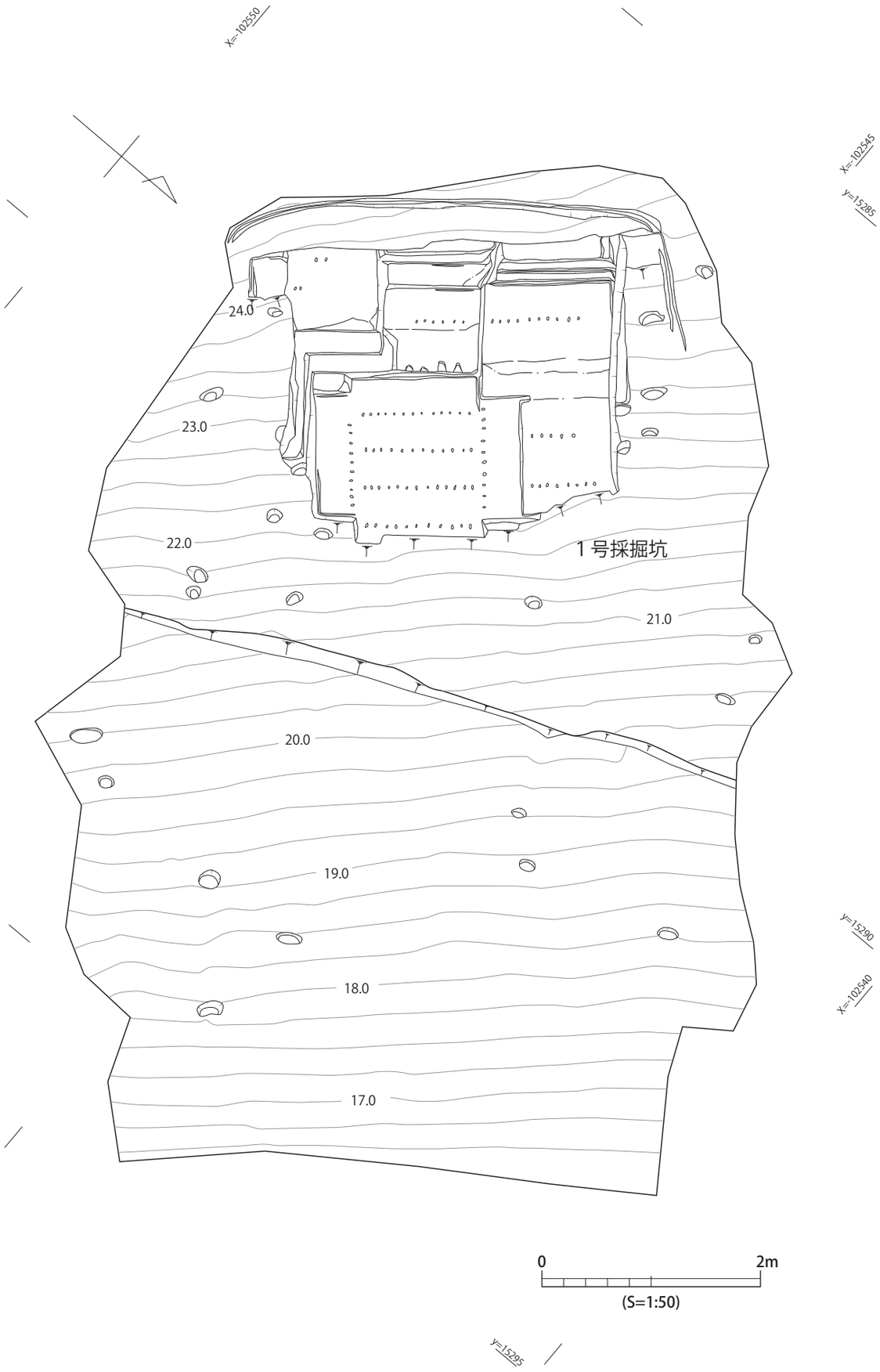
１区　１号採掘坑の調査（第 185 ～ 189 図）

１号採掘坑は、傾斜角度 43°の非常に急峻な斜面に露出した凝灰岩の岩盤層に露天掘りされた採掘坑跡である。直下の谷底部からは約 17m の位置にあり、標高は下端部で約 22m、上端部で約 24m である。規模は、幅が最大値で 2.98m、奥行きが 2.6m、高さが 2.56m を測り、底面は幅約 2.6m、奥行き 2.05m を測る。今回調査された中では大迫ツリ遺跡１号採掘坑に次ぐ規模である。

斜面の下方から採掘坑の両側にかけては、作業の際の足掛かりとみられる幅 20 ～ 30cm、深さ 5cm 程度の円形の窪みがやや不連続ながらみられる。

小釜野遺跡　作業の様子

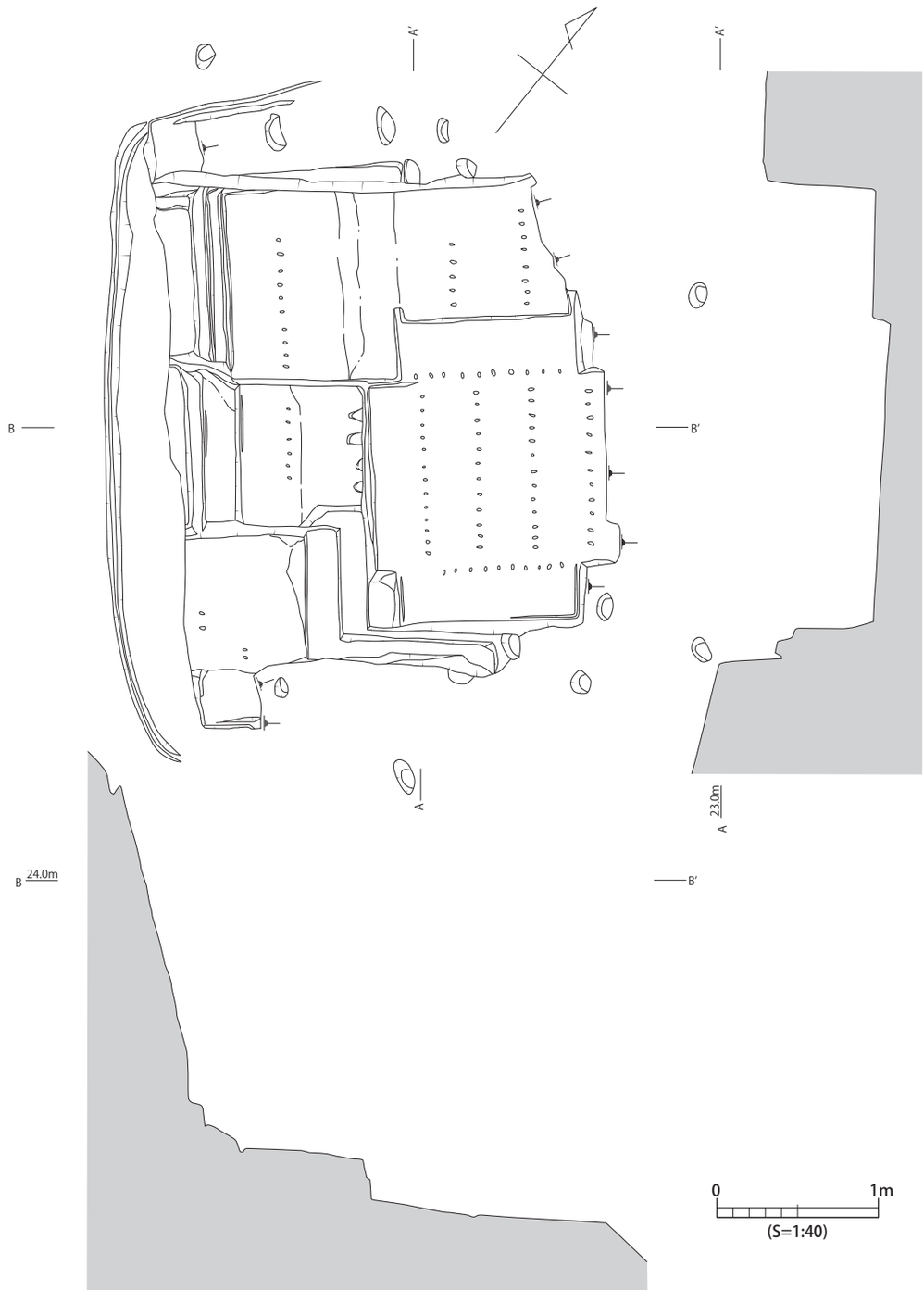
第 184 図　小釜野遺跡調査区配置図



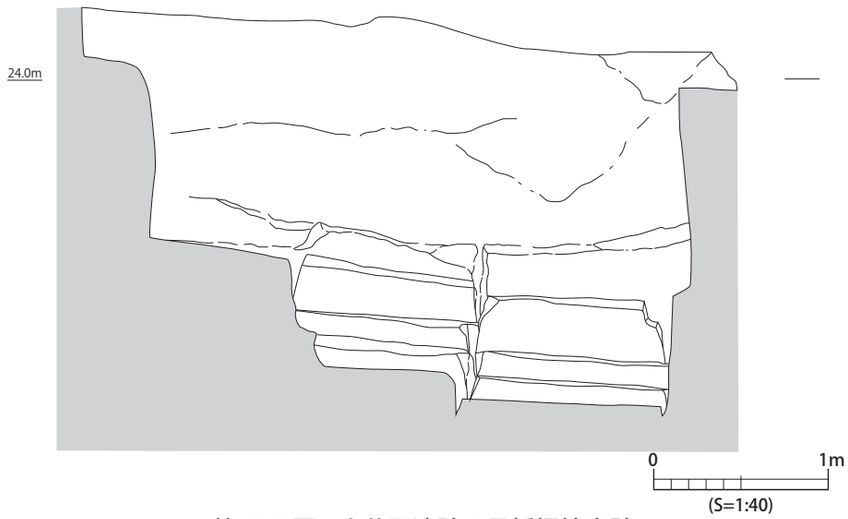
第 185 図　小釜野遺跡 1 区遺構配置図

また採掘坑の斜面上方から右側面にかけては、排水溝とみられる幅 10cm の溝が配置されている。採掘坑の上辺両側には幅 45cm ほどの浅いテラス状に加工された平坦面がみられ、操業初期の切り出し痕、もしくは足場を整えるための成形痕と考えられる。

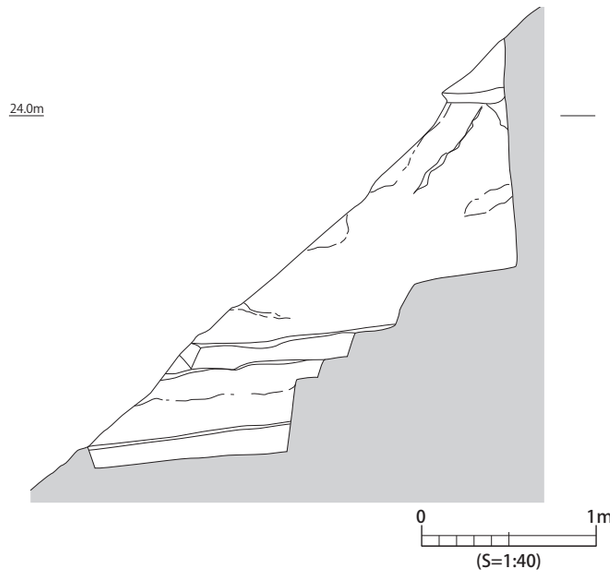
奥壁にかけて切り出し痕が階段状に認められるが、大迫ツリ遺跡と比較して凝灰岩がより硬質で風化に耐性があるとみられ、壁面や底面の工具痕がより明瞭に残存する特徴がある。基本的に箱型の石切りが行われたとみられ、切り出し痕の縁には三辺に溝が切られていることから、大迫ツリ遺跡と同様に「溝切り技法」により採掘が行われたとみられる。また床面には斜め方向から連続して



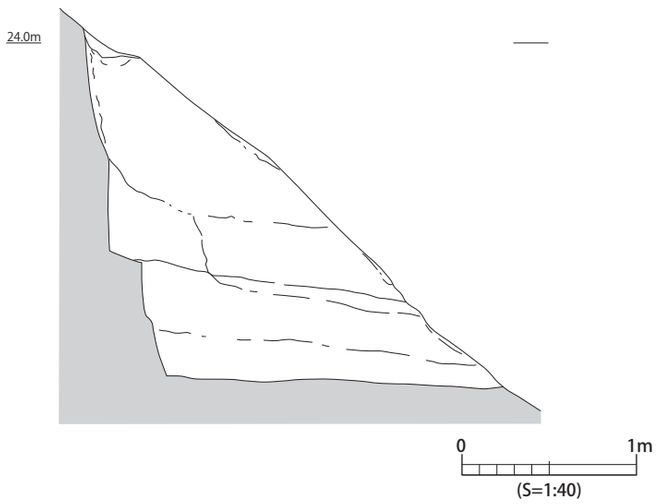
第 186 図　小釜野遺跡 1 号採掘坑平面図



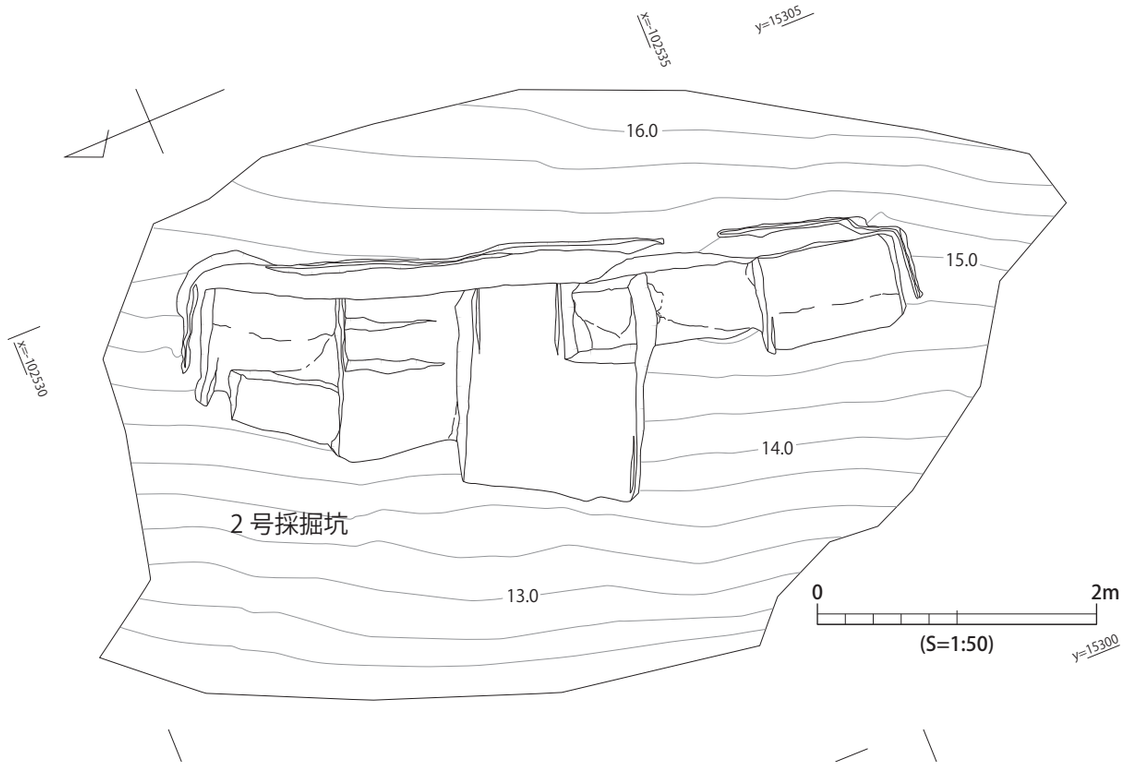
第 187 図　小釜野遺跡 1 号採掘坑奥壁



第 188 図　小釜野遺跡 1 号採掘坑左壁



第 189 図　小釜野遺跡 1 号採掘坑右壁



第 190 図　小釜野遺跡２区遺構配置図

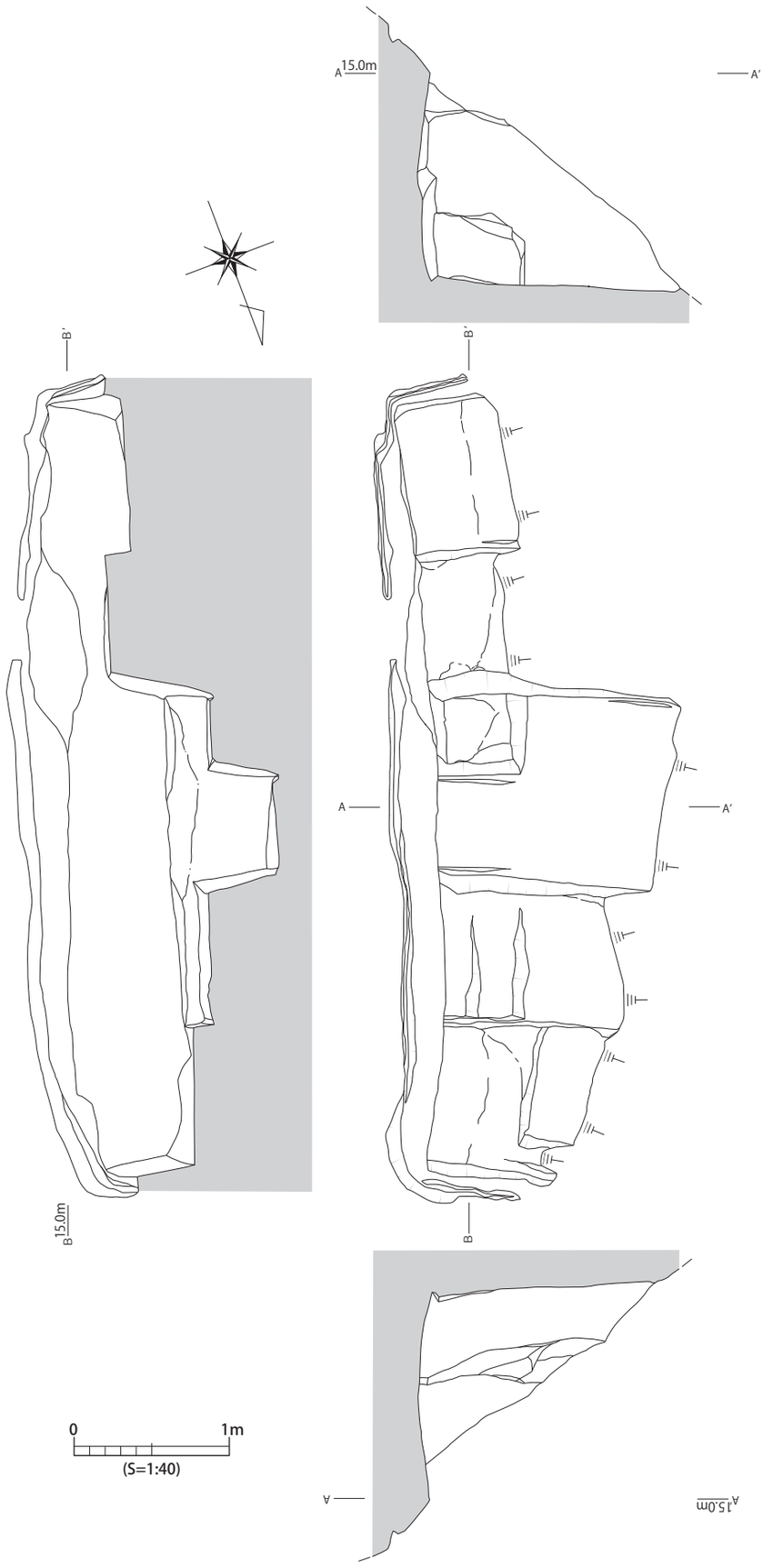
打ち込んだとみられる幅 2cm ほどの工具痕が多数残されており、切り離しの際に先端の尖った工具が用いられた様子がうかがえる。なお図化していないが、切り離した跡の面を平滑にするためのツルハシ状工具による削り痕も明瞭に残されている。この切り出しの痕跡から、本採掘坑ではおよそ幅 110cm ×奥行 30cm ×高さ 15cm 前後の箱型石材を、規則的に連続して切り出されたと考えられる。

本採掘坑から遺物は出土していない。

２区　２号採掘坑の調査（第 190 ～ 191 図）

２号採掘坑は、１号採掘坑から谷状地形を挟んで約 20m 離れた位置で検出された露天掘りの採掘坑である。谷底部からは約 10m を測る位置にあり、標高は下端部で約 14m、上端部で約 15.2m である。規模は、幅が最大値で 5.04m、奥行きが 1.45m、高さが 1.55m を測り、底面は幅約 4.9m、奥行き 1.6m を測る。

採掘坑の周辺には足掛かり痕とみられる窪みは確認されなかったが、上方には排水溝が配置されている。床面は平坦でなく、中央に向かって凹字状に段差が生じており、およそ６段にわたって切り出し痕が並列する。１号採掘坑と比較して石材はやや軟質で、風化により切り出しの痕跡を明瞭には留めていない。しかしながら、切り出し痕の壁面に工具痕、底面縁には溝が残ることから、「溝切り技法」によって箱型の石材が採掘されたとみられる。各段の規格から推測すれば、幅 40cm 前後の立方形状のものと、幅 80cm・高さ 20cm 前後の直方形状の石材が採掘されたことがうかがえる。本採掘坑から遺物は出土していない。



第 191 図　小釜野遺跡 2 号採掘坑実測図

遺　跡　名	採掘坑 No.	最大幅（m）	奥行き（m）	最大高（m）	出土遺物	時　期	備　考
大迫ツリ遺跡	1号採掘坑	7.72	5.04	3.64	肥前系陶磁器碗	江戸時代後期（19 世紀前半）	「溝切り技法」による採掘
	2号採掘坑	3.14	1.67	1.44			「溝切り技法」による採掘
	3号採掘坑	2.88	0.95	0.58			「溝切り技法」による採掘
小釜野遺跡	1号採掘坑	2.98	2.6	2.56			「溝切り技法」による採掘
	2号採掘坑	5.04	1.45	1.55			「溝切り技法」による採掘

第 7 表　大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡の採掘坑一覧

註

(1)　石切りの技法については、県文化財課世界遺産室・鳥谷芳雄氏のご教示を得た。

島根県教育委員会 1997『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　大井谷石切場跡・上塩冶横穴部群第 14 支群・上塩冶横穴部群第 15 支群・上塩冶横穴部群第 16 支群』

(2)　陶磁器の特徴や産地、時期については、島根県埋蔵文化財調査センター阿部賢治氏のご教示を得た。

参考文献

島根県教育委員会 2010『一般国道 9 号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 3　梨ノ木坂遺跡・庵寺古墳群・庵寺遺跡Ⅱ』

第５章　自然科学分析

第１節　庵寺古墳群発掘調査に係るＡＭＳ年代測定

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が、庵寺古墳群で検出された各遺構の年代を明らかにするとともに、5 号加工段で検出された種子片の種類（植物名）を明らかにする目的で、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターから委託を受け、実施・報告した調査報告書の概報である。

また、庵寺古墳群は島根県大田市仁摩町に立地する遺跡である。

分析試料について

分析試料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターにより採取・保管中の試料から御提供を受けた。図 1 の遺構配置図に、試料採取位置が行われた、おおよその位置を示す。

分析試料の詳細を表 1 に示す（表 1 には、測定結果も示している。）。

分析方法

前処理は、全試料について塩酸（1.2N）、水酸化ナトリウム（1.0N）、塩酸（1.2N）による洗浄を行った。測定にはタンデム型イオン加速器を用い、年代計算の半減期としてリビーの

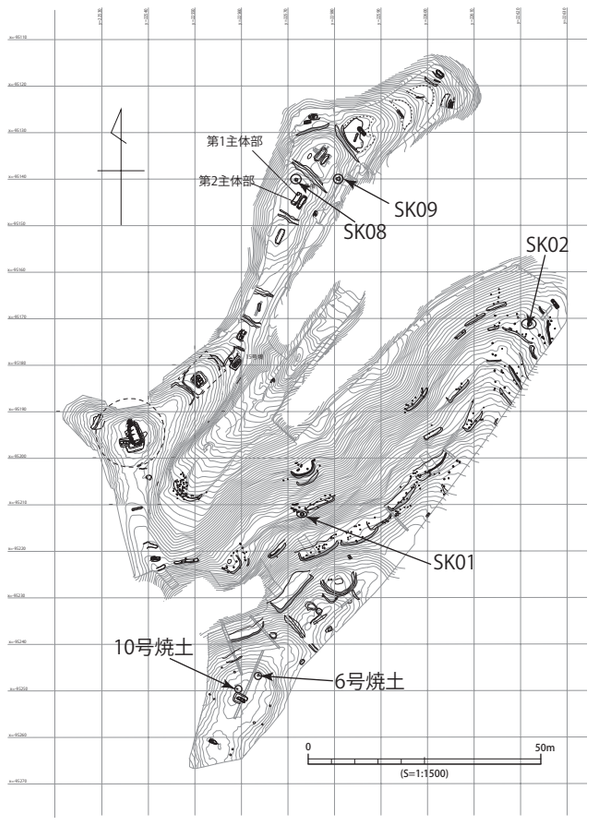
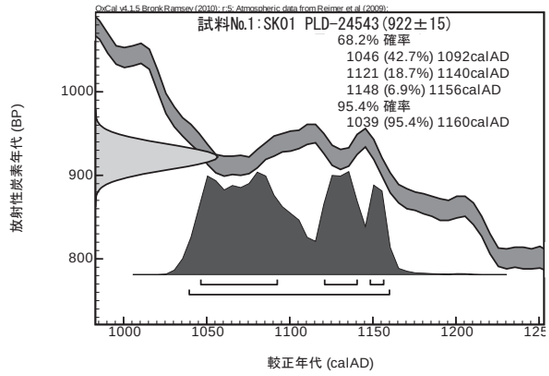


図 1　遺構配置図

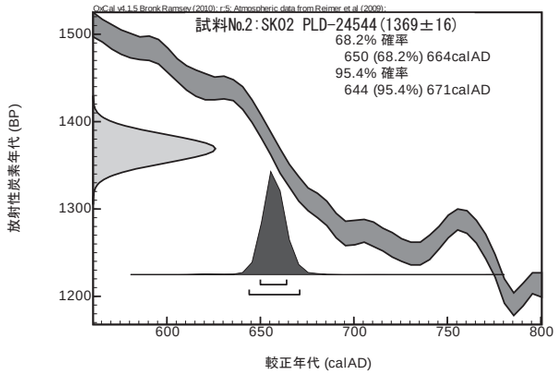
試料				測定年代*1	δ13C	暦年較正用年代	補正年代*2	暦年較正年代		測定番号
試料No.	種別	出土遺構	重量(g)	(yrBP±1σ)	(‰)	(yrBP±1σ)	(yrBP±1σ)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	(PLD-)
1	炭化材	SK01	1.0824	963±16	-27.43±0.13	922±15	920±15	AD1046-1092(42.7%) AD1121-1140(18.7%) AD1148-1156(6.9%)	AD1039-1160(95.4%)	24543
2	炭化材	SK02	2.7391	1402±17	-26.99±0.13	1396±16	1370±15	AD650-664(68.2%)	AD644-671(95.4%)	24544
3	炭化材	SK08	1.1846	1450±16	-27.36±0.13	1410±16	1410±15	AD621-654(68.2%)	AD610-657(95.4%)	24545
4	炭化材	SK09	0.4224	5928±21	-25.00±0.21	5928±21	5930±20	BC4839-4777(68.2%)	BC4846-4726(95.4%)	24546
5	炭化材	6号焼土	1.1539	6244±22	-26.61±0.12	6217±21	6215±20	BC5225-5205(18.4%) BC5167-5117(29.8%) BC5110-5077(20.0%)	BC5294-5241(14.7%) BC5231-5201(21.8%) BC5177-5068(58.9%)	24547
6	炭化材	10号焼土	2.6089	1679±17	-28.04±0.14	1628±17	1630±15	AD396-434(68.2%)	AD386－463(77.0%) AD483－533(18.4%)	24548

*1 δ13C補正無年代　*2 δ13C補正年代

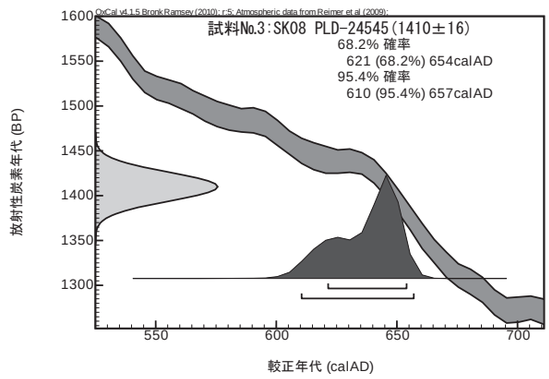
表 1　AMS 年代測定試料の詳細及び測定結果



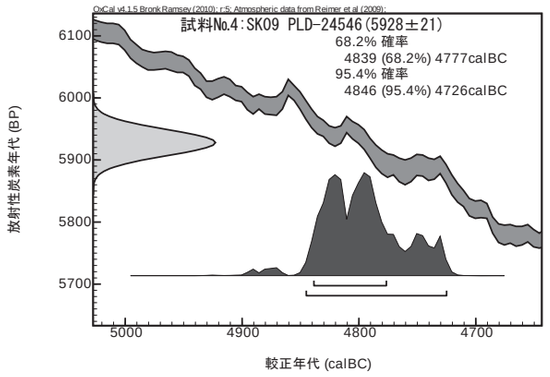
試料No.1 : SK01



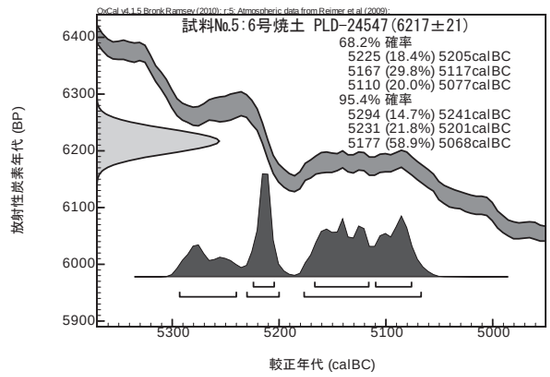
試料No.2 : SK02



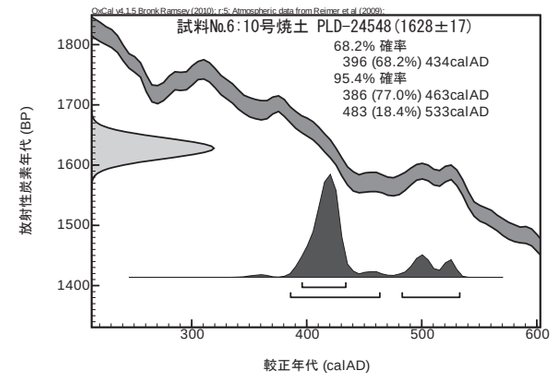
試料No.3 : SK08



試料No.4 : SK09



試料No.5 : 6 号焼土



試料No.6 : 10 号焼土

図 2　暦年較正結果

値（5568 年）を用いた。暦年較正には INTCAL09(Reymer et al., 2009) を用い、OxCal ver4.15（Bronk Ramsey, 2009）により算出した。

AMS 年代測定結果

測定結果を表 1 に示す。また、図 2 に暦年較正結果のグラフを示す。

表 1 には、4 種類の年代と、δ^{13}C 値を示してある。

測定年代は、従来は実年代として用いられてきた値である。^{14}C 濃度が環境、時代にかかわらず常に一定であるという仮定の下に、リビーの半減期（5568 年）を用いて計算した値である（δ^{13}C 補正を行っていない値であり、通常算出値を 5 年単位で丸めて示される。ここでは算出値をそのまま示す。）。

補正年代は、^{14}C 濃度が環境により変動することから、δ^{13}C を測定し、δ^{13}C = -25‰に規格化した ^{14}C 濃度を算出し、年代値を再計算したもの（暦年較正用年代）を 5 年単位で丸めた値である。

上記の年代は、いずれも西暦 1950 年からさかのぼった年代値で示してある。

一方暦年較正年代は、時代（時間）とともにランダムに変化している大気中二酸化炭素の ^{14}C 濃度を、樹木の年輪や海底堆積物のしま状粘土、サンゴの年輪から明らかにして得られた暦年代較正データである INTCAL09 を用いて、OxCal ver. 4.15 によって算出したものである。また、較正に必要な補正年代値として補正年代ではなく、暦年較正用年代を用いている。

年代測定値について

図 3 から明らかなように、得られた年代値は、4 つのグループに分けられた。

① 縄文時代前期の年代値

SK09 が 5930 ± 20 yr.BP、6 号焼土が 6215 ± 20 yr.BP と古い年代を示した。庵寺古墳群で現在までに検出された古墳、遺構は、弥生時代後期以降のものであり、遺跡内での人間活動が縄文時代前期に遡る可能性が示唆される。

② 古墳時代中期から後期の年代値

10 号焼土が 1630 ± 15 yr.BP（cal AD 386-533 年）の値を示し、古墳時代中期から後期頃の時期を示した。10 号焼土は 20 号墳（古墳時代前期末から中期）との関連が期待されていた。近い年代が得られたことで、20 号墳との関係が示唆される。

③ 飛鳥時代の年代値

SK02 が 1370 ± 15 yr.BP（cal AD 644-671 年）、SK08 が 1410 ± 15 yr.BP（cal AD 610-657 年）の値を示し、飛鳥時代の時期を示した。SK08 には 8 号墳との関連が期待されたが、大きな時期差があった。丘陵上で飛鳥時代の遺構は検出されておらず、丘陵上で、この時期に何らかの人間活動が営まれていたことが示唆される。

④ 平安時代後半の年代値

SK01 が 920 ± 15 yr.BP（cal AD 1039-1160 年）の値を示し、平安時代後期を示した。SK01 には加工段 16（弥生時代後期）や 2 号竪穴建物跡（弥生時代後期）との関連が期待されたが、大きな時期差があった。丘陵上で平安時代後期の遺構は検出されておらず、この時期に何らかの人

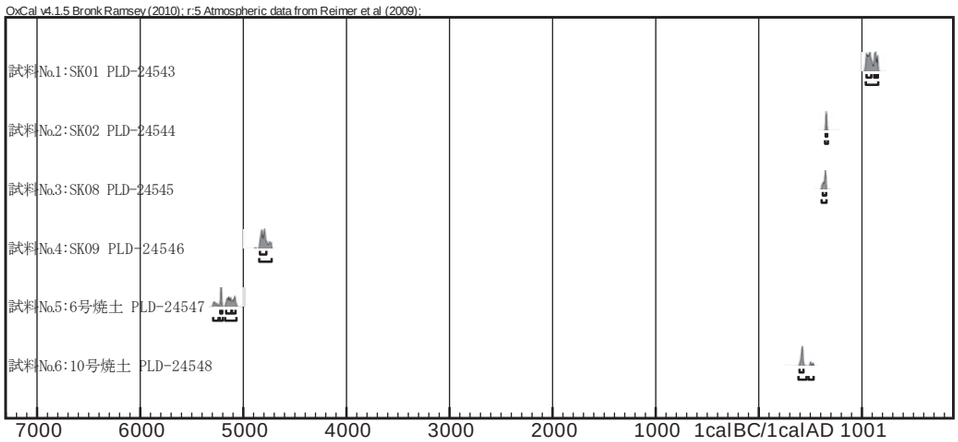


図３　較正年代の分布

間活動が営まれていたことが示唆される。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Reimer, P. J., Baillie, M. G. L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Burr, G. S., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., Heaton, T. J., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser,K. F., Kromer, B., McCormac, F. G., Manning, S. W., Reimer, R. W., Richards, D. A., Southon, J. R., Talamo, S., Turney, C. S. M., van der Plicht, J., & Weyhenmeyer, C. E. (2009). IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 51(4), 1111-1150.

第 2 節　庵寺古墳群 5 号加工段で検出された炭化種実片について

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が、庵寺古墳群 5 号加工段で検出された種子片の種類（植物名）を明らかにする目的で、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターからの委託を受けて実施・報告した、樹種同定報告書の概報である。

庵寺古墳群は島根県大田市仁摩町に立地する遺跡である。

試料について

分析試料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターにより採取・保管中の試料から御提供を受けた。図 1 の遺構配置図に、試料が採取された 5 号加工段の位置を示す。

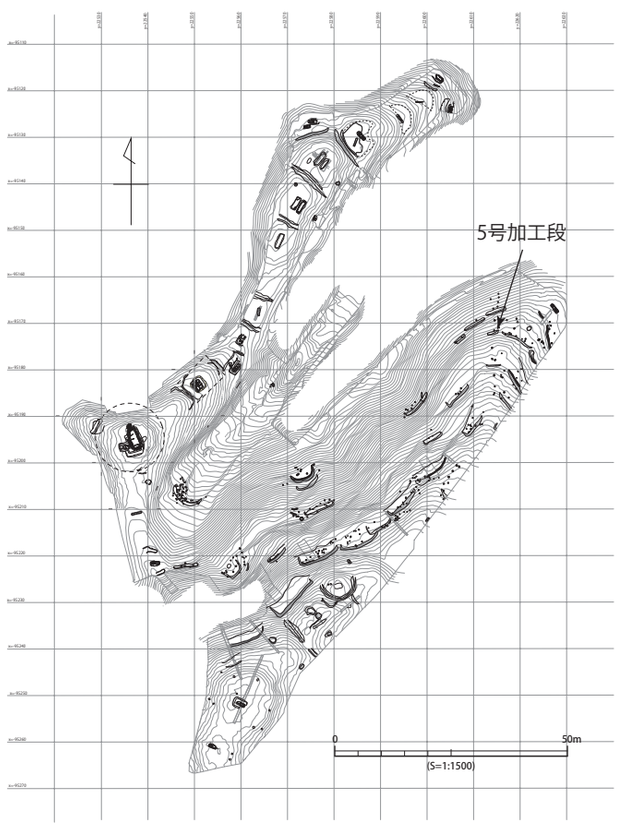


図 1　遺構配置図

種実同定方法

提供を受けた種実片について、以下の手順で同定を行った。

① 肉眼で、大きいものから 100 片を分取し、同定試料とした。

② 顕微鏡下で特徴を観察し、現生標本との比較を基本として、植物図鑑（参考文献参照）の記載を参考に同定作業を行った。

③ 同定を行った種類ごとに顕微鏡写真を撮影し、同定の根拠を記した。

種実同定結果

100 片の破片の内、97 片はクリの炭化子葉であった。残り 3 片にもクリの可能性はあるが、トチノキの可能性も残る。

クリ（炭化子葉）の特徴は以下の通りである。

子葉は扁平な三角形で表面には外層の種皮の波状のやや深いしわの痕跡がそのまま残る。子葉は 2 つに分割する構造で頂部に胚があった孔状の痕跡が見られる。試料中にサイズが計測可能な子葉は見られなかったが、子葉の高さは 15mm 程度のようである。

クリの子葉は生の状態では水分を多く含み、加熱によって破裂したり焼け膨れたりする。本試

料では全ての子葉が堅く緻密に炭化していることから、完全に乾燥した種子が酸素の供給をほぼ絶たれた状態で熱を受けたものと推測される。

また、3 破片は表面が焼けただれたり剥がれたりしていた。果実に見られる層構造がないので種子 (子葉) の可能性が高い。破片の構造がやや緻密で均質であることから、クリの可能性が指摘できる。ただし、トチノキの子葉も同様の状態になることがあることから、不明とした。

図 2　種実写真（背面は 1㎜方眼）

第 3 節　庵寺古墳群におけるリン、炭素及び窒素分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

土坑墓の確認のために、カルシウム（Ca）、リン（P）分析が用いられることが多い。これは、骨がリン酸カルシウム（$Ca_3(PO_4)_2$）で構成されることに由来する。しかし、Ca、P は土壌の主成分でもあり、それらが高濃度であることが、人体が埋まっていたことを示すための必要十分件にはならない。炭素（C）、窒素（N）は、人間に限らず、全ての動物、植物に含まれているが、その量比は、動物と植物で大きな違いがある（表 1：Bowen，1979）。また、人間に限れば、毛髪と他の部位では違いがある（Bowen，1979）。このことを利用すれば、C と N の量比を求めることによって、動物遺骸の存在や、人間に特定すれば頭部の位置が確認される可能性を示唆する。

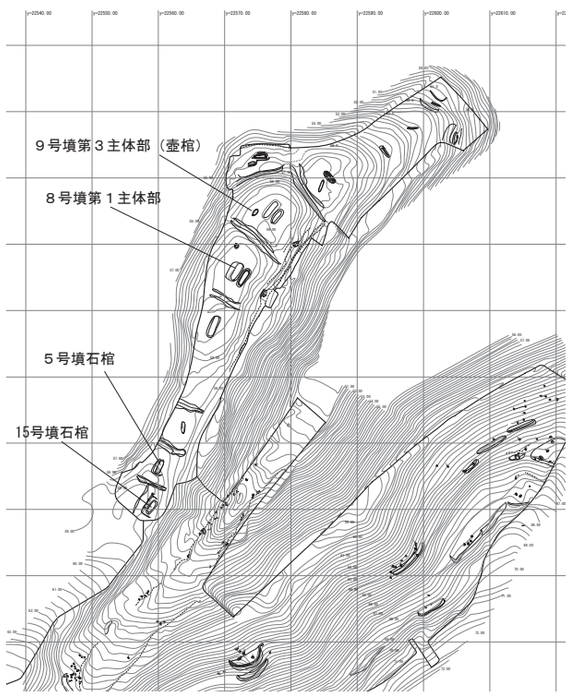


図 1　遺構（墳丘）の分布

また、Ca、P 分析には、試料調製及び測定が容易であることから蛍光 X 線分析装置（XRF）が用いられることが多い。しかし、XRF で微量元素の濃度を正確に測定することには、難がある（齋藤編、2010）。

本報は、これらのことを実証する目的で、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター及び文化財調査コンサルタント株式会社が実施した、P(リン酸)、TOC 及び TN 分析結果である。

また、分析対象とした庵寺古墳群は、島根県中央部の大田市仁摩町に立地する遺跡である。

分析試料について

調査地内での試料採取位置を図 1 に示す。また、各地点での資料の配置を、図 2 ～ 5 の濃度分布図などに示す。

分析方法

P 分析は、主として MESA-500W（(株) 堀場製作所：蛍光 X 線分析装置（XRF）：EDS）を用い、検証のために SPS3100（エスアイアイ・ナノテクノロジー (株):ICP 発光分光分析装置）を用いた。TOC・TN 分析は FlashEA 1112（有機微量元素分析装置：サーモフィッシャーサイエンティフィック (株)）を用いた。また、無機炭素を除去する目的で、HCl 処理を前処理として行っている。

		リン(P)	P/C	炭素(C)	窒素(N)	C/N	カルシウム(Ca)
人間	全体	1.1%	0.049	22.9%	2.6%	8.9	1.4%
	骨	6.7%	0.185	36.0%	4.3%	8.4	17.0%
	筋肉	0.58%	0.009	67.0%	7.2%	9.3	0.04%
	毛	0.01%	0.000	54.0%	16.0%	3.4	0.17%
	肝臓	0.94%	0.014	67.0%	7.2%	9.3	0.02%
動物	哺乳類	-	-	48.4%	12.8%	3.8	-
	魚類	-	-	47.5%	11.4%	4.2	-
植物	バクテリア	3.0%	0.056	54.0%	9.6%	5.6	0.51%
	菌類	0.50%	-	-	3.4%	-	0.09%
	蘚苔類	0.17%	-	-	1.2%	-	5.1%
	シダ類	0.20%	0.004	45.0%	2.0%	22.5	0.37%
	裸子植物	0.20%	0.004	45.0%	3.2%	14.1	0.85%
	被子植物	0.11%	0.002	45.0%	2.5%	18.0	0.85%
	野菜類	0.51%	0.011	45.0%	5.3%	8.6	2.5%
土壌・岩石	平均的土壌	0.08%	0.040	2.00%	0.20%	10.0	1.5%
	堆積物の平均	0.067%	0.023	2.94%	0.047%	62.6	6.60%
	頁岩の平均	0.070%	0.044	1.60%	0.060%	26.7	3.10%
	花崗岩の平均	0.070%	1.9	0.036%	0.0021%	17.1	1.6%
	玄武岩の平均	0.14%	2.3	0.061%	0.0030%	20.3	6.7%

Bowen(1979) によって編集された、 Iyengar *et al*. (1978), Koons and Helmke (1978), Tjell and Hovmand(1978), Casagrande and Erchall (1977), Hanawalt snd Whittaker (1977), Valkovic (1977), Wakatsuki *et al*. (1977), Chester and Aston (1976), Connor and Shacklette (1975), Synder (1975), Golley *et al*. (1969), Scharrer and Linser (1969), Wedepohl (1969-1974), Haller *et al*. (1968), Wedepohl (1968), Bowen (1966), Chapman (1966), Gorham and Swaine (1965), Taylor (1964), Hanna and Grant (1962), Vinogradov (1959), Vinogradov (1953), Rankama and Sahama (1950) のデータを使用した。ただし、幅を持って示された値については、最高値と最低値の中間の値を用いた。

表 1　人体及び動植物、土壌等の PCN 濃度及び P/C、C/N

分析結果

表 2 に、分析結果及び算出した P/C、C/N を示す。

土壌分析における蛍光Ｘ線分析装置（EDS）の有効性について

リン濃度について、ICP（の測定値）が EDS（の測定値）に比べ低い傾向にあるが、弱い正の相関が認められる。また、K15-2、K15-4 について、EDS では 0.001％と、低率であった。P/C について、ICP では平均 0.035（最大値 0.061、最小値 0.019、標準偏差 0.017）と、表 1 に示した、主な項目別の値に近い値が得られている。一方､EDS では平均 0.071(最大値 0.203､最小値 0.002、標準偏差 0.040）と、表 1 に示した、主な項目別の値から、やや離れた値が得られた。

ICP について、P/C は表 1 に挙げた値に近かった。一方 EDS では、P/C が表 1 の値から外れた。リン濃度で見られた ICP に対する EDS のばらつきと、それぞれの分析における P/C の値から、ICP 発光分光分析の蛍光Ｘ線分析（EDS）に対する優位性が認められるとともに、P と C の土壌中での動態が似通っていることが示唆される。EDS 分析では、試料を粉体にして均質化を図っていたものの、偏りが排除しきれなかったことが明らかな原因の一つであろう。一方で測定値が ICP と緩い相関を示すことから、リン濃度の分布傾向を捉える程度であれば、利用に耐えうる可能性はある。ただし、P/C 値の検討など、その濃度を用いた検討には向かないことが明らかになった。

頭部の識別について

5 号墳では、枕石に付着した土壌を対象に P、C、N を測定した（図 3)。ほぼ中央の K5-2 で P：0.006％、C：0.10％、N：0.040％と、平均的土壌の 1/10 程度と微量であった。一方 P/C

		リン (%)		P/C		有機炭素 (%)	窒素 (%)	C/N	カルシウム (%)
	Sample	ICP	XRF	ICP	XRF				
5号墳	K5-1		0.0172		0.1720	0.100	0.039	2.570	0.7693
	K5-2	0.006	0.0209	0.058	0.2029	0.103	0.040	2.570	0.7202
	K5-3		0.0193		0.1295	0.149	0.040	3.740	0.6353
8号墳	K8-1-0		0.0268		0.0678	0.395	0.054	7.309	0.2716
	K8-1-10		0.0294		0.0923	0.319	0.048	6.627	0.2747
	K8-1-20		0.0209		0.0398	0.525	0.056	9.390	0.2795
	K8-1-30		0.0265		0.0555	0.477	0.052	9.258	0.2692
	K8-1-40		0.0304		0.0880	0.345	0.048	7.173	0.2667
	K8-1-50		0.0249		0.0879	0.283	0.045	6.317	0.2710
	K8-1-60		0.0227		0.0476	0.477	0.052	9.125	0.2655
	K8-1-80		0.0352		0.0913	0.386	0.047	8.291	0.2667
	K8-1-90		0.0334		0.0959	0.348	0.050	7.015	0.2661
	K8-1-100		0.0260		0.0709	0.367	0.053	6.948	0.2640
	K8-1-110		0.0252		0.0542	0.465	0.061	7.625	0.2690
	K8-1-120		0.0271		0.0581	0.467	0.051	9.232	0.2669
	K8-1-130		0.0395		0.0898	0.440	0.054	8.090	0.2681
	K8-2-1		0.0294		0.0623	0.472	0.050	9.359	0.2728
	K8-2-2		0.0242		0.0779	0.310	0.040	7.739	0.2710
	K8-2-3		0.0262		0.0957	0.274	0.042	6.579	0.2705
	K8-3-1		0.0213		0.0446	0.477	0.053	8.931	0.2864
	K8-3-2		0.0302		0.0376	0.802	0.060	13.393	0.2737
	K8-3-3		0.0267		0.0380	0.703	0.059	12.000	0.2736
	K8-3-4		0.0285		0.0495	0.576	0.051	11.184	0.2633
15号墳	K15-2	0.011	0.0011	0.020	0.0020	0.546	0.056	9.840	0.4955
	K15-3		0.0021		0.0046	0.457	0.054	8.480	0.4013
	K15-4	0.011	0.0009	0.028	0.0023	0.388	0.050	7.710	0.3562
	K15-5		0.0145		0.0334	0.434	0.053	8.150	0.3383
	K15-7		0.0340		0.0806	0.422	0.049	8.610	0.3545
	K15-10	0.012	0.0348	0.023	0.0655	0.531	0.053	10.080	0.4855
	K15-12		0.0385		0.0934	0.412	0.050	8.270	0.4853
	K15-14		0.0348		0.0800	0.435	0.052	8.340	0.4444
	K15-15	0.013	0.0410	0.040	0.1250	0.328	0.047	6.940	0.4838
	K15-16		0.0221		0.0585	0.378	0.047	8.080	0.4688
	K15-17	0.012	0.0272	0.031	0.0699	0.389	0.050	7.740	0.5321
9号壺棺	KK1	0.008	0.0086	0.061	0.0652	0.132	0.039	3.410	0.2592
	KK2	0.007	0.0154	0.019	0.0407	0.378	0.048	7.860	0.2609
	KK3		0.0206		0.0514	0.401	0.047	8.500	0.2498
	KK4		0.0221		0.0602	0.367	0.042	8.650	0.2633
最大値		0.013	0.0410	0.061	0.2029	0.802	0.061	13.393	0.7693
最小値		0.006	0.0009	0.019	0.0020	0.100	0.039	2.570	0.2498
平均		0.010	0.0245	0.035	0.0706	0.402	0.050	7.924	0.3530
標準偏差		0.003	0.0098	0.017	0.0404	0.142	0.006	2.224	0.1365

表 2　分析結果

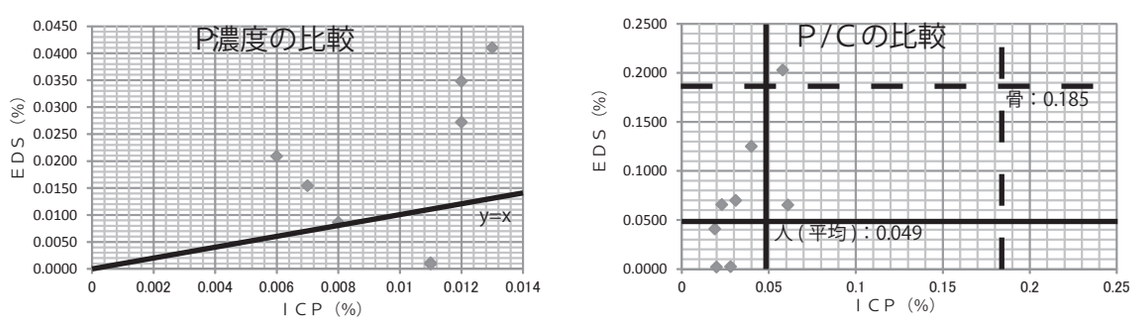


図 2　ICP と EDX の測定値の比較

と人体の平均値（0.049）に近く、C/N は 2.570 と毛髪に近い値を示した。毛髪中の C は 54.0％、N は 16.0％と、人体の平均（C：22.9％、N：2.6％）に比べ高い。しかし、頭部での毛髪の量が微量であることから、P/C にはほとんど影響が認められず、C/N にのみ影響が認められたと考えられる。

今回の結果は、C/N による頭部の識別が可能であることを示唆する。ただし、亡骸を分解したであろう「バクテリア」とも P/C、C/N は近い値である。リンの検出量が少ないこともあり、バクテリアの存在量など、今後検討が必要な要因もある。

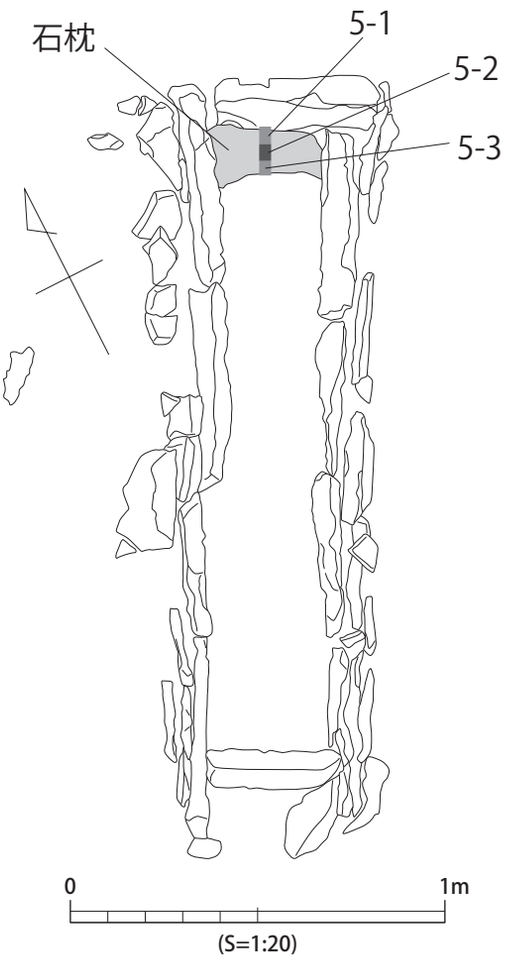


図 3　5 号墳石棺内面
試料採取位置

P、P/C 及び C/N の垂直分布と平面分布

Bowen（1979）では「平均的土壌」の P 濃度として 0.08％が示されている。しかし、この値は「平均的」な値であり、全ての土壌がこの値を示しているわけではない。土坑墓の断面を見ると上位の作土からの染み込みで P 濃度が高い部分（渡辺，2010）や、根等によりパッチ状に P 濃度が高い部分（渡辺，2008) が存在する。また、石棺内部（底部）では、全体に分散する傾向にある（渡辺，2012)。このように遺骸の存在は、P 濃度だけではなく相対的な P 濃度の高低（濃度分布）で論じられるべきである。

(1) 垂直分布（8 号墳第 1 主体部）

8 号墳では第 1 主体部を長軸方向に切る断面で、垂直分布を確認する目的で試料を採取した（図 4)。

木棺（あるいは埋葬物（遺骸を含む））の痕跡が残る底部で P 濃度（EDS）は、0.021 ～ 0.040 を示し、垂直部（0.021 ～ 0.030）に比べ、やや高い値を示した。これらの平均値は 0.028 であり、やや高い 0.030 をバックグラウンドと仮定すると、K8-1-40、80、90、130 で、これを超す値を示し、C/N は 7.015 ～ 8.291 と遺骸の存在を示唆する値であった。また底部には、P 濃度が低いものの C/N が 10 に近い場所があり、木棺など植物質の有機物が存在した可能性が示唆される。一方、垂直部の K8-1-2、3、4 は、現地での観察で、後に埋まった部分である。これらの試料では C/N が 10 を超え、植物の根などの影響が示唆される。

(2) 平面分布（15 号墳）

石棺内中心を長軸方向に切る断面で、試料採取を行った（図 5)。P 濃度（EDS）は 0.001 ～ 0.041 を示し、平均値は 0.023 であった。8 号墳同様にやや高い 0.030 をバックグラウンドと仮定すると、K15-7 ～ 15 でこれを超す値を示した（ICP でもこれらの地点では、そのほかの地点に比べや

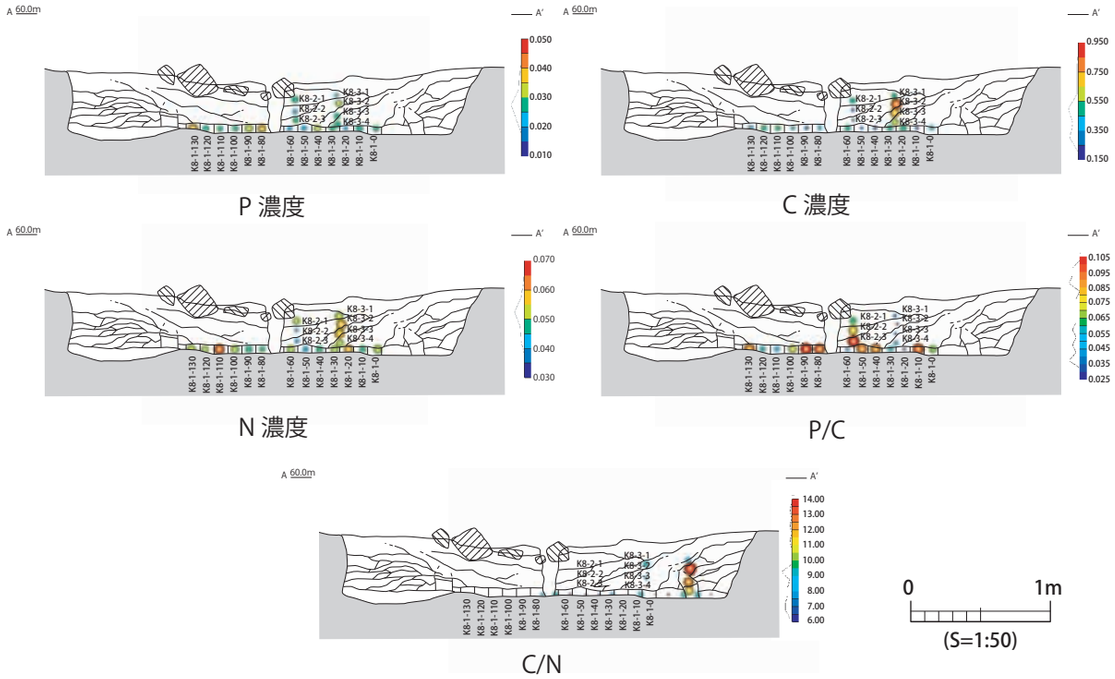


図 4　8 号墳第 1 主体部の濃度分布

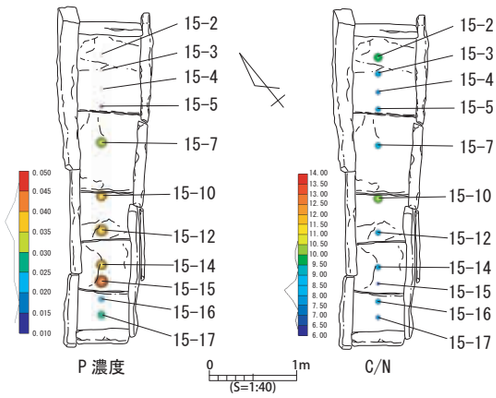


図 5　15 号墳石棺平面の濃度分布

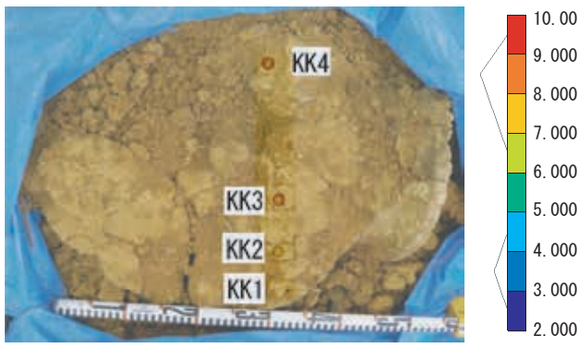


図 6　9 号墳第 3 主体部（壺棺）断面の濃度分布

や高い値が得られている。）。一方、これらの地点では、C/N が 6.940 ～ 10.080 とややばらついた。K15-7、12、14 では、遺骸の存在を示唆する 8.270 ～ 8.610 の値が得られた。また、K15-10 では最も高い値である 10.080 が得られ、植物の影響が示唆された。一方、K-15-15 ではやや低い 6.940 が得られ、原因は分からないものの C の拡散が他の地点より進んだ可能性がある。

石棺の形状から K15-2 ～ 5 に頭部があったと予想されていた。しかし、これらの位置で P 濃度は低く、頭部の位置がややずれていたか、分散が進んでいたと考えられる。また、得られた C/N 値も 7.710 ～ 9.840 と高く、頭部を示すものではなかった。

応用例（9 号墳 (壺棺)）

壺棺は KK1 の位置をほぼ下にして置かれており、写真右側（口唇部）から堆積物（埋土？）が流入し、KK1 と対角方向（写真左上側）に空洞が存在した (図 6)。

EDS による P 濃度は 0.0086 ～ 0.0221％と前述の 8 号墳、15 号墳に比べ低い値を示し、ICP では 0.008、0.007％と更に低い値であるが、一般的な土壌の P 濃度を示す値が得られた。EDS と ICP の測定値で KK1 と KK2 を比較すると、EDS では KK1 が 0.0086％と KK2（0.0154％）の 1/2 の濃度であることに対し、ICP では 0.008、0.007％と KK1 の値が KK2 の値を上回る。このことから壺棺内の P 濃度分布は考慮から外した。C/N は KK1 で 3.41 と低く、「人間（毛）」に近い値であった。一方その他の試料は 7.860 ～ 8.650 と遺骸の存在を示唆する値であった。KK1 については、壺棺の底部であり、遺骸の毛髪が集まっていたと考えられる。

まとめと今後の課題

今回の分析では P 濃度が相対的に高い場所に遺骸、あるいはそのほかの有機物が存在した可能性が高いと考え、同じ場所の C/N 値から遺骸の存在を推定できる可能性が示唆された。また、C/N 値から頭部の位置が推定できる可能性も示唆された。

一方、C/N は P 濃度に関係なく、多くの地点で 7 ～ 9 程度（平均 7.924）を示していた。このことから遺骸由来の C、N が、拡散しているように見える。またこのことは、遺骸とは無関係で、一般的な土壌の C/N を得たと捉えることも可能である。今回と同様の測定例である原田遺跡（渡辺, 2008）では、C/N の平均が 6.4 と今回より低く、C/N 値が地域毎の土壌の履歴によって異なる可能性もある。このように P の低い部分での C/N 値の意味付けが、できていない。

また、今回の測定では、P、C/N の面的な濃度分布が詳細に把握できなかった。更に P 濃度測定に EDS を多用したために、正確な濃度が明らかにできず、P/C 値の検討が十分にできなかった。今後、測定方法や測定範囲など十分に検討する必要がある。

参考文献

Bowen, H. J. M. (1966) "Trace Elements in Biochemistry", Academic Press, London, New York

Bowen, H. J. M. (1979) "Environmental Chemistry of the Elements", Academic Press, London, New York

Casagrande, D. J. and Erchall, L. D. (1977) Geochim. Cosmochim. Acta, 41, 1391

Chapman, H. D. (ed) (1966) "Diagnostic Criteria for Plants and Soils", Univ. California; Div. Agric. Sci.

Chester, R. and Aston, S. R. (1976) "Chemical Ocsanography", Vol. 6, p. 281 (Riley, J. P. and Skirrow, G., eds), Academic Press, London. New York

Connor, J. J. and Shacklette, H. T. (1975) U.S. Geol. Surv. Prof. Paper 574-F

Golley, F. B., McGinnis, J. T., Clements, R. G. I. and Duever, M. J. (1969) Bioscience, 19, 693 and 697

Gorham, E. and Swaine, D. J. (1965) Limnol. Oceanog. 10, 268

Haller, W. A., Rancitelli, L. A. and Cooper, J. A. (1968) J. Agric. Food Chem. 16,1036

Hanawalt, R. B. and Whittaker, R. H. (1977) Sili. Sci. 123, 25

Hanna, W. J. and Grant, C. L. (1962) Bull. Torrey Bot. Club, 89, 293

Iyengar, G., Kollmer, W. E. and Bowen.H. J. M. (1978) "Elememtal Composition of Human Tissues and Body Fluids", Springer Verlag, Berlin, Heidelberg, New York

Koons, R. D. and Helmke, P. A. (1978) Soil Sci. Soc. Amer. J. 42, 237

Rankama, K. and Sahama, T. (1950) "Geochemistry", Chicago University Press

Scharrer, K. H. and Linser, H. (eds) (1969) "Handbuch der Pflanzenernährung und Dungung", Springer Verlag, Berlin, Heidelberg, New York

Snyder, W. S. (ed) (1975) "Report of Task Group on Reference Man", argamon Press Ltd, Oxfofd, New York

Taylor, S. R. (1964) Geochim. Cosmochim. Acta, 28, 1273

Tjell, J. C. and Hovmand, M. F. (1978) Acta Agric. Scand. 28, 81

Valkovic, V. (1977) "Trace Elements in Human Hair", Garland S. T. P. M.

Vinogradov, A. P. (1953) "The Elementary Chemical Composition of Marine Organisms", Sears Foundation, New Haven, Conn.

Vinogradov, A. P. (1959) "Geochemistry of Rare and Dispersed Elements in Soils", Chapman and Hall, London

Wakatsuki, T., Furukawa, H. and Kyuma, H. (1977)Geochim. Cosmochim. Acta, 41, 891

渡辺正巳（2008）原田遺跡 8 区土坑 (SK57）の自然科学的検討．原田遺跡 4 縄文時代以降の調査，192-202，国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会.

渡辺正巳（2010）矢野遺跡 B 区 SK2866 の P(全リン) 及び C(有機炭素)・N(全窒素) 分析．矢野遺跡 自然科学分析・考察編 (第 4 分冊)- 新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財報告書 -, 出雲市の文化財報告, 10, 31-38, 出雲市教育委員会.

渡辺正巳（2012）中村 1 号墳の前室石棺内埋土のリン濃度分布．中村 1 号墳本文編（第 1 分冊）出雲市の文化財報告，15，177-182.

Wedepohl, K. H. (1968) "Origin and Distribution of the Elements", p. 999(Ahrens, L. H., ed), Pergamon Press Ltd., Oxford, New York

Wedepohl, K. H. (1969-1974) "Handbook of Geochemistry", Springer Verlag, Berlin, Heidelberg, New York

第 4 節　庵寺古墳群出土ガラス製遺物の自然科学的調査

田村朋美（奈良文化財研究所）

1. はじめに

島根県大田市に位置する庵寺古墳群の発掘調査においてガラス製遺物が出土している。日本列島出土のガラス製遺物については、近年、製作技法の推定や化学組成の分析が進み、種類ごとの時期的な変遷や地域性についても明らかとなってきている。

今回、庵寺古墳群から出土したガラス製遺物について自然科学的調査を実施した。以下、その結果について述べるとともに、遺構ごとのガラス製遺物の特徴について考察する。

2. 資料と方法

2-1　調査資料

本調査では、庵寺古墳群出土ガラス小玉 3 点（5 号墳、15 号墳および 1A 号墳出土ガラス小玉各 1 点）に加え、比較資料として苅捨古墳（松江市）出土ガラス小玉 70 点、門生黒谷Ⅲ遺跡（安来市）出土ガラス小玉 1 点および堂ノ上遺跡（益田市）出土ガラス小玉 1 点について製作技法の推定および化学組成の非破壊分析を実施した。庵寺 1A 号墳出土ガラス小玉のみ紺色、それ以外はすべて淡青色を呈する。いずれも保存状態は比較的良好である。

2-2　調査方法

2-2-1　顕微鏡観察

製作技法を推定するため、ガラス玉に含まれる気泡の配置や形状、ガラス玉表面および孔壁面の状態および形状など、製作技法を示す痕跡に着目して、落射光および透過光下での実体顕微鏡観察

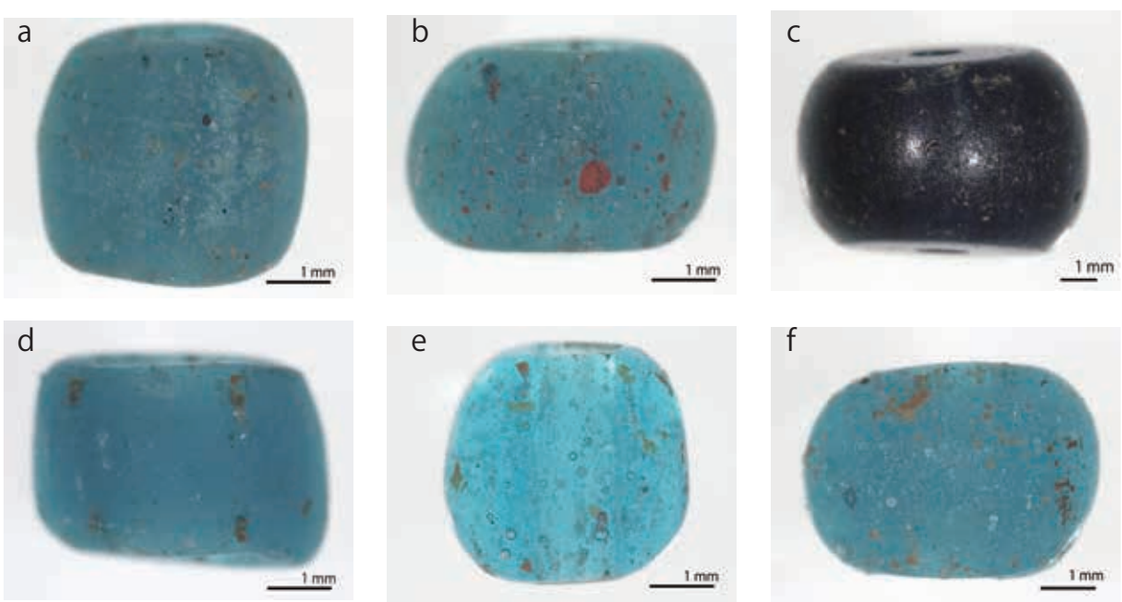


図 1　顕微鏡画像
a: 庵寺 5 号墳、b: 庵寺 15 号墳、c: 庵寺 1A 号墳、d: 苅捨古墳、e: 門生黒谷Ⅲ遺跡、f: 堂ノ上遺跡

をおこなった。落射光下では、ガラス表面や孔内部の凹凸、開孔部周辺の形状を観察した。透過光下では、透明感や色むらの有無、および内部の気泡の形状や配列を観察した。

2-2-2　コンピューテッドラジオグラフィ法

調査対象のガラス小玉には、気泡や着色剤により半透明を呈し、実体顕微鏡下では内部の観察が難しいものが含まれていた。このようなガラス小玉に対しては、X 線透過撮影法を適用することで、孔の形状や内部に含まれる気泡などに関する詳細な観察が可能となる。そこで、本調査では、X 線透過撮影法としてコンピューテッドラジオグラフィ法（Computed Radiography 法：以下、CR 法）を適用した。CR 法は、従来のフィルムのかわりにイメージングプレート（Imaging Plate、以下、IP）を検出系に用いる方法である。

CR 法は、アルカリケイ酸塩ガラスと鉛ケイ酸塩ガラスの判別にも利用した。アルカリケイ酸塩ガラスと鉛ケイ酸塩ガラスの密度を比較すると、後者の方がはるかに密度が高く、X 線吸収係数も大きい。したがって、アルカリケイ酸塩ガラスと鉛ケイ酸塩ガラスを同じ条件下で X 線透過撮影すると、アルカリケイ酸塩ガラスよりも鉛ケイ酸塩ガラスのほうが、はるかに X 線の

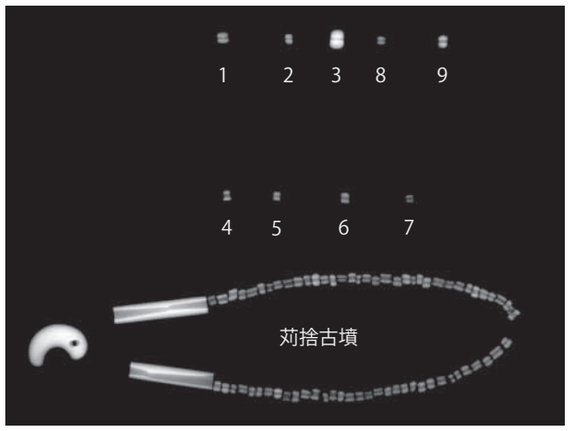


図 2　CR 画像

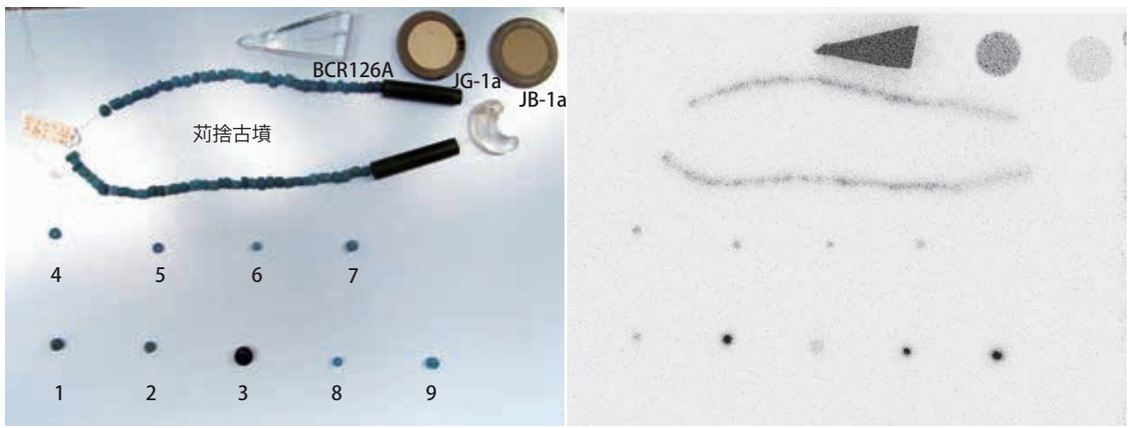


図 3　AR 画像

遺跡名	遺構名	分析No.	重量濃度（%）															＊
			Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	CoO	CuO	PbO	Rb_2O	SrO	ZrO_2	SnO_2
庵寺古墳群	5号墳	1	16.1	0.6	9.6	66.4	2.2	2.0	0.71	0.09	0.99	-	1.03	0.14	0.01	0.04	0.06	0.12
庵寺古墳群	15号墳	2	0.2	0.3	4.6	81.5	10.3	0.5	0.15	0.02	0.55	-	1.52	0.19	0.04	0.01	0.06	0.13
庵寺古墳群	1A号墳	3	17.0	3.1	3.0	65.1	2.7	6.7	0.21	0.28	1.52	0.08	0.10	0.07	0.01	0.03	0.08	–
苅捨古墳	第1主体部	4	17.5	0.4	10.7	64.4	2.1	2.3	0.47	0.09	0.95	-	0.88	0.10	0.01	0.05	0.07	0.05
苅捨古墳	第1主体部	5	19.8	0.6	8.9	63.5	2.9	1.8	0.40	0.09	0.84	-	0.97	0.11	0.01	0.06	0.11	0.08
苅捨古墳	第1主体部	6	19.5	0.7	10.6	63.3	1.7	2.2	0.35	0.05	0.80	-	0.59	0.09	0.01	0.03	0.19	0.05
苅捨古墳	第1主体部	7	16.5	0.5	10.4	65.2	3.6	1.4	0.59	0.07	0.66	-	0.88	0.14	0.02	0.04	0.09	0.05
門生黒谷Ⅲ遺跡	SIO7	8	0.8	0.2	5.1	75.6	15.5	0.4	0.17	0.01	0.50	-	1.36	0.20	0.03	0.03	0.08	0.09
堂ノ上遺跡	集石1	9	1.5	0.4	4.9	75.6	14.1	0.5	0.21	0.02	0.57	-	1.85	0.31	0.04	0.02	0.12	0.16

- ：検出限界以下
＊：スタンダードレスのFP法による計算値

表 1　蛍光 X 線分析結果

吸収が大きくなる。その結果、ポジ画像では鉛ケイ酸塩ガラスがより濃い画像として得られることになる。

CR 法には、マイクロフォーカス X 線拡大撮像システム（富士フィルム社製 μFX-1000）とイメージングアナライザー（富士フィルム社製 BAS-5000）を用いた。IP には BAS-SR2025 を使用した。管電圧は 60 kV、管電流は 60 μA、露光時間は 60 秒であった。

2-2-3　オートラジオグラフィ法

本調査では、カリガラスの判別を目的としてオートラジオグラフィ法（Auto Radiography 法：以下、AR 法）を実施した。IP は放射線に対して極めて感度がよく、微弱な放射線でも長時間暴露することで検出可能である。AR 法は、物質から放射される放射線をフィルムや IP に記録して画像を得る方法であり、放射線の蓄積線量により画像の濃淡が異なる。カリガラスは一般に酸化カリウムを 18% 前後含有し、^{40}K に由来する放射線（ベータ線）を放射している。したがって、カリガラスとソーダ石灰ガラスを IP 上に同じ時間だけ暴露した場合、得られた画像の中でより濃いものを、カリガラスとして識別することができる。

本調査では、以下の手順で AR 法を実施した。まず、資料を直接上に置いた IP を、外部からの放射線を遮断するため、鉛製の遮蔽箱内に設置した。そして、遮蔽箱の鉛に由来する放射線を遮蔽するため、IP の周辺を銅板で囲った。使用した IP は BAS-SR2025 であり、暴露時間は 168 時間とした。また、比較のための標準試料として、日本岩石標準試料 JB-1a と JG-1a の粉体圧縮ピース、および BCR126A（IRMM (Institute for Reference Material and Measurement）標準物質）を同時に暴露した。これらの酸化カリウム（K_2O）の含有量は、それぞれ 1.4%、4.0%および 10.0%である。暴露後、IP を取り出し、CR 法と同様にイメージングアナライザーによりスキャンニングをおこない、AR 像をデジタルデータとして取得した。

2-2-4　蛍光 X 線分析法

ガラス玉の主要な構成成分とそれらのおおよその含有量を知るために蛍光 X 線分析を実施した。本調査ではエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置を用いて非破壊測定をおこなった。資料表面の非破壊測定では、風化の影響により構成元素の一部が増減するため、資料本来の化学組成を知ることはできないものの、基礎ガラスの種類や着色要因を推定することは可能である。

資料の測定箇所は、亀裂等が少なく、保存状態が良好と判断した部分を選定した。なお、測定に先立ち、土などの汚れは顕微鏡下でエチルアルコールを用いた洗浄をおこなった。測定結果は、測定試料と近似する濃度既知のガラス標準試料（CG-A、SG5、SG7、SGT5、NIST620）を用いて補正した理論補正法（Fundamental Parameter method、以下 FP 法とよぶ）により、検出した元素の酸化物の合計が 100%になるように規格化した。

測定に用いた装置は、エダックス社製 EAGLE Ⅲである。励起用 X 線源は Mo 管球、管電圧は、FP 法を用いた定量分析では 20 kV に設定し、一部の資料については 20 keV 以上のスペクトルを検出するため、50 kV に設定した。管電流は 100 μA、X 線照射径は 112 μm、計数時間は 300 秒とした。なお、測定は真空中で実施した。

3. 結果と考察

3-1　製作技法

本調査対象となったガラス小玉は、いずれも孔と平行に直線状に並ぶ気泡列もしくは両端面を貫く気泡筋が観察されたことから、軟化したガラスを引き伸ばしてガラス管を製作し、それを分割して小玉を作ったと推定できる（図１）。既往研究で「管切り法」（朝比奈・小田 1954 など）や「引き伸ばし法」（大賀 2002）と呼ばれる製作技法に相当する。ここでは、引き伸ばし法と呼ぶ。

3-2　基礎ガラスの種類と着色要因

CR 法を実施した結果、X 線の吸収がとくに大きい個体は認められなかった（図２）。したがって、本調査対象としたガラス小玉は、いずれもアルカリケイ酸塩ガラスであると推測される。

AR 法の結果を図３に示す。庵寺古墳群出土品では 15 号墳出土のガラス小玉がカリガラス、５号墳および 1A 号墳出土のガラス小玉はソーダ石灰ガラスである可能性が示された。さらに、同時に調査をおこなった庵寺古墳群以外の資料については、門生黒谷Ⅲ遺跡および堂ノ上遺跡出土資料がカリガラス、苅捨古墳出土品はすべてソーダ石灰ガラスの可能性が示された。

以上の結果を踏まえて、蛍光 X 線分析を実施した。結果を表１に示す。庵寺５号墳出土のガラス小玉は、酸化ナトリウム（Na_2O）を 16.1％含有することから、ナトリウムを融剤とするソーダ石灰ガラスであることが示された。このことは CR 法および AR 法の結果と一致する。さらに、酸化アルミニウム（Al_2O_3）が 9.6％と高い値を示す一方、酸化カルシウム（CaO）が 2.0％と比較的少ないという特徴を有し、高アルミナソーダ石灰ガラスと呼ばれるガラスに相当する。着色に関与する成分として酸化銅（CuO）を 1.03％含有することから、銅イオンが主な着色要因となって淡青色を呈するものと考えられる。なお、酸化鉄（Fe_2O_3）も 0.99％含まれており、発色に関与している可能性が考えられるが、Fe_2O_3 は基礎ガラスの原料となる石英砂などにも由来する可能性があるため、着色材として意図的に添加されたものかどうかは不明である。また、微量の錫（Sn）および鉛（Pb）が検出された。着色剤として利用された銅原料にともなう可能性が考えられる。このような特徴を持つ銅原料としては、これまでにも青銅の可能性が指摘されている（肥塚 1997）。なお、今回同時に調査を実施した苅捨古墳出土ガラス小玉も庵寺５号墳出土のガラス小玉と同様の結果が得られており、同種のガラスであるといえる。苅捨古墳出土のガラス小玉については 70 点のうち４点についてのみ蛍光 X 線分析を実施した。蛍光 X 線分析を実施しなかった資料についても CR 法および AR 法の結果からみて同種のガラスである可能性が高い。

庵寺 15 号墳出土のガラス小玉は、K_2O の定量値が 10.3％という高い値を示し、カリウムを融剤としたカリガラスであることが蛍光 X 線分析の結果からも示された。カリガラスは一般的に K_2O を 18％前後含むのに比べると、本資料の K_2O の定量値はやや少ないが、本調査は表面の非破壊分析のため、風化の影響と考える。なお、本資料は、カリガラスの中でも Al_2O_3 含有量が比較的多く、CaO 含有量が少ないタイプのカリガラス（肥塚ほか 2010）に相当する。着色に関与する成分として Fe_2O_3 を 0.55％、CuO を 1.52％含有し、これらの成分によって淡青色を呈すると考えられるが、やはり意図的な着色剤は銅であると考えられる。また、微量の錫（Sn）および鉛（Pb）が検出される点は上述の５号墳出土のガラス小玉と共通の特徴である。庵寺５号墳および 15 号墳出土のガラス小玉は基礎ガラスの種類は異なるものの、着色剤には同種の銅原料が用いられている可能性がある。同時に調査をおこなった門生黒谷Ⅲ遺跡および堂ノ上遺跡出土のガラス小玉も本資料と同種のガラスであると推察される。

3-3　時期的な検討

庵寺５号墳出土資料のような引き伸ばし法による銅着色の高アルミナソーダ石灰ガラス製小玉は古墳時代前期後葉に出現する（肥塚ほか 2010）。一方、庵寺 15 号墳出土資料にみられるような銅着色のカリガラス製小玉は弥生時代中期後葉から流通が開始し、弥生時代後期前葉に激増するが、後期中葉～後葉には低調となる。古墳時代前期初頭に再び大量に流入し、前期後葉に同色の高アルミナソーダ石灰ガラスと入れ替わるように流入が途絶える。庵寺５号墳および 15 号墳はいずれも古墳時代前期に位置づけられているが、ガラス小玉に関していえば、15 号墳出土資料は５号墳出土資料よりも古い様相を呈するといえる。ただし、いずれも１点のみの出土であり、遺構の時期差を直接的に示唆するかどうかは慎重に検討しなければならない。

庵寺 1A 号墳出土の引き伸ばし法によるコバルト着色の植物灰タイプのソーダ石灰ガラス製小玉は、古墳時代中期後半に出現し、後期にかけて大量に流通する。庵寺 1A 号墳は古墳時代後期に位置づけられており、ガラス小玉の種類も整合的である。

苅捨古墳出土品については、庵寺５号墳出土品と同種類のガラス小玉のみから構成されており、古墳時代前期後葉の典型的な様相であるといえる。

弥生時代後期前葉に位置づけられている門生黒谷Ⅲ遺跡から出土したガラス小玉は、庵寺 15 号墳出土品と同種類のガラス小玉であり、ガラス小玉の種類からみても矛盾はない。

堂ノ上遺跡出土資料は帰属時期不明の資料とされている。ガラス小玉は１点のみの出土であり、今回の調査から帰属時期を絞り込むことは困難である。銅着色のカリガラスの流通のピークは弥生時代後期前葉および古墳時代前期前葉であり、これらいずれかの時期に帰属する可能性が高いと推測されるが、断定はできない。

4　おわりに

本調査では庵寺古墳群墳および島根県内の弥生～古墳時代の遺構から出土したガラス小玉の製作技法、基礎ガラスの種類および着色剤とその組み合わせについて明らかにすることができた。当該時期に島根県内で流通したガラス製品の様相を解明する手掛かりとなれば幸いである。

引用・参考文

朝比奈貞一・小田幸子 1954「日本古代ガラス玉の成形について」『古文化財の科学』第７号 10 ～ 13 頁。

大賀克彦 2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』（『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅴ）127 ～ 145 頁。

肥塚隆保 1997『日本で出土した古代ガラスの歴史的変遷に関する科学的研究』博士学位論文。

肥塚 隆保・田村朋美・大賀克彦 2010「材質とその歴史的変遷」『月刊文化財』№ 56613 ～ 25 頁。

第 5 節　大田市庵寺 9 号墳出土赤色顔料 - 朱 - の硫黄同位体比分析

南　武志（近畿大学）

概要

大田市仁摩町大国の庵寺古墳群にある 9 号墳より出土した朱の硫黄同位体比分析を行い、すでに測定している庵寺 1 号墳および出雲地方の他の遺跡出土朱と比較した。硫黄同位体比分析は、朱を構成する硫黄の質量数 32 と質量数 34 の同位体比を測定し、標準物質であるキャニオン・ディアブロ隕石に含まれる硫化鉄の硫黄同位体比と比較する方法である。朱は 9 号墳木棺内面に塗布されたと推定されており、頭位上と足位下の小口板付近、右側板付近、左側板付近、および頭位付近の計 8 か所から採取して分析に供した。硫黄同位体比は頭位側の小口板付近 3 か所から＋ 7.36、＋ 6.35、＋ 5.68 ‰が、足位側の小口板付近からは＋ 11.07 ‰、右側板付近からは－ 2.04 ‰と＋ 1.61 ‰、左側板付近からは＋ 1.78 ‰、頭位付近からは－ 0.46 ‰の δ 値を得た。古代日本の主な朱鉱石産地である三重県丹生鉱山産辰砂鉱石は－ 8.82 ± 2.27 ‰、奈良県大和水銀鉱山産鉱石は－ 2.24 ± 5.75 ‰、徳島県水井鉱山産鉱石は－ 4.56 ± 3.86 ‰を示しており、古代中国の朱鉱石産地と考えられる陝西省旬陽にある鉱山鉱石は＋ 6 ～＋ 10.5 ‰、貴州省万山特区の鉱山鉱石は＋ 23.9 ± 4.49 ‰と、硫黄同位体比は産地によって異なることが判明している。一方、庵寺 1 号墳出土朱は箱式石棺内の頭部と思われる部分 3 か所より採取された平均値は－ 8.05 ‰であり、三重県丹生鉱山産鉱石の値にあてはまった。庵寺 9 号墳は庵寺 1 号墳と異なり、頭位上と足位下の小口板に中国産を塗布し、頭位付近と側面の板は中国産と日本産を混合して使用した可能性が示唆される。しかも部位によって産地の異なる朱を使い分けて用いた可能性もあり、今後、他の分析法を組み合わせ混合された場合の朱の産地推定を試みたい。

1. はじめに

赤色顔料である朱（硫化水銀）は、古くは縄文時代の土器の彩色に用いられていた[1)]が、多量の朱が埋葬施設に用いられる風習は紀元前後の北部九州や島根などの日本海沿岸で観察され、その後主に西日本各地に広がったと思われる。天然の朱は辰砂鉱石を粉砕して精製され、三重県丹生鉱山周辺の縄文時代の遺跡[1)]や弥生時代の徳島県水井鉱山の近くの若杉山遺跡[2)]で朱を生産していたとの報告がある。また、西日本各地の遺跡から朱の精製に用いたと思われる石杵も出土している[2)]。埋葬儀式に朱を用いる風習は紀元前の中国で観察されている[3)]ことから中国より日本に伝わったと考えられ、風習とともに朱も中国からもたらされた可能性がある。しかしながら朱の元となる辰砂鉱山は日本国内に多数存在し、縄文時代からその存在が知られていたことから埋葬儀式に日本産の朱も使用された可能性は否定できない。我々はこの朱の産地を推定することをテーマに長年研究を続けており、朱の構成成分である硫黄の同位体比（^{32}S と ^{34}S の割合）を調べることで、朱の産地が推定できると考えている。もっとも、古代における辰砂鉱山として、①周辺遺跡や古文書などで採掘されていた可能性が高い、②露頭部分に多量の辰砂鉱石がある、という 2 つの条件にあてはまる鉱山をリストアップした。その結果、中国貴州省満山特区、中国陝西省旬陽地区、三重県丹生鉱山、奈良県大和水銀鉱山、徳島県水井鉱山がリストアップされ、それぞれの辰砂鉱石を収集して測定した結果、硫黄同位体比が地域特異性を示すことを明らかにした[4,5,6)]。この結果をもとに

日本海沿岸の弥生時代後期から古墳時代にわたる墳墓から出土した朱の硫黄同位体比を測定したところ、中国産朱を用いたと思われる墳墓と日本産朱を用いたと思われる墳墓が日本海沿岸の狭い地域に混在していることを報告している[7)]。特に島根県には弥生時代後期後葉の出雲地方の王墓と考えられている西谷墳墓群では多量の朱が出土しており、そこからは中国産朱の δ 値が観察された。さらに、西谷墳墓群周辺の弥生時代後期から古墳時代にかけた遺跡からは中国産朱ではなく日本産朱の値が多く認められた[8,9)]。今回、出雲地方に近接する石見東部にある庵寺古墳群から古墳時代前期中葉の 9 号墳より出土した朱を分析する機会に恵まれた。先に庵寺古墳群の 1 号墳から出土した朱を分析していることから、出雲各地の墳墓と比較するだけでなく 1 号墳との比較も行い、出雲地方での朱の伝わり方の考察を試みた。

2. 分析試料と分析方法

（1）分析試料

分析用朱サンプルは，島根県教育庁埋蔵文化財調査センターより提供していただいた。庵寺 9 号墳は古墳時代前期中葉の墳墓であり、第 1 主体より採取した。朱は木棺内部に塗布されていたと推測している。図 1 に庵寺 9 号墳第 1 主体の朱採取部位を示す。№6 が頭位付近と思われる。№1 から№9（№8 は欠番）の箇所より赤色部分を収集したのち、実体顕微鏡下で朱部分を分離してサンプルとした。

（2）硫黄同位体比分析

朱部分に逆王水（濃硝酸 3 容量と濃塩酸 1 容量）を加えて 100℃で加熱冷却後、臭素を 1 滴添加してさらに 100℃で加熱溶解した。この溶液を陽イオン交換樹脂（Dowex 50W-X8) に通し、素通りした液を集め、加温しながら塩化バリウム溶液を加えて硫酸バリウムの沈殿物を得た。60℃以下で乾燥させた沈殿物をスズカップに入れ分析用サンプルとして元素分析装置（vario PYRO cube, Elementar Analysensysteme, GmbH）に供した。元素分析装置では硫酸バリウムから二酸化硫黄ガスを発生させる。この二酸化硫黄ガスを安定同位体質量分析装置（IsoPrime 100, Isoprime 社）に直接導入し、^{32}S と ^{34}S を測定した。標準品（IAEA-S-4, IAEA-SO-5, IAEA-SO-6）で 3 点補正

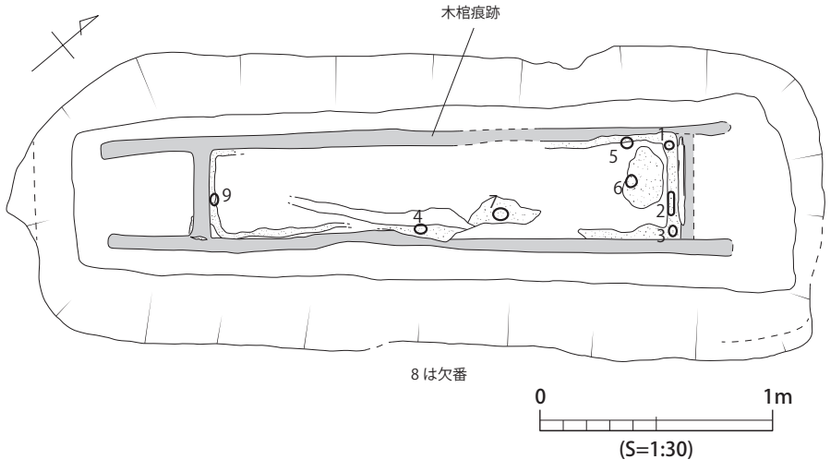


図 1　庵寺 9 号墳第 1 主体部朱採取地点

したのち、キャニオン・ディアブロ隕石の硫黄同位体比（$^{34}S/^{32}S$）に対する割合を$\delta\ ^{34}S$‰で表した。

$$\frac{\text{（サンプルの硫黄同位体比）－（隕石の硫黄同位体比）}}{\text{（隕石の硫黄同位体比）}} \times 1000$$

3．結果及び考察

硫黄には 25 種類の同位体が存在するが、安定同位体は ^{32}S,^{33}S,^{34}S,^{36}S の 4 種類である。その存在割合は 95.02％、0.75％、4.21％、0.02％であり、硫黄同位体比分析はこの中の ^{32}S と ^{34}S の割合を調べる。硫黄を含む鉱物が出来るとき、蒸発や拡散、pH の変化など様々な因子により ^{32}S と ^{34}S の割合が異なり、標準物質のキャニオン・ディアブロ隕石の硫化鉄と比較して上記の式により$\delta\ ^{34}S$（‰）を算出するとき、火山国の日本では火山性硫黄化合物の$\delta\ ^{34}S$ はマイナスの値を示すことが多い。加えて Ishihara et al. [10] が中部地方から九州地方までの新生代後期の鉱床より硫黄含有鉱石中の硫黄同位体比を測定した結果から、鉱物種や鉱床種より地域性に著しく規制されることを見出し、前弧側で負の値を、背弧側で正の値を一般に示すことを報告しているように、硫黄同位体比は地域特性があると考えられる。我々も中国の主な辰砂鉱山鉱石はほとんど全て標準物質と比べてプラスの値を示し、特に古代中国で採掘されていたと考えられる貴州省万山特区辰砂鉱山産鉱石は＋ 23.9 ± 4.49 ‰（平均±標準偏差）、陝西省旬陽の鉱山鉱石は＋ 6 ‰～＋ 10.5 ‰であることを報告している [4,5]。一方日本産辰砂鉱山鉱石は中央構造線上にある鉱山でほとんどマイナスの値を示し、古代日本の主な辰砂鉱石産地である三重県丹生鉱山産鉱石は -8.82 ± 2.27 ‰、奈良県大和水銀鉱山産鉱石は -2.24 ± 5.75 ‰および徳島県水井鉱山産鉱石は－ 4.56 ± 3.86 ‰と、丹生鉱山産と大和水銀鉱山産および水井鉱山産で異なり、硫黄同位体比分析が遺跡出土朱の産地推定のための有効な手段であると考えている [6]。

庵寺９号墳第１主体部より採取した朱の硫黄同位体比は表１に示すように、足位の木棺内面（№.９）に塗布された朱は、＋ 11.07 ‰を、頭位の木棺内面（№.１～№.３）に塗布された朱は、＋ 5.68 ～＋ 7.36 ‰を示した。これらの値は中国陝西省産の可能性を示唆している。これに対し、頭位付近（№.６）の朱は－ 0.46 ‰、左右の側面から採取した朱はそれぞれ＋ 1.78 ‰（左側；№.５）、＋ 1.61 ‰（右側；№.７）、－ 2.04 ‰（右側；№.４）と中国産あるいは日本産のどちらにも当てはまらないδ値を示した。同じ庵寺古墳群の中で硫黄同位体比が測定できた１号墳（1- Ｂ号古墳）では、箱式石棺内の頭部と思われる部分３か所より朱が採取され、そのδ値は－ 8.05 ± 0.39 ‰であり、三重県丹生鉱山産を使用した可能性を庵寺１号墳の報告書に記載した [11] が、９号墳では全く異なるδ値が示されたことになる。島根県の遺跡出土朱の硫黄同位体分析の結果からは、弥生時代後期後葉の出雲地

試料Ｎｏ.	採取位置	$\delta\ ^{34}S$‰
1	木棺内北側（小口板付近）	＋ 7.36
2	木棺内北側（小口板付近）	＋ 6.35
3	木棺内北側（小口板付近）	＋ 5.68
4	木棺内中央（右側板付近）	－ 2.04
5	木棺内北側（左側板付近）	＋ 1.78
6	木棺内北側（頭位付近）	－ 0.46
7	木棺内中央（右側板付近）	＋ 1.61
9	木棺内南側（小口板付近）	+11.07

注：№.8 は欠番

表１　庵寺９号墳出土朱の硫黄同位体比

方の王墓と考えられている西谷２号墓第２主体で＋ 13.10 ‰、３号墓第１主体で＋ 9.03 ‰、３号墓第４主体で＋ 6.48 ‰と、庵寺９号墳と同様に中国陝西省産朱と思われる結果が得られている[8)]。これに対し、安養寺１号墳第３主体、宮山 IV 号墓、布志名大谷 III 遺跡１号墓から出土した朱は、それぞれ－ 4.78 ‰、－ 5.89 ‰、－ 5.15 ‰の値を示しており、これらの遺跡では三重県丹生鉱山産辰砂鉱石から精製した朱を用いたと考えている。ところが、西谷墳墓群と同じ四隅突出型墳丘墓で同時代に築かれたと考えられている沢下６号墓出土朱は、頭部から採取されたグループ I の朱は－ 0.47 ～－ 2.57 ‰を示し、足元から採取されたグループ II の朱は＋ 2.20 ～＋ 4.86 ‰を示した[9)]。我々は、沢下６号墓に使用された朱は中国産と日本産を混合して用いられたと推測している。多量の朱を１つの墳墓に用いる場合、何年あるいは何十年もかけて朱を貯蔵していた可能性が高く、その場合には異なる産地の朱も混合した可能性がある。しかしながらその中でも中国産朱と日本産朱を分けて貯蔵した可能性も考えられる。沢下６号墓では頭部と足部で用いられた朱の硫黄同位体比が異なることはこのことを暗示していると推測しており、庵寺９号墳でも沢下６号墓と同様な使われ方がされたのではないだろうか。しかしながら、硫黄同位体比分析だけでは推測にすぎず、他の分析手法を組み合わせ、産地の異なる朱が混合された場合でも産地を特定する方法ができることを期待している。

4. まとめ

古墳時代前期中葉に作られた庵寺９号墳の木棺に塗布されたと思われる朱の硫黄同位体比分析を行った。その結果、頭位上の小口板付近と足位下の小口板付近から採取された朱から中国産と思われる δ 値が得られた。一方、頭位付近および左右の板付近からは中国産とも日本産とも異なる δ 値が得られ、中国産と日本産を混合して使用した可能性が示唆された。

謝辞

硫黄同位体比分析はジャスコインタナショナル株式会社の協力で行った。また、本研究は公益財団法人　三菱財団の助成を受けて行った。ここに深謝いたします。

5. 参考文献

1）奥義次 (1998) 縄文時代の赤色顔料 III- 伊勢における朱の開発をめぐって - 考古学ジャーナル No. 438, 17-18.

2）岡山真知子 (1998) 弥生時代の水銀朱の生産と流通 - 若杉山遺跡を中心として - 考古学ジャーナル No. 438, 19-23.

3）Hao, Q. (1981) The Yin ruins and the tomb of Fu Hao: Out of China's Earth, Archeological Discoveries in the People's Republic of China (Hao, Q., Heyi, C. and Suichu, R. eds.) Harry N. Abrams, Inc. (New York & China Pictorial) pp9-28.

4) 南武志、今井亮、豊遥秋、冨田克敏、比佐陽一郎、岡山真知子、楊主明、今津節生（2004） 中国貴州省と湖南省辰砂鉱石の硫黄同位体比測定 - 考古学と自然科学 46: 67-74.

5）南武志、楊主明、豊遥秋、島崎英彦（2009）中国における辰砂が産出された古代鉱山の探索 - 考古学と自然科学 58: 25-29.

6) Minami, T., Bunno, M., Imazu, S. (2008) Measurement of sulfur isotopes in the ore of cinnabar mine in Japan. Science and Technology 20: 41-48.

7）Minami, T., Imai, A., Bunno, M., Kawakami, K., Imazu, S. (2005) Using sulfur isotopes to determine the sources of vermillion in ancient burial mounds in Japan. Geoarchaeology 20: 79-84.
8）南武志（2006）出雲市西谷墳丘墓出土赤色顔料の分析．西谷墳墓群 - 平成１４年～１６年度発掘調査報告書 - 島根県出雲市教育委員会　157-160.
9）南武志、岩橋孝典、大庭俊次、伊藤智、柴崎晶子、坂本豊治、今津節生、渡辺貞幸（2011）硫黄同位体比分析から推測する出雲地域西谷墳墓群および他の墳墓出土朱の産地，考古学と自然科学，62，65-72.
10）Ishihara, S., Sasaki, A., Minagawa, T., Bunno, M., Shishido, A. and Tanaka, R.(2000) Paired sulfur isotope belts: Late cenozoic ore deposits of southwest Japan, 地質調査所月報 , 51, 283-297.
11）南　武志（2010）大田市庵寺１号墳出土赤色顔料 - 朱 - のイオウ同位体比分析．梨ノ木坂遺跡、庵寺古墳群、庵寺遺跡Ⅱ - 国土交通省中国地方整備局、島根県教育委員会　81-84.

第 6 節　庵寺 15 号墳石棺出土赤色顔料の蛍光 X 線分析について

島根県埋蔵文化財調査センター　上山晶子

1. はじめに

庵寺 15 号墳から出土した石棺には赤色顔料とみられる赤色の物質が付着していた。
当該時期の古墳に用いられた赤色顔料としては、水銀朱（硫化第二水銀；HgS）、ベンガラ（酸化第二鉄；Fe_2O_3）の使用が想定される（註 1）。

平成 20 年度に庵寺古墳群 1-B 号墳の調査が行なわれた際に、第 1 主体部の箱式石棺からは、遺骸があったとされる箇所には水銀朱が、石棺の棺材にはベンガラが使用されていた痕跡が見つかっている。したがって、庵寺 15 号墳にも 1-B 号墳第 1 主体部箱式石棺と同様に水銀朱とベンガラが使われているものとして仮定し、実体顕微鏡による観察と蛍光 X 線分析を行なった。

2. 試料と分析方法

石棺に付着した赤色物質は、非常に量が少なかったため、セロハンテープを石棺棺材に直接付着させて、転写して採取するという方法をとった。試料の点数は№ 1 から№ 11 までの合計 11 点である。なお、石棺内に塊状に残存していた赤色物質（№ 9）は、プラスチックスプーンでそのまま採取し試料とした。

実体顕微鏡（40 倍）での観察の結果、試料№ 1・3・4・11 は赤色顔料と推測される物質がわずかに確認された。そのほかの試料は顕微鏡観察だけでは赤色顔料であると判断できなかった。
観察結果をふまえて、蛍光 X 線分析による元素定性分析を行なった。使用機器は島根県古代文化センター所有・島根県埋蔵文化財調査センター設置「エスアイアイ・ナノテクノロジー社製 SEA1200VX 卓上型ケイ光 X 線分析計（エネルギー分散型）」である。測定条件は、励起電圧 50kV、管電流は管電圧による自動設定（851 ～ 1000 μ A）、測定時間 200 秒（うち、有効時間は 130 ～ 166 秒）、測定雰囲気は大気、測定範囲は直径 8.0㎜、X 線管球は Rh（ロジウム）、検出器は Si 半導体検出器である。

測定結果の蛍光 X 線分析スペクトルピーク（以下、ピーク）を図 1,2 に示す。

全ての試料から鉄（Fe）の高いスペクトルピーク（以下、ピーク）を検出した。頭部側の石材から採取した試料№ 1・3・4・11 からは、水銀（Hg）のピークをわずかに検出した。顕微鏡観察と蛍光 X 線分析の結果から水銀朱であると推測した。したがって、頭部あるいは頭胸部付近では水銀朱の使用が推測される。

そのほかの試料は、顕微鏡観察から赤色顔料であると判断することは難しいこと、検出された鉄のピークが赤色顔料のベンガラに由来するものかどうかは今回の蛍光 X 線分析の結果からは判断できないことから、赤色顔料ではない可能性も考えられる。

（註 1）本田光子 1995 「古墳時代の赤色顔料」『考古学と自然科学第 31・32 号』日本文化財科学会

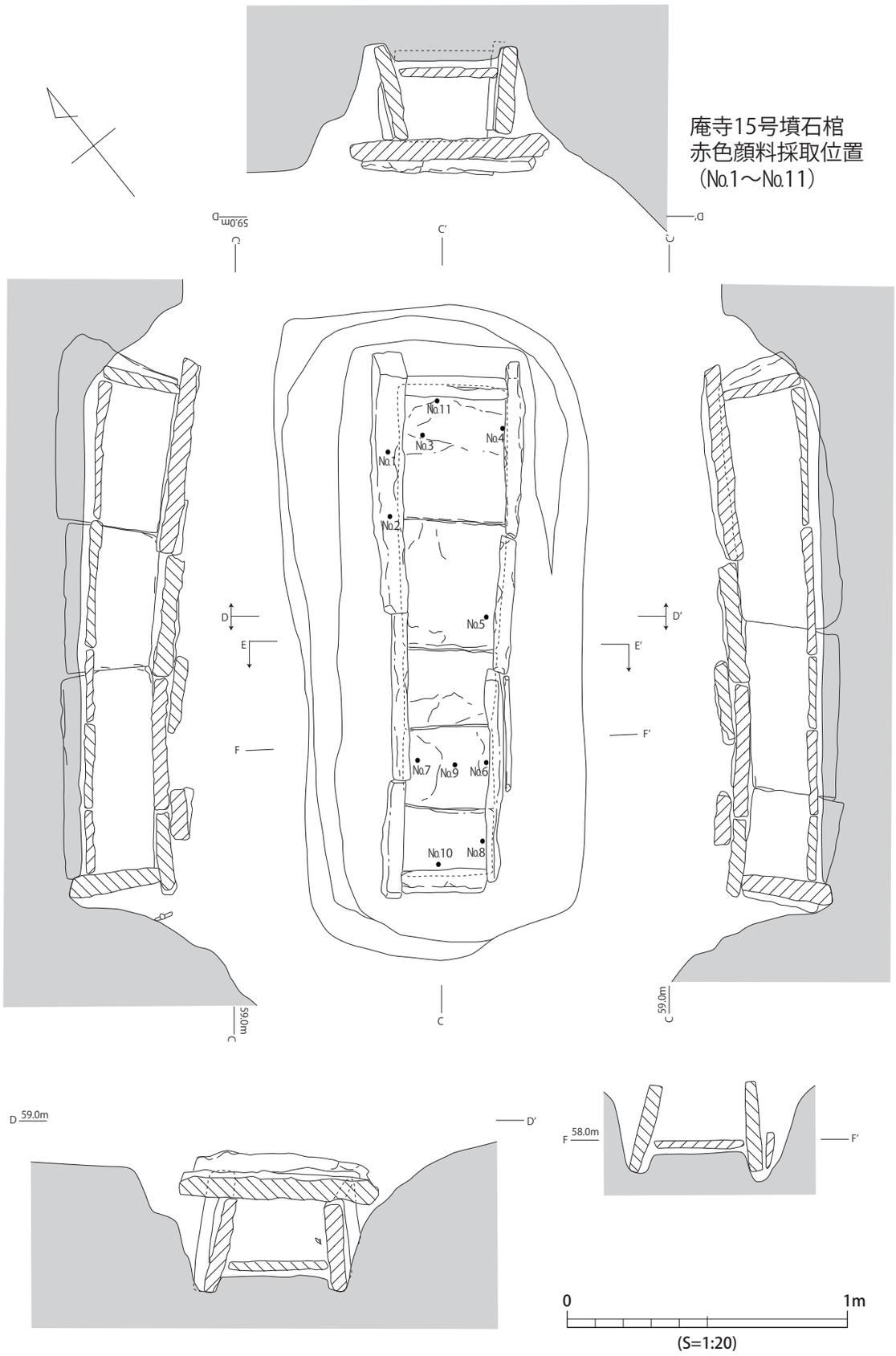
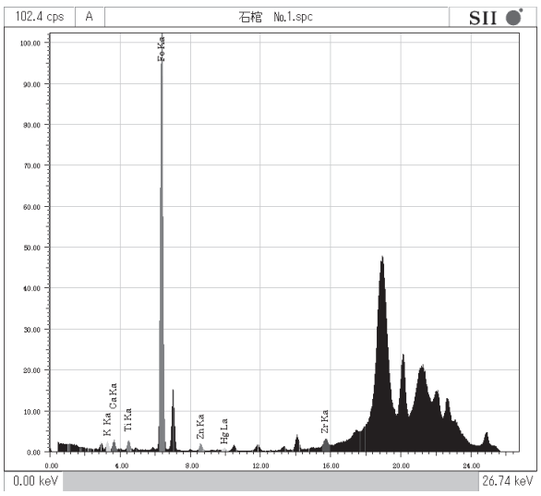
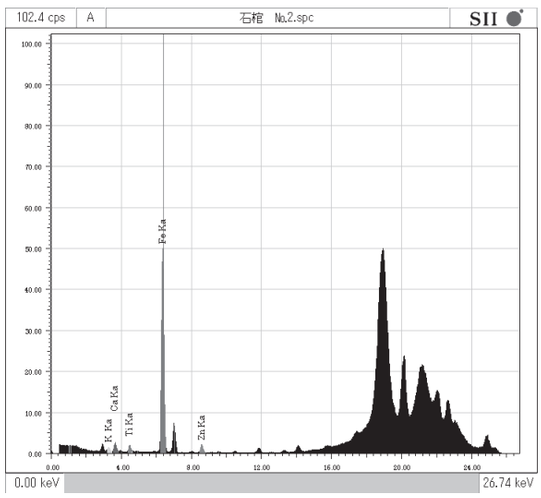

庵寺15号墳石棺
赤色顔料採取位置
（No.1～No.11）
No.1
No.2
No.3
No.4
No.5
No.6
No.7
No.8
No.9
No.10
No.11
59.0m
58.0m
0
1m
(S=1:20)

図 1

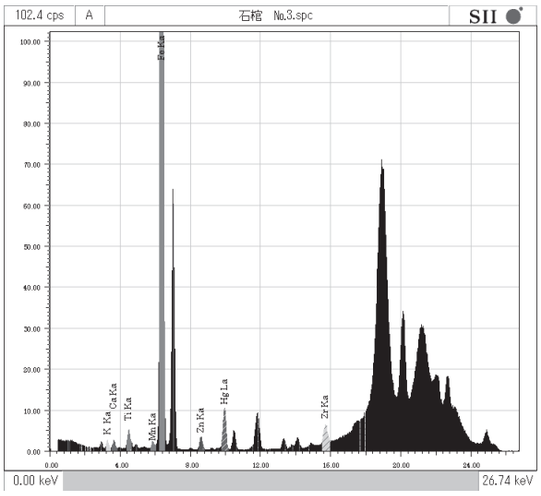
庵寺 15 号墳出土赤色顔料　蛍光 X 線分析スペクトルデータ



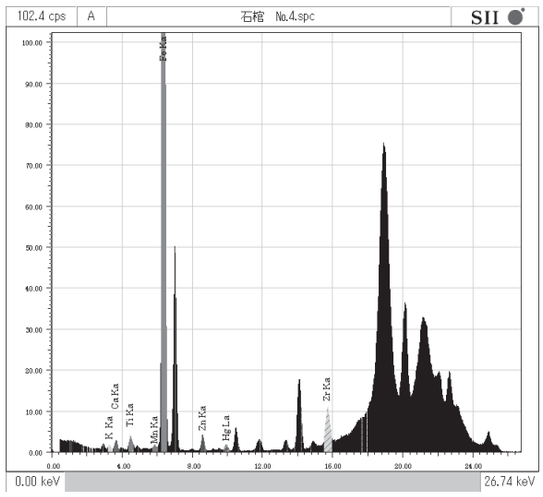
No.1



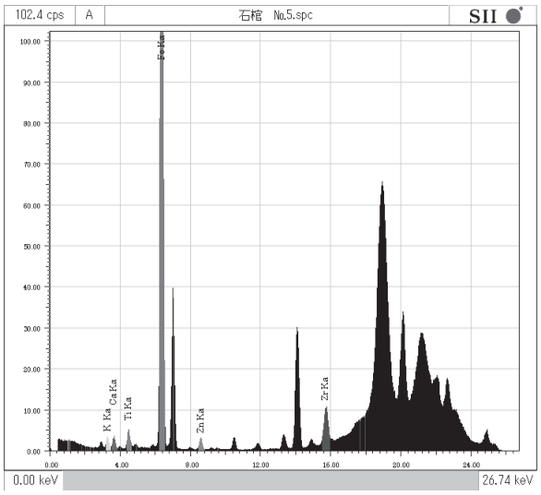
No.2



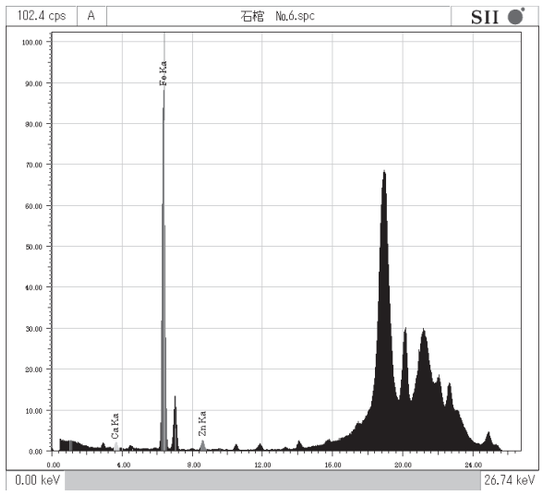
No.3



No.4



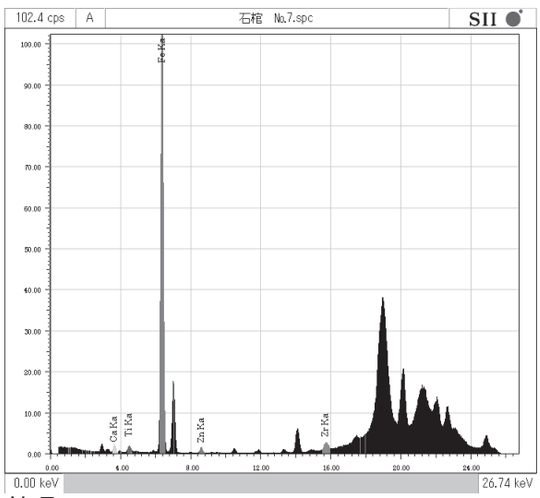
No.5



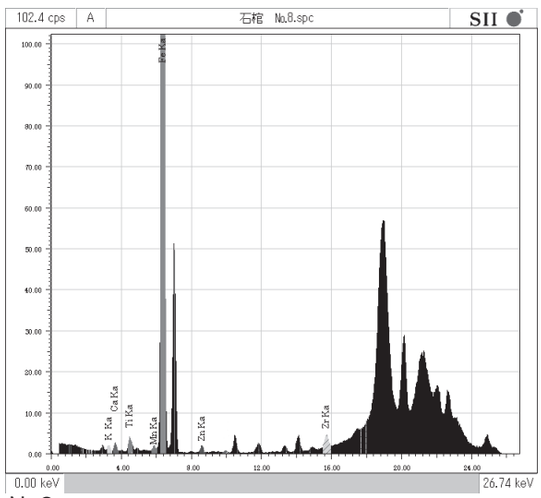
No.6

図 2

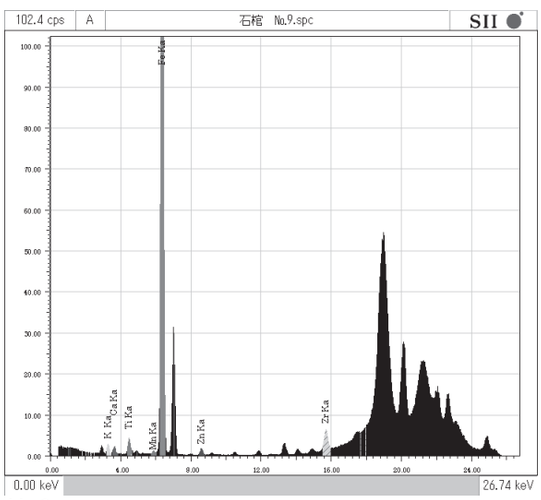
庵寺 15 号墳出土赤色顔料　蛍光 X 線分析スペクトルデータ



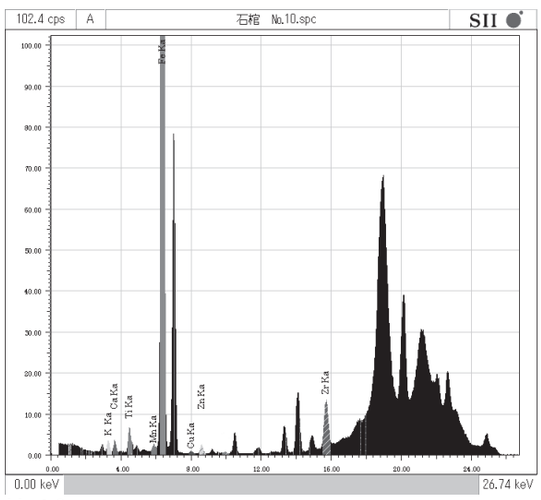
No.7



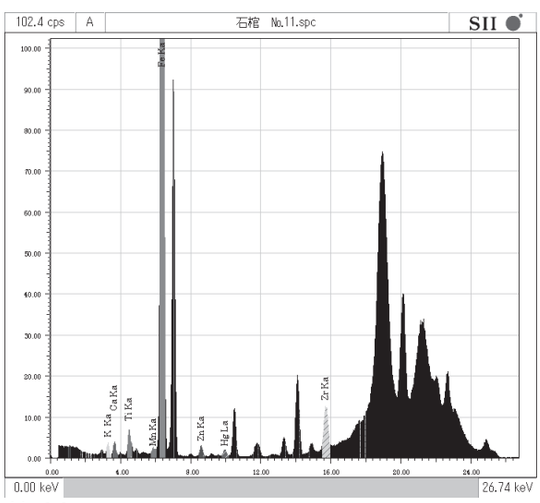
No.8



No.9



No.10



No.11

第 7 節　庵寺 1-A 号墳出土耳環の蛍光 X 線分析について

島根県埋蔵文化財調査センター　　上山晶子

1. 分析試料の概要

平成 20 年度に調査が行なわれた庵寺 1-A 号墳から出土した耳環について蛍光X線分析を行なった。ほかに参考資料として、島根県浜田市の日脚遺跡から出土した耳環の分析も行なった。試料の概要は以下のとおりである。

（1）試料№ 1　庵寺 1 － A 号墳出土耳環

平成 21 年度に島根県教育委員会より刊行された『一般国道 9 号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 3　梨ノ木坂遺跡・庵寺古墳群・庵寺遺跡Ⅱ』の 50 ページの第 20 図 -7 に掲載されている。報告書の記載によれば、6 世紀後半から 7 世紀初頭に築造された庵寺 1 － A 号墳横穴式石室より出土した遺物である。

（2）試料№ 2　日脚遺跡（日脚 4 号墳）出土耳環

昭和 59 年度に島根県教育委員会より刊行された『日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書　日脚遺跡』の 63 ページの第 64 図 -27 に掲載され、日脚 4 号墳横穴式石室から出土した遺物である。報告書の記載によれば、日脚遺跡では 6 基の古墳を検出しているが、そのうち 1 ～ 4 号墳と 6 号墳は 6 世紀末から 7 世紀初頭ごろの築造が推測されている。

この 2 点の耳環を実体顕微鏡（40 倍）にて観察を行なったところ、ブロック状に亀裂が入っていることがわかった。色調は暗灰色である。この外観上の特徴は先行研究から、素材に「錫」を用いた金属製品によく見られることが確認されている（註 1）。また、№ 1 の試料は試料表面の大半を赤褐色の錆が覆っていた。

2. 分析方法と結果

蛍光 X 線分析による元素定性分析を非破壊にて行なった。測定を行なった箇所は、№ 1 は耳環の表面ならびに表面が剥離して内部と推測される箇所（表面剥離部）、№ 2 は表面と破断面で行なった。

使用機器は島根県古代文化センター所有・島根県埋蔵文化財調査センター設置の「エスアイアイ・ナノテクノロジー社製 SEA1200VX 卓上型ケイ光 X 線分析計（エネルギー分散型）」である。測定条件は、励起電圧 50kV、管電流は№ 1 が 590 μ A、№ 2 が 573 μ A（管電圧による自動設定）、測定時間 100 秒（うち、有効時間は 63 秒）、測定雰囲気は大気、測定範囲は直径 8.0㎜、X 線管球は Rh（ロジウム）、検出器は Si 半導体検出器である。

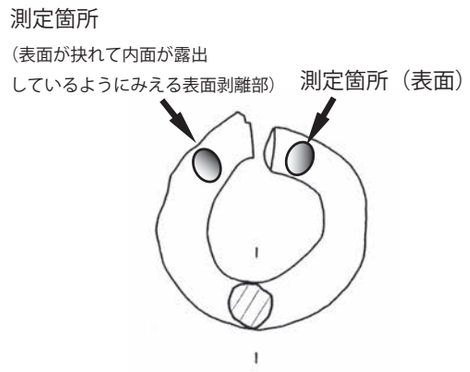
測定結果の蛍光 X 線分析スペクトルピーク（以下、ピーク）を図 3 にしめす。

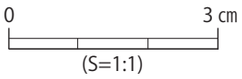
№ 1 からは表面、表面剥離部ともに Sn（錫）のピークを主に検出した。ほかに Fe（鉄）Pb（鉛）のピークを検出した。№ 2 からは表面、破断面ともに Sn（錫）のピークを主に検出し、ほかに Fe（鉄）Pb（鉛）、Zn（亜鉛）のピークを検出した。

2 点とも既に保存処理が施された遺物であり、提示する測定データは測定面の表面の値を示しているにすぎないが、顕微鏡観察と蛍光 X 線分析の結果から、これら 2 点の耳環が「錫を素材として使った可能性が高い耳環」であるといえる。

蛍光 X 線分析試料と測定箇所

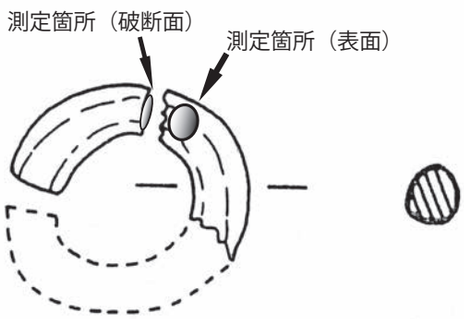
試料No.1

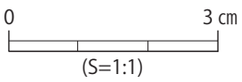




庵寺古墳群 20 図 -7
（国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会 2010
『一般国道 9 号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 3
梨ノ木坂遺跡・庵寺古墳群・庵寺遺跡 II』p.50 より作成）

試料No.2

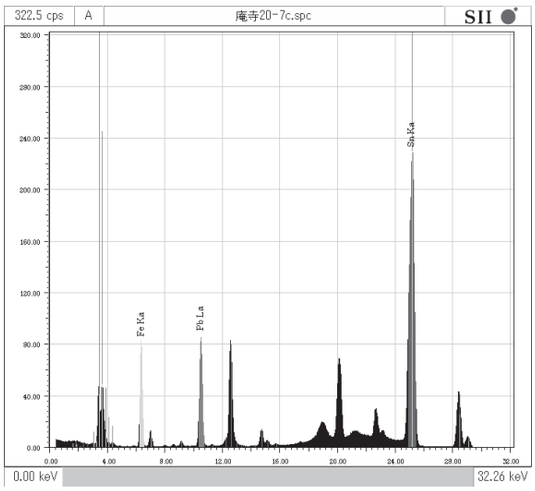




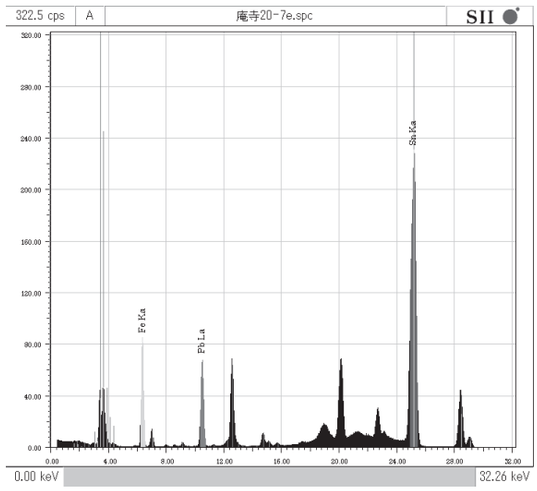
日脚遺跡 64 図 -27
（島根県教育委員会 1985
『日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書　日脚遺跡』p.63 より作成）

図 3

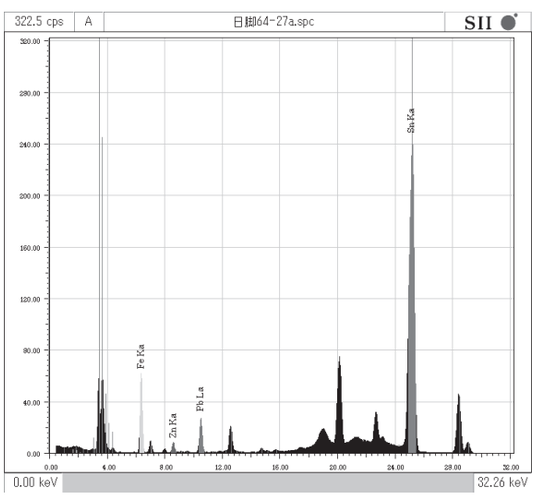
蛍光 X 線分析スペクトルデータ



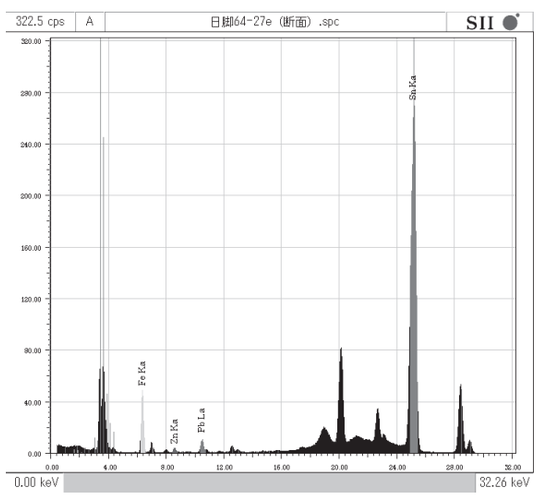
No.1（庵寺古墳群 20 図 -7）表面



No.1（庵寺古墳群 20 図 -7） 表面剥離部



No.2（日脚遺跡 64 図 -27） 表面



No.2（日脚遺跡 64 図 -27） 破断面

（註 1）比佐陽一郎 2003「福岡市内出土の錫製品について」『福岡市埋蔵文化財センター年報第 21 号』福岡市教育委員会他参照

第６章　総　括

第１節　庵寺古墳群の弥生集落について

庵寺古墳群では、標高 60 ～ 80 mの丘陵上で弥生時代中期末～後期の集落跡が検出された。遺構の内訳は竪穴建物跡２棟、加工段 31 基であり、仁万平野周辺でこれだけの規模で弥生期の建物跡が検出されたのは初といえる。ここでは各遺構の特徴をまとめ、丘陵上で営まれた集落の実態を明らかにしたい。

１．竪穴建物跡について

弥生期の遺構は流出により全形を留めていないものがほとんどで、消滅してしまった遺構もあったと思われるが、明らかな竪穴建物跡は２棟検出された。平面形はＳＩ 01 が隅丸多角形、ＳＩ 02 は隅丸方形とみられる。いずれも石見Ｖ－１様式の土器が出土しており、時期的な差異はみられない。ただ立地的な状況を俯瞰すると、丘陵の尾根筋や先端部ではなく、いずれも丘陵斜面の南西側の奥まった位置にあり、標高 63 ～ 68 mの中腹付近に立地するという傾向がある。

２．加工段について

斜面を断面Ｌ字状に掘り込み平坦面を作り出した遺構を加工段としている。当遺跡では尾根筋から斜面及び谷間にかけて 31 基の加工段が検出された。概要は第８表にまとめたが、大半は南側丘陵部の尾根筋から斜面部に立地するものであり、谷部平坦面（加工段 12）や北側丘陵部尾根筋（加工段 31）でもそれぞれ１基ずつの検出例がみられる。時期的には土器が出土しなかった遺構もあるが、中期末～後期前葉（Ⅳ～Ｖ－１様式）がほとんどで、唯一加工段 27 のみが後期末（Ｖ－４）の鼓型器台を伴う状況である。

このような急峻な斜面に立地する加工段の機能を検討する上で興味深いのは、床面の柱穴の存在であろう。加工段状の平坦面は、通常、斜面に掘立柱建物を建てるために作られると思われ、当遺跡でも床面から柱穴が検出される例が多い。しかしながら、流出により原形を留めているものは無いが、現状で壁際の桁行き方向の柱列が１間ないし２間分がかろうじて検出された程度で、建物の規模や構造を検討できるものではない。また柱穴は深さ 20cm 程度で柱間も不整なものが多いことから、加工段に建てられた建物は居住を目的としたような構造的にしっかりとした大規模ものではなく、おそらくは土間床で簡便な倉庫や納屋、小屋状の構造物が建っていたのではないかと推測される。

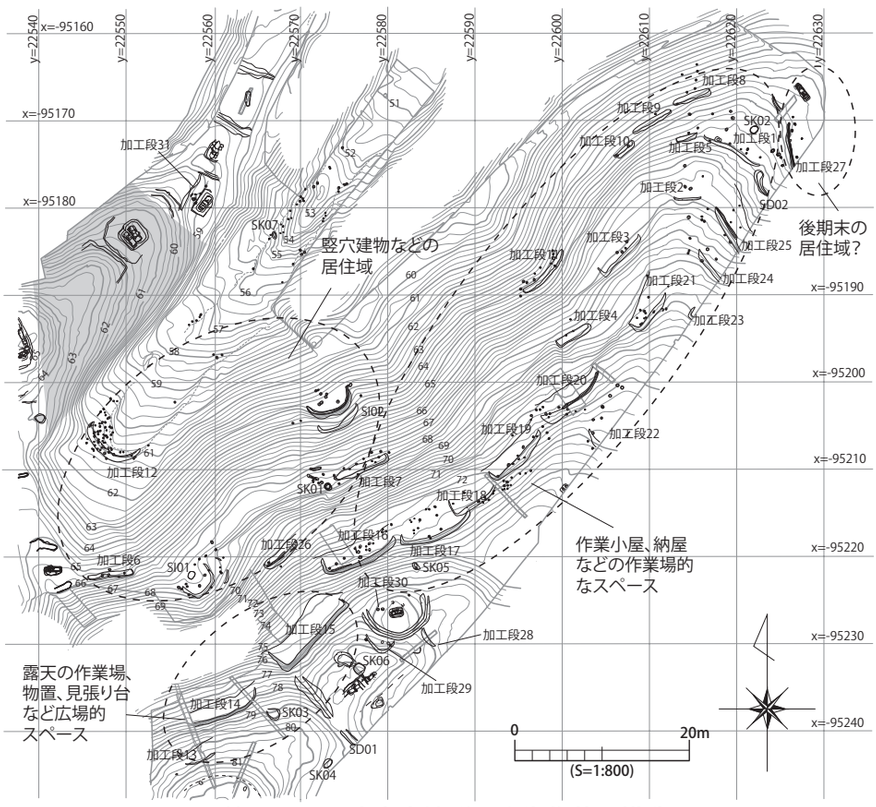
一方、床面から柱穴が全く検出できなかった加工段も存在する（加工段 13・14・15）。これらは３基がまとまって検出されており、位置的には丘陵頂部下方の標高 75 ～ 80 mの斜面に立地する。いずれも残存状況は比較的良好で、床面の幅は１mを超え、特に加工段 15 は長さ 10.4m、幅 3.2 mを測る大規模なものである。床面を浅く窪めて柱を立てた可能性も残るが、本来、柱穴を有しなかった加工段とみていいだろう。このような加工段の機能としては、他と比較して逆に広いスペースを確保していることからも、露天の作業場や物置、或いは見張り台といったものが想起される。またこういった丘陵部で生活する上で平坦面の確保は必要不可欠であり、それが丘陵の最高所でまとまって立地していることは、集落の構造や集落内での生産活動を検討する上で重要な視点となるものといえよう。

この他、当遺跡の加工段の特徴としてあげられるのは、掘り方が斜面上方から西側面にかけて直

遺構名	立地場所	長さ×幅	時期	床面形態	類型	出土遺物	備考
加工段１	南側丘陵	7.2m	Ⅴ－１か		Ⅰ類		土坑あり
加工段２	南側丘陵	3.1m	Ⅴ－１か		Ⅱ類		
加工段３	南側丘陵	5.9m×1.1m	Ⅴ－１か	逆Ｌ字型	Ⅰ類		
加工段４	南側丘陵	4.1m×8.6m	Ⅴ－１	逆Ｌ字型	Ⅰ類		
加工段５	南側丘陵	2.45m×50cm	Ⅴ－１		Ⅰ類		
加工段６	南側丘陵	5.2m×52cm	Ⅴ－１		Ⅱ類		
加工段７	南側丘陵	6.2m×80cm	Ⅳ～Ⅴ－１		Ⅰ類		
加工段８	南側丘陵	4.4m×70cm	Ⅴ－１		Ⅰ類		
加工段９	南側丘陵	4.9m×50cm			Ⅱ類		
加工段10	南側丘陵	2.6m×40cm	Ⅴ－１か		Ⅰ類	磨石	
加工段11	南側丘陵	6.6m×50cm	Ⅴ－１		Ⅰ類		
加工段12	谷部	6.5m			Ⅰ類		
加工段13	南側丘陵	3.6m×1.1m	Ⅴ－１		Ⅲ類		
加工段14	南側丘陵	8.2m×1.8m	Ⅴ－１		Ⅲ類		
加工段15	南側丘陵	10.4m×3.2m	Ⅳ～Ⅴ－１	逆Ｌ字型	Ⅲ類	台石	
加工段16	南側丘陵	8.5m×2.5m	Ⅴ－１	逆Ｌ字型	Ⅰ類		
加工段17	南側丘陵	8.2m×3.7m	Ⅴ－１		Ⅰ類	石皿	
加工段18	南側丘陵	5.5m×2.5m		逆Ｌ字型	Ⅱ類		
加工段19	南側丘陵	7.3m×1.6m	Ⅴ－１	逆Ｌ字型	Ⅰ類		
加工段20	南側丘陵	８m×2.05m			Ⅰ類		
加工段21	南側丘陵	5.1m×2.7m	Ⅴ－１か	逆Ｌ字型	Ⅰ類		
加工段22	南側丘陵	２m			Ⅰ類	磨石	
加工段23	南側丘陵	１m					
加工段24	南側丘陵	4.3m×3.5m			Ⅰ類		
加工段25	南側丘陵	5.6m×3.1m	Ⅴ－１か		Ⅰ類		
加工段26	南側丘陵	5.2m×79cm			Ⅱ類		壁帯溝あり
加工段27	南側丘陵	4.9m×2.5m	Ⅴ－４		Ⅰ類		壁帯溝、焼土面あり
加工段28	南側丘陵	2.5m					
加工段29	南側丘陵	３m×2.4m	Ⅴ－１か		Ⅱ類		焼土面あり
加工段30	南側丘陵		Ⅳ～Ⅴ－１		Ⅰ類		
加工段31	北側丘陵	2.55m×1.5m			Ⅰ類		

※類型は、塩津丘陵遺跡群の報告（島根県1998）で示された下記の分類を参考に区分した。
Ⅰ類･･･柱穴の配列が認められ、掘立柱建物が建っていたと推測されるもの
Ⅱ類･･･建物の存在を類推させる遺構がみられるが、整然とした並びが認められないもの
Ⅲ類･･･柱穴等がほとんど認められないもの

第８表　庵寺古墳群　弥生集落検出加工段一覧



第 192 図　庵寺古墳群　弥生集落の構造

角に掘り込まれ、床面の縁辺が逆Ｌ状を呈するものが多いことである。このような形態の加工段は尾根上平坦面と斜面の傾斜変換地点に立地しており、特に加工段 16 を基点に加工段 21 まで連続的に並列して構築される様子がうかがえる。北東側の掘り方が揃って流出したとは考えにくいことから、これらの加工段は谷部の出口方向に開放する構造であったと考えられる。また、これらの加工段の床面から検出された柱穴は、壁際か床面の南西側に密集しており、開放側に一定のスペースを設けていることもうかがえる。すなわち、斜面に沿って構築された加工段は北東方向から出入りする構造で、開放部付近に通路もしくは作業場的な空間を設けていたことも推測されよう。

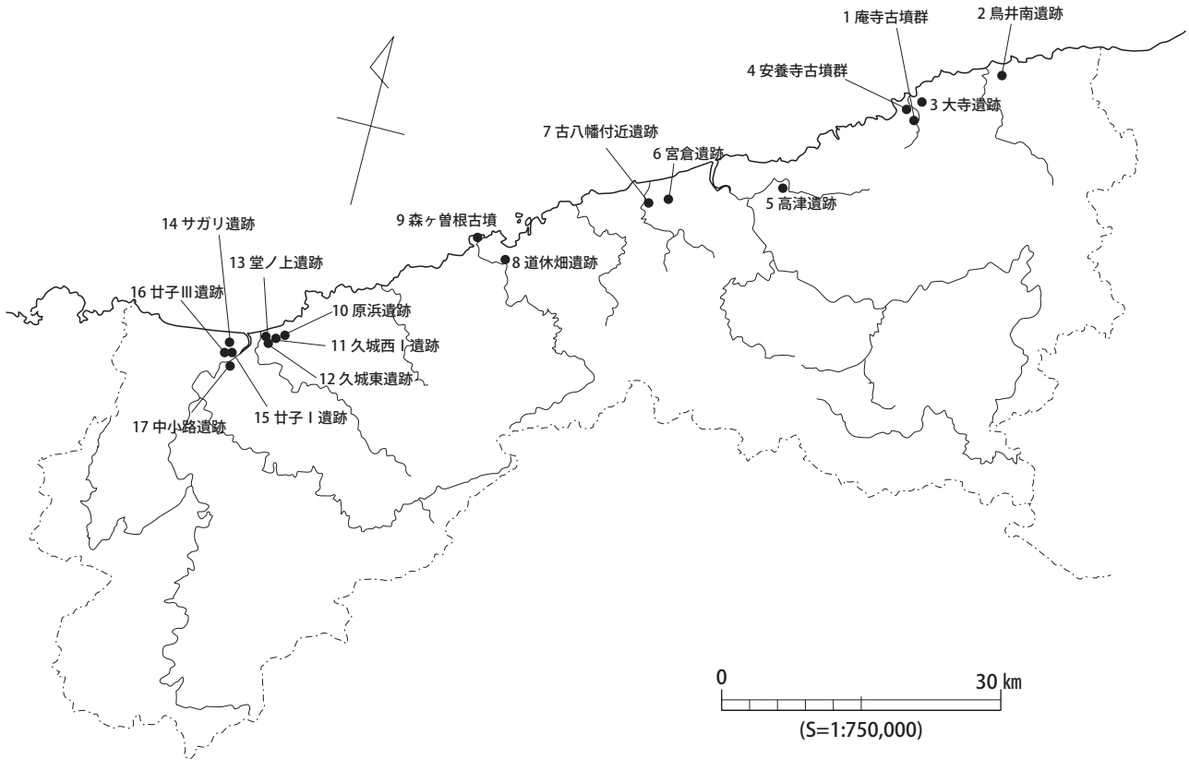
３．集落の様相について

以上のことから集落の構造や変遷をまとめると、出土土器から、本丘陵部への進入・開発は中期末頃から開始されたとみられる。出土遺物の無い加工段もあり断定的なことは言えないが、後期前葉にかけて竪穴建物や加工段が構築され、丘陵での生産活動が活発になった様子がうかがえる。細かく見ていくと、竪穴建物は丘陵斜面下方に位置することから、居住域は見晴らしを重要視せず、海側からの風を避けた谷の奥側に配置したと思われる。そう考えるなら、谷奥の平坦面という特異な場所に立地する加工段 12 も、竪穴建物群と併せ居住的な機能を持つ建物であったことが想定されよう。一方、加工段は竪穴建物群より下方には存在せず、斜面上方や尾根筋に立地する。特に尾根頂部付近の最高所に作業場的な平坦面を設け、そこを起点に丘陵先端部にかけて作業小屋的な簡易構造の建物を配置し、周囲で生産活動を行っていたことが推測される。ただし、どのような作業を行っていたかは明らかでない。

その後、集落は後期末まで遺構が途絶えるが、谷部で出土した土器をみると、後期前葉から後期末までほぼ途切れることなく遺物が出土しており、継続的な移住があったことをうかがわせる。後期末の加工段 27 は尾根筋の先端部に位置しており、また丘陵の反対側の斜面に向かって開放していることから、時期ごとに居住域が移動していたことも十分考えられる。この他北側丘陵部の尾根筋に位置する加工段 31 は１基のみ単独で立地しており、柱穴の規模も他と比較して大きいことから、別の時期の遺構である可能性もある。

４．周辺地域の様相について

続いて、周辺地域で検出された同時期の集落跡について触れてみたい。第９表で石見地域の沿岸部で検出された弥生時代後期集落をまとめたが、管見に触れたもので 17 遺跡を数えた[(1)]。地域的には石西地域の益田市周辺が突出して多いが、これは発掘調査の進捗状況を反映しているものと思われ、全体的には河川の流域に沿って小地域ごとに集落が点在するといえる。時期的にみると、中期末～後期前葉に大きな画期が認められ、多くのエリアでこの時期から丘陵部への進出・開発が始まったとみられる。そして土器の一型式内で途絶するのではなく、むしろ２～３型式もしくは終末期～古墳時代にかけて集落が継続する傾向が見て取れる。立地的にみると、多くは比高の低い河岸段丘上や丘陵縁辺部に位置しており、この時期に各地域で河川に面した低丘陵地に開発が及んだ様子がうかがえる。一方、庵寺古墳群のような水田部との比高差が 50 mを超える丘陵に居住するものは、他に鳥井南遺跡（80 m）や道休畑遺跡（60 m）があり、他と比較して特異な印象は否めない。また、集落の構造を見た場合、竪穴建物以外にも掘立柱建物や加工段がセットとなり集落単位を構成するが、掘立柱建物や加工段の数は竪穴建物と同数か少ない場合が多い。しかし庵寺古墳群では竪穴建物２棟に対し、少なくとも同時期とみられる加工段は 20 基におよび、こうした点から



第 193 図　石見地域沿岸部の弥生時代後期集落分布図

No.	遺構名	所在地	Ⅳ	Ⅴ－1	Ⅴ－2	Ⅴ－3	Ⅴ－4	古墳前期	立地場所	標高	比高差	主な遺構	備考	文献
1	庵寺古墳群	大田市仁摩町	竪穴２・加工段20				加工段１		丘陵上～斜面	60～80m	50～70m	竪穴２、加工段31		本書
2	鳥井南	大田市鳥井町			竪穴２	竪穴２			丘陵上	100m	80m	竪穴２、段状遺構	鉄器	東森2003
3	大寺遺跡	大田市仁摩町					水田		丘陵斜面・水田			杭・矢板列	木製品	東森2003
4	安養寺古墳群	大田市仁摩町		竪穴１					丘陵上	36m	30m	竪穴１		東森2003
5	高津遺跡	江津市		竪穴１	竪穴６		竪穴２	竪穴２	丘陵裾	21～26m		竪穴11・水場遺構	鉄器	東森2003
6	宮倉遺跡	江津市		竪穴２					丘陵裾	22m	５m	竪穴２		東森2003
7	古八幡付近遺跡	江津市	竪穴４・掘立１・環濠	段					丘陵・水田	19～40m	８～29m	竪穴４、掘立１、加工段２、環濠	水田、木製品	東森2003 島根県2000
8	道休畑遺跡	浜田市					竪穴１		丘陵上	100m	70m	竪穴１	昭和50年度調査	東森2004
	道休畑遺跡	浜田市		掘立１	竪穴１	竪穴７・掘立４・加工段２	竪穴５・掘立５・加工段５		丘陵上	90m	60m	竪穴13、掘立10、加工段７	貯蔵穴７ 平成19･20年度調査	島根県2010 a
9	森ヶ曽根古墳	浜田市		柱穴					丘陵上	40m	35m	柱穴、土坑	土坑は住居址の可能性あり	東森2003
10	原浜遺跡	益田市		竪穴１					丘陵上先端	77m	34m	竪穴１		島根県2010 b
11	久城西Ⅰ遺跡	益田市					竪穴２		丘陵斜面	40m		竪穴２		島根県2010 b
12	久城東遺跡	益田市	竪穴１						丘陵斜面	30m		竪穴１		益田市2010
13	堂ノ上遺跡	益田市		竪穴１・加工段５	竪穴２・掘立１	竪穴２			段丘上	30m		竪穴５・掘立１・加工段５	平成19･20年度調査	島根県2010 c
	堂ノ上遺跡	益田市	竪穴２		竪穴４	竪穴２	竪穴３		段丘上	30m		竪穴13・掘立６	平成21年度調査	島根県2011
14	サガリ遺跡	益田市		竪穴２					丘陵上			竪穴２		東森2003
15	廿子Ⅰ遺跡	益田市							丘陵上先端	20～35m	15～20m	竪穴１		島根県2006
16	廿子Ⅲ遺跡	益田市		竪穴１					丘陵上先端	15～25m		竪穴１		島根県2006
17	中小路遺跡	益田市	竪穴３、溝状遺構		竪穴１	竪穴１	竪穴１		段丘上	12m		竪穴９、土器棺墓８、溝状遺構	溝状遺構は環濠の可能性あり 平成15～17年度調査	益田市2008
	中小路遺跡	益田市	竪穴１		竪穴４		竪穴１		段丘上	12m		竪穴６	平成17～20年度調査	益田市2012

※東森2003で示された石見地方の集落遺跡集成を加筆・修正

第９表　石見地域沿岸部の弥生時代後期集落遺跡一覧

も庵寺古墳群の弥生集落の特異性が浮かび上がってくるといえる。

5．集落の性格について

以上、庵寺古墳群の弥生集落について、遺構の様相や周辺地域の集落遺跡との比較から概観してみた。当遺跡の弥生集落は、弥生時代中期末～後期前葉にかけて展開すること、水田部との比高差50～70 mの丘陵上に立地すること、加工段の数が竪穴建物の棟数と比較して超過的に多いことが特徴としてあげられる。このように丘陵上に展開する集落という意味で、当遺構群は高地性集落といえるだろう。しかしこのような丘陵上に集落が進出したのは、決して孤立的で特異な状況の中での開拓だったのではなく、当該期において周辺地域と連動した状況の中で行われたと考えられる。仁万平野周辺では、平野部南側の丘陵に立地する安養寺古墳群でも同時期とみられる竪穴建物跡が検出されている(2)。このことから、この時期にそれまで手の入らなかった平野部南側の丘陵部一帯に一斉に開発が及んだ様子もうかがえよう。また加工段の数の多さについても、逆にいえば遺跡が丘陵斜面に立地することからこそ確認できた作業空間といえる。従って、その機能は不明な点も多いが、平地集落では検出することができない弥生集落の実態及び空間利用の一端を示したものである可能性もある。

このような丘陵部への進出がどのような社会的要因によるものかなど解明すべき課題は多いが、当地域における高地性集落の実態を考える上で、多数の加工段が検出された意義は大きいと思われる。今後の調査の進展を待ちたい。

第６章　第１節　註

(1)　この他、住居址は確認されていないが、中小路遺跡と同一段丘状に立地する羽場遺跡では弥生時代中期中葉の環濠が検出されている（文献は下記の益田市 2012 と同じ）。

(2)　仁摩町教育委員会 1989『仁摩健康公園造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』

参考文献

岡山県教育委員会 1997「中山遺跡・中山古墳群」『中国横断自動車動建設に伴う発掘調査４　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 121』

島根県教育委員会 1998『一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ⅸ　塩津丘陵遺跡群』

丹羽野裕 2002「山陰の高地性集落－塩津丘陵遺跡群を中心に－」『月刊文化財』11 文化庁文化財部

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009「ここまで掘った！石見の弥生ムラ」『平成 20 年度島根県埋蔵文化財調査センター講演会発表資料』

第７表　掲載文献

東森晋 2003「石見」『山陰の集落遺跡－弥生時代後期から古墳時代前期の集落像－』山陰考古学研究集会

東森晋 2004「道休畑遺跡の竪穴住居跡」『八雲立つ風土記の丘』№ 178　島根県立八雲立つ風土記の丘

島根県教育委員会 2000『一般国道９号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓』

島根県教育委員会 2006『一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１　廿子Ⅰ遺跡・廿子Ⅲ遺跡』

島根県教育委員会 2010 a『一般国道９号（浜田・三隅道路）建設予定地内発掘調査報告書１　道休畑遺跡』

島根県教育委員会 2010 b『一般国道９号（益田道路）建設予定地内発掘調査報告書６　久城東遺跡・若葉台遺跡・久城西Ⅰ遺跡・久城西Ⅱ遺跡・原浜遺跡』

島根県教育委員会 2010 c『堂ノ上遺跡－一般県道久城インター線久城工区地域活力基盤創造交付金（改良）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』

島根県教育委員会 2011『一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書７　堂ノ上遺跡』

益田市教育委員会 2012『中小路遺跡・羽場遺跡－一般県道白上横田線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』

益田市教育委員会 2010『沖手遺跡・久城東遺跡－一般県道久城工区地方道路交付金（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』

益田市教育委員会 2008『家下遺跡・中小路遺跡－経営体育成基盤整備事業（横田・安富地区）に伴う発掘調査報告書－』

第２節　庵寺古墳群の変遷と位置付けについて

庵寺古墳群では、今回の調査で古墳時代前期～中期を主体とした 21 基の古墳を確認し、平成 20 年度の調査と合わせると 24 基の古墳を調査したことになる。石見地方東部でこれだけの規模の古墳調査例は無く、石東地域における当該期の様相を知る上で貴重な資料を提供したといえる。ここでは各古墳の遺構・遺物から特徴や時期をまとめ、古墳の変遷や位置づけについて若干の検討を行いたい。

１．古墳出土土器の時期について（第 194 図）

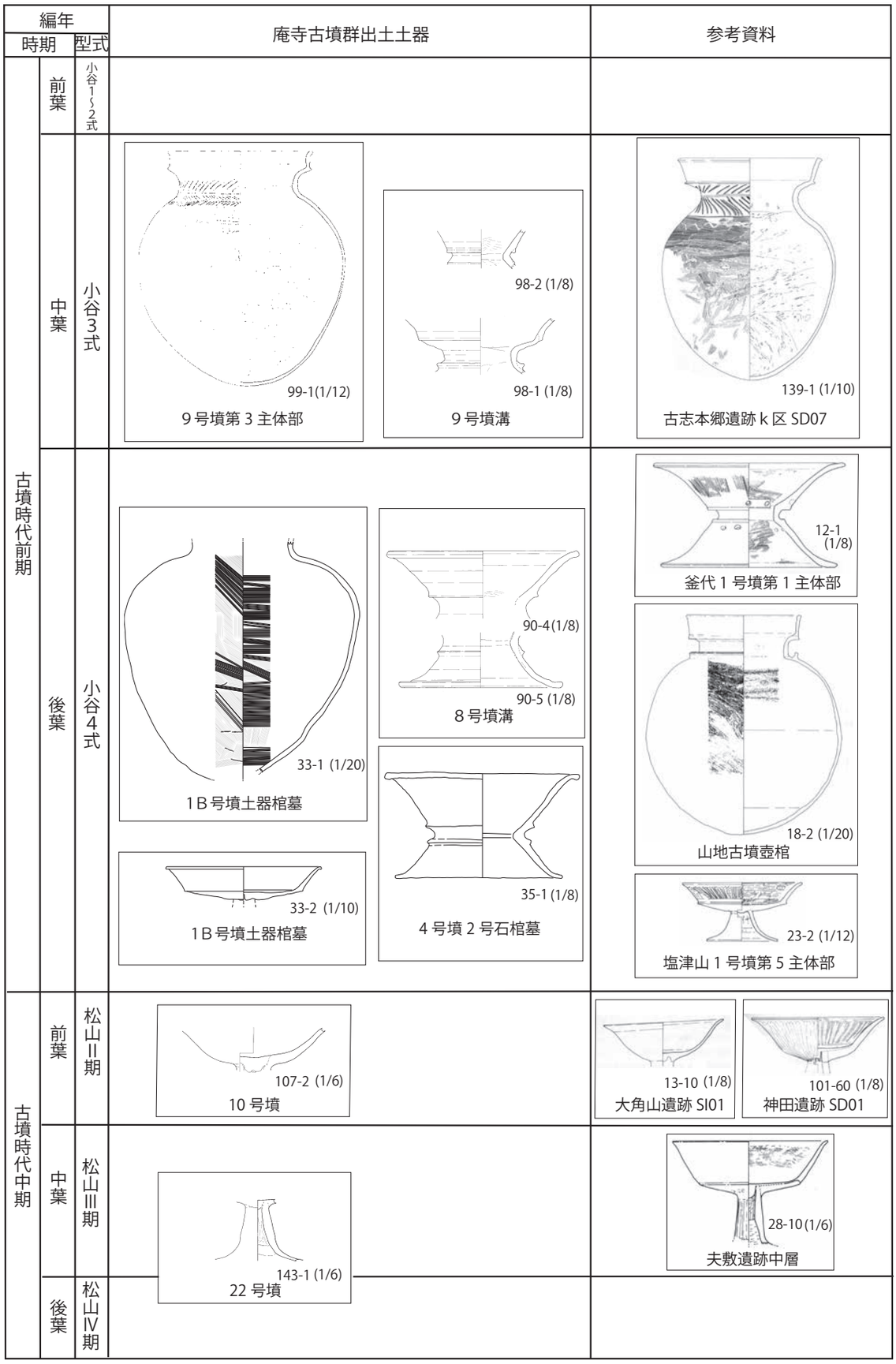
今回の調査で確認した古墳は、３つの丘陵の狭長な尾根筋に、古墳時代前期から後期にかけて継続的に築造されている。これらは立地的なまとまりを持っており、便宜的ではあるがＡ群～Ｉ群のの９支群に区分した。まず、古墳から出土した土器から古墳が築造された時期を捉え、その変遷の検討を試みたい[(1)]。なお、調査により埋葬施設から土器が出土した例は土器棺墓を除きほとんどなく、わずかに４号墳第２箱式石棺（平成 20 年度調査）で器台が土器枕に転用された事例があるのみである。従って時期比定の手がかりに乏しい状況にあるが、周溝内など墳丘の周辺から出土したものを供献土器の流出品と捉え、検討材料に加えていることを前置きしておく。

最も古いものは、９号墳第３主体部で検出された大型の壺形土器（99 － 1）である。土器棺に転用されたもので、ほぼ全形をうかがうことができる資料である。底部は丸底であり、胴部は肩の張りもなく球形化が進んでいる。また羽状文は上下幅がほぼ均等を保っており、上段が口縁まで回り込まないなどの特徴から、小谷３式の中で捉えてよいと考えられる。また区画溝内からも壺（98 － 1）や鼓形器台（98 － 2）の破片が出土してるが、器台は退化傾向が顕著で、壺は頸部に突帯がまわることから少なくとも小谷２式以降と考えられ、矛盾はみられない。９号墳に隣接する８号墳では、区画溝から鼓形器台（90 － 4･5）の破片が出土したが、復元口径が 20cm を超える大型品で器壁も厚い。４号墳第２石棺出土品（35 － 1）も同様の特徴を持っており、これと同様の法量が松江市釜代１号墳出土品（12 － 1）にみられる。或いは小谷式末期の現象と捉えることができ、Ｂ群は９号墳→８号墳の築造順が導かれる。

土器棺墓は他に１Ｂ号墳の墳裾部で１基検出されている。土器棺には大型の壺形土器（33 － 1）と高坏（33 － 2）が使用されており、高坏の特徴は小谷３～４式に比定されている安来市塩津山１号墳第５主体の土器棺出土例と類似する。壺形土器は推定高 90cm を超える大型品であるが、頸部以上を欠き、丸底で羽状文はみられず胴部の内面はハケ調整のみで仕上げられる。類似例としては出雲市山地古墳の壺棺（18 － 2）や松江市奥才 12 号墳出土例があり、小谷４式と考えられる資料といえる。従って、壺形土器の比較から１Ｂ号墳は９号墳より型式的には新しい古墳と捉えられ、相対的にＢ群→Ａ群の築造関係が導かれよう[(2)]。

中期の土器とみられるのは、10 号墳の墳裾で出土した高坏片（107 － 2）がある。口縁が坏部底面から緩やかに立ち上がる形態だが、底部の充填円盤が凸状になっており、軸痕も認められる。類似例としては松江市大角山遺跡ＳＩ 01 出土例（13 － 10）や松江市神田遺跡出土例（101 － 60）があり、中期前葉の松山Ⅱ期に相当するとみられる。10 号墳は９号墳の墳丘を削平して築かれており、Ｃ群はＢ群やＡ群に後続する中期段階の古墳と捉えることができる。

西側丘陵部では土器の出土がみられなかったが、南側丘陵部では 22 号墳の墳頂部から高坏（143

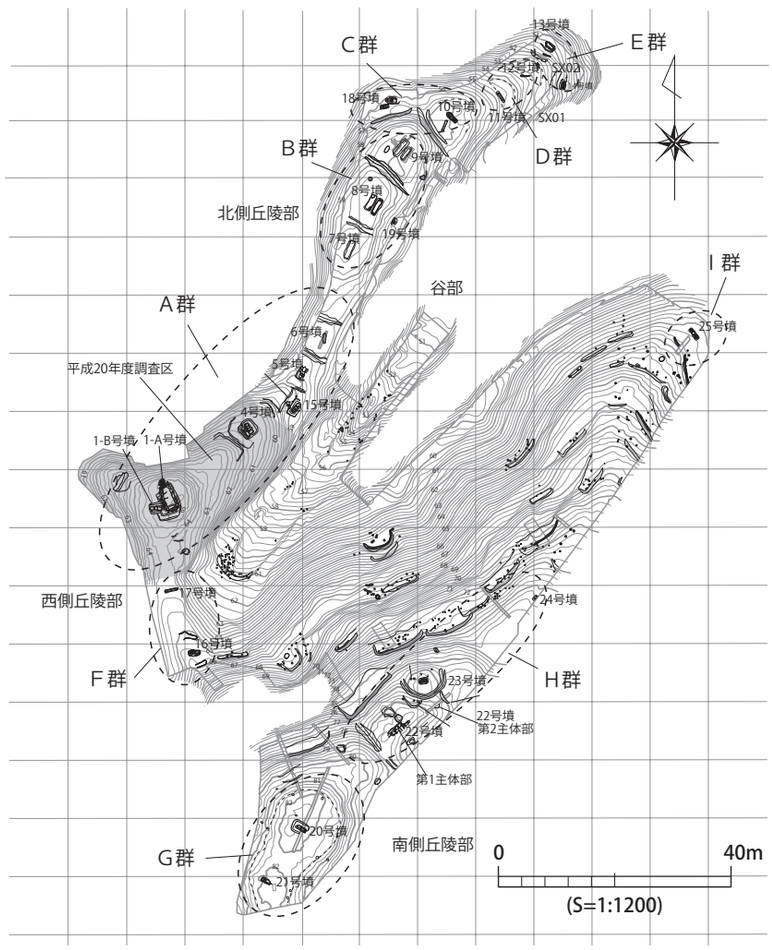


第 194 図　庵寺古墳群出土土器の時期と編年

時代		古墳時代前期			古墳時代中期			古墳時代後期			
時期		前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	終末期
形式		小谷１～２式	小谷３式	小谷４式	松山Ⅱ	松山Ⅲ	松山Ⅳ			TK43・TK209	TK217
立地	群										
北側丘陵	A			1B号→4号→15号→5号→6号						1A号	
	B		9号→8号→7号								19号
	C				10号・18号						
	D					（11号→12号？）					
	E										13号・14号
西側丘陵	F				16号・17号						
南側丘陵	G				20号・21号						
	H					22号→23号→24号					
	I										25号

・（　）は時期比定の根拠に乏しいもの

・→は築造順を示し、不明なものは並列させている



第 195 図　庵寺古墳群の変遷

－ 1）の脚部が出土している。凸状の粘土が充填されるが軸痕は認められず、形態は高さが低く脚柱部が細い特徴がある。類似例としては松江市夫敷遺跡中層資料（28 － 1）があり、中期中葉～後葉の松山Ⅲ～Ⅳ式に比定されるといえる。この状況からH群は中期前葉のC群より新しい傾向が認められ、このことを積極的に考慮すれば、南側丘陵部は北側丘陵部に後続して墓域が移動したものと推測される。

２．副葬品について

続いて副葬品の検討を行いたい。当古墳群では副葬品の検出例が極めて少なく、その内容は決して豊富とは言えないが、鉄器類と玉類に区別することができる。

鉄器類　鉄器が出土した古墳とその内容は、15 号墳と５号墳から刀子、８号墳の第１主体部から鉄鎌とヤリガンナ、第２主体部から鉄鏃、９号墳第１主体部から鉄剣、13 号墳と 22 号墳、23 号墳から刀子が出土した状況である。20 号墳からも鉄器片が検出されたが、これは細片であり器種不明である。他にも１Ｂ号墳第２主体部で鉄剣が副葬されていたと考えられている。以上のように、器種はバラエティに富むが各古墳主体部から１～２点程度の副葬を垣間見ることができる。

最も多いのは刀子で、いずれも小型で片関で棟部が直線状に伸びる形態から、前期～中期前半と捉えることができる[(2)]。興味深いのは鉄鏃で、県内では雲南市神原神社古墳出土例が知られ、石見部では初例となった定角式鉄鏃であることが判明した。定角式鉄鏃は畿内を中心に瀬戸内沿岸部から山間部に分布しており、日本海側では丹後地域を除くとほとんど認められていない[(4)]。その製作地は畿内と推測されるが、その入手経路が中国山地経由の山陽側だけでなく丹後を起点とした日本海沿岸ルートである可能性も示唆されるといえよう。

さらに注目されるのは、副葬の際に鉄器を意図的に折り曲げる行為が行われていることである。９号墳や８号墳に副葬された鉄剣や鉄鎌、ヤリガンナに顕著にみられ、１Ｂ号墳第１主体部に副葬された前漢鏡の破砕行為も同様の性格を持った副葬行為とみられる。このような事例は日本海沿岸部の小規模古墳で共通したもので、小型古墳造営集団同士の交流の姿がうかがえるといえる[(5)]。

玉　類　玉類は、１Ｂ号墳第１主体部から碧玉製管玉１点、15 号墳と５号墳からガラス小玉１点ずつ、17 号墳から滑石製臼玉 12 点、20 号墳から緑色凝灰岩製管玉１点と滑石製臼玉３点、23 号墳から滑石製勾玉１点が検出された。臼玉を除けばいずれも１点のみの副葬であり、連として身につけることを意識したものではないことがうかがえる。時期的にみると、１Ｂ号墳の碧玉製管玉は花仙山産の山陰系で、前期後半に比定される。ガラス小玉は淡青色で材質は15号墳がカリガラス、５号墳がソーダ石灰ガラスと判明した。銅着色のカリガラスは前期後葉に流通が途絶え、同色の高アルミナソーダ石灰ガラスは前期後葉から流通量が増加すると考えられている[(6)]。20 号墳の緑色凝灰岩製管玉は畿内系とみられ前期末から中期前半に流通する。臼玉も畿内系の可能性があり、滑石製勾玉と併せ流通時期は同様の範疇におさまるものと考えられる。極論すれば、北側丘陵部Ａ群の玉類は碧玉製・ガラス製を指向するのに対し、西側丘陵部Ｆ群と南側丘陵部Ｇ・Ｈ群の玉類は緑色凝灰岩製・滑石製となり、後者が新しい様相を指向していることがうかがえる。

３．埋葬施設について

当古墳群の埋葬施設は、大きく分ければ木棺と箱式石棺に区別することができる。前期の築造とみられるＡ群とＢ群は、Ａ群が石棺、Ｂ群が木棺を主体的に採用しており、土器の前後関係から相対的に木棺直葬から石棺直葬に移行したと捉えることができる。

木棺は組み合わせ式と刳抜式があり、組み合わせ式はＢ群に採用され、刳抜式は可能性を含めて22号墳第１主体部の他に17号墳、24号墳がある。出土土器の状況から刳抜式が後出することは明らかである。22号墳の木棺は長さ3.3ｍの長大なもので、船底状の棺を直葬する粘土槨構造の主体部が確認できた。粘土槨構造の主体部は、近隣では邑南町下川原１号墳[7]や出雲市浅柄Ⅱ遺跡[8]が知られる。浅柄Ⅱ遺跡の古墳は小谷Ⅲ～Ⅳ期に比定されており、22号墳に先行する。新しい要素の木棺がどのような要因・経路のもと石東地域沿岸部に導入されたかを探る上で興味深い。

箱式石棺は、Ａ群をはじめＣ群、Ｅ～Ｉ群にかけて幅広く採用されており、当古墳群の主体施設となるものである。石材や構造は凝灰岩製の切石を組み合わせたものと、流紋岩製の割石を組み合わせたものに区別できる。後者は北側・南側丘陵部の先端や縁辺部に立地し、蓋石の上に礫を積み上げることで共通しており、状況から終末期の単葬墓と考えられるものである。前者は１Ｂ号墳や４号墳にみられるような、板石を研磨調整で薄く仕上げ、それを精巧に隙間なく接いでＨ型もしくはⅡ型に組み合わせたものが最古級と考えられる。ところがＡ群でも15号墳の石棺は板石の規格や厚さが不揃いになる傾向が認められ、５号墳ではさらに組み方の退化傾向が顕著になる。また５号墳や10号墳、20号墳は底板が礫敷きに変化し、16号墳、18号墳では底材が失われるなど、築造を重ねるごとに省略化・簡略化が進む傾向がうかがえるといえよう。

また棺内礫敷き構造の石棺は奥才墳群で多数検出されている[9]。奥才古墳群の埋葬施設をみると、前期初頭は刳抜式木棺が採用され、続いて前葉～中葉にかけて精美な箱式石棺が礫床とともに出現、さらに後葉から中期初頭にかけて奥才型木棺と称される礫敷きの長大な箱式木棺が登場するという変遷が示されている。棺構造は異なるが、木棺が先行し、石棺が後続するという変遷は当古墳群と共通しており、礫敷きや精美に加工された石棺の起源を探る上でも非常に興味深いといえる。

４．庵寺古墳群の変遷（第195図）

以上のように、出土土器や副葬品、埋葬施設の様相から古墳の変遷をまとめてみたい。出土土器の比較から、北側丘陵部のＢ群から築造が開始されたと考えられる。最古は尾根上平坦面の先端に位置する９号墳で前期中葉に比定される。立地状況から、後葉にかけて９号墳→８号墳→７号墳の順に築かれたと考えられる。続いて前期後葉にＡ群で築造が始まり、石棺の構造変化や規模、立地からみて１Ｂ号墳を盟主的墳墓とし、尾根筋に４号墳→15号墳→５号墳→６号墳と築造が前期末からおそらく中期にかけて続いたと考えられる。これに後続するのがＣ群で、箱式石棺を主体とする古墳の築造が継続したとみられる。

一方、前期末から中期にかけて西側丘陵部や南側丘陵部にも墓域が移り、Ｆ群とＧ群で箱式石棺と滑石製臼玉を副葬する古墳が築かれたとみられる。これに後続するのがＨ群で、中期中葉に22号墳が新しい要素として刳抜式木棺を採用し築造され、23号墳は22号墳の墳丘を大きく切っていることから、22号墳の追葬的な意味合いを持ってさほど間を置かずに築かれたのではないだろうか。

これに後続する古墳は丘陵上で認められず、中期後葉以降は古墳の築造が停止したか、もしくは他の丘陵に墓域が移った可能性がある。そして後期後葉に至り、再び北側丘陵の最頂部に横穴式石室をもつ１Ａ号墳が築造されるに至ったと考えられ、この時期には１Ａ号墳のみが丘陵頂部にいわば象徴的に単独で君臨していた様子がうかがえよう。その後は、１Ａ号墳で墓域祭祀が奈良期まで継続するとともに、丘陵先端部に流紋岩製の割石積みの石棺をもつＥ群やＩ群が単発的に築かれた

と推測することができる。

５．庵寺古墳群の位置付け

最後に、庵寺古墳群の特徴をまとめ、石東地域における位置付けと評価を行いたい。

庵寺古墳群は、前期中葉に築造が始まり、中期中葉頃まで継続的な築造がうかがえ、一端途絶えた後、後期後葉に単独的に築造が再開し、以後終末期から奈良期にかけて祭祀が継続する様子が復元できた。盛土で墳丘を造成し規模が 10 ｍを超えるものは各群で１基程度認められ（１Ｂ号・８号・９号・20 号・22 号墳）、盟主的な墳墓が存在したとみられるが、総じて小型の方墳が多い。副葬品は玉類や鉄器を中心に少量が納められ、埋葬施設は組み合わせ式木棺から箱式石棺、後に刳抜式木棺が加わるといった様相が認められる。いわば、前期から中期にかけて小型古墳が尾根筋に群集し古墳群を形成した様子が浮き彫りになったといえるだろう。

また外表施設として埴輪や葺石の類いは欠落し、意図的に完形鏡を割り鉄器を折り曲げ副葬するといった行為を行い、さらに鼓形器台を土器枕に転用し、石棺内に礫敷きをするといった特徴は、島根半島沿岸部から伯耆、因幡、丹後地域にかけての小型古墳からなる古墳群と共通しており[10]、こういった地域との恒常的・継続的な交流の中で庵寺古墳群が築かれたと考えられる。一方、前方後円形の墳丘を指向し、三角縁神獣鏡をはじめとする多量の副葬品を納めるといった畿内との直接的な影響は認められず、墓上での土器や標石の供献行為といったことも含め、在地的要素が極めて高いのも特徴的といえる[11]。

この他、庵寺古墳群は首長墳かという問題もある。通常、首長墳と称される古墳は、総じて規模が大きく、立地や墳丘形態が他と隔絶された古墳と位置付けられるだろう。この点に関し、周辺地域での発掘事例に乏しい現状では結論を出すことはできないが、現時点では、その様相から庵寺古墳群は仁万平野一帯を中心とした村落共同体内の有力世帯家長及びその親族の墓とするのが妥当と考えられよう（なお、後期後葉の１Ａ号墳は首長墳もしくはそれに準ずる階層の墓と称することは可能であろう）。

仁万平野周辺では庵寺古墳群と同時期の古墳が平野部南側丘陵上の安養寺古墳群で確認されており、凝灰岩を加工した箱式石棺を採用することや土器棺墓の存在など共通点が多い[12]。庵寺古墳群と安養寺古墳群の間には平野部に突き出た丘陵がいくつも広がっている。この平野部を見下ろす丘陵上に未発見の古墳群があり、その中に首長墳も存在する可能性が見えてきたといえるのではないだろうか。

おわりに

以上のように、庵寺古墳群の評価を稚拙ではあるが簡潔に論じてみた。印象的には、今回の発掘により、仁万平野一帯の歴史像の全貌を解明する作業が、ようやく緒についた感がある。言い換えれば、これまで平野部に点在していた同時期の遺跡を庵寺古墳群の弥生集落や古墳群に繋げることが可能となり、これらの遺跡の価値や評価が改めて見直され始めたというべきだろう。より具体的に言えば、庵寺古墳群の築造時期と同時期の土器が出土した遺跡は清石遺跡[13]などいくつか知られており、古墳に埋葬された人物の集落が平野部の北側丘陵裾にあったことも想定されてくる。

今後、平野部や北側丘陵裾部の発掘調査が進み、仁万平野周辺地域の歴史像がますます明らかになっていくことを期待したい。

第 10 表　庵寺古墳群の古墳一覧

No.	立地	群	古墳名	墳丘	規模	標石	主体部			
							名称	規模	埋葬施設	主軸
1	北側丘陵	A	1 A号墳	円墳	径 15 m		石室	石室：全長 5.5 m・最大幅 2.5 m	横穴式石室	N－23°－W
2	北側丘陵	A	1 B号墳	方墳か	一辺 12m		第 1 主体部	墓壙：2.4 × 1.8 m（2 段堀）	箱式石棺（凝灰岩製）	N－80°－E
							第 2 主体部		箱式石棺か	N－71°－E
							第 3 主体部		木棺か	N－73°－E
							土器棺墓	墓壙：1.3 × 1.1 m	土器棺	N－104°－E
3	北側丘陵	A	4 号墳	方墳	8.5 × 6 m		1 号石棺	墓壙：3 × 2.8 m	箱式石棺（凝灰岩製）	N－37°－W
							2 号石棺		箱式石棺（凝灰岩製）	N－39°－W
4	北側丘陵	A	15 号墳	方墳	一辺約 5 m			墓壙：3 × 1.7 m（2 段堀）	箱式石棺（凝灰岩製）	N－39°－E
5	北側丘陵	A	5 号墳	方墳	一辺約 5 m			墓壙：2.4 × 1.7 m（2 段堀）	箱式石棺（凝灰岩製）、礫敷き	N－28°－E
6	北側丘陵	A	6 号墳	方墳	一辺約 5 m			墓壙：1.7 × 0.6 m		N－2°－W
7	北側丘陵	B	7 号墳	方墳	一辺約 8 m			墓壙：3.3 × 1.2 m	組合式木棺	N－24°－W
8	北側丘陵	B	8 号墳	方墳	9 × 10 m	有	第 1 主体部	墓壙：3 × 1.1 m	組合式木棺	N－30°－E
							第 2 主体部	墓壙：3.2 × 1.2 m	組合式木棺	N－28°－E
9	北側丘陵	B	9 号墳	方墳	9 × 10 m	有	第 1 主体部	墓壙：3.5 × 1.3 m	組合式木棺	N－40°－E
							第 2 主体部	墓壙：2.6 × 0.9 m	組合式木棺	N－40°－E
							第 3 主体部	墓壙：1.1 × 0.6 m	土器棺	N－29°－E
10	北側丘陵	B	19 号墳					墓壙：1.1 × 0,5 m	石蓋土坑（流紋岩製）	N－35°－E
11	北側丘陵	C	10 号墳	方墳	一辺約 7 m	有	第 1 主体部	墓壙：2.3 × 0.9 m	箱式石棺（凝灰岩製）、礫敷き？	N－48°－W
							第 2 主体部	墓壙：1.8 × 0.4 m	組合式木棺か	N－22°－E
12	北側丘陵	C	18 号墳	方墳	一辺約 7.5 m		第 1 主体部	墓壙：2 × 1.2 m（2 段堀）	箱式石棺（凝灰岩製）	N－83°－E
							第 2 主体部	墓壙：1.7 × 0.8 m（2 段堀）	石蓋土壙	N－78°－E
13	北側丘陵	D	11 号墳				ＳＸ０１	墓壙：2.1 × 0.5 m	土坑墓か	N－37°－W
14	北側丘陵	D	12 号墳				ＳＸ０２	墓壙：1.7 × 0.2 m	土坑墓か	W－3°－S
15	北側丘陵	E	13 号墳	円墳か				墓壙：2.4 × 1.5 m	箱式石棺（流紋岩製）	N－50°－W
16	北側丘陵	E	14 号墳					墓壙：1.8 × 0.8 m	箱式石棺（流紋岩製）	N－14°－E
17	西側丘陵	F	16 号墳	方墳	一辺約 4 m			墓壙：2 × 1 m	箱式石棺（凝灰岩製）	E－6°－N
18	西側丘陵	F	17 号墳					墓壙：2.3 × 0.5 m	刳抜木棺か	N－72°－E
19	南側丘陵	G	20 号墳	円墳か	径 12 m？	有		墓壙：3 × 2.1 m	箱式石棺（凝灰岩製）、礫敷き	W－25°－N
20	南側丘陵	G	21 号墳	円墳か	径 6 m？			墓壙：1.9 × 0.7 m（2 段堀）		W－17°－N
21	南側丘陵	H	22 号墳	方墳	8 × 11 m	有	第 1 主体部	墓壙：4.5 × 2 m	刳抜木棺（長さ 3.3 m）	N－55°－E
							第 2 主体部	墓壙：0.9 × 0.6 m	箱式石棺（凝灰岩製）	W－7°－S
22	南側丘陵	H	23 号墳	円墳	径約 6 m	有		墓壙：1.6 × 1.1 m	箱式石棺（凝灰岩製）	E－12°－N
23	南側丘陵	H	24 号墳					墓壙：幅 1 m	刳抜木棺か	
24	南側丘陵	I	25 号墳	円墳か	径約 6 m			墓壙：2.3 × 0.8 m	箱式石棺（流紋岩製）	N－34°－W

副葬品	出土土器型式	時期	備考	古墳名
玉類（碧玉製管玉、ガラス小玉、土玉）、耳環、大刀、刀子、鉄鏃、須恵器	石見４期（ＴＫ 43）	後期後葉	1B 号墳を破壊して築造される。	１Ａ号墳
八禽鏡１、碧玉製管玉１				１Ｂ号墳
鉄剣１			1A 号墳により破壊される	
			1A 号墳により破壊される	
	小谷４式	前期後葉～末	墳丘外に位置する	
			同一墓壙内に２基の石棺が並列する	４号墳
土器枕（鼓型器台）	小谷４式	前期後葉～末		
ガラス小玉１、刀子２（棺内 1、棺外 1）			石棺内で水銀朱を検出、ガラス小玉の材質はカリガラス	15 号墳
ガラス小玉１、刀子１			ガラス小玉の材質はソーダ石灰ガラス	５号墳
				６号墳
				７号墳
鉄鎌１、ヤリガンナ１（棺外）	小谷４式	前期後葉	土器片（鼓型器台）は７号と８号の間の区画溝から出土	８号墳
鉄鏃１				
鉄剣１		前期中葉	当古墳群の中で最古の古墳。第１主体部では水銀朱を検出。	９号墳
	小谷３式			
				19 号墳
	松山Ⅱ期	中期前半	９号墳の墳端を削平して築造される。第１主体部は盗掘を受けている	10 号墳
			９号墳の墳端を削平して築造される	18 号墳
				11 号墳
				12 号墳
刀子１				13 号墳
				14 号墳
				16 号墳
滑石製臼玉 12		前期末～中期前半		17 号墳
滑石製臼玉３、緑色凝灰岩製管玉１		前期末～中期前半	盗掘を受けている。	20 号墳
				21 号墳
刀子１	松山Ⅲ～Ⅳ期	中期中葉		22 号墳
			墳丘外に位置する	
刀子１（棺外）、滑石製勾玉１（墓壙外）		中期中葉か	22 号墳の墳端を削平して築造される	23 号墳
			調査区壁面で主体部を確認	24 号墳
				25 号墳

第６章第３節　註

(1)　土器の時期については、島根県埋蔵文化財調査センターの松山智弘氏のご教示を得た。

(2)　この他、９号墳では土器棺墓が墳頂部に築かれるのに対し、１Ｂ号墳では墳丘外に築かれるという相違もみられる。

(3)　三宅博士 1986「山陰地方出土刀子に関する覚書」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会

(4)　池淵俊一 2002「第６節　神原神社古墳出土鑿頭式鉄鏃に関する試論」『神原神社古墳』島根県加茂町教育委員会

(5)　鉄器の折り曲げ副葬行為例は、日本海沿岸部や瀬戸内沿岸部など西日本を中心に約 150 点に及ぶ。
田中謙 2006「瀬戸内における折り曲げ鉄器副葬と地域間関係」『日本考古学協会 2006 年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会 2006 年度愛媛大会実行委員会

(6)　大賀克彦 2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ小羽山古墳群』

(7)　下川原１号墳の時期は明確でないが、刳抜式木棺を採用する他、鉄刀の折り曲げ副葬や滑石製品の埋葬行為（2 号墳）など当古墳群の事例と共通点が多いことがうかがえる（石見町 1994）

(8)　島根県教育委員会 2005『浅柄Ⅱ遺跡』

(9)　鹿島町教育委員会 1985『奥才古墳群』
鹿島町教育委員会 2002『奥才古墳群第８支群－県道御津東生馬線改良工事に伴う調査－』

(10) 棺内礫敷き石棺は、日本海沿岸部や瀬戸内沿岸部、中国地方山間部で広く認められ、およそ 130 例に及ぶ。土器枕は、因幡地域を中心に日本海沿岸部や中国地方山間部でおよそ 143 例におよぶ
仁木聡 2011「古墳時代前半期における本州島西部の枕について」『古代出雲の多面的交流の研究』島根県古代文化センター

(11) 庵寺古墳群の様相については、平成 25 年 11 月 16 日に大田市仁摩町で行った平成 25 年度島根県埋蔵文化財調査センター講演会『庵寺古墳群と日本海交流－石見東部の古墳時代前期－』において、岩本崇氏（島根大学）をはじめとする赤澤秀則氏（松江市教育委員会）、東方仁史氏（鳥取県立博物館）、三宅博士氏（松江市立出雲玉作資料館）の発表内容やパネルディスカッションでの発言に大きな示唆を得た。
島根県埋蔵文化財調査センター 2013『庵寺古墳群と日本海交流－石見東部と古墳時代前期－　平成 25 年度島根県埋蔵文化財調査センター講演会発表資料』

(12) 仁摩町教育委員会 1989『仁摩健康公園造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』

(13) 仁摩町教育委員会 1998『清石遺跡外発掘調査報告書』

参考文献

池淵俊一 2006「山陰における前期古墳の様相と課題－出雲を中心に－」『日本考古学協会 2006 年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会 2006 年度愛媛大会実行委員会

池淵俊一 2007「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター

石見町教育委員会 1994『石見町文化財調査報告書第７集　中山古墳群－平成５年度実態調査概要報告書－』

岩本崇 2003「棺内礫敷をもつ組合式箱形木棺」『大手前大学史学研究所紀要』第３号　大手前大学史学研究所

岩本崇・角田徳幸 2012「山陰」『古墳時代研究の現状と課題　上』同成社

岩本崇 2013「日本海沿岸部における古墳の出現・展開と石見地域」『庵寺古墳群と日本海交流　平成 25 年度島根県埋蔵文化財調査センター講演会発表資料』

大賀克彦 2008「成塚向山１号墳の玉類」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 426 集』

大賀克彦 2009「第２章　山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究Ⅲ』島根県古代文化センター

大賀克彦 2013「２ 玉と石製品の型式学的研究 ①玉類」『古墳時代の考古学４ 副葬品の型式と編年』同成社

大谷晃二 2011「三　山陰」『講座日本の考古学７　古墳時代 (上)』青木書店

島根県教育委員会 2000「『社日古墳」『一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』12

松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』第８集　島根考古学会

松山智弘 2000「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」第 18 図２『島根考古学会誌』第 17 集

松山智弘 2002a「第４節神原神社古墳埋納坑出土の土器について」『神原神社古墳』島根県加茂町教育委員会

松山智弘 2002b「土器から見た出雲における前期古墳」『山陰の前期古墳』第 30 回山陰考古学研究集会資料集

第 194 図土器実測図の掲載文献

出雲市教育委員会 1989「山地古墳の壷棺」『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第２集　図 11

島根県教育委員会 1987「Ⅶ神田遺跡」101 図 60『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵発掘調査報告書』

島根県教育委員会 1988『島根県消防学校建設に伴う大角山遺跡発掘調査報告書』第 13 図 10

島根県教育委員会 1989『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵発掘調査報告書Ⅵ（夫敷遺跡）』28 図 10

島根県教育委員会 1997『塩津山古墳群』第 23 図２

島根県教育委員会 2003『古志本郷遺跡Ⅵ－Ｋ区の調査－』第 139 図１

島根県教育委員会 2010『梨ノ木坂遺跡・庵寺古墳群・庵寺遺跡Ⅱ』第 33 図１・2、35 図１

松江市教育委員会・(財) 松江教育文化振興事業団 1994『釜代１号墳外発掘調査報告書１』第 12 図１

松山智弘 2000「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」第 18 図２『島根考古学会誌』第 17 集

第３節　大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡の石切場跡について

第４章で報告したように、両遺跡では福光石の採掘坑が検出され、加えて大迫ツリ遺跡では石工に関連するとみられる線刻群が検出された。ここでは採掘坑や線刻群の特徴をまとめ、その性格や地域性について触れてみたいと思う。

１．採掘坑について

両遺跡は大田市温泉津町福波の福光湾岸に面した同じ谷筋にあり、凝灰岩の岩盤層が存在する丘陵斜面から、大迫ツリ遺跡では３基、小釜野遺跡では２基、計５基の採掘坑を検出し調査を行った。

いずれも露天掘りの採掘が行われ、規模は大迫ツリ遺跡１号が最大で幅約８ｍ×奥行き５ｍ、他は幅３ｍ×奥行き 2.5m 前後であり（小釜野遺跡２号は幅約５ｍ）、全体的にみれば中小規模といえるだろう。坑内にはツルハシ状工具やクサビ状工具により石を切り出した痕跡が明瞭に残っており、「溝切り技法」により主に箱型の石材を採掘していたと考えられる。

残された痕跡から採掘の工程を復元すると、まず必要な石材の規格に応じ、周囲にツルハシ状工具で溝を掘る。溝の深さを石の厚さに揃え、今度は手前からクサビ状工具を打ち込み石を切り離す、という工程が考えられる。また小釜野遺跡１号で明瞭にみられたように、切り離す際には先の尖ったツルハシ状工具、もしくはノミ状も用いられたようである。この技法は出雲市上塩冶町で調査された大井谷石切場跡 (1) と共通しており、両遺跡の採掘法は「軟岩系石切り技法」の特徴をもつものといえる。

なお、切り出された石材の寸法は、大迫ツリ１号にみられた円形材のものを除けば、概ね一辺 40cm 前後の立方形のものと幅 100 ～ 110cm ×奥行き 30 ～ 40cm の直方形のものに分類でき、加工品や建築用材など用途に応じた規格の存在があったことをうかがわせる。

この他、採掘坑の上方から側面にかけて排水用の溝を巡らすこと（大迫ツリ１号、小釜野１号・２号）、採掘坑の周囲に作業用の足掛かりとみられる円形の窪みを配置すること（大迫ツリ１～３号・小釜野１号）も両遺跡で共有している。出土遺物は大迫ツリ１号で肥前系陶磁器（広東碗）の破片が出土したのみだが、以上のような採掘坑の規模、採掘技法、石材の寸法、採掘坑周辺に付属施設を配置することなど共通の特徴から、両遺跡の採掘坑は少なくとも 19 世紀前半の江戸時代後期には操業していたと考えられるだろう。

２．線刻画群について

大迫ツリ遺跡では、３基の採掘坑の他、同じ斜面の岩盤から相当数の線刻画群が検出された。これまでに周辺の石切場遺構でこのような線刻画が認められた例はなく、特異な印象を受けるが、状況から両者の関連性は高いものと考えられる。

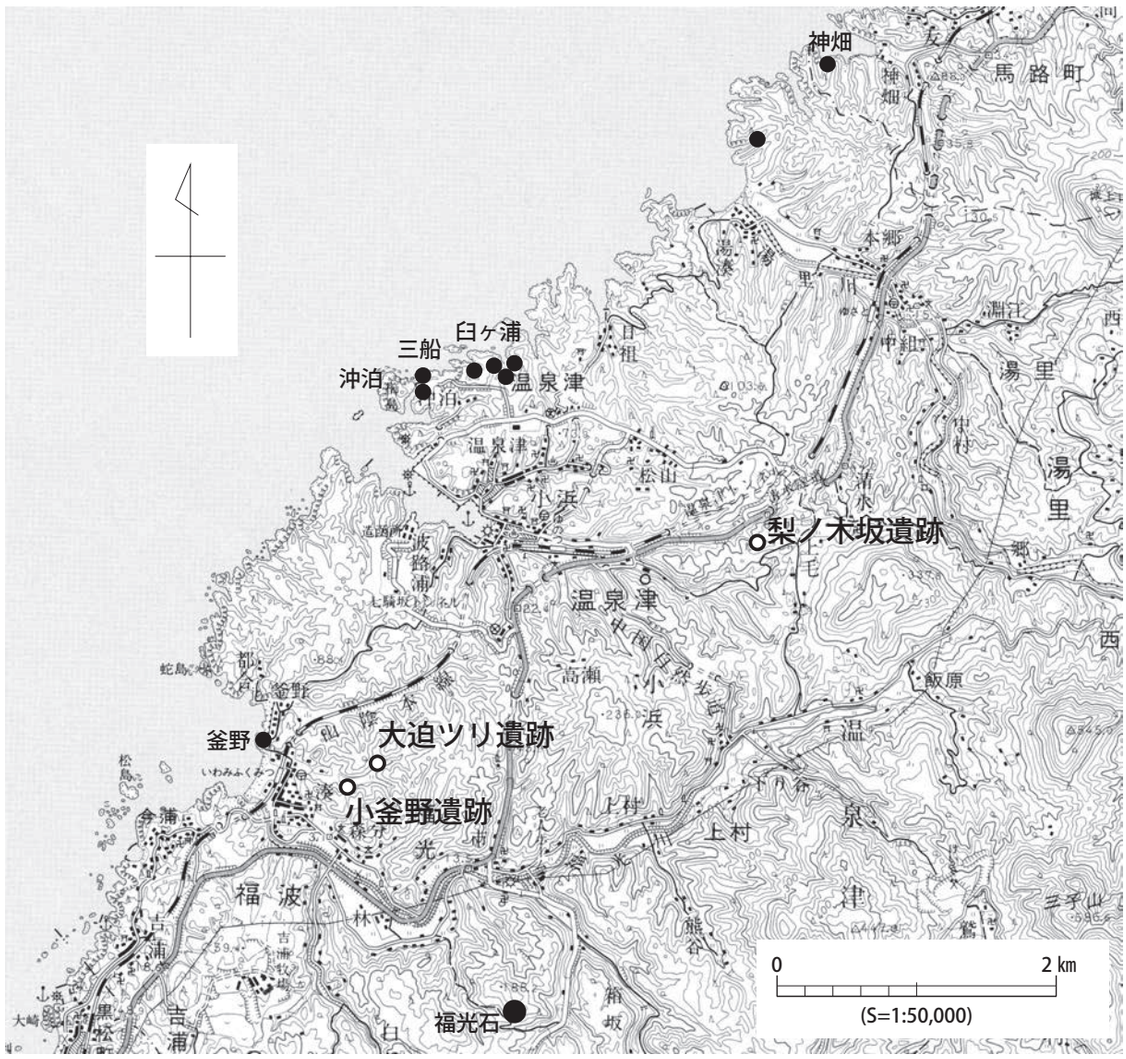
解読できた線刻はおよそ 80 点に及び、人名や地名の他、屋号とみられる略号、顔や座仏像など多種多様に富む特徴がある。中でも注目しておきたいのは屋号であり、これが石切り操業に伴い石工名を表した可能性があることである。詳細は本章第４節に譲りたいが、当時の石工集団を扱った文献史料には線刻にみられる屋号と共通するものがあり、石切場との関連性を強く裏付けるものと考えられる。そうであるならば、座仏像などの表現は石工集団の祭祀や信仰にかかわる可能性もあり、その性格やなぜこのような行為が行われたかについては、周辺地域の類例調査も含め今後の調

査の進展を待って判断したい。

3．まとめ

両遺跡が存在する福波地区は古くから石材の切り出しや加工が盛んで、現在も「福光石」の採掘操業が行われるなど地域を代表する地場産業として知られている。周辺地域でいつから石材の採掘・加工が行われるようになったかは定かでないが、少なくとも中世末（16 世紀後半）には切り出し・加工が行われていたのではないかと考えられている[(2)]。しかしながら、これまでに公表された石切場跡は沿岸部を中心に 10 例程度にすぎない[(3)]。加えて発掘調査が行われた採掘坑は他に温泉津町小浜地区の梨ノ木坂遺跡のみであり[(4)]、当地域における石工産業の実態が明らかになっているとは言い難い状況にある。周辺にはまだかなりの数の採掘坑が存在することは疑いなく、また採掘技術は出雲部において、出雲市大井谷地区や松江市宍道町の来待地区、安来市荒島地区などで広く用いられる軟岩系石切り技法と共通しており、当地域との関連性も注目されるところである。また線刻画群は、当時の石工集団の動向を把握する上で注目すべき事例となった。

両遺跡の調査成果は、近世における石工産業の実態を探る上で貴重な資料を提供したと思われる。



※鳥谷 2005 掲載図を加筆・修正

第 196 図　福光および周辺地域の石切場跡位置図

第６章第３節　註

(1)　島根県教育委員会 1997『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　大井谷石切場跡・上塩冶横穴墓群第 14 支群・上塩冶横穴部群第 15 支群・上塩冶横穴部群第 16 支群』

(2)　温泉津町誌編さん委員会編 1994『温泉津町誌』上巻

(3)　鳥谷芳雄 2005「沖泊・鞆ヶ浦における繁留遺構 付 沖泊の石切場跡他調査報告」『石見銀山街道　鞆ヶ浦・沖泊集落調査報告』島根県教育委員会

(4)　梨ノ木坂遺跡の石切場跡については、操業時期や採掘技術などの詳細なデータが示されていないが、採掘坑の壁面に残る綾杉状の工具痕や、溝に沿って方形の石材が切り出された状況は、当遺跡の石切り技法と共通するものと思われる。
島根県教育委員会 2010『一般国道９号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　梨ノ木坂遺跡・庵寺古墳群・庵寺遺跡Ⅱ』

参考文献

島根県教育委員会 2003『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 XV　権現山城跡・権現山石切場跡・白石谷遺跡・三田谷Ⅰ遺跡』

島根県教育委員会 1998『中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１　来待石石切場遺跡群』

第４節　石見東部における近世石工について－石見銀山領に関連して－

はじめに

本報告書掲載の大迫ツリ遺跡と小釜野遺跡は、石見地方東部の大田市温泉津町福波字釜野に所在し、今回の発掘調査によって凝灰岩を採掘した石切場跡と確認された[(1)]。両遺跡は日本海沿岸にほど近い同じ谷筋にあり、双方間は 220 mほどで近い距離にある。ここでは石切の規模やその手法などが把握された他、遺構に伴って遺物も検出されたことで、稼働年代についても有益な情報がもたらされた。基本、両遺跡はほぼ同じ性格、同じ時代のものと考えられる。

両遺跡を簡単にまとめると、①遺構は軟岩系石切りの痕跡を明瞭にとどめるものである、②規模は最大でも幅８ｍ×奥行き６ｍを越えず小規模である、③切り出された石材は円形のもの（円筒材）も含むが、基本、方形のもの（直方材）である、④僅かながら広東碗の破片が出土していて、少なくとも 19 世紀前半の所産と推定される、といった点が重要であろう。

加えて大迫ツリ遺跡の調査では、⑤遺構周囲の岩盤に「上田」「山口」「中」「吉」などの刻字が認められた。これらの文字は本石切操業に伴い石工名（屋号）を刻んだ可能性がある。本稿はこの点にも言及するが、主たる目的は石見銀山代官の支配が及んだ当地域における近世石工の動向について文献史料から述べることにある。それというのも当地域は、福光石の産地として知られてはいても、石工業が地域全体としてどうであったのか、これまで触れられることがほとんどなかったように思うからである[(2)]。

１．当地域の石工人数や刻字との関係

江戸時代、この地域にどれだけの石工がいたか、文献史料により確認してみたい（別表参照）。およそ 19 世紀前半の当地域の、特に福光における石工集団の実態が知れるものに、以前から取り上げている２つの史料がある[(3)]。１つは寛政 12 年（1800）の「受取申水役銀之事」（重富家文書、史料 1）[(4)] であり、福光下村に 21 人の名がみえる。もう１つは天保 11 年（1840）の「相渡申石工人儀定書之事」（重富家文書、史料 2）[(5)] であり、福光本領９名、林村３名、下村 14 名と、合わせて 26 人の名が記されている。

また史料１からは当時、彼らに水役銀という業種税が課せられていたことや、史料２では６項目からなる石工約定が取り決められていたことが知られる。６項目とは①今後、福光石工の筋目は坪内・重田・山中の３姓に限ること、②この３姓は嫡子のためとはいっても、他から子を貰い別家してはならぬこと、③女子を多くもうけて、勝手に婿取りをし、分家しないこと、④弟子はこの石工筋以外からとってはならないこと、④他所の石工を入らせて手伝いを頼むようなことをしないこと、⑥石工の家筋を売買の対象にしないことであった。

史料２でもう１つ指摘しておきたいのが、本遺跡で確認された刻字資料との関係である。発掘調査では石を切り出した部分の周囲に、記号らしきものや仏坐像を思わせるものに加えて、文字と認識できるものがあった。これらはすべて解読できたわけではないが、中に「上田」「山口」「中」「吉」と読める文字があり、それは当石切場に伴う石工名に関連するものと推定された。これらは史料２にみえる「上田や」、「山口」「中や」「中祖」「吉舎屋」の屋号と共通するものがあり、略号として刻まれた可能性が高いと考える。なぜこのような行為が行われたのか明確にしがたいが、１つには

採石場の持分を示すことが目的ではなかったかと思われる。

次に上記以外の史料も幾つかみておくことにする。1つは寛政4年（1792）の「石州迩摩郡福光下村外三ケ村新規石工役取立伺」（高橋家文書、史料3）[6]であり、このころ福光下村に21人、同本領に12人、大森町に3人、温泉津町に3人、計39人の石工がいた。この史料は当時の石工業の中身やその存在形態、あるいは課税に関する情報が、史料1・2以上に具体的である。これについては興味深い記事なので、あとでもう一度触れてみたい。

年代が前後するが、当地域における石工数等は、村毎に書き上げられた明細帳からも拾うことができる[7]。例えば、享保5年（1720）の「石見国迩摩郡福光本領明細帳」（嘉戸家文書）には石切2人が、文政13年（1830）の「村差出明細書上帳／石州迩摩郡波積組／福光本領」には紋三郎ほか14人の石工名がみえる。また同年の「村差出明細書上帳／大森ニ而下書／石州迩摩郡温泉津村」には6人の名が載り、さらに文久元年（1861）の「（温泉津）村柄明細書上帳」には無記名ながら7人と記録される。それは銀山町でも確認でき、慶応3年（1867）の「田畑持高家数人別書上帳」（高橋家文書）に石工職2人の名がみえる。

2．当地域における近世石工の業種・業態・税負担

ここでは当地域の近世石工について、もう少し具体の様子をみたいと思う。

史料3に改めて注目すると、前半で大森代官所が支配する迩摩郡下の石工がどんな業種で、どういう業態をとっていたか述べたくだりがある。それによると、石工は百姓持山等の石性を見立て、相対で請山として石切を行い、石碑をはじめ炉、水流し類の細工ものから石垣、礎等の普請までを行い生業としていた。ただし、当時彼らはそのことばかりを職分としていたわけではなく、農業の間の稼ぎとしていたと記されている。彼らは採石山の見立てから、請負制による石材の切出し、製品加工から土木建築的な普請に至るまで行っていて、それが農閑期の稼ぎとなっていたと知られる。

しかし、同時にこの史料3は後半のくだりで、現状ではその稼ぎが相応になってきていると記し、そこで本文書が目的とある「新規石工役取立伺」に至るのである。後述することになったが、史料3は寛政4年（1792）、代官菅谷弥五郎から幕府勘定所に宛てて提出された伺い文書（写し）である。伺いの主旨は、迩摩郡下には先にみたとおり39人の石工がいて、今後は彼らを大工・木挽・桧皮師等と同じ扱いとし、1人につき判銀3匁9分1厘、丁銀仕立では4匁8分9厘ずつ、新規に「石工役」を納めさせるようにしたいというものであった。

これからも分かるように、この文書が出されるまでの彼らは、大工・木挽・桧皮師等とは異なる扱いを受けていて、「石工役」という負担はなかった。理由は前述したように、彼らの稼ぎは農閑期に限られ、専業的な石工職分とはみなされなかったからである。しかしながらここに至り、石工も外の職人同様に相応の稼ぎがあると吟味できたことから、以後取り立ての対象にするとしたのである。

もっとも文書中には、これまでのところで大工らの役銀取立て・役札をめぐって不具合な事態が生じていて、そのため税収が年々一定しないという状況が説明されてもいる。それは職人に対する当時の徴税システムが抱えていた課題を反映した政策的な措置であった可能性がある。この時点で石工から新規に取り立てることになった理由を、石工が置かれた状況にばかり求めることは適当でないと言える。

因みに、この時の新規取立の伺いが結果どうなったかである。成立は天保年間（1830 ～ 44）に下るものの、「石州大森銀山諸書物写」（生野書院所蔵文書）[8] の中にある、寛政 6 年（1794）3 月の菅谷弥五郎から大岡源右衛門に宛てた代官申送書である「銀山方演説書」に、「一、迩摩郡福光下村外三ケ村、新規石工役之儀、去々子年伺候処、御下知相済、同年ゟ役銀取立申候、委細之儀ハ伺之写ニ而御承知可被成候、」とある。去々子年とは寛政 4 年〈1792〉）のことであり、伺いどおりその年から取り立てられたようである。

石工への課税は「石工役」とは別に、「水役」と表現されるものにも含まれている。史料 1 がその例であり、他では先の「石州大森銀山諸書物写」中の、文政 10 年（1827）正月、代官大岡源右衛門が幕府勘定所に宛てた「申年組／石見国銀山附去ル申年諸運上銀御勘定組伺書」[9] にみえる。当史料はこの年の石州銀山ならびに銀山附村々の諸運上を書き上げた史料であり、「一判銀三貫四百目余　大工・木挽・檜皮師・石工　水役銀」とある。「水役銀」という名の運上の中に石工が含まれ、大工、木挽、檜皮師と同じに扱われている。

石工を含んだこの「水役（銀）」は、実は「銀山要集・銀山旧記」の中にある、安永 6 年（1777）の「代官川崎市之進取計伺」（島根県所蔵文書、史料 4）[10] に表れていて、すでに 18 世紀後半の段階で登場する。ここでは銀山役所の施設等の新規建替入用にあたり、御料村々の大工、木挽、桧皮師、石工に対し、「水役銀」を 1 人につき銀 5 匁ずつ取立てられている。

このように、石工への課税は、「石工役」、「水役」の 2 つの名称によって知られるが、「石工役」が寛政 4 年（1792）の新規取立とはいえ、「水役」はこれより 15 年ほど遡って確認され、両者はもともと内容を異にして成立したものではなかったかと考えられる。すなわち「水役」は修復入用に充てるために限定的に徴収されたもの、一方「石工役」はそれが限定されない一般的な運上として徴収されたものであったように思われる。

「水役」に関する史料には、さらに遡って元禄年間（1688 ～ 1704）かとされる「銀山古事覚書」（山中家文書、史料 5）[11] がある。この段階では水役の対象が大工と木挽であって、石工は含まれてはいない。したがって、この「水役」に石工を含むようになったのは、元禄年間の 1700 年前後から安永 6 年（1777）までの間であったと推定される。

「石工役」の額は、史料 3 には丁銀仕立で 4 匁 8 分 9 厘、判銀立で 3 匁 9 分 1 厘と定められている。ただし、石工は重荷を扱い骨折の業とみなされていたこともあって、若年と老年の者は配慮され、16 歳より 20 歳までは半役、15 歳以下と 60 歳以上は免役された。また、史料 1 の「水役」の額をみると、21 人中の 18 人が 5 匁、残る 3 人が 2 匁 5 分とあり、後者は半役の石工であったことが分かる。

おわりに

本稿は、大森代官所の支配が及んだ当地域の近世石工の様相を知ることを主な目的に、文献史料を用いて述べてきた。中でも史料 2 は彼らの所在、職能の範囲、業態の推移などがうかがえ貴重であったと思われる。

今回、本編の大迫ツリ遺跡と小釜野遺跡の両遺跡に直接関わっては、前者で確認された刻字をめぐる指摘－石工名（屋号）との関係性－にとどまった。ただ両遺跡の特徴については、冒頭で軟岩系石切技法 [12] が確認できる石切場跡であることを 1 番に挙げているので、最後にこの点に触れて

終わりとしたい。

当地域を俯瞰してみると、この技法を用いた石切場跡が比較的海岸部沿いを中心に広く帯状に分布し、1つの地域的特色をなしている。現在も採掘され続けている福光石（現福波大字福光）の、機械化以前の石切場跡はその代表的な例であり、以前発掘調査された温泉津町小浜の梨ノ木坂遺跡や[13]、測量成果が報告された温泉津町沖泊の櫛島付近の石切場跡もそうした例である[14]。規模の大小を問わなければ、当地域には相当数が確認できるのであり[15]、今後これらの実態を把握することで、この地域における石工業の歴史と文化がより明らかにできると考える。

（鳥谷芳雄　文化財課世界遺産室）

第6章第4節　註

(1)　島根県教育委員会 2014『一般国道9号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5　庵寺古墳群Ⅱ・大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡』（本書）

(2)　当地域の近世石工（業）史について書かれたものは『温泉津町誌』上巻 1994 の「福光石加工業」ぐらいであり、地域全体として記述したものは見当たらない。

(3)　拙稿 2005「石見銀山の石造物等にみる石工名」『石見銀山遺跡石造物調査報告5　分布調査と墓石調査の成果』島根県・大田市両教育委員会

(4)　温泉津町誌編纂委員会 1996『温泉津町誌』別巻（資料編）

(5)　前掲註 (4) に同じ。

(6)　以下6点の温泉津関係の明細帳はいずれも前掲註 (4) に載る。また大森町の書上帳は仲野義文『銀山社会の解明－近世石見銀山の経営と社会－』2009.3 を参考にした。

(7)　「銀山方留書」（高橋家文書）。小杉紗友美氏の教示による。

(8)　目次謙一外 2012『石見銀山歴史文献調査報告書Ⅶ－石州大森銀山諸書物写』島根県教育委員会

(9)　前掲註 (8) に同じ。

(10)　島根県 1965『新修島根県史　史料篇三　近世下』島根県

(11)　小林准士外 2012『石見銀山歴史文献調査報告書Ⅷ－銀山古事覚書』島根県教育委員会

(12)　軟岩系石切場跡およびその技法については、筆者編著 1997『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』および 2003『同発掘調査調査書ＸＶ』を参考にされたい。

(13)　島根県教育委員会 2010『一般国道9号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3　梨ノ木坂遺跡・庵寺古墳群・庵寺遺跡Ⅱ』

(14)　筆者 2005「沖泊・鞆ヶ浦における繋留遺構　付沖泊の石切場跡他調査報告」『石見銀山街道　鞆ヶ浦・沖泊集落調査報告』

(15)　筆者の踏査では両遺跡近くの海岸縁にも小規模なものがみられる（前掲註 (14) の拙稿の第6図を参照されたい）。また東部方面では波根東地区の田長・上川内で確認している

史料 1・「受取申水役銀之事」（寛政 12 年〈1800〉、重富家文書）

印］　受取申水役銀之事

印］一、丁銀五匁　福光下村　石工平七／　印］一、同　五匁　〃　伊平太／　印］一、同　五匁　〃　幾蔵／
印］一、同　五匁　〃　利兵衛／　印］一、同　五匁　〃　喜兵衛／　印］一、同　五匁　〃　嘉兵衛／
印］一、同　五匁　〃　平十郎／　印］一、同　五匁　〃　与平　／　印］一、同　五匁　〃　周助　／
印］一、同　五匁　〃　甚七　／　印］一、同　五匁　〃　庄兵衛／　印］一、同　五匁　〃　多兵衛／
印］一、同　五匁　〃　小兵衛／　印］一、同　五匁　〃　藤吉　／　印］一、同　五匁　〃　多三郎／
印］一、同　五匁　〃　十五郎／　印］一、同　五匁　〃　磯十郎／　印］一、同　弐匁五分　〃　常吉／
印］一、同　五匁　〃　富五郎／　印］一、同　弐匁五分　〃　栄蔵／印］一、同　弐匁五分　〃　喜代蔵
〆、九拾七匁五分

右者当申水役銀上納受取申所如件

寛政十二申年十二月

大賀覚兵衛印／野沢甚四郎印／田辺金右衛門印／福本乙兵衛印

史料 2・「相渡申石工人儀定書之事」（天保 11 年〈1840〉、重富家文書）

相渡申石工人儀（ママ）定書之事

一、往後ゟ福光石工人筋目ハ、坪内・重田・山中三姓ゟ外一向石工人致間敷候事
一、右姓雖為嫡子、末子ハ兎も角も、他家の子貰ひ別家致間敷事
一、末女数多持、勝手ニ聟ヲ取、分家致間敷候事
一、弟子ハ石工筋ゟ外一向取間敷事
一、他所ノ石工人入手伝頼間敷事
一、石工家筋売買ニ致間敷事

右之趣堅相守候、万一約定を洩シ候もの有之候ハバ、如何様の被致〆（しめく）苦ニ候共、一向申紛無御座候、従連中御存分ニ可被成候、連中ハ承知之上一札認致連印、双方江取替し置き申所、仍而如件

天保拾壱年

庚子四月日／

本領山口　市右衛門㊞／　同所　春木屋　小兵衛㊞／　同所二郎田　忠兵衛㊞／
同所竹や　磯平㊞／　同所まつや　恒八㊞／　同所中や　紋三郎㊞／　同所小坂や
惣七㊞／　同所谷口や　岡平㊞／　同所　鶴吉㊞／　林村古やしき　多吉㊞／
同所大和や　林平㊞／　同所上田や　又兵衛㊞／　下村堂面　庄兵衛㊞／
同所春木屋　利兵衛㊞／　同所竹井屋　儀兵衛㊞／　同所蔵の段　力兵衛㊞／
同所増田屋　春吉㊞／　同所萩屋　半重郎㊞／　同所上假屋　浅吉㊞／
同所吉舎屋　久平㊞／　同所山根　角五郎㊞／　同所樫戈　勘兵衛㊞／
同所森脇　秀兵衛㊞／　同所中祖　善吉㊞／　同所中祖　政兵衛㊞／
下村下組や　ぬい㊞

右之趣一円同心之上者、御運上之人別相増シ候様ニ雖為末子御運上札請之儀隠し置き間敷候以上

天保十一庚子四月　日／

本領山口　市右衛門㊞／　同村二郎田　忠兵衛㊞／　同所春木屋　小兵衛㊞／
下村どうめん　庄兵衛㊞／　同所春木屋　利兵衛㊞／　同所樫戈　勘兵衛㊞

享保年中相改メ（※ 1）／寛政年中相改メ／此度（※ 2）

右之通り書弐本調へ

本領山口市右衛門方へ壱本預ケ置、壱本ハ下村堂面庄兵衛方へ預ケ置、此通り之扣へ、春木屋利兵衛方へ割印いたし預ケ置、名々扣へ置（※ 3）　　（※ 1 ～ 3 は文中から後段にかけて上段に書き込まれている）

史料 3・「石州迩摩郡福光下村外三ケ村新規石工役取立伺」（寛政 4 年〈1792〉、高橋家文書）

石州迩摩郡福光下村外三ケ村新規石工役取立伺　　菅谷弥五郎

覚

私御代官所石州迩摩郡福光下村・福光本領・
佐摩村・温泉津村

石工壱人役
此度相伺候

一、判銀三匁九分壱厘
此丁銀四匁八分九厘

内　拾五歳ゟ弐拾歳迄者半役

拾五歳ゟ以下、六拾歳ゟ以上者免役之積

右者私代官所石州迩摩郡村々石工共有之候処、役銀も不相納候ニ付、呼出糺候処、当時石工福光下村ニ弐拾壱人、同本領ニ拾弐人、佐摩村之大森町二三人、温泉津村ニ三人、都合三拾九人有之、百姓持山等之石性を見立、相対ニ而請山致し石切出し、石碑其外炉・水流し類之細工仕、勿論石垣礎等之普請をも仕渡世致し候得共、石工斗を職分ニいたし候而者無之、農業間之稼ニ而是迄役銀不相納候旨申之候、然ル処支配所内大工・木挽・桧皮師等、前々ゟ役銀壱人判銀三匁九分壱厘ツヽ銀山方役所江取立、役札渡置、新規弟子取致し、又者職分相止役札返納致し候類、増減者月割ニ役銀取立年々不同銀山方諸運上組仕上候儀ニ付、石工共も相応之稼致候上者、外職人同様役銀上納可致儀之旨吟味仕候処、以来役札申請人数増減者其度々相届、無札ニ而稼致候もの候ハヽ相糺請役為致候ハヽ、一体取締宜儀銘々株ニも罷成候間、外職人並之通壱人判銀三匁九分壱厘ツヽ役銀上納可仕、併重荷を取扱骨折候業故、若輩又者及老年候而者手伝致し候迄ニ而、捗々敷稼相成不申候間、弐拾壱歳ゟ六拾歳迄本役、拾六歳ゟ弐拾歳迄を半役と定、拾五歳以下六拾壱歳以上ハ免役申付有之候様いたし度段一同申之候、石工共稼近来之儀ニも不相聞候処、是迄役銀取立候儀も無之候間、再応相糺候処、右申立候趣も無余儀相聞候間、向後書面割合之通役銀上納為仕、人数増減者其度々吟味仕、月割ヲ以取立候様被仰付可然哉奉存候、然おゐてハ当子ゟ右役銀年々取立之灰吹銀ニ引替上納仕、其年々銀山附諸運上ニ組入御勘定元ニ組仕上候様御証文被下候、依之奉伺候、以上

寛政四子年月　　菅谷弥五郎

御勘定所

史料 4・「代官川崎市之進取計伺」（安永 6 年〈1777〉、「銀山要集・銀山旧記」部分）

（前略）、一、銀拾四貫目　　水役銀、

外銀壱貫六拾四匁三分参厘　酉年諸払ニ相除候分、是者銀山役所広間、玄関、門長屋、内外塀、御銀蔵、御中間長屋とも新規立替者、郡中割ニ而普請仕来候得共、右修復并御銀蔵外廻り高塀、橋々新規修復とも、并ニ正月松錺入用等者、水役銀と相唱へ、御料村々、大工、木挽、檜皮師、石工、右職業之もの、壱人ニ付銀五匁宛取立、前条品々入用ニ相渡候処、安永五申年迄書面之通、拾四貫目ニ外壱貫目余、酉諸渡方引当とも遣り余り有之ニ付、以後右拾四貫目居置、年壱割ニ貸附、前条諸入用ニ相渡、右大工其外職人共ゟ相納候水役銀者、年々取立、運上ニ組入上納仕候様、右酉年伺済ニ相成候

史料 5・「銀山古事覚書（部分）」（元禄年間〈1688 ～ 1704〉頃、山中家文書）

牢屋破損修復之事

一、牢屋修復入用郡中括銀ニ而小屋方役人見合申付候、大工・木挽者水役ニ而仕、（中略）、

作事諸入用之事

一、作事諸入用者、小屋方役人定置竹木縄等、郡中江致割符、大工・木挽者水役ニ而遣申候、

（中略）

一、大工木挽水役之事

是者銀山附村々ニ罷在候大工・木挽、古来ゟ壱人年中五日宛役目相勤、扶持米一日一人ニ米壱升宛相渡申候、此扶持米者臨時物之内ニ而相払、遣残者くり越ニ遣申候処、由比長兵衛支配ニ成、木工（ママ）・木挽年切ニ仕、其年遣残之分者一日を丁銀壱匁宛ニ定、小屋役人方江取立、此水役銀を以諸作事入用之節相払、残分者大工役与申、諸運上之内江結上納仕候

・・（中略）・・

一、石州銀山附　大工・木挽・鍛冶・紙漉　数之事

大工　八拾六人　　かち

木挽　七拾人　　紙すき

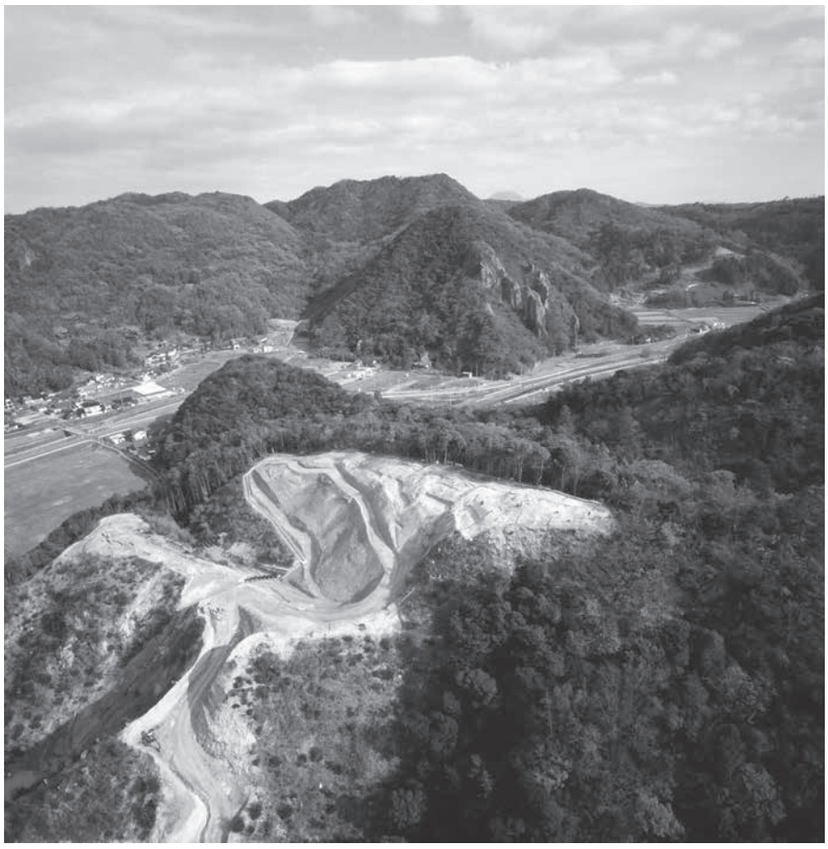
No.	年号	村名	石工数	石工名	記事内容	史料名	文献名
1	享保5年（1720）	福光本領	石切2人	—	「作間之稼仕候もの」として酒屋2人、木挽1人、漁師・塩焼50人、紺屋1人、小商人20人、石切2人とある。	享保5年12月福光本領明細帳（嘉戸家文書）	『温泉津町誌　別巻（資料編）』1996
2	寛政4年(1792)	福光下村・福光本領・佐摩村・温泉津村	福光下村21人、福光本領12人、佐摩村の内大森町3人、温泉津村3人の計39人	—	石工は今後、大工・木挽・檜皮師等の職人同様に、役銀上納すべきことを勘定所に伺う。役銀一人当たり基本は判銀3匁9分1厘（丁銀4匁8分9厘）ずつとする。	覚（石州邇摩郡福光下村外3ケ村新規石工役取立伺）（高橋家文書「銀山方留書」）	小杉紗友美氏の教示による。
3	（寛政6年〈1794〉）	（同上）	（同上）	—	「去々子年（＝寛政4年のこと）伺候処、御下知相済、同年右役銀取立申候」	石州大森銀山諸書物写（浅田家旧文書〈朝来市教育委員会〉）	『石見銀山歴史文献調査報告書Ⅶ』2012
4	寛政12年（1800）	福光村	石工21人	石工福光下村石工平七、同伊平太、同幾蔵、同利兵衛、同喜兵衛、同嘉兵衛、同平十郎、同与平、同周助、同甚七、同庄兵衛、同多兵衛、同小兵衛、同藤吉、同多三郎、同十五郎、同磯十郎、同常吉、同富五郎、同栄蔵、同喜代蔵	当年水役銀上納受取、丁銀5匁18人・同2匁5分3名、計97匁5分。	寛政12年12月福光村水役銀受取書（福富家文書）	『温泉津町誌　別巻（資料編）』1996
5	文政13年（1830）	福光本領	石工14人	石工紋三郎、貞平、友八、市右衛門、嘉惣次、忠兵衛、磯平、清八、貞兵衛、角右衛門、常八、順平、惣八、惣四郎	職人大工木挽石工合わせて23人。大工6人、木挽3人、石工14人。運上銀一人丁銀5匁ずつ銀山方役所へ上納。	文政13年7月福光本領村差出明細書上帳（面屋家文書）	『温泉津町誌　別巻（資料編）』1996
6	同年(1830)	温泉津村	石工6人	増十、甚平、常右衛門、忠兵衛、初五郎、豊兵衛	諸職人65人（鍛冶2・紺屋2・桶屋3・左官35・石工6・木挽6・大工11）のうち。石工の水役銀30目、ただし1人5匁ずつ上納。	文政13年7月温泉津村差出明細書上帳（木津屋文書）	『温泉津町誌　別巻（資料編）』1996
7	天保11年（1840）	福光村	石工26人	本領山口市右衛門、同所春木屋小兵衛、同所二郎田虫兵衛、同所竹や磯平、同まつや恒八、同所中や紋三郎、同所小坂や惣八、同所谷口や岡平、同所鶴吉、林村古やしき多吉、同所大和や林平、同所上田や又兵衛、下村堂面庄兵衛、同所春木屋利兵衛、同所竹井屋儀兵衛、同所蔵の段力兵衛、同所増田屋春吉、同所萩屋半重郎、同所上假屋浅吉、同所吉舎屋久平、同所山根角五郎、同所樫戈勘兵衛、同所森脇秀兵衛、同所中祖善吉、同所中祖政兵衛、下村下組やぬい	石工人議定之事。以前より福光石工人筋目坪内・重田･山中の3姓。連中一札連印し、取り交わす。	天保11年4月福光村石工人議定書（福富家文書）	『温泉津町誌　別巻（資料編）』1996
8	文久元年（1861）	温泉津村	石工7人	—	水役銀5匁ツヽ。大工8人（40匁）・木挽8人（40匁）・石工七人（35匁）。なお別に「其外小物成」の項で「一、判銀六匁八歩　　新規石切運上」の記載あり。	文久元年10月温泉津村柄明細書上帳（糀屋文書〈温泉津町〉）	『温泉津町誌　別巻（資料編）』1996
9	慶応3年（1867）	銀山町	石工職2	石工職次平、石工職磯吉	銀山町の家数312戸、人数807人のうち。	田畑持高家数人別書上帳（高橋家文書）	仲野義文『銀山社会の解明－近世石見銀山の経営と社会－』2009

第11表　近世文献史料にみる石見銀山周辺地域の石工数・石工名

写真図版

図版 1

庵寺古墳群遠景　空中撮影（北西から）



庵寺古墳群遠景　空中撮影（南西から）

図版 2

庵寺古墳群　遠景（北西から）

庵寺古墳群　調査前風景（南西から）

庵寺古墳群　北側丘陵部遠景（南から）

庵寺古墳群　南側丘陵部遠景　空中撮影（北から）

図版 4

庵寺古墳群　SI01 床面検出状況（北東から）

庵寺古墳群　SI01 完掘状況（北東から）

庵寺古墳群　SI02 セクション（北東から）

庵寺古墳群　SI02 完掘状況（東から）

図版 6

庵寺古墳群　加工段 1
（北西から）

庵寺古墳群　加工段 2
（北西から）

庵寺古墳群　加工段 3
（南西から）

庵寺古墳群　加工段 4
（南西から）

庵寺古墳群　加工段 5
遺物出土状況（南西から）

庵寺古墳群　加工段 5
完掘状況（北東から）

図版 8

庵寺古墳群　加工段 6
（西から）

庵寺古墳群　加工段 7
（西から）

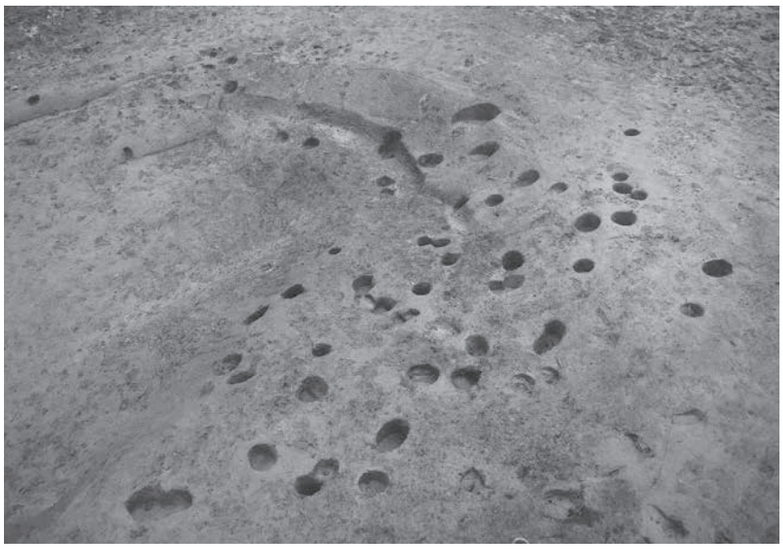
庵寺古墳群　加工段 8
（南西から）

庵寺古墳群　加工段 9
（南西から）

庵寺古墳群　加工段 10
（南西から）

庵寺古墳群　加工段 11
（南西から）

図版 10



庵寺古墳群　加工段 12
完掘状況（北から）

庵寺古墳群　加工段 13
（北西から）

庵寺古墳群　加工段 14
セクション（西から）

庵寺古墳群　加工段 14
完掘状況（東から）

庵寺古墳群　加工段 15
完掘状況（南西から）

庵寺古墳群　加工段 16
完掘状況（南西から）

図版 12

庵寺古墳群　加工段 17
遺物出土状況（西から）

庵寺古墳群　加工段 17
完掘状況（北東から）

庵寺古墳群　加工段 18
（西から）

庵寺古墳群　加工段 19
（北東から）

庵寺古墳群　加工段 20
（北東から）

庵寺古墳群　加工段 21
（南西から）

図版 14

庵寺古墳群　加工段 22
（北から）

庵寺古墳群　加工段 23
（北から）

庵寺古墳群　加工段 24
（北から）

庵寺古墳群　加工段 25
（北西から）

庵寺古墳群　加工段 26
（南西から）

庵寺古墳群　加工段 27
（北東から）

図版 16

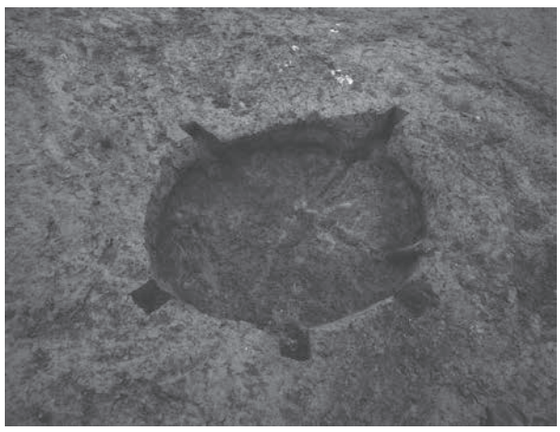
庵寺古墳群　加工段 28
（北から）

庵寺古墳群　加工段 29
（北から）

庵寺古墳群　加工段 31
（南西から）

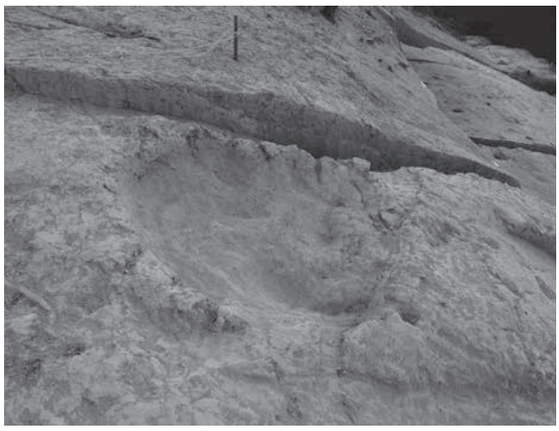
庵寺古墳群　南側丘陵加工段群遠景（南西から）

庵寺古墳群　SK01 完掘状況（西から）



庵寺古墳群　SK02 完掘状況（西から）

図版 18



庵寺古墳群　SK03 完掘状況（東から）

庵寺古墳群　SK04 完掘状況（北東から）

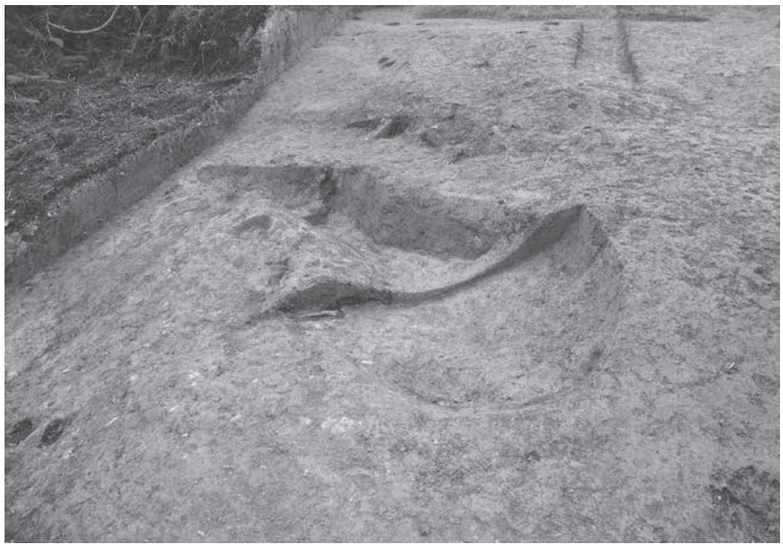
庵寺古墳群　SK06 セクション（北西から）

庵寺古墳群　SK07 須恵器出土状況（南から）

庵寺古墳群　SK08 セクション（南西から）

庵寺古墳群　SK09 セクション（南から）

庵寺古墳群　SD01
完掘状況（北西から）



庵寺古墳群　SD02
完掘状況（北東から）

庵寺古墳群　谷部
調査後遠景（南西から）

図版 20

庵寺古墳群　15 号・5 号墳遠景（南西から）

庵寺古墳群　15 号墳
主体部検出状況
（南西から）

庵寺古墳群　15 号墳
主体部内セクション
（南西から）

庵寺古墳群　15 号墳
石棺検出状況（南西から）

図版 22

庵寺古墳群　15 号墳
蓋石検出状況（南西から）

庵寺古墳群　15 号墳
石棺内完掘状況
（北東から）

庵寺古墳群　15 号墳石棺除去後（南西から）

庵寺古墳群　15 号墳主体部完掘状況（南西から）

図版 24

庵寺古墳群　5 号墳
全景（北東から）

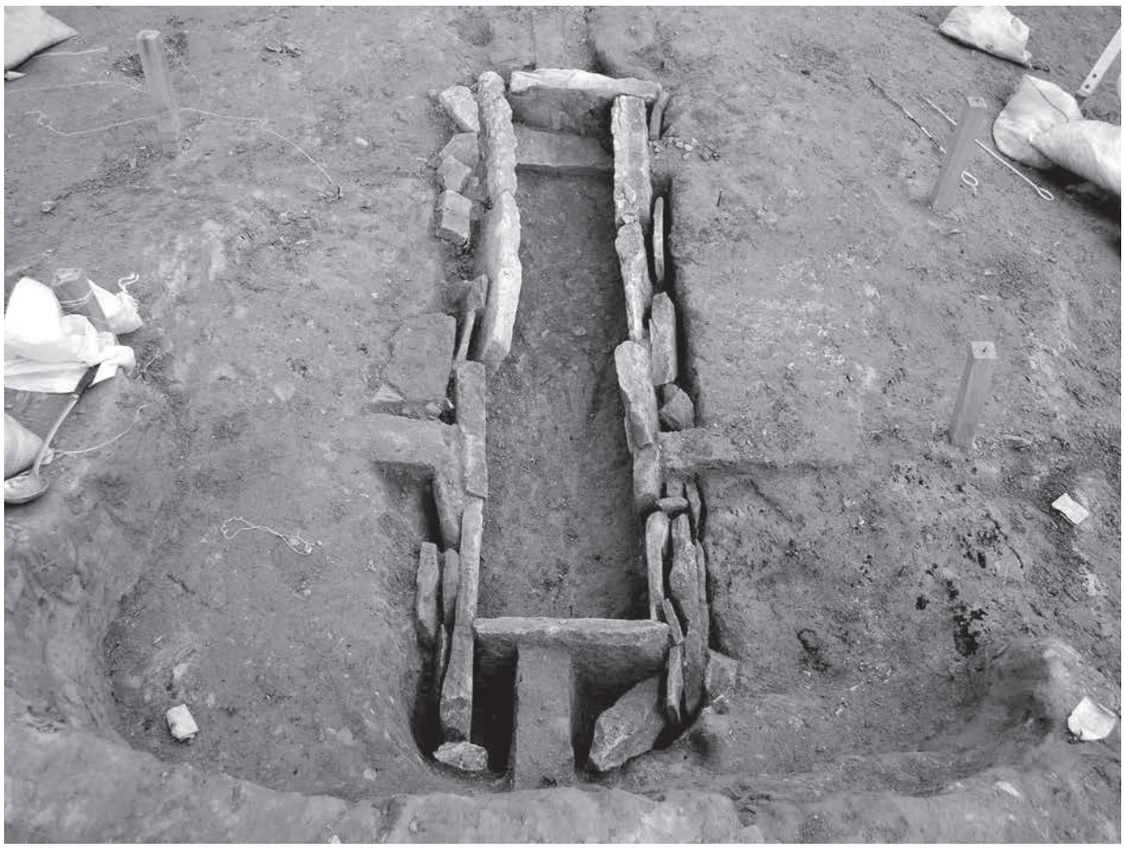
庵寺古墳群　5 号墳
主体部検出状況
（北東から）

庵寺古墳群　5 号墳
被覆粘土検出状況
（南西から）

庵寺古墳群　5 号墳石棺検出状況（北東から）

庵寺古墳群　5 号墳礫床検出状況（南西から）

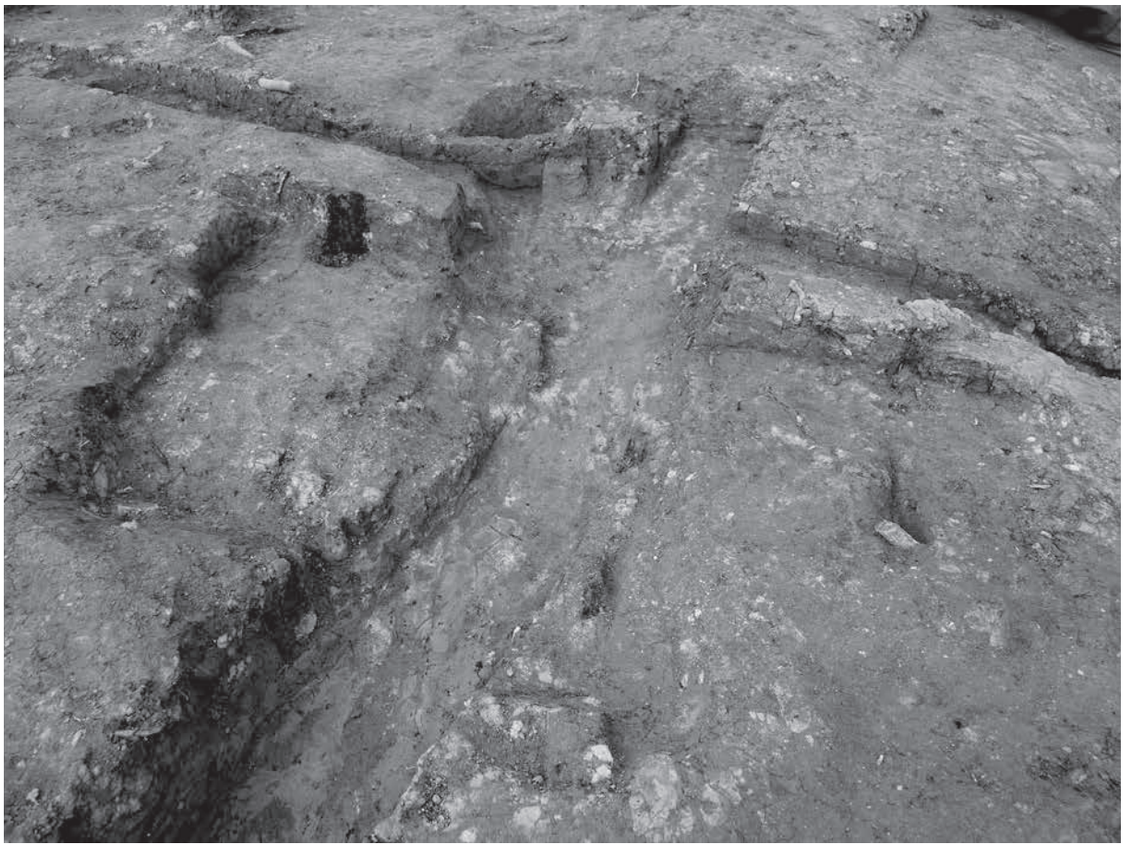
図版 26



庵寺古墳群　5 号墳棺内完掘状況（南西から）

庵寺古墳群　5 号墳石棺除去後　（南西から）

庵寺古墳群　6 号墳主体部検出状況（北から）



庵寺古墳群　6 号墳主体部完掘状況（南から）

図版 28

庵寺古墳群　7 号墳主体部検出状況　（北東から）

庵寺古墳群　7 号墳主体部横断セクション（北東から）

庵寺古墳群　7 号墳主体部完掘状況　（北東から）

庵寺古墳群　7 号墳遠景（南東から）

図版 30

庵寺古墳群　8 号墳（第 1 主体部掘削時）遠景（北東から）

庵寺古墳群　8 号墳第 1 主体部標石検出状況（北東から）

庵寺古墳群　8 号墳
第 1 主体部木棺痕
検出状況（北東から）

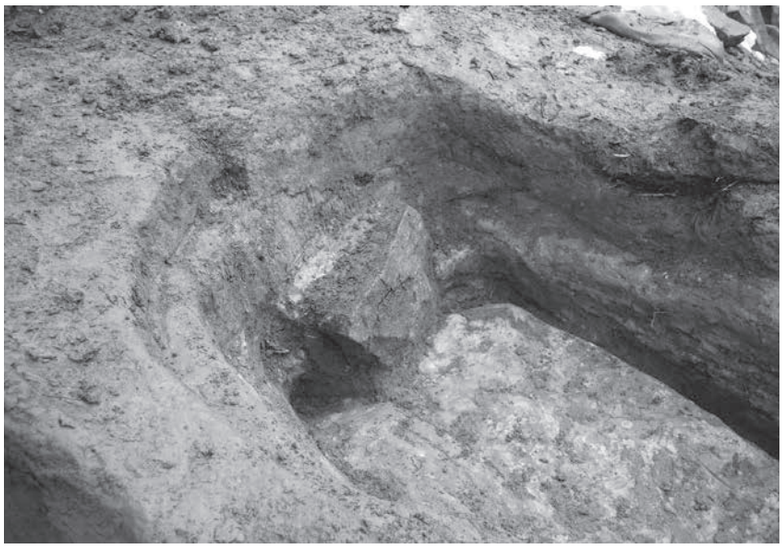
庵寺古墳群　8 号墳
第 1 主体部西側
小口部セクション
(北西から)

庵寺古墳群　8 号墳
第 1 主体部完掘状況
（南西から）

図版 32

庵寺古墳群　8 号墳
第 2 主体部検出状況
（南西から）

庵寺古墳群　8 号墳
第 2 主体部木棺痕検出
状況（南西から）



庵寺古墳群　8 号墳
第 2 主体部小口部礫検出
状況（西から）

庵寺古墳群　8 号墳第 2 主体部完掘状況（北東から）

庵寺古墳群　8 号墳第 2 主体部掘削後遠景（南西から）

図版 34

庵寺古墳群　9 号墳
調査前（北東から）

庵寺古墳群　9 号墳
第 1・2 主体部検出状況
（南西から）

庵寺古墳群　9 号墳
第 1 主体部横断セクショ
ン（北東から）

庵寺古墳群　9 号墳第 1 主体部木棺痕検出状況（南西から）

図版 36

庵寺古墳群　9 号墳
第 1 主体部鉄剣出土状況

庵寺古墳群　9 号墳
第 2 主体部横断セクション（南西から）

庵寺古墳群　9 号墳
第 1・2 主体部完掘状況
（南西から）

庵寺古墳群　9 号墳
第 3 主体部検出状況
（北東から）

庵寺古墳群　9 号墳
第 3 主体部土器棺出土
状況（北東から）

庵寺古墳群　9 号墳
第 3 主体部完掘状況
（北東から）

図版 38

庵寺古墳群　10 号墳
調査前（南から）

庵寺古墳群　10 号墳
全景（東から）

庵寺古墳群　10 号墳
周溝セクション
（南東から）

庵寺古墳群　10 号墳
第 1 主体部検出状況
（南東から）

庵寺古墳群　10 号墳
石片検出状況（南東から）

庵寺古墳群　10 号墳
第 1 主体部セクション
（南東から）

図版 40

庵寺古墳群　10 号墳
第 1 主体部完掘状況
（南東から）

庵寺古墳群　10 号墳
第 2 主体部検出状況
（北東から）

庵寺古墳群　10 号墳
第 2 主体部完掘状況
（北から）

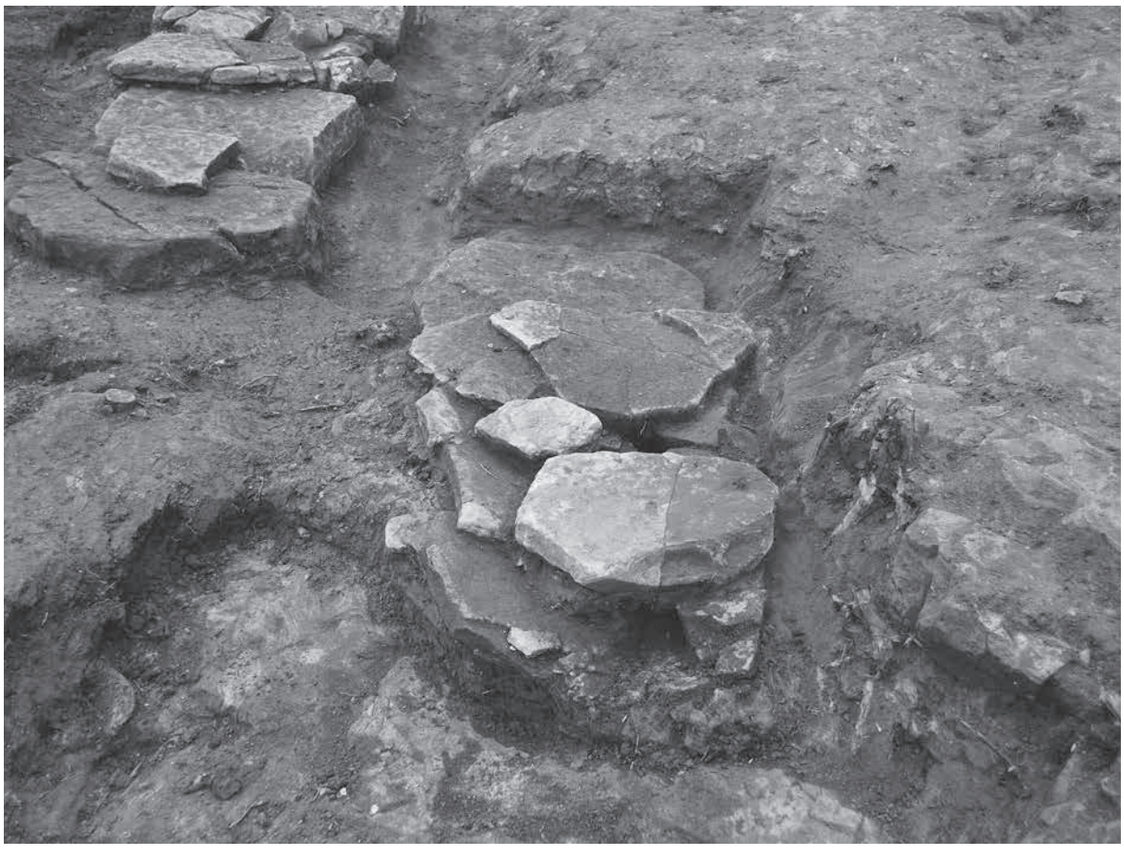
庵寺古墳群　18 号墳石棺検出状況（南西から）

庵寺古墳群　18 号墳第 1 主体部石棺検出状況（西から）

図版 42

庵寺古墳群　18 号墳第 1 主体部石棺内床面検出状況（西から）

庵寺古墳群　18 号墳第 1 主体部完掘状況（南東から）



庵寺古墳群　18 号墳第 2 主体部石蓋検出状況（西から）

庵寺古墳群　18 号墳第 1・2 主体部完掘状況（西から）

図版 44

庵寺古墳群　18 号墳調査後遠景（東から）

庵寺古墳群　19 号墳（南西から）

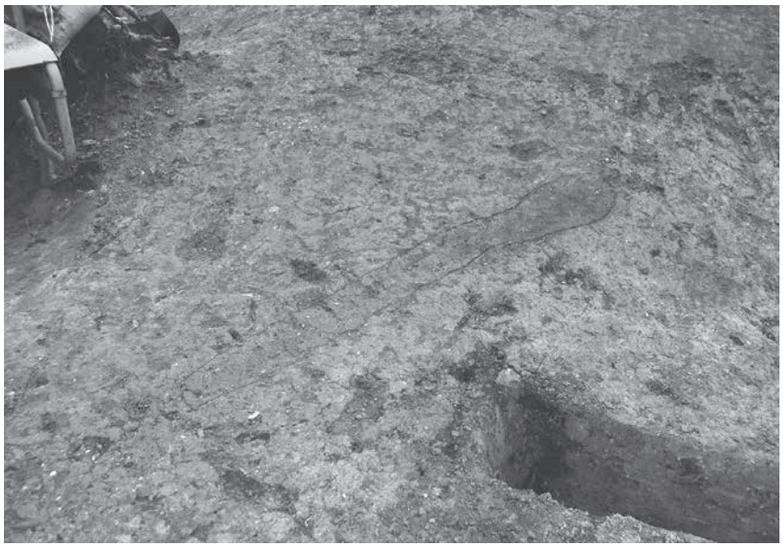
庵寺古墳群　11 号墳
遠景（東から）

庵寺古墳群　11 号墳
SX01 検出状況（南東から）

庵寺古墳群　11 号墳
SX01 セクション
（南東から）

図版 46

庵寺古墳群　11 号墳
SX01 完掘（南東から）



庵寺古墳群　12 号墳
SX02 検出状況（北西から）

庵寺古墳群　12 号墳
全景（北から）

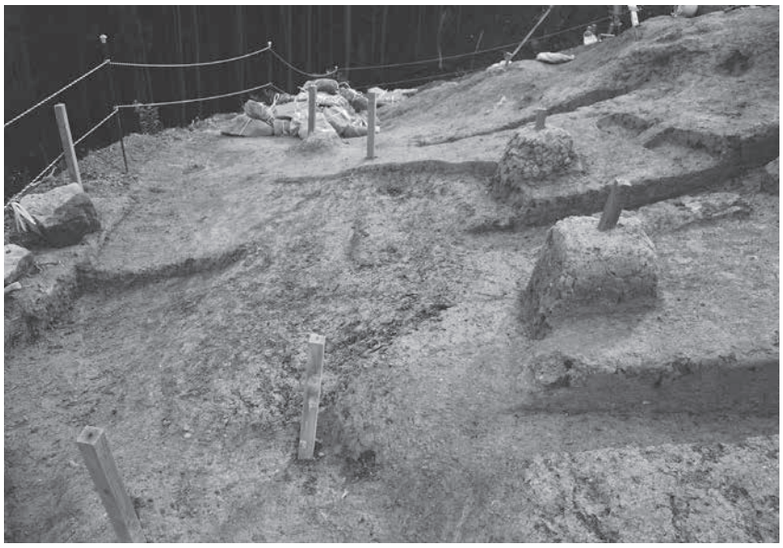
庵寺古墳群　13 号墳
石棺検出状況（南から）

庵寺古墳群　13 号墳
石棺検出状況（北東から）

庵寺古墳群　13 号墳
蓋石除去後（北西から）

図版 48

庵寺古墳群　13 号墳
石棺内完掘及び墓壙検出
状況（北西から）



庵寺古墳群　13 号墳
石棺除去後（北西から）

庵寺古墳群　14 号墳
石棺検出状況（北西から）

庵寺古墳群　14 号墳
蓋石検出状況（北東から）

庵寺古墳群　14 号墳
石棺内完掘状況
（北東から）

庵寺古墳群　14 号墳
石棺除去後（北東から）

図版 50

庵寺古墳群　16 号墳
遠景（南東から）

庵寺古墳群　16 号墳
石棺検出状況（東から）

庵寺古墳群　16 号墳
石棺完掘状況（西から）

庵寺古墳群　16 号墳
石棺側板加工痕

庵寺古墳群　16 号墳
周溝検出状況（北から）

庵寺古墳群　16 号墳
石棺除去後（東から）

図版 52

庵寺古墳群　16 号・17
号墳遠景
（北西から）

庵寺古墳群　17 号墳
主体部完掘状況（西から）

庵寺古墳群　20 号墳
調査前（北東から）

庵寺古墳群　20 号墳
主体部検出状況
（北西から）

庵寺古墳群　20 号墳
主体部石棺・礫床検出状
況（南東から）

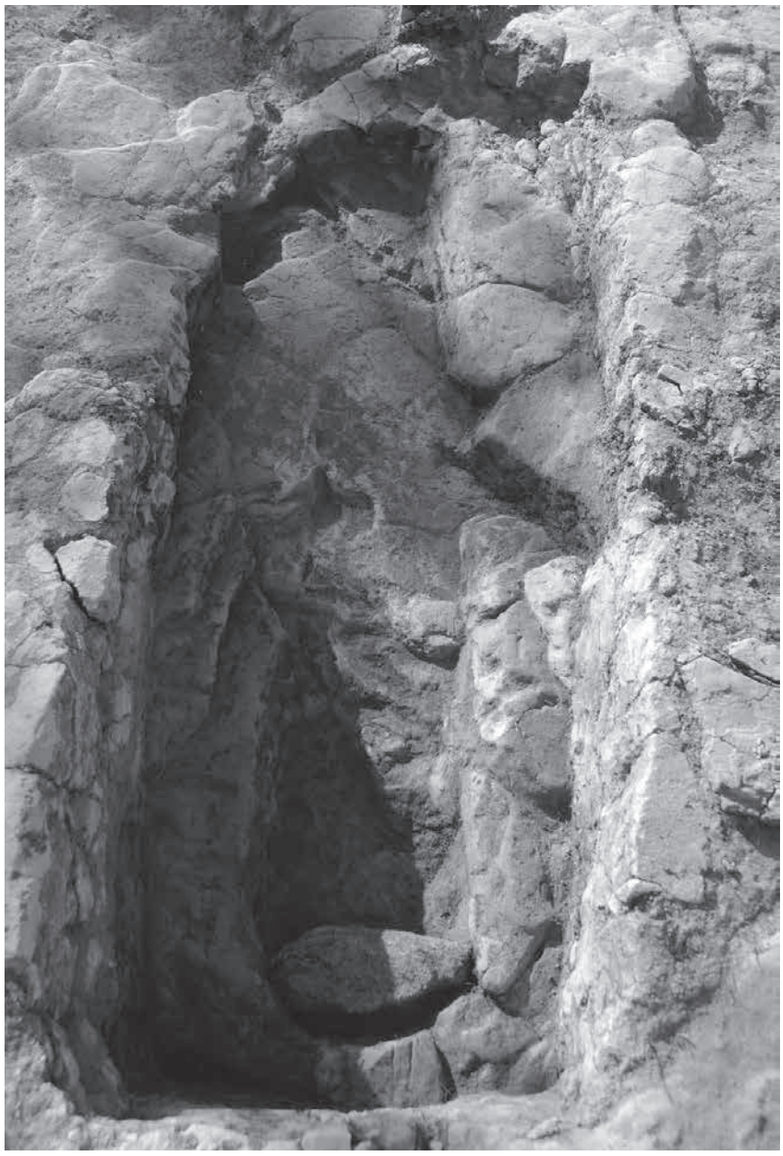
図版 54

庵寺古墳群　20 号墳
主体部石片検出状況
（北西から）

庵寺古墳群　20 号墳
墓壙内完掘状況
（南東から）

庵寺古墳群　20 号墳
遠景（南西から）

庵寺古墳群　21 号墳
主体部検出状況
（西から）



庵寺古墳群　21 号墳
主体部完掘状況
（南東から）

図版 56

庵寺古墳群　22・23 号墳調査前（北東から）

庵寺古墳群　22・23 号墳遠景（南西から）

庵寺古墳群　22 号墳第 1 主体部検出状況（南西から）

庵寺古墳群　22 号墳第 1 主体部検出状況（北東から）

図版 58

庵寺古墳群　22 号墳第 1 主体部南西小口側縦断セクション（北西から）

庵寺古墳群　22 号墳第 1 主体部横断セクション（南西から）

庵寺古墳群　22 号墳
第 1 主体部粘土床
検出状況（北東から）

庵寺古墳群　22 号墳
第 1 主体部粘土床検出時
2（北東から）

図版 60

庵寺古墳群　22 号墳
第 1 主体部粘土床除去時
（北東から）

庵寺古墳群　22 号墳
第 1 主体部完掘状況
（北東から）

庵寺古墳群　22 号墳
主体部完掘後遠景
（南西から）

庵寺古墳群　22 号墳
墳丘盛土セクション
（南東から）

庵寺古墳群　22 号墳
墳丘盛土セクション
（南西から）

図版 62

庵寺古墳群　22 号墳
墳丘盛土除去後
（北西から）

庵寺古墳群　22 号墳
第 2 主体部石棺完掘状況
（東から）

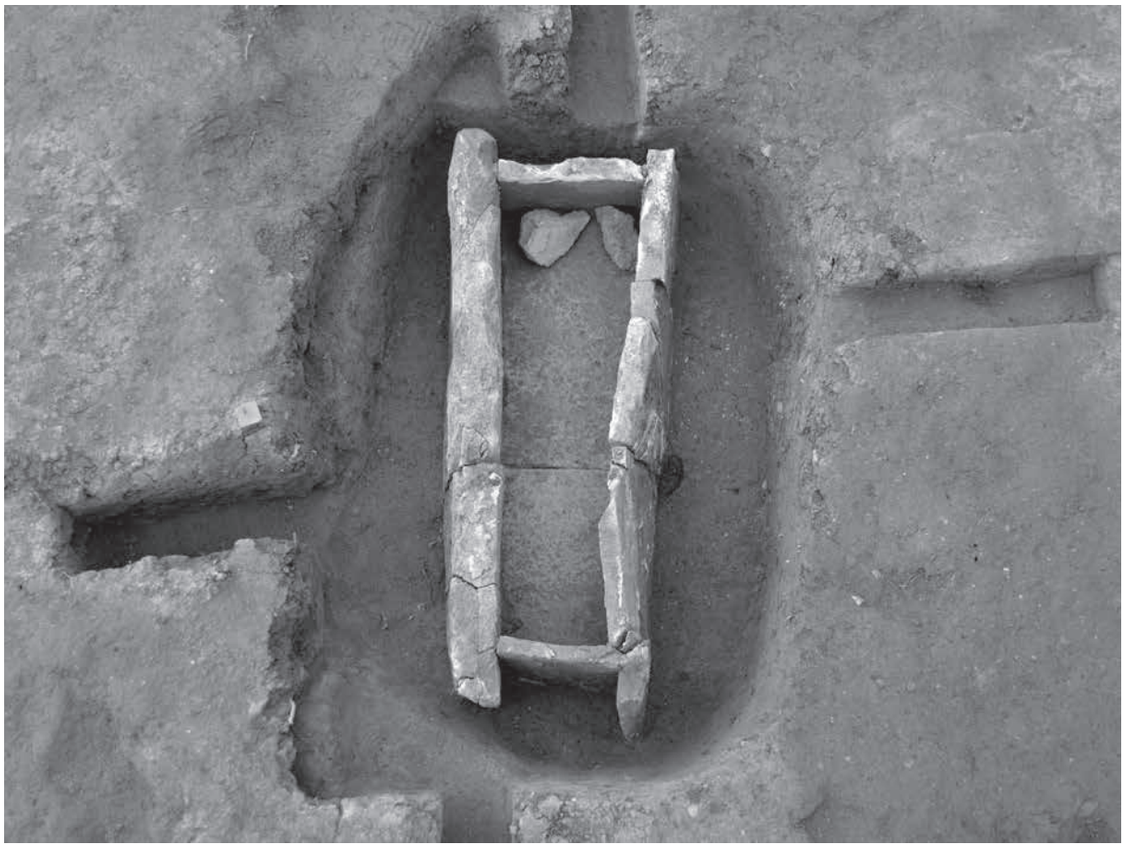
庵寺古墳群　22 号墳
第 2 主体部完掘状況
（東から）

庵寺古墳群　23 号墳遠景（南西から）

庵寺古墳群　23 号墳遠景（北東から）

図版 64

庵寺古墳群　23 号墳石棺検出状況（南西から）



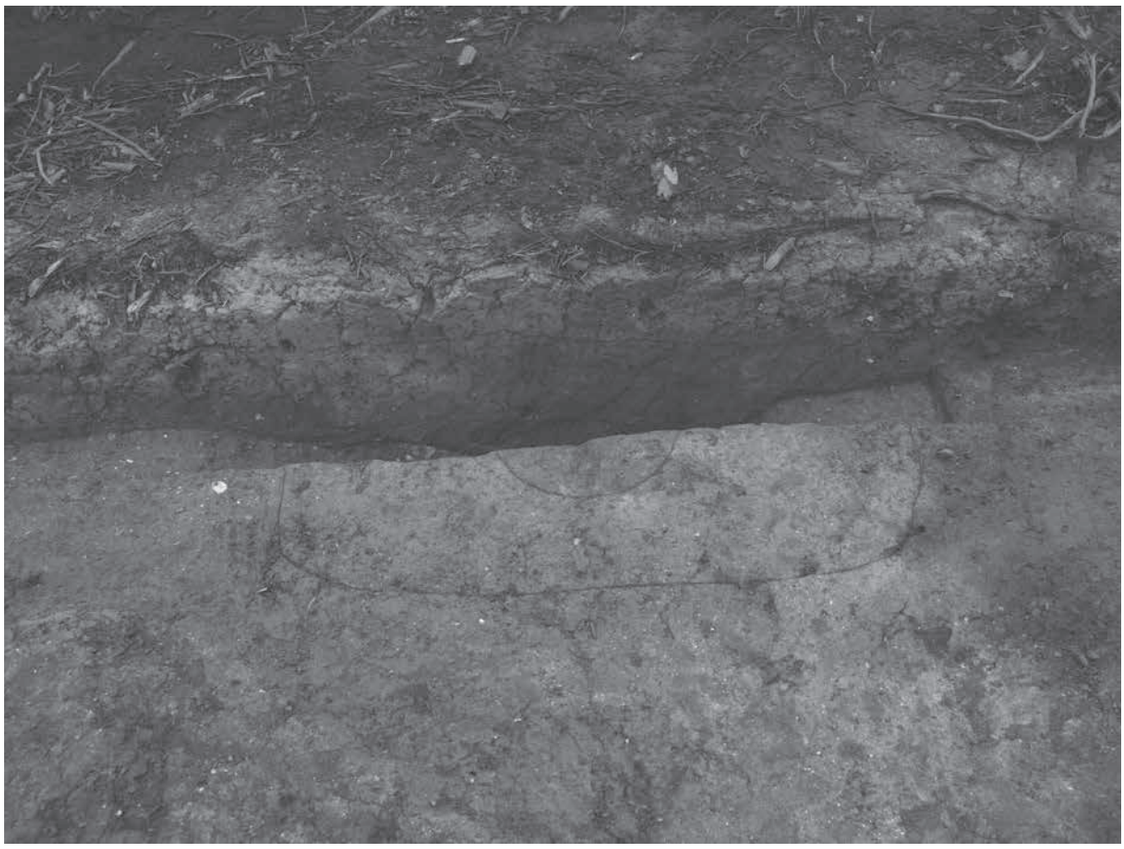
庵寺古墳群　23 号墳棺内完掘状況（南西から）

庵寺古墳群　23 号墳
墓壙内完掘状況
（南西から）

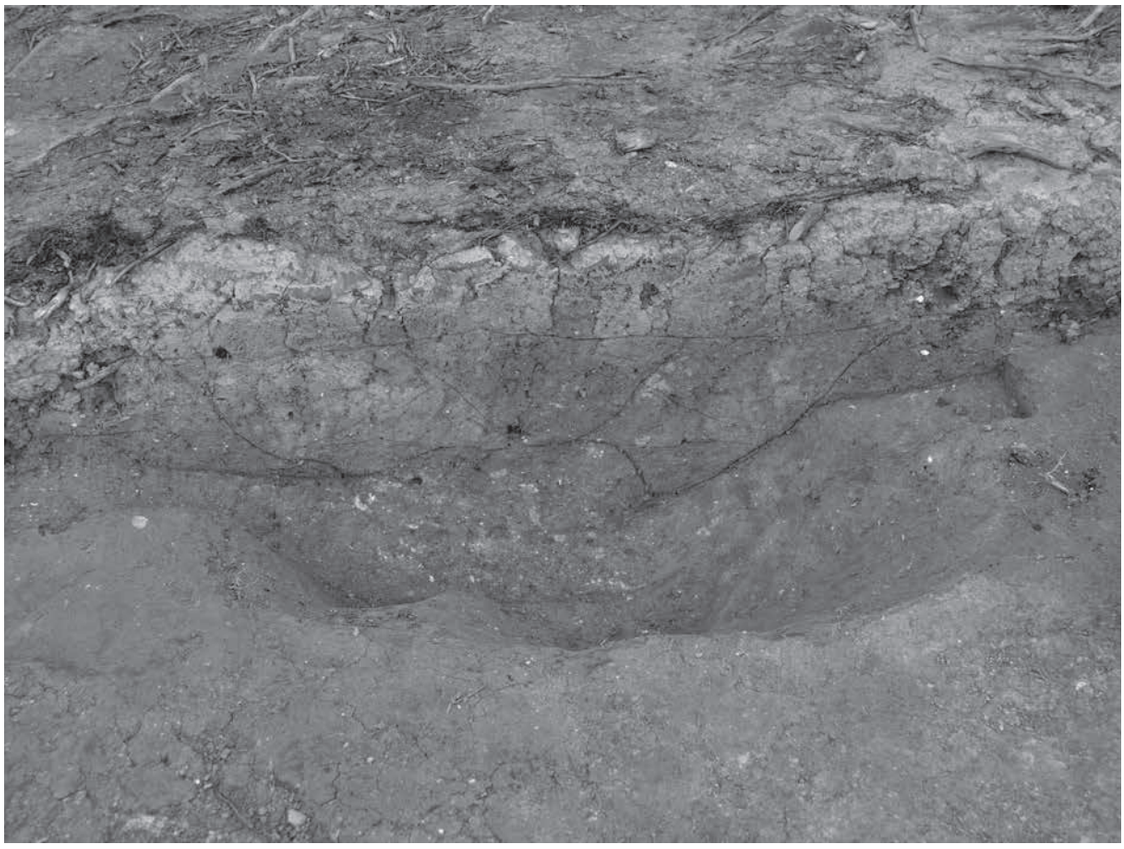
庵寺古墳群　23 号墳
墳丘盛土セクション
（南西から）

庵寺古墳群　23 号墳
墳丘盛土除去後遠景
（南西から）

図版 66



庵寺古墳群　24 号墳主体部検出状況（北西から）



庵寺古墳群　24 号墳主体部完掘状況（北西から）

庵寺古墳群　25 号墳石棺検出状況（北から）

庵寺古墳群　25 号墳蓋石検出状況（南東から）

図版 68

庵寺古墳群　25 号墳石棺内完掘状況（北西から）

庵寺古墳群　25 号墳主体部完掘後遠景（北西から）

大迫ツリ遺跡　調査前風景（南東から）

大迫ツリ遺跡　調査後遠景（南西から）

図版 70

大迫ツリ遺跡　調査後遠景（北東から）

大迫ツリ遺跡　第 1 採掘坑左壁側（北東から）

大迫ツリ遺跡　第 1 採掘坑右壁側（南西から）

大迫ツリ遺跡　第 1 採掘坑奥壁側（南東から）

図版 72

大迫ツリ遺跡　第 1 採掘坑奥壁右隅（南から）

大迫ツリ遺跡　第 2 採掘坑完掘状況（北東から）

大迫ツリ遺跡　第 2 採掘坑完掘状況（南西から）

図版 74

大迫ツリ遺跡　第 3 採掘坑完掘状況（北東から）

大迫ツリ遺跡　第 3 採掘坑完掘状況（南西から）

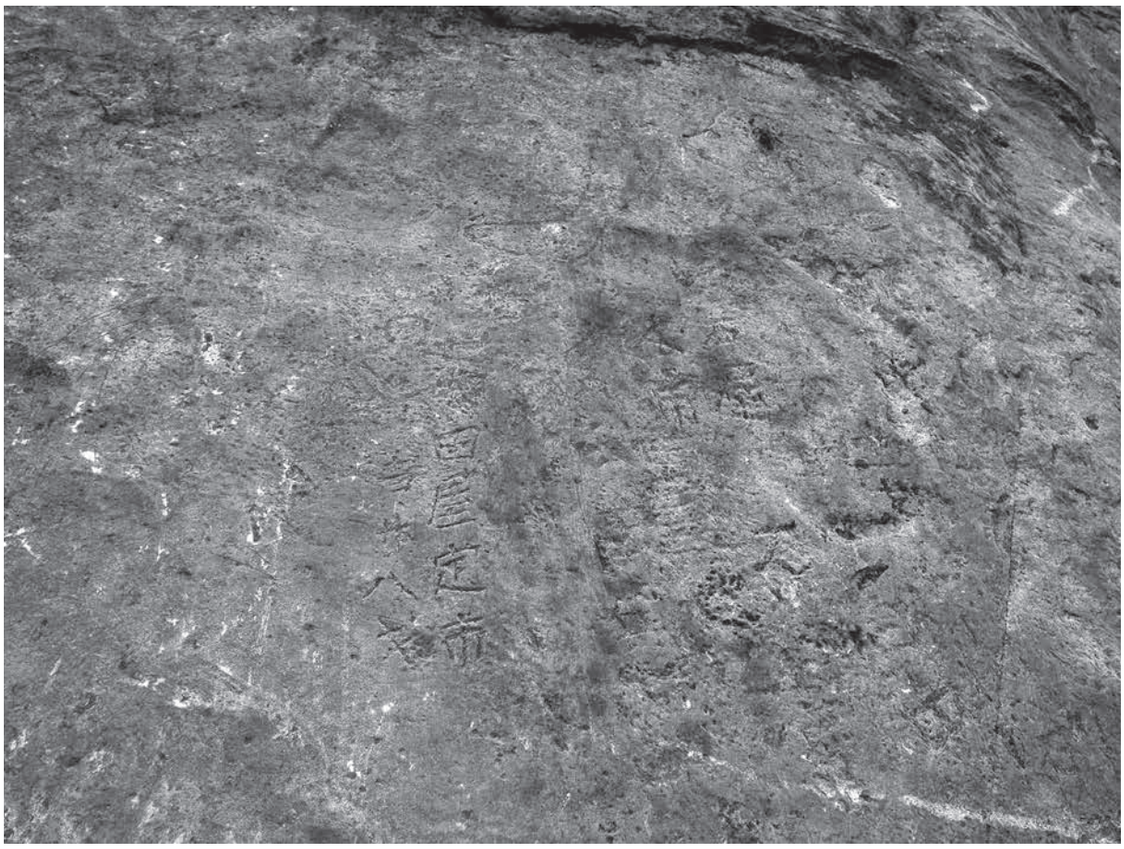
大迫ツリ遺跡　線刻画第 8 支群

大迫ツリ遺跡　線刻画第 9 支群

図版 76

大迫ツリ遺跡　線刻画第 10 支群

大迫ツリ遺跡　線刻画第 6 支群



大迫ツリ遺跡　線刻画第 7 支群

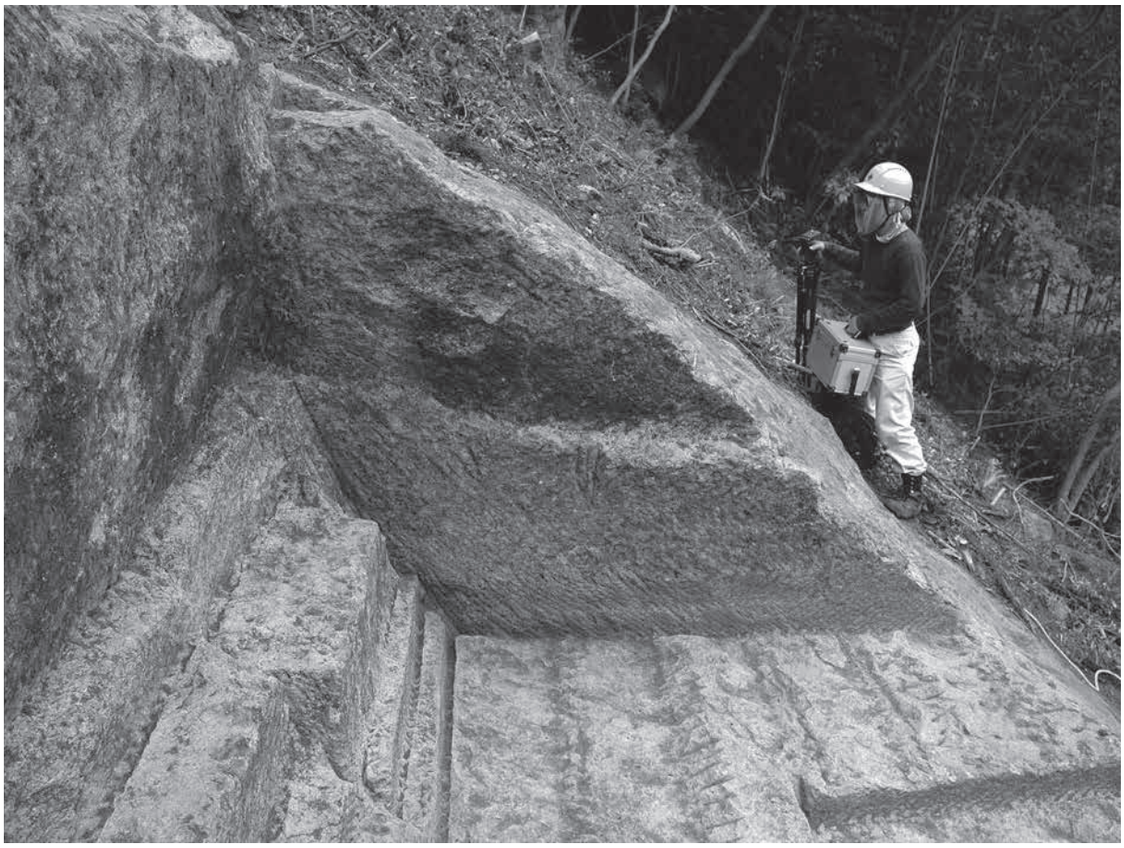
大迫ツリ遺跡　線刻画第 1 支群

図版 78

小釜野遺跡　調査前（北から）

小釜野遺跡　第 1 採掘坑調査前（東から）

小釜野遺跡　第 1 採掘坑左壁側（北西から）



小釜野遺跡　第 1 採掘坑右壁側（南東から）

図版 80

小釜野遺跡　第 1 採掘坑
左奥壁側（北から）

小釜野遺跡　第 1 採掘坑
床面（南東から）

小釜野遺跡　第 1 採掘坑
調査後遠景（東から）

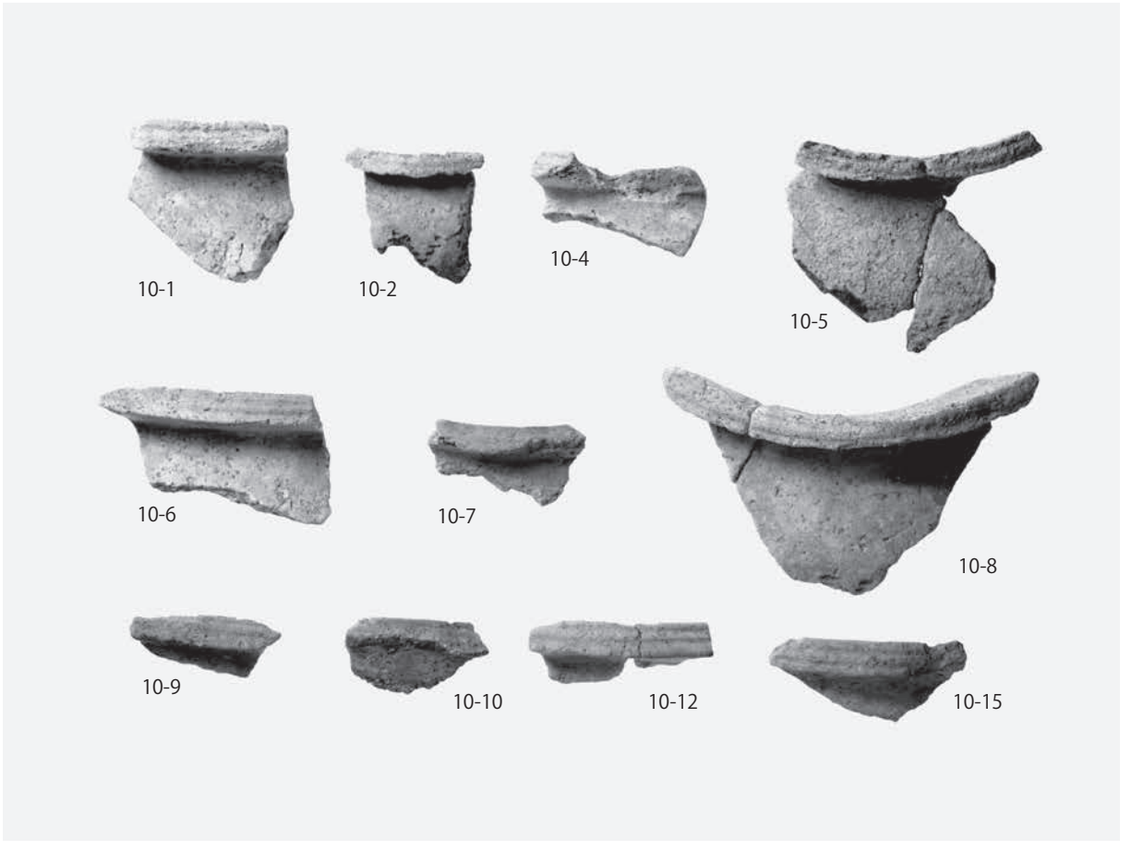
小釜野遺跡　第 2 採掘坑調査前（南西から）

小釜野遺跡　第 2 採掘坑全景（西から）

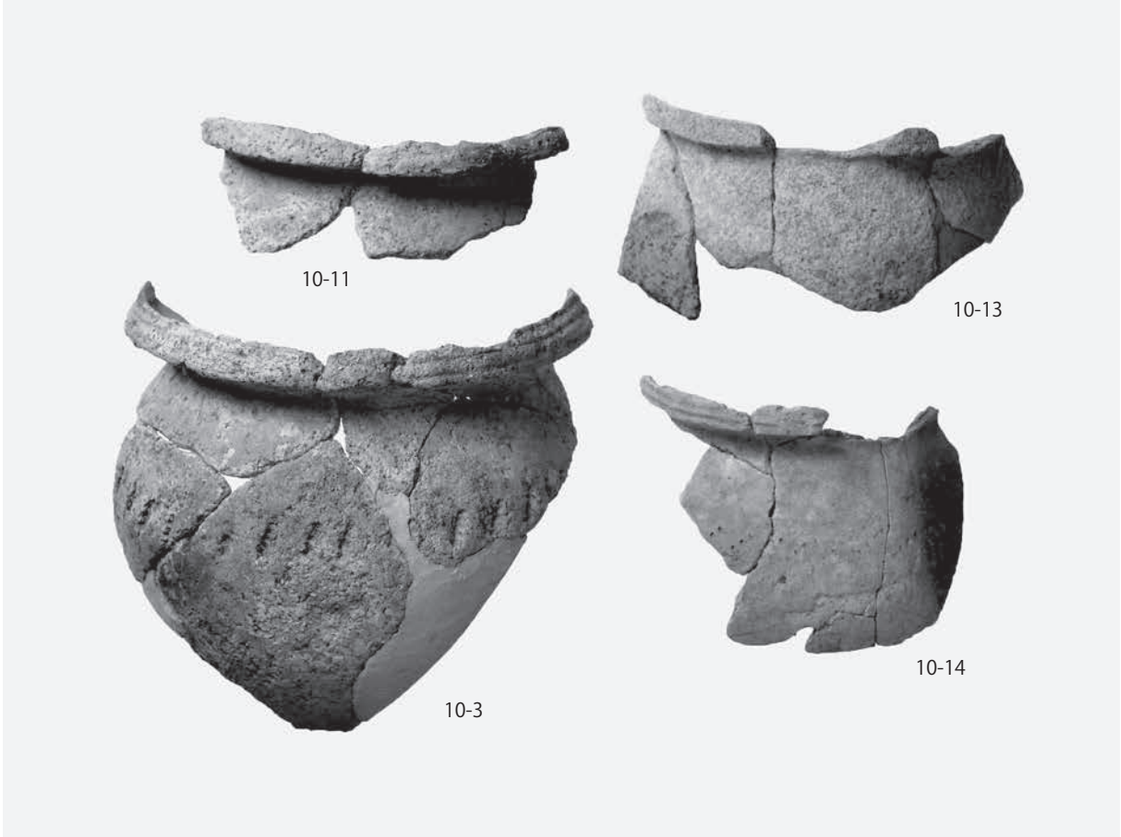
図版 82

小釜野遺跡　第 2 採掘坑全景（南西から）

小釜野遺跡　第 2 採掘坑右壁側（北から）

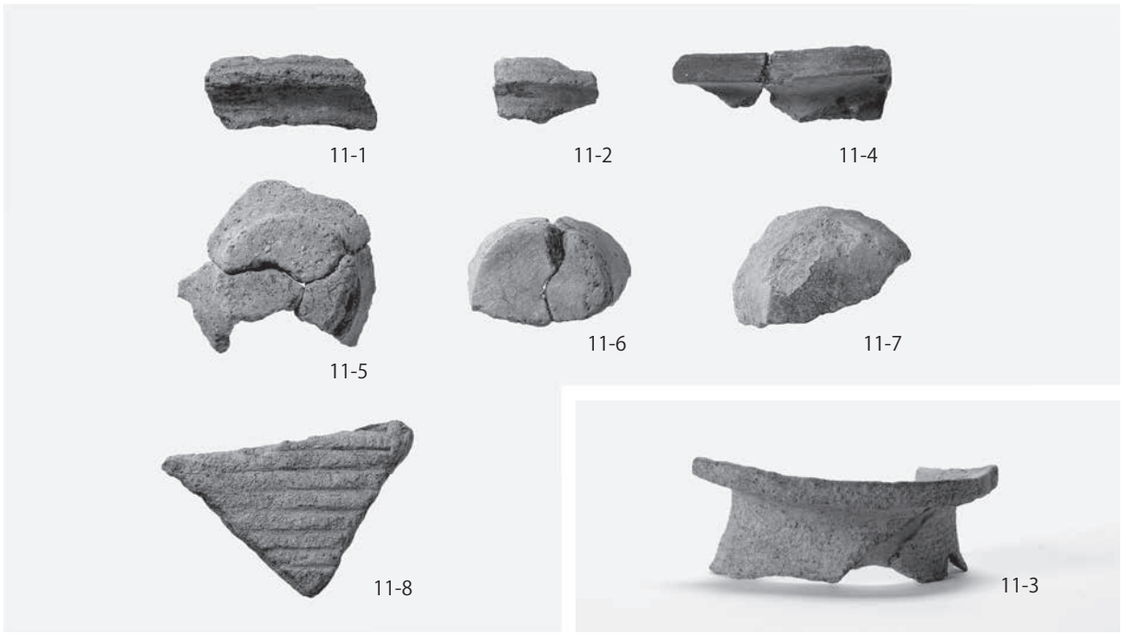


庵寺古墳群　SI01 出土遺物（1）

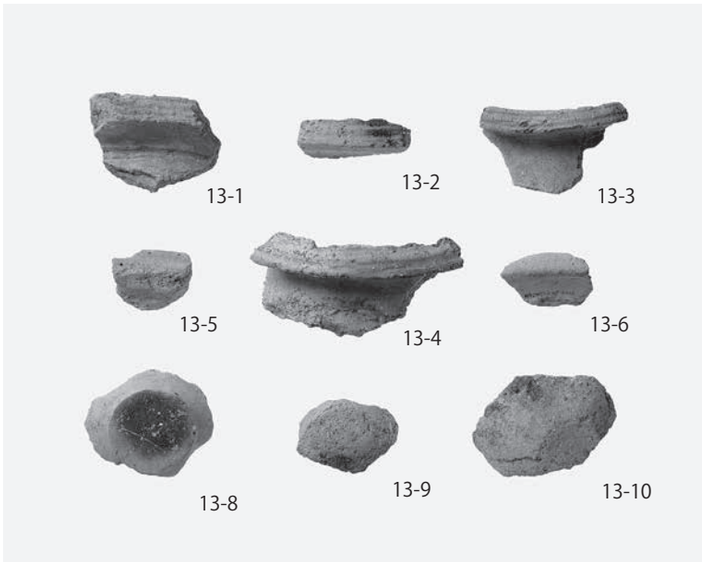


庵寺古墳群　SI01 出土遺物（2）

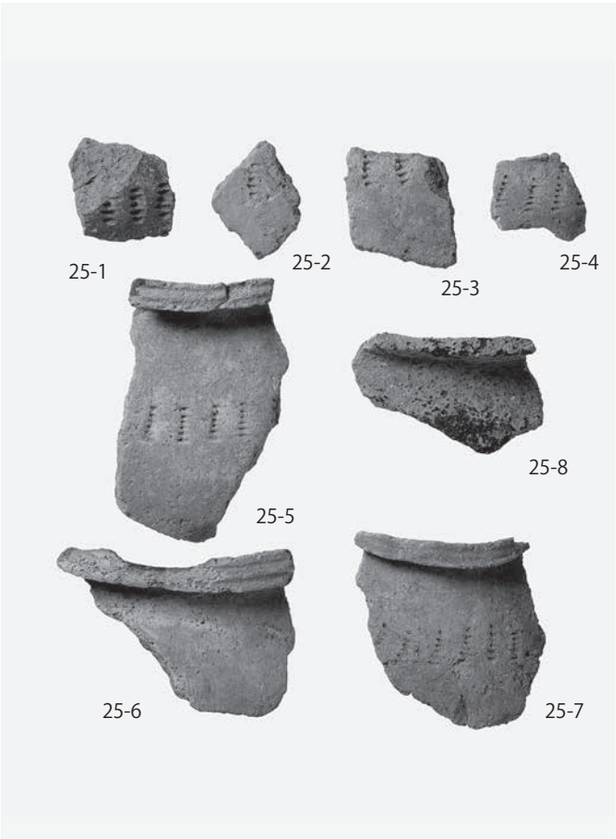
図版 84



庵寺古墳群　SI01 出土遺物（3）



庵寺古墳群　SI02 出土遺物

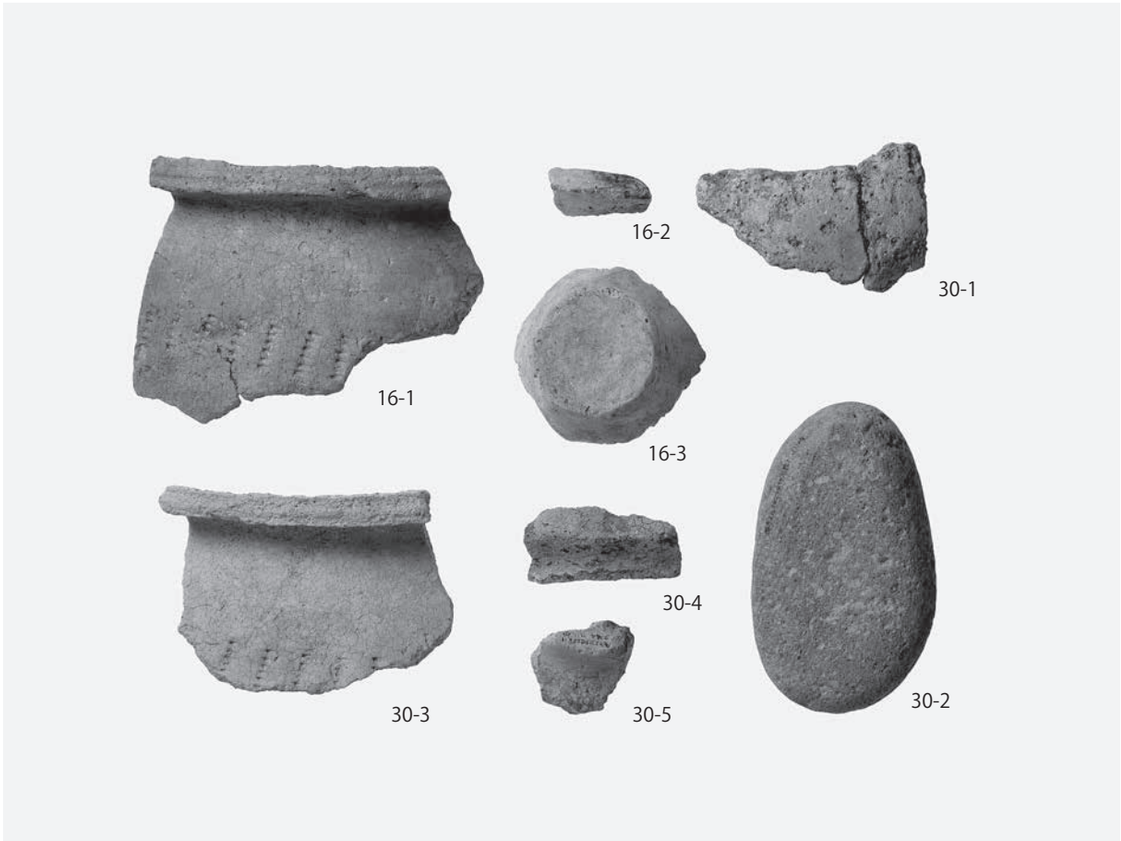


庵寺古墳群　加工段 1・2・3・4 出土遺物

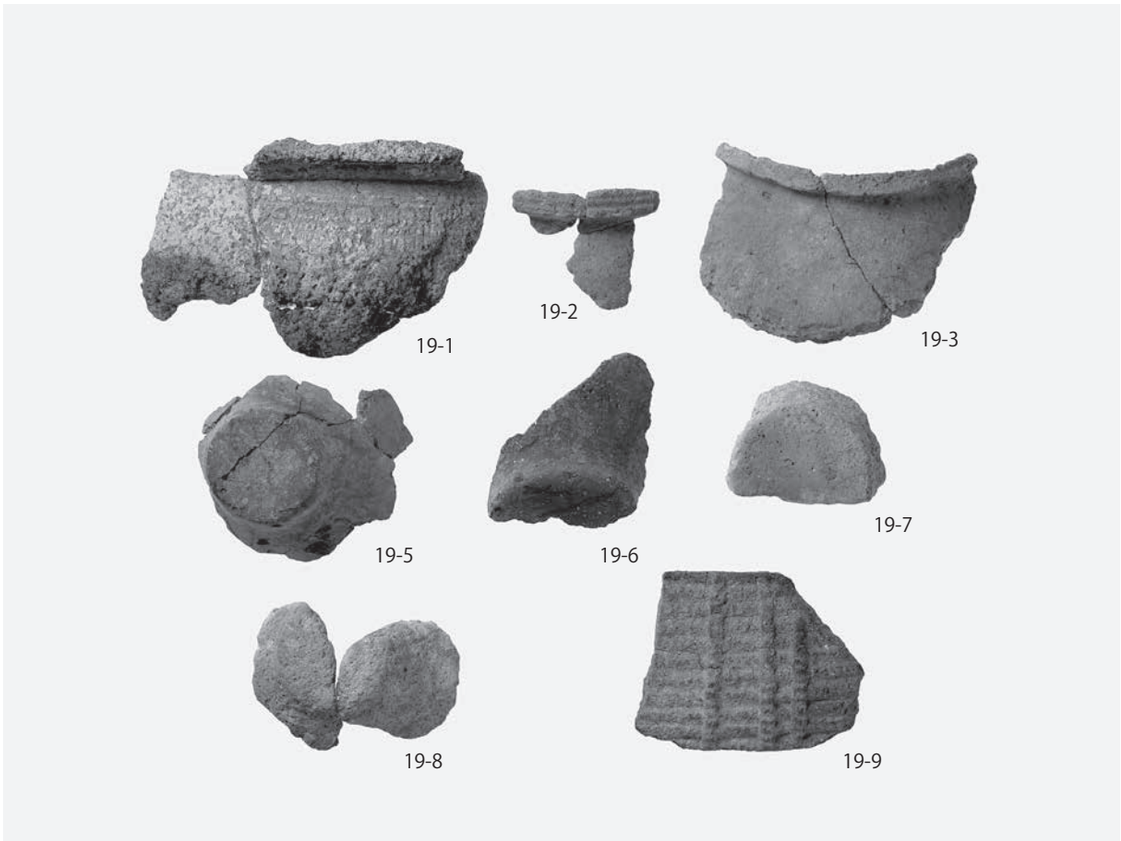
庵寺古墳群　加工段 5 出土遺物（1）

庵寺古墳群　加工段 5 出土遺物（2）

図版 86

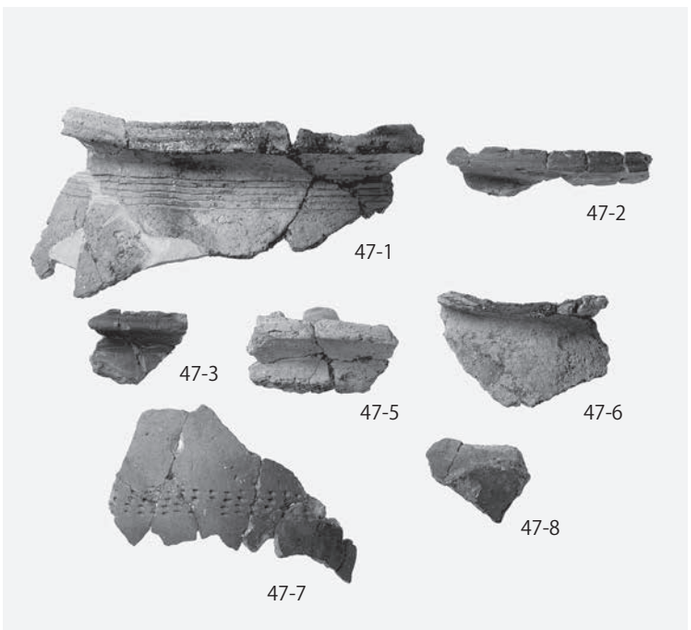


庵寺古墳群　加工段 6・10 出土遺物

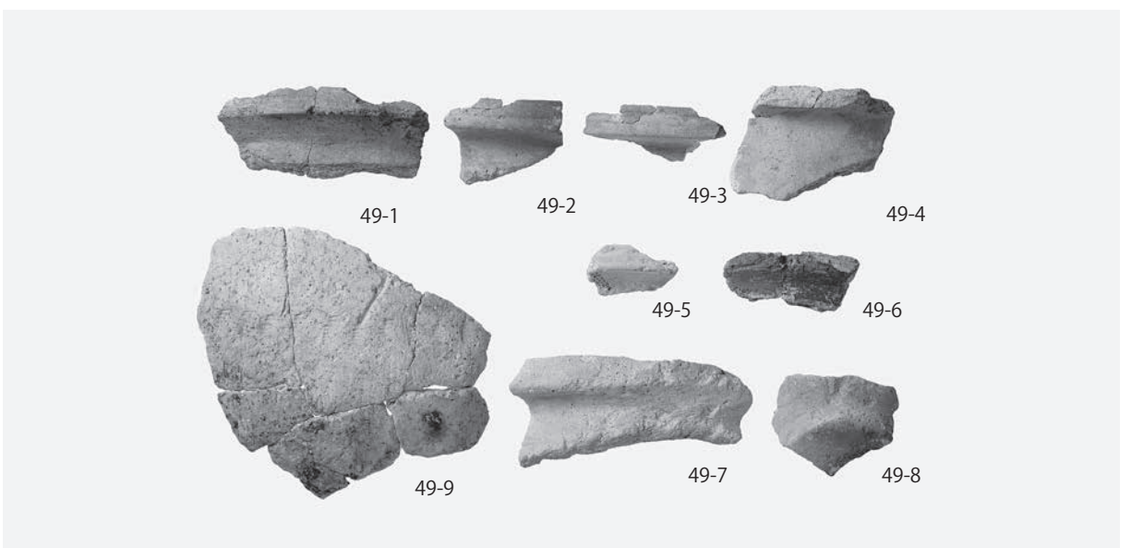


庵寺古墳群　加工段 7 出土遺物（1）

庵寺古墳群　加工段 7 出土遺物（2）

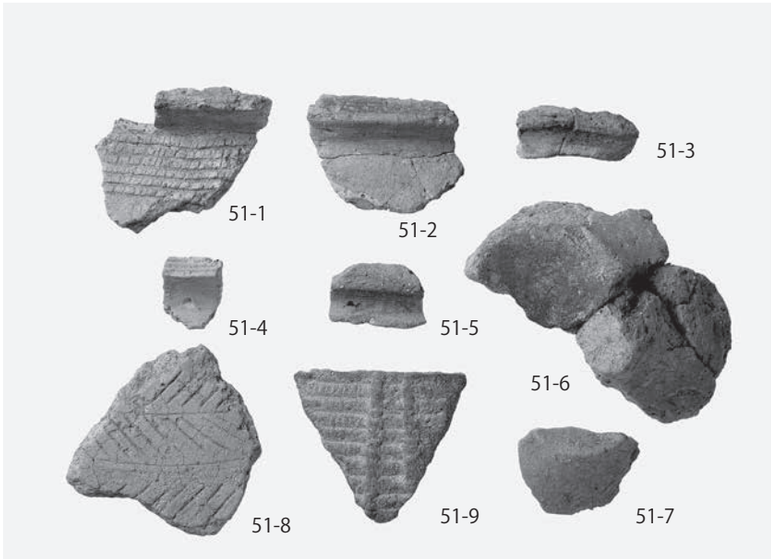


庵寺古墳群　加工段 13 出土遺物

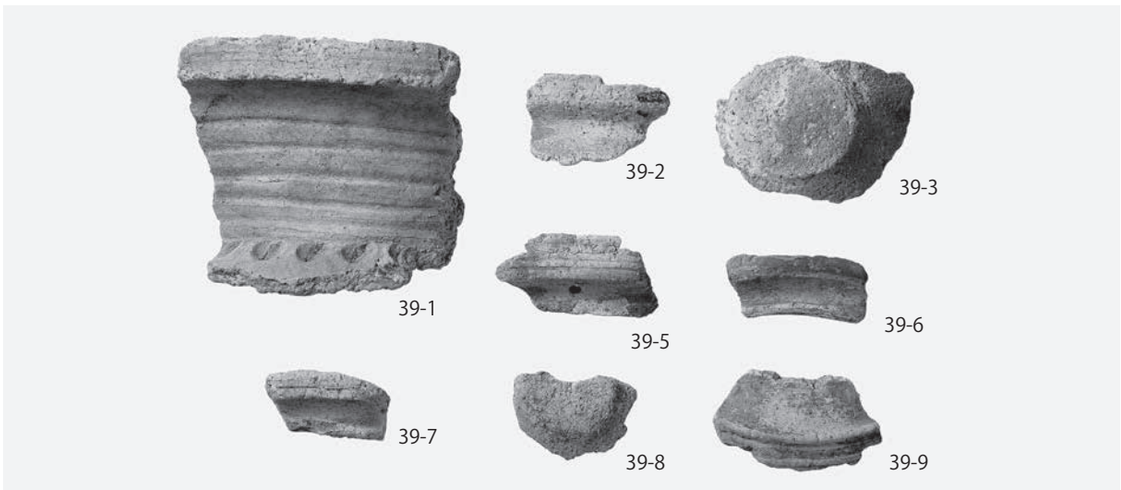


庵寺古墳群　加工段 14 出土遺物

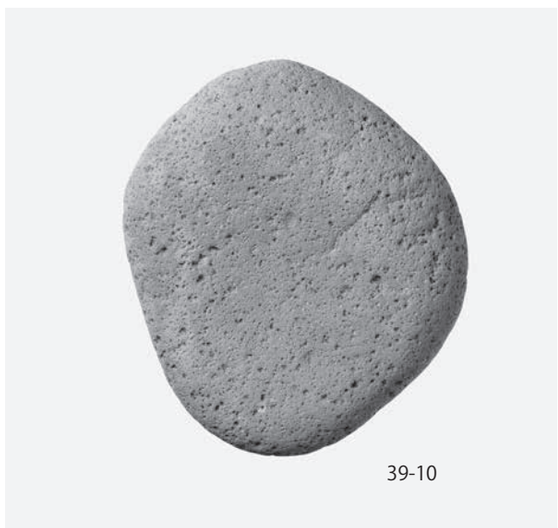
図版 88



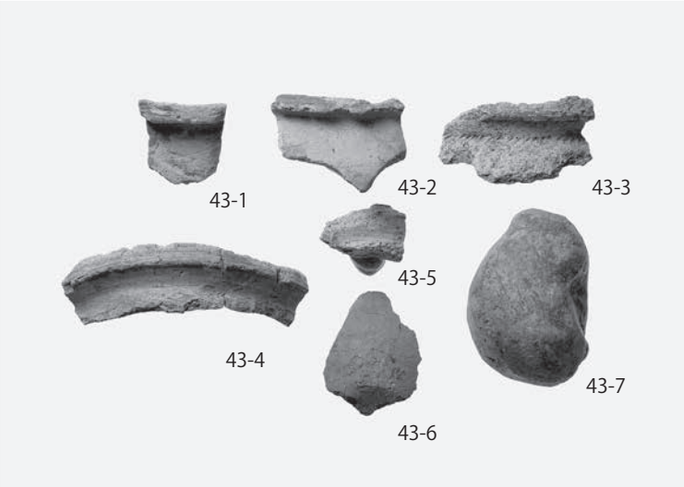
庵寺古墳群　加工段 15 出土遺物



庵寺古墳群　加工段 16・17 出土遺物（1）

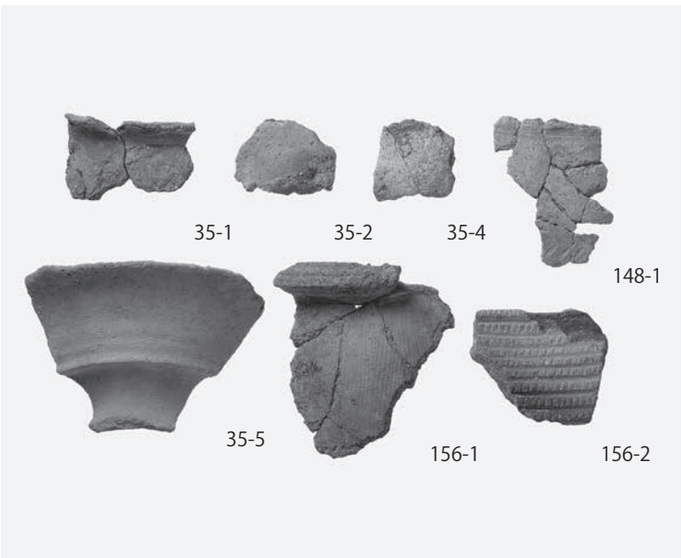


庵寺古墳群　加工段 16・17 出土遺物（2）



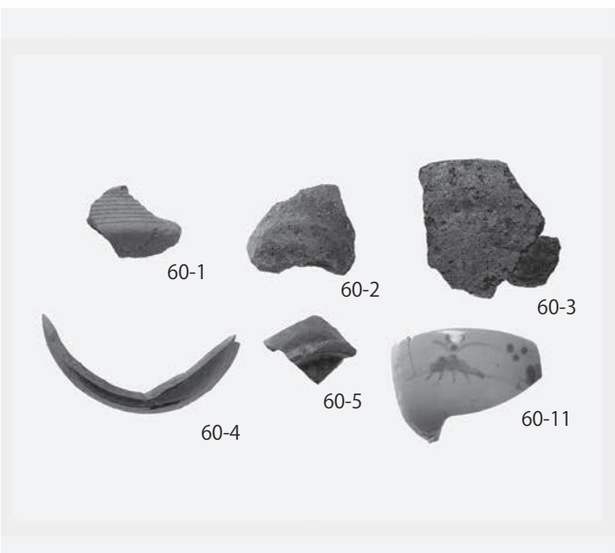
庵寺古墳群　加工段 19・22 出土遺物

庵寺古墳群　加工段 23 出土遺物

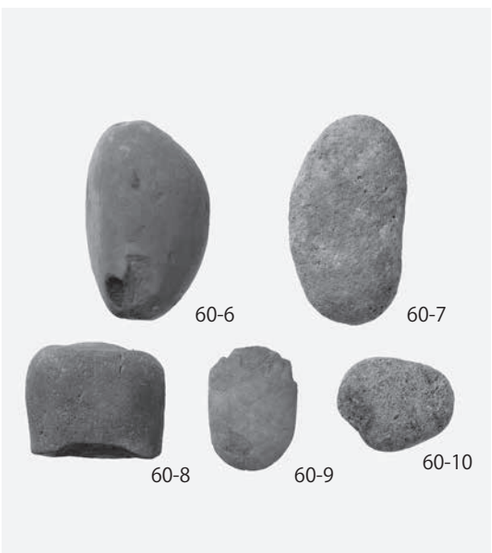


庵寺古墳群　加工段 21・25・27・29・30 出土遺物

庵寺古墳群　SK07 出土遺物

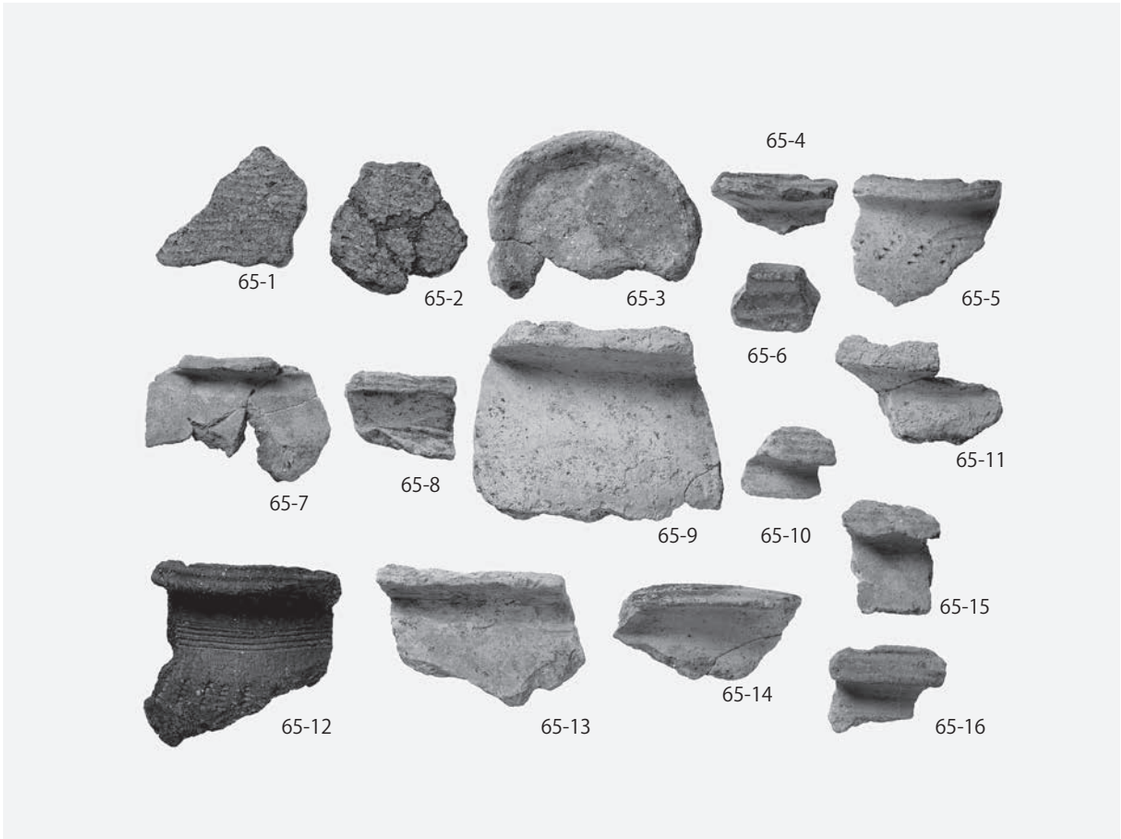


庵寺古墳群　遺構外出土遺物（1）

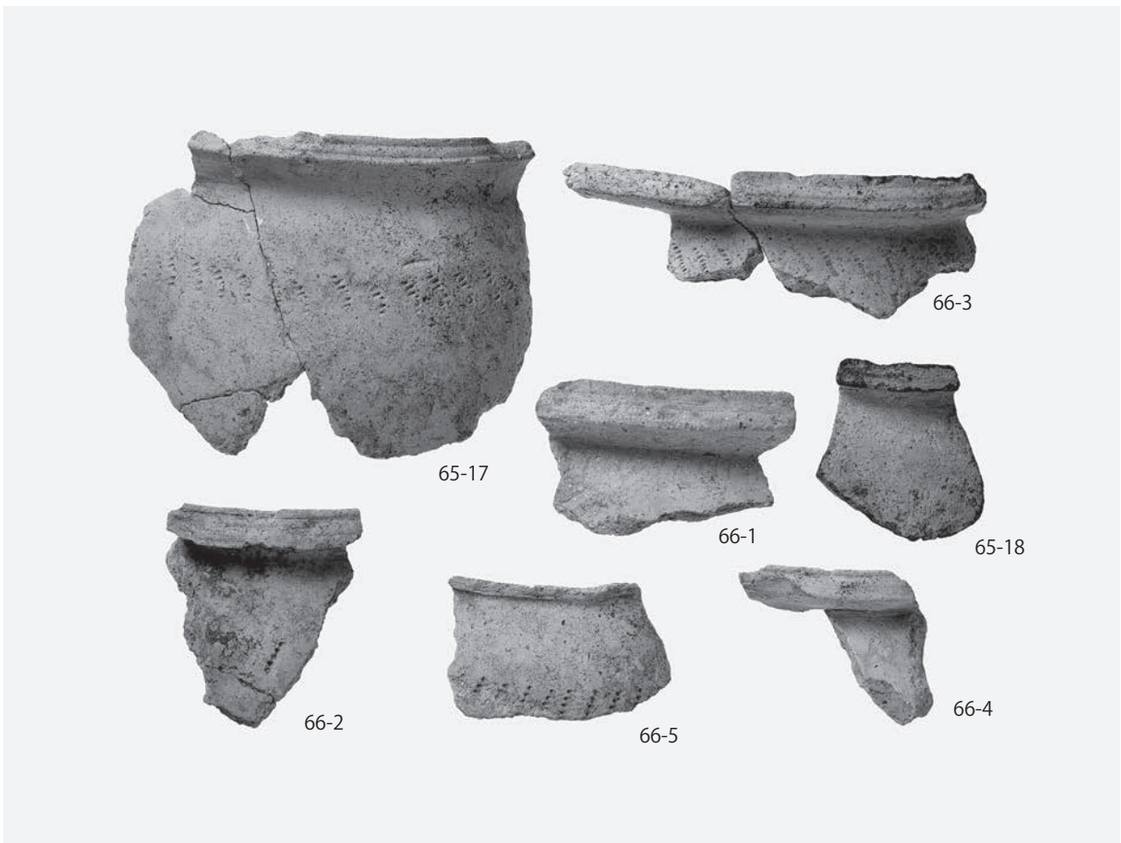


庵寺古墳群　遺構外出土遺物（2）

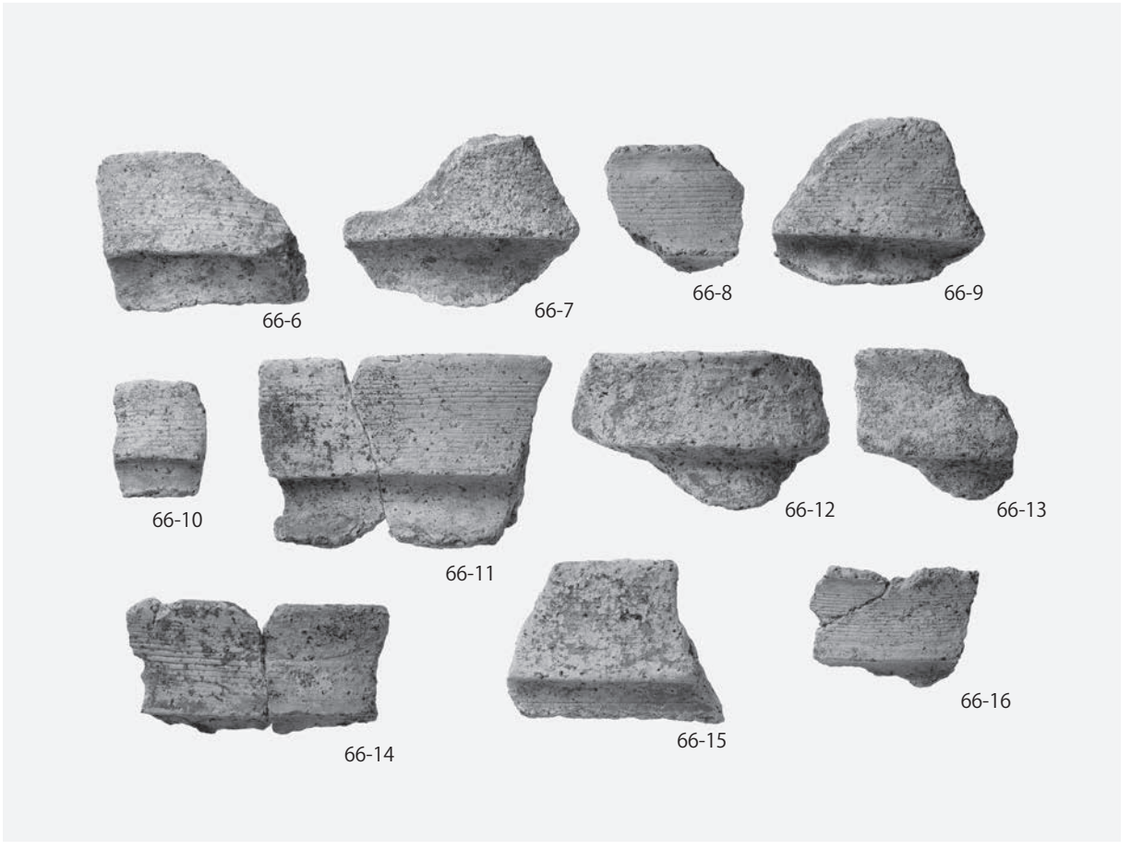
図版 90



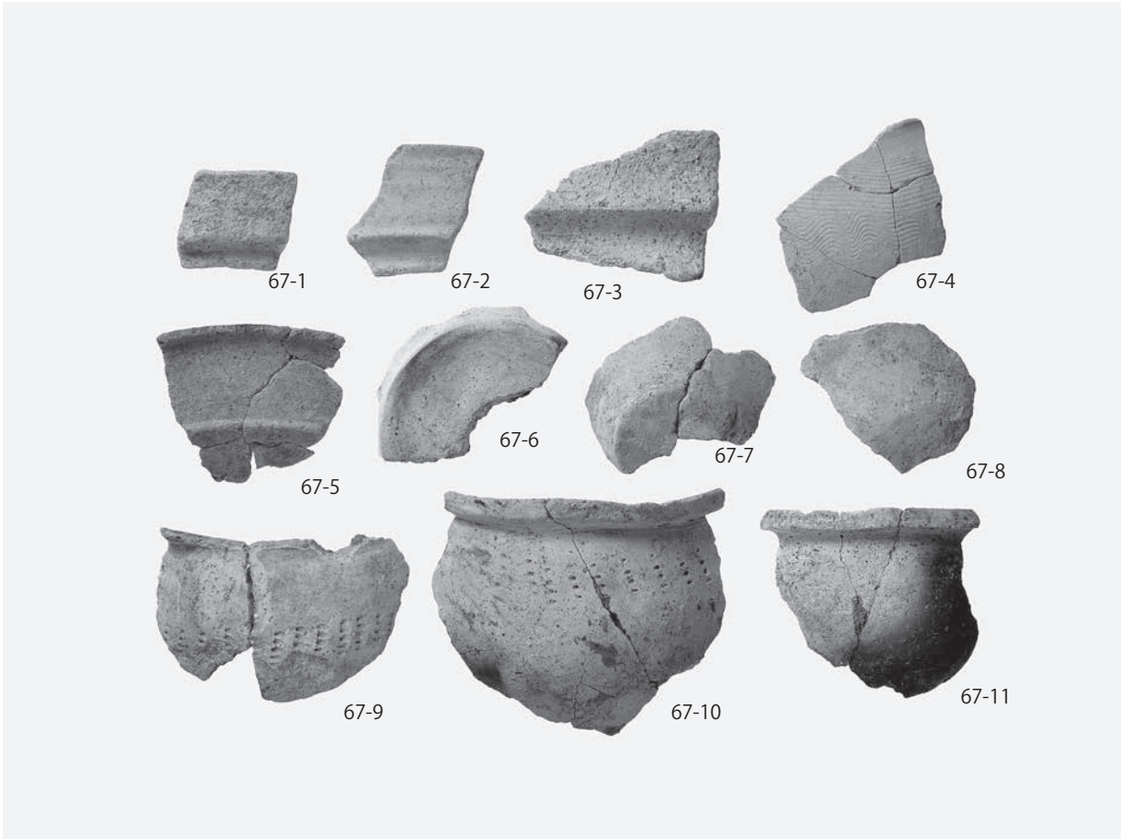
庵寺古墳群　谷部出土遺物（1）



庵寺古墳群　谷部出土遺物（2）

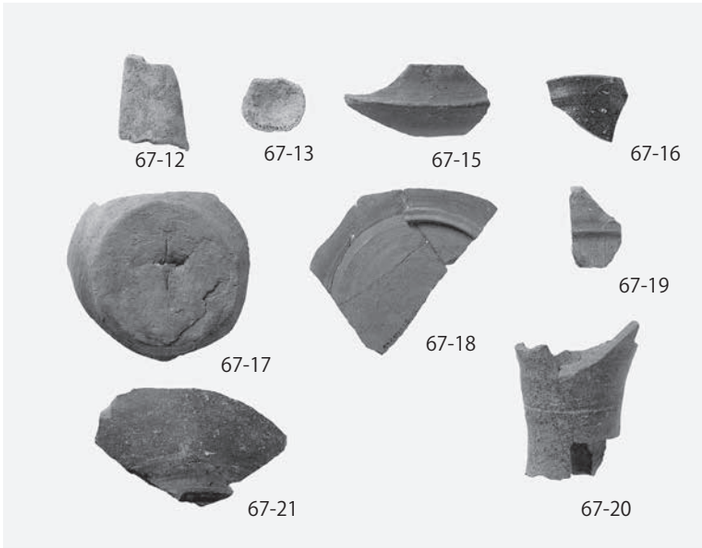


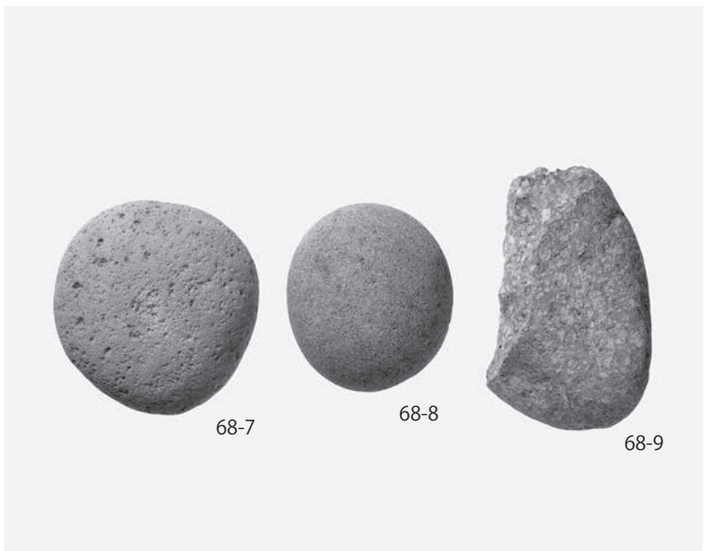
庵寺古墳群　谷部出土遺物（3）

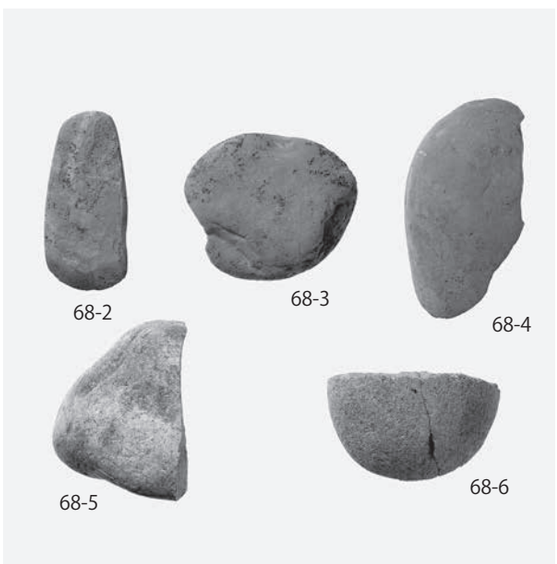


庵寺古墳群　谷部出土遺物（4）

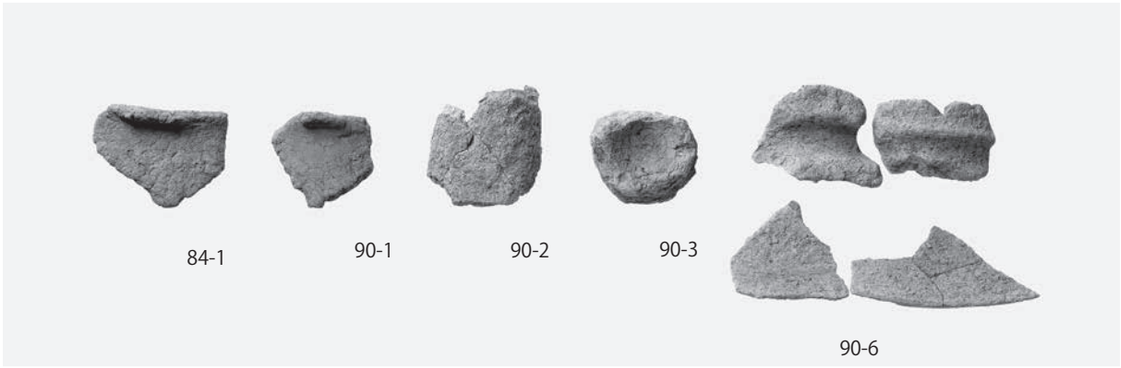
図版 92

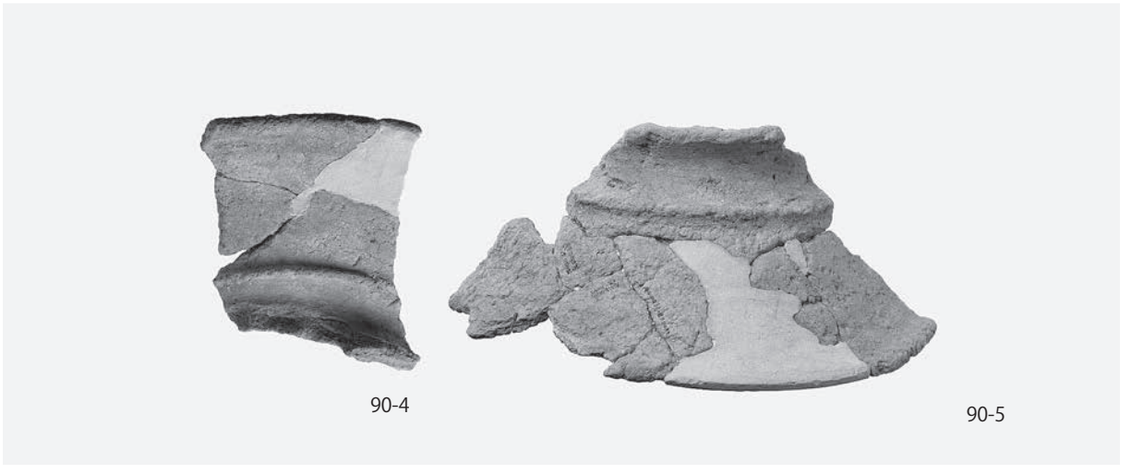






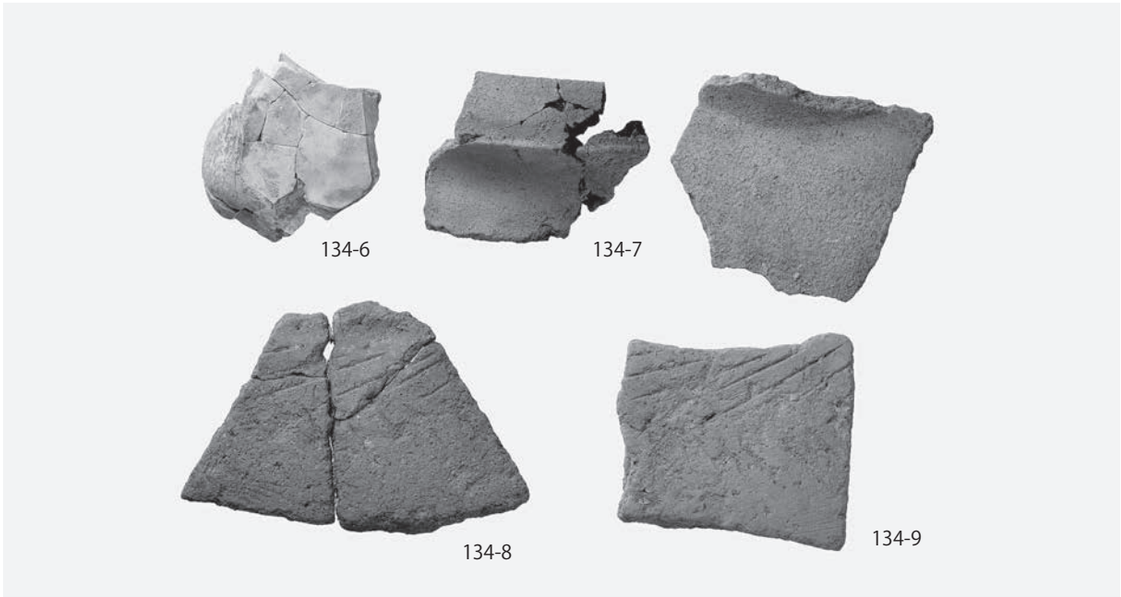
庵寺古墳群　谷部出土遺物（5）





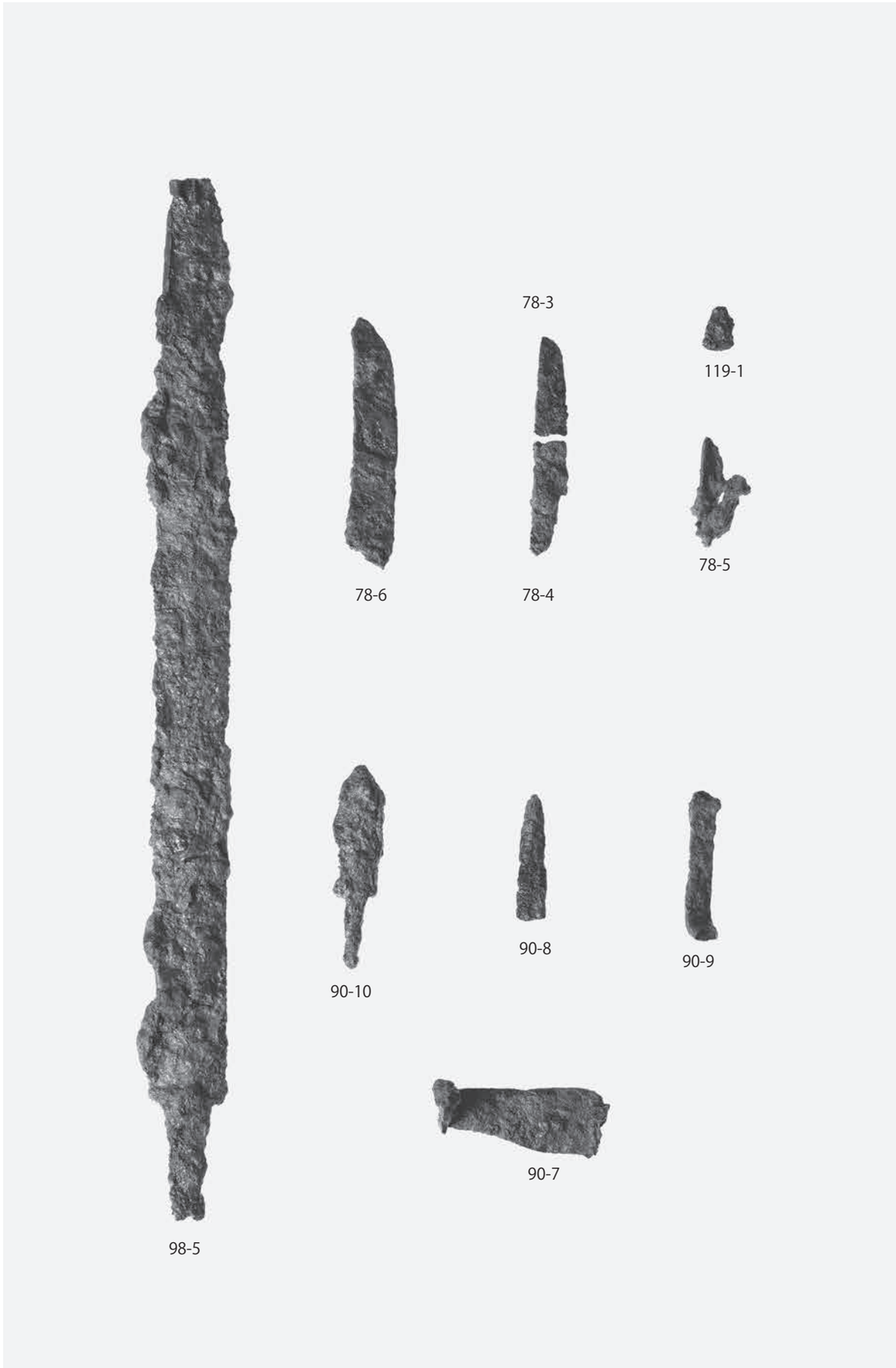
庵寺古墳群　7・8・9・10・12 号墳出土遺物

図版 94



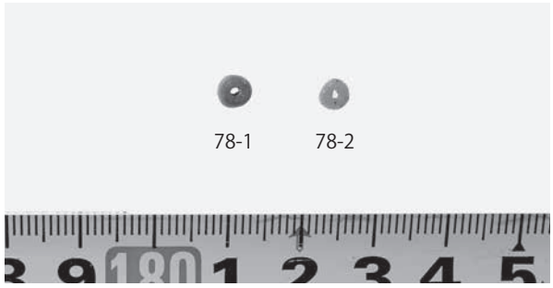
庵寺古墳群 20・22 号墳出土遺物

庵寺古墳群　20・22・23 号墳出土遺物

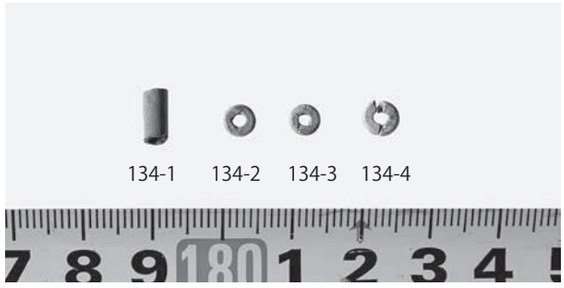


庵寺古墳群　5・8・9・13・15 号墳出土鉄器

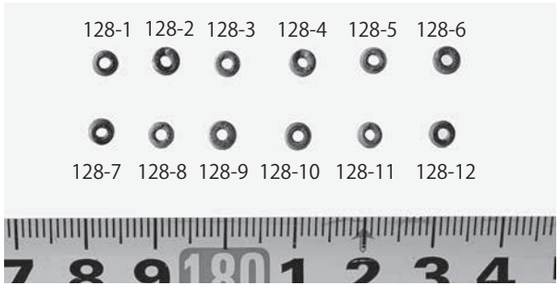
図版 96



庵寺古墳群　5・15 号墳出土ガラス小玉



庵寺古墳群　20 号墳出土玉類



庵寺古墳群　17 号墳出土滑石製臼玉

庵寺古墳群　23 号墳出土滑石製勾玉

庵寺古墳群　9 号墳第 3 主体部出土土器棺

庵寺古墳群　9 号墳第 3 主体部出土土器棺

大迫ツリ遺跡　第 1 採掘坑出土遺物

報告書抄録

ふりがな	あんでらこふんぐんⅡ・おおさこつりいせき・こかまのいせき
書名	庵寺古墳群Ⅱ・大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡
シリーズ名	一般国道９号（仁摩温泉津道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	5
編著者名	深田　浩・山根伸一・鳥谷芳雄・渡辺正巳・田村朋美・南　武志・上山晶子
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
	http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/
所在地	〒690-0131　島根県松江市打出町 33　　℡ 0852-36-8608
	Email:maibun@pref.shimane.lg.jp
発行年月日	2014（平成 26）年 3 月 17 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
あんでらこふんぐん 庵寺古墳群	しまねけんおおだしにまちょうおおぐに 島根県大田市仁摩町大国	32205	A103	35° 08′ 30″	132° 24′ 53″	20110606 ～ 20121227	5,200㎡	道路 建設
おおさこつりいせき 大迫ツリ遺跡	しまねけんおおだしゆのつちょうふくなみ 島根県大田市温泉津町福波	32205	C86	35° 04′ 38″	132° 20′ 10″	20120409 ～ 20120419	429㎡	道路 建設
こかまのいせき 小釜野遺跡	しまねけんおおだしゆのつちょうふくなみ 島根県大田市温泉津町福波	32205	C87	35° 04′ 32″	132° 20′ 02″	20120424 ～ 20120515	73㎡	道路 建設

遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
庵寺古墳群	集落跡 古墳	弥生時代 古墳時代	加工段 31 竪穴建物跡 2 古墳 21	弥生土器・土師器・石器・玉類・鉄剣・刀子・鉄鎌・鉄鏃・ヤリガンナほか	弥生高地性集落と石見東部最大規模の古墳群
大迫ツリ遺跡	生産遺跡	近世	採掘坑跡 3 線刻画群	肥前系陶磁器	福光石の露天掘採掘坑、線刻画から人名・屋号・座仏像などを確認
小釜野遺跡	生産遺跡	近世	採掘坑跡 2		福光石の露天掘採掘坑

要　約

庵寺古墳群は標高 50 ～ 80 mの丘陵上に立地し、弥生時代中期末～後期の集落跡や古墳時代前期～中期を主体とする 21 基の古墳が検出された。古墳からは石棺や木棺、土器棺など多様な埋葬施設が認められ、玉類や鉄器類が出土した。平成 20 年度調査で明らかとなった前漢鏡の破砕副葬や土器枕の他、鉄器折曲副葬や棺内礫敷きなど北部九州から丹後にかけての地域との関連性が示唆され、古墳時代前半期の日本海沿岸の交流を解明する上で貴重な事例を提供した。

大迫ツリ遺跡並びに小釜野遺跡は、近世の福光石の石切場跡である。採掘坑の規模や石切り技法が明らかになるとともに、大迫ツリ遺跡の線刻画群からは人名・地名・屋号・座仏像などが確認された。江戸時代に温泉津周辺で盛んだった石材加工業の歴史や文化を研究する上で貴重な資料となった。

庵寺古墳群・大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡

一般国道９号（仁摩温泉津道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書５

発　行　2014（平成 26）年３月
発行者　島根県教育委員会
編　集　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒 690-0131　島根県松江市打出町 33
電話　0852-36-8608
印　刷　さんきゅう印刷株式会社
島根県松江市矢田町 215 番地 1